青龍国物語　第二部　「龍王の娘」

mizuka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青龍国物語　第二部　「龍王の娘」

【Ｎコード】
Ｎ６０６０Ｓ

【作者名】
ｍｉｚｕｋａ

【あらすじ】
龍王の娘として生まれながら人間として生を受けてしまった上、父親に命を脅かされながら育った少女レイカ。母親を幸せにするため、本当の自分を取り戻すため一生懸命生きる少女の物語。　第三章一日本編一を開始　記憶を無くしたレイカが日本で自分を取り戻す話になります。

プロローグ

広大な妖獣の森の中に小さな家が建っている。

家は小さいながら手入れが行き届き温かい雰囲気に満ちており、小さな畑、露天風呂、庭は花で溢れ、まるで箱庭の様な空間

其処には二〇歳くらいの青年と五歳の少女の親子が住んでいた。

青年は艶やかに伸ばされた真直ぐな長い黒髪、黒曜石のような美しい瞳に愛らしい唇が真珠のような肌に納まり、細身の体と相まって中性的な美しさを放っている。一方少女は青年と同じ黒い髪だが緩く波打ち毛先がクルクル巻いており可愛らしさを強調、瞳の色は黄金を溶かし込んだように煌めき、ピンクの頬と唇は白い肌を引きたており将来美しい娘になるのは約束されているのが容易に想像できた。

今、青年は居間で組み紐を組みながら娘の帰りを待っているが、その手元は楽器を奏でるかのように糸の駒をコトコトコトとリズミカルに動かし美しい紐を組んで行っている。

突然白い壁にポッカリと黒い穴が開いたかと思うと少女が現れるが、その表情は何時にも無く暗く陰っていた。

「お帰りなさいレイカ、どうしたの？」

貧民街の学問所から戻って来たら何時もは元気よく「ただいま」を言うのだが下を俯いたままだ……

心配になり少女に駆け寄り、しゃがみ込んで少女と視線を合わすと僅かにその目に涙が浮かんでいた

「レイカ何があったの」

青年が優しく尋ねると漸く少女が口を開く

「母様…レイカは愛人の子なの」

「えっ！！」

五歳の幼女の口から愛人の言葉を聞き絶句してしまう

「大きい子がレイカは龍族の愛人から生まれたから変な色だって言われたの……」

この世界では人間の半数以上近くが茶色い髪に緑の目をしており、後は少数民族と龍族なのだが龍族は力を表す特殊な色を身にまとっていた為、龍族の血を引く者は人間でありながが違う色を持って生まれるので、レイカの髪と目を見てそう判断されても仕方無かった

特に黒髪は稀だ

龍族の愛人…青年は悲しい気持ちなる

少女を優しく抱きしめながら話しをする。

「レイカは愛人の子供じゃないよ…レイカの父様は龍族だけど私とチャンと婚姻を結んでるから大丈夫、この指環が証拠だよ。」

そう言って左手に嵌る龍の意匠を施した金の指環を少女に見せる。

「じゃあ何故父様はいないの？　父様に会いたい」

青年は何時か我が子に聞かれる事を覚悟していたが真実を告げれ無い父親が我が子の存在を知らず、もし自分の存在を知られたら殺されるかもしれないなど言えない

「ごめん…レイカを父様と会わす事が出来ないんだ」

「どうして？　レイカが嫌いなの…」

今にも泣きそうな我が子をただ抱きしめるしかない

嘘は言えなかった。

「父様の分も母様が頑張るから、我慢してレイカ…　うっううん…うっう…」

初めて母が泣くのを見て少女は驚く、何時も優しく微笑み自分を愛してくれる母を自分が泣かせた事にショックを受ける

「母様ゴメンなさい……　父様の事はもう言わないから泣かないで」

優しく母が何時もしてくれるように少女は母の頭を小さな手で撫で

てあげる

それから少女は二度と父親の事を聞くまいと心に決める

自分の父親が誰だろうと母がいれば十分だ

大好きな母を悲しませたく無く、小さいながら聡明な少女は思うのだった。

青年の名前は水城藍と言い十七歳の時、崖から落ち其の時たまたま手にした金の指環によってこの天帝の治める世界に流され、龍王の伴侶としてこの結界の家に閉じ込められていた。この世界に来て既に四十三年が経っているがアオイの姿はあまり変わっておらず青年のまま――― これは龍族と婚姻する事に因り、龍族の重き命を分け合う事によって人間のアオイの命が数百年伸びた事に寄る。

しかもアオイの相手は四神国の一つ青龍国の龍王ルェイロン、謂わばアオイは男の身でありながが正妃の立場、だがその境遇は暗たんたるもので幸せとは言い難い…しかも指環の不思議な力によって龍王の子産み育てているが、それは龍王に秘匿されていた。

何故なら龍王は我血を憎み忌避していた為、子供の存在など許さず見つかれば殺されるのが必至……しかもその子は短命の人間として

生を受けてしまい、母親より先に死ぬ残酷な運命の下に産まれた悲運の王女

それがこの愛らしい少女レイカであった。

しかしまだ二人は知らない

これから起こる更なる悲劇を

だがこの少女の秘めた力を誰も気付いていない

過酷な運命に立ち向かう力を

これは、そんな少女の物語

プロローグ（後書き）

青年が母親…　ＢＬファンタジーでは普通で有です！…多分スルーしてくれれば嬉しいのですが……こんな小説ですが宜しくお願いします。

結界の家

まだ五歳のレイカは十日に一度しか学問所に通っていないので平素は母とこの狭い結界の家で暮らしていた。何れ王都で平民として暮らす為に小さい頃から徐々に馴染ませる目的もあったがもう一つの理由は龍王にある……体を求めるため十日に一度必ずアオイの下を訪れるからだ。

龍王がアオイの下に渡る時、レイカは赤ん坊の頃から後宮にいる兄と慕うサンジュンロンに一晩預けていたのだがその延長線で五歳を迎え学問所に通わせる事にしたのだ。何故十日に一度家を出されるのか、小さいながら聡い少女が悟らせない内の方便でもあった

父親である龍王ルェイロンにレイカの存在を知られる訳にはいかないレイカにも父親が龍王ルェイロンである事を知らせられない

家族を強く求めるアオイにとっては悲しい事だったが、娘と暮らす毎日は幸せだった……

この小さな幸せを壊したく無かった。

しかしその生活も後十年、小府の長官で後宮の主ファンニュロンとの約束でレイカが十五歳を迎えた時、結界から離れ王都で人間として暮らすまでの束の間の幸せなのだ…

アオイが小さな畑で作物の世話をしている中、レイカは遊びに来た子猿達と模造刀で遊んでいる。この子猿達は以前アオイが助けた子猿を育てた所、群れを作り数を増やしていったその子孫で何時の間にか安全な結界は託児所になっていたのだ。家の敷地の結界は、危険な猛獣や妖獣達は入ってこれ無いのだが小動物や昆虫などは普通に出入りできるのだ。

レイカは可愛い容姿に反しかなりお転婆で、猿達相手に遊ぶのが大好き

「えい！　コラ！大勢で来るなんて卑怯よ！」

模造刀を振りまわし子猿達を蹴散らそうとするが、反対にからかうようにウッキッキーと挑発しながら逃げ回る子猿達の手にも模造刀が握られ、レイカの打ち込みも軽くなぎ払っている。

此処の猿達は以前一緒に暮らしていたおじいちゃんが教えたのが最初で、それから代々猿達が受け継いできたのだが、６年前におじいちゃんは此処で亡くなったのだが今もこうして猿達が親兄弟と教え合って強いオス猿が本物の剣を持ち群れを守るボス猿になるのだ。

だから子猿のうちから模造刀を持たせ遊ばせて剣の練習をしているのだが、結界の外は妖獣が支配する森、群れは確実に増えていくが全滅する群れも幾つもあるのが現状、猿達も決して楽な生活は送っておらず、結界の家が安らぎの場なのだ

さや豆を収穫しながら、八匹の子猿を相手にじゃれ合う娘を微笑ましそうに眺めるアオイにレイカは飛び付く

「母様！　今日のご飯はなに？」

母様の足にしがみ付くと優しく頭を撫でてくれる。

「昨日絞めた鶏肉があるから唐揚げにして、それと…さや豆を卵とじにしようか」

鶏の唐揚げと聞き思わずお腹がすく、母様の料理は全部美味しいが鶏の唐揚げは一番大好物

「やった！　母様一杯作って」

「その代わり、さや豆のすじを取るのを手伝ってね」

「する！」

「それじゃあ先にお風呂に入って泥を落とし来てからだよ」

「は～い」

早く唐揚げが食べたくて急いで露天風呂に駆けこんで飛びこむ

バッシャーーン！！

すると後を追ってきた子猿達もそれに習って次々と飛び込む所為で水しぶきが次々と襲いかかる。

「キャーー　コラお湯が目に入るじゃない！！」

ムカついたので皆にお湯を掛けて反撃すると風呂場はお湯の掛け合いで凄い有様になる。

「レイカ！　止めなさい――――っ！」

ピッタ

母様の怒鳴り声に皆が一斉に動きを止めるとお風呂のお湯が半分に減っていたが、直ぐに新しい湯が湧きあがり元に戻る。

「お風呂で暴れちゃダメでしょ、しかもレイカ服を着たまま入ってるよ…困った子」

言われて見ると体に濡れた服が張りついてた…

慌てていたら服を脱ぐのを忘れていた

急いで脱ごうとしたが濡れていて中々脱げない

「こっちにいらっしゃい」

母様の呼び掛けに駆け寄ると服の紐を外して脱がしてくれる。

「もう少し落ち着いて行動しないと…街は馬車や人が多いんだから怪我しないか心配」

「ちゃんと避けるから大丈夫！」

そう言うと母様は呆れたような顔をするが何も言わなかった。

裸になると首に下げられた金の鎖が現れるとそれに付けられている丸い石を手に取り見詰める。この石はレイカが生まれた時手に握っていたらしいけど、ただの石なのに母様は何時も身につけて欲しいと言われている。

「母様、レイカもっと綺麗な石がいいな～」

「それはレイカの大事なお守りの石なんだから外しちゃダメだよ。ほら、今度は大人しく体を洗って」

お尻を軽くピシャリと叩かれる。

「母様のスケベ！」

娘にスケベと言われ軽くショックを受け固まるアオイ……貧民街の学問所に通わせる事により日々色々な言葉や知識を覚えて来るが、いい事ばかりでは無いようだ

しかもレイカは普通の五歳児に比べかなり確りしており、知識の吸収力に目を見張るものがあるのは、龍族の血がそうされるのかもし

れなかった。

「着替えを此処において置くから…」

脱衣場に服を置き、陰鬱な雰囲気でふらふらと勝手口に向かう母を不思議に見やるのだった。

「変な母様？」

子猿達も何時の間にか居なくなり、一人湯船に浸かりそろそろ上ろうとした時、森の中の茂みから小さな白い顔が突き出し、視線が合うと怯えるように顔を直ぐ引っ込めてしまった。

「白い猿？」

今まで色々な動物達が結界にやってきたが白い生き物は初めて

茂みの側により葉の隙間を覗き込むと小さな白い猿が身を縮め震えている…大きさからして未だ母猿にしがみ付き乳を貰っている赤ちゃんの筈で、一匹でいるなんて不自然だ

「おチビちゃん、お出で」

怯えて動けないようで、手を伸ばして抱きあげればいいのだけど茂みは結界の外になり出来ない。

「そうだ！」

ある事を思い付き首の鎖を外して、赤ちゃん猿の側に投げて石を揺らすようにして興味を引き付けると警戒していた赤ちゃん猿が慣れ

て来て興味津々で石を手に取るのを見計らい、思いっきり引っ張る。

「えい！」

赤ちゃん猿は空を飛ぶように引っ張られたが、勢いが良すぎたようでお湯の中に落ちてしまう

ポッチャン！

「キャー、やり過ぎちゃった！」

お湯に沈んで行く赤ちゃんを急いで救いあげると意識も無くぐったりしている！！

「どうしよ！！　殺っちゃった？」

貧民街の子供の影響を多いに受けてしまっている言動は否めない

「母様！　母様！」

急いで猿を抱いて勝手口から台所に跳び込むと、母様がギョッとした顔になる。

「レイカ…服はどうしたの……」

「服よりこの猿が死んじゃう！」

漸く、娘が抱きしめる小さな白い生き物に気が付く

「この子どうしたの…」

小さな猿を娘から受け取り、濡れた体を優しく拭きながら聞く

「お風呂で溺れたのを助けたの…大丈夫その子？」

……確かに嘘では無い

「ちゃんと息をしてるし怪我も無いようだけど、痩せて結構衰弱してるから母猿と逸れたのかもしれない……側に母猿はいなかった？」

「この子だけだった」

それを言うと何故か悲しそうな顔をする…？

「レイカ、私が温めているから貴女は服を着て来なさい」

「は～い」

脱衣所に戻り服を着てから一応母猿が居ないか辺りを捜したがそれらしき猿は見つけられず、諦めて母様の下に戻ると居間で赤ちゃん猿は目をパッチリと開けながら抱っこされている。

「うわぁー　目が赤いなんて珍しい」

大きな声で驚いたのか母様の腕の中に潜り込もうとする。

「あんまり大きい声を出すと怯えるから小さい声で」

「は～い」

「少し抱っこしていて…お腹を空かせてるようだから何か持ってくるから」

「ハイ」

震える体を慎重に受け取ると嫌がる風ではないが、落ち着かないようにに赤い目をキョドキョドさせて弱々しくレイカの手にしがみ付く

「お前の母様はどうしたの？」

優しく聞くが返事は矢張りない

お腹を空かせっていると聞き、指を口元に持って行くと赤ちゃん猿は直ぐに指先に吸いつく

「可愛い！」

だが、おっぱいを飲むように吸うが出ないと分かると噛みつかれてしまう

「イタッ！！」

赤ちゃんだと思って油断したが既に歯が生えており思ったより月が経っているのかも

痛いのを我慢してそのままにジーッとしていると赤ちゃん猿はレイカの血をチュウチュウ吸い始めたので慌てて引き離すと、物欲しそうに指を見る。

「血なんか吸ったら妖獣になっちゃうよ」

メッと軽く怒るが赤ちゃん猿は怯えを見せず、目に輝きが戻ったような気がした。

「？」

其処へ母様が手にお椀と匙を持って戻ってくる。。

「何を騒いでたの？」

「指を吸わせたら噛まれちゃった…」

「大丈夫！」

「うん、血は直ぐに止まったよ」

心配症の母様の為、血を吸われた事は黙っておく事にする。

「そう、それなら良いけど後で消毒はしようか。　先ずこの果汁を飲ませてあげて」

お椀を受け取り匙を使い甘い匂いのする果汁を口に持って行くと美味しいそうに飲み始めあっという間に飲み干す。

「歯が生えているなら、次は固形物でも大丈夫かもしれない」

微笑ましそうに二人を見ながら言う

「歯が生えているのに何故こんなに小さいの？」

偶に他の種類の猿も来るが、この子はこの結界周辺を縄張りにする同種の猿だ。だが歯が生えているなら今の倍以上の大きさなのに生まれて間もない感じだし、毛の色も真っ白で目も赤く他の猿と明らかに違う

「うーん…多分だけど母猿に育児放棄されたのかもしれない」

「育児放棄？？？」

「この子の色があまりに自分達と違うから、途中で見捨てられ今まで何とか一人で生きていたのかも……こんなに小さいのに頑張ったんだね」

優しく猿の頭を撫でる母様の言葉を聞いて頭に一瞬で血が昇る

「許せない！！」

「レイカ？！」

「親のくせに色が自分と違うから捨てるなんて、この子が可哀そう」

悔しくて涙がポロポロ零れるのが自分でも分かる……この子はレイカと同じだ

人と違う色だからと差別される

しかも自分の母親に

レイカには母様がいるけどこの子には誰もいない

「この子は今日から家の子よ！」

突然の宣言に呆気にとられる母様とキョトンとする子猿

「今日から私達は姉妹よ！　お前は立派な猿になって母猿を見返し、レイカも一緒に頑張ってレイカの髪をバカにする奴らを地に平伏させるの！」

アオイはとても五歳の幼女とは思えない言葉に一瞬眩暈が起こる……

優しい可愛い女の子に育つと思っていたのに、何処で間違ってしまんだろう

確かに優しく正義感溢れる子だが偶に見せる激情が王様を見るようで怖かった。

「レイカ」

レイカと子猿を一緒に抱きしめて、興奮を抑えるように背中をさすってやる。

「その子の親も好きで見放した訳じゃないと思うよ。その子の色は白い所為で森の中で目立ってしまうから、暗闇だと特に白色は目立

ってしまう…そうすると妖獣達に見つかり易くその子一匹の為に群れ全部が殺されるかも知れないんだよ」

昔、ソンを助けた時言われたおじいちゃんの言葉を思い出す。

「でも、お母さんなんだからその子と一緒に群れから出てあげてもいいじゃない！」

「妖獣はとても狡賢く恐ろしくて強い…群れから出れば襲われて食べられるのは時間の問題。せめてこの結界の側に捨てたのは少しでも生きてて欲しかったんだと思うよ」

「でもレイカは許せない！」

なかなか頑固な娘に困ってしまうが間違っている訳でもない

「レイカの言う事も正しいけど、全ての猿が妖獣に立ち向かえる程強く無いんだよ…弱い者の気持ちも分かってあげよう」

「弱いもの……」

「切り捨て無いと生きていけないそんな世界もあるんだよ…レイカは強くなって、そんな弱い人達を救ってあげれるようになるといいかもしれないね」

五歳の幼女にとんでもない事を言っていると思うが何故か口から出てしまう

この子には人間として平凡な幸せな家庭を持って欲しいと願っていたはずなのに

「レイカは強くなって悪者をやっつける！」

娘から返って来た言葉は中々勇ましい物だった

「強くなると言っても力の強さを言っているんじゃないよ…レイカは女の子だから弱い人の心を理解して救えるような強い優しい心を持って欲しいんだ。　レイカの髪が黒いからと意地悪する子を力で懲らしめてもその子は本当にレイカに悪いと反省するかな？反対により一層レイカを嫌うんじゃない」

「じゃあ…レイカは我慢するしかないの！」

「その子が何故レイカを苛めるか髪以外にも理由があると思うよ、その子の事を知るのも大事、それからどうするか考えて御覧」

「う～ん　……」

いまいち納得していい無いようだが小さいのだから徐々に理解してくれれば良い

最近までこの結界の家と後宮の狭い世界しか知らなかったレイカ

大勢の子供達に揉まれて成長させる為にも敢て貧民街の学問所を選んだのだ

綺麗な世界だけ見せていてもいけないような気がした。

貧民街の子供の環境は過酷だ

身なりもみすぼらしくその日食べるのがやっとの生活

学問所を一歩出れは治安が悪い

学問所で勉強すればお昼御飯が食べられ、服も古着だが貰える。

その為に来る者が殆どだったが最近では熱心に学ぶ者も多い

ここ数年貧民街出身の人間が見事官吏の登用試験に合格して役人になったり、商売で成功する者が出始めたお陰だ

後で知ったのだが官吏になるのにも身分が必要だったが、王様が能力第一で採用するよう身分に関係無く登用試験を受けれるよう改正してくれたお陰らしい――少し王様を見直したのは内緒

そんな中レイカの存在は異色だろう

身なりは自分たちと同じだが育ちの良さや龍族の血を引く者としてやっかみを受けるのは当たり前かもしれない

そんな中でも優しく人に接する子に育って欲しかった。

「ねー　母様お腹すいた……」

「夕飯の支度の最中だった、今日は手伝いは良いからその子を抱っこしてあげて」

「うん！」

未だ五歳なのだからこれから少しづつ成長して行くだろう

成長の為にも今は美味しい食事が必要

今夜のおかずは飛びきり美味しくしようと意気込む

人の為に作る食事は楽しい

何時か一人になってしまうが…今はこの時を楽しむアオイだった。

結界の家（後書き）

＊補足

以前アオイは龍族の老夫婦と暮らしていたのですが、その時腕に怪我をした子猿を母猿から託され、育てたのがソンというオス猿でした。怪我のせいで片腕を失いましたがおじいちゃんの剣の訓練で猿とは思えない腕前に成長し、結界の外の妖獣の森で群れを作り頼もしいボスとしてアオイを守るように結界の周辺を縄張りにし数を増やしてきたのでした。子猿たちはその子孫達です。

龍族の血

今日はレイカが後宮に行く日だったが、その場所を王宮にある後宮とは認識していなく龍族のファンニュロン様のお屋敷だと教えられていた。

お昼ごはんを食べ終えたレイカはアオイと使っている部屋で探し物していた。、頭に先日家族の仲間入りしたハクを乗せている。

ハクは大分元気になり毛艶も良くなり、真っ白の毛玉のようにレイカの頭にしがみ付いている姿は白いボンボンを付けているようで微笑ましい

「あれ？　無いな～　何処しまったんだろ……」

前回の時サンジュンおじちゃんに出された宿題を寝台の上で仕上げ引き出しに仕舞ったと思っていたのに無くなっていたので部屋をひっくり返し探している最中

箪笥の引き出しや布団の下などあらゆる所を探すが見つからず、最後に寝台の下に潜り込む事にするがハクが邪魔なので寝台に置く

「ハク其処で大人しくしていて」

子猿はレイカの言う通り布団の上に大人しく座り込む

先ずは母様の寝台の下に潜り込むと真っ暗で何もなさそうに見えたが一番奥の隅に小さな黒い布に包まれた包みが隠してあるよに置かれているの見付け興味を引かれ引っ張りだす事にした。

「なんだろう？　母様のかな」

寝台の下から這い出すと少し埃っぽくなったが仕方ない、取り出した包みは気になるが目的は宿題の紙、次は自分の寝台の下に潜り込むと直ぐに白い紙が浮かび上がって見える

「あった！！」

その時母様の言葉を思い出す。

『暗闇だと特に白色は目立ってしまう』

確かに暗闇ではハクの白い毛は浮かび上がり目立ってしまうと納得するが、子供を捨てるなんて納得がいかない……思わずハクの母親の事を考えていると

「キィー　」

ハクの不安そうな泣き声を聞き急いで這い出しハクの下に行く

その場を動かずジーッとしていたハクはレイカが寝台の下から出てくると飛びつくように顔にしがみ付いてくるので目の前を塞がれ慌ててしまう

「ハク、見えないから！」

そう言うと頭の上に登り大人しくチョコンと治まり漸く落ち着いたようだ

ハクは他の子猿に比べ大人しく臆病で一人っきりが怖いらしい

「今は仕方無いけど大きくなったらビシバシ鍛えるからね」

頭に乗せながら宿題の紙を布袋に入れて用意を終えたのは良いが部屋は引き出しからは物が出され部屋中に散乱した酷い状態だったので、かなり不味いがとても片付けられない

「……母様するから良いよね、ハク？」

「キィ～？」

「それより変な物見付けたから見よう」

先程寝台の下から発見した包みをハクを共犯者にして見る事にする。

黒い布を解くと木の箱が出て来て蓋を開けると仄かに良い花の香りがする。

「なんの花の匂いだろう？」

何時までも嗅いでいたいような心地よい香りだったが、中には花では無く四通の手紙と綺麗な石を使った花の髪飾りが納められている。

「キャ～　ハク見って…すっごく綺麗！」

手に取りハクに見せながら目を煌めかせながら見詰める

「どうせならこんな石の首飾りが良かったのに」

レイカのしている貧相な石に比べ乳白石に輝くこの石の方が数十倍も価値ある物に思えてならない…この素敵な髪飾りを付けたくなり鏡を見ようとしたその時母様の呼ぶ声がする。

「レイカ、そろそろお迎えが来るからいらっしゃいー」

ビック!!

慌てて自分の枕の下に髪飾りを隠し、箱も蓋を閉めて黒い布で大雑把に包んで寝台の下に放り込んでから、袋を手にして部屋を飛び出し居間に向かう…多分母様の大事な物だと漠然と思うがもう少しじっくりと見て、髪に付けてみたいという女の子らしい欲求だった。

居間に行くと母様が丹精込めて組んだ色とりどりの髪紐を紙に包んでいるところ

「探し物は見つかった?」

「あった…」

後ろめたく目を伏せ返事をすると

「……」

母様は不審げに見詰める…

「レイカ、何か隠していない?」

ギック……

母様を騙すには経験が足りないようだった。

母様は二人の寝室に行き扉を開けて絶句する……其処は服や小物が散乱し雑然として歩く隙間も無い有様

「レ・イ・カ　……　これは何？」

部屋の惨憺たる状況に温和な母様には珍しく睨まれてしまう

「ゴメンなさい～　探すのに夢中で気付かなかったの……」

しょんぼりと答えると多分母様は直ぐ許してくれると踏んでいたが予想道理

「もー　今度から気お付けるんだよ…今はお迎えが来るから仕方ないけど次は片付けて貰います」

次は無いかもと気を引き締める…片付けは苦手

「はい　母様」

内心では寝台の包みの事がばれず一安心する。

それに加え背後から援護の声が掛かる

「二人とも何を揉めてるんですか？」

「兄さん」

「サンおじちゃま！」

迎えに来てくれたおじちゃまに抱きつくが、部屋の様子を見て呆れかえられる

「レイカ、部屋を散らかしたら片付けないとダメだよ。待ってるますから」

優しい顔をニッコリとさせながら母様より容赦が無い…

「は～い」

援護では無く攻撃されてしまう

おじちゃまは躾には厳しかった…レイカを部屋に残し二人は居間に行ってしまい一人と一匹で片付け始める。

「涙でも浮かべれば良かったかな」

渋々服などを箪笥に収めながら、なかなか強かな事を感がえる五歳児

ハクの方は相変わらずレイカの頭にしがみ付き、片付けをジーッと見守るだけのヌイグルミ状態だが、気にする事無くセカセカと箪笥に服を詰め込み粗方終わると、先程隠した髪飾りを戻そうかと思ったが、もう少し手元に置きたくてそのままにして置く

「少しだけ借りるだけよ」

そう言い聞かせ部屋を後にして二人が待つ居間へと急ぐ

「終わったよ！」

そう言いながら椅子に座るサンおじちゃまの膝に飛び乗り抱きつき、顔を見上げると何故か奇妙な顔をしていた。

「どうしたの？　お片付けは終わったよ」

「その頭の白い物は何ですか！？」

どうやらハクを見て驚いたらしい

「レイカの妹になったハクよ」

「珍しい…白い猿なんて初めて見ました。　最初は可愛い髪飾りでも付けているんだと勘違いしてましたが」

おじちゃまはハクをレイカの頭から剥がし、掌に乗せてしげしげと見詰めているがハクも大人しくジッとして初めて見るおじちゃまに怯えてはいないようだ。

「ねぇー　ハクもファン様のお屋敷に連れて行っていい？」

「良いですよ。ファン様も珍しい物が好きですし、大人しい子のようですから大丈夫でしょ」

「やった！」

ハクはレイカにべったりで置いて行くのは心配だった。母様にも慣れているがレイカが一番好きらしく離れようとしないのだ…今もサンおじちゃまの手から直ぐにレイカの頭に戻りへばり付く、本当に可愛い妹みたい

「兄さん、そろそろ行かないとファン様達が首を長くして待ってるんじゃない」

母様が急かすように言う

「そうでしたね、それじゃあ行きましょう」

レイカを抱いたまま立ち上がり、袖口から取り出した黒い玉を出し壁に投げつけて割ると瞑道の入り口が開く

瞑道はファン様が使える神力の一つで場所と場所を繋ぐ狭間に穴を開ける術で、その神力を練り玉にした物が黒い玉だった。

「行って来ます！」

「レイカ、袋を忘れているよ。　それとこれを持って行って」

母様から渡されたお重から甘い美味しい匂いがする。

「何これ」

「新作のお菓子だから、ファン様達と食べてみて」

「わぁ～い」

遠い国から来たらしい母様の作るお菓子は美味しい物ばかりで、ファン様も食べた事がなく珍しい物ばかりだと言っていた。

一度だけ遠い国って何処にあるか聞いたけど母様も場所が分からないくらい遠い所としか教えてくれない…そこでは黒い髪の人間が大勢住んでいて普通なんだって…良いな～

レイカはこの黒い髪が嫌いでは無いけど街に行くと物珍しげに見られるし、学問所ではからかわれるから少し鬱陶しい…黒い髪の人間が増えればいいのに

ファン様は人の姿や色も変える神力も持っているので、王都中の人間の髪を黒く変えて欲しいとお願いしたら…「出来ますが長時間は無理です」と断られたので諦めた

でも自分の髪の色を変えるのは絶対に嫌

きっと母様が悲しむから

「それじゃあ行って来まーす」

母様に挨拶をしてサンおじちゃまと瞑道を潜る。

「行ってらっしゃい」

手を振り見送ってくれる母様を振り返りながら、真っ暗な瞑道を行くとハクが体を強張らせ緊張したようだが暴れずジッとしている。

「本当に大人しく良い子ですね」

「うん！　学問所にも連れて行って良い？」

「それはいけません。学問所は勉強する所ですし他の子達が良く思わないでしょう」

「友達に見せたかったのにー」

「レイカ、あそこの子供達は貧しい家の者が殆で、動物を飼っているなど妬む子もいるのですから分かってください」

「は～い」

大勢いるとは厄介だ、優しい子もいるけど意地悪な子もいる…いろんな子がいて複雑で難しい、結界の家は優しい母様しかいないから大違いだ

明るい出口が見えて来て光の中に出ると其処はファン様のお屋敷の中だ

ファン様のお屋敷は凄く立派で広い庭園には色とりどりの花が咲き小さな山や川まで流れているので其処を駆けまわるのが大好き、豪華な食事も食べれるけど一つ難点がある

それは直ぐ分かると思う…

豪華な部屋に出た途端女の人達の声が出迎える。

「いらっしゃいませレイカ様！　お待ちしておりました」

「今日は桃色の可愛い衣装を御用意しましたから、きっとお似合いになります」

「あら！　私が用意した白の方が似合います」

そしてサンおじちゃまから引き離される

「「「　さあレイカ様着替えましょう　」」」

ヒョイッと侍女さんにおじちゃまの腕から取り上げられる

「ひぃぇ～」

侍女さんに抱っこされながら、恨めしそうにおじちゃまを見やれば、気の毒そうに見送るばかりで何時も助けてくれない

連れ込まれた部屋は衣装部屋のようなところで、レイカの服が所狭しと並んでいて其の殆どが一度しか袖を通していない物ばかり…ハッキリ言って勿体ない

「さあ此方に御座り下さいレイカ様、髪を結って差し上げます」

レイカは今だ此の侍女さん達に逆らう術は無いので大人しく従い、着せ替え人形になるしかないのだ…小さい頃はレイカも楽しかったが貧民街の暮らしを知って変わった

侍女さんが髪を結おうとして漸くハクの存在に気付く

「まー　面妖な髪飾りと思いましたら、白い子猿！？」

「ハクて言うの、レイカの妹よ」

ヒョイと頭から剥がして侍女さんに見せてあげる。

「小さくてなんて可愛らしい」

「白い動物は吉祥の兆しと言います。きっとレイカ様に良い事が起こるはずですわ」

「レイカ様がハクを抱く姿は壮絶な可愛らしさ、今日のお召し物は白より桃色にしましょう」

白い動物は吉祥と聞き嬉しくなるが…その後は髪を結われたり衣装を何着も（桃色でも数着用意していた）着せられげっそりとしてしまう。終いにはハクにも花の髪飾りが付けられ嫌がると思ったが大人しかった。

まるでお姫様のように着飾られた姿をうっとりと見詰める侍女さん達

「「「　壮絶に素敵です！！！　早速ファン様にお見せしましょう」」」

そして何時ものように引きずられるようにファン様の部屋に連れていかれる。

屋敷の一番奥にある大きな扉を開けると優雅にお茶お飲むファン様

がいる。侍女さん達も綺麗だがファン様は特別綺麗なお姉さん、金色に輝く髪を何時も高く結い上げ宝石や造花で飾られ眩いばかりだが、美しい空のような瞳や薄く形良い唇に引かれた紅の色艶やかで人間離れした美しさだが何処か作り物めいていた。記憶にないが物心ついた頃は怖かったらしく顔を見る度泣いてたらしい、今はとても優しいのは知っているから大好きだ。

ファン様の前に行き恭しくお辞儀をして可愛らしい声で畏まり挨拶をする。

「　御機嫌ようファン様、今日もお邪魔さて頂き有難うございます　」

「ようこそお出で下さいましたレイカ様　本日も我が家のように寛いでお過ごしください」

「はい」

お互い堅苦しい挨拶が終わるとレイカは先程までのお淑やかさは何処へやら…ファン様の膝に飛び乗る

「ファン様！　レイカの妹を紹介します」

「まー　アオイ様は何時の間に御出産なさいましたの？」

「違います～　この子です！ハク出ておいで」」

髪は綺麗にして貰ったのでハクを頭に乗せるのを侍女さんに止められ、懐を緩くして貰い其処に入れている。呼ぶとヒョッコリと胸元から顔を出して這い出しレイカの肩に乗る。

「ハク、ファン様に挨拶して」

「キッキィー」

冗談で言ったのに本当に挨拶するように鳴いたので驚いてしまう

「ハクはレイカの言葉が分かるの?!」

「キッ」

まるでハイと言ったように返事をする。

「小さいのに賢い猿のようですね。しかも吉祥を顕す白き獣、善き従獣になるでしょう」

「従獣?　違うよファン様、ハクは妹」

「そうでしたね、年を取ると物忘れが激しく困ります」

ファン様は時たま自分の事を凄く年寄りのように言う不思議な人

それから結界の家での事など色々話しているとお茶の用意と母様が作ったお菓子を持って侍女さん達とサンおじちゃまがが入って来た。

「ファン様、アオイ様がお作りになったお菓子をお持ちしましたお茶にしましょう」

「わぁ〜い、　レイカも初めて食べるお菓子なんだって」

侍女さんがお菓子の皿とお茶を並べて行くと、卓の上に出されたのは丸い茶色い物で、決して見栄えの良いものでは無い素朴な感じ

「揚げた麺麭のようですね？」

先ずファン様が一口食べる

「！！」

そのまま無言で食べるファン様を見ながら皆も食べ始めると全員が夢中で食べ始め、あっと言う間に間食する

「此の中に入っている茶色い甘い物は何でしょうか？」

「ファン様、私にも分かりませんがこの様なコクのある上品な甘さは初めてですわ！」

「麺麭の中に入れ油で揚げる事によって美味しさが引き立っております」

「このような斬新なお菓子は初めて…この上ない至福」

「レイカ、もっと食べたい！！！」

その言葉にファン様の目がキラリと光る

「まだ有りますか？」

「はい、今取って参りますのでお待ちください」

そう言って侍女の一人が取りに行く姿を見てから次にサンジュンロンに目を向ける

「サン、　明日アオイ様の下に行ったついでに此の調理法をお教え願いなさい！」

「はい、分かりました。ファン様」

鬼気迫る迫力に怖気づく

「このような美味しい菓子が食べれるなら、長生きするものです」

しみじみと呟くのだった。

それから残りのお菓子を楽しみ、侍女さんに遊んで貰ったり賑やかに夕飯を食べて楽しい時間を過ごすレイカだった。そして明日は学問所に行く日なので早く床についた。

レイカとハクが客間で寝静まった頃、ファンニュゥロンは侍女達と話しをしていた。

「あの白い猿はレイカ様によって隷属の術が施されていました」

「はいファン様、レイカ様にお聞きしたところ指を吸わせた時噛まれたようです」

「レイカ様に神力が無いのに奇妙な話…」

「矢張り何か特別な御子様なのでしょうか？」

深く考え込むファンニュロンは次の質問をする

「レイカ様の龍石に変わりは？」

「お着替えの時拝見しましたが以前の石のまま」

「何の力も感じません」

「残念ながら普通の人間の御子様にしか見えません」

「しかし、レイカ様は不思議な御子様なのは変わりません…これからも確り見守りましょう。何れどこぞの龍族に嫁する事も考え教育するのです」

「「「　仰せの通りに　」」」

レイカ様は龍王の血を引く者、人間として一生を終わらせるのは龍族の血を守る者として見過ごせなかった。母親であるアオイ様は望んでいないであろうが、街でレイカ様が生活するようになった時、選定した龍族の若者を近づけるのを画策しており既に適任者は選んであった。

後はレイカ様の成長を待つだけ、人間の生涯は龍族にとって一時に

しか感じず十年など一瞬だ…

「アオイ様…お許し下さい」

優しい王妃に心で詫びるファンニュロンであった。

龍族の血（後書き）

＊補足

後宮　龍王の正妃や側妃の住む奥宮だが現在は表向き誰も存在しない為、閉ざされている。

ファンニュロン――後宮の影の主で小府（龍王の私財や直轄領地の管理、後宮の管理を行う府）の長官で謎多き龍族の女性だが青龍国で一番長寿　金髪碧眼美女

侍女3人――ファンニュロンに昔から使える妙齢の美女達で話好き、いずれも金髪だが瞳の色は青、紫、緑の龍族の女性だが名は無い

サンジュンロン――小府の文官でアオイが兄のように慕う龍族の青年だが体に秘密がある。現在は中央軍大将軍フェンロンの伴侶

龍核――龍族の体内にある玉で神力と命の源で大きさによって力が決まる。

龍石――龍族が死んだ後に残された龍核が石化したもの

龍族が死ぬ時は老衰と首をはねられた時のみだが、老衰の場合徐々に体から龍核が抜けだし全てが抜け落ちた時死を意味し抜け落ちた龍核が石化した時死ぬ。　一方首を落とされた場合は龍核が消失し人間として死ぬ事を意味し不名誉な事とされている。

学問所と天敵

ファン様のお屋敷で目を覚ますと既に朝で枕元ではハクが丸まり寝ている。

今日は学問所に行く日、やっぱり大人ばかりの環境だったので子供達のの中に行くのは楽しかった。活発で人見知りしないレイカは直ぐに子供達に馴染み仲良くなったが、意地悪な子たちもいる。

「今日は、あいつを徹底的に調べて弱みを見付けてやる」

あいつとはレイカに意地悪をする集団の頭で一二歳の少年と言っても既に大人ほどの体格があり頭も悪く無く、仲間にもそれなりに人望があるのに何故かレイカを目の敵にする……流石に暴力は無いがからかわれたり悪口を言われるせいで、折角出来た友達も離れていく子もいて今では仲良くしてくれるのは数人しかいない

寝台から飛び降りると何時の間にか起きたハクも飛び起きて頭に乗る。

「ハク、今日はファン様達とお留守番してね」

「キッキー！」

まるで嫌だと言うように頭にしがみ付く

「駄目だよ、良い子にしてなさい」

「キ～ィ…」

ハクはこんなに小さいのにレイカの言っている事が分かるようだ

其処へ、扉が開き侍女さんが入って来る。

「レイカ様、お早うございます。今日もとても良い天気ですよ」

「侍女さんお早うございます！」

侍女さんが運んできた洗面器に水差しで水を注いでくれるので顔を洗うと手拭が差し出され顔を拭くと学問所に着て行く服を出してくれる。

「それでは此方にお着替えくださ…」

何時もながら学問所に行く時の服を差し出す時の侍女さんの悲壮感溢れる顔は内緒だが笑える。

レイカも初めて用意された服を見た時ボロ雑巾かと思った程で、色あせ所々継接ぎがあり袖口や襟元がすり切れていた。何故こんな古着を着るのか分からなかったが学問所に連れてかれ納得する。学問所に来る子達の中にはそれより酷い服の子がいて驚いてしまい、サンおじちゃまに思わず聞いてしまう

「何故あの子たちは破れた服を着てるの…恥ずかしく無いの？」

今思えば無知だった

だって知らなかった…着る物が無い子がいるなんて、食べる物が無いなんて知らなかった。

それまで結界の家やファン様のお屋敷しか知らなかったレイカには衝撃的で初めての日はご飯が食べれ無かった。綺麗な服を着て美味しいご飯を食べ優しい大人にに守られたレイカと違った。家に帰り何故あんな所に行かせたのか母様に詰め寄ってしまう

「あんな所行くのは嫌！　汚い子もいるし怖そうな子もいるから絶対行かない」

「お願いレイカそんな事言わないで、あそこの学問所は私が少しだけ援助しているから様子を知りたいんだ。それに兄さんが始めた学問所だから」

母様が寂しげに言うので思わず言ってしまう

「うっ…　暫らくだけなら我慢する。　でも嫌だったら辞めるから！」

レイカは母様が大好きだから悲しい顔を見るのが嫌なので、つい譲歩してしまい…今日にいたる。

華やかなお屋敷から一転、平屋建ての大きな土壁のしっかりした質素な学問所の落差の激しさに最初は戸惑ったが、今では慣れてしまいそう言う物だと納得した。

世の中は不公平だ

王都に住む人間と街の壁の外にある貧民街

それを殆どの人が受け入れているが起ち向かう人もいる。

此の学問所で勉強をして成功し王都に移り住む人間がいた。何も持た無い貧しい者が這いあがって行く姿を実際に見て凄いと思った。反対に王都を追われ貧民街で身を持ち崩す人間もいる……正直面白い

学問所用の服を自分で着ると溜息をつきながら髪を三つ編みに編んでくれる侍女さん

「なんて嘆かわしいお姿……龍族の血を引くレイカ様があのような所に通うのはお辛いのでは無いですか？」

「最初は嫌だったけど今は面白いよ！それにレイカも母様も人間だし」

そう言うと侍女さんが微妙な顔をしたが直ぐに何時ものにこやかな顔になる。

「それならば良いのですが…それでは朝食を食べて元気に学問所に言って来て下さいませ」

「は～い」

それからファン様達と朝御飯を食べてサンおじちゃまがお迎えに来てくれる。

その場でサンおじちゃまはファン様により人間の女性に変化の術を施して貰うのだ

ハクはファン様に大人しく抱かれ元気が無く人形のようだ

「さあ、行きましょうレイカ」

「はい、行って来ますーファン様、ハク」

「キィ～ィ」

寂しそうなハクの鳴く声を聞き連れて行きたくなるが我慢

ハクとファン様と侍女さん達に見送られて瞑道を潜った。

瞑道を潜り辿り着いたのは王都の貸家で此処から歩いて街の外壁の門を出て直ぐの学問所に通うのだが、王都から貧民街の学問所に通うのは不自然なので秘密の出入り口を使用している。

街を歩くには此の服はみすぼらしくて周りに不信がられないよう帽子付きの外套を着て、サンおじちゃまも茶色い髪に緑の目の人間の女の人に変身しているので周りに溶け込む

サンおじちゃまは学問所の先生を時々しているので連れてって貰っているのだ

茂みの中に入り外壁を通り抜ける。外壁の一角に術を施し通り抜けられる様になっているが誰でも通れる欠点がある。だから出入りする所を見られないような気お付けないといけない

其処から直ぐに学問所があるのだが、数人の兵士が警備をして子供達を守る様に配置されている。貧民街は色々物騒な事も多く学問所の物品を狙う泥棒や子供を連れ出そうとする親などいざこざが多いためだ

学問所の入り口に立つ二人の兵士に挨拶をする。

「お早うございます。お勤めご苦労様」

「お早うございます」

サンおじちゃまに習い私も兵士さんに挨拶する。

「「お早うございます」」

返事を返す一人の兵隊さんが顔を赤らめ、サンおじちゃまに気があるのがアリアリと分かるのにおじちゃまは全く気付かない鈍感さん――――学問所の少女の間でも兵士さんの恋は話題だ！大きめの女の子たちはサンおじちゃまに振られた後慰めよう虎視眈々と狙っている。皆は玉の輿を狙っているのだ、何故なら此処を警備するのは中央軍の兵士で一介の王都を警備する兵士と違い選抜きの武官だからしい（お友達情報）

だけどまさか自分の軍の大将軍の奥方に恋してるとは知らない若い兵士さん

フェンおじちゃまは嫉妬深いのでこの情報は教えない…此の若い兵士さんが飛ばされたら可哀想だから

五歳児のレイカにサンおじちゃまの監視?を頼む程フェンおじちゃまの愛は濃い

自分の私情で兵士を派遣する程に

「先生、レイカちゃん、お早う！」

後ろから友達のチュウリンちゃんが挨拶してくるので元気よく返す

「お早う！」

おじちゃまとは其処で別れ一緒に教室に向かう。チュウリンちゃんはレイカより一つ上の六歳だが体が小さく、大人しい可愛い子だが苛められているのを助けたら懐かれてしまった。

「レイカちゃんは何で偶にしか来ないの?毎日来ればいいのに」

「家の仕事があるから無理」

嘘をつくのは後ろめたいが仕方ない

学問所に来るのには年齢制限は無いので三歳ぐらいから大人までと幅広い

小さい子供が集められた教室に行こうとすると嫌な奴が声を掛けられてしまう

「おい！　龍族がまた来てるっぞ」

「レイカは人間よ！」

自分より遥かに大きい少年を睨みあげる。其処には茶色い髪に緑の目のきつい大柄な少年が見返していた。

「そうだったな、龍族の愛人の子だったか？　こんな卑し所に来るなんて龍族のスケベ爺に母親がすてられたんだろ」

「母様は愛人じゃ無い！」

周りには子供達が集まり面白そうに見ていて助けて貰えそうには無い

「此処はお前なんか来る場所じゃ無いんだ、とっとと帰れ！」

「あんたは最低よ！　レイカみたいな小さい可愛い子を大勢で苛めてそれでも男なの！」

「なんだと！　その生意気さが俺達をバカにしてんだ、お前の目は街の奴らと同じ俺達を蔑んでるんだよ！　それにお前は龍族の血を引いてるんなら小さい子供の振りをして十数年生きてるんじゃないのか？！」

「！！」

確かに最初はバカにしていたかもしれないが今は違う…皆一生懸命生きているのを知っているからそんな事無い

こいつはレイカを憎んでいると言うより龍族を憎んでいる？

初めて向けられる憎しみに怖くなり、自分でも真っ青になるのがわかる。泣きたかったがこいつの前で泣きたく無い

「何をしているのです！　授業が始まりますから部屋に入りなさい！」

サンおじちゃまが来てくれ、見るとその後ろにチュウリンちゃんがいる…どうやら呼びに行ってくれたようだ。

「龍族はサッサと消えろ！」

「テジャ！！」

少年はそう言い残し学問所を一人で出て行ったようで、廊下にいた子供達もそれぞれの部屋に入って行き二人取り残される

「大丈夫ですか…レイカ」

「うん…先生は戻ってレイカは勉強するから」

「レイカ…」

心配げなサンおじちゃまを振り切り教室に入る…此処で特別扱いされれば状況が悪くなる一方だと分かる

教室に入りチュウリンちゃんの隣に座る

「先生を呼んで来てくれてありがとう」

「うん」

それから直ぐ先生が来て授業が始まり字の書き取りをしたりお昼まで勉強が続くが、話したり寝ている子供が殆どで真面目に勉強する子供の方が少ない。此処の学問所はやる気のある子には積極的に教えるが、そうでない者に無理に教えようとはしないで自主性に任している。学問所は休みなく開かれ来る来ないも自由だった。

勉強が終われば、昼食の時間になると全員の子供達が目を輝かせ一か所に一斉に集まる。
何故ならお昼ご飯の配給があるからだ

各々持って来た器に大きな巨大な鍋からご飯が次々と配られて行きそれを大事に抱え家に帰る子供、その場で食べる子供などまちまちだが大抵家族の為に持ち帰る。より貧しい者はこの一食が家族の大事な糧となっている…

だから大事な働き手の子供を学問所に送り出す親が多いのだ

今日の献立は平べったく焼いた麺麭と肉と野菜を炒めた物で品数は少ないが味は良い

レイカもチュウリンと並んでご飯を貰う

「チュウリンちゃんはもう帰るの？」

お昼からは学問所に残り勉強する子や家に帰る子、遊んで帰る子などまちまち

「うん、弟と妹が待ってるから」

「じゃあ私の半分あげる。レイカ一人っ子だから」

「ありがとう」

嬉しそうに受け取り帰って行く後ろ姿を眺めていると憎たらしい奴も一人で帰って行く姿を見かける。

近くの子に残りのご飯を押し付ける。

「これ食べて」

「えっ　良いの！？」

丁度いいのであいつの後をつけて、どうして龍族が嫌いなのか探ろうと思い立つ。

その時レイカは燃え上がる闘争心で貧民街の危険性を忘れており、サンおじちゃまに決して学問所の敷地を出ていけない約束も忘れていた。しかもその時運悪く警備の兵士も出払っていてレイカが敷地から出るのを止めれ無かったのだ。

いじめっ子のテジャの後を追うようについて行くが足の長さも違うせいか直ぐに見失う、しかも土塊を練って積み上げただけの家が乱立し迷路のようになっており道に迷ってしまった。其の時になって自分がバカな事をした事に気付く

「うっ…　どうしよ～」

レイカのように可愛くて龍族の血を引いていると一目で分かる者は攫ってくれといている様なもの……既に怪しい影がレイカを狙って密かに後をつけていたのだった。

「そうっだ！街の外壁に向かえばいいんだ！」

上を見上げれば高くそびえ立つ立派な石で組んだ外壁が目に飛び込む外壁に沿うように建てられた学問所だかその外壁を辿れば着くはずだと思い付き、早速外壁目指して歩き出すが、入り組んだ道の為なかなかたどりつけず行き止まりの道に入って来た時だった。

背後から突然二人の男がレイカを取り押さえ抱きあげたかと思うと、あっという間に布袋に押し込み声一つあげる間もない早業でその場を立ち去るが、男達は始終無言だった。

レイカは突然の事で声もあげれず袋に入れられ自分の身に起こった事が分からず、漸く攫われたと理解した時、手足をバタつかせ声を張り上げる。

「助けてー　人攫いよー　誰か助けて！」

静かにさせるため男が一言声を掛ける

「黙らないと叩き殺すぞ！」

「！！」

初めて聞く大人の冷たい声に恐怖心が湧く…優しい大人しか知らないレイカにとってこんな怖い大人を知らなかった。

初めての恐怖で震え袋の中で縮こまり泣くしかない

「ヒック　ヒィ～ン…　ウェェ～ン　母様…　サンおじちゃま助けて　シクシック」

もしかすると二度と母様に会えなくなると思うと絶望が襲う

どれくらい経ったのか分からないが男達が隠れ家に入り、レイカも布袋から出されるが涙と鼻水でグチャグチャだ

そんなレイカを見降ろし検分するように眺める

「こいつは上玉だ！　見ろ此の黒髪本物だぞ」

「金色の目も初めて見る。小さいのは買い手がつかないが、こいつは高く売れるぜ！」

やっぱりレイカは　売られるんだ

逃げないと母様に会えなくなる

だけど何の力も無いレイカには如何する事も出来ずただ震え泣くだ

けしか出来ない

「ヒィィン～　母様　ゥウェ～ン」

「煩いから口と手を縛っておけ」

一人の大柄な男がもう一人の男に命じると痩せた男が近づき猿ぐつわと手を縛られてしまう

「悪く思うなよ。なるべく金持ちに売ってやるから…そうすりゃお前だって綺麗な服や飯が食えて良い思いが出来るんだ。大人しくすりゃあ痛い事はしない、だから騒ぐな」

レイカは怖いながらも頷くと男はレイカの頭を撫でる

「できりゃあ十年後に会いたかったな…そうすりゃ一発お願いしたいところだ」

一発？？？

殴られると言う事だろうか…小さいから殴られずに済むと思い安心すると少し落ち着いてくる。

きっとサンおじちゃまがレイカにいない事に気付き探してくれるはず、しかも中央軍のフェンおじちゃまもいるから大丈夫だと言い聞かせ、助けが来る事をジッと待つ事にするレイカだった。

テジャは龍族が嫌いだった。

三年前テジャ一家は海沿いの魯州の州知事に仕える高級官吏の家柄で多くの使用人に仕えられる家の長子として大事に育てられていたのだ。しかし幸せな生活は突然奪われる。

父が汚職の汚名を着せられ斬首されてしまうのだ…汚名を着せたのは上司の龍族が自分の汚職を暴き州知事に上訴しようとしたのを反対に罪を着せられてしまったのだ。

父が捕まり投獄された時、州知事の子息の御学友として共に学んでいてテジャは父親の無実と助命を子息に願い出たが冷たく突き放さられる。

「罪人の子が近寄るな、汚らわしい人間が！」

今まで友として親しく付き合い、しかも兄のように慕っていた相手の掌を返す態度に愕然とするが、十歳前後の容姿だが既に三十年以上生きており、成人していないが州知事の職務を少しづつ補佐するなど政務にもついていて州知事への影響力を持つ程の力があるのを知っていた。見かけに騙されてはいけないのだとテジャは知っていたからこそ父の命が掛かっておりこれぐらいの罵倒で引き下がる訳にいかなかったのだ

「此の命尽きるまで誠心誠意貴方様にお仕えします。どうか父の命をお助け下さい」

土下座し額を床に擦りつけ願ったか無駄だった。

「お前は目ざわりだ、消えろ！！」

そのまま衛兵に引きずられ叩き出され、泣きながら屋敷に帰るしか無かった。

テジャ親子は人間なのに優秀過ぎたのだ

父親も優秀すぎるが故、上司の不正を発見してしまい暴こうとし罪を着せられ、息子は小さい頃から神童と謳われて州知事の御学友として推挙される程…最初は弟のように可愛がれるが自分より優秀な成績を修め、年を重ねるごとに自分を追い抜き大人の体になって行くテジャに脅威を感じるようになる。このままでは人間に負けてしまう…龍族としての矜持と未来の州知事としての重圧感がテジャに対する劣等感と憎しみを何時の間にか育てていたのだ。

家に帰ると母が逃げる手はずを整えており、其のまま二人で魯州から逃げ出し今の貧民街に隠れ住む様に住んでいた。

父の死は逃亡中の噂で知り母と二人涙するが、二人も魯州から罪人として手配されているのを知り身を潜めるように逃げ回り貧民街に辿り着いたのが母は無理が祟り此の掃き溜めのような街で泣きながら死んで行った。それからテジャは荒れ同じ年頃の少年とつるみ悪事を重ね生きていたが、一年前学問所を知り一からやり直す事を決意したのだ。

何時か魯州に戻り復讐する力を手に入れる為に

王都での官吏試験は十五歳からで誰でも受けられ、成績最優秀者には一気に丞相府へ配置され能力次第で官位を極められると噂があっ

た。

それを希望に学問所に通うのだが思ったより優秀な教師や書物が揃っており驚かされながら、勉学に励む

そんな時レイカが学問所に通い出した。

人目見て龍族だと思った。

数年ではあるが本物の龍族を見て来た自分が見間違うはずがない

幼いながら際立った容姿、醸し出す雰囲気は龍族そのもの

だが身にまとう服は他の子供のようにみすぼらしい

龍族のガキがお忍びで面白半分で通っているように見え怒りが湧く

だが龍族の子供なら下手に手を出せば此方の身が危ないのを良く知っていたので静観し

、レイカが学問所に来る度に観察していた。

観察して行くうちに学問所で周りの子と同じように振舞うので本当に龍族か疑問が出て来た。

ハッキリした物いいや明るく、何より容姿の美しさに子供達がレイカの周りに集まり出したの面白くない

お前達は騙されているんだ

心では俺達貧民を嘲わらい暇つぶしに楽しんでいるだけ

見かけに騙されるな五歳の姿でも既に十数年生きている化け物なんだ

そう思うと

嫌な言葉を顔を見掛ける度に投げつけてしまう

龍族で無いにしろ血は確実にしろ引いている

それだけで憎しみが湧いた

だが今日もレイカを言葉で嬲っていると、何時も睨みつけ勝気な少女が初めて涙ぐんだ目を見てひるんでしまうが、見かけに騙されるものかと思いながらも自分のしている情けない行動に気がつく

男の俺が五歳の少女を苛めている…昔の俺ならこんな人間に侮蔑を送っただろう

死に物狂いで勉強しなければ官吏の試験で最優秀は取れないのに、後味の悪さに午後の勉強をさぼってしまう。

家にしているボロ屋に帰る時レイカが俺の後を付けているの気付いたがほっておくと、何時の間にかいない……巻くつもりも無くゆっくり歩いてはずだから帰ったのだと思いたかった。

しかし昼間と言え犯罪が多い貧民街、心配になり来た道を戻り探すが見当たらず歩きまわっていると大きな布袋を担いだ男二人とすれ違いざまに、女の子の微かな泣き声を聞いたような気がした……この辺りでは人買いが良く子供を袋に入れ親から無理やり引き離すので良くあることだったが、レイカの事があり気になり後を付ける。

男達が貧民街のはずれの林の中の粗末な木の家に入って行くのを見て、家の隙間から中の様子を伺うと縛られたレイカの姿を確認し、矢張りかと思うと同時に気付いた時に学問所に連れ帰れば良かったと後悔した。

「くっそ…　俺はバカだ！」

俺達親子を陥れたのが龍族だからといって、龍族の血を引いているからだけで少女を憎んだが、殺したいとか酷い目に合わせる心算は無かった。

今は後悔しているよりレイカを助けねばならない

大人二人では自分に勝ち目が無いのは分かり切っているが、学問所の兵士を呼んでくる間に場所を移動してしまたら行方が分からくなる。何時もなら数人と行動していたが今日はレイカの事があり一人になりたくて単独行動していたのが裏目に出てしまった。

「チッ……　一人でやるか」

これ以上大人が増えない為にも今のうちに行動する。　先ず林から地面に落ちている生木と枯葉を集めて火を起こす準備をしてから、もう一度中を確認すると丁度良い事に酒を飲み始めている。レイカは大人しくジッとしているようだ

レイカがいる壁の裏に廻り、小さくコツコツと何回か叩くと向こうからもコツコツと壁を叩く音がし、此方に気がついたようだ。

「いいか良く聞け、今から火を出すから煙を吸わないよう口と鼻を

服で押え其処でジッとしていろ」

なるべく小さい声で言ったので伝わったかどうか判断出来ないが入口の周りに集めた木に懐から出した火打ち石で火を付けると枯葉がメラメラと燃えあがり生木からは沢山の煙がたちあがり家の周りを覆って行く

テジャは近くの水で濡らした布を顔に巻き男達が出てくるのを待つ

隙間だらけの家なので煙は直ぐに家に入り込み酔いがまわり始めた男達も異変に気付き騒ぎ始める。

「おい！　何だこの煙は?!」

「火事じゃないのか」

男達は慌てて、家の戸を開けると大量の煙が家に入り込み、口や目に煙が入り大変なことになる。

「ゲッホ　ゲッホ　ゲッホ　目が沁みる」

「ガキは何処だ！　連れて逃げるぞ」

しかし男達は目がやられて方向が分からないようで手間取っている隙に、レイカの側の木の壁を蹴り破る。

バッキ!!　バッキドッカ!

縮こまるレイカを引きずり出すと、男達もレイカが脱出しようとしているのに気付き、音の方に突き進む

「逃がすか！！」

「待て！」

しかしレイカは抜け出した後…周りも良く見えず壁にぶち当たりそのまま倒れる男たちだった。

「背中に乗れ！」

レイカは、壁から外に引きずりだされると、思いがけない顔を見て驚いてしまう。いじめっ子のテジャだった。

「早くしないと捕まるぞ！」

そう言われ慌てて背中におんぶされるとそのまま駆け抜けるように林を走り、貧民街の中心へと走り速度を緩める事なく走り続け揺れる背中に必死に捕まる。

何故テジャが突然現れレイカを助けてくれるなんて思いもよらないレイカの事嫌いじゃ無かったの？？？

其の疑問ばかりが浮かぶが一生懸命走るテジャに話し掛けれない

レイカをおぶさりながらも凄い速さで街中を走り抜け学問所が見え始めると漸く立ち止まるがそのまま膝をつき荒い息を整えるように息をしている。

「はぁっ　はぁっ　はぁっ　くっそー　ゼィゼィ……」

大丈夫と聞きたかたが口を塞がれ、手も縛られている状態では何も出来ない

其処へ、レイカを探していた兵士が気が付きやって来る。

「大丈夫か」

兵士さんがテジャの背中からレイカを降ろし紐を解いてくれ漸く自由になると抱っこしてくれる。

テジャは余程全速力で走った所為か、レイカが降ろされると仰向けになって倒れ凄い汗を流していた。

数人の兵士がやって来てテジャに水筒の水を飲ませ漸く落ち着いたようだ。

「何があった」

「そのバカが人攫いにあったのを助けた……犯人はあの煙が上がっている場所」

そう言うと兵士さん達の何人かがそちらに向かい、レイカを抱っこした兵士さんとテジャに肩を貸す兵士さんに運ばれ学問所の医務室に運ばれる。

医務室に入ると同時にサンおじちゃまが飛び込んで来てレイカを抱きしめる。

「レイカ無事だったのですね！　ああっ良かった。貴女がいなくなった時は生きた心地がしませんでした」

涙ぐみながらきつく抱きしめるので、かなり心配させたようで申し訳なく感じる。

「ゴメンなさい心配かけて……レイカが敷地から勝手に出ちゃって危ない目にあったのをテジャが助けてくれたの」

「テジャが？」

その時になってようやくテジャの存在に気がついたサンおじちゃまは、次にテジャに抱きつきお礼を言う

「テジャありがとう。レイカは私の大事な娘のような子なので助けてくれた事を心から感謝します」

テジャも照れているのか顔が真っ赤だ

これをフェンおじちゃまが見たら確実に殺されるなと思っていたら

又しても戸が突然開かれると、真っ赤な髪の美丈夫が憤怒の顔で立ちつくしていた。

フェンおじちゃま!!　ヤバい!

「フェン!　レイカが無事見つかりました」

嫉妬に燃え上るフェンおじちゃまに気付く事無くその胸に飛び込み抱きつくサンおじちゃんに少し気を良くするが改めてテジャを睨みつける。

テジャは余りの迫力に真っ青になり今にも気を失いそうだ

子供にまで嫉妬するなんてある意味凄い

「フェンおじちゃま!　この子は攫われたレイカを助けてくれたテジャよ」

とりなすように言うとサンおじちゃまが余計な事を言う

「そうでした。テジャのお陰でレイカがこんなに早く見つかったんですよ!」

其の一言でまたフェンおじちゃまの機嫌が悪くなる。その言い方ではフェンおじちゃまが役に立たなかったように聞こえ、拗ねたようだ……困った大人だ

「フン!　どうせ俺は役ただずだ」

「フェン…私はそんな心算は…　レイカがいなくなり貴方が直ぐに駆けつけて来てくれどんなに心強かったか」

「サンジュン」

そのまま熱く見つめ合う二人を呆れて見るしかない

テジャもそんな二人を驚くように見ている。

そう言えばテジャは龍族を憎んでいたはず、バリバリの龍族で中央軍大将軍が人間の女性といちゃついているのだから良くないような気がする

「二人とも、子供の前でいちゃつかないで！」

「／／／　レイカ！」

「問題起こしたガキがなま言うな」

フェンおじちゃんはテジャを見やる。

「部下の報告でお前が人攫いを抑えたようだな、煙を使うとは頭が回る、男二人煙にやられて気を失っていたぞ…良くやった」

テジャは恭しく頭を下げるので、レイカは目を見張る

龍族が嫌いなくせに、頭を下げるなんて少しがっかりだ

「どうだ、士官する気なら俺んとこ来るか？」

「いいえ私は官吏を目指していますので中央軍大将軍フェンロン閣下のお役に立てるとは思えません」

凄い…フェンおじちゃまの事を知っているなんて喋り方も何時もと違った。

「ただのガキじゃ無いようだな……叩けば埃が出そうだ」

テジャは肩を震わせるが、あろうことかフェンおじちゃまを睨む

矢張りテジャだ

「俺を誰だか知って睨むとは、益々気にいったが無理強いは嫌いだしな…」

「フェン、子供をからかってはいけません」

「冗談のつもりは無いんだが……ユンロンの所より俺の所の方が楽しいのに」

ユンロン？　誰だろう初めて聞く龍族の名前

「まっ　何時でも俺の処を訪ねて来いよ坊主！　それじゃあ俺は帰るか……レイカは帰ってからお仕置きが待ってるぞ覚悟しろよ」

「ええっ！！」

そう言って学問所を兵士さん達と風の如く去っていた。

フェンおじちゃまがいなくなると一気に医務室は静かになる。

「「「　……　」」」

「あの～　レイカとフェンの事は誰にも言わないで下さいね…テジャ」

申し訳なさそうにサンおじちゃまがお願いする。

「俺も命が惜しいし誰も信じませんよ。　だけど先生は何者ですか？」

確かに大将軍が貧民街のこんなみすぼらしい学問所を訪れるなど誰が考えるだろうか

そしてそんな龍族と恋人同士のような人間の教師……胡散臭い

「ゴメンなさい……それも言えません」

「まっ良いけど」

興味な下げにそう言って立ち去ろうとするので慌てる。

まだお礼を言っていなかったので呼びとめる。嫌な奴だけど助けて貰ってお礼を言わないなんて母様に怒られる。

「テジャ待って！」

面倒くさそうにしながらも立ち止まり振りかえる。

「なんだ？」

テジャの所まで行くとレイカの背はテジャの腰より少し上しかなく顔は遥か上

「ちょっと耳を貸して」

素直に応じてしゃがんでくれるテジャ…本来は優しい少年なのだろ、でなければ子供達も慕わない

「助けてくれてありがとう」

チュッ！

「／／／　！！！！！」

頬にお礼の口付をした途端、脱兎の如く逃げるように医務室を飛び出してしまうのでテジャがどんな顔をしているか分からなかった

「　失礼な奴　そんなに嫌がる事無いじゃない！　ねー　サンおじちゃま！」

おじちゃまを振りかえると何故か固まっている??

フェンおじちゃまから男の人にお礼をする時は、これが一番だと教えてくれたので実行しただけなのに……

可笑しかったのだろうか?????

人間の血

人攫いに攫われた日はファン様達のお説教を永遠と聞かされ、家に帰ればサンおじさんに話しを聞いた母様に泣き付かれてしまい、怒られるより一番堪えると知る。

二度と学問所の敷地の外に出ないと誓いをたてさせられ、漸く許された

其の夜、久しぶりに母様の寝台でハクも一緒に寄り添い寝た……母様の胸に顔を埋め温かい体温を感じ安心して寝る事が出来た。今考えてもテジャに助けられ無かったら母様に会えなくなっていたかもしれないという恐怖が湧く…今度もう一度お礼を言おうと心に決めた。

そして髪飾りの事をすっかり忘れていたのだった。

今日は午後からおじちゃまが迎えに来てファン様のお屋敷に行く日の朝だった。

「今日は家中の布団を干すから手伝って」

「は〜い　……！！」

突然、髪飾りの事を思い出す。

あっ　ヤバい！！　髪飾りを忘れていた！

「レイカが運ぶから、母様が干して」

「大丈夫？」

「大丈夫！！」

急いで寝室に行きレイカの枕の下を探ると髪飾りがそのまま隠してあった。

「良かった…母様にばれて無かった」

急いで取り出し手に取ると綺麗な髪飾りを眺める。

ファン様のお屋敷で着飾られる時は、怪我をしないよう造花や紐飾りで宝石は付けさせて貰えないから、ファン様達がしているキラキラの宝石は憧れていた。じっくり眺め髪に付けたかったが布団を運ばないといけないので取敢えず箪笥の奥に仕舞う

それから急いで布団を運ぶ、布団と言ってもここ等は温暖で薄い綿が入った軽い物なので五歳のレイカでも何とか運べる。一つづつ何往復かして運び出し終わるとそれだけで疲れてしまう。

「ご苦労様、今、果物の汁を絞って上げるよ」

「わ〜い　砂糖も入れて！」

「ウキィー」

「ハクは何もしてないでしょ」

「キィ…」

実際ハクはレイカの後ろを付いて往ったり来たりしてただけ

「嘘だよ、一緒に飲もう」

「キッキー」

それから甘い美味しいジュースを飲んでから、前回作ったアンドーナツを一緒に作る事にしたのだ。テジャにお礼に手作りのお菓子をあげる事にしたのだがついでにチュウリンちゃんにもあげようと考えている。

「この間皆に迷惑をかけたから、アンドーナツ沢山作って皆に一杯食べて貰おう」

「は〜い」

母様に教えて貰いながら、前日に作って置いた豆と砂糖を煮て潰したアンコを麺麭の生地の中に入れ包む作業を手伝い、それが終わると油で次々とこんがりと揚げていくと甘い美味しそうな匂いが台所

一杯に広がる。

「おいしそう～」

「揚げたアンドーナツに此の粉をまぶしてくれる」

母様から黄色い粉が入った皿を渡される。

「何これ？」

「母様の国では黄粉と言って、大豆を炒って粉に挽いた物なんだけどそれに近い豆を使って作ったんだよ」

舐めて見ると香ばしくて砂糖が少し入っているようで仄かに甘みもあり美味しい

母様は料理の本を取り寄せたり、色々な食材を取り寄せ研究をしているのだけど偶にとんでもない変な物があるので全てが美味しい訳ではない

早速、揚げたてのアンドーナツに黄粉をまぶすと、黄粉の香ばしい匂いが香り食べたくなる。

「母様、一個食べて良い！」

「仕方無いなー　良いよ」

お許しを貰って食べようとするとハクが頭上で鳴く

「キィ～」

「ハクにも分けてあげるよ」

ハクはまだ小さいので一口位に千切って持たせ同時に齧りつく

「「　！！　」」

「凄く美味しい！！　黄粉を付けた方が断然美味しい！」

「そう、良かった。　皆も喜んでくれそう」

母様も嬉しそうに微笑んだ

アンドーナツは前回より小さめに作り、半分だけ黄粉をまぶし全部で四十四個も作り上げたので結構時間が掛かりお昼を過ぎてしまった。

「レイカは朝のオニギリを食べて用意をしなさい」

「は～い」

朝と同じ物を自分で居間に運びハクと一緒に食べていると母様がお茶を出してくれ、アンドーナツを詰めたお重を二つと小さな紙袋が二つ用意されていた。

「紙袋のをお友達にあげなさい」

「ありがとう」

「それとアンドーナツの作り方を此の紙に書いたからファン様に渡

して」

「は～い」

それからサンおじちゃまが何時ものように迎えに来てくれ、ファン様のお屋敷で着せ替え人形をし何時ものように過ぎていった。

「テジャお早う！」

先制攻撃でレイカの方から声を掛けるとテジャの子分達やテジャ本人も驚いたようでかなり間抜けな顔をしていた。

「お前…　ちょっとこっち来い」

少し顔を赤らめた？テジャがレイカの手をとり建物の裏の方に引っ張られる。

その後ろでは子分達がヒュ～ヒュ～ヒュ～とはやし立てている。

「お前ら、黙ってろ！！」

「いよっ！　テジャさん照れない照れない」

「頑張って下さいー」

「こんなガキに手を出すか！！！」

一体何の話しなのかレイカには分からない

「手を出すって…レイカぶたれるの！？」

「意味が違う！　お前みたいチビ襲うか！」

襲う？？？

人気のない裏に連れてかれると怒られる

「お前、なに声かけてるわけ！　普通しないだろ！？」

「何で？」

「お前を苛めていた俺に声を掛けるなんて不自然だろ」

「別に良いじゃない、レイカはテジャに助けて貰ったからお礼がしたかっただけだもん」

「あー分かった、分かったからもう話し掛けるな！」

そう言うとサッサと立ち去ろうとするので必死に服の裾を掴み呼びとめる。

「まだ行っちゃダメ！」

「うるせえなー　礼は聞いてやっただろ」

レイカは持っている二つの紙袋の一つをテジャに差し出す。

「レイカと母様と作ったお菓子なの食べて、美味しいよ」

ニッコリと笑い渡そうとするが受け取ろうとしない

「お願い食べって…テジャの為に一生懸命作ったの…」

少し涙で目を潤ませ見詰める……以前にフェンおじちゃまに男におねだりする時の効果的方法を使ってみる。

「チッ　食べりゃあ良いんだろ、寄こせ」

おもむろに紙袋を取り上げその場で中のアンドーナツを一口で食べると一瞬動きを止める。

「！！」

それから五個入っていたアンドーナツをあっという間に完食した。

「美味しかった？」

「ああ……」

「それじゃ、改めて有難うございました。テジャのお陰で売られずに済んだし感謝してます」

丁寧にお辞儀をしてお礼を言うと苦虫を潰したような顔をするテジャ

龍族の血を引いているレイカのお礼を受けるのも嫌なのだろうか

「やっぱりお前は良いとこのお嬢さんだな…貧民街に住んで無いだろ」

「わかるの？」

テジャには色々バレテいるので嘘を言っても嫌われるだけのような気がした。だけどお嬢様と言う訳でも無いと思うんだけど……自分でも自分の立場が分からない

「普通の王都の住民だって中央軍大将軍と顔見知りなんてあり得ないだろ」

「フェンおじちゃまって有名？」

「この国でも五指に入る程有名だろ」

小さい頃から知っているけどサンおじちゃまにベッタリの姿しか知らないレイカにはそれ程凄い人に思えない

「何で、こんな学問所に通うんだ？　王都には立派な学問所があるだろ……お嬢様の気まぐれか？」

「レイカはお嬢様じゃ無い！　普通の家の子だよ」

「お前には普通の家かもしれないが、俺達貧民街のガキには裕福で十分恵まれている。　今食べた菓子だってふんだんに砂糖が使われているだろ、砂糖がどれだけ高価な贅沢品だと知ってるのか？　貧民街に生まれ育った奴で一生涯口にするかどうかだ」

「知らなかった……」

「そういう所がムカつくんだ」

腹立たしげに呟く

「だってそんな事知らない！　赤ちゃんの頃からずっと森の中の一軒家で母様と二人で閉じ込められるように暮らしてたから外の世界なんか知らない…自分以外の子供を見たのだって此処で初めてで…うっうぅぅーんうっ…」

レイカが悔しくて泣きだすとテジャが慌てる

「わっ～　泣くな！　俺が言い過ぎた、悪かった」

テジャがレイカに謝るなんてあり得ない、驚いて涙が引っ込む

「テジャが謝った…」

「お前な……」

「ねぇ…レイカって何なのかなぁ？」

最近特に感じる疑問をテジャにぶつける

「はぁ？」

「レイカは母様と二人暮らしで、知り合いは龍族の大人の人しか知らなかったの」

「確かに特殊だな」

「父様は龍族だけど名前も顔も知らないし、母様に聞いても教えてくれないんだけどこれってどういう事だと思う？」

「俺に聞くな！」

「レイカよりテジャの方が大きくて物知りじゃない…想像でいいから教えてよ」

「……俺にとってお前に関わる事が果てしなく面倒事のような気がしてきた。　あくまで想像だがお前の父親はかなりの高位にある龍族で奥方にばれないよう愛人を森の一軒家に囲って　！！　痛！！」

あまりに失礼な事を言うのでテジャの足を思いきり踏んでやる

「母様は愛人じゃない！　ちゃんと婚姻を結んでいるって証拠の金の龍の指環を見してくれたんだから！」

涙を溜めた目でテジャを睨みつけてやる。

「だから仮定だろ仮定！　このじゃじゃ馬」

「母様は嘘は言わない…でも母様はあの家から外に出れないの…やっぱり変だよね」

「確かに、正式に婚姻してるなら龍核を分け合い龍族と同じように扱われるはずだが…閉じ込められるなんて可笑しな話しだぞ」

「母様は嘘を言わない」

「それじゃあお前の母親って何歳ぐらい」

「二十歳位に見える」

「単純に考えて人間なら十四歳ぐらいにお前を産んだなら結構変わってるはずだが、物心ついた時に比べ年をとったか？」

「全然変わらないまま綺麗だよ」

「それなら婚姻している確率が高いなー　人間の十四歳から二十歳なら体の成長も激しいから全く変わらないのは可笑しいからな」

「えっ　母様って年をとらないの！！？」

「知らないのか？！　龍族と人間が婚姻を結ぶと命を分け合い人間の場合寿命が恐ろしく伸びるんだ。龍族は五百年以上生きるが人間は精々六十年だから単純に考えて二人は二百八十年以上生きる事になるし、人間と違い年をとる速度もゆっくりだ」

人間の寿命は六十年！　初めて聞く話しに茫然としつぃまう

「じゃあレイカは母様より先におばあちゃんになって死んじゃうの！！」

「そうだな……お前知らなかったのか…」

青ざめた顔に幾すじもの涙が流れる

あまりに酷い事実に悲しくってどうしていいか分からなかった。

レイカが死んでしまうと母様は一人ボッチになってしまう
母様に悲しい思いをさせるなんて嫌だ
そんなの許せない
多分、母様を閉じ込めているのはレイカの父親だと直感的に思い浮かぶと怒りが湧く
「許せない！！　サンおじちゃんに聞いてくる！！」
「おっおい！！」
泣いたかと思えば急に怒り出し、学問所に入って行く少女を見送る事しかなく
テジャは思いっきり後悔していた。自分はとんでもない少女と関わりを持ってしまったのかもしれないと
授業はまだ始まっておらず、先生の控室に飛び込むとサンおじちゃんが化けている女の先生に跳びかかる勢いで責め寄る。
「先生！お話があります」

「どうしたんですかレイカ……」

並みならぬ気配に慄くサンおじちゃまを引っ張り誰もいない部屋に入り、単刀直入に聞く

「サンおじちゃま、レイカの父様は誰なの！」

「レイカ！　突然何を言うんですか」

まさか父親の事を聞かれると思っていなかったので、たじろぎ少女の迫力に一歩さがってしまう。

「レイカ知らなかったの！　母様よりレイカが先に死んじゃうなんて！　だから母様をあそこから出してあげたい！」

「レイカ…一体それを誰から」

「テジャが龍族の事を教えてくれた」

「テジャが！？」

龍族の詳細を知っている人間が貧民街にいるとは思わなかったサンジュンロンは後悔した。

あの子は一目見てレイカが龍族の血を引いている事を見破った子…普通なら少数民族の子だと思うはず、龍族は稀な存在で其の血を色濃く引く人間も更に少ないのだだからまして貧民街に龍族がいるとは思わない。

誰もレイカを龍族の関係者だと思わないと高を括っていたのだ。

「母様を閉じ込めているのは父様なんでしょ、父様の名前を教えて」

「それは言えません」

何時も何でも優しく教えてくれるサンおじちゃまは、きっぱりと断る

「何故？　レイカの父親の名前を知ったら駄目なの」

「レイカとアオイの為です。真実を知ればレイカは傷つくでしょう…そんなレイカを見たアオイはより傷つき自分を責めるのは必至。アオイを傷付けないためにも父親を聞いてはいけません」

母様に初めて父親を聞いた時の悲し顔と涙を思い出しズキリと胸が痛む

自分の父親が誰なのかどうでもいいが、母様を一人ぼっちにしたくなかった

「じゃあ、せめて父様に母様をあの家から出してくれるようお願いしてよ！　サンおじちゃま」

「レイカ、私もファン様達も何もしなかった訳ではないのです。アオイをあそこから出そうと何度も試みましたが無理でした」

「酷いよ…母様は父様に悪い事をしたの？だから閉じ込めてるの？ううっうぇーんうっうえ～ん…」

「泣かないでレイカ、アオイは何も悪くないのです。　運が無かっただけ」

優しく抱きしめ頭を撫でてくれるサンおじちゃま

「今は幾らでも泣きなさい、だからレイカこれだけは守って…アオイの前では父親の事で泣いてはいけません。分かりましたか?」

珍しくきつい口調でレイカに言いつける。

「うん……」

益々自分が誰なのか分からない

わかった事と言えば父様が母様を苦しめている。

レイカの存在は母様を幸せにしてるんだろうか?

せめて龍族で生まれれば母様の側にずっといられたのに

初めて自分が人間である事が悔しかった。

気持ちが落ち着いてから教室に戻りチュウリンちゃんを捜したが休みのようで見当たらない

せめてこのお菓子を渡し喜ぶ顔を見たかったのにさらに気分が落ち込む。

最近少しずつ日常がずれていくような不安な気持ちでざわめく

レイカは今まで何も知らなかった

知った事実は嫌な事ばかり

母様とあの小さな家でずっと暮らしていれば、知らなくてすんでいたのに

だけど何時かは知らなければならない

それが今なだけ

サンおじちゃまは生涯レイカに父親は教えないと言われた。

だけどレイカは諦めない

何時かきっと父様を捜し出し母様をあそこから出してあげるんだ

そのためにも龍族を知らないと

先ずはテジャから色々聞くのが良さそうだと考えるのだった。

突きつけられた現実

最近の母様は可笑しい

ファン様に頂いたという真珠の耳飾りを時たま確認するかのように手を耳に持って行き、頬を染める。

其のしぐさがレイカの母ながら可愛いとつい思ってしまうが…

まるで恋する乙女のようだ

絶対に変!?

「ハクもそう思うでしょ？」

「ウッキ？」

相変わらずレイカの頭にへばりついただけの役にも立たないハク

ご飯を一杯食べるけど他の子猿と違いなかなか大きくならず、体格が引き離されるばかりで今だ子猿達の輪に入っていけない

ハクは矢張り他の猿と違うようだ。

あの耳飾りを初めて見たのは、レイカが前回の学問所から帰って来た時だったけど其の時も挙動不審

何時も髪を後ろで三つ編みにしているのに、その時は髪を解いて耳を隠す様にしていたが耳に始終手をやるのでチラリと見えた白い物に目が行く

「母様、耳のそれ何？」

瞬間に真っ赤になる母様の顔は見た事もない程うろたえていた。

「こっこれは…ファン様！ファン様に頂いた耳飾りなんだけど…取れなくなっちゃって…普段しないから恥ずかしくって……」

「レイカに見せて」

母様は恥ずかしそうにしながらも綺麗な黒髪をかき上げ耳を出し見せてくれる。

「外れないか見てくれる」

「うん」

母様が屈んでレイカに真っ赤な耳を差し出す。

「綺麗な石だね、これはなんて言うの？」

耳飾りに使われていた石は髪飾りと同じ物を使っていたので驚き、

まだ返していないのでドギマギしてしまう

「これは真珠だよ」

「真珠…いいなー　レイカもこんなの欲しい」

「レイカは小さいから大きくなったらね。　それより外れそう？」

真珠の耳飾りを触り金具をいじるが繋ぎ目もなくどうやって付けたのかも分からない

「外せそうにないよ？　ファン様じゃないと無理みたい」

「そっか」

「でも母様にとっても似合ってる！　すっごく綺麗！！」

「ありがとう…」

恥ずかしそうにうつ向く母様が嬉しそうに呟いた。

その時は別に何とも思わなかったが、日が経つにつれ徐々にそわそわし始めレイカがファン様のお屋敷に行く日は特に可笑しい程に赤くなったり、青くなったりしていた。

「ねっ！　変だと思うでしょう」

「知るか！」

学問所に来て直ぐにテジャを探し出して、建物の裏に引っ張り込みレイカの疑問を聞いて貰っている。

迷惑がっているのは知っているがレイカに相談できるのはテジャしかいなかった。

「だって、今まで宝石なんて身に着けなかったのに変！　しかもレイカが小さい頃から十日ごとに家を出されるのも変よ！　テジャはどう思う？」

「簡単だ、龍族のスケベ爺が通ってんだろ。その耳飾りも貢物」

「うっ…やっぱそうなのかな……」

レイカも小さい頃から定期的に家を出されるのが不思議で、ファン様の屋敷から戻った時の母様や家の様子で…もしかして誰かが来ているのではないかと思っていた。

レイカに内緒で母様が父様と会っている？！！！

酷いよ……母様

母様に裏切られたように思え、悲しくて涙が目から零れ落ちる。

何故母様はレイカを父様に会わさないんだろ？

父様はどうしてレイカに会わないんだろ?

疑問ばかりが湧き起こり悲しい答えばかりが思い浮かぶ

「おっおい、泣くな！　俺が泣かしてるみたいだろ」

「テジャの所為じゃないよ…」

「ちっ　何時も生意気な奴が泣くと調子が狂うぜ」

そう言いながら髪の毛をグシャグシャと撫ぜてくれるが、折角の三つ編みまで乱れてしまう

「ちょっと！　乱暴にしないでよ！　もっと優しくて！」

「やっぱ、生意気だ」

呆れながら苦笑いをするテジャ

どうやら慰めてくれたらしいが、いじめっ子に慰められるのも変な感じ

龍族が嫌いだといってレイカを苛めていたのに

……

「そう言えば、テジャは何で龍族が嫌いなの?」

「俺か?　そうだなお前の事情ばかり知ってるのも不公平だから教えてやるか……俺の父親は龍族に裏切られて殺されたんだ、その所

為で財産も家も失い母親まで此の掃き溜めのような街で泣きながら死んでいった。　……だから俺は龍族は大っ嫌いなんだよ」

吐き捨てるように言うのを聞いてレイカはムカついてしまう。

「何それ!!　それってレイカに関係無いじゃないの？　レイカは龍族の血を引いているかもしれないけどテジャを裏切った龍族じゃない!!　それだけで苛めるなんて最低!!」

逆上してテジャに詰め寄るとばつが悪そうに頭を掻きながら謝る。

「悪い、悪い、そう言われればそうだけどよ……俺を裏切った龍族と同じ目の色を見たらつい…」

「目？」

「その金色の目だ。　知ってるか金の目を持つのは龍族でも珍しく二人しかいないんだと」

「たった二人！　じゃあその一人がレイカの父様?!」

「それはあり得ないな」

キッパリ言い切るテジャ

「何でよ?!」

「一人は子供の龍族で俺を切り捨てた奴だ。　そいつの自慢が金色の目で龍王陛下様と同じで国では二人だけだとほざいてたのを覚えている」

皮肉げに言いながら憎々しげにレイカを睨む。

だからレイカはその子と違うから睨まないでよと言いたかったが、もう一人があまりに雲の上人過ぎて驚く

「龍王様が！！」

龍王様がレイカと同じ金色の目だと聞き驚くが、もし王様の子供ならレイカは王女様として王宮にいるはずだし、母様は王妃様として後宮で着飾り暮らしている……確かに有り得ない。

「じゃあ黒い髪の龍族って知っている？」

「黒い髪なら数年前婚姻した龍族の奥方が黒髪の絶世の美女で、巷で凄い噂になったが、その人は女性だから違うだろうし……う～む、黒髪はその人ぐらいだ。　最初お前はその人の子供だと勘違いしたからな」

「レイカと母様以外に黒髪の人がいたんだ！」

黒髪の人間がもしかすると他にもいるんじゃないかと喜ぶが、問題の父親が龍族の誰だか分からない。

「まっ諦めろ。　母親が秘密にするならそれなりの身分の龍族だ。詮索するとお前だけじゃなく母親も酷い目に遭うぞ……俺達家族みたいにな」

「そんな…」

母様が秘密にするのはレイカのためなのかもしれないと思うが知りたかった

父親を知って母様をあそこから出してとお願いしたかった……

だけどその所為で母様まで不味い立場になるのは嫌だ

多分母様は父様が好きなんだ

だって真珠の耳飾りを貰ってあんなに嬉しそう

だったら父様は？

母様が好きじゃないの？？？

ずっとあの結界の家に閉じ込めて十日に1度しか会いに来ない

テジャの言う通り龍族は人間に酷い事ばかりするの？

でもレイカの知っているファン様達やサンおじちゃま、フェンおじちゃまもレイカに優しくしている。

「テジャは龍族全部が嫌い？」

「龍族は一部の人間以外を奴隷としか思っていない奴らを好きだと思えるか…特に王都から遠い州にはそれが顕著にでている。　だけどよう此の貧民街に来て悪い龍族ばかりじゃないのも知った。　此の学問所だってこの間来たフェンロン大将軍の奥方が資金を出して開いて貧民街の子供達に希望を与えてくれている。龍王様だって能力さえあればどんな出自の人間でも官吏になれるようにしてくれた

！　凄いだろ」

テジャの顔は今までの陰鬱な雰囲気を吹き飛ばしキラキラと目を輝かせている。そいえばフェンおじちゃまに官吏を目指すって言ってたっけ

「テジャは官吏になりたいの」

「ああ、王都で官吏になって丞相府で上を目指し偉くなって、父上を陥れた龍族の不正を暴き、あいつにも俺の力を思い知らせてやるんだ！」

復讐なのか、なんかテジャっぽいけど

でもサンおじちゃまが官吏の試験に受かるのは並大抵の勉強じゃ無理だと言っていた。龍族でも落ちる人がいるくらいでサンおじちゃまも猛勉強してやっと受かった言っていたもの…テジャって頭が良いの？？

「官吏になるのって難しんでしょ」

「俺は登用試験に合格だけなら今でも出来るぜ！」

自慢げに言うテジャが少し可愛く感じるけど本当かな

「レイカも官吏になろうかな…そしたら父様の事分かるかも」

「止めとけ、お前の場合はかなり上の龍族だ。フェンロン大将軍とも顔見知りなら父親もそのくらいの高位の龍族……あまり顔を突っ込みすぎると親子共々殺されるかもしれないぜ、それにお前の頭じ

ゃ無理！」

「レイカは頭いいもん！」

「そうかそうか、だけど俺は主席合格を目指してるからお前に何時までも付き合ってる暇はねえんだ。　じゃあな」

全然信じていないように、あっという間に其のまま学舎に消えって行った。

レイカの頭が良いのを全く信じていないようだ

「レイカだって試験ぐらい受かるもん」

だけどテジャに相談して良かった。

レイカも官吏になれば父様の事が分かるかもしれない

確かに今は小さすぎて何も出来ない子供だ

大きくなって官吏の偉い人になれば龍王様にだって会えるかもしれない！

そうしたら龍王様に母様を助けてくれるようお願いすれば、幾ら高位の龍だって龍王様に逆らえないはずだ！！

「良し、レイカも今日から勉強を頑張ろう！」

レイカは希望を胸に意気揚々とテジャの後を追い学舎に入って行った。

まさかその龍王が自分の父親だと誰が思うだろう

レイカは自分の考えの皮肉さを知らなかった。

レイカは勉強に力をいれる為に教室を変わる事にした。今は簡単な字や計算を教える小さい子が多いので此の教室に入っただけで、本来のレイカの学力はもっと上だったが友達を作るのが目的のために入った理由が大きかった。

「教室変わる前にチュウリンちゃんに話とかないと」

教室には既に沢山の子供がいて騒然としているがチュウリンちゃんの姿を見る事が出来ない

「まだ来てないのかな?」

授業が始まる頃まで待つが現れない…何時もは早くから来るのに今日はお休みなんだろうか?　仕方無いので以前仲の良かった子に声をかけて見る。

「ねえ、チュウリンちゃん知らない？」

「あ～ぁ　チュウリンならもう来ないんじゃない」

「何で？」

「さいきん来ないから、親に売られたんだよ」

その子はさも当たり前のように言う

「嘘つき！　親が子供売るわけない！」

「あんたバカじゃない、そんなのふつうだよ。　ふん！」

そう言いその子はレイカから離れていった。

チュウリンちゃんが売られた？

直ぐには信じられず確かめる為にテジャを探す。

テジャならこの学問所で顔が効くから何かも知っているかも知れない

廊下を走りながら教室を次々捜すが見つからない

「何でいないのよ？　勉強で忙しい…　そうだ！特別教室　」

友達が官吏や上級の勉強を目指す子達の専用の教室があると言っていた。

確か書庫の部屋で行われているはずだ

一番端にある部屋に飛び込むとテジャの他に3人の大人がいたが、構わずテジャに飛びつく

「テジャ！！」

「ゲッ！　何しに来た！」

「テジャ、他の二人に迷惑だから外に行きなさい」

教師らしき大人がテジャにそう言うと、レイカを睨みながらもその言葉に従う

テジャは腹立たしげにレイカの襟元をぞんざいに引っ張り教室から出ていきそのまま建物の裏に引っ張り込んだ。

かなり怒っているのがひしひしと伝わり、流石に殴られそうな気配

「お前いい加減しろ…俺の邪魔をするな！！」

怖い顔で睨んで来るがそんな物に構っていられない

「これで最後にするから教えて！　二度とテジャに話し掛けない」

「本当か」

「うん」

「何だ？」

「チュウリンちゃんが何処にいるか教えて欲しいの、最近来て無いらしい」

「だったら親に売られたんだ」

あの子と同じ事を言う

「もしかしたら病気で来られないだけかもしれない、調べて」

テジャは渋々言う事を聞いてくれる。

「分かった。調べてやるから二度と俺に話しかけないと約束しろ。此処で待ってろ」

「うん」

テジャは直ぐに何処かに消えて行き、その場でジッと待つしかない

最後にあった時は何時も通りで何も言って無かった…というより家の事はあまり教えてくれず弟と妹がいるくらいしか知らない、家の場所も両親の事も全く話さないのを今になって気付く

他の子に比べても小さく痩せていた

給食も何時も家に持ち帰り兄弟に分け与えていた優しい女の子

あんないい子を親が売るなんて信じられない

思ったより早く戻って来たテジャが話しだす。

「チュウリンの家の近くの奴の話だと、人買いに売られた。貧民街ではよくある話だから忘れろ」

「何で親が子供売るの！　そんなの酷い！！」

「バーカ　此処じゃあ常識だ　親が子供を学問所に通わすのも食料が貰えるかだし少し読み書きが出来ればその分高く売れる。そいつの話じゃ下の双子を今度学問所に通わせてチュウリンは用済みだから売ったらしいぞ」

冷たく言い捨てるテジャ

「そんな…」

「貧民街の大人が全部そうとは言わないが半分以上はそんな親だ…苦労知らずのお前には分からないだろうが食べるのがやっとの人間ばかりの街だ、飢えて家族全員が死ぬくらいなら子供一人を売ってその場を凌ぐ。　そういう俺も落ちぶれるまでこんな生活や街があるのも知らなかったからお前と同じだった。　だから言う、お前は他の学問所へ行け王都のな」

そう言い残しテジャは学舎に戻って行く。

そして入れ替わりのようにサンおじちゃまがやって来た。

「レイカ、大丈夫ですか」

しょんぼり項垂れるレイカに気遣うように声をかけて来るが、タイミングが良すぎる。

「聞いてたの」

「はい、レイカがテジャを連れ出したと連絡を受け捜している時に偶然」

どうやらこの間騒ぎを起こしたので注意されているようだ

やっぱりレイカは特別のかもしれない

子供が一人学問所に来なくなっても誰も気にしないのに

レイカとチュウリンちゃんの扱いに差がある。

「チュウリンちゃんが売られちゃったの……　お願いサンおじちゃんなら助けて」

「それは無理です」

「どうして駄目なの！　売られたのがレイカだったら助けるの？」

「そうですねレイカは別です…酷い話しかもしれませんが一人だけを助ける事は出来ません。この街では大勢の子供が売られているのに一人だけの生徒を助けたと知ったら此処に通う生徒全てを助けなければならなくなる。レイカに全ての子供を助ける事が出来ますか？」

「レイカは子供だもん…サンおじちゃまは龍族でしょ！何とかして」

「分かって下さい…一人だけを特別には出来ない。それにこれでも大分ましになったのですよ…昔はもっと子供達の入れ替わりが激し

く今とは比べ物にならないくらい子供達は荒んだ目をしていました。
この現実が辛いなら王都の学問所に変わってもいいのですよ?」

ここの子供達とレイカは環境があまりに違いすぎていた

深い大人の愛情、三度のちゃんとした食事、清潔な衣服、何をとっても恵まれているレイカには、この酷い環境に育つ子供達の境遇が可哀そうでならないのだろう…それが仲のいい友達ならなおさら助けたくなるのは理解できた。

だけど自分が如何に無力であるか知らなければならない

まだ五歳のレイカには酷な事だが敢て突き放す。

サンジュンロンもまたファンニュロンと同様にいずれ龍族の力ある龍族と婚姻する事を望んでいた。そして時代を担う龍族を産み育てる母親として現実を知って欲しかった。

しかし、まだ子供で感情が先立つレイカには無理な話

「サンおじちゃまの意地悪!　大っ嫌い!!　うぇーん　うっうぇえんー」

泣きながら走りだすレイカをただ見送るしかないサンジュンロン

「大嫌い……」

大っ嫌いと言われてしまった…

我が子同然の子供から初めて大っ嫌いと言われた衝撃は思ったより

心を貫き思考を停止させ固まってしまう

数分後、

「……はっ！　レイカは何処に行ったんですか!!?」

漸くレイカを追いかけなければいけない事に気付き、真っ青になりながら後を追ったのだった。

そして

レイカは警備の兵士に保護されていて無事発見でき安心したが、レイカは思いつめたようにその日は喋ってくれず落ち込むサンジュンロンだった。

崩壊

レイカって何なんだろう

龍族でなく人間なのに、人間からは龍族の血を引いてるせいで差別されているし、きっと龍族の世界でも差別されるんだろう。

なんて中途半端な存在

「レイカとハクは一緒だね」

「キィ？」

レイカは母様やファン様達に守られて何も知らずに幸せに暮らしていたのに

自分を知らずにそのままでいたかった……

あれから結界の家に戻り母様の前では普段通りにしているけど、あれからサンおじちゃまが一度訪ねて来た時に無視したら、あまりに寂しそうに帰って行くので最後に「ゴメンなさい、サンおじちゃま」と謝ると涙ぐみながら嬉しそうに帰っていた。

チュウリンちゃんの事を思うと心配で悲しくなるけど、レイカには

何の力もなく助けるなんて出来ない

今の願いは

何時か生きているならもう一度逢いたい

母様もここから出してあげる事

出来ない事ばかりで悔しいが、大人になり官吏になれば少しは力が持てるはず

そしてもう一つ考えている事がある。

明日はファン様のお屋敷に行く日だがその前に確かめたい事があった。

外では畑の手入れをする母様を確認してから台所に行き大きな戸棚の前に立つ

この戸棚は外見はなんの変哲もない木の戸棚だが、ファン様のお屋敷にある同じ戸棚と繋がっており、ここでの生活に必要な衣料品を送って貰ったり手紙のやり取りなどをしているのだ。

両開きの戸棚を開けると空っぽで、ただの木の箱のような造り

「もしかして、この戸棚からもファン様とこの家を行き来できるか試すのよ」

「ウッキィー！」

ハクを頭に乗せ戸棚に入り扉を閉めると真っ暗な闇に包まれ、ハクがいなければ怖くて涙ぐんでしまいそうだ

「キィ～」

「駄目よハク、静かにして」

内側から少し開けて隙間から覗き込む

「！！」

隙間から見えるのは台所では無く豪華な部屋の一室

（やった！　ファン様のお屋敷）

（キッキー！）

もう少し開けようとするとサンおじちゃまが机にむかい仕事をする後姿が目に入り急いで閉める。

カチャッ

（げっ！　危ない…）

もう一度ゆっくり開けてみると元の台所

「やった！　成功だ　これなら夜コッソリ家に戻れる」

レイカは一目だけ父様を見ておきたかった。顔が分かれば将来役に立つはずだし、子供として純粋に父親が知りたい

「テジャの言う通りスケベ爺だったらヤダな…せめてフェンおじちゃまぐらいカッコいいといいのに」

物心つく頃から龍族の中でもとびっきりの美形ばかり見ているレイカの水準は通常の遥か上を行っていたのでこの言動だが、フェンロンは龍族の中でもかなりの美丈夫でサンジュンロンと出会う前までは龍族の姫から花街一の娼婦まで熱い視線を浴びる程だった。

矢張り女の子、つい若くて美形な父親を想像してしまうのは仕方が無かった。

「母様が好きになったんだし、レイカの父様なら絶対カッコいいはず！」

「ウッキー！」

「ハクもそう思うよね」

「キッ！」

同意するように鳴くハクに気を良くし本来の目的を忘れ、明日の夜を楽しみにするレイカだった。

翌日の昼過ぎに何時ものようにサンおじちゃまが迎えに来てくれるが、この間の事もあり少し遠慮がちのように声をかけてくる。

「レイカ、明日の学問所はどうしますか…嫌なら無理には勧めません」

母様まで心配そうに言う。

「まだレイカは小さいのだから家の勉強だけでも十分かもね」

どちらでも良かったが貧民街の子供達にとってレイカは鼻につく存在なのかも知れない、同じ古着を着ていても黒い髪と金の目が無くても子供達は違う物を感じてしまうのかも知れない、最初は人目を引き皆が集まって来たがテジャが虐めなくても皆は離れて行ったのかもしれない

リュウリンちゃんはレイカの事をどう思ってたんだろう…

大人しくて優しい女の子だった。

初めての友達だったけど学問所にいないなら、もうあそこに通う必要は無いのかも……

「王都の学問所に行く」

「そうですか、でもそうなると髪と目の色を変えねばなりませんよレイカ?」

「何で?」

「王都では龍族の血は狙われるのです」

目の色なら変えてもいいけど母様から貰った黒髪を変えるのは嫌だった……

「う～ん……　もう少し考える」

「考える時間は一杯ありますから、ゆっくり考えなさい」

「うん」

突然母様はレイカを抱きしめてくる。

ムギュゥ

苦しい～

「ゴメンね…　私のせいでレイカに嫌な思いをさせてしまってるのかも知れない」

「レイカは強いから大丈夫だよ」

レイカも力一杯母様に抱き付く

人間のレイカにはファン様やフェンおじちゃまのように神力なんて持っていないし、精霊魔術は先ず精霊が見える事が大前提らしいから才能は無いみたい。だから勉強を頑張りテジャと同じように官吏を取敢えず目指す

まさか五歳の女の子がそんな事を考えているとは知らないアオイと

サンジュンロンは健気な言葉に涙ぐむのだった。

「それじゃあ行って来るね！」

「行ってらっしゃい。明日はレイカの好きな唐揚げを作って待ってるよ」

「うん！」

元気よくハクを頭に乗せ瞑道を潜り後を振りむくと笑いながら手を振り見送ってくれる母様の何時もの姿を消えるまで見ていた。そして瞑道が閉じると前を向き光の出口に向かう
今夜はお屋敷を抜け出し父様の顔を絶対に確かめるんだと改めて決意する。

豪華な夕食を楽しんだ後は寝るだけ、サンおじちゃまは自分の家に帰っているのでお仕事のをする部屋には誰もいないから忍びこみやすい

「お休みなさいファン様」

「もうお休みになるのですか、レイカ様」

「はい、今日は何だか眠いので早く寝ます」

侍女さんの一人が手を引いて寝室まで連れて行ってくれ寝まきに着替えさせてくれる。一人で出来ると何時も言うんだけどお屋敷に来た時はお姫様ごっごをさせて欲しいとお願いされてしまい、仕方無く付き合っているけどお姫様は窮屈だ

ハクと一緒に寝台の布団にもぐり込み横になる。

「レイカ様は明日は学問所に行かれるのですか？」

「明日は行かない、だから遅く起こしに来て下さい。　偶には朝寝坊したいから」

多分夜更かしになるだろうから、何時もどおりに起きるのは辛そう

「まーそうなんですか！　分かりました。では明日は私達と沢山遊んでくださいませ」

声を弾ませる侍女さん、そんなに嬉しいの？

侍女さんは貧民街の学問所というより私がみすぼらしい古着を着る事が嫌らしい

だけど、侍女さん達と遊ぶ＝着せ替えごっこ……　面倒かも

「それではレイカ様、ハクお休みなさいませ」

「お休みなさい」

「ウッキィ」

侍女さんが小さい灯りだけを残し部屋の太陽石の光を消して出て行くのを確認するが、直ぐには起きない。何故ならレイカが寝たかもう一度確認に来るからだ。

だから寝てしまわないよう気お付けないと

「チュウリンちゃん今頃どうしてるだろ…」

レイカは贅沢な食事に清潔な寝床があるけどチュウリンちゃんがせめて食事が貰えていればと願わずにはいられない

「どうしてこんなに差があるんだろ…　皆が同じような生活が送れればいいのに、せめてお腹を空かす子がいないそんな世の中にならないのかな……」

そんな事を考えているとウトウトしてしまい誰かが部屋に入って来る気配を感じたが目を閉じたままにすると側に寄って来ると直ぐに離れて行き部屋を出って行った。

多分これで侍女さんも朝まで来ないと思う

寝台から起き上がり、家から持って来た袋から服を出そうとすると真珠の髪飾りも出てくる。

「忘れてた。　侍女さんにこの髪飾りの事聞こうと思ったんだ」

侍女さんは気さくな面白い人達なので色々な事を教えてくれるし物知りだ

サンおじちゃまは堅物だし、母様には聞けない

きっとこの髪飾りに母様と父様の思い出話しが聞けると期待して持って来たのに失敗

この髪飾りとお揃いであの耳飾りを何かの記念に送ったのだろう

仕方無いので服の懐に仕舞う

着替え終わるとハクがいない事に気付き、寝台を見ると枕の上でスヤスヤ寝ていた。

「ハク、起きて　一人じゃ心細いじゃない」

「キィ～？」

寝ぼけた様子のハクをそのまま無理やり頭に乗せて、音を立てずに扉を開け薄暗い廊下を通りサンおじちゃまの部屋に入るのに成功

「凄い！　レイカって間諜の才能あるかも」

「キッキ～」

灯りを付けると感づかれるから手探りで戸棚を捜すが方向が分からない

「ハク、戸棚がどこか分かる？」

駄目もとで聞くとハクが頭から飛び降りてついて来いというように鳴く

「キィー」

「分かるの！」

闇の中に白く小さな影が動く方に行き、動きを止めた場所にたどり着くと確かに戸棚があった。

「すっごい！！　偉いよハク」

「ウキィ～」

褒めてあげると喜ぶかのように鳴きレイカの頭にとび乗る。気付かれない内に戸棚を開けて入り込み直ぐに閉めるて又開ける。

開けるとやっぱり真っ暗だがそこが家の台所だと暗闇に慣れた目には分かる。

「おお～　本当に不思議？　サンおじちゃまもこっちの方を使えば良いのに何でわざわざ瞑道を通るんだろう？？」

台所の灯りと火は既に落されているが居間からは人の気配がした。

（　いいハク、今から声も音も出しちゃダメよ！　）

（　ウッキィ　）

これから父様の顔を見れるかと思うと緊張をして来る。

心の中でどうか若くてカッコいい男の人でありますように祈りながら、扉の隙間を静かに開けて僅かな隙間から覗き込むとハクも真似

をする。

居間を覗くと母様の後姿が目に入りその向こう誰かいるようだが母様の陰でよく見えない

母様退いてくれないと見えない！　と文句を言いたかったが大人しく待つしかない。

なにやら途切れ途切れに会話はしているようだがよく聞きとれず段々イライラする。

もう少し開けようかと動かそうとした時、母様が立ち上がり向かいの席に廻り込むと何故か男に手を引っ張られ膝の上に座らされる。

そして漸く父親の顔を目にする事が出来た。

（これが父様！！）

目の前の父様ははフェンおじちゃまより素敵だった……紫色の髪が波打ちレイカと同じ金の目が母様を見つめて耳飾りを確かめるように触っている。

（なんて綺麗な男の人！　あの人がレイカの父様で母様を閉じ込めているの？）

信じられ無かった

母様を愛おしそうに見詰めるあの人がそんな酷い事をしているとは思えない

母様も決して嫌がってはおらず、仲が良さそうにさえ見える。

訳も分からず見続けていると

恥ずかしそうに頬を染める母様に父様が口と口を合わせる。

こっこれは……

口付！！！　／／／

まさか親の濡れ場を見るとは思わなかったレイカは慌てる！

見てはいけない物を見てしまい、後ろに後ずさった途端何かを踏んで尻もちをついてしまう

ドッン

「キャッ！」

声を出してしまい両手で押えるが既に時は遅かった

「誰だ！！」

母様じゃない鋭い声が耳をつんざくと同時に扉があけ放たれる

バン！！

見上げると凄まじい形相で睨み降ろす金の目とぶつかる。

「ひぃー　……」

怖い！

なに…この人怖すぎる

まるで氷のよう冷気を感じ、背筋が凍るという実体験をしてしまい声も出せない

「何故　子供がいる！？」

まるで信じられない物でも見るように冷たく言い捨てる。

そこへ母様が割り込んでレイカを見て青褪めて驚く

「レイカ！！！　何故いるの……」

母様は覆いかぶさりながら隠すように抱きしめてくる。

「アオイ！　その子供は何だ！！」

「レイ、今夜は何も聞かず帰って…お願い」

厳しく問い詰める男の人に弱々しく懇願するが、母様を引きはがそうと腕をとってくる

「離れろ！」

「嫌！」

レイカを泣きながらきつく抱きしめて尋常では無い様子

『あまり顔を突っ込みすぎると親子共々殺されるかもしれないぜ』

テジャの言葉を思い出す…

レイカのせいで母様が殺されるの！？

そんなの嫌！

「母様に酷い事しないで！！」

思わず叫ぶとより一層空気が凍りつく

シーン　……

沈黙が続く中、男が地に這うような低い声を響かせた。

「どう言う事だ　何故アオイを母と呼ぶ……　誰の子だ！」

「酷い…　私を疑うの、レイカは貴方の子」

しかしその言葉により一層怒りを顕わにする男

「余の子だと！　まだ不義の子の方がましだ！！」

あまりの言葉にレイカも恐怖に慄きながらも衝撃を受ける。

レイカはいらない子供？！

母様は更にきつく抱きしめながら震えている…

「お願い、この子を見逃して」

「ならぬ！　余の血は誰にも受け継ぐ事は許さん…その子を寄こすのだ」

「何をするの…」

「消す」

まるで描かれた絵を消すかのような言動だ

「そんな事させない！　殺すなら私も殺して」

「離れろ、アオイ！」

何故こんな事になったの？

父様の顔を見たかっただけ

こんな事になるなら父様の存在なんか知ろうと思わなかった

『親子共々殺される』

テジャの言葉は半分合っていたけど

殺されるのはレイカだけ

母様は殺されないのがその様子わかる。

そして必至に母様を引き離そうとする父様は焦れたようにとうとう神力を放ち、圧倒的な力に成す術もなく母様と引き離されてしまう

母様は男の腕の中に引き寄せられるのに対しレイカは床に打ち捨てられる。

「レイカ！　放してレイ！　殺さないで！！」

悲痛に叫びながら男の腕でもがいているが、微動だにしない男の右手に忽然と剣が握られている。

殺されるんだと漠然と思ってしまう

レイカと同じ金の目が憎々しげに見降ろす。

「確かにその瞳の色は余の血を受け継いでいるようだが人間として生まれようが生きる事は許せぬ」

「人間だから短い生を生きさせてあげて！」

「そなたの願いでも聞けぬ」

その遣り取りを静かに聞く

テジャはレイカに流れる龍族の血を憎み

この男はレイカに流れる自分の血を憎んでいる

母様やファン様達以外は皆レイカを嫌う

何故？

レイカは生きてはいけないの

「レイカ、逃げてーー！！」

悲痛な母様の声が聞こえ、ハッとする。

今の状況が受け入れないし、死ぬ訳にもいかず母の言葉に従う為に
立ち上がり戸棚に逃げ込もうとするが、体が震え蹲いて転んでしまう

ズッテ！

「きゃーっ」

「レイカ！早く逃げなさい！」

男の剣を握る手に必死にしがみ付く母だったが、力の差は歴然

「邪魔だ」

母様は壁に投げ出され、男は剣を振りあげる。

「余の血を受け継いだ事を呪うがよい」

勝手な事ばかり言う男に段々怒りが恐怖を打ち負かし、せめて一言
言い返したくなる

なんて自己中心で、何様だ！！

「うるさい！！　私だってあんたの血なんかいらない！　父様なんかじゃない！！」

レイカも思いっきり睨みつけてやるが、冷たい眼差しはそれをものともしない

「余だけを恨むがよい」

そして剣をレイカ目掛けて振り降ろす

「駄目――――」

「アオイ！！」

その間に母が突然割って現れ、レイカを庇おうとする

ガッキィーーーン！

そしてレイカの目には男の剣を体に受ける母様の姿が崩れ落ちる

母様が斬られた？

「嫌――――――――ぁー！！！！！！」

自分の口から出され絶叫が耳をつんざくと同時に光をレイカを包んだ

母様死んだの？！

レイカのせいで

あまりの絶望に意識を失い、自分に今起こっている異変に気付かなかった。

ピッカー！

レイカの光は閃光となり龍王の目を焼く

「クッ！！　何だこの光は」

光が止み目を開けると床に倒れるアオイしか見当たらず、子供の姿は忽然と消えていた。

「逃げられたのか？　何処に……」

仕留め損ねた事を悔やみながら龍王は兎に角アオイを抱き起こす。

「目を覚ませアオイ」

アオイに呼び掛けるが反応が無く気を失っている。

そもそも龍王の伴侶であるアオイは不可侵の力で守られ、龍王でさえ傷を負わすのは難しく、剣で斬られたように見えたが実際には衝撃で気を失っただけなのだ

「アオイ！　アオイ！」

何度か呼び掛けると漸く意識を取り戻す。

「レイ…　？」

「体は大丈夫か？」

「ハッ！　レイカは！　レイカをどうしたの！レイカを返して！」

責めるように龍王の胸を叩く

「あれならこの世から消えた」

「消えた？」

実際は目の前から消えたのだが、今まで子供の存在を隠していた事や子供の名ばかりを口にするので口惜しかった。

アオイがどう取ろうと構わず言ったのだ。

「そっそんな……」

顔を蒼白にさせハラハラの涙を流す

その目は虚ろでまるで何も見ておらず、独り言のように呟く

「何故…　レイカを…　あの子は何も悪くないのに…」

「アオイ…」

「貴方を愛したかったのに……　レイは私に愛させてもくれない…」

「アオイ？！」

「もう疲れたよ……　もう生きていたくない…」

「アオイ！」

そして眠るように気を失う

龍王はアオイが呟いた言葉に驚愕していた

アオイが自分を愛そうとしてくれた事に驚き歓喜し、もう一度起こそうとするが止める。

そのまま寝室に運び一緒に横たわり寝顔を楽しむ

「アオイ……」

子供の事は気に掛かるが神力を持たない人間の気を探るのは不可能だ

だがあの容姿ならば捜すのは容易く感じほっておく事にする。

今はアオイが目を覚ますのを待つのだった。

親の情が薄かった龍王は知らなかった。

子を亡くした親の気持ちを
己のした事の残酷さを
それに気付くのも直ぐ間近
そして知るだろう
愛しい者を失う絶望を
アオイの悲しみの深さを

崩壊（後書き）

王様やっちゃいました……多分、王様は嫌われキャラ？1です。

「龍王の伴侶」で第二部の裏話をちらほら載せるので宜しかったらお読みください。

迷子

アオイは暗闇の中体を丸め泣いていた。

レイカ……ごめんなさい

ファン様の言う通りもっと早く手放せばあの子を失わずに済んだ

私の我儘のせいで、わずか五歳で娘の生涯を終わらせてしまう

なのに自分が生きているのが辛い

死にたい

レイ

レイ……酷い人

とうとう貴方は私に愛させてくれなかった

愛したかったのに

いいえ…本当は貴方をもう許して愛していたのに

でももう疲れてしまったよ

レイ…可哀想な人

望めば何でも手に入るのに

私の愛も

初めから拒絶し諦めながら自分の気持ちを押し付ける

結界の家に閉じ込める事も

おじいちゃん、おばあちゃんを巻き込んだ事も

無理やり抱く事も

全て許したけど……レイカを殺した事は絶対許せない

私もレイカと死にたい

死ねないならせめて永遠に眠りたい

レイカ

うっう……　ヒック　うっうう……　シクシクシク……

意識の底で涙を流し続けていると金色の光が辺りを照らすと同時に

一人の少年がアオイの前に忽然と立っていた

『その願いを叶えてあげるよ』

『誰？』

アオイが顔を上げるとそこには壮絶な美貌を湛えた少年が立っている。

金の髪に金の瞳が神々しくも輝いているが今のアオイには何も感じない

『娘が会いに来るまでゆっくり寝ているといい』

『レイカは生きてるの！！』

『元気だよ』

アオイは疑う事無くその少年の言葉を信じた。

『あっあー　有難うございます！』

『僕が助けた訳じゃないから感謝されても困るんだけど』

レイカが生きていると聞き精気が戻り一刻も早くレイカに会いたくなる。

『レイカを捜しに行かないと！』

『それは無理』

『えっ？？』

『言っただろう……娘が会いに来るまでゆっくり寝ていなさい』

少年の言葉に拒否しようとしたが光る金色の瞳と視線が合った途端意識が沈むのを感じる。

『いやだ…レ・イ・カ……　』

少年は倒れ込むアオイを闇の褥に横たえる。

『君という不確定要素のお陰で楽しくなったよ。此方こそお礼を言いたいくらいだ」

少年は眠るアオイの額に唇を落とす。

チュッ！

『有難うアオイ、次に目覚める時に待ち受けるのは絶望か至福…どちらだろうね？」

少年はクスクス笑いながら闇の中に消えて行った。

「レ…イ…カ…　　」

母様……？

母様お腹すいた。

唐揚げは出来てる？

今夜はレイカの大好きな唐揚げ作って待ってるって言ってたから楽しみにしてたの！

母様？

何故返事をしてくれないの

「母様！？」

パチリと目を開ける。

？？？？？？？

「夢？」

辺りは薄暗く何故か体のあっちこっちが痛む…良く見れば地面で寝ていたようだ。

「へっ？レイカなんでこんな所で寝てるの？？」

辺りを見渡すとうっそうとした森の中

「！？　何でこんなの所にいるの？？？」

「ウキッキィ？？」

横からハクの声がしたと思うと頭に重みを感じる。

「ハク、此処が何処だか分かる？」

「キッキ～？」

どうやら分からないらしい

確かファン様のお屋敷にいて……

それから戸棚で家に戻って……

それから

「えっ？！」

！！！

「そうだ母様が父様に斬られ……　」

思いだしてしまった

「ひぃ――――――っ　母様が…母様が死んじゃった!!　早く家に帰らないと!!」
一気に気が動転して方向も分からないのに走り出す。

「母様!　母様!!　ヒィーェエーン　エーェンーーー」

泣きながら訳も分からず走り続け、木の枝や葉が擦れるため服は破れ顔も擦りキズが出来るのも構わずひたすら走り続けるが、森は何処までも続き抜ける事が出来ずとうとう力尽き倒れる。

ビッシャッ!!

顔から倒れ込み鼻の頭やおでこをぶつけるが痛みより母様が死んだ事が悲しくて、其のまま大声で泣く

「ゴメンなさい…ヒック　レイカのせいだ…　エ―ン　エ―ン　ウエーェン……」

体中の水分が抜けるほど泣く

ここが何処なのか

どうしてこんな森にいるのかどうでも良かった

母様がいないならこのまま泣き死んでしまおうと思っていたが、人間そう泣き続けるのにも限度があると知る

いい加減に涙も枯れ果て頭もボーッとして仰向けになり上を見ると木々の間から青空が見え、目が覚めてからかなりの時間が経ったようだ

きっとこのまま寝ていれば肉食獣か妖獣に食べられて死ねる
死んだらきっと母様に会えるはずだよね
目を閉じてその時を待つ
どうせ足もボロボロで歩けないし食料も水も無ければこの深い森で生きるのは難しい状況だ
「……」
フー　フー　クン　クン　フー
何かの鼻息が顔に当る
ハクかな？
目を開けると目の前にはこげ茶色の大きな獣の顔がレイカの顔に匂いを嗅ぐように鼻を近づけていた。
「！！」
それは大きな立派な狼だった。思ったより早い展開だが早い方が楽かもしれない
しかし狼は一向に食べようとはしない
「レイカを食べに来たんでしょ？　食べるんなら息の根を止めてからにして」

流石に生きたま食べられるのゾッとする

目を瞑りジッとしていると狼が話しかけてくる。

「変な奴　ロウに食べられたいのか？」

「うるさい！　レイカは母様のいる瞑界に行くんだから、さっさと殺しなさいよ！」

泣きすぎたせいか声がかすれ自分の声じゃないみたいだった

「子供かと思えば婆さんみたいな声　クックック」

なんて失礼な狼

？？

そもそも狼って話せるの？

体を起こし狼を見るとその巨大さが分かる。小型の馬程ありレイカなど一呑みで食べてしまいそうだが恐怖は湧かなかった。

「お前、顔も酷いぞ…　それにしても珍しい髪の色だな初めて見た」

声は狼ではなく更に上から聞こえたので顔を上げると狼の背に乗る一人の少年がいた。

髪は真っ白で斬ばらな短髪に少し浅黒い肌に吊り上がった目には赤茶色の瞳が輝いている精悍な顔立ちの十歳前後の少年

「あんた誰？」

「お前こそ何だ？」

お互い睨み合うが、レイカは母親の事でとても言い合う元気もない

「どうでもいいよ……それよりその狼にレイカを一呑みで食べるように言って」

「ロウは美食家だからお前は食わんぞ」

なんて贅沢な狼なんだろうと思ったが、食べないのなら用はない

「ならどっかに行って…　そんな大きな狼がいたら他の獣が寄って来ないから」

そのままもう一度寝ころび空を睨む

「お前、普通は助けてくれだろう…変な奴。　迷子じゃないのか？」

少年は戸惑っているようだがレイカには関係ない

早く母様の所に行きたかった。

母様を思うと、出尽くしたと思った涙がまた流れる。

すると何かがレイカの顔の側にやって来てその涙をペロペロ舐め出すので、横目で見るとハクが慰めるよう懸命に涙をぬぐっている。

「ハク…」

「そいつが俺達を此処に連れて来たんだぞ…　なんで死にたいか知らないがそいつを残していくのか」

ハクが！？　そういえば悲しくてハクの事を考えもしなかったのにハクはレイカを助けようと人を呼んで来てくれたの…

「レイカが死んだら寂しい？」

「キィ～」

「ゴメンねハク…　でもレイカは母様に会いたい…もう疲れたから眠らせて…」

レイカは身も心もボロボロで生きる気力が湧かずそのまま気を失うように眠ってしまった。

「キィ～　キィ～　キィ～　キィ～キィ……　」

ハクは気を失うレイカに取り縋り悲しげに泣き続けるのだった。

「なんか面倒な奴を拾ってしまった」

ロウの背にさっきのガキを乗せ自分も飛び乗る。

白い子猿はガキにへばりついて心配そうに顔を舐めたり健気で可愛いがガキの方は涙と鼻水とドロドロでしかも生意気だが、一応小さな女の子をあのまま見捨てるのも後味が悪い
そもそもこの危険な妖獣の森にガキが一人いるのは不自然で最初は妖獣の類かと警戒したがただの小汚いガキ

妖気も神気も感じないただの人間としか思えない

しかしこの黒髪は凄い、これなら多少不細工でも少しの間だけなら側に置いといても良いかもしれない。　飽きたらそれなりの家の養女に世話をすればいいだろう

「行くぞロウ！　屋敷までゆっくり行け」

「ウォーン」

午前の勉強をさぼって帰りにくかったが、こいつのお陰でごまかせそうだ。

一時ばかりロウが走ると俺の屋敷が見えてくる。

「インフーの奴怒ってるだろうな…」

屋敷の門の側に行くと銀色の髪の青年が怒りを顕わに立ちくして、少年の姿を確認すると逃がすまいとばかりに駆け寄ってくる。

「フォンフー様　貴方という方は大事な勉強をさぼるとはどういうつもりですか！！」

予想通りにこめかみに青筋を立て怒ってくるので、さっきのガキを抱き上げインフーに向かって放り投げると反射的に受け止めるインフー

ドッサ！

「なっ何なんですか！！？？」

「そのガキを拾ったから、世話を頼む！」

拾ったガキを押し付けサッサと屋敷の中に入り玄関の前に行くとロウから飛び降りると同時に家令が扉を開ける。

「お帰りなさいませフォンフー様」

「うむ、腹が減ったから食事の用意をしろ」

「はい　かしこまいりました」

食堂に入りドカリと座り食事が来るのを待つが、その頃にはすっかりレイカの事を忘れていたのだった。

一方、レイカを押し付けられたフォンフーの世話係のインフーは主から預かった物を見ると小さな少女、しかも驚くべき事に見事な黒髪をしていた。容姿は泥や擦り傷でよく分からないが顔が腫れてい

るせいか少々残念な顔が伺える。

「人間の少女など何処から拾ってきたんですか…困ったお方だ」

フォンフー様はこの白虎国の虎王様の第八皇子であるが、末っ子のせいか自由奔放にお育ちになり、八年前から世話係兼教育係を仰せつかったが苦労が絶えず最近は胃が痛い

溜息をつく毎日

兎に角今はこの少女を何とかしなくてはいけないだろう。

「取敢えず侍女にお風呂に入れて貰いましょう」

「ウッキ」

突然、猿の声が少女から聞こえ驚く

「猿??」

良く見ると少女の服の中から白い猿が顔を出していた。

「白い猿とは縁起が良い！　フォンフー様がこれで真面目になれば良いのだが」

つい自分の願望を願ってしまう

レイカを運びながら屋敷に入り、サッサと侍女を捜してレイカを預けたかった。

玄関から入ると丁度古くから仕えている侍女頭が通りかかったので呼びとめる。

「チェンさん、この子をお風呂に入れて欲しいのですが」

「まー　インフー様その子供はいかがなされたのですか？」

少しふっくらとした茶色の髪に緑の目の年配の人間の女性だが良く気がつき優しいので、侍女達や使用人に慕われている。

「フォンフー様がどこかで拾って来たようです」

「あらあらー　フォンフー様らしい　オホッホッホッホ」

「おまけに白い猿もいますから気を付けて下さい」

「白い猿！　それは良い事の前触れでしょう。　大事に扱いますので御心配なく」

少女を侍女頭に受け渡し、肩の荷が下りる。

小さい子供など世話をした事がないので扱い方が分からない

いや、フォンフー様の扱いさえ右往左往している私には手に余る。

此処は子育てのベテランのチェンさんに全てを任せよう

それよりこれからフォンフー様にお説教をして午前の勉強の遅れを取り戻さねばならない

急いで主がいるであろう食堂に向かうのだった。

食後は昼寝をしようと思っていたらインフーの奴に監視されながら午前中の勉強をさせられている。　ハッキリ言って俺に机に向かって大人しく勉強しろというのが土台無理な話
上の兄達が優秀なのが揃っているんだから末子の俺が頑張らなくても国は安泰

虎族でも王の息子である俺は遊んで暮らせる程の財産も既にあるんだから、勉強も程々で済ましても誰も困らない

インフーは生真面目すぎるのが欠点なのだ

俺なんて父王も期待せず好きにさせてくれており、窮屈な王宮暮らしが嫌だと言えばこの王都から離れた離宮を与えてくれた……所謂厄介払いとも言う

王都で問題を起こされるより田舎で好きにしろという感じなのだがインフーは分かっていない、俺より数十年も生きている癖に純粋な子供のような所があり臣下の鏡のように職務に忠実だ、俺のせいでこんな田舎暮らしをしているのに文句ひとつ言わない良い奴ではあるが

「フォンフー様　手元がお留守ですよ！　それでは何時まで経っても終わりません！」

「うるさい、分かってる」

もう少し肩の力を抜いてくれれば俺も楽なんだがと考えていると侍女頭が入ってくる。

「フォンフー様お勉強中に申し訳ありませんが、少しお時間を頂きたいのですが宜しいでしょうか？」

何時もは朗らかにしているのに、なにやら困惑している感じである。

「チェンさん、後にして下さい」

真面目なインフーが横から口を出す。

「どうした、話せ」

俺としては少し息抜きもしたかったので話を聞く事にする。

「先程の少女の事なのですが、服を脱がし風呂に入れたところ…これが服に入っておりました」

そう言い掌に握っていた布包みから一つの髪飾りを取り出す。それは真珠を数十個あしらい花を模った髪飾り、一目見ただけでそれは相当の価値があり、これだけで十年は遊んで暮らせる代物だ

少女と言われ最初はピンとかなかったが直ぐにあの小汚いガキだと

思いつく

「あのガキ何処からか盗んできたのか？」

「それともう一つ、丸い石のついた金の鎖の首飾りをしているのですが、その石というのが道端にある石と変らない変哲もない石なのです」

「何だそれは…？　持っているなら見せろ」

「それがー　外そうとすると白い猿が突然怒り出し噛みつこうとするので止めておきました」

あの大人しそうな子猿が威嚇するとは真珠の髪飾りより価値があるのか？

興味が湧き後で見に行く事にする。

「それとこれが一番重要なのですが…あの少女は人間なのでしょうか？」

「ただの人間のガキだ、そうだな？」

一応インフーにも確認をとる。

「はい、神気も妖気も感じませんでした。　どうしてそう思われたのですか？」

「お風呂に入れている時に気がついたのですがあの子のお腹にお臍が無かったので驚いてしまった訳です」

「「　へそ?!　」」

へそが無い人間などいるのか?!?!?

へそは母親の胎盤と胎児と繋がり其処から栄養を貰っていた時の名残のはず

「本当に無いのか!?」

「はい、ツルツルでございました」

侍女頭も困ったように答える。

「へそが無いという事は他の三神国の卵を産む神族しか考えれませんよフォンフー様」

我々、虎族は赤子で産むが他の龍族、亀甲族、鳳凰族は卵を産むのでへそが無いので密かに虎族は人間のように子を産む事をバカにされている。全くあほらしいい

「だが…どう考えても人間だぞアレは」

「そうですね…」

なにやら迷子や親に捨てられただけのガキかと思えば、かなり訳有りのガキを拾って来たらしい

ここの暮らしにも飽きて来たので、何か面白い事が起きそうで心が沸き立つフォンフーだったが、インフーには他の神族の面倒事に巻

き込まれてしまったようで更なる胃の痛みを感じる。

取敢えず三人は少女が目覚めるのを待つ事にするのだった。

後宮は騒然としていた。

「ファン様！！！　大変です！　一大事です！」

朝食を取るため既に席に着いており、レイカを呼びにやった侍女が珍し取り乱しながら食堂に入ってくる。

「騒がしいですよ。　レイカ様に何かあったのですか？」

侍女は顔を蒼白にさせファンニュロンに驚くべき事を告げる。

「レイカ様がいらっしゃらないのです！　後宮内も庭園至る所をお探し致しましたが見当たりません！」

信頼する有能な侍女の言葉を疑う訳では無いがつい問い返してしまう。

「本当ですか？」

「残念ながら」

ファンニュロンは少し考え込むように目を閉じ、目を開けると同時に侍女に指示する。

「念のため三人でもう一度確認しなさい。　私は結界の家を見て参ります」

「「「　はい　」」」

ファンニュロンは嫌な予感が脳裏によぎる。

レイカ様は人間のため気配を探る事が出来ず、アオイ様の異界人の血を引くせいなのかこの世界の理からかなり逸脱した特殊な力を持つようだ。

力と言って良いのか分からないがレイカ様に神力が効かなというより吸収して消える不思議な現象が起きる。まだ三歳の頃酷い風邪を患いサンを遣わし神力で癒そうとしたが反対に全ての神力を吸い取られ、その結果サンが倒れてしまい一日その場で寝込んでしまったほど。幸いレイカ様は人間の薬を取り寄せ回復されたが卵の時より異常に神力を欲する御子様だった。赤子の頃は後宮で預かる時など侍女に添い寝をさせると翌朝は神力を枯渇した瀕死の状態……神力を吸い取る無限の壺でも持っていらしゃるのかと恐ろしさを覚えたくらいだった。

　外傷も同じく癒せないので預かる時は大怪我をしないよう細心の注意を持ってお世話したものだが、異界人のアオイ様は神力などで病気も外傷も癒す事が出来るので異界の血の所為では無いのだろうが原因が全く分からない

もしレイカ様が何らかの力を使い結界の家に戻られ陛下と鉢合わせになったなら最悪の事態が起こっているだろう。レイカ様に神力が効かないが、剣なら傷を負わせる事が出来、最悪死んでいないと思

いたいが先ずは確認をしてから判断をするしかないだろう

急いで瞑道を潜り結界の家にたどり着くと陛下の只ならぬ気配が寝室からする。

いつもならアオイ様の家を夜明け前には出て王宮に戻っているはずが今朝に限ってまだこの家に留まっている

レイカ様の失踪

最悪の符号が合いそうだ

このまま立ちすくんでいる訳にもいかず気が進まぬが寝室の陛下に声を掛ける。

「陛下、ファンニュロンで御座います。其方への入室をお許し下さいませんか」

「入れ」

「！！」

珍しくファンニュロンの顔に驚愕の表情が浮かぶ、まさか陛下が入室を許可すると思わなかったのだ。ハッキリ言ってレイカ様の失踪を知った時より驚く事態

更なる不安が襲ってくる。

「失礼致します。陛下」

許可されたが先程よりも、もっと入る気が失せてしまったが入室するしかない

扉を開けると寝台でアオイ様を抱きしめながら、凄まじい殺気を込め睨みつけてくる。

普通の者であれば龍気に充てられ正気でいられないだろう

「あの子供は何だ！」

やはりレイカ様はここに戻られ陛下に会われたらしいが、血の匂いもせず遺体も見当たらない…無事なのだろうか……

「既にお分かりだと思いますが陛下とアオイ様の御子様です」

「何故余に知らせなかった！」

「それは陛下が良くお分かりになるのではありませんか」

陛下を見返しつつアオイ様を見やる

アオイ様が可笑しい……先程より何の反応を示されない、気を失っているにしろ、これだけの場で目を覚まさない事などあろうか？

「それでも余に教えるべきだ、そなたは余の臣下であろう！」

「だからです。　むざむざ龍王を産む血筋を絶えさせる訳にはいきませぬ、しかも私が知ったのも卵を産む直前で我が子の誕生を喜ぶアオイ様からどうして子供を取りあげれましょうか！」

「アオイは喜んで……」

信じられないように呟く龍王

「それよりアオイ様はいかがされたのですか、先程より御様子が可笑しいようですが？」

アオイ様の様子を聞いた途端に怒気が消え顔を青ざめさせ、気が萎むように圧迫感が下がる。

「アオイが目を覚まさぬ……幾ら呼びかけても神力を与えても反応しない……どうすればよいのだ…教えてくれファンニュロン」

初めて聞く陛下の弱々しい声に驚きながらも側によりアオイ様に触れる許可を取る。

「アオイ様に触れても宜しいでしょうか」

「よい」

間近で見るアオイ様は人形のように無表情に目を閉じて、まるで時を止めているかのような印象を受けた。

額にに手をやり深層意識に入り込みアオイ様の意識を探る。

これを出来るのは僅かな者のみで青龍国では私ぐらいであろう、神力が強い者が人間に行えば精神が崩壊しかねないが無駄に長く生きる私には造作もない術

意識をアオイ様の中に滑り込ませ、呼びかけるが何の反応も返って来ず更に深い闇の中を探る

以前も陛下が最初に無理やり抱いた後、経緯を調べる為に入った事がある。

あの時はアオイ様は深い絶望に陥りながらも気丈に心の深淵に落ちてはいなかったが、今あるのは静寂のみ。　悲しみも絶望、怒りも何もない

『アオイ様、御返事を下しませ。ファンニュロンです』

呼び掛けるが応答は矢張りない

更なる深淵に潜って行くと漸く金色の光に包まれ横たわるアオイ様を見つけるが目を閉じ意識を遮断している。

『アオイ様』

意識体に触れた途端に凄まじい光に弾かれてしまう

ビッシ！！！！

「キャアァーーーーーーーー」

まさか意識を弾かれるとは考えなかったファンニュロンはそのままアオイの体から追い出され自分の体に強制的に戻されてしまった。

ガック！

ファンニュロンの体が崩れそうになるが、直ぐに体を立ち直すが体は冷や汗でぐっしょりと濡れ顔色も悪い

しかしそんなファンニュロンの様子にも気遣う事もなく龍王は直ぐにアオイの状態を聞く
「アオイはどうなっておる」

「完全に意識を閉ざされこのまま目を覚ます事は無いでしょう。アオイ様の心は深く傷つき全てを拒絶しておられます…一体何をなされたのですか?」

ファンニュロンは嘘をついた。

確かにアオイの心は深く傷ついているが人間のアオイがファンニュロンの意識を弾くなどあり得ない

何者かがアオイ様を目覚めさせないよう術を施している。

その術者に心当たりがあるが今その事実を言えば更なる修羅場が想定でき口を閉ざす事にしたのだ。

「仕方無かった……余は逆上して子供に斬りかかりそれをアオイが庇った…」

アオイ様の目の前で殺そうとは、なんと愚かな

「それでレイカ様はいかがなされたのですか?」

「分からぬ……誤ってアオイを斬った瞬間に悲鳴と共に閃光が走り消えた」

レイカ様の目の前でアオイ様を!!

その時の幼いレイカ様の気持ちを思うと痛ましい

しかしこの結界を抜けるには瞑道を使うしか無く、あらゆる力を無効もしくは跳ね返す壁を超えるのは不可能なはず

その壁を越え一瞬で結界の外に移動するとは

まさに予想外の御子様としか言いようが無い

「本当に消えたのですか！？」

「そうだ…そして気がついたアオイは余の言葉を勘違いし、子供が死んだと思い込んだようだ」

「そして絶望して現在に至るのですね……」

眩暈が起きその場で倒れたくなる。

どのような言い方をしたのかは知らないが、思わずこの愚かな王を虚無の深淵に突き落としたい衝動にかられたが龍王の顔を見て息を呑む

「！！」

ファンニュロンが目にしたのは、横抱きにしていたアオイ様をきつく抱き抱え込みながら涙を流している姿！

「余が悪かったのだ……アオイはどうすれば余を許してくれる……」

陛下が泣いている！！

驚愕のあまり腰が抜けそうになる

実の母を手にかけその死体の側で泣きもせず立ちすくルェイロンを発見した時は大きく欠損した病んだ心に恐怖さえ覚えたが、アオイ様のお陰で少しは人間らしい感情が芽生えたようだ

多分、陛下は涙を流している事に気付いてさえいないだろう

この愚かな王に幸せになる最後の機会を与えようとファンニュロンは決意する。

「簡単な事です。アオイ様にレイカ様が生きている事を示すしかありません」

「余に子供を認めろと言うのか」

「いい加減に過去の亡霊を断ち切りなさいルェイロン！　スイリンは可哀想な娘でしたが狂っていました。狂人に引きずられる己まで狂って愛するアオイ様まで狂気に巻きこむのですか」

「余はあの男が憎い！　母を狂わせ地獄に落としたのだ、母は悪くない！　そしてあの男の血が流れているかと思う事さえ自分を消したい」

「その手で殺した男の事などいい加減忘れなさい。復讐は終わっています」

「無理だ　あの男の血が残る限り」

「分かりました。時間を差し上げましょうルェイロン……これより青龍国の政務を私が代行しますので、眠るアオイ様の横で考えなさい」

「考える」

「過去に囚われたまま生涯を終えるかどうかです。一年の猶予を差し上げますので、きっちり答えを出すのです。最後に一言…貴方が変わらなければ何も変わらない事を覚えておいてください……後は一切口出しは致しません」

ファンニュロンは清々しい程にルェイロンに言い渡す。

茫然とするルェイロンに頭を恭しく下げる

「それではしばしのお別れです。御機嫌よう龍王陛下様」

そう言い残し結界の家を辞した。

そして龍王は眠るアオイを抱きしめたま静かに涙しながら、この結界の家に取り残されたのだった。

ファンニュロンが結界の家から後宮の自室に戻ると三人の侍女とサンジュンロンが神妙な顔で待ち受けていた。

「「「「「　ファン様！！　」」」」」

後宮中に四人の声が合わさり響き渡るような勢いだ

「お前達静かにしてください…少々疲れました」

四人を制止し椅子に座るが確かにその表情は疲労で陰って視えない事は無い

しかし常日頃見ている四人はファンニュロンの憔悴ぶりに驚き、事態の深刻さを悟った。

「レイカ様はいらっしゃったのですか？」

「まさか陛下に！！」

「もしかレイカ様になにかあれば無謀でも一矢報いますわ！」

「レイカ…　アオイ…」

「そなた達…話は後です。今はお茶を飲んでからです」

そう言われると従わざるを得ない四人達は渋々引き下がりお茶の用

意を始める。

「今日はサンが淹れて下さい」

「はい」

今日のお茶は鎮静効果のある花を乾燥させたお茶だ

用意された茶器を温め優雅な手つきで作法どうり淹れる姿と香りを楽しみながら、これからの事を色々模索していく。優秀な手駒は十分揃っているので龍王が一年…それ以上いなくても国は傾く事無く平時を保てるだろう

「どうぞファン様」

「有難う　サン」

お茶お受け取り静かに香りを楽しみながら一口飲むと漸く一息つける

この世界では国同士の侵略は禁忌だ、もしそれを破れば天帝の凄まじい怒りを買い、過去に一度だけ他国を侵略したためその国が一瞬で焦土と化し人口の三分の二が死に絶えたがその侵略をした王は今だ天領区にそびえ立つ崋山の牢獄で今だ囚われ地獄の責め苦を日々受けている。

しかし内乱には天帝は介入せず放置し勝利した者が龍王を継ぐのだ

今の時勢に龍王の足下をすくおうとする龍族はいないが用心に越したことはない…今の人間を擁護する体制に不満を持つ龍族は多いのが現状で内乱が起これば折角建てなおした財政がまたひっ迫するの

は目に見えている。

今の治世を気にいっているファンニュロンは守りたかった。

その為にも龍王の不在は知られてならない

「それではこれから、レイカ様、アオイ様、陛下の現状を話しましょう」

四人はファンニュロンの言葉を一句も聞き逃すまいと口を挿まず静かに聞き言った。

「アオイ…それではレイカは行方不明のままなのですか」

サンジュンロンは考えもしなかった状況に涙を耐え聞いた。

「レイカ様は人間ゆえに神気を探って捜す訳に行きませんので人の手で捜すしかありませ。そこでサン、貴方の夫を使い秘密裏に捜しださせなさい。　それと丞相に気取らないよう注意しろと伝えるのです」

「はい分かりましたファン様　アオイの為にも必ずレイカを見つけ出します」

そう決意を言い足早にフェンロンの職場に急いで行った。

「ファン様　何故丞相様には秘されるのですか?」

龍王が一年玉座を空けるなら丞相に全てを話すと思っていた侍女が疑問を口にする。

「丞相だからです。　今この国で陛下の敵になるとしたらユンロンのみ……陛下がアオイ様にした事を打ち明ければ陛下に対し刃を向けるかも知れません」

「あの冷静な丞相様が…」

「丞相がアオイ様を深く想っていたのはそなた達も知ってるであろう……龍族の愛は一途なのです。　その愛は深すぎ変質しやすく執愛、狂愛と言っても過言ではありません。だから恐ろしいのですよ、陛下によって深く傷つけられ心を閉ざしたと知ればアオイ様を救おうと動くかもしれません」

侍女達はハッとした

ファン様と共にこの後宮で凄まじい愛憎を見守って来たのを思い出す

「そうでした…愛に狂い身を滅ぼして行った者達を忘れていました」

「久しく後宮が静かで少々惚けていたようです」

「確かに丞相様が愛に狂わないとは言い切れません」

女達は頷き合う

「全てを収めるにはレイカ様を探し出すのが先決、結界の家がある妖獣の森は隣国の白虎国に跨っております。もしかするとレイカ様は白虎国に迷い込んでいる可能性がありますから貴女は隣国に忍びこみ密かに捜すのです」

侍女の一人に命じる

「はいファン様」

「残りの者は交代で陛下になり済まします」

「しかし丞相様にばれるのは必至、どう誤魔化しましょう？」

「大丈夫、その為にも今から丞相に会いに行って参りますから」

ファンニュロンは立ち上がり瞑道を潜ろうとした時ある事を思い出した。

「そういえばあの方が此方に来ているようです。遊ばれないよう気おつけなさい」

「「「　！！！　」」」

その時の侍女達は恐怖で引き攣っていたのを見る事無く丞相ユンロンの執務室に入って行った。

――― 丞相執務室 ―――

この青龍国で一番の激務をこなすのは丞相ユンロンだと王宮の誰もが認めていた。

しかし職務に一心不乱に励む姿はどこか儚げで側近達は心配げに見守りながら仕事の補佐に努めるしか無かった。

丞相が政務に打ち込むのには理由があり、それはアオイに対する積年の想いを忘れようとする為なのだ。

しかし今朝は思うように仕事がはかどらず、机に肘をつき物思いにふけっていた。

「陛下は昨夜はアオイ様の下を通われたのだろうか…」

何時までも女々しいと自分でも思うがどうしてもアオイ様を忘れる事が出来ないでいる。

数年前から陛下が定期的にアオイ様の下に通われているのを知り嫉妬で気が狂いそうになり、アオイ様を思い切っていない事を知った。

とうとう陛下がアオイ様を抱いた…

あの清らかな華奢な肢体を自分以外が穢したのかと思うとやるせない

相手は陛下でアオイ様は伴侶

自分が割り込むなど出来ない

名実共に陛下のものになったのだから、これでスッパリ諦められると思っていたのだが

今だアオイ様が忘れられない

手が届かないからこそより欲してしまうのだろうか

「はぁーーー」

「なかなか色っぽい溜息ですね」

「！！」

突然声を掛けられ驚くが、こんな現れる方をするのは二人おらず、女性ならあのお方だ

立ち上がり声のする方に向きファンニュロンの姿を確認する。

「ファンニュロン様お久しぶりでございます」

「ええ本当に、丞相は最近は仕事のし過ぎだと周りの者が心配しております。少しは息抜きをしなければ貴方ばかりか、周りの者も体を壊してしまいます」

一体今日は何しに来られたのだろうか、小言を言いに来たのだろうか

「申し訳ありません。　若輩のため下の者を慮るのを忘れておりました…」

「分かってくれれば良いのです」

「ところで今日は何の御用でしょうか？」

「それは余から話そう」

二度目の突然の声は陛下のものだった。

全くこのお二方は正規の入り口の扉から入って欲しい物だとつくづく思ってしまう

ユンロンは恭しく頭を下げファンニュロンも習うがその目が龍王を睨んでいるのには気付かなかった。

陛下とファンニュロン様の二人が揃ってユンロンの執務室に訪れるなど初めてである。

一体何があるのだといぶかしみながら陛下の言葉を待つ

「こ度はアオイとこれまでの詫びを兼ね一年間他国を巡る心算だ。その間の留守を頼みに来た」

「一年も職務を放棄されるのですか、それはあまりに無責任では」

冗談では無い、アオイ様といちゃつくために国を空けるだと！！

嫉妬で目の前が真っ赤に染まる

「子を成すのも余の責務ではないのか」

子供

「！！…その通りですが」

「それでは後の事は頼んだぞ」

それだけ言い残すと陛下は自ら瞑道を開け颯爽とその場を後にするのを茫然と見送るしか無かった。

アオイ様と子作りに励むだと！！！

私に政務を押し付けて

言い知れぬ怒りが捌け口を求めて噴き出し、辺りを凍てつかせ始める

「大丈夫ですか？」

ファンニュロン様の呼びかけでハッとし自分の臣下としての立場を思い出す。

「申し訳ありません…取り乱してしまいました」

「詫びずとも良い、私もまさか陛下自らお越しになり言うとは思いませんでした」

「それより先程の一年間王宮を空けられるのは本当なのですか」

「丞相には酷な話ですが漸くアオイ様も陛下に心許されたご様子なので、ここは一気に親密になる為にもあの狭い結界を出て御旅行を提案したのです」

「そうですか……分かりました。お二人の行く末のため陛下に代わ

り政務に励みます」

アオイ様があの結界から出られこの世界を回れるならきっとお喜びになっているだろう

嘗て見た柔らかな頬笑みを思い出し胸が少し満たされる。

「丞相一人が頑張る必要はありません。何時ものように陛下の身代わりは侍女が致しますが政務の方は私に回しなさいサンジュンロンもいますから大丈夫でしょう」

「しかし……」

「貴方の周囲には優秀な人材が揃っているのですからもう少し周りに頼り、手を抜くべきところ抜きなさい」

「はい」

「アオイ様は今幸せなのでしょうか」

「陛下を見て分かりませんか」

「……」

これでアオイ様に御子様がお生まれになれば喜ばしい事ではないか

今だ心がちれぢれに引き裂かれそうだが、これで思いきれそうだ

「それでは明日からの陛下の政務は此方に回して下さい」

「そのように取り計らいます」

「丞相には苦労ばかりかけますが共に力を合わせこの国を支えましょう」

「この身は当の昔に国に捧げました。如何なる事があろうと陛下にお仕えする所存です」

「私は今は貴方が心配です。きっと何時か運命の相手が現れる事を願っております」

「いいえ…私は生涯誰も娶らないと心に決めておりますからお気使いなく」

アオイ様以上に愛しいと感じる者など現れるとは思えない

子供を残す努力はするつもりだが

妻は娶らない

「ま…良いでしょう……それではこれからの事お願いします」

「はいファンニュロン様」

そしてファンニュロン様も陛下の後を追うように後宮に戻って行き、やっと一人になる事が出来た。

アオイ様が幸せならばこのまま見守るしかないのだろう

何時か後宮にお迎え出来る日が近いのかも知れない

その時は笑顔でお迎えしよう

アオイ様……何時か再びお会いする事を楽しみにしております。

ファンニュロンは瞑道を潜り、真っ暗な狭間の世界に立つ龍王を見付ける。

「やあ～久しぶりだねファン！　相変わらず綺麗だよ」

何時にも無い話し方をする龍王にファンニュロンは冷たい視線を送る。

「いったいどういうお心算ですか」

「ヤダな～ファンが困っているからチョッと手を貸して上げたんだよ」

「あれでは丞相の心を掻き乱すばかり、人の心を弄ぶのはお止め下さい」

「え～　丞相の純愛に止めを打っとくのも優しさだよ。だけど嫉妬に悶える丞相も色っぽくて思わず押し倒したくなっちゃった」

「その姿、いい加減に解いてくださいませんか」

龍王の姿でそんな話をされても違和感があり気色悪い事この上ない

ファンニュロンの言葉で龍王の姿は金色に輝き見る見る内に姿を変えて行き、金髪に金の眼の神々しい二十歳ぐらいの美青年の姿に変わる。

「ファンに合わせてみたんだけど」

チュッ！

そう言いながらファンニュロンに抱きつき額に唇を落とす。

「アオイ様を眠らせたのは天帝様ですか」

「ヤダな～　親子なんだからお父様って呼んで」

「どうなのです…お父様」

「そうだよ。　永遠に眠りにつきたいって言う願いを叶えてあげたんだ～」

「永遠に！」

「大丈夫、ある条件を満たせば目覚めるから」

つまりその条件を満たさない限りアオイ様は永遠に眠りに就く事になる

「どの様な条件です」

「う〜ん〜　ファンには特別教えてあげる。　あの子の娘が会いに行けば目が覚めるんだ、簡単でしょ？」

「レイカ様もお父様の仕業なのですか」

「違うよ。　レイカは僕の力も干渉するのが難しいから手が出せない、自分の力?で何処かに飛んで行っちゃたから僕でも居場所が分からない」

「本当ですか」

「父親を疑うの〜　可愛い娘に嘘なんかつかないよ！」

この世で最も信用できないのが目の前にいる父親なのだが、全てを鵜呑みするほど短い付き合いでも無い

「一応信用しますが…それでは、お父様のお力でレイカ様の居場所をお教え願いませんか」

「嫌だ、僕は愛しいあの子を捜すのに忙しいんだから」

「まだお母様は見つからないのですか？　今回は手こずっていらしゃいますのね」

「う〜ん　この世界を隈なく見張っているんだけど何処にも転生してい無いんだ…だけど今回の事でいい事を思い付いたから暫らくこの世界を空けるから、ファンは嵐山の者達に気お付けるんだよ！」

「嵐山を空けるなど正気ですか！！」

「大丈夫、実体は残してくから多分それで十分牽制の役目は果たすはずだから」

「お止め下さい！」

「それじゃ言って来るね～」

「お父様！！」

ファンニュロンが呼び止めるが、その姿を忽然と消してしまい引き留める事が出来なかった。

どっと疲れを感じその場に座り込む

このまま自分もこの狭間の世界で眠りに就きたい気分に堕ちいったがあの者達を救いたい

「無駄に長い年月を生きた者の務めでしょうか」

天帝の不在……他の三国の王だけには話を通しておかねばならないだろう

全く面倒事ばかり起こるのはここ数百年楽をし過ぎたのだろうか

思い腰を上げ後宮の自分の住処に戻る事にするしか無かった。

こうなればお父様が一刻も早くお母様の魂を見付け出し戻って貰う事を願うしかない

しかし……

お父様といい龍王もしかり…もっと普通の素直な恋愛が出来ないのかと疑問ばかり

神族の恋愛は厄介だと改めて思い知るのだった。

雲隠　（後書き）

ユンロン　青龍国の丞相

水色の流れる滝のようなストレートの長髪とサファイアのように蒼い瞳で青龍国随一の美貌を誇り国政第一だったが、アオイを龍王の命で迎えに行き徐々に惹かれるが龍王の伴侶なので諦める。

レイカが見つけた真珠の髪飾りと手紙は以前ユンロンが送った物で、アオイとは両想いであったがお互いの気持ちは知らないままで終わる。

希望

勉強が終わり漸くインフーから解放され、早速あのガキを見に行く事にしたが何故かインフーもついてくる。

「何だお前もあのガキに興味があるのか？」

「得体の知れない子供をフォンフー様お一人で会わす訳に参りません」

「好きにしろ…」

何か特殊な事情があるにしろ人間のガキに虎族の俺が遅れを取るはずがないのに心配症だ

屋敷の一番端にある客間に行き部屋に入ると寝台に横たわる小さな体があり、まだ目を覚まさないようだ。そしてその寝るガキの顔に張り付くように白い子猿がへばりついている。

「キッキィ～」

このガキが余程心配なのだろう

確かこのガキはこの猿をハクと呼んでいたはず。

「ハクこっちに来い、お前の飼い主を診てやるから」

すると素直に俺の方にやって来て肩に乗って来て大人しく留まる。
全く可愛い奴だ俺が飼いたいぐらいだがこの飼い主をかなり慕っているので無理だろう。

ガキの顔を見ると泥は落とされたが顔中擦り傷がありおでこと鼻の頭が真っ赤に腫らし、泣いた所為で顔全体が浮腫んで瞼もパンパンに腫れていて、本気で不細工だ

だが黒い髪は風呂に入った後の所為か艶やかに光って美しいかった。

「もう少し可愛ければな…助けがいがあるんだが」

「フォンフー様、女の子にそのような事を言ってはいけません！
傷や顔の腫れが引けば少しはマシになるはずです」

庇っているのか貶しているのか微妙な事を言うインフー

確かにこれが素顔と言う訳でないだろうと思うと元の顔が見たくなる。

「それじゃあ神力で手当てして素顔を拝んでみるか」

あまり期待せずにガキの顔に手を充てて神力を流し込んで行くがなかなか傷が治らず顔の腫れも一向に引かないままである。

「？？」

「フォンフー様何をなっさてるのです？　いくらこの子が可愛くないからと言って神力を出し惜しみするのは酷いですよ。　私がやりますのでお代り下さい」

「別にそういう訳ではないぞ…」

取敢えずインフーに代わる事にし、ガキに神力を与えるインフーとガキを観察するが矢張りガキの傷は一向に癒えない。しかしインフーは意地になったようで躍起になって神力を与え続けるが何も変わらなかった。

「もう止めろ」

「はい…　これは一体どういう事でしょうか？」

信じられないように茫然とガキを見る俺達

全く奇妙なガキだ

「おいハク、お前の飼い主は何者だ？」

「キッキー」

思わず肩の猿に問いかけてしまうが、何故か得意そうな鳴き声をあげる。

そこへ侍女頭が医者を連れやってくる。

「フォンフー様此方においででしたか、今この子を診てもらうのにお医者様を連れてまいりました」

「そうか、早速診せろ」

「はい」

医者は俺達の前を緊張しながら通り過ぎガキを診始める。

最初は髪の色を見て驚いたようだが、直ぐに冷静に触診をし始め服の前を肌蹴させるとそこには確かにへそが無いが、それより色の白さに目を奪われる…白いと言っても真珠のような淡い温かみのある色で胸に薄桃色の小さな乳輪が見え何故か見てはいけない物を見ているようで思わず横に顔を背けると、顔を赤らめるインフーが居た

「お前…ガキの裸を見て何故赤くなってる」

「ちっ違います！　疾しい気持などありません！！」

より一層否定する姿が怪しすぎる。

「お二人ともお静かにお願いいます」

侍女頭が嗜めるように言われ静かにするしかない

簡単に診察を終えた医者は是と言って怪我もなくただ気を失っているだけだが、唇も割れかなり水分を失っているから直ぐに水分を取らせれるよう注意され、顔は少し冷やした方がいいとのことだった。

そしてこのガキの事は一応他言しないよう脅しておく

「いいか、このガキの噂一つ聞いてもお前の首を斬るぞ。分かった

な」

「ひぃー！　わっ分かり申しましたー」

と何度も頭を下げて急いで帰って行った。

「それでは私は飲み物と顔を冷やす物を用意して参ります」

侍女頭が出て行くと二人で子供を見やる。

「このガキは何処の国の人間か分かるか？」

「多分、隣国の青龍国だと思います。　着ていた服も青龍国の様式ですし恐らく龍族の庶子が妥当だと思われます」

「そうか」

インフーの言葉を聞きながらガキの首にある首飾りを手にしようとした途端ハクが怒りだした。

「キッーーーー！！」

肩から飛び降り手に噛みつこうとするので思わず振り払うと壁に激突してしまう

「止めろハク」

バッシー

ドン！

「ギャッ」

ハクはそのまま気絶してしまったようでピクリとも動かない

インフーは急いで抱き上げる。

「何てことをするんですか、白い獣は幸運を運ぶ使者ですよ。大事に扱ってください！」

「俺は噛まれそうなったんだぞー、それに一応手加減した」

しかしこの首飾りが何だと言うんだろう？　金の鎖に付いている石を見るとただの小汚い石でこのガキと一緒

手にとって見るが表面がツルツル磨いてあるようだが石っころは石でしか無い

だがフッと思い当る物がある

「なー　これって俺ら神族にある神核が石化した物に似てないか」

「そうですね…その子が青龍国なら龍石になりますが、些か小さすぎませんか？」

「確かに、矢張りただの石か」

全く不思議なガキを拾ってしまい、少し胸が躍る。

こんな面白い事が起こるなんてこんな田舎に来てみるもんだ

「そういえばフォンフー様はこの子をどちらで拾っていらしゃったのですか」

「言ってなかったかー　妖獣の森の中で拾った」

それを聞いたインフーの顔が引き攣ったと思った瞬間

「フォンフー様ーーーー！！　あれ程妖獣の森は危険だと言ったのに貴方の頭はザルですか！！！！」

部屋中にインフーの声が響きわたる。

「きゃっ！」

「キッ！！」

どうやら今の大声で一人と一匹が目を覚ました

ガキは目を開け体を起こし辺りをキョロキョロ見まわしていると目が合う

瞼が腫れている所為で目が半分しか開けられないようで益々酷い顔

「あれ？　ここは何処」

インフーの腕にいたハクが飛びかかるような勢いでガキの頭にへばり付く

「ウッキ～キッキ～」

「ハク？」

耳元で大声がして驚いてしまい目が覚めた。

何だか目が開けずらく顔も腫れぼったいような気がするがどうやら寝台の上で寝かされていたようだ

辺りを見渡すと一人の少年と目が合う

確か狼に乗っていた奴、そんなに親切な奴には見えなかったが一応助けてくれたらしい

「あれ？　ここは何処」

そもそもここは何処なんだろう？？　結界の家から何時の間にか森にいた事から変だ

「ウッキ～キッキ～」

「ハク？」

何時ものようにハクが頭に乗っかりへばり付いてくると生きている事を実感する

生きてる…

あのまま獣か妖獣に食べられたかった

母様が死んだのにレイカは死ねなかった…思わず目の前の少年を睨みつけてやる。

すると少年は顔を青ざめさせているのでレイカの迫力でビビっているようだ

「ちょっとあんた！　どうしてレイカを助けたりしたのよ、ほっといてって言ったでしょ！！」

すると少年が言い返して来る。

「その怖い顔を俺に向けるな！　不細工！」

「酷い！　皆レイカの事可愛いて言うんだから」

「嘘付け！　百歩譲っても可愛いと言えるか！」

「本当だもん！」

「嘘だ！」

「母様は世界で一番可愛いていうもん！」

「それじゃあお前の母親は嘘つきだ！」

「！！」

母様は嘘つきじゃ無い！　レイカに一度も嘘なんか言わない、綺麗で優しい世界で一番大好きだった……

それなのに！

それなのに…

悔しくて、悲しくて涙が溢れてくる。

「母様は…母様は…　違うもん…　ヒィイ～ン　ウェェ～ン　エンェ～ン」

どうして男の子は皆意地悪なの

「アラアラ？　一体何をしてらっしゃるんですか、こんな小さい女の子を泣かして！　さあ二人とも部屋から出て行って下さい」

女の人が部屋に入って来て嫌な奴を追い出してくれ、そして寝台に座りレイカを引き寄せ抱っこしてくれる。

「そんなに泣いたら可愛い顔が台無しよ」

そう言いながら冷たく濡らした布を目に当ててくれるとひんやりとした感触が気持ち良かった。

「おばさんはチェンて言うのだけれど、貴女のお名前を教えてくれるかしら？」

背中を擦りながら優しく名前を聞いてくれる。

「ヒック…　ヒック…　レイカ」

「レイカちゃん素敵な名前ね、冷たい果汁があるのだけど飲めるかしら」

そう言われると酷く喉が渇いているのに気付きコクリと頷くと手に果汁の入ったコップをもたせてくれ、一口飲むと口に甘い味が広がり、美味しさのあまり一気に飲み干そうと思ったがハクを思い出す。

「ハクも飲んで」

頭の上にコップを差し出すとハクには大き過ぎるコップを抱えるように持って飲み始める。

「レイカちゃんは偉いのね。お代りはまだあるから一杯飲んでね」

「ありがとうございます」

ハクと一緒にお代りをすると漸く落ち着いてくる。

「チェンさん、ここはどこですか?」

「ここは白虎国の端の譚州にある小さな町、わかるかしら?」

白虎国!!

レイカ何時の間に隣国に来ちゃったの?!?!

そもそも自分の家が青龍国のどの位置にあるか知らない

「レイカお家に帰らないと！　母様が大変なの！！　すぐ私を青龍国の王都に連れてって、お願い！！」

王都に行けばサンおじちゃまに母様の所に連れてってくれる。

「それは無理よ、どんなに早い獣を使っても二月は掛かってしまうのよ」

「二月も…そんなー」

そもそもレイカはなんで森にいたんだろ？

変だよね

きっとあの男がレイカをあそこに捨てたのかもしれない

殺そうとしたのに？

レイカの命乞いをして母様が助けてくれたんだろうか！？

それならば…

もしかしたら母様は怪我をしただけで生きているんじゃ！！

確かに斬られたのを見たけど死んだのを見た訳じゃない

あの男は龍族だから神力で母様の傷などあっという間に治せるはずだし、母様を殺す気はなかったように見えた。

漸く母様が生きていると希望が湧いてくる。

良かった！　母様は生きている絶対

「どうしたの？　気分が悪いのレイカちゃん」

黙りこんでいるので、チェンさんが心配げに聞いてくる

「王都にはどうやったら行けるの？」

「かなり難しいわね…　遠く離れているのもあるけど、そもそも隣国に行くには色々手続きがあるしお金も掛かるから、小さいレイカちゃんには無理だわ」

気の毒そうに答える。

お金

そういえばレイカは一度もお金を持った事が無いのに気がつく

生まれてこのかたお金を見た事すらない

実質無一文

母様の元に戻るにはお金がいるなら働くしか道はない

お金を稼がなくっちゃ

貧民街の子供が屑拾いや物売りをして小金を稼いでるのを知っている…中にはスリや泥棒する一部の子もいたらしいが殆どの子供は真

面目に働いていた。

レイカにも簡単な家事なら母様と一緒にしてたから出来る。

見ればここはそれなりのお屋敷のようだから働けるかもしれない

「チェンさん、お願いがあります」

「なあに？」

「レイカをここで働かせて下さい。　どうしてもお家に帰るのにお金が欲しいの」

「レイカちゃん…」

何故かチェンさんは目をウルウルさせ、レイカを抱きしめてくる。

「まだ小さいのに…そんな働くなんて……苦労してきたのね」

なにやら勝手に解釈され誤解されたようだ

チェンさんのふくよかな胸が柔らかくて温かい、母様は男だからペッチャンコだけとよくこうやって抱きしめてくれた。

母様の温もりを思い出す。

とても安心して気持ち良くなりだんだん意識が薄らぎ眠くなる

母様待ってて

レイカは絶対母様の元に戻るから
泣かないで待ってて
お金を一杯稼いで会いに行くから
そして何時の間にかレイカは寝てしまったのだった。

「フォンフー様、あのように小さい子供と本気で遣り合うなど如何なものかと思いますが」
呆れたように言うインフー
「五月蠅い！　あのガキが生意気なんだ。　しかもあの酷い顔で睨んで来るんだぞ不気味で一歩引いてしまった」
あんなガキはサッサとどこかの家の養女にでも出そうかと考えたがあの器量では断れるだろうな～
しかしそうなるとこの屋敷に置く事になるが仕方ない
おれの侍女として徹底的にこき使うのも面白い

不細工だが傷や浮腫みが取れれば今以上に不細工になる事はないだろう

あの生意気さを徹底的に潰してやる！

「何をニヤニヤされてるんですか。また碌でもない事を考えてらしゃるんでしょう……」

「お前、鬱陶しいぞ」

かれこれ二十年近い付き合いなので行動が読まれてしまい偶にうんざりする。

「喉が渇いたからお茶の用意をしろ」

「私は家令では無いんですけど」

ぶつぶつ文句を言いながらもお茶お取りに行く

一人で書斎に残り窓を見ると真っ赤な夕焼けが山に沈んで行くのが見える。王都を出されて既に五年近く経つが母上はどうしているだろう。

手紙の遣り取りも一度もしていない

俺の母上は父王の十番目の側室でその美貌を見染められ後宮に入ったのだが結構肩身の狭い思いをしている。あまり力のない虎族の出もあるが女好きの父王は新しい側室を次から次へと入れる為に側室の数は合計すると二百人は下らないがその殆どが寿命の短い人間の女のため実際には十人前後が後宮にいるだけだ。父王は人間の目新しい側室の元を通うのが多いので俺を産んでからは一度も渡りが無

く打ち捨てられたような存在だ。王妃と二人の側室は有力な虎族の出なので儀礼的には訪れているらしいが

美しいが寂しい女

それが母上の印象で、基本的に王の子は乳母に預けられ次は教育係に養育されるため実の母親に会うのは年に数度しか無いためか親子の情は薄い

だからだろうか

あのガキが母親を心配する姿が少し羨ましかった

きっと母親の愛情を一身に受け育ったんだろう

不細工のくせに

きっと母親も不細工だ

何時の間に夕日はもう少しで全てが沈みこもうとしている時、部屋の灯りが点けられる。

「灯りも点けずに何をしてらしゃるんですか」

「夕陽を眺めてたんだ」

珍しい物でも見るようにするインフー

俺にだって感傷的な時があるんだ失礼な！

お茶は侍女頭が持って来て、部屋の中に豆茶の香ばしい匂いが漂う

机の上にお茶と砂糖を置きながら侍女頭が話しかけてくる。

「実はフォンフー様　あの子の事ですが青龍国の王都から連れ去られたようですよ。　母親がいる王都にしきりに帰りたがり、帰るための旅費を稼ぐからここで働きたいと……あんな小さい体でなんとも健気で、どうかフォンフー様のお力で帰してあげれませんでしょうか」

涙ながらに訴える。

「確かあのガキは最初は、母親が死んだから自分もロウに食われて死にたいと言ってたぞ」

「あんな小さな子がそんな事を言ったんですか！」

インフーは信じられないように呟く

「ま……　きっと死んだ母親の墓に手を合わせたいのに違いありません、可哀想に」

涙を流しながら侍女頭は手巾で涙を拭いだす。

「兎に角あのガキから詳しい話を聞いてからだ。インフーお前が明日にでも聞き出すんだ」

「私がですか……チェンさんにお任せした方が宜しいかと思いますが」

「仮にも龍族の関係者だ、お前が聞け」

「そうでした。分かりました明日の機嫌の良い時にでも聞きましょう」

「任せた」

俺が聞いてもいいが確実に喧嘩になりそうだし、あの不細工な顔を見たくない

普通の顔に戻ってから会いに行く事にする。

「そう言えば龍族で思い出したのですが……」

なにやら言いずらそうに話す侍女頭

「何だ、言え」

「瞼が腫れていて良く見えないので確証は持てませんが、あの子の眼の色が金色に見えましたの」

「「　金色！！　」」

金の色を持つ者は天帝の血を幾らか引く事を意味し神族の中でも高貴な色として敬われている。

人間が決して纏う事がない色

金色は力の象徴ともされているのだ

我々の反応に少し引いたように、言葉を重ねる

「いえ……見間違いかも知れませんのでお気になさらないようお願いいます」

そう言ってからソソクサと部屋を辞して行った。

「本当でしょうかフォンフー様　金の瞳など」

「明日お前が確かめればいいことだ」

「気にならないんですか？」

「あのガキは驚かされる事ばかりだから今さらだ。次は龍王の娘だとでも言いだすんじゃないか」

「まっまさか……」

「冗談だ、バカ者」

冗談を言ったつもりを真に受けるインフー

真面目な教育係にもう少し遊びを覚えて欲しい

後十年で成人の儀を迎えるくせに女の噂一つ聞かない

虎族で独身なのだから人間の女と遊び放題

普通であれば人間の女を数人囲っていても可笑しくないお年頃

神族の中で性欲が一番強いとされている虎族

男として何か問題があるのかと疑ってしまう

そう言えばあのガキの裸を見て頬を赤らめていたな……

幼女趣味という奴だろうか

人の趣味をとやかく言う心算はないが

インフーへの疑惑の目を向けるフォンフーだった。

進退

翌朝目を覚ますとチェンさんが心配げにレイカの顔を覗き込んでいた。

「良かった目を覚ましたのね。昨夜から酷い熱が出て大変だったのよ」

そう言い濡れた手拭で顔の汗を拭いてくれる。

「熱？」

そう言えば体が重くて熱い

「レイカちゃん　体を起こせる？　お薬を飲んで欲しいんだけど」

コクリと頷くとチェンさんが手を借りて体を起こすとハクが膝に乗って甘えてくる。

「キュ～　キュ～」

「ゴメンね、ハクに心配ばかりかけて」

ハクの頭を優しく撫でると気持ちよさそうに目を細める

「仲が良いのね」

「ハクはレイカの妹なの」

そう言うとチェンさんは目を細めて微笑ましそうにレイカとハクを見る。

「そうなの、それじゃーお姉さんなんだから苦いお薬でも我慢できるわね」

そう言ってどろりとした緑色の薬を匙ですく口元に差しだして来る。

「えっ…」

苦い薬をそれから二匙も飲まされ口の中が苦くて大変な状態になり水を飲んだけど吐きそう…

「偉いわね。　それじゃあ御褒美にお口を開けて」

言われるまま口を開けると甘い味が広がる。何か丸い小さな玉のような物で舐めていると徐々に融けて無くなる。

「美味しい！　これなあに？」

「飴玉よ。初めてなの」

「うん」

「そう、いい子にしてたら後であげるからもう少し寝てなさい」

そう言いチェンさんはレイカを横たえさせ布団を掛けてくれ、頭を冷やす手拭を額に乗せてくれる、また後で来るからと言い残し部屋を出て行った。

ハクは相変わらずへばり付いている。

熱はそんなに高くないけど体がだるい

早く体を治して働かなくっちゃ

母様が家で待っている。

何時も当り前のように居た母様が側にいないのがこんなに寂しくて心細いなんて

ハクが居なかったらもっと寂しくて堪らなかっただろう

「ハクずっと一緒だよ」

「ウッキー」

薬の所為かまた眠くなる。

「どうでしたかチェンさん」

「やっぱり金色でした」

「そうですか…　益々ややっこしい子供だ」

「でもとても可愛い子だわ」

可愛い？

昨日見た顔はお世辞でも可愛いとは思えなかったが

「今話を聞いても大丈夫でしょうか？」

「まだ少し熱がありますから、夕方なら大丈夫ですよ」

「分かりました」

チェンさんの助言通りに夕方また訪れる事にするがあんな小さな女の子をどう扱えばいいのか分からない

全くフォンフー様も厄介な物を拾って来るから困ったものだ、いい加減こんな田舎から出て早く王都に戻って欲しいが

王宮には御兄弟が大勢いらしゃるから煩わしいらしいが、何れは国政に携わる要職に就いて欲しいのだがどちらかと言うと軍属を希望しているらしく剣術ばかりに熱を入れ勉強には見向きもしない

上の兄皇子達が優秀な所為もある

神力は御兄弟の中でもかなりの上位を示され次期虎王も夢では無い

と思うのだが

天帝様に次期虎王に選ばれる為、日々神力を高め切磋琢磨されている兄皇子達を少し見習って欲しい

本人は全くのやる気なし

教育係である私が悪いのかと悩む

ああ……また胃が痛む

お昼に目が覚めるとチェンさんがお昼ご飯を持ってきてくれた。それは野菜のスープに麺麭を浮かべた物で、塩味のあっさりした物、丸一日食べていないので消化にいい物にしてくれたらしいけど最後のお薬が苦いので、折角の食事も台無し

飴玉が無ければ乗り越えられない苦さだよ、ハクも匂いを嗅いで逃げて行く

でも薬のお陰で熱がすっかり下がり午後はとても元気になったので明日から働けないかチェンさんに聞こうと考えている。

寝台を抜け出し窓から外を見るとこのお屋敷の塀の向こうには疎らに幾つもの屋根が見えていて、綺麗に整えられた畑が広がっており農村のような所らしい

「お家では周りは森に囲まれてたから変なかんじ」

王都は建物が整然と並んで沢山の人が住んでいたし、貧民街は粗末な家が迷路のように建っていた。

「場所によって色々違うね」

「ウッキ」

どの方角に青龍国はあるんだろうか

空だけはどこから見ても同じなんだな～と思いながら、流れて行く雲を眺める

「あの雲に乗れたら空からお家探せるかな？」

「キッキ？」

母様はなにしてるんだろ？

ファン様やサンおじちゃまも付いてるからきっと大丈夫

母はあの結界の家を出れないので、レイカを捜せないからファン様に捜すようお願いしてるはずだけど、国内を捜してるだろう

まさかレイカが隣国にいるなんて思わないだろうからどうしよう
知らせないと

「そうだ！手紙を書けばいいんだ」

そうすれば迎えにも来て貰える。

王都に行くお金を貯めるよりそっちの方が断然早い

名案が思い浮かびこれできっと母様が待つ家に帰れると思うと部屋中駆け回りたくなる。

「やった！ハク、レイカ達戻れるかも」

そしてまた母様と暮らせる

母様と二人とハクで暮らせる……

暮らせる？

「あれ！？」

暮らせない！！！！！

大変な事を思い出す。

あの男の事を忘れていた

母様を閉じ込めている紫の髪に金色の目の男

レイカを殺そうとした怖い男の事をすっかり忘れていた

家に帰ればあの男が許さないだろう、母様もまた酷い目に会う

レイカと同じ金色の目

怖かった

雰囲気が普通じゃない、フェンおじちゃま時折怖いと感じる時があったがそれ以上の何かを感じた。

フェンおじちゃまより高位な龍族なの

『そいつの自慢が金色の目で龍王陛下様と同じで国では二人だけだ』

テジャの言葉が蘇る

龍王様なの

レイカの父親は龍王様なの

そんなの嘘だ

信じられない

もし龍王様なら青龍国に戻れない

幾らフェンおじちゃまが大将軍でも龍王様には逆らえないし、レイカを庇えば母様のような目に会うかも知れない

折角見えた希望が消えそうだ

あの男はレイカが生まれた事を知らないようだった

きっと母様はこうなる事が分かって、秘密で育ててたのにレイカが父様の顔を見たいと思ったばっかりにこんな事になちゃった

レイカは王都に戻っちゃダメなの

見つかったら殺されちゃうの

どうしよう

帰ると皆に迷惑をかけちゃうかもしれないなんて思いもよらなかった。

『まっ諦めろ。　母親が秘密にするならそれなりの身分の龍族だ。詮索するとお前だけじゃなく母親も酷い目に遭うぞ』

あの時のテジャの言う事は正しかったのに、素直に聞いとけば良かったと後悔ばかりが湧く

帰れない……

折角腫れが引いた顔にまた涙が伝う

今さらどうする事も出来ない

もしかしたらレイカがいない方が上手く行くのかもしれない

そんな思いに傾く心を戻す事は出来なかった。

どれくらい泣いたのだろ

長い時間ハクを抱きしめ静かに涙を流し泣いていた、ハクは静かに寄り添ってくれ本当にいい子

「大丈夫っですか……」

突然声を掛けられ驚いて顔をあげると、涙でぼやけた目に銀色の髪の人間が飛び込んでくる。

銀の髪！

「サンおじちゃま！！」

その人物に思わず飛びつく

サンおじちゃまが迎えに来てくれたんだと単純に思ってしまった。

「母様のとこに連れて行って！　レイカ二度と我儘を言わない！父様なんていらない！お願い」

泣きながらサンおじちゃまに訴えるが何の反応も返ってこない？

「あの～　人違いをなされているようですが……」

「えっ？！」

抱き付いた相手の困った声を聞きその人の顔を見る。

そこには銀色の髪のカッコいいお兄さんがいた。

サンおじちゃまと同じ銀色の髪だがこの人のは真直ぐで横の髪そのままにして後を三つ編みにして、目も緑では無く空のような水色で肌の色も少し茶色がかった少し垂れ目気味の優しい風貌の人だった。

「だあれ？！」

ここに来て初めて会う人だ

「私はインフーと言いますが、貴女はレイカちゃんでいいのですか」

コクリと頷きながら何しに来たんだろうと見詰める。

すると何故か顔を赤らめるインフーさん

「このお屋敷の御主人様？」

名前にフーがつくのは虎族だと習った覚えがある。ちなみに龍族はロン、亀甲族はグゥイ鳳凰族はフォンが付けるのが習わしみたい

「いっいいえ違います。ここの主はフォンフー様と仰います」

そう言いながら手巾で涙を拭いてくれる。

「何か御用ですか……」

「レイカちゃんの事を色々聞きたかったんですが、気分がすぐれないなら明日でもいいですよ」

優しく微笑みなが聞いてくれる。どうやら優しい人のようにみえる

「もう大丈夫」

母様の所に戻れないならここで働いて置いて貰わないと知らないこの国で生きていけない

貧民街でボロをまといお腹の虫を鳴らしながら来ていた子供達

ここを追い出されたらレイカもそうなるだろう

泣いていても現実は変わらない

「色々聞いてもいいかな？」

「はい」

「レイカちゃんは青龍国の王都から来たんだね」

コクリと頷く

「ご両親の名前はわかる」

「母様はアオイ、父様の名前は知らない」

「お母さんは名前からすると人間だけど、お父さんは龍族なのかな」

「龍族だよ」

それもとびっきりの龍族、龍王様かもしれない

「レイカちゃんのような龍族の子が妖獣の森にいたのは、誰かに攫われたの？」

「違う…多分父様に捨てられたんだと思う……レイカを秘密で産んだ母様が父様に内緒にしていたの……だけどレイカが父様の顔を見たくてコッソリ覗いたら見つかって……それから……それから……」

言葉がつまりまた涙が溢れる。

最後に見た母様が斬られる姿を思い出しまう

「辛いならもう言わなくていいだよ…」

オロオロしたインフーさん、だけどここまで話して止めるのも嫌だから泣くのを我慢しながら俯いて続ける

「それから、レイカを見た父様が驚いてレイカを殺そうとしたけど母様が庇って斬られたの……そこまでしか覚えてない……目を覚ましたらあのハクとあの森にいたの……だから父様がいらないレイカを捨てたんだと思う……」

インフーさんは絶句していた。

「そ…それは大変な目に……」

「レイカはどうすればいいの……お家に戻っても殺されるかもしれない」

自分で考えてもどうしていいか分からないのでインフーさんに聞いてみるが返事が返ってこない

「インフーさん?」

顔を上げてインフーさんを見上げると

「イッ!!」

目を真っ赤にさせ泣いている

多分、声を我慢しているの下唇をかみしめ真一文字に引き結びかなり情けない顔

思わずインフーさんの手巾で涙を拭きが返してあげる。

「ずっずみましぇん〜〜　うっうう……」

男の人が泣くのを初めて見るので驚いてしまい、レイカの涙が引っ込んでしまう

こう言う場合どうすればいいの??

仕方ないのでインフーさんが落ち付くのを待つしかない

チェンさんの話では熱もさがりかなり元気になったようなので夕方前にあの子共部屋を訪れる事にしたが

扉の中から聞こえてくるのは微かな泣き声

通常の人間なら聞き取れないだろうが虎族の私には意識を集中すれば聞き取れてしまうから厄介だ、このまま知らない振りをして通り過ぎたかったが小さい女の子が声を押し殺して泣いているのがなんとも憐れだ

フォンフー様の話では母親を亡くしたばかりらしいのでそれで泣いているのだろう

ハッキリ言ってこういう話しは危険だ

図らずも涙腺が緩くなり男のくせに泣いていまう確率が高い

可哀想な話に弱いのだ

そのまま見捨てる訳にもいかず静かに入って行き声を掛け、その子が顔を上げた瞬間驚いてしまう

昨日は腫れて真っ赤で瞼も腫れ半眼状態だったのに今はスッキリとした顔に戻り、肌も体と同じく白いそして涙で濡れた瞳は金色に煌めき大きな瞳を見開き、その子も驚いているようだった。

そして誰かと勘違いして小さな体を私に向かって抱き付いてきた。

もし十数年後のあの子に同じ様に抱き付かれたら思わず押し倒していただろう

あくまでも十数年後を強調する！

私はそういう趣味は無い

こんな綺麗な子供を見た事が無かった

昨日とまるで別人

同一人物とは思えない

神族は美形が多いので虎族の美しい子共も大勢見て来たがこの子は別格だ

纏う色が他にない所為かも知れない

美しい見事な黒髪もさることながら金の瞳は別格だ

まるで暗闇に光る月のようだ

この色に魅せられない神族はいないだろう

この子が後十数年経ったらどんなに美しい娘になるのか容易に想像できる。

しかも境遇を聞けば、かなり辛い目にあったようで途中から既に涙を耐えるのに限界が来てレイカちゃんも辛そうなので話を止めたかったのにレイカちゃんは健気にも話を続けてしまう

もう限界だった

涙は決壊してしまた……

小さな女の子の前で泣いてしまうと情けない姿を曝してしまったが、レイカちゃんは優しく涙を拭いてくれた上に笑う事無く黙っていてくれた

フォンフー様には少々生意気な感じは否めなかったがアレはフォンフー様がいけなかったのだろう

こんな綺麗で優しい子なら、十五歳になったら結婚を申し込みたいくらいだ

あくまでも仮定の話ではある。

漸く涙も治まりお互い寝台に座り気まずい雰囲気だ

この雰囲気を変える為にも話をしないと

「レイカちゃんは何歳ですか？」

「五歳」

五歳なら後十年すれば立派な大人だ

「私は九十歳になります」

「？」

話しを続けるために自分の事を話そうと思ったのだが

「家族は私をいれ五人おりまして父は大司農府で官位の職を持ち母はそんな父を支えいます。上に兄と姉がいるのですが既に家庭を持ち自立してます」

「いいな…レイカも……ヒック　ウェン…」

父親に殺されかけ母親もどうなったか分からない状態で家族の話をするのは流石に不味かった

「ああ…ごめんなさい　無神経な事を言ってしまって」

小さな女の子を泣かせてしまいオロオロしてしまうがアレの事を思い出す

「そうでした、これをレイカちゃんに返そうと思っていたんです」

懐から真珠の髪飾りを包んだ布を取り出し目の前で広げると涙を止める。

「母様の髪飾りだ」

真珠の髪飾りを手に取り大事そうに受け取る

「チェンさんが体を洗う時に服に入っていたのを預かっていたんですよ」

「ありがとう」

ズッキュン

礼を言いながら少し微笑む少女の顔に胸を何かに打ち抜かれる

何だこの衝撃は

「／／／　いえー　私は預かっただけなので、高価な品ですから大事に仕舞って置いて下さい」

「でもレイカ仕舞う場所が無い」

「それなら大丈夫です。この部屋を好きに使っていいので、この引き出しは鍵が掛けられて安全です」

備え付けの机の引き出しを示す。

「レイカここに居てもいいの？」

「ええ、行くところが無いなら好きなだけ居て下さい」

するとレイカちゃんは私の首に跳び上がり抱き付く

「これから如何すれば良いか分からなくて怖かったのー　ヒィーンエーンエンエ～ン」

小さい体はとても軽く強く抱きしめれば壊してしまいそうなので、良く母がしてくれたように背中を撫でてあげる。

こんなに小さいのに一人で我慢してたのだろう

まだ五歳なのに

この子を守って上げたい

決して不純な動機では無い！　これはただの加護欲だ！！

多分……

何だか自分でも危ない道に走りそうで怖い

それからもう少し話をして親交を温め有意義な時間を過ごした。

明日は朝食を一緒にとる約束をして部屋をでた。

明日の朝が楽しみだ

夕食後フォンフー様の部屋でレイカちゃんの報告をする。

「それで、あのガキは「レイカちゃんです！」…」

「そのレイカは父親に殺されそうになったが妖獣の森に捨てられたと言うんだな」

「はい、その通りです」

「それでその父親は龍族の誰なんだ」

「それは分からないようです」

「龍族で金の瞳を持つのが誰だか知っているか？」

「確か龍王陛下がそうだと聞いておりますが、他の龍族でいるかどうかまでの情報は…なにぶん他国なので知る由もありません」

「単純に考えれば龍王の娘になるが、王が人間だからと言って子供を殺したり捨てたりするのか」

「有り得ないと思いますよ。龍族は我々より更に子が出来にくい体質ですから人間だと言って殺すなど……　しかも龍王と言えば四神国の王の中でも清廉潔白で前龍王の悪政を正し、善政を施している善王として有名なお方、そんな龍王陛下がそんな悪逆非道な事をするとは思えません」

「だよな…じゃあ誰だ」

「まさかレイカちゃんを青龍国に返すつもりなのですか！」

「レイカが龍族なら問題になるが人間だしな、しかも父親に捨てられたんなら此処に置いても問題にならんだろ」

「ありがとうございます。フォンフー様」

「何でお前が礼を言うんだ？」

「いえ、父親に捨てられるなどあまりに不憫で」

「貧しさで子供を捨てる親なんて幾らでもいるだろに、そんな事で一々同情してたら切りが無いぞ」

「でもレイカちゃんを拾って来たのはフォンフー様ですよ」

「五月蠅い！　俺はやる事があるから出ていけ」

都合が悪くなると直ぐこれだ

インフーは仕方なく部屋を出て行き今夜は早く寝ようと思うのだった。

「これは誰だ？」

思わず目の前にいる黒髪の美少女が一瞬誰か分からなかった。

黒髪を見ればあの不細工しか思い浮かばないがどうしてアレが此の顔になる

詐欺か？詐欺なのか！！

「レイカちゃんですよ」

インフーはさも当たり前のように答えるが、何だその手は……

インフーの手を見ればレイカと手を繋いでいる。

何時から子供好きになったんだ、俺とも手なんか繋がないだことないだろう

見れば顔もかなりやにさがって、垂れ目がちな目尻をより一層下がらせている。

「お前も誰だ」

「仰る意味が分かりませんが？」

午後にレイカを俺の部屋に連れてくるようインフーに命じておいて、今の状況にいたる。

あの不細工がこんな美少女に変わると誰が思うだろう…黒い髪は両脇を頭の上で丸められ後は流され毛先が巻き上り可愛く結われ、顔は腫れてパンパンだった瞼と頬はスッキリして白い肌になり、大きな金の瞳は活き活きと煌めいている。頭とおでこにまだ擦り傷が残っているが、それを差し引いても美少女だ

「確かに龍族の血を引いてるな」

「レイカが可愛いてって嘘じゃないでしょう」

「ウキッ！」

さも自慢げにいうガキとそれに同意するように鳴く頭上のハク、顔は変わったが生意気なままだ

「ガキはガキだ」

「むぅ……」

「フォンフー様、小さな女の子に大人げないですよ」

「俺はれっきとした子供だ！」

なんだこの流れは？話が進まない

もう無視だ

「それよりお前のこれからだ、インフーに聞いたが行く宛てが無いんだろ」

レイカは神妙に頷く

「そこで行く宛てのないお前を俺の侍女にしてやろう」

「フォンフー様、五歳の子供に侍女など何を考えているのですか」

「レイカやります」

「えっ！　レイカちゃんは小さいから働くなんて無理だよ」

インフーが可笑しい

変な物でも食べたのか？

まるでガキの過保護な親のようだ

この地域では、それ位の年齢から親の簡単な農作業や家業を手伝う子供など幾らでもいる

「本人がやりたいと言うんだからインフーは口を出すな」

「ですがー」

「インフーさん、レイカは母様のお手伝いしてたから大丈夫だよ」

「インフー様だ、俺の事はフォンフー様と呼べ。俺達は虎族でお前

は使用人の立場を忘れるな」

レイカは少し嫌な顔をするが素直に返事をする。

「はい分かりましたフォンフー様」

生意気だがバカでは無いようだ

「フォンフー様、仮にもレイカちゃんは龍族の血を引いてるんですよ！　使用人にするなど神族の血を蔑ろにするんですか！」

なんだこの面倒くさい奴は…ウザさが増しているのは気のせいか

「虎族の血を引いた人間など其の辺にゴロゴロいるぞ、だが全ての人間が優遇されてるか、農夫から娼婦や商人まで幅広くいるぞ」

「そっそうですが…」

「インフー様、レイカは人間です。龍族の血なんかいらない、置いて貰えるなら使用人で十分です」

「レイカちゃん！」

いい根性いている。とても五歳のガキには思えない

レイカは不思議に満ちている

其の容姿も

神力が効かない力

俺達虎族を恐れもしない、普通の人間なら俺達の神気に充てられ萎縮するのだが

それどころかインフーを魅了している。

これが人間の子供と言えるか

レイカの中に何か大きな力が潜んでいる

漠然とした感だが

絶対何かある。

面白いからこれから色々つっついてみる為にも側に置く。

アレがただの人間なわけがない

「しかし俺の侍女にするにしてもまだ早い、侍女頭に色々仕込んで貰ってからだ。インフーはレイカを下働きの部屋に移してから侍女頭の所に連れて行け」

「あのような所にレイカちゃんを！！」

何故かインフーの方が悲惨な顔をしているのに対しレイカの方は別に何とも思っていないようだ。どっちが大人か分かったものではない

これ以上続けてもインフーのウザい言葉の攻撃にあいそうなので打ちきるのに限る。

「話は終わりだ。部屋から出てけ」

レイカの方はお辞儀をしてあっさりと出て行く

「ありがとうございます。ファンフー様」

インフーの方が何か言いたそうだったがレイカが先に出て行ってしまうので仕方なく後を追って行く。

「フォンフー様、後ほどお話しに伺いに上りますから」

そう言い残し慌てて出て行く姿が滑稽だ

誰が待っているものか

五月蠅いのが戻ってこない内にどこかに遊びに行く事にする。

「気楽な第八皇子様は逃走しますか」

二階の窓から口笛を吹きロウを呼ぶ

「ピー――ッ　ローウ！」

窓の外にどこからともなく駆け付けて来る。

巨大な大きな狼のロウは妖獣の森で親から逸れて、迷子の所を拾ってやり育てたのだが気にいったので血を分け与え隷獣にしてやった。

隷獣とは神族が自分の血を相手に飲ませる事によって相手を血で縛り従えさせ使役する事が出来るのだが、神族の血を飲んだ影響で獣

も力を得る。ロウの場合は体が通常の三倍あり足の速さや力も通常の狼の数倍近いはずだ、そして寿命も長くなり百年近くはいきるだろう。

この隷獣を人間にも施せるが天帝により禁止されている。此の禁を破ればどうなるか知らないが試す気もない

窓の下にロウが来たのを確認して二階の窓から飛び降りロウの背に着地し、その見事な茶色い毛に顔を埋めその感触を楽しむ。お日様の温かい匂いがする…どこか一人になれるところで昼寝を決め込むことにした。

「ロウ、扇山の山頂に行くぞ！」

「ワォン！」

颯爽と走りだすロウの背に掴まり風を切るように塀を飛び越えて扇山に向う

俺もレイカのように虎族の血なんていらなかった。

人間のようにこの地に這いつくばりながら短い生を終えられるものならそうしたかった。

だからレイカ覚悟しろ

お前をただの人間では終わらせない。

朝インフーさんと美味しい朝食を食べてから、チェンさんにお風呂に入れて貰ってから新しい服を着せて貰った。服は赤色のスッポリ被る膝上丈のチュニックと足下が膨らんだズボンで動きやすて気にいった。頭はチェンさんが結ってくれ横の髪を頭の上でお団子のように丸め、それに赤いリボンを着けてくれた。

「まー、どこかのお姫様見たいよ」

チェンさんはしきりに誉めてくれるしインフーさんに至ってはレイカが恥ずかしくなるくらい綺麗だ、可愛いとしきりに誉めてくれるので、反対に少し引いてしまう

お昼御飯は客室でハクと食べ、チェンさんが食事の世話をしてくれお客様扱いで好待遇

レイカって運が良いのかもしれない、あの広い森であの子に助けられしかもこの好待遇

最悪の場合は肉食獣か妖獣にその日のうちに食べられ死んでいた可能性の方が大きい

最初は死んでしまいたかったが今では生きていて良かったと思う。何故なら母様が生きているはずだから、レイカが死んではきっと酷く悲しむしだろう…それに生きていればきっと再び会う機会があるから

助けて貰ったのだからお礼を言わないと母様に怒られる。
そしてお礼を言わないといけないのでインフーさんにあの子の聞くと驚いてしまう

「えっ！！　白虎国の皇子様だったの！」

「はい、訳があってこのような田舎に居りますが列記としたこの国の第八皇子フォンフー様です」

どうしようレイカはあの子にかなり失礼な態度を取ったような気がする！？

最悪このお屋敷を追い出されてしまう？

「どうしよう…レイカ追い出されないかな？」

心配げに聞くと安心させるようにニッコリ笑い

「フォンフー様は口は悪いですが心の広い方ですからそんな意地悪はしないので大丈夫ですよ。もし追い出されるような事になっても私がレイカちゃんのお世話をさせて貰いますから御心配なく」

「ありがとうインフーさん！」

感激のあまりインフーさんの太もも辺りに抱き付くと何故か慌てて身を引き、レイカの肩を持って引き離す。

「いっいけませんレイカちゃん、女の子がみだりに男に抱き付くものでは　／／／」

顔を赤らめてうろたえる？？？？

「ゴメンなさい…」

向こうでは大人に誰となく抱き付いて抱っこして貰っていたが、この国でははしたない事なのかもしれない…

「これからは特に他の男性に抱き付いてはいけませんよ」

「はい」

たしかに知り合って間もないのに馴れ馴れしくしたら嫌かもと思いあまり深く考えなかった。

そして午後にあの子の部屋に呼ばれお礼を言おうと思ったのだが

「これは誰だ？」

部屋に入った途端に誰だと問われてしまう。そう言えば、しきりとレイカの事を不細工だと言い母様を嘘つき呼ばわりしていたのを思い出す。

あの時自分がどんな顔をしていたか知らないけど女の子に対してあまりに酷い言いざまだった。

そしてついレイカの立場も忘れ口を滑らしてしまう

「レイカが可愛いてって嘘じゃないでしょう」

「ウキッ！」

ハクもどうだと言う感じで同意する。

「ガキはガキだ」

「むぅ……」

言い返したかったが我慢する。仮にも命の恩人で面倒を見て貰っている立場

代わりにインフーさんが窘めてくれ、やっぱり優しい良い人だ、銀色の髪の人は性格の良い人が多いに違いないと確信する。

「フォンフー様、小さな女の子に大人げないですよ」

「俺はれっきとした子供だ！」

言い返すフォンフーの姿は確かに少年で、青龍国では見られない短い髪をツンツン跳ね上がらせた白い髪で大きな吊り上がった赤茶色の目だが良く見ると金色の光彩が混じっている不思議な目の色をしている。肌の色はインフーさん同様少し茶色がかった色をしたきつい感じの美少年だ

だけと虎族なのだから、見かけはテジャより小さく感じるので十歳前後に見えるが、既に三十年以上生きてるはず

神族の年齢は分かりずらいからよく分からないけど

本当にテジャに色々教えて貰っておいて良かった！

大人になったら青龍国に戻り、迷惑そうな顔が想像できるが絶対官吏になっているテジャに会いに行きお礼を言おうと心に決める。

そしてフォンフー様にはお礼を言う機会を逃してしまい言えずじまいに終わってしまう

何故か素直にお礼を言えない雰囲気を持つ少年だ

そしてレイカはこのお屋敷の使用人として働ける事になったがインフーさん…ではなくインフー様が何故か腹を立てている。

「酷過ぎるファンフー様は！　こんな小さいレイカちゃんを働かせるなんて信じられません」

「レイカはそれで良いよ。その方がこのお屋敷に居やすいもの」

普通はレイカのような身寄りも知れない他国の子供を面倒見てくれないだろが受け入れ仕事までくれ十分感謝している。貧民街の子供達を短い間だが見ていたせいか優しく親切な大人ばかりで無い事を知っているし、レイカの今の状況でも十分恵まれていると思う

「レイカちゃんがそう言うなら良いのですが」

レイカが使っていた客間に戻りチェンさんが何時の間にか用意してくれた数枚の服をまとめてから大きな布に包むとインフー様が持ってくれる。真珠の髪飾りは使用人部屋は四人一部屋なのでインフー様に預かって貰う事にした。

案内された部屋は一階の階段下にある日当たりの悪い場所だが綺麗に掃除されており、狭い部屋には、初めて見る二段の寝台が2台置かれている。

結界の家も狭い部屋に寝台を2台置いて母様と寝ていたので別段酷いとは思わないけどインフー様にとっては信じられないらしい

「こんな所で寝るなんて、せめてあの客間で寝られるようフォンフー様にお願いしてみます」

「えっ！　レイカはここで良いですよ。使用人が客間を使うなんて変だし他の子達もここで寝てるのにレイカだけ特別扱いは嫌です」

そんな事したら絶対浮いてしまうのは、小さなレイカでも分かるのにインフー様はとんでもない事を言い出す。

もしかするとレイカを龍族のお姫様だとでも思っているのか困ってしまうが、自分の行きすぎに気付いたのか引いてくれる。

「辛かったら何時でも言って下さいね」

「はい」

取敢えず空いている寝台の上に荷物を置いてからチェンさんの所に

連れてって貰いインフー様とそこで別れたのだった。

「フォンフー様がレイカちゃんを侍女にするって言ったの?!」

「はい、このお屋敷で働かせて貰える事になりましたので宜しくお願いします」

チェンさんに確認をとられ、返事をしてからこれからお世話になるので挨拶をする。

「フォンフー様は何を考えてるのかしら……レイカちゃんは本当に確りしているのね。お行儀も良いし言葉も出来ているから確かに侍女向きね……まだ小さいから出来る事を少しづつ教えるわ」

戸惑いながらも受け入れられたようだ……働くには早すぎるのだろうか

「レイカぐらいの子は働かないの?」

「そうね、まだ体が小さいし家の手伝いや子守りぐらいね。　でもレイカちゃんは五歳にしては大人びてるから大丈夫よ」

大人びていると言われ正直分からない。物心つく頃から周りは大人

ばかりで考えると凄い人間ばかりが揃った中で暮らし、学問所で漸く子供と付き合うようになったが、皆生きるのに懸命で食いっぱぐれないよう強かに逞しく生きていたので、自分の年齢の基準が分からない

「レイカは何をすればいいんですか？」

侍女と言えばファン様の綺麗な侍女さん達が思い浮かぶ、美しい金の髪を何時も綺麗に結い上げ薄く化粧を施しただけだが天女のように美しく蝶が舞うようにファン様のお世話をしていた。しかしあの人達が普通の侍女だとは幼いレイカにも思えない

少し離れて思えばファン様のお屋敷は別世界で不思議な場所だった。

「先ずその服を着替えた方が良いんだけど…そうだわ私の家に娘の古着があった筈だから、一緒に取りに行きましょ」

「えっ？」

そのまま連れて行かれたのはお屋敷の敷地内にある平屋建ての一軒家だった。

「さあ入って頂戴、今は旦那と二人暮らしで子供はいないから」

チェンさんの家はどことなく結界の家のように温かみのある優しい場所だった。机に四つの椅子が並び以前は四人家族だたのだろうか

「少し椅子に座って待っていて」

ハクと大人しく椅子に座り待っていると母様とよく今で静かに過ご

した事を思い出す。母様が組紐の駒をカタコト動かす音が好きだった……数日前の事が今は遠い過去のようで悲しくなる。

ハクが慰めるように頭から肩に移りペロペロ頬を舐めてくれる。

「くすぐったいハク」

「ウッキ」

あの男を父親とは認めたくないがレイカは親に捨てられたけど、思えばハクも親に捨てられたのだ。

「お前も親を恨んでる？」

「キッキ」

まるで恨んでいないと言っているようだ。

「レイカは許せない。何時か絶対母様を取り返すの」

しかし相手は龍王様かもしれない

相手が巨大過ぎてどうしていいのか途方に暮れるしかないが今はここで大人しく時を待つ事にする。

「レイカちゃんお待たせ、お古で悪いけどこれに着替えて」

チェンさんが手に数枚服を持ってやって来た。

確かに着古していたが大事に扱われていたのが分かる。

綺麗な赤い服を脱ぎ地味な色合いの服に着替え、頭も二つの三つ編みにして貰う。

「他の子達と同じような恰好にしないといけないからゴメンなさいね」

「大丈夫レイカ継接ぎだらけの服も着た事あるから」

そう言うと何故か涙ぐみ抱きしめて来る。

「レイカちゃんは色々苦労してるのね」

何か勘違いさせてしまったようだが敢て否定しないでおく

それから屋敷を回り使用人の人を紹介して貰う

最初はチェンさんの御主人で家令を務める寡黙な感じで渋いおじさんだった。朗らかなチェンさんとお似合いの気がする。

「レイカと言います。トムチーさん宜しくお願いします」

「小さいのに偉いね」

優しく頭を撫でて貰う。

次は厨房に案内されると丸まると太った髪の毛の無いおじさんがいた

しかも大きい

人間てこんなに太れるんだと初めてしる。そして髪が無い上に眉毛もなくちょっと怖いけど話すと優しそうな人だった。

「ちっちゃいのに働くなんて…おじちゃんが美味しい料理を一杯作るから沢山食べて大きくなるんだよ」

「ありがとうございます。トンガンさん」

そして助手の二人のお兄さんも髪の毛と眉毛が無く少し太っている……

何故??

厨房を後にしてチェンさんに聞いてみると虎族の厨房で働く人は毎日毛を剃らないといけないらしい、誤って料理に毛が入らないために決められているそうだ…もしかして女の人でも剃っちゃうんだろうかと謎だ

そしてフォンフー様とインフー様の侍女をしているミンシャーさんとテンさんで二十前後の可愛い感じの人達で二人とも既婚者でテンさんに至っては大きなお腹をしていて赤ちゃんが入っていると聞き驚く

「赤ちゃんがいるの!?　痛くないんですか?」

テンさんのお腹は大きな石を入れているみたいに膨れ上がり苦しそうに見える

「ちょっと重いけど痛くないわよ。あと一月で産まれるから今から楽しみなの」

幸せそうにお腹を撫でて微笑む。

レイカちゃんも触ってみてと言われ、恐る恐るお腹を触るとテンさんのお腹の中で何かが動いている!!!

「何か入ってる!!」

思わず言うと皆に笑われてしまう…だって初めてだもん

レイカもあんな風に母様のお腹に入っていたのかな?

ミンシャーさんも早く欲しいと羨ましそうだった。

そして次に紹介された女の子達がレイカの同室者になる子達で、十七歳のメイリン、十六歳のヤヤとカヤの双子の女の子だった。同じ顔が二つ!!あまりにも不思議で繁々と見ていまう

「「　見世物じゃないんだからジロジロ見ないでよ!!　」」

「ゴメンなさい、レイカと言います宜しくお願いします」

慌てて挨拶をする。

「レイカちゃんは小さいんだから優しくしてあげよ」

二人より一つ年上のメイリンさんがとりなしてくれた。

これから一緒に仕事をするお姉さん達なので仲良くやって行きたい

「「　私達の足引っ張らないでよ　」」

双子のお姉さんは難しいかも

少し不安になったがメイリンさんは優しそうだ

他にも庭師のおじさんや馬番の人など色々居るらしいが徐々に教えて貰う事にした。

仕事は明日からにして貰い今日は部屋で大人しくする。

部屋に戻るとハクが寝台で寝ている。

レイカも少し疲れてハクの横で寝転がる。

お仕事をする時はハクと一緒は駄目だと言われたので少し寂しいがしょうが無い

早く仕事を覚えてお給金を貰えるようになって王都に返るお金を貯めよう

今直ぐは無理だろうから十年経ってばほとぼりも冷め

あの男もレイカを忘れているだろう

大人になればレイカも随分変わる

サンおじちゃまが貧民街の学問所に行っている限り何とか母様に会えるはず

其の日を夢見てレイカは何時の間にか眠りについたのだった。

学びましょう

レイカは役ただずだった。

フォンリン様のお屋敷で働き始めて…お手伝いを始めて五日ばかり経ったけど何も出来ません

五歳の体は仕事をするには小さすぎるだけであって、レイカが不器用だとかバカだからじゃ決して無いんだから

そしてレイカの体で出来る事は床掃除ぐらいしか無かった……

チェンさんも始めから期待してなかったようだ

「いいのよレイカちゃんは床掃除をしてくれるだけで、空いた時間は好きに遊んで」

五歳のの年齢の壁は厚く子供扱い

せめてもと、家でしていた草むしりくらいなら出来るので庭師のおじいちゃんに頼んでさせて貰っていたんだけど

「レイカちゃん何をしてるんですか！！　そんな事をしたら手が汚れます～　それに日に焼けてしまいますからいけません！」

お屋敷のなかから凄い勢い出て来たインフーさんに止められてしまう。手なんて洗えば綺麗になるし、おじいちゃんに借りた大きなつばの帽子をしてるから日焼けなんてしないと思うんだけど

「でもレイカの出来る仕事があまり無いの、草むしりならお家でしてたから大丈夫です」

そして何故かおじいちゃんを怒り始める。

「レイカちゃんになんて事をさせるんですか！　又このような事があれば首です」

「申し訳ありませんインフー様」

青い顔になり土下座するおじいちゃん

どうしてレイカが草むしりするとおじいちゃんが辞めさせられるの？！

「レイカがしたいってお願いしたの！　だからおじいちゃんを怒らないで！インフー様」

涙ぐみながら取り縋るとインフー様は頬を赤らめ少し体を緊張させる。

？

「そうでしたか…だからと言ってレイカちゃんに二度とこのような事はさせないで下さい！」

おじいちゃんにそう命じてから屋敷に戻って行ったのを見送る。

「やれやれ驚いたわい～」

「ゴメンなさいおじいちゃん…　レイカのせいで」

立ち上がりながらしわくちゃの顔を更にくちゃくちゃにさせ笑う

「気にするんじゃないレイカちゃん、インフー様は虎族の中でも穏やかな人じゃから少々驚いたがの…　余程レイカちゃんが可愛いんだろ」

そう言って許してくれたが今後のお手伝いは断られてしまう。

思わぬ障害に驚いてしまう、このままではレイカは無駄飯ぐらいになってしまいそうだ（無駄飯ぐらいは貧民街の学問所で覚えた）

仕方なく井戸で手を洗ってから勝手口からお屋敷の中に入るとチェンさんが待っていた。

「インフー様から聞いたわ、草むしりのお手伝いをしていたんですって？」

「だってレイカのする仕事が無いから、ゴメンなさい」

まさかチェンさんまで怒られたのだろうか！？

「謝らなくてもいいのよ。　レイカちゃんがそんなにお仕事がしたいだなんて私も気付かなかったわ。　でも実際レイカちゃんは体が小さいから少しずつ覚えて貰おうと思うの」

優しく諭すように言ってくれる。

「はい」

「それにレイカちゃんはフォンフー様の侍女として雇われたんだからフォンフー様のお世話をして貰うわ」

「でも、何をすればいいんですか？」

フォンフー様の侍女はミンシャーさんがしているが、虎族の皇子様だが自分の事は粗方してしまうのであまり手が掛からないらしい

「フォンフー様と一緒に勉強して欲しいの」

「へっ？」

「フォンフー様は大の勉強嫌いで直ぐさぼってどこかに行ってしまわれて困ってるんだけど…　だから一緒に勉強して見張ってほいいの」

あのフォンフー様を見張る！！　無理だ…レイカとすこぶる相性が悪いし、レイカの言う事なんか聞くはずが無い

「でもレイカは見張りになれないよ」

「インフー様もいるし、何れ王都に戻るから侍女になるにも教養がいるわ」

「王都に戻る？」

「虎族の皇子が何時までこんな田舎に居られないわ、何時かは王都にお戻りになって国のお仕事をしなければならないんですから、レイカちゃんも王都に行くならそれなりお勉強しましょ」

「はい」

そうか、フォンフー様は王都に戻るんだ。白虎国の王都ってどんな所なんだろう!!皇子様だから戻るなら王宮で暮らす事になるのかな？　凄いかも!!

そう言えば虎王様ってどんな人なんだろう？

考えて見れば自分の国の龍王様の事もよく知らないのに隣国の王様なんて知るわけがないそう言えば周りは龍族ばかりだったけど誰も龍族の事など教えてくれず人間のテジャに教えて貰ったくらいだ。今思えば不自然なくらい何も教えてくれず龍王様の話など一度も話題にのぼらなかった。

やっぱりそう言う事なのだろうか

夜になり部屋で過ごすのだが、毎晩お姉さん達とおしゃべりに花を咲かせている。ハクは皆の人気者で部屋で暮らす事を歓迎され可愛がられ、レイカ共々受け入れられた。

今はヤヤさんの膝の上で撫でられ気持ちよさそうに寛いでいた。

「レイカは今日インフー様に怒られたの」

「違うよ、草むしりを勝手にしたレイカのせいで庭師のおじいちゃんが怒られちゃったの…」

ヤヤさんが何処から聞き付けたのか早速聞かれてしまう

双子のおねいさん達は地獄耳でお屋敷の事の小さな出来事も何でも知っている。

「インフー様が使用人を怒るなんて初めてなんだよー」

「何時もは優しいお方なんだけど？　それでも素敵よね～」

二人はうっとりと頬を染める。

「インフー様が好きなの？」

「「　バカね～　そんなわけないでしょ！観賞用よ　」」

「へ？」

「虎族の人を好きになたって相手にされないし、相手にされても遊ばれて捨てられちゃうもの」

遊ばれて捨てられる？？？？

「あなた達レイカちゃんはまだ小さいんだから変な事を言わないの」

メイリンさんが二人を嗜めるけど、遊ぶのが変なの？？？

「それに近づきたくっても竦んじゃうもの」

「そうそう」

「そうね、私も四年勤めてるけどお側には寄れないもの。ミンシャーさんとテンさんでも今だに緊張するって言ってたわ」

そうなんだ…　普通の人間は虎族の人達にそういう反応をするんだ…レイカは龍族の中で育って馴れているから何も感じないんだろう確かに神族の人達は皆が美形だ、不細工な人はいないのかもしれない。

「それより何であんた草むしりなんかしたの？」

「レイカはまだ小さいんだから無理に働かないで遊んでれば良いじゃん」

「だって早く一人前になってお給金が欲しかったんだもん」

「レイカちゃん偉いのね。お家に送るの」

ここに居る皆もお家に殆どお給金を実家に送って家計を助けている。

「うん…そう」

嘘を付くのは後ろめたいが仕方がない

チェンさんにあまりレイカの事情は言わないよう言い含められていた。屋敷の人達には虎族の血を引いた子供で人攫いに攫われた所をフォンフー様に助けられたという設定になっている。

白虎国では虎族と人間の庶子は珍しく無いらしい、龍族は生涯で子供を産む数は二人から三人だが、全く恵まれない龍族も多いらしくなかなか数が増えないの対し虎族は子沢山！現在の虎王様は八人の皇子様と三人の皇女様がいる。他の虎族の人達も人間の愛人を生涯にわたり大勢持ち子供を数十人と設けるそうで人間だけど虎族の血を引く人が巷に溢れているそうだ

「そう言えばレイカちゃんは明日からフォンフー様とお勉強するってチェンさんが言ってたけど大丈夫」

話を変えてメイリンさんが心配そうに聞く

「「　信じらんないー！！　勉強なんかするの　」」

「うん、フォンフー様が勉強をさぼらないよう見張るんだって」

「「「　！！！　」」」

三人は顔を青ざめさせ絶句した。

誰もが無謀な役だと思ったのだろう

お姉さん達のフォンフー様のイメージは自由気ままな風のようなお方で、皇子様らしからず、着替えや風呂など自分で全て行い最初は大勢の使用人を王都から連れて来たがインフー様とチェンさん家族以外全て追い返したそうだ。

だから今いるその他の使用人は全て近隣の町の人々で賄い、虎族の形式に拘らない緩い生活を送っていた。

そして三年前に警備もそこそこのそんな中で、このお屋敷に盗賊が十数人押し込んで来たのだがフォンフー様お一人で全ての族を瞬く間に切り捨てたそうだ…メイリンさんはその頃から居たので震えながらに話してくれる。

「お姿は少年なのに自分より倍もある盗賊を血しぶきを浴びながら斬る姿は今でも忘れられないの……　聞けばフォンフー様は四十四歳なんですって…矢張り私達と違うとハッキリ思ったわ…　」

「レイカはフォンフー様の機嫌を損ねないよう注意しな　」

「そうだよ、小さいからって油断しない　」

口は悪いが双子の二人も心配してくれる。

余程フォンフー様が怖いらしい、確かに性格はきつそうだけど酷い事をする感じは無い、仮にもレイカの恩人だ。しかし年が四十四歳って十歳前後に見えないんだけど！

テジャの見かけに騙されるなという言葉に納得する。

その後は話を終えて皆で床に着き眠る

母様はいないけどハクと三人のお姉さん達がいて寂しさを感じる事無く寝る事が出来た。それより母様があの家で一人寂しく寝ているのではないかと思うと心が潰れそうだった……待ってて母様、レイ

カが絶対逢いに行くから……

フォンフー様の勉強時間は午前中に行われる。レイカは朝の掃除の床掃除の手伝いをしてから、使用人の食堂で大勢で朝食をすましてから他の人達は各々の仕事に戻るがレイカは一旦綺麗な服に着替えてフォンフー様の部屋に行く、ハクも連れて来て良いそうなので嬉しい

「ハク、行くよ」

「ウッキー」

ハクも嬉しそうに頭に乗っかる。

二階にある一番立派な扉の前に行きどう声を掛けようかと考えるていると突然扉が開かれるので驚ろく

バン！

「きゃっ！」

「レイカちゃん、待ってましたよ。さあ入って下さい！」

扉を開けたのは、インフーさんでその顔はまさに喜色満面と言って

いいだろう

手をとられ引きずられるように部屋に入るとインフーさんとは対照的に不機嫌な顔をしたフォンフー様が机の上に積まれた沢山の本の前で座っている。

「お早うございます。フォンフー様」

この屋敷の主に朝の挨拶をするが無反応で何時も以上に機嫌が悪いが、インフー様は気にする事もないようだ。

「フォンフー様、レイカちゃんに挨拶を返さないなどと失礼ですよ」

「お前は馬鹿か！　虎族が一々使用人挨拶などするか」

「私はチャンと返しております。挨拶は人としての基本ですよ」

レイカもインフー様の意見に賛成だけど素直に挨拶を返すフォンフー様というのも違和感を感じるかも…

「それより何故この俺がこのチビと一緒に勉強せねばならん」

「レイカちゃんを侍女にするとお決めになさったのですから、それなりの教養も必要です。だから一緒に勉強すればお互い励みになるでしょ」

さも名案だとばかりに言うインフー様だけど、まだ五歳のレイカと四十四歳のフォンフー様では結構な学力の差があるので失礼だと思うんだけど

しかしその疑問は直ぐに解決される。

事前にレイカは少し字が書けるのを伝えていたので最初はフォンフー様と書き取りをする事になった

「次に花、草、土、水……　」

インフー様が簡単な字を次々と言って行きそれを紙に書いて行くのだが、レイカがスラスラ書いていくのに対して、それを横目で時折見て堂々と写していくフォンフー様

インフー様も見ない振りをしているが、ずるをしているのは分かっているようだ

これはどう言う事だろう！？

こんな簡単な字が書けないのだろうかと頭を傾げながら二十問の書き取りを終えるとインフー様が採点してくれる。

「凄いですね！　五歳でこれだけ書ける者はなかなかいませんよ」

感心したように誉めてくれる。

「お前、ずるしたんじゃ無いのか……」

「レイカはフォンフー様みたいにズルなんかしない、小さい頃から母様が教えてくれたし、ちゃんと学問所に通ってたもん！」

レイカの答えを見ていたフォンフー様に言われたくない！

思わずぞんざいな言葉を言ってしまうが、フォンフー様は色々気にして無いようだ

「フン！　俺は名前さえ書ければ良いのさ！」

それを呆れた様に小言を言うインフー様

「そのような訳が無いでしょ！　王都に戻るまではレイカちゃんと一緒に一通りの読み書きは覚えて貰います！」

「冗談だろ！」

「良いのですか、このままでは確実に五歳のレイカちゃんに負けますよ」

瞬間ギロリと睨まれるが別段怖いとも思わない

レイカを殺そうとしたあの男の睨みと比べれば可愛いく感じて、思わずクスリっと笑ってしまった。次の瞬間、フォンフー様が顔を真っ赤にさせて怒りだす。

「お前！！　今俺を笑ったな！！」

「すっ済みません！　睨んだ顔がかわいいなっ……」

「「　かっ可愛い！！？？　」」

年上の男の子に向かって可愛いは失敗だと言ってしまってから後悔する。

「おのれ！　人間のくせに俺を愚弄するか！！」

「フォンフー様いけません！！」

フォンフー様の目が金色に光ったと思った瞬間凄まじい切り裂くような風がレイカを襲う

「キャアーーーー」

「キッーーーー」

「レイカちゃん！！！」

風はレイカを取り巻くように体を包んだが、風はまるでレイカの体に吸い込まれるように掻き消える

何が起こったのかレイカに全然分からずバラバラになった椅子の上でハクを頭に乗せたまま座り込むしか無かった。

「大丈夫ですかレイカちゃん！」

インフー様が真っ青な顔で駆け寄り抱き上げてくれる。

「何があったの？？？」

「フォンフー様が神力を放ちレイカちゃんを斬り裂こうとしたんです！」

先の凄い風が神力と知り驚くけどレイカはどこも怪我をしていない？　フォンフー様を見れば悪びれた風ではないが驚いた顔をしている。

インフー様は優しげな顔をめい一杯怒らせながら自分の主を睨みつける。

「やり過ぎです！　レイカちゃんを殺す気ですか」

「俺もやり過ぎたと思ったが止めれなかった。それよりインフーはレイカが無傷なのを驚いたらどうだ」

フォンフー様にそう言われ改めてレイカを見やり徐々に顔色を変えて行く

「力を抑えたのですか？」

「俺がそんな事すると思うか？　レイカは俺の神力を全て受け止めて吸い取ったんだ」

レイカが力を吸い取るとはどういう事だろう？？？？

「人間のレイカちゃんにそんな力がある訳ありません」

「思い出してみろ、顔を治そうとしてレイカに神力を注ごうとしても効かなかったのは力を食っていたからだ」

「まさか神力を食うなど……」

二人は黙り込んでしまうがレイカは何の話かさっぱり分からない

「インフー様、レイカは悪い事をしたの？」

ハッとしてレイカの目と視線を合わせて安心させるように微笑む

「いいえ悪いのはフォンフー様です。　レイカちゃんは体の調子はどうですか？」

「別に何ともないです」

少しお尻を打ってしまったが別に大したことはない

「おい！　レイカお前の父親は誰だ！」

まるで問い詰めるかのように凄い勢いで聞いてくるフォンフー様

「知らない、一度しか会ってないから」

「どんな容姿だ」

「えっとー　赤い髪で金茶色の目の大柄な人」

咄嗟にフェンおじちゃまの事を言っていまう…だって怖かったんだもん、紫の髪に金の目と正直に言った時それが龍王様だと言われるのが怖く感じてしまったから

本当に父様が龍王様ならレイカは絶対に敵わないじゃない

今は知りたくないと思ってしまった。

「その容姿から思いいたるのは中央軍大将軍フェンロン様しか思い当りません。そんな凄い龍族がレイカちゃんの父親」

「確かに、かなりの大物だ」

何かフェンおじちゃまが高評されている。可笑しい…サンおじちゃまにデレデレな顔を向ける情けない顔しか知らないレイカには同一人物に思えない

フェンおじちゃまって凄い人だったんだと見直してしまう。

「フェンロン様と言えば女性関係が華やかな方だと伺いましたが昨今婚姻を結ばれそた相手の方に一筋だとお聞きしてまいたが」

「フン！　どこの神族も多情で浮気者だ、奥方に内緒で愛人を囲ってたんだろ」

母様は愛人じゃないと叫びたかったが、話を突っ込まれて聞かれると嘘がばれそうなので我慢する。

「レイカちゃんの前でそんな事言わないで下さい」

「レイカの父親がフェンロン大将軍ならその娘が不思議な力があったとしても可笑しく無いかもしれん」

「レイカって変なの？」

意地悪そうにニヤリと笑い面白そうに話し始める。

「お前が普通だと思ってるのか、その容姿からして珍しいだろう。黒い髪なぞ俺は初めて見るし金の瞳は神族でもわずかしかいない。それに加え神力を食う力など聞いた事が無い、お前は人間なんかじゃ無いと保証してやろう」

レイカが神力を食べる！！？？

サンおじちゃまもファン様達も誰もそんな力があるなんて言ってなかった。

「皆はレイカの事人間て言っていたもん」

「皆とは誰だ」

「母様とファン様達とサンおじちゃま」

「その中に龍族はいるのか」

「ファン様達とサンおじちゃまは龍族だけど」

「龍族としての正式な名前はなんだ」

「へっ？？　そう言えば知らない」

龍族ならロンが付くから単純にファンロン、サンおじちゃまはサンジュンロンだったような気がするけど自信が無い

「本当に龍族か」

疑わしそうに聞くフォンフー様

「ファン様は金の髪のとっても綺麗な人でここよりズーット立派なお屋敷住んでるんだから、それに三人の侍女さんも龍族で金の髪の綺麗な人ばかりなんだから！」

「金の髪の龍族が四人もいるだと、インフーは聞いた事があるか」

「いいえ私も初めて知りました……　本当ですかレイカちゃん」

インフー様まで疑わしそうに聞いてくる。金の髪がどうしたと言うんだろう？レイカにとっては見馴れた色、黒髪だって母様もそうだし、フォンフー様の白い髪の方が余程珍しいく感じてしまう

「嘘じゃないもん　ねえっハク！」

「ウッキ！」

「お前は金の色の意味を知っているのか」

「意味なんてあるの？　確かに金色は綺麗だけど」

「金の色は天帝の色だ。　金の髪と瞳を持つ者は天帝の血を受け継ぎ大きな力を持っているとされている」

天帝様！！知らなかった。

「レイカって凄いの！」

「そうだ、金の瞳を持っている上にその力だ普通で無いのは確かだ」

「本当に本当、レイカは神力を食べちゃうの！」

「そうだ」

思わずこれは凄い事だとレイカ自身驚いたが……もしレイカが願うだけで神力を奪う事が出来たらどうなるんだろ

この力があればあの男から母様を救い出せる!?

「どうすればレイカはその力を使えるの!」

「何を考えている」

「神族の神力を食べつくす事って出来るかかな？　フォンフー様」

すると二人は唖然とした顔になるが突然笑いだすフォンフー様

「あっはははは～あっはははは～　お前はなんて事を言い出すんだ、神力を食べつくすだと　クックックックック……」

「むう……　フォンフー様がレイカに力があるって言ったのに」

インフー様は顔を青ざめさせ嗜めるように言う

「レイカちゃんそんな恐ろしい事を考えてはいけませんよ」

神力を食べるのは怖い事なのかな？

人を食べちゃう訳じゃないのに……

少し試してみようとインフー様に抱っこされているので目の前の首筋に唇を押し付けて吸ってみる。

ちゅ～うっう～う

「！」

「ひぃぃぃーーー　レッレ…　／／／／／／　」

目の前のインフー様の浅黒い肌がハッキリ赤くなるのが目に映ったと思った瞬間レイカを抱っこしたままインフー様の体が仰向けに倒れる。

キュ――――バッタン！！

「キャアァーー！」

「キッキー！」

インフー様の体の上だったので衝撃だけで痛みは無かったが、レイカの体の下にいるインフー様は顔を真っ赤にさせたまま気を失っている！

「インフー様大丈夫！！　どうしよう、レイカが神力吸っちゃったから！！？？」

ペシッ！

頭に軽い痛みを感じ見上げるとフォンフー様が呆れた顔をして仁王立ちしている。

「なんて突拍子もないガキだ！」

「フォンフー様、どうしようインフー様が死んじゃう！」

「バカが気絶しているだけだ。それにお前は神力を吸い取ってなんかいないぞ」

「へっ？？？？　じゃあ何で気絶してるんですか」

「……　ある意味昇天したのかもしれんな…」

？？？？

憐れむような眼差しを気を失ったインフー様に向け、意味の分からない事言う

インフー様の体の上に何時までも乗っかっている訳にもいかないので、体をどかすけど気絶したままで、力を吸った訳じゃないのなら何故倒れたんだろう？？？？

考え込んでいるとフォンフー様が少し怒った口調で話す

「おい、二度とこんな事するな」

「ゴメンなさい…　でもレイカは力が欲しかったの…」

「その事では無くインフーにあんな真似を二度とするなと言ってるんだ。……何時か襲われるぞ」

「襲われるって、叩かれるの！」

「…　まっそんな所だ。　それよりお前は力が欲しいのか？」

「はい、レイカは母様を助ける為にも力が欲しい…」

「ふ～ん　なら俺が協力してやろう」

「本当！」

「だがインフーには内緒だ分かったな」

「はい！」

フォンフー様は親切心からでなく何か悪意を感じる気がしたが、力を得る事が出来るならどうでもいい

そして…

漸く意識を取り戻したインフー様だったが、レイカを見るとうろたえて挙動不審になった為その日の勉強は取りやめになってしまったのだった。

能力開発しましょう

朝からインフーの様子がソワソワいていると思えば、レイカと俺を一緒に勉強させようとしていたのかと納得したが五歳のガキと勉強だと！ふざけるな

インフーが可笑しくなっているのは分かっていたが

少しでもレイカと関わりたいと思っているのがバレバレ

しかし俺より字が書けるとは最近の五歳児は侮れない、レイカにバカにされ思わず力を向けてしまったが無傷な上に俺の神力が効かないというより食ったという印象を受けた。

想像以上の化け物なのかもしれない

レイカは自分の存在の異質さに気付かずその力を引き出したいとまでぬかす。

子供だからだろう

インフーの首筋に吸いついた時は面食らってしまったが

まだ五歳なのだから性的な意味は無いのは分かっているがインフー

はそうでなかったらしく、真っ赤になって気絶するとは無様だ

まさか童貞では無いだろうな

インフーは九人目の教育係だ…　これまでの奴は俺の皇子という肩書を利用しようとする下種な者、上の兄弟の命で暗殺を狙う者ばかりで中には俺を押し倒そうとするバカもいたが、その体を切り刻んでやるが虎族のため一命を取り留めてしまい今でも後悔している。なぜ首を刎ねなかったのかと……

そして九人目にしてやっと真面な奴がインフーだった。生真面目で融通は効かないが俺に対し真摯に接してくれる数少ない奴だったが、レイカに対する執着を見ていると本当に道を踏み外さないか心配なので忠告してやる。

「インフー、手を出すにしてもせめ初潮が始まるまで待てよ」

人間の成長は早いので後十年も待たず子を産める体になるだろう

「しょっ初…潮…／／／　なんて事を仰るんですか！！　私はそんな外道な事は致しません！　／／／」

「一応、釘を刺しただけだ…　それより確認したいんだが女の経験はあるんだろうな」

「私は健全な男子です」

レイカに只ならぬ目を向けて健全と判断するかわ甚だ疑問だ

「それと、勉強以外は無暗にレイカに近ずくな。命令だ」

「どっどうしてですか！」

「虎族としてのお前の対面の為だ。変な噂がたったら王都に戻すぞ」

「そんなー」

本人は自覚していないようだが五歳の幼女に頬を染める大人など不気味でしか無い

レイカの身の安全も確保した方がいいだろう…　色恋など全く面倒なものだ

だがあのガキを磨き上げて側に置き駒として使うのに打ってつけ、あの神力を食う能力を引き出せば俺はあいつから自由になりこの国を出てやる。

レイカが俺の元に来たのは天の配剤としか言いようがない

俺は必ず自由になる

レイカ、お前を犠牲にしようとも

「いいか、今から少しづつ神力を流し込むからその力を感じろ」

「はい」

俺達二人は妖獣の森に来てレイカの力の訓練をしている。屋敷だとインフーが邪魔で煩いのだ、だがレイカを連れ出したら連れ出したで色々詮索してウザい

レイカの額に手を当てながら少しずつ神力を流し込んで行く。通常は怪我や体が弱っている時に治癒の力と攻撃の力と別のように思うが源となる力は同じでその力をどう体現するかは自分の意志による。今は治癒の力を流し込んでいるが健康な体に神力を流すなど始めてだったので普通はどうなるかなんて知らないが、レイカの体に流し込んだ神力は底なしの壺に水を満たすように何処かにのみ込まれて行く。

「おい、どうだ感じるか」

「う～ん……　よくわかんない…」

普通の人間でも虎族の持つ気配を感じ萎縮するのに神力を注いで何も感じないとはこいつ不感症か……試しに一気に大量の力を入れてみる。

「どうだ？」

「変わらないよ……」

バシッ！

「痛い！　酷いフォンフー様　叩かなくてもいいでしょ！！」

「ウッキィーキッ！！」

「撫でてやったんだ！　俺が本気で叩くと首がもげるぞ」

俺の神力を何も感じないだと、とんだ不感症女だが、こうなったら最終手段を行う事にした。

「おい、そこに立ったまま動くな」

俺をいぶかしみながらも素直に立っているがハクは危険を感じたようでレイカから離れ昼寝をしているロウの腹の下に潜り込む。主人に似ず賢い奴だ

両手を上にあげて掌に神力を練り力を圧縮して行くと光の球体が現れる。

「レイカ、これが何だか分かるか」

「う～ん　神力の玉？」

「正解だ」

これに当れば数千の風の刃がレイカの体をひき肉のように切り刻む代物だが何の躊躇いもなくレイカに向かったその光の玉を投げつける。

ヒューン

「へっえっえーー」

パッシィィーー

レイカは間抜けずらを晒しながら光に包まれるが静かに吸いこまれるようにレイカの体に吸い込まれて光は瞬時で消えてしまう。

尻もちをつき座り込むレイカを見降ろしながら声を掛ける。

「どうだ、少しは感じたか？」

「こっ殺す気！！」

目を白黒させながらも俺を怒鳴るとは流石だ

「お前は神力が効かないのは分かっていたからやったんだから、殺意はない」

「うそ、絶対に嘘！　レイカに万が一何かがあっても良いって思ったでしょう！！」

神力には鈍感でも他は鋭いらしい。これで死ぬならそれでいいとも思ったのは内緒にしておく

「それより、今度こそ分かっただろうな」

「はい、眩しかった！」

パシッ！

さっきより強めに撫でてやると頭を押さえて縮こまる。

「誰が視覚的な事を聞いた！　俺の言っているのは感覚的な事だ」

五歳児にしては頭が良いが偶にこんなボケをかますが、態となのか？？

「酷い、フォンフー様の鬼畜、冷血漢の不能やろう！！」

不能！！

涙目で睨みつけながらとんでもない事を言う

「お前意味分かって言ってるのか！？」

「えっ？　知らない…　学問所の女の子が男の子を怒鳴る時言うのを真似しただけ？」

どんな学問所だと突っ込みたくなる。インフーが今の言葉を聞いたら泡を吹いて倒れたのではないかと思うと可笑しくなる。

しかし神力を感じられないとはどういう事だ？？

もっと大きな力でないと感じないのだろうか

「もう一度そこに立て」

流石に二回目は何をされるか感ずいたようだ

「嫌よ！　レイカが死んだらどうする気」

「お前は死なない。俺が保証しよう」

絶対とは言えないが多分大丈夫だろう

そして渾身の力を掌に集約して行くと先程の光球の五倍近くの力を練る。まともにこの力に当たれば、この森見渡す限りの木々が切り刻まれ跡形も無くなるだろう、レイカの体の肉片一つも残らない事を保障する。

「レイカ、自分の能力を操りたいなら先ずは神力を感じて理解しろ」

「だかっらて死にたくない！」

「初めて会った時はロウに食われたいと言ってただろう」

「あの時と状況が違うのーーーー」

「諦めろ！」

そう言って後ずさるレイカに向かって光球を投げつける――――――

恨むなよと心でもしもの事を思い詫びておく。

フォンフー様の馬鹿ーーーーーーーー

と心の中で叫びながら光球を避けれず立ちつくす

これで死んだらあの男同様にフォンフー様も呪ってやると心に誓うと同時にレイカは眩いばかりの光に包まれる。

光の洪水に呑まれ目の前が真っ白になるのは初めと一緒だが今回のは中々治まらず、まるで白い空間に閉じ込められた錯覚に陥る

もしかして冥府の国に落ちたのかと一瞬脳裏をよぎったが、体の中に何かが入り込みそのまま何処かに消えて行くのを感じる。どこに流れているのかは分からないがレイカの体を通して何処かに消えて行く

フォンフー様の神力はどこに消えて行くの？？？？

不思議に思いながら徐々に光が治まりレイカの中に全て治まってしまった。

痛みは全く感じず無傷、生きている！。

ホッとするがフォンフー様のあまりの無茶ぶりに腹が立つ！！

少しは毒を吐かないと気が治まらないのでフォンフー様を見やると何故か地面に仰向けで倒れていた。

駆け寄り覗き込む。

「フォンフー様どうしたの？」

気遣いながら声を掛けると睨んでくる…その顔には疲労が見えていた？？

「お前の為にかなりの神力を消耗したんだ。これで何も感じなかったと言ったらこの森に捨てるぞ！」

何それ！！　そこまでしてくれとレイカは言っていない。本気で殺す心算だったのではないかと疑ってしまうが、仮にもフォンフー様が主で、本気でこの森に捨てられそうな気がする……　！！はっ、それが目的でこんなに遠い森までやって来たのだろうか…不本意だけど素直に答えるしかない

「なんか変なのが体に入ってくるのを感じた！」

「変なの！！　俺の神聖な力を変とはなんだ！！」

「ひぃ～　ゴメンなさい。　でも少しは進歩したのかな？」

「フン！」

少々怒りっぽすぎるフォンフー様は、少しインフー様を見習って欲しい

ヨロヨロとフォンフー様は立ち上がりロウの所まで歩きそのままロウに寄りかかり座り込んでしまう。

「俺は疲れたから少し寝る。　静かにしてろ」

「はーい」

そのままロウの毛皮に包まれるように寝てしまう。レイカの力の訓練のせいで結構消耗してしまったようだ、口は悪いけどこうやって協力してくれるなんて本当は優しいのかもしれない…狼のロウもこんなに懐いてるんだもの

スヤスヤと眠るフォンフー様の顔を見ているとあどけない十歳にしか見えず、とても四十四年も生きてるなんて不思議。レイカも母様と同じ程の寿命が欲しかった…せめてレイカが大人になる前に会いたい母様より老けて合うのはなんて絶対に嫌

早くこの力を使いこなしてあの男の神力を根こそぎ奪えばきっと勝てるはず

だけどレイカの食べた神力はどこへ行くんだろう??

そのまま自分の力になればもっと戦えるのに勿体ない

「キッキー」

「ハク、さっきはよくもレイカを見捨てたわね」

何処からともなく現れたハクに文句を言ってやるが、気にする風でもなくレイカの頭に乗る。そう言えばハクって全然大きくならず会った時そのままの赤ちゃんの大きさだから今だに頭に乗せれる。

「ハクも変だよ」

もしかして普通の猿と違い寿命が長い種類なのかな?

結界の猿と同じだと思っていたけど勘違いで小さい体の猿なのかもしれない。

フォンフー様の横に腰掛けながら色々考えていると何時の間にか寝てしまった。

「レイカ！　起きろ」

怒鳴り声で起きると何故か寝る前よりやつれた顔をしたフォンフー様が睨んでいる。しかも空は赤く染まり夕方のようだ

「もう夕方！　皆が心配してるわ、フォンフー様早く帰りましょ」

「お前何をした！」

「へっ？？？？」

喋るのも辛そうに顔も浅黒い肌でも顔色が悪いのが分かるほど

「大丈夫ですか？」

「お前が俺の神力を根こそぎ食っただろー」

「レイカしてない」

「くそ！　このまま日が落ちると不味いロウ帰るぞ」

力無く立ち上がりロウの背に倒れ込むように座る

「お前も乗れ、日が落ちれば妖獣が現れると今の俺では敵わない！」

「えっ」

妖獣と聞き慌てる。一度も会った事はないが母様に妖獣の恐ろしさを教えられていたのでハクと飛び乗ると同時にフォンフー様が命じる。

「ロウ、急いでこの森を抜けろ！」

掛け声と同時にロウが凄い勢いで森の木々の隙間を縫うように突き進んで行くがフォンフー様がずり落ちるように捕まっているのがやっとのようで、レイカは落ちないよう何とか支えるが五歳児の力では難しい

「ロウお願い少し速度を落として、フォンフー様が落ちちゃう」

「駄目だ！　出口まで緩めるな」

ロウは主人の命の通りに従い突っ走るが、既に日は落ち森は真っ暗な闇の世界に変わる。狼のロウはそれをものともせず木々をすり抜けて行くが一向に森を抜けれない

そして突然ロウが足を止めてしまう

「止まるな…走れ…」

弱々しい声でフォンフー様が命じてもロウは動かず反対に自分から降りろとばかりにしゃがみ込むと同時にフォンフー様の体が地面にずり落ちてしまう。

ドッサ！

「フォンフー様！」

レイカも急いで飛び降りて抱き起そうとするが怒鳴られる。

「くっそー　お前のせいで俺達はここで妖獣の餌食だ！」

「そんな事言われても……」

「グルルルルーーーグゥーーー」

ロウは低い声で唸りながら辺りを威嚇い始めると、徐々に周囲からザワザワと幾つもの呟くよな声が聞こえて来る。

（　旨そうなガキが二人もいる　）

（　旨そうだ…　旨そうだ…　）

（　イッヒッヒッヒッヒ～～～～　なんて軟らかそうな肉、旨そうだ　）

（　切り裂いて内臓を引きずり出せ！　）

（　殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ殺せ、殺せ、殺せ！　）

効きたくもない幾つものおぞましい声がレイカの鼓膜に響く、妖獣は一体だけでなく数体いるようだ

どうしようこのまま死んじゃうの！

「ウォォーーオーーーーンーー」

ロウが遠吠えを発しった後に暗闇に向かい飛び込んで行くと同時に凄まじい死闘の声が暗闇の森に響く

ギャアオオーーーーン

バッキ！　ドッドドガーーーーッツ　ズズッズーーズーーン

ガァァーーーーーーーーーーーー

レイカには何が起こっているか皆目見当がつかず恐怖で震えるしか無くフォンフー様の体を庇うようにしがみ付くしか無かった。

「せめて神力が戻れば…」

悔しそうに呟くフォンフー様

レイカが神力を食べた所為でこんな事になッてしまった。

ドッサ！！

「ロウ！！」

目の前に血だらけのロウが虫の息で落ちて来って、闇の中から真っ赤な禍々しい目が幾つも浮かんでいた。

ボロボロの体を奮い起して立ち上がりながらレイカ達を庇うように前に立つ

「ロウ…お前だけでも逃げろ…」

「クゥーン…」

フォンフー様がロウに命じるけど去ろうとはしない、そいて確実に赤い目が近づいてくると暗闇の中でもその姿が分かるようになってきた。

目の前にロウがいるのでよく分からないが真っ赤な目と裂けた口からのぞく牙、その口から聞こえる呼吸音すら不気味だ、そして体の大きさまもまちまちであるが不気味な容姿は伺える

「ひぃーーーーっーー」

どうしよう!!　このままでは皆死んでいまう

「まさかこんな事で死ぬとは…　だがこれであいつから自由になれるのか……」

フォンフー様は諦めてしまっている。

レイカはヤダ!!

こんな所で死ぬなんて
母様に会うまでは絶対に死ぬもんか！
（　先ずはオオカミから食うか？　）
（　おれはガキだ　）
（　おれもだ　）
（　なにをいうー　オレ様が先だ　ギャアァーーーー　）
どうやら妖獣達が仲間割れをし始めたようで、闇の中諍いを始める
今のうちに何とかしないと
フォンフー様に神力が戻れば一番いいのだ
レイカが神力を返せれば
でもどうやって??
考えている内に小さな声でフォンフー様が囁く
「レイカ、今のうちに一人で逃げろ……　俺は動けん…」
「そんなの嫌　レイカは諦めない」
「本当のバカか……」

周りでは妖獣が殺し合いを始めたようで此方をあまり気にしていないようなのでまだ幾らかは時間がある

「フォンフー様、神力って何処から来るの？」

「こんな時に何だ…　神力は神族が持って生まれた神核に宿り、虎族の場合は虎核と言う……」

珍しく素直に答えてくれるのは最後だと思ったからだろうか

弱気なフォンフー様など気持ち悪い

レイカは目を閉じ神力が消えて行った方向に意識を集中する。

レイカが食べた神力は何処かにあるはず……レイカの体の中では無い別の場所

例えばファン様が瞑道を開けて移動できるように力を瞑道を通らせて移している

瞑道

真っ暗で虚無の世界が永遠に続く場所で力があれば異世界にもいける狭間の世界だとファン様が言っていた。

心で瞑道の闇を開ける

そして神力は光

フォンフー様がくれた？神力の光を想像し光球を作りだしそれを闇

に落としていくと光は何処かに吸い込まれるように流れて行きその先には大きな太陽のように眩い光があった。

「見付けた！！」

そう叫ぶと共にその光に意識を呑まれてしまった。

暗闇の中妖獣共が殺し合いを始め既に数体が死んで残り三体呑み

虎族の俺には闇など関係無くその様子を見る事が出来た。

レイカと言えば逃げろと言ったのに俺にしがみ付いたまま動かない

泣き喚かないだけましだが後数刻すれば妖獣に生きたまま食われてしまう運命

せめてこの場でレイカを殺してやった方が優しさだろうかと決めかねていると突然レイカが叫ぶ

「見付けた！！」

何だ！？？？

レイカは上半身体を起こしたかと思うと俺の目を覗き込む！
目が金色に光り表情は人形のように無表情
恐怖で気でも狂ったかと思った
『 受け取るがいい 』
「えっ？！」
俺の額とレイカの額が合わさる瞬間凄まじい光が流れ込むと同時に
虎核に神力が満ちるのを感じる。
凄い圧倒的な力
これ程純粋に練られた神力を感じた事がないが
レイカはそのまま体を崩れるように地面に横たえた。
やれる！
何が起こったか考えるのは後だ、今は妖獣を始末するのが先決
体の隅々に力がみなぎり以前より神力が上ったようにさえ感じ立ち
上がる。
「クゥン！」
ロウがいち早く俺の変化に気がついたようだ。

「ロウ、後で傷を治しやるから大人しくしてろ」

「ウォッン！」

そして妖獣達も俺の様子が一変したのを知り慌て始める。

（　何だ！　このガキ、さっきと違うぞー　）

（　皆で襲え！　）

（　殺せ！　殺して食えば力が増す！　）

妖獣は俺目掛けて一斉に襲いかかるが、既に練ってある神力を妖獣に解き放つ

「食らえ！　俺の力をー　」

ピッカーーーーー

（（（　ウギャァァァーーーッアーーー　）））

妖獣共は光に包まれたと思った瞬間に風の刃が竜巻のように取り囲むとその中で切り刻まれ妖獣の絶叫と青色の血が辺りに飛び散り、竜巻が治まった後に残ったのは細切れになった肉と骨の残骸の山

「なんとか助かったが長居は無用だ」

かなりの血が流れそれに魅かれた妖獣共が大勢襲ってくるのは正直御免だ。

「ロウ、俺の血を飲め」

指先を噛みちぎり、その滴をロウの口に流し込む。　瀕死に近いロウを瞬時に回復させるのにはこれが手っ取り早い

ペロ、ペロ、ペロリ

指先の血を大きな舌で最後まで舐めつくすとロウの体の傷は消えるが毛に付いた血糊はそのままだが仕方がない

レイカの小さな体を抱きかかえると胸元からハクが顔をだす

「お前の主人は訳の分からない奴だな…」

「キッキー？」

ロウの背にレイカを乗せ、自分も飛び乗りロウに命じる。

「屋敷に帰るぞ！　全速力だ！」

思わぬ展開でレイカには助けられたのだろうか

一体どうやって俺に神力を返したのか分からないが胸が高鳴る。

なんて規格外の力

レイカは俺から奪った以上の力を返したのだ

普通なら器以上の力を返されても溢れてしまうが、レイカの返した力は純粋に圧縮された神力の塊だ

レイカがいれば虎王の王座すら簡単に手に入る。

だが俺の欲しいのは自由

だがまだ時期では無い

俺はレイカの力に酔っていた

そしてこの少女に対する所有欲が湧きあがる。

レイカを誰にも渡さない

この力は俺のものだ。

ロウの背に乗り闇を切り裂きながら疾走する中、己の幸運さに笑いが止まらなかった。

何事もほどほどにしておきましょう！

フォンフー様のお屋敷にお世話になってから既に五年の月日が流れ私は十歳になり、侍女の仕事もそれなりにこなせるようになりお給金を貰えるようになった。

早く母様のいる青龍国に戻りたかったが今だ自分の力を自由に引き出せない

あの妖獣の森での騒動の後、お屋敷に戻ると心配したインフー様やチェンさんに大目玉を食らい十日間罰としてフォンフー様と勉強漬けの毎日を送ったが、妖獣の森で何が起こったかは二人の秘密とされ、妖獣に襲われただけと話した。

それからもう一度フォンフー様に力を流し込もうとしたが上手く行かずじまいで成功したのはあの一度っきりだし、神力を奪う練習をしているが思ったように出来ないが、何故か毎日のようにフォンフー様は私に神力を与え続けている。

訳を聞くと将来への貯蓄だと言っていたけどどういう意味だろう??

毎日昼食のお世話をしてから力を貰うのが日課だ。何故ならその時間がインフー様が屋敷の仕事をするのでフォンフー様から離れるのだ。

「全くお前は体ばかり大きくなって、自分の力は全くの進歩が無いとはどういう事だ！」
レイカの額に手を当てながら神力を流し込みなが文句を言うのも何時も通り
何時の間にか私とフォンフー様の背に追いつき同じぐらいになってしまったが、その間フォンフー様は全く変わらない姿のままを保っている。
「私だってこれでも一生懸命です。　最近思うんだけど命の危機に陥らないと働かないんじゃないかなと」
するとフォンフー様の目が意地悪く光る
「成程、死ぬほどの目に会えばいいのだな」
突然目の前に剣が突き付けられ、思わず避けようとするが足先を踏まれて仰向けにひっくり返ってしまう。
「キャアァーーーッ」
ドッスン！　バッタン！
ズッザン！！
「何をする……」
頬に光る刃先が掠めて床にささる剣

「ヒィーーーー」

相変わらず私の扱いがぞんざいな主、何時か本当に殺されるのではないかと疑っても仕方ない。　頬が少しピリピリ痛むので傷ついたのが分かる…絶対女の子扱いしてない！

「信じらんない、女の子の顔に傷をつけるなんて！」

「そんなかすり傷ほっとけば治る。それよりどうだ力は引き出せそうか？」

見降ろしながらマジマジと聞いてくる。

腹が立ち、勢いよく立ち上がってフォンフー様の頬目掛けて手を振り下ろすが空振り

簡単に避けられてしまう。

「フォンフー様、こういう時は殴られるものですよ！」

「なぜ俺様がお前ごときに殴られねばならない」

これで四十九歳なんて…人間なら孫もいるおじいちゃんのはずだけど見かけどおりの子共だよね

「フン！　近い内にフォンフー様より大きくなって目にも見せてやるんだから」

「お前がヨボヨボの婆になった時は哂ってやる」

悔しいーーーー　勉強は私の方が出来るのに口で負けてしまう。

そこへインフー様が部屋に入ってくる。

「何をそんなに騒いでいるのですか？」

「チッ、五月蠅いのが来た」

フォンフー様は舌打ちし、私は急いで顔の傷を隠そうとするが目敏く見られてしまう

「レイカちゃん！！　どっどうしたのですかその傷！！！？」

咄嗟に嘘をつく

「家具にぶつかりそうになって少し擦ってしまいました」

床を見ると剣は消えており誤魔化せそうだ、インフー様は何時まで経っても小さな女の子扱いで過保護過ぎるから、少しの事でも過多に反応して困るのだ……フォンフー様とインフー様を足して割ると丁度いいのかもしれない。

「女の子が顔に傷を作るなど！　直ぐにチェンさんに手当てして貰いましょう」

インフー様に手を取られて連れて行かれそうになるが、フォンフー様が声を掛ける。

「インフー、俺に用があって来たのでは無いのか？」

すっかり私に気を取られ本来の仕事を忘れてしまっている。

「あっそうでした。王都から手紙が届いたので急いで持って参りました」

それを聞いた途端嫌そうな顔をするフォンフー様、年に数回王都からそろそろ戻って来いと手紙が来るのだが儀礼的に送ってくるだけだとそれを無視続けているので今回もその手紙だと私は思った。

「全く紙の無駄だと思わんのか…」

丸められた手紙を受け取った筒から取り出して目を通し始めると見る見る顔色を変え始めその手紙を空中に放り投げると神力の風で粉々に切り裂いてしまい、辺りに紙吹雪が舞い散ってしまう

「もー　掃除する身にもなって下さい！」

何時もは屑かごに捨てるのに今回は切り刻んだせいで床が紙屑だらけで思わずそう文句を言うが、インフー様の反応は違った。

「フォンフー様、何が書かれていたのですか!?」

「クソッ！　王都から兄上がお越しになる……」

「まさか、兄上とは第三皇子イェンファフー様ですか！　あのお方がこのような鄙びた場所にお越しに！」

「俺にかまう酔狂はあいつ位しかいないだろ」

忌々しそうに吐き捨てる様子は、かなり毛嫌いしているのがうかが

えた。

何れ王都に戻った時の為にチェンさんから王族の方々の事を最低限知っておいた方が良いからと教えて貰った知識では、第三皇子イェンファフー様は次期虎王と目されているお方で文武両道、品行方正、眉目秀麗で紺青の髪と瞳を持つ皇子様で国民の圧倒的支持を受けているらしい

そんな立派なお方を嫌うなんて自分とは正反対だからそりが合わないのだろうか？

「それは一大事、到着後予定は何時になるのでしょうか？　急いでお迎えする御用意を致さねば！！」

「到着は明日だ、用意のしようもないぞ……」

「！！　それでは時間が足りませんが取敢えず用意は致さねば！レイカちゃんも手伝って下さい」

「はい」

そう言ってインフー様に手を取られ部屋を出た。

なんだか大変な人が来るようで忙しくなりそうだが、皇子様らしい皇子様を見れそうなので少し期待してしまう

このお屋敷にも皇子様がいるけどどちらかと言うと悪ガキぽい

女の子として皇子様に憧れるのは仕方が無いと思う

どんな方だろうとワクワクするのだった。

あいつが来る！

このまま何処かに逃げ出したい衝動にかられるが、何処へ逃げても必ず見つかるだろう

あいつに立ち向かうにはまだ力が足りなかった

レイカの力は今だ開眼されておらず、ただの人間の少女でしかない…が、その容姿はずば抜けて美しく成長してきていている。

背は忌々しい事に俺に追いつき、少しずつ女らし膨らみも出て来てきた。長く伸ばされた美しい黒髪は濡れたように艶やかだが、金色に煌めく月のような大きな瞳は老若男女すべてが魅いられる。大人になれば高位の虎族がこぞってレイカに愛をささやき我が物にしようと蝿のように寄って来るだろう。

俺の欲しいのは美しさなどではないく甚大な力

だがあのボケ娘は神力に鈍感過ぎる…この五年間、毎日俺の神力を与え続けているが最近ようやく力の流れを感じるらいいが自分で神

力を食う事も取り出す制御が出来ない。何れレイカから力を取り出し利用しようと力を食わせ続けているのだが、これではただ飯ぐらいの大食らいでしかない！

少し力の引き出し方を考えた方が良いのかもしれないが、今は早くあいつを王都に追い返す事だが、目的は俺を王宮に連れ帰る事だろう。

折角あいつの下から逃げ出して得た俺の場所をこうも早く取り上げられようとは……

虎王はあいつを抑える事が難しくなって来ているのかもしれない。

あいつが王位に就く前に逃げださないと

明日はあいつと顔を会わすと思うと血の気が引く

まだ俺はこんなに弱い

屋敷は白虎国の第三皇子様をお迎えするのにてんやわんやの騒ぎ、屋敷の中を一から大掃除をして一番立派な客間を飾り立てる。料理人のトンガンさんが一番大変らしく近隣の街を回り食材探しにてんやわんやと大騒ぎのため料理が出来ない、その為チェンさんの家で作った食事をふるまって貰って済ました。

「凄いわね！　明日は第三皇子様がいらっしゃるなんて！！　こんな田舎で虎族の王族にお会い出来るなんてあり得ない！」

「カヤさん知ってるの？」

「この国で第三皇子様を知らない人間はいないわ、絵姿が出回ってそれは人気よ。あ～～全女性の憧れの皇子様だよ　直に拝見出来るなんて死んでもいいわ～」

「婚約者がいるのにそんな事言っていいんですか…」

「あんなイモ、結婚するだけ感謝して欲しいわ」

相変わらずキツイ言動だけど本当は優しい人だ、メイリンさんとヤヤさんは既に結婚して所帯を持ち近くに家を貰い通いで働いている…因みに相手もここの使用人。、だから今はカヤさんと二人で部屋を使っているけど来月には一人とハクだけになってしまう。

コンコン

誰かが窓ガラスを叩く

「ハクが帰って来たわよ」

カヤさんが窓を開けてくれると真っ白の毛並みのハクが飛び込んでくる。

「ウッキー」

お礼を言うようにハクが鳴くと私の膝の上に乗り甘えてくる。ハクは相変わらず小さいままだが倍の大きさになり少しは成長した。何時もベッタリくっついていたけど一人で外を動きまわり遊ぶようになったが最近夜遊びを覚えたようで、私が寝いる頃に戻ってくる。

「こらハク、ダメでしょ暗くまで遊んじゃ！」

「ハクもお年頃で恋人がいるんじゃない」

「そうなの？」

「キッキ？」

どうやら違うようだ

「さあ～もう寝ましょ。明日は早起きしてまた掃除よ…」

皇子様に会えるの嬉しいらしいが、流石に掃除ばかりでゲンナリいているようだ

「お休みなさいー」

「ウッキ」

明日は大変な一日になりそうだけど楽しみ

翌日の朝、皇子様の前触れの使者がいらっしゃって到着は昼過ぎになるらしく昼食の用意はいらないらしい。

フォンフー様は自室に閉じこもり出てこないので、かなり嫌っているみたいだ。

今、私はインフー様と一緒に昼食をお盆にのせ届けに行く途中なのだが

「インフー様、フォンフー様はお兄様がお嫌いなんですか」

「それが…、お小さい頃はそれはそれは慕っていらっしゃったらしいのですが、ある時突然フォンフー様が一方的にイェンファフー様を避けるようになったらしく、私が教育係を任された時には既にその状態で詳しい経緯は知らないんですよ」

「意地悪なお方なんですか？」

「いいえ、それは素晴らしいお人柄でイェンファフー様を悪く言う人は一人もいません。だから私も何故お嫌いになるのか聞いたのですが教えてはくれませんでした」

「そうなんですか…」

性格があまり良いとは言えないフォンフー様だが、そんな訳もなく人を嫌うとは思えない。

フォンフー様の部屋の前に来るとインフー様が声を掛ける。

「フォンフー様、お食事をお持ちしました。入っても宜しいですか」

「レイカだけ入れ」

扉が自動的に開き、仕方なく私だけ入るとバッタンと閉まってしまう。

中には長椅子に横たわり目を瞑り寝ているように見えたが、食事を卓の上に置き声を掛ける。

「フォンフー様、起きて早く召し上がって下さい。お兄様がいらっしゃるのに着替えもしないで…　聞いてるんですか！」

「五月蠅い！　最近お前はインフーに似て来たぞ」

私に喚きながら起き上がるが、まるで駄々子のようである。

「それはフォンフー様がちゃんとしないからです。　さあ早く召し上がって下さらないと私は忙しんですから」

「レイカのくせに」

お腹は空いているらしく、何時もより簡素な食事だが文句は言わない。カヤさんの話によると他の虎族の方は傲慢不遜で人間を見下してやたら文句をつけたり、酷い時は言いがかりをつけては酷い罰を与え哂うそうだ。例えば料理人が毎日毛を剃るのは過去に料理に髪の毛が入っていたばかりに、その厨房の料理人全員と家族まで死刑台に送られたのだ。それ以来虎族に仕える料理人は顔の毛を全て剃るという話し、初めて聞いた時はあまりに横暴で腹が立ったが虎族

とはそういうものらしい

フォンフー様は少し我儘で横暴だが使用人に酷い事もしない（良い事もしない）、インフー様は優しく皆に接し傲慢な所は一つもない……青龍国でも嫌な龍族には…あの男以外はいなかったし、もしかして私は神族に恵まれていたかも

昼食を召しあがるフォンフー様にインフー様でさえ誉めたたえるイエンファフー様を毛嫌いするのか聞きたくなる。

「何故お兄様がお嫌いなんですか？」

「あいつは詐欺師しで偏執狂だ……　後はお前があいつを見た感想を聞いてからだ」

詐欺師で偏執狂？？？？　皇子様が？？？

食事を終えた後は、チェンさんが用意した王族の正装の衣装をフォンフー様に着付ける。

嘗ては、テンさんがいていたが私が正式にフォンフー様の侍女になり交代して貰い、テンさんは今は三人の育児に専念して忙しい

着替え終えたフォンフー様は皇子様らしく見え立派だ。まさに孫にも衣装

普段は絹ではあるけど簡易な上着と下衣に帯をしている呑みだけど、今日は正装の白の衣装だ。青龍国とは違い頭に長い白い布を被り金の冠で止めており、長衣も白く縁には金の糸で装飾が施され、腰には豪奢な腰帯をしている。一見すると美少女のようだ。

流石に王族、見惚れてしまう

「綺麗ですよフォンフー様」

「お前……死にたいのか」

ギロリと睨まれるが慣れているので何とも思わないが、先程からフォンフー様の指先が震えているのに気が付いていた。

あの傲慢不遜なフォンフー様が平素を装っているけど、もう直ぐ到着されるお兄様を恐れている

何故??

聞いても素直に答えるとは思えないので見ない振りおする。

私は大人だ

「レイカ」

珍しく名前を呼ばれる。

「何でしょうか」

「今夜、兄上の寝所に忍びこんで添い寝しろ」

添い寝とは一緒の寝台で寝ると言う事？　皇子様と!!!

「冗談は止してください。そんなことしたら首を刎ねられます!」

「お前が兄上の横で寝て神力を全て食いつくせば俺が止めを刺す」

何故こんな事を言われるかというと、私はどうやら寝ている内に神力を奪ってしまうらしく、試しに一度だけフォンフー様の部屋で内緒で一緒に寝た時は翌朝干からびたフォンフー様が寝ていた。

だからフォンフー様はそう言う事を言うんだろ

真顔でとんでもない事を言い出すフォンフー様、実の兄を殺すなど大罪だ！　しかもその片棒を私に課すなどとんでもない御主人様

「本気で仰っているんですか」

「冗談だ……お前が後十年成長していれば十分色仕掛けが通じるが、その体では無理だな……」

そう言ってジロジロ私を見る。十歳の体はまだ子供でカヤさんのように胸もないし腰の括れもない寸胴、最近わずかに胸がふくらみ始めたのは内緒

子供の私に色仕掛け！　私に体を差し出せと……呆れて物もいえないが本気でお兄様を殺そうと考えているようだ

「そんなにお嫌いならロウと何処かに行ってしまったらどうですか」

殺そうとかんがえるより余程良いと思うんだけど――　勉強をさぼるのが得意なのだから簡単な事

「逃げ切れる相手ではない」

フォンフー様が敵わない相手、益々興味が湧いてくる。

「そう言えば今日の神力の練習はどうしますか？」

「そうだな……」

フォンフー様は少し考える。

「俺の虎核はどこにあるか分かるか」

「虎核の場所？」

「俺の体に手を当てて探ってみろ」

言われた通りにフォンフー様に手をかざして神力を探ろうろして見るが…全然分かりません……いい加減焦れたフォンフー様は私の手を取りお腹に持ってくる。

グイッ

「ここに俺の虎核がある。自分で神力を直に吸い取るのを想像してやってみろ」

「はい、はい」

どうせ無理だと思うが言われた通りにして見る。

目を瞑りフォンフー様のお腹に当てた掌を少し押し当ててみると、確かに丸い物がある。薄い少年の体なので中に丸い石の存在がアリアリと分かり面白い

これが虎核なんだと思いながら手を当てているとなんだか掴み取りたくなってしまう

欲しい

ゾくりとしてしまう感覚に捕らわれ

どうしよ…直に掴み取りこの石を取り出して自分の物にしたい衝動が起きる

欲しい　欲しい　この玉が欲しい

欲しい　欲しい

欲しい　欲しい

欲しい　欲しい

欲しい　…欲望が止まらない…

レイカの様子が段々可笑しくなり始める

金の瞳をランランと輝かせ恍惚とした表情を浮かべる

「レイカ、どうした？」

呼び掛けるが反応が無い、そして突然腹部に強い痛みを感じ視線を下に向けるとレイカの手が俺の腹部にめり込んでいる。

「何をする！！」

「欲しいの……」

まさか俺の虎核が欲しいと言うのか。徐々にレイカの手が俺の腹に入り込み虎核を掴み取らんばかりだが、その手を掴み阻止しようとするが凄まじい力で此方が持ちそうになく、しかも神力まで奪い始める。

「グゥ……　ッツーーー」

凄い痛みが襲う

今のレイカが正気でないのは明らかで、このままでは死んでしまう。

試しに思いっきりレイカの頬を叩く、普通なら首が折れ死んでしまうだろうが今の状態では致し方ない……

バッシーーー！

レイカの体が吹っ飛ぶかと思ったが僅かに顔を背けただけだったが、パチリト瞬きをして何時もの目に戻る。

「痛い！　何で頬が痛いの？？？」

俺の腹に刺さっていた手を引き抜き自分の頬に当てるレイカ、だがその手には血は一滴も付いておらず、俺の腹を見れば衣服も破れて

おらず血も付いていない

幻覚を見たのか！？

しかし神力の殆どが吸い取られ、とても疲れてしまった……

「キャー　フォンフー様大丈夫ですか！！」

意識が薄れる中レイカの喚く声がする。

このボケ女！！

お前のせいだと文句を言いたかったがその前に意識を失くし倒れてしまうのだった。

バッシーーー！

頬に強い痛みを感じハッとすると顔を青ざめさせたフォンフー様

「痛い！　何で頬が痛いの？？？」

あまりの激痛に頬に手を持って行くと既に熱を持ち腫れているようだ！？

さっきまでフォンフー様のお腹に手を当てていただけなのに……私なにかやっちゃんだろうか？

混乱している中、フォンフー様の体が傾く

「キャー　フォンフー様大丈夫ですか！！」

何とか受け止めるが何時まで支えきれないので、静かに床に横たえさせて状態を確認する。

真っ青な顔をして気を失っているみたいで、どうやら私が神力を全部吸い取り食べてしまったようだ

神力を吸い取る事が出来たのは良かったけどこの状況はやり過ぎだ

今から第三皇子様がいらっしゃるのにとんでもない事をしてしまった……どうしよう

取敢えずインフー様を呼んで来て何とか誤魔化すしかない

あ～～なんて間が悪いの

兎に角今は、インフー様を呼びに飛び出すしかない私だった。

ヒェ～ン　不可抗力ですからフォンフー様許して下さいね……

心で謝るしか無かった私

皇子の事情

今から第三皇子イェンファフー様をお迎えすると思うと緊張で喉がカラカラだが呑気にお茶を飲むのも憚れて、玄関で立ちすくしかなかった。フォンフー様にも玄関にそろそろ御出で頂きたいのだがまだ着替えらていらっしゃるのだろうか？

私のような一介の虎族などが王族に仕えられるなど幸運だったが、第八皇子のフォンフー様と聞き少しがっかりしたのが本音。宮中でかなり素行が悪いと評判で教育係も何人も辞めさせる噂のあるお方にお仕え出来るか心配だったが、会ってみると傷ついた瞳を持った繊細少年でわざと虚勢を張り悪ぶっているように感じた。

きっと何かお辛い事があったのだろうと最初は同情でお仕えしようと思ったが今では畏れ多いながら弟のようにさえ感じ心からお仕えしよう心に決めていた。

フォンフー様はあまり王族らしからぬお方で自由奔放で豪奢な生活が窮屈らしく、この田舎で自由で気楽な生活をされていたので、私まで少し感化され緩い生活を送ってしまっていたため、今から王族中の王族で次期虎王とまで目されているイェンファフー様をお迎えするかと思うと、失礼がないか気が気ではない！！

なので今朝からシクシク胃が痛み食事も喉を通らずこのまま倒れて

しまいたい気分……

緊張しながら立っていると階段の上からレイカちゃんの切羽詰まった声が聞こえる。

「インフー様！！」

名を呼ばれ振りかえると階段の上に居るレイカちゃんの顔を見上げるともっと驚かされる！！

レイカちゃんの左頬が真っ赤に大きく腫れて痛々しい姿に、最近富に美しさがました可憐な顔が

「レイカちゃん、その顔をどうしたのですか！！」

こんな事をするのはフォンフー様しかいない

昨日は知らない振りをしたが右頬の切り傷は剣に寄るものでフォンフー様が負わせたのだ
だが今回は許せない

「私よりフォンフー様がお倒れに！！　助けてください！」

「何ですって！！」

フォンフー様が倒れるなど異常事態だ、一体何があったのだ！？

さっきまでの怒りがどこかに飛んでしまう

兎に角階段を駆け上がりフォンフー様の元に駆けつけると真っ青な

顔をし床に横たわっていた。

直ぐに抱き上げ、側の長椅子に横たえさせて呼び掛けてみる。

「フォンフー様どうなされたのです！　目をお覚まし下さい」

だが一向に反応が帰らず、神力で体を探るが悪いところはないがフォンフー様の虎核が枯渇しているのに気が付く

そこへ後を追って来たレイカちゃんが心配そうに聞いてくる

「フォンフー様は大丈夫ですか」

「いったい何があったのですか？」

「えーっとですね…　私がフォンフー様を怒らしてしまい殴られたんですけど…　その後突然気を失って」

レイカちゃんを殴る行為は許せませんが、それだけでフォンフー様がこうなるのが解せない

「本当にそれだけですか？」

聞き返すとレイカちゃんの美しい金の瞳が見る見る潤んで泣きだす。

「すみません…　私も訳が分からないんです…　うっううえ…ん…」

「あ～と……別にレイカちゃんを責めた訳ではないので泣かないで

下さい」

急いで膝を付きレイカちゃんを慰めるよう優しく抱き寄せる、

以前は今よりもっと小さかったのに、今は膝を付けば視線を合わす事が出来る程背が伸び少し体も膨らみが出て来た。後五年もすれば大人になり、もう五年すれば成熟した女性に育つだろう

きっと誰もが振り向く女性になるだろうその時は……

はっ！　いけない今はフォンフー様をどうにかしないと。

「フォンフー様は私が見ますから、レイカちゃんはチェンさんに頬を冷やして貰っておいで」

微笑んで言うと、安心したように涙を収めて頷く

「はい、フォンフー様をお願いします……」

そう言って部屋を出て行く。

フォンフー様が横たわる長椅子に戻り神力を注ぎ込もうとした時、下からざわめきが起こる。どうやらイェンファフー様がいらっしゃったようなので、一旦フォンフー様を寝室の寝台に横たえさせてから急いで玄関に向かうのだた。

階段を降りようとしたが、既にイェンファフー様と従者の三人の方が玄関に入られており家令が出向かい入れてくれていたようだ。

今回はお忍びでいらっしゃったらしく少人数で旅装束の簡易な服ながら相変わらずの凛々しいお姿、紺青の真直ぐの長髪を後ろを一つに束ね、切れ長の目を私に向けていた。

ゾクリっと背筋に冷たい物が走る。

イェンファフー様はかなり背の高いお方でお伴の方も警護を務める者達なのだろう何れも逞しい体をしてらしゃるがイェンファフー様もそれに負けてはおらず覇気さえ感じる。

上から見下ろすなど失礼なので、急いでイェンファフー様の側に行き跪く

「ようこそ御出で下さいましたイェンファフー皇子様、生憎と我が主フォンフー様が急に倒れられていまった為にお出向かいが遅れしまい心からお詫び申し上げます」

「フォンフーが倒れたのですか！」

驚いた声を出す。

「はい、イェンファフー皇子様をお出迎えする為に着替えている最中に突然倒れられ……」

言い終わるや否やイェンファフー様が階段を駆け上がり供の三人も

それに追随して行くさまはまるで群れを成す虎のように迫力がある。

玄関で茫然と見上げていると

「部屋はどこです！」

「あっハイ！　右を曲がった奥の部屋に……」

又しても最後まで聞かれず向かわれる姿は、弟を心配する兄の姿

噂にたがわず優しいお方だ、何故フォンフー様はお嫌いになさるのだろう。

それより後を追わねばと思い、急いでフォンフー様の部屋に急ぐが従者の三人が扉の前で立ち塞がれ入れない

「申し訳ありませんが、お通し願えませんでしょうか？」

「イェンファフー様のご命令で誰も通すなと言われております。フォンフー様は大丈夫ですので下で呼ばれるまでお待ちください」

「しかし……」

反論しようとしたがギロリと睨まれてしまい言葉が続けられない

立場は彼らの方が上だ

「分かりましたが、護衛は一人でご十分では？　宜しければ下にお茶の用意が出来ております」

「いいえ、イェンファフー様が休まれない限り我々も此方で構いませんのでお気遣いなく」

「そうですか、何かご用があればお呼び下さい」

一礼をしてその場を離れる。

なんだかとても肩がこる……長らく王宮を離れていたせいだろうか

何故かフォンフー様が心配になる。

あれ程嫌っているイェンファフー様と二人きりにするのが何故か不安だった。

一度お茶を持って様子を見に行こう

体がゾクゾクとして悪寒がする。

体に神力が流し込まれているがこの力は覚えがある……あいつだ

確かレイカに神力を食い尽され気を失ってしまったのを思い出す。

糞女め後で覚えてろ！

今は糞女よりこの変態だ

「離れろ、変態」

目を開けると俺をうっとりと眺める紺青の瞳、寝台に寝かされた俺に添い寝しながら頬を撫でる

「相変わらず口が悪いね。昔はお兄様と呼んでくれたのに」

「誰が兄だ！」

「確かに兄では無いな…」

俺は急いで奴から離れる為に体を起こそうとするが力が入らない

「無理をしてはいけないよ。そんなに神力は回復させてないから…ところで、どうしたらそんなに成るまで神力を枯渇させられるんだい？　教えてくれないだろうか」

ニッコリと笑いながらも俺の手を捩じりあげてくる。

「グゥッーー　俺も分からない…　急に眩暈がして倒れ…　分かる訳がない……」

「う～ん　今一嘘くさいけど信じてあげよう」

奴を睨みつけてやると嬉しそうに唇を歪める。

「その目で見られるのと一番グッときます――　早く成人の儀を迎えるのが楽しみだよ」

ガッキ！

「ウッ――　！！」

肩の骨が外され激痛が襲う。

「あんまり可愛い顔をするからつい力が入ってしまった。痛かったかい？　フォンフー済まなかった、今繋げてあげよう」

あいつが右手をを外れた肩に手をやり外れた腕を左手で掴み引っ張ると肩に腕の骨が戻る
グッキ！

「ウァッーーー　」

痛みで気を失いそうだ、神力が無い状態では痛みを抑える事すらできない。嗜虐性趣味の変態はわざと俺に痛みを感じさせて楽しんでいる。

「さあー、もう少し神力を分けてあげよう」

「お前の物など要るか！　サッサと出て行け」

「兄弟だろう、遠慮はいらない」

そう言うと同時に奴の力が俺に流れ込む。気持ち悪くて嫌な気が俺の虎核を満たしていく、こんな薄汚れた気など要らない、それよりレイカのあの純粋な気が欲しい

妖獣の森で受け取った力は清浄で強い光に満たされ、自分も清められたようだった。

俺はまたもやこいつに穢されているようで拒絶したいのに、力はどんどん俺の体を毒に犯されているようだった

くぅ……この状況が嫌悪感しか生まず精神が焼き切れそうで意識が遠のいて行く……

レイカの力が手に入ればこいつなど足下に平伏せてやるのに

その日を夢見て今は耐えるしか無かった。

イェンファフーは気絶してしまったフォンフーを見て苦笑してしまう。

「我愛しい君は本当につれない。そこが又可愛いのだが……」

気を失うフォンフーの唇の端に唇を落としてから、少しかさついた唇をペロリと舐めて顔を離す。

「あまり触れていると理性が切れそうだ。成人の儀まで待たねば楽しみが減ってしまうからね」

そう眠るフォンフーにそう言い残し部屋を惜しみながら静かに出て行くのだった。

イェンファフー様達は未だに降りては来られず様子を見に行きたいが、それでは失礼になってしまいそうでどうすれば良いかチェンさん夫妻に相談したが命令があるまで待機しておいた方が良いと助言を受け入れたが、フォンフー様が心配で落ち着かない。そう言えばレイカちゃんも頬を腫らせ大丈夫だろうか、チェンさんが冷やしてくれているらしいが、神力で治せればいいのだが残念な事にレイカちゃんには神力が効かない……

……まさかフォンフー様が倒れたのとレイカちゃんの神力が効かないのと関係があるのだろうか？

否、レイカちゃんは人間だそんなはずは無いだろうと否定するが、心に引っかかるのもがあるのは確かだった。

今は確かめる事も出来ず、階段の下で家令のトムチーさんとイェンファフー様達が降りていらっしゃらないか待っているしかない。

上から何人もの足音が聞こえて来るので漸く降りていらっしゃるよ

うだ。

階段下の両脇に控えて頭を垂れ降りていらしゃるの待つ

私の前でイェンファフー様が立ち止まりお声を掛けて下さる。

「フォンフーは少し疲れている様なので寝かせておいてください。それよりフォンフーの着替えを手伝った者はいるのですか」

「はい、フォンフー様の侍女が手伝っておりました」

「フォンフーが倒れた時の様子を聞きたいの会わせて貰えませんか」

「そっそれがー　レイカという十歳の人間の少女なのですが、フォンフー様が倒れる前に殴られた為かなり酷い怪我を負い伏せっております」

「そうですか……それなら仕方がありません。　それでは長旅で少々疲れましたのでお茶を貰えますか」

「はい、此方にどうぞ…別室にご用意をさせて貰っております」

「有難う」

ニッコリと優しげに私のような者にまで礼を言うイェンファフー様

だが少し不信感が湧く

何故私は部屋を閉めだされたのか、どうしてフォンフー様が兄であるイェンファフー様を嫌う?

だから咄嗟にレイカちゃんの事では、不敬ながら嘘を言ってしまった。レイカちゃんをイェンファフー様に会わせたくなかった……少し私情もあるが

女性はイェンファフー様の前ではどんな男も霞んでしまい目を奪われる。レイカちゃんも十歳とはいえ女の子、一目見て恋心抱いていまったらどうしていいか分からないのだ

それにレイカちゃんのあの容姿、イェンファフー様が目に留められ側に置きたいと言われればそれに従うしかない弱い立場の自分

最近では王都に戻らずともここで暮らした方が良いのではないかと考えていた

王都には虎族が大勢住んでいる為、王宮などでレイカちゃんが暮らせばそれだけ虎族の男達に目に留まる事になり狙われるのは必至！

第八皇子の正式な侍女になる予定のおかげで滅多な者は声すら掛けないだろうが王族や高位の虎族となれば話が違って来る。

何の後ろ盾の無い人間の少女は体を差し出さなければならない

それを阻止出来ない情けない自分……

第八皇子の教育係でしかない私には何の地位も力もない

だから私が成人の儀を迎えた暁には、レイカちゃんに結婚を申し込み正式な婚姻を結びたいと思っていた。

今回イェンファフー様が来たのはフォンフー様を王都に連れ帰るの

が目的なら従うしかないのだが、早すぎる。

せめて後五年ここに留まれれば

フォンフー様の為を思うなら王都に戻った方が正解だが…これでは教育係失格だ

自分の勝手な思いであるのは分かっているが、それ程自分はレイカちゃんに囚われていた。

「フォンフー様　大丈夫ですか」

インフーの呼び掛ける声と体を揺すられ目が覚める。

「インフーか……　どうなった……」

あいつのせいで気分は最低だが、仮にもこの国の第三皇子を蔑ろには出来ず……この屋敷の主として最低限の持て成しをせねばならない

「イェンファフー皇子様は客室でお寛ぎ中ですが、半時程で夜食の時間の予定しており、お加減はどうですか？」

気遣うようにきいてくる。かなり心配させてしまったのだろう

「それよりレイカはどうしている？」

「頬をかなり腫らしているので自室で休むように言っておきました」

レイカの話になった途端凄い形相で俺を睨んでくるが無視だ

「レイカを兄上と会わすな、それと使用人達にもレイカの事を聞かれたら辞めさせられたと言い含めておけ。それと容姿の事も隠すんだ分かったな…」

「分かりました。それではそのように家令に言いに行きますが、直ぐに戻ってフォンフー様の支度を手伝いますのでお待ちください」

どうやらインフーもあいつとレイカを会わせたくないらし

その気持ちも分からないでも無い

性格はいざ知らず顔だけはずば抜けている……気位の高い虎族の女は全て誑し込まれていると言って過言ではないだろう

レイカがあいつにどう言う反応を示すか見たかったが、俺が神力を枯渇させた原因がレイカだと気取られては不味い

レイカの力は俺の切り札

あいつに知られる訳にいかない

歓迎の食事会はこいつの希望で俺とこいつ、そして従者の一人が控えているのみの閑散とした中で開かれた。

「フォンフー　元気になってよかった。　貴方が倒れたと聞いて気が気ではありませんでした」

弟を労る優しい兄の言葉

「有難うございます兄上。お出迎えも出来ず…その上ご迷惑を掛け申し訳ありませんでした」

それに感謝する弟を演じる俺

お互い空々しい挨拶を交わしながら食事が進み料理長の折角の料理も味など分からず、機械的に口にしていくだけで早くこの茶番を終わらせたかった。そして食事も終盤に差し掛かった時、漸く本題を切り出して来る

「ここでの生活はどうなのですか？　使用人も少なく十分な世話がなされてないため今日のように気を失うのではないのですか…兄として心配ですから、そろそろ王都に戻り、父王と私を安心させてください」

あの王が俺の心配などするはずがない、酒と女に溺れ実質国を動かしているのはこいつと第一皇子のアジュタイフーだ。どちらが次の

王になっても遜色は無いとされているが水面下では他の皇子達も暗躍し色々動いているが知らないのだ……こいつの本当の力を

力を隠している事を

既に王すら越えた力を持ちながら今の状況を楽しんでいるのだ。兄弟達が必死に足掻く姿を

「今日はとんだ醜態をお見せしてお恥ずかしい限りですが、兄上がお越し下さると思うと緊張で倒れてしまったようです。こんな私では王族が多く住まう王宮では常に緊張を強いられやって行く自信がありませんのでお許しください」

俺はこいつに溺愛されているのは周知の事実で、王宮では常にやっかみを受けていたが

報復はキッチンとしていた。そして毎日のように起こる嫌がらせにウンザリしてしまい、しかも全て俺が悪者だ！

兄弟からは命を狙われ、他の奴からは嫌がらせの日々

「フォンフーにはあの王宮は住みにくいのは分かっています。だから私もソロソロ動こうと思っています」

分かっていても助けず、今さら何をするつもりだ？　第一俺はお前から逃げて来たんだ！

「どッどう言う事です……」

「可愛い弟を手元に呼ぶ為にも私の座るべき場所に坐するつもりです」

「！！」

つまりとうとう王になるのか！！　何故今なんだ――――　！？

血の気が引く

「フォンフー、大丈夫ですか顔色が悪いですよ？」

空々しく聞いてくる。

「父王はまだまだ健在のこととお伺いしてましたが……　まだ早いのでは」

「強い者が王位に就くのが天帝様がお決めになった不文律　それに倣うだけです」

このままでは奴から逃げれない

「冗談じゃない！！　俺はここを動かないぞ――　王は俺が成人するまで好きにすればいいと確約して下さった！」

「そんな物、王が代われば意味がないでしょ」

嘲笑い可哀想な憐れみの目で俺を見るあいつ

俺はその場を取り繕うのも忘れ、椅子をひっくり返して立ち上がる

ガッタ！！

「私は明日発ちますが、迎えに来るのを楽しみにしてください」

立ち上がった俺を見上げながら嬉しそうに笑う

こいつと同じ部屋に居る事に耐えきれず、奴の従者が立ち出口が塞がれているので窓に行ってそこから外に飛び出す。

今は屋敷にすらいるのが嫌でロウを呼び出す。

「ロウ！！　来い」

俺の呼びかけで何処からともなく現れたロウの背にとび乗り夜道を駆け抜ける。

このまま隣国に逃げ出したいが王族は勝手に国外に出れば天帝の罰を受けるとされ、俺を受け入れる国などないだろう。

逃げる事も隠れる事も出来ないのが俺の現状だった。

フォンフーが出ていた窓から顔をのぞかせる影が二つ

「宜しいのですかイェンファフー様？　今から追いかけましょうか」

「それには及びません。今はあの子の好きにさせてあげましょう」

「はっ」

「久しぶりにあの子の可愛い顔も見れた事ですし今回の目的は果たしました。明日の午前には出立の準備を」

「はい、かしこ参りまいた」

イェンファフーはこれから輝かしい自分の道を信じて疑わなかった。

玉座に座る自分をそしてその横に座るフォンフーの姿を想像しうっとりと夜空を眺めるのだった。

皇子の事情（後書き）

変態が二人に増えてしまった。

神力の兆し

「痛い……」

「キィ～」

私のほっぺは凄い事になってしまった。まるで林檎が張りついた様に腫れあがり歯が折れなかったのが不思議な位

水で濡らした冷たい布を自分で当てながら自室に籠っていた。

チェンさんに第三皇子様にこの顔を見せるのは失礼だと言われたので部屋から一歩も出ないように言い含められてしまい、楽しみにしていた皇子様を見れなくなってしまった。

「フォンフー様の馬鹿！　こんなに酷く打たなくてもいいのにー」

喋るだけでも痛みを伴い頬の熱が体全体に広がって行くようで体も熱っぽくだるくなって来たので寝台で横になる。

こうなったのも私がフォンフー様の神力を全て食べちゃったせいだけど……

私は、フォンフー様の虎核を感じた時欲しいと思った途端意識が飛

んで頬を打たれ正気に戻った。

自分でも訳が分からない???

「キュウ～」

「ハクは外で遊んでおいで」

何時もは外で遊んでいるハクも何処で知ったのか私が部屋に戻されると直ぐ戻って来て久しぶりにベッタリと心配げに側を離れない

なんだか熱が上って来たようで頭がボーっとしてくる…小さい頃熱を出す度、心配げに看病する母様を思い出す。私より辛そうな表情で側に付いてなんだか母様が倒れてしまいそうで早く良く成らなきゃと小さいながらに思ったっけ…

母様はどうしてるだろう?

私の事を忘れてないよね……

早く帰りたいけど、今のままじゃまだ無理

あの男がいる限り母様を苦しめてしまう

力が欲しい

力が……

『レイカ……』

「母様？」

母様の手には石の玉の付いた金の鎖の首飾りを持っていた。

『いい？　これはレイカが生まれた時に手に握っていたの、だからもしかしたらレイカは本当は龍族として生まれたのかもしれない』

どうやら私は籠の中で寝かされているようで、母様は悲しげに私の顔を覗き込んでいる。

『ゴメンね、人間に産んでしまって……　私はレイカと同じ時を生きられない』

母様は泣きながら私の首に石の玉に金の鎖を掛けてくれる。私はその玉を手に取るが自分でも驚くくらい小さくて動かしずらく、なかなか上手に玉を持てない。

多分私が赤ちゃんの時なんだろうか？

『ファン様はこれは龍石だって仰っているから大事にするんだよ。
何時か龍核になってレイカが龍族になったらいいのに……』

母様は赤ちゃんの私を抱き上げ優しく抱っこしてくれると、母様の

心音と温かい温もりに包まれる。

『この石を肌身離さず大事にしてね』

「母様大好き、もっと抱っこして」

『レイカ……　私の愛しい子』

「母様……　」

『さあ、お昼寝しましょ。お唄を歌ってあげるよ』

母様は小さい頃よく歌ってくれた子守り唄を歌ってくれるが、私はもっと話がしたい！

「母様！　レイカとお話しして、目が覚める前に一杯お話しがしたい！」

だけど母様に一生懸命話し掛けるのに聞こえていないようだ

それならせめてこのまま母様の胸に抱かれずっと側にいたい

……そうこれは夢なんだ

母様の声が段々小さくなって行く……　きっと赤ちゃんの私が寝ようとしているんだろうか

久しぶりに見た母様の綺麗な黒い瞳は涙で濡れていた

何時も微笑んで優しい母様しか知らなかったけど、もしかして私の

知らない時にこうやって泣いてたのかしれない

泣かないで母様

私はきっと力を得て戻るから

額に冷たい物が乗せられた感触で目を覚ますとカヤさんが心配そうに顔を覗き込んでいた。

「気が付いたレイカ？　凄い熱でビックリしたんだよー」

「カヤさん？」

「お母さんだとでも思ったんでしょ～」

「えっ？」

「熱にうなされて母様て何度も言ってたわよ」

「母様の夢を見てたの……」

カヤさんは氷の入った革袋を差し出し頬に当ててくれ気持ちいい

「レイカはまだ十歳だもんね、私も家を離れたのは十二歳の時だけどヤヤが一緒だから寂しく無かったけど、レイカは五歳からここに居るんだもんね……」

「母様に会いたい」

熱のせいか弱音をこぼしてしまう

「それじゃー、この野菜スープと薬を飲んで　元気になって一杯働いてお金を貯めなきゃ！」

お盆に載っていたのはあの苦い薬

嫌な顔をするとカヤさんが笑い出す

「プッーー　アハハハハ～　酷い顔だよレイカ、すっごい不細工！！」

「酷い！」

相変わらずハッキリ言うカヤさん、頬を膨らませたかったが頬が痛くて出来ない。一体今はどんな顔をしてるの私？

「だってこんな時しかレイカに不細工なんて言える機会なんてないんだもの」

意地悪そうにニヤリと笑う

「本当、虎族の血が引いているだけあって益々綺麗になってくるから一緒に居る私は嫌んなるよー」

「むう～？」

「今日いらっしゃった第三皇子様も凄い美形よ！　インフー様も目じゃないわ、　一目見ただけだけど目が潰れうかと思った」

目をキラキラさせて言うカヤさん

「いいな～　レイカも見たかった……」

「不細工はゆっくり休んでて、私が確り見て置いてあげるから」

意地悪い言い方だけどカヤさんなりに気を使って言ってくれている。
夜に又話してあげると言って部屋を出て行く。　忙しいのにレイカの様子を見に来てくれたのだろう

部屋を出て行く時に「ありがとう」と言うと耳が赤いのが見えたので案外照れ屋さんなのだ。

カヤさんが出て行くと痛いのを我慢してスープを飲んでから苦い薬を飲み込む。

「苦い～」

「キッキ」

扉を上手に開けてハクが入ってくる。

「ハク、何処行ってたのご飯食べたの？」

「ウッキー」

膝に跳び乗ってくる。

「母様の夢を見ちゃったハク……母様泣いていた……」

首に下げている金の鎖を取り出すと先には丸い石が付いている。夢で母様はこれは龍石だと言って大事にするよう言っていたけど…フォンフー様の虎核に比べかなり小さい気がする

久しぶりにマジマジと見てみると矢張りただの石だけど

……！！

「アレ？　この部分だけ黒くなってる！？」

灰色の石肌の一部だけ染みのように黒くなっており不思議な光沢…まるで黒い真珠のように色が変わっていた。

「何時からこうなったのかな、ハク知ってた？」

ハクに見せると何故か嬉しそうに興奮して鳴きだす。

「ウッキ～、ウッキ～　ウッキ～キ～　」

「ハクどうしたの？　これの意味知ってるの？」

ハクはおもむろに首飾りの石を握る。

『　レイカ、モット　モット　シンリキ　アツメル　』

「エエッ！！　」

突然知らない女の子の声が聞こへ、驚いて辺りを見渡すが誰もいない…ハクと私しかいるはずがない……

恐る恐るハクを見て聞いてみる。

「今話したのはハク？」

『　そう　ハク　』

驚愕のため頬の痛みすら忘れてしまう……普通の猿よりかなり賢いのが分かってたけど会話も出来るなんて

「何時から話せるようになちゃったの！！」

『　ハナス　チガウ　ココロ　デ　ハナス　リュウセキ　ノ　チカラ　』

龍石ってこの石の力？　ハクは何でそんな事を知ってるの？？　ハクは特別な猿何だろうか

『　チガウ　レイカ　チ　モラッタ　チ　オシエテクレタ　』

「私の血？！」

そう言えばハクを助けた時指を噛まれて血を吸ったのを思い出す…

…私の血は確かに龍族の血を引いてるけど人間、血それだけでも特別な力があるの？

『　レイカ　ニンゲン　チガウ　』

「えっ？　私の心が読めるの！！」

『　ココロ　ツナガッテイル　』

つまり、声を出さなくても話が出来るの……試しに心で話してみる。

私は人間じゃ無かったら龍族なの？心でハクに問いかけてみる。

『　マダ　チガウ　リュウセキ　チカラ　ミタス　』

本当に通じた！！！

この石に？　そうすれば私は龍族になれるの！！

『　ハク　ヨク　ワカラナイ　デモ　シンリキ　アツメル　チイウ　』

私の血が

ハクは突然フニャリと膝に寝転がる。

『　ツカレタ　ネル　……　』

「ハク、ちょっと待って！　もう少し詳しく……」

ハクは私の膝に丸まって既に眠りについている、もしかして私と話すにも力を使ってるのかもしれない

神力をもっと集めろとハクは言った。

この五年間フォンフー様が神力を与え続けてくれたお陰でこの龍石が変化したの？

だったらこの龍石を全て満たすとしたら十年以上は掛かる事になるのでそんなに待てない
もっとてっとり早く神力を集める方法は無いだろうか

今度フォンフー様に相談してみよう……そう言えばフォンフー様どうしてるんだろう？

カヤさんに聞くのを忘れていたが何も言っていなかったので大丈夫だったんだろう。

石の首飾りをもう一度見てから大事に服の中に戻す。

これで母様の元に少し近づいたようで嬉しかった。

その晩仕事を終えたカヤさんは大騒ぎで入って来る。

「フォンフー様がお屋敷を飛び出して何処かへ行ってしまわれたようよ！」

私の熱は少し治まったけど頭がボーっとしていたけど、カヤさんの言葉で目が見開く

「ヘッ？　どうして？！」

「何でも御兄弟喧嘩をして、拗ねたフォンフー様が窓から跳び出したらしく、それを聞いたインフー様が慌てて捜そうとしたんだけど第三皇子様に止められたみたい」

「兄弟喧嘩！　原因はなんなの？」

フォンフー様は第三皇子様をかなり毛嫌いしてたから……でも何で捜さないんだろ

第三皇子様もフォンフー様が嫌いなんだろうか

「何でも王都に帰るかどうかで揉めたみたい」

「王都に！　フォンフー様は王都にお戻りになるの！」

「其処までは分かんないけどまだ先なんじゃない？　第三皇子様は明日の昼前には王都にお戻りになるらしいから」

「良かったー急な話で驚いちゃった」

「レイカはフォンフー様が王都に戻られる時は一緒に付いて行くの

？」

「うん、そのつもり　カヤさんは？」

「まさか付いて行く訳無いでしょ。私みたいな田舎の人間が王宮なんかで働けないし、この土地が好きだから離れられないよ」

「そっか……」

折角お屋敷の皆と仲良くやっているの離れ離れになるのは寂しい……、ずっと一緒には居られないんだと初めて気付いた。

「そんなにションボリしないの、まだ先のことよ……まだ熱があるみたいだから早く寝なさい不細工レイカ」

「ブ――　お休みなさい」

カヤさんは私をの寝台に横たわらせ布団掛けてくれ、冷たい水で濡らした布を頭に乗せてくれる。

カヤさんの優しい毒舌も慣れたが、結婚相手にもこんなんだろうか？　少々行き遅れ気味だがすっかり大人の女性になり綺麗になり恋をしているせいなんだろうか？

私はどんな人と恋をするんだろう？

だけど今は恋より母様

私の一番は母様だった。

枕元にはハクがアレからずーっと寝ていて起きない、心で話すのはそんなに疲れるのかも、そんなにしょっちゅう話せそうもないけど、これから話せると思うと楽しみだ

王都に行けば虎族が大勢いいるから神力が一杯集まる？

だけどその前に自分の力を自由に操れないと集められないので話しにならない

レイカが龍族になったら母様は喜んでくれる。

ズーッと一緒に生きる事が出来て、母様を悲しませないで済むんだ

ハクのお陰で自分の事が少し分かり、矢張りハクはレイカに幸運を運んでくれる。

ファン様の言う通りハクは吉祥の白い獣

白いふわふわのハクの毛に顔を擦りつけ抱きしめる。

「ありがとう…ハク」

そう言えば、フォンフー様の色はハクに似ているかも

フォンフー様にこんな事言ったら又怒られて打たれそうだけど、フォンフー様も私にとって幸運を運んでくれた人

私にある力に気付いて引き出そうとしてくれている。

多分フォンフー様には違う目的があるみたいだけどお世話になって

いるから、少しは恩返しで協力はしたいけど、第三皇子様の暗殺だけは遠慮したい

目的はそれっぽい気がするんだけど

ドロドロの兄弟喧嘩に巻き込まれそうな予感をひしひしと感じるのだった。

朝からお屋敷は騒がしく大忙しだけど私は部屋で大人しく本でも読むしかない。顔の腫れは引いたけど赤黒い痣のようになってしまい益々不細工になってしまった。

フォンフー様が帰って来たら文句を言わないと気が済まない！

当のフォンフー様は朝になっても戻らずインフー様がかなり心配しているが第三皇子様の滞在中では捜しに行けず意気消沈しているらしい……全く困った主を持ってお気の毒としか言いようがない。

第三皇子様は朝食を召し上がった後直ぐ王都にお戻りになるらしい。

なんて慌ただしい皇子様なんだろう、一体何しに来たの？…フォンフー様を怒らせに来ただけだったら全くの人騒がせ

窓の外から何かの羽ばたく音が聞こえ来るので外を覗いてみると見た事もない大きな鳥が二羽中庭に舞い降りて来たところだった。

「凄い！！　なんて立派な鳥、初めて見るわ」

「ウッキィー」

肩に乗るハクも興奮している。

ハクは何時ものハクに戻り昨日の事が夢だったのかと思ってしまう。

そしてお屋敷から出て来た人々が鳥の周りに集まりその中に際立って背の高い青い髪の男性がいた。

「あのお方が第三皇子様かしら」

遠目でも分かる程に目鼻立ちのハッキリした精悍な顔立ちの素敵な人だけど、ファンおじちゃまくらいのカッコよさだ。ファン様や侍女さん達、サンおじちゃまを見馴れている私は目が肥え過ぎているのかもしれない。

懐かしい顔を思い出し、皆どうしているだろうか？

皆は龍族だから全然変わっていないだろうけど、私はかなり変わってしまいあったら皆は驚くだろうな……ウフッフッフ～

皆の事を思い出し物思いに耽っているとフッと視線を感じ顔を向けると鳥に乗った皇子様と視線が合う――　かなりの距離があり私の顔が見えないとは思うけど慌てて隠れる。

程なくして鳥が羽をはばたかせ上空に舞い上がって行く姿を窓から眺める。どうやら皇子様一行はあの鳥で此処まで来たらしい、皇子様だから何人も従者や使用人を引き連れ豪華な馬車にでも乗ってやってくると考えていたのに、かなり想像と違っていた。

人望もあって文武にたけた美丈夫…まるで絵に描いたような皇子様

だけどフォンフー様が嫌うんだから、本当はフォンフー様より性格が悪いに違いない！

もし王宮に行く事になったらあの皇子様と顔を合わす事になるのかな？

フォンフー様が第三皇子様の暗殺を考えない限り関わり合う事は無い……絶対関わり合いたくない！！

何を考えているのか分からないフォンフー様

お戻りになったら色々話す事が沢山ある。

早く帰ってこないだろうか……第三皇子様が帰ったなら今日中には戻ってくるだろう

朝食を召した後に直ぐに出立する事になった第三皇子様御一行を屋敷の主だった使用にで見送っているのだが、その場に居るべき屋敷の主のフォンフー様は昨夜飛び出したままお戻りにならなかった。

「立つ前にフォンフーの顔を見たかったのですが…」

第三皇子イェンファフー様が寂しげに憂いを含んだ声で言う。

「申し訳ありません。教育係の私が到らぬばかりに…　後日フォンフー様にお詫びのお手紙をお出し致しますのでご容赦を」

「貴方のせいではありません。私がフォンフーを怒らせてしまったの原因なのですから、ですがフォンフーからの手紙は楽しみに待ってますよ」

普通なら私が責められお咎めを受けても仕方がないのだが優しくお許し下さる。

虎族は性質は気が短く好戦的で色を好む者が多い中、この方には全く当てはまらないように思える。

「はぁ…」

「アレは？」

「何か」

「屋敷の窓に黒い髪の少女が、黒髪とは珍しい…何者です？」

ギックリとする。

「あっそっその娘は下働きの者でイェンファフー様が気に掛けるよな者でもありません」

こんな帰り際にレイカちゃんを見とがめるとは…何とか気を逸らさければと慌てる。

「そうですか、間近で見てみたいですが今は急いでいるので諦めま

しょう。近い内に必ずフォンフーを王都に呼び戻すと伝えて下さい」

「はい、お受け賜りました」

レイカちゃんを見られずホッとする。

「それでは王都で」

「気をつけてお帰りくださいませ。皆様の帰路のご無事をお祈り申し上げます」

イェンファフー様は鷹揚に手を挙げると同時に二羽の仙鳥が空高く舞い上がり突風が下にいる我々に吹いて来るが神力でそれを打ち消す、私以外は人間なので堪ったものではないだろう

あっという間に天高く舞い上がり姿が見えなくなる。仙鳥は天帝が住む崋山の鳥で飛ぶ速度が速いため長距離を移動するのに最適だが、乗りこなす事が出来るのは極僅かしかおらず、流石にイェンファフー様は見事に乗りこなしていた。

「お疲れ様でインフー様」

「ありがとう」

家令のトムチーさんが労ってくれて漸く肩の荷が降りるが、問題が一つ消えただけでフォンフー様をこれから捜さねばならない。あのお方が賊や妖獣相手に引けを取らないのは分かっているが心配だ。

それにレイカちゃんも気に掛かる。今朝チェンさんに聞いたところ

熱と腫れは引いたらしいが赤黒い痣が残っているそうだ！　レイカちゃんは人間だから治りが遅いので当分残るかと思うと可哀想でならない、女の子の顔に酷い後を残すなんてフォンフー様には今回の事を含めコッテリ絞らないといけない

しかもイェンファフー様はフォンフー様を王都に戻させようとしているらしく頭の痛い事ばかり…確実に自分の体重がすり減っている事を自覚する。イェンファフー様や従者の三人の逞しい体を思い浮かべ、レイカちゃんも逞しい方が好きなら私ももう少し鍛えた方が良いのかもしれないと考えるのだった。

今はフォンフー様を捜しに行くのが先決だった。

結局フォンフー様がお屋敷に戻って来たのは三日後の夜で、インフー様はフォンフー様を捜し回り心労のほうで倒れてしまった。

私はハクを肩に乗せ夜中にこっそりフォンフー様の部屋を訪れる。

「フォンフー様、起きてますか」

扉越しに小さく声を掛けると直ぐ返事が帰ってきた。

「入れ」

静かに音をたてないように扉を開けて忍びこむと、フォンフー様が長椅子に横たわりながら本を読んでいた。珍しい事もある

そして私の顔を見た途端笑い出す。

「プーッアハッハッハー　なんだその痣は酷い顔だな～」

「酷い！　フォンフー様が殴ったせいでしょう、忘れたんですか！」

「ふん！　俺だって酷い目にあった」

思ったより元気そうなので安心する。

「フォンフー様はどこに行っていたんですか？インフー様が心配して倒れちゃったじゃないですか」

「ロウとその辺をうろついていただけだ」

「兄弟喧嘩の原因はなんですか？　第三皇子様に王都に戻れて言われたから」

第三皇子様の話になった途端、怖い顔になる。

「クソッ！　あいつがこんなに早く王位に就くなんて！　お前がサッサと力を引き出さない所為だ！」

「？？　何で私の所為なの……王位と何の関係が？？」

「あいつが王位に就いたら俺はお終いなんだ！　このボケ娘」

フォンフー様のお終いってどういう事だろう？？？

「まさか第三皇子様に殺されちゃうんですか！！」

「違うわ！ボケッ、ある意味殺された方がましなくらいだ」

フォンフー様は凄い剣幕で、殺されるより酷い事って何だろうと思わず考えてしまう。

「おい、こうなったらお前には瀕死の状況になって力を引き出して貰おうか……」

目が怖い、本気だわ…なんて自己中心的なの、本当に俺様なんだから

「待って下さい。その前にこれを見てください、これを！」

私は急いで服から龍石を取り出してフォンフー様の目の前に突き出す。

「お前の小汚い石なんか興味あるか！」

「良く見て下さい、此処が変化してるでしょ、ハクが言うには是は私の龍石で神力で満たすと私が龍族になるみたいなんです！！」

「ウッキィ！」

ハクも同意する。

「なんだと？　これが龍石」

フォンフー様が手に取り眺める。

「本当だ一部が真珠層のように変化している……」

「フォンフー様の神力のお陰で此処までになったみたいなので、これからもお願いしますね」

可愛くニッコリ笑ってお願いしてみる。

「このどブス、五年間でこれだけなら、後どれだけ俺が神力を注げばいいと思っているんだ！」

どブス！！　私みたいな美少女を本気で貶すのはフォンフー様ぐらいである。美しさでいったらフォンフー様より私の方が絶対綺麗なんだからと反論したいけど、話が進まないので諦める。

「だからそれを相談しようと思って来たんです。　フォンフー様の神力だけじゃ一杯にならないしインフー様にも協力して貰いましょ」

「それは駄目だ」

「何故です？」

「この事にインフーを巻きこめないし、お前に過保護なあいつが許すはずがないだろ、しかもお前を龍族にする手助けなどしないと思うぞ」

「私が龍族になったらインフー様が困るの？？」

「兎に角、インフーには言うな」

「ぶー　折角良い考えだと思ったのにねー　ハク」

「ウキッキィ」

確かにインフー様は私が危険な事や掃除仕事をするのを嫌がる。先日私の痣を見て卒倒しんばかりの反応に思わず引いてしまう……まるでお姫様扱いに最近少し鬱陶しく感じるのは仕方ないと思う。

「そう言えば、ハクが言ったとはどう行く事だ」

「龍石を通すとハクと心で話が出来るんです。凄いでしょ！　龍石の事もハクが教えてくれたのよねーハク！」

「ウッキー！」

「なんだと！？」

「全くお前等は何者なんだ……」

「私が知りたいくらい」

私が普通でないと言われても産まれてからこの方、自分が変なんて自覚を持った事がない……私ってなんなんだろ？

「まあいいだろうだが……そんな事より今はお前の力を自由に操る事が先決だ。王位に就く前にあいつから神力を奪えなければお前も道連れだからな」

「なんですかそれ！？」

「明日から王都に向かう準備だ、お前も連れて行くから死ぬ覚悟をしておけ」

「覚悟って大袈裟」

「玉座が掛かった取引だ当り前だろ」

ニヤリと笑いながら何やらとんでもない事を考えているみたい

玉座って何ですか？

話がとんでもない方向に向かっているのは気のせい？

「言っときますけど私は母様を助けるのに力が欲しいんであって、フォンフー様はついでですから」

「俺の協力なしに神力を集められるのか」

「うっ　四十九歳のくせに十歳の子共を脅すなんて卑怯です」

「お前がただの十歳の子供かなら俺はお前などに用ない」

「むぅ～　フォンフー様の人で無しーーーー！」

「明日から忙しいぞ、ガキは早く寝ろ」

そう言われてフォンフー様の部屋から追い出されてしまい途方に暮れるしかなかった。

「ハク……此のままフォンフー様について行って大丈夫かな？」

「ウッキ～？」

目の前に暗たんたる雲が立ち込めてしまった。

レイカを追い出しこれからの事を考える。

あいつが父王から王位を継ぐためには、父があいつが自分より上だと認め他の虎族の中で如何に力あるか示さねばならない。多分第一皇子も名乗りを上げるだろう。その時二人が競い合い勝者が玉座に就く。その時レイカが奴の神力を奪えば奴は負け、第一皇子が奴を生かしておく訳が無くその場で殺すだろう。そうすれば俺は自由だ

その為にもレイカには死ぬ気で力を引き出させないといけない

しかしハクまで不思議な力を持つとは考えもしなかった。

なんなんだあの二匹は

一体どんな親からあんな規格外なのが生まれるんだ

金の瞳を持つ龍族か

本当は龍王の娘と言った方が納得してしまう

今の龍王は歴代龍王の中でも稀有の力があり我が国の虎王とは格が違い、あいつも龍王の足下にも及ばないはずだ。

インフーには悪いが諦めて貰おう、他種神族の婚姻は禁じられているのでレイカが龍族として目覚めれば婚姻はもちろん性的交渉も禁じられている。

恋人同士にすらなれない。

そもそもレイカがインフーを選ぶかは疑問だったが、憐れだが何れ自分にあった相手が現れるだろう。

恋だの愛だの俺にとっては薄気味の悪いものにしか感じない。

逃げてばかりでは何も変わらない

全ては自分の為

レイカが何者であろうが関係ない、レイカには死んだ気で頑張って貰うしかない

明日は王都に向けて準備しなければならないので、もう寝る事にする。

何としてもあいつを王になどしてたまるか。

絶対阻止してやる。

王都への道

フォンフー様が王都に行かれる事をインフー様に告げると慌ただしく準備が始まる。

「本当にレイカちゃんを王都に連れていかれるんですか……」

「俺の侍女なんだから当り前だろ」

「それならばチェンさんの方が適任です。王宮を知らないレイカちゃんでは可哀想です」

「今回は父王と兄上のご機嫌伺いに行くだけで、レイカは物見遊山程度に連れて行ってやるだけだ。　暇ならインフーが王都を案内したらどうだ？」

「えっ！　それはいい考えですね。分かりました、さそっく準備に取り掛かります」

途端に態度を変えるインフーは慌ただしく部屋を出ていく、こんなに単純で王宮で遣って行けるのか心配になってくるが、あいつを始末したら俺は当分此処で暮らし二度と王宮など行くつもりも無い。

俺は商人のように世界を駆け巡りたい。

ロウを連れて行きたいが王都に入れないだろうし、寂しいが仕方ない

後は如何にレイカの力を引き出すかだが全くの進展も無い
最後の手は考えてあるがあまり使いたくないが…兎に角、王都に一刻も早く向かうしかないのだった。

王都へはフォンフー様とインフー様と私の三人だけでお忍びで行く事になる。

最初は馬車を仕立てる予定だったのだけどフォンフー様に時間がかかり過ぎると取り止めになり馬で移動になってしまった。それも天馬と呼ばれ一日で百里を駆け抜ける特別な馬、人間で乗れる者はいなく神族だけが所有を許されている。

二頭の天馬をこの州の虎族から借り受けたのだ。これにより通常の馬なら一カ月掛かるが天馬なら五日で王都に行けるらしい

馬に乗れない私はインフー様に乗せて貰っているけど、神力に守られている為快適で風すら感じないで凄い早さで幾つもの森や草原、村や町を駆け抜けて行く。

「凄い！　インフー様、次々に風景が変わって行って面白い！」

「怖くは無いですか」

「大丈夫です」

「全くフォンフー様には困ります。レイカちゃんをこんな危険な馬に乗せるなんて」

「でもインフー様がちゃんと天馬を操って神力で守って下さるから安心して乗ってられますよ」

「そっそうですか…　／／／」

フォンフー様は小さい体を巨大な天馬に一人で騎乗している姿は頼り無く見えるが、いとも簡単に天馬も操り従わせていた。流石に虎族だと再認識させられる。普通の人間が天馬に乗れば速度が速すぎて体を振り落とされてしまうだろう

日が暮れる頃小さな町に到着した。

初めての旅で興奮して馬に乗っているだけだったけど疲れてしまい、ヘトヘト

「今夜はこの町に泊るんですか？」

こんな小さな町に虎族の皇子様が泊れる立派な宿屋があるとは考えられないのでインフー様に聞いてみる。

「ええ、フォンフー様が煩わしいのがお嫌いで大きな街や地方の虎族の屋敷に泊ると色々な面倒なお付き合いが生じるのでそういう場所は避けてるんですよ」

そして町中に入ると虎族を恐れ家に引き籠ってしまい戸口にいた人

々は次々に家に入ってしまい人通りが途絶えてしまった。

それから、町中でも一番大きな家の前に来ると家人が慌てて飛び出して来て平伏した。

「これはこれは、虎族様ようこそお出で下さいました。今日はどの様な御用件でしょうか？」

「今夜の宿と食事をお願いします。それと馬に水と乾草を与えて欲しいのですが」

「恐れながら、ここは貧しい町で虎族様に十分満足頂ける御もてなしは難しく」

「ごちゃごちゃ煩い、食事も寝床もお前達と一緒で構わんからサッサと休ませろ！」

「はっハイ！　どうぞこちらへ……」

多分この町の長は飛び上がるように立ち上がり玄関の扉を開けて頭を下げているが顔色も悪く震えている。

「フォンフー様あまり威嚇してはいけません。泊めて貰うんですから」

「フン！　俺は疲れたから少し休む。食事は部屋に持ってこい」

「分かりました。先に部屋に案内してください」

「はい　しかし生憎…客室が一部屋しかないのですが如何致しまし

ょう……」

「そうですね…フォンフー様と私は一緒で構いませんがレイカちゃんは女の子ですし」

「十歳のガキだ一緒の部屋で寝るぐら……！！　いや待て、矢張り別にしろ、なんなら物置きでも構わん」

フォンフー様は私と寝ると神力を寝こそぎ奪うのを知っているので一緒に寝るのを避けるのは理解できるけど物置きなんて！！

一度死ぬほどの目に遭ってるからといって、それは無い

「酷い！」

「それならば、狭いですが娘の部屋でよければ空けますのでお使いください」

「ありがとうございます」

良かった。流石に物置はいやだったので安心する。きっと高級宿にお泊り出来ると期待していたのにガッカリ

それぞれの部屋に案内されたが木造の素朴な部屋で閑散としているが綺麗に掃除は施され、フォンフー様はサッサと寝台に横たわり寝てしまう。夜には食事がふるまわれるが、そあまり豪華とは言い難いけどこの町での精一杯なのは伺え、私が想像するより人々の生活は楽ではないのかもしれない。給仕をしてくれるこの家の娘さんの服もくたびれており始終オドオドしていた。

就寝の時はインフー様が部屋まで送ってくれる。

「インフー様、この町の人達は何故こんなに虎族を恐れているんですか？」

「人間にとって虎族は無理難題を押し付ける迷惑な存在だからですよ。この国を治めているのは虎族ですが、働き作物や物を生産するのは殆ど人間でそれを搾取するのが神の力を持つ虎族です。　虎族は気性が激しく人間に対する扱いが良いとはいませんから仕方のない反応なのです」

「インフー様は全然違うんですね…　良かったインフー様が優しい虎族で」

「そっそんな……　／／／　」

「それじゃあお休みなさいインフー様」

「あっ　チョッと待って下さい。一応念の為に部屋に誰も入れないよう結界を張りますから」

そう言うとインフー様は髪を四本抜くと部屋の四隅に置き何か小声で言うと髪が光り消えうせる。

「小さな町とはいえ油断は出来ませんから私以外来ても決して戸を開けないで下さい」

「はい」

「それではお休みなさい、レイカちゃん」

「お休みなさい」

初めての旅の晩は何事も起こらず静かに過ぎ翌朝、簡単な食事を済ましてから直ぐに出立する。

町の長の家族だけが見送り町の人々は家の中でひっそり息を潜めているようだった。

「これはささやかですがお礼です。受け取ってください」

インフー様が町の長に金子の袋を渡すと驚いた顔をする。

「滅相も御座いません！　何のお世話も出来ない上にお礼など受け取れません」

「お受け取りを、その代わり我々が此処に立ち寄った事は内密にして下さい」

「はっはい、有難うございます…助かります」

町の長は深々と頭を下げ、感激したように少し涙ぐんでもいた。

あまり長居しては迷惑なので直ぐさま馬に乗り込み王都を目指すのだった。

馬に乗り町を離れてからインフー様に聞く

「おじさんは何であんなに嬉しそうだったんですか？」

「どの町も税を納めて食べるのがやっとの生活ですから、あれだけのお金があれば一年の税は賄えるはずです」

「税てそんなに取られるのですか」

「国では一律四割の税率ですがそれを守る虎族は少なく酷いところでは八割と言う州もあるとか……」

「酷い！王様は何をしてるの！」

「レイカちゃんそんな事を言ってはいけません。　王都でそのような事を言ったら牢屋行きです」

「ゴメンなさい……」

「怒った訳ではなにのです。ただ気お付けてください、王族や他の虎族の事を少し悪く言っただけで死刑になる可能性もありますから」

「はい」

何か王都って怖い処?！　少し不安になる。

王都への三晩はこんな感じに小さな町の長を務める家に泊めて貰ったけど何処もこんな感じで、虎族が来ただけで今にも死にそうな顔をする長もいた……私の国の青龍国も龍族は虎族のように民にこんなに恐れられているんだろうか?知りたい…力を得たら王都に向かいながら青龍国の人々の生活を見て行こうという考えが心に湧きあがった。

後半日で王都に着く前の晩は大きな街の立派な宿に泊る事になる。

今まで宿を求めて来た小さな町と違い、沢山の人と市場が立ち並び賑わっているのを頭から被ったベールの隙間から覗く。

今の私達は体をスッポリと覆うベールを被っている。

宿に着くと馬を馬番に預けインフー様が宿の部屋を取るために受付に行く。

「ようこそお出で下さいました高貴なお方」

「部屋を二部屋お願いします。直ぐに湯浴みの用意とこの街一番の仕立て屋を呼んでください」

「はい承りました。お部屋の御案内はこの者にさせますので。　このお方達を牡丹と萩の間にご案内してください。」

「はい」

インフー様は馬や荷物の支持をするため一旦外に出て行き、フォンフー様と私は案内の少年に連れられ通された部屋はお屋敷より豪奢に仕立てられていて、高価な調度で揃えられていた。

「凄い！　なんて綺麗なお部屋」

「寝れればどこでも同じだ」

「フォンフー様って本当に皇子様らしくない」

「フン！　好きで皇子に産まれた訳じゃない」

ベールを脱いで二人で寛いでいるとインフー様が用事を済ませ部屋に入ってくる。

「この宿のお風呂は温泉で今貸切にしましたから、早速旅の疲れを落としましょう。他の町では体を拭くだけでしたからゆっくり入れますよ。、男湯と女湯がありますからレイカちゃんは一人で大丈夫ですか」

「はい、ハクも入っても良いですか？」

「ええ」

「やった！温泉なんて久しぶりだねハク」

「ウッキー」

「猿が温泉に入るのか？」

「私の家には露天風呂があって森の猿達と一緒に入ってましたよ」

「インフー聞いた事があるか」

「あまり……」

などと話していると先程の少年が訪れる。

「失礼しますお客様。お風呂の用意が出来ましたのでご案内して宜しいでしょか？」

少年がチラリと私を見ると視線が合った途端真っ赤になる。

??

それを見たインフー様の体が前に来て私を隠すようにする。

「案内は無用です。それと呼ばない限り部屋には近づかないようお願いします」

「申し訳ありません。御用の際はそちらの紐をお引き下さい」

真っ青な顔で謝り、少年は慌てるように部屋を出て行った。

「大人げないぞ、ガキ相手に…」

「あの少年が変な目でレイカちゃんを見るからです」

変な目??　チラリと見ただけに思ったけど、インフー様の考えすぎに思えた。

それから三人で浴場に向かい男湯と女湯に別れ、インフー様に言われた通り内鍵をかけておき、脱衣所で服を脱いで風呂に向かうと大理石で出来た立派な大きな湯船で虎の顔を模った湯口からふんだんに湯が出ていて綺麗だった。

「こんなたっぷりの湯に浸かるなんて久しぶり!!　気持ちいいねハク」

「キッキ」

小さい頃を思い出してハクと一緒に泳いだり水を掛け合ったりとつ

いはしゃいでしまい少し逆上せてしまい慌てて上り暫らく脱衣場で涼んでから服を着て廊下に出るとインフー様が待っていてくれた。

「お待たせしました。フォンフー様はもう上がられたんですか」

「はい、フォンフー様は何時もカラスの行水ですから、それより髪が濡れていますから乾かして上げますね」

インフー様がそう言いながら、私の髪をサラリと何かが通り抜けたと感じた瞬間には髪が乾いて、ついでにハクまでフカフカの毛になる。

「きゃあー　凄いインフー様！　これも神力ですか」

「いいえ、これは精霊魔術で水の精霊を使役したんです」

「何時も髪を乾かすのが大変だけどインフー様がいれば楽かも」

「屋敷では無理ですが王都にいる間は何時でも」

「ありがとうございます」

「／／／」

部屋に戻るとインフー様が長椅子に横たわりダラダラしている。

「フォンフー様、王都が近いのですから少しは気を引き締めて下さい」

「王都に入ってからでいい」

「全く…　仕立て屋を呼んできますからお待ちください」

インフー様が部屋を出て行くとフォンフー様が呼びよせる。

「おい、こっちに来い」

「なんですか？」

「今から神力をやるから受け取れ」

「いいんですか？　王都に着くのは明日ですよ」

「否、此処に後一日滞在してから王都に向かうから余裕があるからな」

そう言うと手を繋ぎフォンフー様の神力が流れ込んでくるが突然止まる。

「どうしたんですか？」

「一応、力は感じているんだな」

どうやら試されているみたい

「次は俺から力を吸い取るように想像してみろ」

そう言われ想像してみるけど上手くいかない……　想像が駄目なら実際吸ってみたらどうかとフォンフー様の手の甲に唇を落とし吸ってみる。

「おっお前！！……」

すると口の中に神力が入り込んで体を通過した消えて行く、面白い！

ガッツン！

頭をフォンフー様のゲンコツがお見舞いされる。

「痛い！！　」

「お前、なんて事をするんだ！　少し女としての慎め！」

傷む頭をおさえフォンフー様を恨めしげに睨む。手に唇を付けたのが気持ち悪かったの??

「折角成功してたのにー　」

そこへインフー様が戻って来てしまう。

「何が成功したのです?」

「なっ何でもないです～」

後には身なりの良いおじさんと綺麗な布を持った女の人が五人も控えていた。

「そうですか……?　それでは採寸をして貰いますからレイカちゃんは隣室で測って貰ってそれから生地をえらびましょ」

「へっ？　私もですか！」

「フォンフー様の侍女なのでそれなりの支度が必要ですから最低五着は新調します」

ニッコリと嬉しそうに言うと女の人二人に隣室に連れて行かれ事細かく寸法を採られてしまう。その間中女の人達はお綺麗ですねなど誉めたたえられ気恥ずかしい

「なんて珍しい黒い綺麗な御髪でしょう、きっと赤がお似合いです」

「本当に、後五、六年すれば殿方がこぞって求愛されますわ」

「そんな　／／／　」

悪い気はしないけど少し誉めすぎのような気がする。多分お客様に対するお世辞があるんだろう

採寸だけでかなり疲れてしまったのに、それから布選びや意匠なのを決めるのにも時間を要し、私よりインフー様の方が盛り上がっていてフォンフー様は興味が無いようで一人寝室に籠ってしまった。

そしてかなりの服の注文をし終え仕立て屋は上機嫌で帰っていった。

「あんなに沢山注文して支払いは大丈夫ですか」

「国庫から毎年フォンフー様の予算を貰ってますし、住んでいる屋敷にある一体の荘園はフォンフー様の物ですからかなりの収入があるんですよ。フォンフー様はあの通りのお方ですから国庫の方はあまり手を付けず貯まる一方で使い道が無いんですから心配しなくて

も大丈夫です」

さすがに皇子様……お金持ち

其処へ扉の外から声がかけられる。

「お寛ぎの所申し訳ありませんが、下にお客様にお目通りを願う者達が押し掛けているのですがどういたしましょう」

少年とは違う年配の男性の声だった。

「はぁ……　分かりました。私が下に行きますので待たせておいてください」

「誰ですか」

「多分街の有力者達が押し掛けて来たのでしょう。フォンフー様が小さい町にしか泊らない理由です」

そう言ってインフー様が出て行かれたけど夕食の時間まで戻ってくる事は無かった。

退屈なのでフォンフー様の寝室を覗いてみると本当に寝ていた。

窓から街を眺めるのは飽きてしまったし、ハクは窓から飛び出し遊びに行ってしまい一人取り残された気分

部屋からは出ていけないと言われているし退屈でしょうが無いので、フォンフー様の顔を眺めていると、少し悪戯をしたくなる。

フォンフー様の手を取り先程やったように甲に唇を落とし吸ってみる。

目を瞑りフォンフー様の虎核の光を捜しそれを吸いこむように想像してみると自分の方に神力が流れ込むのが分かる。

やった!!出来たわ!!

だけど力は自分の中に飲み込まれ何処かへと消えて行く。最初は首飾りの龍石に行くのかと思ったけどどうやら違うようだ

瞑道のうな道を通るように何処かに繋がって何処かに漏れている??

「お前何をしてる」

神力を奪われ流石目を覚ましたフォン様がギロリと睨んでいたが、掴んでいた手が反対にフォンフー様に掴まれ引き寄せられたかと思うと寝台の上で体を組み敷かれてしまい、私の上にフォンフー様が馬乗りになる。

「ふへっ??!!」

「お前、ソロソロ女としての自覚を持った方が良いぞ。自分の容姿をもう少し自覚しろ」

「自分が綺麗だって言うのは自覚してます」

自慢ではないが私以上の美少女はフォンフー様を含めても会った事が無い。

「美しいだけなら腐るほどいる。だがお前の黒い髪と特に金の瞳は

神族には特に意味がある」

「天帝様と同じだから？」

「そうだ。全ての神族が恋焦がれる色、しかも世にも珍し黒髪が揃えば粗方の神族はお前に邪まな欲望を抱くはず」

「邪まな欲望？？」

「お前を胎ましたいとな」

「胎ます？？？」

赤ちゃんを産む事？？

「お前……わざとボケてるのか」

「ボケてません、どういう事か分かりやすく言ってくれない…うっ！！！」

突然フォンフー様の口で私の口を塞ぎしかも舌まで私の中に入り込んでくるので、驚いてフォンフー様の体を押しやろうとするけどビクともしない

こんなの嫌だ！！

許さない！！

怒りが心を満たし全ての神力を奪う心算で反対にフォンフー様の舌を吸う

「くっ！！」

今度はフォンフー様が私から跳び去り寝台の端に後ずさる。

「フォンフー様のどスケベ！！　私初めてだったのにぃーーーー
酷い！　ウェ～ンン……」

「お前が誘うような事をするとこういう目に遭う事を実体験させたんだ。そもそも寝込みを襲ったお前が悪い」

「うっううう～　だって退屈だったから～　」

「お前にそう言う性的意味が無いのは分かっているが他の男にあんな事したら一発で処女を失うぞ」

「処女！！　／／／　」

そう言われて漸くどういう事か理解するけど、まだ子供の私を？？？

一応、カヤさん達にそういう知識は少し教わったけど……

「なんて面倒な女だ、十歳のガキだからと油断するな、この世の中変態ばっかりだ」

まるで実体験のように苦々しそうに語る。

「フォンフー様も経験あるんですか」

「煩い！　お前に神力を食われて疲れた。　サッサと出て行けーー！！」

そう言いお尻を蹴られ寝室から追い出される。

乱暴な扱いは慣れてしまったが、さっきの口付には驚いてしまう。

しかも舌まで入れられるなんて

口付が唇と唇を合わせるだけじゃ無いんだと初めて知ったけど……

何で舌を入れるの？？？？

初めてがフォンフー様なのはいただけない

初めては好きな人が良かったのに……傷ついた乙女心の代償はきっちり払って貰わないと

漸く自力で神力を食べれるようになったのでこの力で色々試させて貰おうと心に決めるのだった。

あのバカ娘はなんて事をしてくれるんだ！

少し脅す心算で口付をしたのだが、まさか反撃で舌を吸われ神力まで食われるとは

反対に犯されたような気分に陥る…

益々美しくなり、俺やインフーもいるのに全ての視線がレイカに向けられる。

此処まで人を惹きつけえるのは天性のものだろう

無防備に王宮に入れば変態共の毒牙にかかるのは目に見えているので忠告の心算だったがいざとなればあの力を使って逃げれるだろう

「全くもって凄い女だ」

レイカが龍族として目覚めたら、次期龍王にすらなれるのではないかと思いつく

「まさかな……」

呆れた考えを打ち消し、レイカに奪われた神力を回復させる為にも再び眠りに就くのだった。

危険な皇子様達　その1

私は馬車に乗り王都に入ろうとしていた。

矢張り王都の周囲は高い堅固な石の外壁で覆われていてその周囲には王都に入るための大勢の人間の列が並んでいる。そして浮浪者がその周りで物乞いをしたりしているのが伺える。そして青龍国と同様に土塊で作られた粗末な家が王都の周囲を取り囲んで貧民街を形成しているが青龍国の数倍はある規模だ

それだけ貧しい者が多いのが伺える。

「青龍国より貧しい人が多いみたい」

「そうか？　こんなもんだろ」

「私も他国の状況は分かりませんが、何時の時代もこのような状態です」

馬車は人々が並ぶ横を進みながら別の門から直ぐに止められる事無く王都に入る。そこには先程の粗末な家とは違い石造りの立派な家が立ち並び人々の服装も違う

まさに裏と表の世界が壁一つで区切られている。

そして前方の王宮は白亜の宮殿がそびえ立って権威を知らしめてい

る。

青龍国は木造に朱塗りの建物だったけど此処は大理石を使用した建築物だった。

「凄く綺麗な建物、私達あそこに行くんですね」

「綺麗なもんか。中は王に取り入ろうとする欲と色に塗れた虎族の巣窟。お前も一人でウロウロすると空き部屋に引きずり込まれ食われるぞ」

馬車の中でズーッと不機嫌なフォンフー様が意地悪そうに言う。

「人が折角楽しんでるのに水を差さないでください」

「フォンフー様のは大袈裟ですけど、王宮では決して一人では行動してはいけません。出来れば常にベールを付けていた方が安全なんですが…」

「インフー様かフォンフー様の側に常に一緒にいますからベールは外だけがいいです」

私の黒髪と金の瞳はは矢張り人目を引いてしまうらしいので、折角王都に来ても常に暑苦しいベールを付けないといけないらしい。女性にとってベールは必需品らしく、深窓のお姫様になると透ける紗の薄絹のベールを常に頭に被っているらしいけど、半人前の侍女の私は必要ないし、暑苦しく面倒

外を行きかう人を見れば色とりどりのベールを被っている女性が多く、こちらの人達は鮮やかな色を好む様で人が多い市場などは色の

洪水のよう。

今私の着ているのも真っ赤な絹に金糸が施された衣装、まるでお姫様気分でファン様のお屋敷にいた頃のよう

馬車から見える風景を楽しむ内に馬車は王宮を立派な正門を潜り、辿り着いたのは王宮の隅にある離れのような建物の前で降ろされる。

インフー様に手をとられ馬車を降りると花が咲き乱れる庭園の中に建てられた白い石のお屋敷で、人の気配もあまりないみたいに静まっている。

「これが俺に与えられている住まいだ。お前はここから出ないようにしろ」

「えー　王宮を見て回りたかったのにー」

「それは後で俺かフォンフーが見せてやる。余裕があればインフーと街に出ても構わない」

「本当ですか！　絶対ですよ」

「良かったですね。皆のお土産でも見に行きましょう」

「はい！」

楽しく会話をしていると玄関の扉が開けられ侍女らしい人達が数人出て来て頭を下げ、その中の一人が挨拶するが、垢ぬけた綺麗な人で王宮に使える人は矢張り違うよう。

「お帰りなさいませフォンフー皇子様、長旅でお疲れでしょう、中に入りお寛ぎ下さいませ。私は滞在中お世話を申し遣われました女官のピヨルフーと申します」

「暫らく世話になる。それとこの娘はレイカだ、我々と同じように接しよ」

「はい、承りました」

侍女達の視線が一斉に私に注がれ一様に驚いたような顔をするが直ぐに普通の顔に戻る。

私の容姿は特殊だから何処でもこの反応で慣れてしまったけど、この人達からは何か嫌な感じがする。

フォンフー様が私に耳打ちする。

「いいか、こいつ等には気お付けろ気を許すな」

「へ？」

通された広い居間で寛ぎながらお茶や美味しいお菓子が振舞われるが、侍女達は流れる様な美しい動作でテキパキとこなしていき、フォンフー様が部屋を出るよう命じると静かに退出して行く。

「やっぱり王宮の侍女は違いますね」

「澄ました顔をしているが腹で何を考えてるか分からん。どうせ俺の動向を探ろうとしているんだろう」

「フォンフー様なんか探って何になるんです？」

「お前…まじムカつく女だな。俺が第八皇子だと言う事を忘れるな」

「は～い」

「それより、これから如何なさいますか？」

「先ずは父王への挨拶に行くがその前に湯浴みをする。レイカ手伝え」

「はい」

「それでは私は本殿に行き取り次ぎをお願いして参ります」

そう言ってインフー様はお茶もそこそこに出て行かれてしまい大変そう。

私は侍女のピヨルフーさんにお風呂の用意をして貰い、フォンフー様のお世話をする。向こうのお屋敷でも偶にしてたので少しは侍女らしくしないと

フォンフー様が目の前で洋服を脱ぎ棄てて行くのを畳み終えてから、頭を洗って差し上げるのだけどフォンフー様はサッサと自分で次々としてしまい、側に控えているだけで良い

「普通は二、三人の人に洗って貰うのが普通の皇子様じゃないんですか？」

「他人にベタベタ触られて気持ち悪い、おい、背中を洗え」

「わたしはいいんですか？」

「お前は女じゃない」

「どう意味ですか？子供だから」

「意味が分から無いからいいんだよ」

偶にフォンフー様の言う事はわからない

それから体を拭いて差し上げてから、王族の正装の白い衣装の着付けを手伝うとやんちゃ坊主から皇子様の出来上り

「何時もちゃんとしていれば皇子様らしいのに」

「フン！　こんなダラダラした衣装じゃ歩きずらくて適わん」

田舎のお屋敷のようにお気楽なくらしは、ここでは無理だろう。しかもこれから虎王様、自分の父親に会いに行くのにあまり嬉しそうでない

「久しぶりに虎王様にお会いになるんでしょ。虎王様ってどんなお方ですか？」

「ただのスケベ親父だが陽気な爺で嫌いじゃない」

「すけべ親父！！」

父親あり、虎王様に何て言い草、流石にフォンフー様

「お前が大人だったら確実に後宮に入れられただろうな…　そうしたら2百何番目の側妃様で贅沢三昧生活が送れるぞ」

「二百！！　とんでもない私はそんなものになりません！」

「だが王宮で働く侍女や女官は王族や虎族の正妻や愛人になりたくて虎視眈々の狙っている女が多いのだぞ」

「むぅ～　私はそんなの望んでません」

「ところで、力を食う練習をしておけ」

「へッ？　誰とです」

「ピヨルフーは虎族だ、それとなく接触して力を奪ってみろ」

「いいんですか！？」

「構わん、人間が神力を食うなど誰も思うものか」

いいんだろうかと少し心配だけど少しくらい食べても大丈夫だろうと考え試してみる事にする。

それからフォンフー様とインフー様は王に謁見するため、私だけこの屋敷に取り残されてしまう。

「レイカ様、お暇でしたらお庭を散策しませんか」

与えられた部屋で本を呼んでいるとピヨルフーさんが部屋にやって来てそう誘って来る。

「でも、フォンフー様が屋敷から出るなの仰っていました」

「その辺りを少し歩くだけですから大丈夫ですよ」

優しそうな猫なで声で誘って来るので、何かありそうな気がするけど神力を奪う練習になるので此処はお誘いに乗ってみる。

「そうですね。ハクも連れて行っていいでしょうか」

「ハク？」

「ハク、お出で」

ハクを呼ぶと籠で寝ていたハクが飛び出して私の肩に乗ると、ピヨルフーさんが悲鳴を上げる。

「キャー　なんですかこの猿は！」

先程とは違いきついヒステリックな声をあげる。

「申し訳ありませんピヨルフーさん。ハクは私の姉妹のように育った猿なのですが宜しいでしょうか？」

なるべく悲しそうな口調でお願いしてみる。

「ま…　いいですわ、それではご案内しますからどうぞ此方へ」

ピヨルフーさんに案内されて美しい花が咲き乱れる庭園を散歩するとファン様のお屋敷の庭も凄かったけどこちらも綺麗に剪定された木や大きな池まである。

「素晴らしいお庭ですね」

「そうでしょう、此方は王宮の端なのですが本宮殿の庭はここより更に大きく趣向が凝らされています」

まるで自分の庭を自慢するように言う

流石に王宮は広い、この庭でさえかなりの広さなのに更に広大な庭があるなんて。だけどそんなに庭園があっても無駄な様な気がするんだけど

「レイカ様、あちらに東屋がありますので少し休憩致しませんか」

池の畔にある東屋を指してキーンさん提案して来るが、散歩を始めたばかりなのにもう休憩なんて可笑しい…　何かあるのかな？

東屋に行くと誰か先客がいる。

「レイカ様どうぞ此方に」

キーンさんに背中を押され東屋に入るとそこには二十代くらいの美しい青年と後には三人の屈強な護衛兵がいる。

青年は藍色の髪を後ろで金の髪留めで結び、細く整えられた眉の下には灰色の切れ長な目、鼻も細くすーっとしており繊細な美しさだ。

「ほー　この少女がフォンフーが連れて来たのか…なんと珍しい黒髪にしかも人間でありながら金の瞳とは　名は何と申す」

フォンフー様を呼び捨てにするという事は皇子様、髪の色が第三皇子様に似ている気もする。

「はいレイカと申します。皇子様　お初にお目にかかり光栄です」

チェンさんに習った王宮の流儀で礼をする。

「美しい上に賢い子のようだ。その肩に乗っている白い猿はそなたのか」

「はい、ハクと言い私の友達です」

「獣を友とは面白い事を言う。だがその美しさには感嘆しよう…もう少し側に来るがよい」

少しいらついた様にピヨルフーさんが私の背中を押す

「さあ、ギィンフー様のお側に行くのです」

なんだか、この場を逃げ出したいけど皇子様の後ろには三人の護衛兵、私の後にはピヨルフーさんがいて逃げれない

仕方なく前に進み側によると私の顎を持ち上げ目を覗きこむ様に見

詰める

「なんと見事な混じりなき金の瞳だ」

うっとりと私の目を見る様子が少し妖しい…少し危ないかもしれない、ピヨンフーさんはあてに出来ないだろう

「申し訳ありませんが、フォンフー様がソロソロお戻りになりますからお放し願えませんでしょうか」

「フォンフーだと、あ奴には勿体ない今から私の側に仕えよ」

「いえ、私はフォンフー様がいいです」

思わず正直に言った途端に私の腕をとり引き寄せ、腕をネジあげる。

グイ！

「痛い！」

「人間風情が生意気な！　私はこの国の第四皇子ギィンフーだ、フォンフーより立場は上、分を弁えよ！」

フォンフー様より短気、しかも性質が悪いかもしれない。　このままでは腕を折られてしまいそう

『　レイカ　シンリョク　タベテ　』

肩にしがみ付くハクが久しぶりに話し掛けて来る。

そうか、こいつの神力を食べてしまえば逃げられるかもしれないけど今はこの痛みをどうにかしないと集中できない。こういう時は泣き落としが一番、男は女の涙に弱いと言うし

「お許しを皇子様……　どうかお許しを……」

か細い声で涙を溜めた目で下から許しを乞うてみると、途端に皇子様の顔は緩めて歪んだ笑みを零す

「最初から素直にすれば優しくしてやろう」

腕を弛める放してくれるが腕にはクッキリと指の痕が残っている。

「ヒック　ヒック　シックシク……　申し訳ありません皇子様……だけど私はフォンフー様恐ろしくて……」

顔を手で覆い泣いたふりをするけど、実際腕が痛くて涙が出ているから嘘泣きじゃない

「そうであったか、それなら私がフォンフーに直接断れば何の問題も無い　可哀想に痕になってしまって今、神力で消して上げよう」

チャンスだ！

皇子様が神力を注ごうとする時にそのまま一気に神力を奪わないと不自然

出来るかどうか不安だけどそうしないと連れ攫われてしまいそうだ。

『　ダイジョウブ　ハク　テツダウ　』

皇子様が私の手をとった瞬間にハクの意識が流れ込んだと思うと皇子様の神力が流れ込んでくるのが分かる。

そして皇子様は立眩みを起したようにふらつき護衛の兵が慌てて支える

「ギィンフー様　どうなされました」

「急に眩暈が……」

「直ぐ宮殿にお運びいたせ！」

「早くしろ」

「お気を確かにギィンフー様」

兵士達は慌ただしく皇子様を連れて行きピヨンフーさんもそれに付いて行ってしまい一人取り残され、どうやら難を逃れられたみたいでホッとする。

「ハクありがとう、助かったわ」

『　ハク　レイカ　タスケル　』

「うん、ハク大好き」

ハクの小さな体を優しく抱きしめ、暫らく庭を散歩しながら屋敷に戻った。

インフーを連れ久しぶりに本宮殿にある王の謁見室を訪れるが、道すがらあいつが来ないか身構えていたが姿を見せず他の皇子達もいないようだ。

官吏に案内され王の部屋の前に行き、部屋の扉を開ける。

「陛下がお待ちです。お通り下さい」

「インフーは此処で待て」

「はいフォンフー様」

部屋に通されると恰幅のいい白髪の五十代の男が美しい女官に書類を捲らせながら署名と押韻をしていた。

「陛下、お久しぶりで御座います。　フォンフーただ今戻りました」

虎王はチラリとフォンフーを見てから溜息をつく

「フーーッ　どうしたのじゃ。王宮を嫌うお前が急に来るなど」

「分かってお出でしょ。　あいつが俺の下を訪れたのを！」

俺が此処に来た理由など分かり切っている癖にわざと惚ける。

「そなたは下がれ」

女官を下がらせ二人きりになる。

「やれやれ、お前がいるとイェンファフーが動き出し他の皇子まで騒がしくなる。困ったもんだわい」

「俺は関わりなど持ちたくもない」

「ホッホッホ～　全く面倒な男に目を付けられたもんじゃ」

お前の息子だろうと言いたかったがその言葉を飲み込む。それより重要な事を聞き出さないとこれからの作戦がたたない

「それより奴は王位譲渡の願い出たのですか」

「そう言えばそんな事を言ってきたかの～？」

まるで重要でも無いかのように惚ける……全く食えない親父だ

「それで何とお答えになったのですか」

「無理だと言ったかの」

「何故です！？」

「王位を譲りたくとも天帝様がこの世界にいらしゃらないのでは譲りたくとも譲れん」

「天帝様が！　どういう事です！？」

「天帝様のお考えなど我らには考えも及ばんよ」

「それでは、あいつはまだ王位には就けないのですね」

心の底から安堵が広がる……だが天帝が戻るまでの猶予でしか無い

「そう言う訳じゃ、だから安心して田舎に引っ込んでおれ」

「はい、そう致します」

「そうじゃ、母にも顔を見せて行け。寂しがっておるじゃろうからな」

自分は年に一度も行くか行かないかのくせに

確かに最後にあったのは一四年前に田舎に引っ込んで以来、まるで他人も同然の親子関係だが帰る前に一度は顔を見せるしかないようだ

「はい」

「それよりフォンフーよ、美しい少女を連れているらしいの～　帰る前に少し貸してくれんか？」

既にレイカの情報を知っているとは、何処から知っているのかは知らないが流石に耳ざとい

「まだ十歳の少女に何をする心算ですか。あれはインフーと添わす予定の娘ですからお諦め下さい」

一応、牽制をしておく

「十歳か……　ちっと若すぎるか」

「それでは、帰りに又お伺いいたしますのでこれで失礼します」

「お～　帰るがよい」

久しぶりにあった息子に対しあっさりした物だが俺も別段深い情も無いので御互い様

王の部屋を辞するとインフーが心配そうに待っている。どうせ俺が何かしでかさない事思ったのだろう

「帰るぞ」

機嫌良く笑いかけると驚いたような顔をする。

失礼な奴だ

インフーは一旦王宮で働く父親に会いに行くため、俺一人で離宮に戻ると女官のピヨルフーがおらず、侍女も戸惑っていた。

「何時からいないのだ」

「はい、レイカ様とお庭の散策に出られて暫らくするとレイカ様お一人でお戻りに。ピヨルフー様はそれ以後お戻りにならないので御座います」

「分かった。そなた等は呼ぶまで控えていろ」

急いでレイカの部屋に行くと、本人は呑気に本を読んでいる。

「お帰りなさいフォンフー様」

「おいレイカ、ピヨルフーをどうしたんだ」

「あの人の所為で酷い目にあったんですよ！　見て下さいこの腕、やっと顔の痣が消えたと思ったらクッキリ手形がついちゃってるんですよ」

怒りながら俺に右腕を差し出すと、そこには紫色に鬱血した指の後

「何をしたんだお前」

するとレイカは第四皇子ギィンフーにあった詳細を話しだす。

ギィンフーはあいつと母が同じで、かなり兄を崇拝する人間の為、俺を最も嫌う一人。そのせいで事あるごとに嫌がらせをする陰険な奴だが、こんなに早くレイカに接触するとは

一体どこから情報が入るんだ

しかもギィンフーの神力を奪うなどあいつが何か感ずいたらお終いだ

「このバカ野郎！　お前の力がばれたらどうする！」

「ひぇ～ん　だって人攫いに遇うところだったんだもん！」

「まあいいだろう。今の俺は機嫌がいいから許してやる。　しかしあのギィンフーを誑し込むとは…お前が大人になったら皇子達の間で争奪戦でも起きるんじゃないのか」

ギィンフーはかなりの面食いだ、そして女より自分の方が美しいと平然と言い切るうのぼれの強い奴で、滅多に他人の美しさを誉め讃える事などしない奴。

レイカはそんな奴にまで美しいと言わしめる

「嫌です！　それより第四皇子様の仰る通りに渡せと言われたらどうなるんです！」

かなり嫌っているらしい

皇子達に求愛されれば女なら嬉しいものではないのか？

レイカはレイカで美しい男を目にして頬一つ染めない

ガキだからか？

「あいつの言う事は嘘だ。それに俺がお前を手放すなどあり得ん」

「どうせ私の力でしょ」

「愚問だな」

レイカの力は目覚めつつある。

後は天帝がお戻りになった時、何時になるか分からないが出来るだけレイカに力を注ぎ次に備えるだけ。

多分、高慢なあいつは事が思い通りに進まなかったので荒れ狂っているだろう

あいつが地団太を踏む姿を想像したら愉快でならない。

だが、八つ当たりされない内に早々に王都を出た方がよさそうだ

しかし天帝が不在!?

王はこの世界にいないと言っていたが、一体どこに行ったというんだろう

俺としてはありがたい話

当分戻ってこないのを願うのだった。

危険な皇子様達　その2

翌朝、清々しい朝の朝食の時間に慌ただしく侍女がやってくる。

「朝食中申し訳ありません。今第一皇子様と第四皇子様の使いの者が文とこれを持って参りました」

そう言って二通の手紙と綺麗な花束と小さな箱がフォンフー様に差しだされる。

「なんだと」

怪訝そうに手紙を受け取り次々封を開けて中身を確認すると苦々しそうな顔をするので、インフー様が尋ねる。

「何が書かれているのですか」

「第一皇子は昼食の招待で、第四皇子はレイカ宛だ。全く面倒な！」

「レイカちゃんに！！」

「私？！」

「昨日の詫びだそうだ。　花と宝石を受け取れだそうだ…十歳のガキに何考えてるんだ？？　それをレイカに渡せ」

侍女から花束と箱を受け取り、箱の中を開けると赤い石の付いた耳飾りが入っており高価だと分かる。

「フォンフー様受け取っていいんですか？　花はいいけどこの耳飾りはチョット」

「付き返したら怒鳴りこんでくるのが目に見えている。面倒だから礼の手紙でも送っておけ」

素っ気なく他人ごとのよう

「インフー様どうしたらいいですか？」

返事が無いので目線をインフー様に向けると何故か茫然自失している。

「インフー様？」

「ほっておけ。　それより第一皇子の使いは待たせているのか」

「はい、直ぐにお返事が欲しいようです」

「なら、レイカ共々お伺い致しますと伝えろ」

「へっ！？」

「承知致しました」

「フォンフー様どういう事ですか？？　何故私も第一皇子様の昼食

にお呼ばれるんですか？？」

「今、宮中で噂の美少女を見たいんだろ…　まさか第一皇子まで出てくるとは、これで他の皇子達もこぞってお前に接触して来るのは確実だな」

「ヒェ～～　冗談じゃありません、断って下さい！！」

昨日の皇子様だけで十分、しかも第一皇子様なんてとんでもない話

「そんな事したら不敬罪で斬首されるぞ」

「招待されたのはフォンフー様でしょ～～　私は嫌です！」

「諦めろ。王宮での俺の立場は低辺だ」

「そんな事威張らないで下さい～～～」

どうやら私は第一皇子様と食事をしなければならないみたい

フォンフー様は当てにならないし、インフー様は落ち込んでいて話し掛けても上の空で私より衝撃を受けているみたいだ……何でだろう？？

昼の時刻になり一応用意していた衣装を纏い、フォンフー様に言われて第四皇子様に頂いた耳飾りを着け、お姫様のように紗のベールを頭に着ける。　しかも薄っすらと化粧までされて全てが初めての事で戸惑う

我ながら凄く綺麗だと思うけど……これでは益々皇子様達の目を引いちゃう

とても嫌な予感が

フォンフー様は何を考えているんだろう

今回はインフー様は呼ばれていない為、フォンフー様と二人で第一皇子様の宮を訪れるがフォンフー様の屋敷がみすぼらしく思えるほど豪奢な建物

「流石第一皇子様の宮殿、低辺の第八皇子様とは違いますね」

「お前、不敬だぞ」

嫌みの一つでも言わないと気が済まない。まさかこのまま第一皇子様に差しだされたらどうしようという不安がある。

「私を売ったらフォンフー様の神力根こそぎ奪いますからね」

「フン　自意識過剰だ　十歳のガキにそこまで価値があると思っているのか。単に観賞したいだけだろ、出し惜しみせずお前の美しさを見せてやれ」

珍しく美しいと言われ思わず照れてしまう

「／／／はっ！！　どうしたんですかフォンフー様が私を誉めるなんて」

「もう口を閉じとけ。　今からは許しが無い限り口を開くな」

「むぅー」

フォンフー様がそう言うと同時に玄関の扉が開かれ家令らしき使用人が出て来る。

「お待ちしておりましたフォンフー様　ディレフー様がお待ちしておりますので此方に」

家令に案内された場所は中庭で小さな池に噴水まである。

そして石畳の敷いてある場所にはテーブルと椅子がセットされており、中央には白い衣装を纏った美丈夫が座っておりその周りには着飾った美女が取り囲んでいる。

これがハーレムというものだろうか

何れも露出の激しい服は胸を強調しており豊満な胸を曝け出しており、フォンフー様の後ろから思わず凝視してしまう

凄い！　どうしたらあんなに胸大きくなるの！！　私もあんなに大きくなるのかな？

フォンフー様はしずしずと第一皇子様の前に進み跪き両手を胸に当て頭を下げ、私も急いでそれに習って跪き同じ礼をとる。

「ディレフー兄上様お久しぶりです。今日は昼食にお呼び頂き有難うございます」

気持ち悪い！！　何時もの声より少し高めに話す姿は私には不気味に映りる。

第一皇子は横柄な態度でそれに答えた。

「うむ…　久しいのフォンフーよ。　堅苦しい席では無い…そなたも楽にするが良い」

「はい兄上様」

「後ろにいるのがそなた連れて来た侍女か　ベールを外し面を上げさせよ」

「レイカ、ベールを外し顔を御見せしなさい」

「はい」

ゆっくりとベールを外すが顔は俯いたままにしておく、王族を直視してはいけないとインフー様に教えて貰った。

「おおー　本当に見事な黒髪、初めて見る。瞳は金だそうだなもう少しちこう寄れ」

フォンフー様に背中を押され仕方なく前に進み第一皇子様の前に行き恐る恐る皇子様をみる。

第一皇子様は昨日の第四皇子様とは間逆な感じの男らしい美しさの皇子様

髪の色は銀色の巻き毛、瞳は深い紫色をしておりアーモンド形で大きくギョロリとしており太い眉毛も男らしく口も大きめで全体的にハッキリした目鼻立ちの美丈夫で、体も大きく筋肉で盛り盛りの体が伺え少し苦手

皇子様は腕を私に伸ばし顎をとらえ上を向かせられるので視線が合ってしまう

なんだかギラギラした目が生理的に受け付けない

「まさに天帝様と同じ金の瞳、　人間でありながらこの色を纏うなどあり得ん事だ。お前の親は？」

この質問はある程度想定していたのでフォンフー様に言われたと通りに言う

「小さい頃に人買いに攫われたのをフォンフー様に助けていただいたので、覚えておりません。申し訳ありません。」

「出自は分からぬか…　後十年もすれば女として熟した時が楽しみだ」

ねっとりとした目で見つめられ、なぜか背筋が寒い……気持ち悪い

「これ程の美形はまたとおらぬ。フォンフー、この娘を私に譲らぬか」

フォンフー様の嘘つき！　十歳の子共にしかり目を付けてるじゃない

皇子様に見られているせいで不快な顔すら出来ず無表情でいるしかない私

辛い

「申し訳ありません兄上様。既にレイカは陛下のお許しの下、私の教育係のインフーと婚約をしております故にご容赦を」

えっえ～～～～～～～～～　私とインフー様が婚約？？？？？

婚約って結婚の約束をしているってことよね？？　知りませんよそんな事！！

「ほーう……　良かろう今回は諦めておこう」

「申し訳ありません」

「今日の所は此の娘の顔を眺め食事を楽しむとしよう…　食事を持って参れ」

皇子様の合図で次々と豪華な食事が運ばれとても三人で食べきれない程の皿が並べられ、第一皇子様の気持ち悪い視線と後の美女軍団の痛い視線の中では美味しい料理も味わえず、会話も弾まないまま昼食が終わり食後のお茶が振舞われる。

「今日は私如きをお招きに預かり有難うございます」

「母は違えど兄弟だ、何の遠慮もいらぬ……それよりイェンファフ

ーには会ったか」

「いいえ、まだお会いしておりません」

「お前を溺愛するイェンファフーが真っ先に現れそうなのに何故姿を見せないと思う」

皇子様が探るようにフォンフー様を見つめるので、漸く私から視線が外されホッとする

「私には分かりかねますが」

「イェンファフーは陛下に王位の譲渡を願い出たが認められ無かったようだ。　クックックックック　身の程知らずな奴だ、私を差し置いて出過ぎたまねをしたものだ」

「そんな事があったとは知りませんでした」

「それから王宮を飛び出し何処かに雲隠れしおった。愚かな奴だ」

「兄上様は父王に願いでないのでか」

「私か？　父王が健在の今は慌てる必要などないだろ。父王自ら譲るならば話は別だが」

「さようですね。兄上様なら立派に父王の跡を継ぐ事が出来るでしょう」

猫を被ったフォンフー様はおべんちゃらもお上手で私には滑稽で堪らないが、その一言で機嫌を良くする皇子様、結構単純なお方なんのかもしれない

それから、また私に視線を向け大人しく茶を飲む姿をじっとりと見詰める。

いい加減、勘弁して欲しいのだけど耐えるしかない

私より、後ろにいる美女の方が目で楽しめるんじゃないの？　男の人は大きな胸が好きなはず

「珊瑚の耳飾りをしておるな。婚約者かそなたが贈ったのか？」

耳飾りに使われている赤い石は海で取れる珊瑚と言う名前で真珠に次ぐ高価な石だと、インフー様が後で教えてくれ驚かされた。

「いいえ、ギィンフー兄上から賜わった物です」

「ギィンフーが…　何故だ？」

「昨日偶然庭を散策していたレイカとお会いになったらしく、その時レイカが怪我をしてしまったのを気に掛けられた優しい兄上が気遣ってくれたようです」

「あやつが優しいだと」

「そうだなレイカ」

実際は違うけどフォンフー様に合わせるしかない…何の思惑があるんだろう？

「はい　優しくして頂きました」

「そうか」

それから少し閑談をして漸く昼食会が終わり第一皇子様の宮殿を辞する事が出来たけど、とても疲れてしまいフォンフー様の後ろを無言で付いてくしかない

二度と皇子様なんかと食事はしたくないし、このまま田舎に戻りたいくらい…

そのせいでフォンフー様が立ち止まったのに気付かなくて背中にぶつかってしまう。

「ぶっ！　フォンフー様急に立ち止まらないで下さい」

だけどフォンフー様は無言で前を見ているので、背後から前を覗きこむと昨日の第四皇子様がお供を大勢引き連れていた。

ひぇ～　まさかこんな所で会うなんて、昨日の今日で会いたくないのに～

「お久しぶりですギィンフー兄上」

先程とは違いかなり警戒した様子だ

「ずっと田舎に引っ込んでいれば良いものを、何を企んでおるのだ」

第四皇子様は第一声からフォンフー様に辛らつな言葉を投げかける。

「いいえ、久しぶりに父王と母に挨拶がてらに顔を見せに来ただけです」

それを気にする風でも無いフォンフー様

「生根の腐ったそなたがそれだけで王宮に戻るなど誰が信じる」

「本当にそれだけです。それより今朝、私の侍女に多大なお品を頂きありがとうございます。レイカそなたからも兄上に礼を申し上げよ」

そう言い私を背後から引きずり出す。

嘘〜！　二度と会いたく無かったのに！！

だけど仕方が無くお礼を言うことにする…だから贈り物なんて欲しくも無いのに相手が皇子様なのでどうしようもない

第四皇子様の前に進み出て跪き礼をとる。

「第四皇子様　私めに過分なお品をお与えくださりありがとうございます」

「おおー　さそっく着けたのか！　私が見立てだけあって良く似合うぞ」

「ありがとうございます」

第一皇子様だげでお腹一杯なのに、次は第四皇子様なんて…まさか続々とこのまま五・六・七なんて事にならないか不安になる。

「まー　此方が噂の侍女ですの…まだ少女ではありませんか」

女の人の皮肉な声の方を見ると水色の髪に赤い目をした眉目秀麗な女性が皇子様の腕に自分の手を絡ませ縋り、親密さを見せつけているよう

そして、憎々しげに私を見、蔑んでいるのを隠そうともしない

この女性とは初対面だけど多分虎族の女性、私が人間だから嫌いなんだろうか？

「だがこの黒髪に金の目、まるで夜空に煌めく月のよう…これ程稀有な色は無い」

「酷いですわ、私の前でそのように他の者を誉めるなど。　でも所詮人間…精々美しいと言えるのも後二十年余り憐れなものです」

勝ち誇ったように女性が言うと、皇子様は鬱陶しげに腕を振り払う

「興ざめだ、そなたは黙っておれ」

「！！　申し訳ありません……」

女性は第四皇子様に窘められ顔色を青ざめさすが次の瞬間私を射殺さんばかりに睨みつける。

ヒィ～～　何で私が恨まれるの？？？

「どうだ、フォンフー。　私にこの少女を譲れ」

しかも先と同じ展開

「それは無理です兄上、レイカは私の教育係のインフーと陛下の許しを得て婚約を済ましております。」

「なんだと！」

「昨日父王にお会いした時に許可を頂き五年後インフーが成人した折に婚儀を挙げさせる予定です」

まるでまことしやかに言うのを唖然と聞く私

第一皇子様の時は冗談だろうと聞き逃したけど、今はとても冗談に聞こえない……だけど今の状況では反論を口に出来ず黙っているしかない

「レイカの美しさを二十年あまりで散らすのはあまりに惜しく思い、インフーもレイカと添う事を了承してくれましので」

「クッ……　おのれフォンフー……」

「昨日兄上はお倒れになったとか、あまり御引き留めしてはお体に触りますので私共はこれで失礼します」

私の手を引き足早にその場を離れるが、後ろからの突き刺さるような視線を幾つも感じ背筋がぞくぞくする。

フォンフー様の離れに戻るまで他の皇子様に会うんじゃないかとビクビクしながら戻り、幸い誰にも会う事無く戻れホッとしたのだった。

なんとも疲れる一日だったが、あいつが王宮に居ないという情報は有り難かった。

屋敷に戻る道すがら色々な思いが巡る。

第一皇子は何故あいつが王位を譲られなかった理由を単にあいつの力不足と判断し天帝の不在を知らされていないようだ。やはり父王も第一皇子を次期虎王としては考えていないのだろう……だが俺にとっては第一皇子の方が都合がいい。

なにより俺になど興味の欠片も無い男だからいいのだ。

今回の昼食に呼ばれるなど初めて事で、明らかにレイカ目当てなのは分かり切っていた。しかし奴の好みは胸の大きいケバイ女なので、レイカなど一目見れば興味を失くすと思ったのだが…寄こせとは…。

…咄嗟に嘘を言ったが惚けた父王なら口裏ぐらい合わしてくれるだろう。

そして予想通り、第四皇子もやって来たのは笑える。

十歳のガキに何をトチ狂っているんだ、白虎国でも五指に入る虎族の姫を側に侍らせておいてレイカから視線を外さない。

インフーとの婚約の話をした時の悔しそうな顔、長年の溜飲が下がる。

少しやりすぎたので何か仕掛けられない内に、早々に王都を離れた方がよさそうだ。それに他の皇子達まで来ては面倒。

横を歩く疲れた顔のレイカを改めて見やる。

確かに美しくこのまま成長すれば白虎国一の美貌になるだろうが、俺にはそう言う対象には見れない。

第一に十歳のガキ

インフーにしろあいつ等にしろ大の大人が子供に邪まな目を向ける方が信じられない

「なんですかフォンフー様、気持ち悪いのであまりジロジロ見ないで下さい」

しかも生意気だ

「どうなんだ皇子達にモテル気分は？」

「最悪です」

「どうしてだ？　二人とも容姿も地位も申し分ない男達。　女なら

嬉しいものではないのか？」

「綺麗な人なんて、これまで幾らも見てますから特別何かを感じるなんてありませんよ。しかも第一皇子様は生理的に受け付けられないですし、第四皇子様はフォンフー様より性格の悪さが際立って無理！」

「凄い言いようだな…　それではお前がこれまでで一番美しいと思うのは誰だ？」

自分と言いそうな気がして、その時は思いっきりこきおろしてやろうと思っていたが違った。

「母様！！　この世で一番綺麗なのは母様です」

「確かにお前の母親ならさぞ美しいだろうな」

やはり子供…色気づくのはまだ早いようだ

「それより私がインフー様と婚約しているなんて嘘をついて大丈夫なんですか？　私はまだ十歳なんですけど」

「心配いらん。奴らを牽制しただけ、虎族の婚約にしろ結婚は虎王の承認が無ければする事も出来ない。そして認められれば誰も花嫁、花婿の権利を奪う事は出来ない…例え王族であろうとな」

「でも私はまだ子供ですよ」

「虎族など産まれた時から許嫁がいて当り前、さっきお前を睨みつけていた虎族の女がいたろ、あの女はギィンフーの許嫁だがあの女

が生まれた時に婚約が結ばれた」

俺にも嘗ては居たらしいが、あいつに潰されたが皮肉にも唯一感謝した事

「婚約者の前で私を寄こせって言ったの！　酷い」

「強い虎族は正室の他に愛人を何人も囲うのが普通、しかも王族であれば正室と言えども夫が何人も愛人を持とうが口出しできない」

「最低！　絶対虎族の人となんか結婚しない」

誰もお前を正室に求めている訳でなく愛人にしようとしていると言おうと思ったが、五月蠅そうなので止めておく。

「それより、今日からお前はインフーの婚約者になって貰う。他の皇子の下に行きたくなかったら分かったな」

「は～い」

インフーが仮初でもレイカの婚約者となれると知ったらどんな反応を示すのかと思うと今から楽しみだ。

だがある意味危険な役を押し付けたかもしれない…

欲しいものは手に入って当り前の奴ら、これから益々美しくなるであろうレイカを目の前にして黙って見ているだろうか？

インフーが不慮の事故で死なない事を祈ろう

危険な皇子様達　その3

王都に来てから既に五日が過ぎその間に第二、三皇子以外の全ての皇子様から昼食やお茶のお誘いを受けて仕方なく出席したけどまるで珍しい動物でもなった気分

そんなに黒い髪と金の瞳が珍しいの？

私にとっては黒も金も馴染み深い色なんだけど皇子様達はいたく此の色がお気に召したようだ。

第五皇子テンカフー様は栗色の巻き毛に青い目の可愛い感じの人で親しみやすく一番まともな王子様で、「レイカは暗闇に輝く金星のようだ」と評し第六皇子ポルフー様は珍しくポッチャリした体型の銀の髪に紫色の瞳で痩せてれば素敵な皇子様で「レイカの髪は黒くて不味そうだけどその瞳は蜂蜜のようで美味しそう～」だった。第七皇子ユンフー様は水色の髪に紫色の瞳の大きな少女のような中性的な皇子様で「なんて綺麗な黒髪なの～　でもこう少し髪を高く結って翠の髪飾りを付けた方が似合うわ」などと言いだし着せ替え人形にされてしまう。

このお三方は比較的フォンフー様と友好的に感じたけど、矢張り何処かよそよそしいく兄弟には思えない

「兄弟と言っても母親は違うしそれぞれ母親の実家や宮廷の派閥も関わってるからこんなようなものだ」

と素っ気なく答えるフォンフー様だった。

それぞれの皇子様は個性的で華やかだけどお茶会や昼食会のお誘いが日切りなしに来るのでうんざり

「フォンフー様一体何時まで此処に居るんですか？　いい加減帰りましょ」

「六日後に行われる虎王の誕生祝賀祭が終わるまで我慢しろ。それが終わったら帰る」

まだ六日もこんな所に居るのかと思うとゲンナリするけど、虎王様の誕生祝賀祭なら仕方がないし、街も賑やかになり色んな出し物や店が出店するだろうから楽しそう

だけど皇子様に覚えもめでたい私、嫌な予感がする。

「まさか、私が出席するはずありませんよね」

「安心しろ、インフーの婚約者として招待状が届いている」

「えっえ〜〜　なんですかそれ！！」

どうやら公的に私とインフー様は婚約していると認知されてしまっていた。

良いんだろうか？　インフー様だって私のよな子供が婚約者なんて

嫌な気がするんだけど
「すいませんインフー様にもご迷惑をかけてしまって」

「いえ～　私は大丈夫ですよ！！　レイカちゃんの為ならなんだってやります！」

「インフー、そのちゃんずけいい加減止めとけ、何処の世界に婚約者をちゃんずけしている男がいる」

そう言われればそうだし、私もいい加減ちゃんずけは子供っぽくって嫌だった。

「私も呼び捨ての方がいいです」

「そっそうですか……では　レイカ　／／／／」

顔を真っ赤にして私の名前を呼ぶ??　何故??

「はい、インフー様」

「そっそれではレイカ、／／／／　今度の祝賀祭に着る衣装は私に用意させてくれませんか、一応婚約者として贈り物をしたいので／／／／」

やたらと恥ずかしがるインフー様の突然の申し出に戸惑う

「いいんですか?」

「是非、私に贈らせて下さい」

フォンフー様を見れば受け取れと目で言っている

「それじゃあ、お願いします。　でもそんな高価な物じゃなくて良いですから」

「いえそう言う訳にはいけません。婚約者に贈るからにはそれなりの物を揃えなければ、今から誂えてきますのでフォンフー様少々街に行って来ます」

そう言うや否やインフー様は部屋を飛び出して行ってしまう。

「いいんですかフォンフー様　インフー様にお金を使わしてしまって」

仮にも虎族なのだからお金があるのは分かっているけど、嘘の婚約者に高価な衣装なんて申し訳ないような気がする。

「本人が喜んでやるんだから、快く受け取ってやれ」

「はい」

「それより神力の方はどうだ?」

「皇子様達とそれとなく接触する時に少しづつ貰ってます」

フォンフー様の提案で皇子様達に会う時はコッソリ少しずつ神力を貰っているけど、第五、六、七、の皇子様に限っている。第一～四皇子はかなり高位のため気付かれる可能性があり危険らしい。

「祝賀祭には大勢の虎族が集まって来るから接触して来る奴からは

神力を奪って行くんだ、だが第一から第四皇子はなるべく近ずくな」

「は～い　アレ……そう言えば第二皇子様にはお会いした事ありませんけど、どんなお方ですか？」

「知らん、俺もあった事が無く存在自体も疑われている謎の皇子だ。かなりの神力を持っているらしいが自分の宮殿に引き籠って出ようとしないらしいから気にするな」

引き籠りの皇子様、本当に色んなタイプの皇子様が揃っている。

「へー　」

「それよりお前はダンスは踊れるのか？」

「ダンスって何ですか？？」

「虎族のパーティでは男女の対になって踊りを楽しむんだが……。よし！今から教えてやるから覚えろ。そして踊りを申し込んだ虎族と片っ端から踊れば神力を奪うのに持ってこいな方法だ」

フォンフー様の勝手さは身にしみているけど、私を道具のように扱うのは流石にムカつ

「なんですかそれ！！」

「今から特訓だ！死ぬ気で覚えろ、これはお前自身の為にもなるんだぞ」

確かに早く神力を集めたいけど、ムカつく

引きずられるように腕を引かれ、玄関ホールでフォンフー様に怒鳴られながらダンスの特訓が始まる。

そして少しフォンフー様の足を踏もうものなら、容赦なくゲンコツが跳んでくる。

「フォンフー様なんか大っ嫌い！！」

「煩い！　そんな事よりステップを覚えろ」

問答無用で練習は始まり、完璧に覚えるまで祝賀祭の前日まで練習は続けられたのだった。

虎王様の誕生祝賀祭は盛大に執り行われ、午前中は虎王様が馬車に乗って国民から盛大な祝福を受けていていた。そして夜には国中から集まる虎族達が宮殿の大広間に集まり祝賀会が模様される。

私はインフー様に贈られた赤い衣装で少し大人っぽく胸が少し開いており、スカート部分がふわりとたっぷり布が使われ、踊ると広がって綺麗に見えるらしい。髪は両脇を上で結いあげて大きな赤い造花が飾られて耳にはルビーの耳飾り、そしてお化粧もして貰っている。

「綺麗ですよレイカ／／／　きっと今日集まった虎族の姫の中でも一番です！」

そんなに言われると流石に照れてしまう

「ありがとうございます。／／／」

「インフー　お前でもおべんちゃらが言えるようになったんだな」

「心から言ってます！」

「それじゃあ面倒くさいが行くぞ」

フォンフー様は先頭を歩き私はインフー様に手をとられて会場に向かうと、大広間は既に煌びやかな衣装をまとった人々が集まっている。

私達が入って行くと一斉に視線が集まるが、フォンフー様は気にする事無く突き進むと人々は道を開け会釈して行く

普段が普段なので、矢張りフォンフー様も皇子様だったんだと改めて知った気がする。

そしてフォンフー様の後ろを付いて行くと人々の不躾な視線が私に注がれるがインフー様がさり気無く体を引き寄せなるべく人々から隠すようにさり気無く気遣ってくれる。

フォンフー様は一段上でどっしりと玉座に座る虎王様に挨拶する。

「父王様　お誕生日をお祝い申し上げます」

「おおー　フォンフーか、そなたに祝って貰うのは久しぶりだの～」

「不義理を致しまして申し訳ありません」

「まあ～よいよい。ところで後ろに居るのがそなたが連れて来た少女か」

「はい、レイカとその婚約者のインフーです」

「ほっほ～～　婚約者の～　レイカとやらもうちっと近くに」

フォンフー様が行けと目で言うので王様の前に進み出る。私のような人間がまさか王様の近くに行けるとは考えもしなかったので緊張してしまう

良いんだろうか？　私なんかがご挨拶して

王様は白髪の柔和な感じのおじいちゃんで横には王妃様もいてにこやかに笑った綺麗で優しそうな女性だ

「噂にたがわず美しい娘じゃ～　十年後なら後宮に召したいの～」

フォンフー様の言う通り女好きらしいけど、子供の私になにを言うんだろ

「オホッホホホホ～　陛下オイタはいけません。レイカには既に婚約者がいるのですから、幾ら王でも人妻を奪ってはなりません」

「仕方ないの～　諦めるしかないか。　その代わり毎年わしの誕生祭には顔を見せるのじゃ、分かったな」

王妃様が王様を窘めてくれたげっど気に入られてしまった？

多分、孫を可愛がるようなお気持ちなんだろう

「はい陛下」

「それでは父王、後がつかえている様なので我々はこれで」

「おお、後は好きに楽しむが良い」

結構呆気なく王様の下を辞して広間の隅に行くが視線を向けられても話しかけようとする者はいないがその内音楽が流れ出し人々が踊りだすと、インフー様が手を差し出す。

「踊って下さいますかレイカ」

「喜んでインフー様」

インフー様と私では身長差があるから踊りにくいけどインフー様が上手くリードしてくれる。真っ赤な衣装が花のように広がり綺麗で本当にお姫様気分。インフー様も何時もよりかっこよく見える。

側では同じ様に女の人達の衣装が花が広がっていて、まるで大広間に色とりどりの花が咲き誇っているようだった。

一曲終わると突然違う手が私をの手を引く

「綺麗な花を独り占めはずるいぞ、私と代われ」

「ユンフー様！」

インフー様は少し驚いた顔をするが私の手をユンフー様の手に渡し少し落ち込んだように下がって行った。

次の曲が始まりユンフー様と踊り始める。ユンフー様は私より頭一つ分大きいだけなので踊るには丁度良い相手で、リードも優雅でお上手だ。

「レイカの婚約者にしては冴えない男だな」

「インフー様はカッコいいしとっても優しいです」

「服は婚約者からのだろ…趣味はあまり良いとは言えないね。上から下まで真っ赤なんて下品だよ」

「そうですか？」

「今度私がレイカに似合う服を送ってあげる」

「婚約者がいるので、それに近々田舎に戻る予定ですから」

「えー　もう少し王都に居ればいいのに」

どうもこの皇子様とは女友達のような不思議な関係になっており、私も割かし気さくに話せる。

踊りながら話しているので皇子様の足を踏まないかひやひやしたけ

ど無事一曲踊り終える間際に神力を掌から吸い取る。いまいち加減が分からないのでフォンフー様で色々試してみたのでばれない自信はあった。

曲の終わりの礼をすると知らない虎族の青年から手が差し出される。

「一曲お願いします」

人間で言うと十七，八ぐらいの紺の髪に紫色の目のカッコいい青年だ

「今の内にレイカも色んな男と踊りなさい。結婚したら他の男とは踊れないからね」

第七皇子様がそう言って去って行ったのでその人の手をとると目を見張るように私を見て顔を赤くする。曲が始まっても終始無言で一言も話さないまま終わると次々に手が差し出され休む暇もなかった。

インフーがレイカの踊り続ける姿を心配げに眺め続けている姿は笑える。

「レイカは引く手あまただなー　婚約者として心配だろ」

「フォンフー様からかわないで下さい」

しかし、レイカが次々と相手を替えながら踊って行く姿はある意味

滑稽だ

先ず大人と子供ではバランスが不自然、しかも男どもはレイカの美貌に見惚れ神力を盗まれているのにも気がつきもしない……考えてみれば恐ろしく化け物じみている行為だ。

何時か自分も食われるのではないかと言う恐怖が無きにしも非ず

今は利害の一致で協力しあっているが、もしレイカが龍族として目覚めたら直ぐさま青龍国に戻ってしまいかねない

あいつの目的は母親を助けだす事だからな

そう言えば自分の母親に会うのを忘れていたのを思い出し、側室が座る席を見るとその姿は無い。こういう大勢が集まる場所が苦手な人だからそうそうに部屋に帰ってしまったのだろう。後宮は皇子であろうと母親に面会に行くのにも一々手続きが必要なので面倒だったので此処で済ましかったが諦めよう。

「そろそろレイカを休ませてやったらどうだ」

「そうですね！」

俺の言葉を待っていたかのようにレイカを連れ戻しに行くインフーところが、大広間の入り口辺りからざわめきが広がり人だかりの中からあいつが姿を現す。

俺があいつを見ると同時に視線が合いゾクリと背筋が泡立つ

何時の間に音楽も止んでおり、まるで主役が現れたかのようだ、そして大勢の取り巻きの間から忌々しそうに睨む第一皇子。どうやらそうそうにこの場を辞した方がよさそうなのでレイカ達を捜すと丁度奴がレイカの前を通り過ぎるところだったが、黒い髪に少しは関心を持つかと思ったが一瞥もせずそのまま父王の下に行きい跪くのだった。

誰もあいつの優美な姿に見惚れており王に跪く姿は絵のように完璧だ

「陛下、挨拶が遅れ申し訳ありませんでした。今日は陛下の御生誕を祝う品を用意するのに手間取ってしまいました」

「ほ～　それは楽しみじゃの、一体何を用意したんじゃ？」

そしてあいつが差し出したのは光輝く神核だった。

会場が大きなどよめきが起こる。

「「「　おおーーーー　神核だ！」」」

神核は神族の体内にありそれを取り出すのは至難の業、普通は取り出した神核は直ぐに石化してしまい只の石でしかないが、崋山に居る神獣の中で白い色を持つ神獣だけが生きたまま神核を取り出せ、それは光を失う事無くあり続ける。

そして白く光輝くその神核を神族が飲み込めば自分自身の神核と一体となり寿命が延びると言われており貴重品だ

しかし崋山に入山出来る神族は力の強い高位の者しか行けず、しかも特殊な力を持つ白い神獣を狩る事はヘタをすれば反対に返り討ち

に遭い生きて崋山を降りる事は出来ない。
そんな事を出来るのは王になる資格を持つのと同等だった。

「おお～　それはそなたが狩ってきたのか！！」

父王は喜色満面の顔でそれを受け取る。

「はい、どうぞ私の陛下への忠誠と親愛の証です」

「うむ、それでは遠慮なく頂こう」

父王は躊躇う事無く神核を一呑みで飲み込んでしまうと、父王と王妃の体が仄かに光り輝く――父王と王妃の神核は結ばれているので同調しているのだ。

会場の虎族達が一斉に声を上げる。

「「「「「「「「「虎王様万歳！！」」」」」」」」」

「「「「「「「「「虎王様万歳！！」」」」」」」」」

流石としか言いようがない

奴が王に王位の譲位を願い出たのは公然の秘密として全ての虎族が知るところであり、そして王位は譲られなかった。その事で王宮での奴の地盤は揺らぎ、第一皇子の次期虎王の呼び声が多くなり奴としては許せない状況だ

だが此の事で奴は自分の力を誇示し父王への忠誠心も示した事になる。

これから、本気で第一皇子を蹴り落とし王宮での力を強めていくのだろう

それに奴は少なくとも自分の分を狩って神核を取り入れているはずだ、王との力の差を縮めるはずがない

俺は茫然とその様子を見ていると、人の隙間を掻きわけインフーが戻ってくる。

「フォンフー様大変です。レイカが急に倒れてしまいました」

「なんだと？何があった」

見ればインフーに横抱きされたレイカが顔を真っ青にさせて気を失っていた。

「分かりません！　神核を見て急に涙を流したかと思うと倒れてしまったのです」

「直ぐ離れに戻るぞ」

「はい」

一体レイカに何が起こったのか分からないが、この場に留まるのは良くないと判断し、人々が父王と第三皇子に熱狂する中見られる事無く抜け出すのだった。

危険な皇子様達　その４

『痛イヨ……　痛イヨ……　痛イヨ……』

最初は空耳かと思った。

目の前を第３皇子様が通り過ぎるのを間近で見ていたら聞こえて来た。

悲痛な声が頭の中に響いてくる

だれ？

第三皇子の纏う気が酷く不快で気持ち悪い…　何かドロドロとした物が皇子様の周囲を取り囲んでいるよう

そして第三皇子様が王様の前に行き光り輝く神核を取り出した時

脳裏に残酷な映像が映しだ去られる。

それは白い大きな狼に似た美しい獣が腹を裂かれ神核が取り出されている姿、美しい白い毛が血で真っ赤に染められ痛々しく、気高い白い獣は痛みにのたうつが悲鳴を漏さないまま息絶えてしまった

そして神核を掴み取るのは第三皇子の冷酷で慈悲の心すら無い顔で歪んだ笑みを浮かべている。

『許サナイ！　オ前を許サナイ…　我ガ魂ヲ穢スモノヨ……　呪ワレロ！』

ひぃーーー　怖い……

まるで白い獣の憎しみが私に向けられているようだった。

そして次に感じたのは悲しみだった

『消エテシマウ……　イキタイ　生キタイ……　死ニタクナイ……　生…』

王様が神核を飲み込んだと同時に声が喪失すると同時に訳が分からなくなった

第三皇子が体を真っ赤に染め次々に巨大な獣を切り捨てて行く、その中には産まれたばかりの小さな子供も混ざっており、子供を守ろうとする親も皇子にかすり傷一つ負わす事出来ず己の血を大地に流

すだけだった。

《　止めて！！　　殺さないで！　罪もない無垢な命を狩らないで！！　》

私は必死に皇子を止めようとするけど凶行を止められない

次々と意味もなく奪われて行く命

皇子に付き従う者達も力を求めるように聖なる獣達の血を浴びて行った。

《　何故こんな酷い事をするの！？　この子達は此処で静の暮らしているだなのにーーーーーー　》

悲しみが胸を切り刻む言うに痛い

《　許さない！　お前を許さない！　私利私欲の為に清らかに命を奪うお前を許さないーーーー！！！　》

無残に命を奪われた神獣達の怒りと悲しみが私に伝染するようだった。そして黒い闇が私を覆うとしていた。

『　レイカ　イケナイ　憎シミダケニ　囚ワレナイデ　』

突然ハクの声が呼び掛けて来た。

《　無理よハク　あいつは何の罪もない者達の命を無残に奪っている。　許すなんて出来ない！　あいつを許せばこれ以上の多くの命が失われる　》

『駄目！　今ノレイカデハ　アノ者ト同ジ道ヲ歩ンデシマウ　アオイ　悲しシム』

≪母様が…？　母様が悲しむのは嫌…　母様が泣くのは耐えられないよ……　どうしたらいいの？　でも泣いているあの子達が可哀そう……≫

『憎シミニ　囚ワレナイ　強イ心ヲ持ッテ』

≪強い心？≫

『ソウ　アオイノヨウニ　強ク』

≪母様のように　私は母様のように優しい人間になりたい……≫

『レイカハ　アオイノ娘　レイカハ優シイ子』

ハクの言葉のお陰で聖なる獣達の声は聞こえなくなり優しい母様の姿が映し出される。

（レイカ　私の大事な娘　常に人を許せる優しい子になってね……）

『でもあの皇子は自分の私欲の為だけに命を奪うんだよ！　許せないよ！！』

（同じ様にその皇子の命を奪えばレイカも同じだよ）

『違う！　レイカはあの皇子と違う！』

（　どんな命でも奪うと言う行為は同じ　レイカよく考えて　）

母様の姿が段々と遠のいていく

『　母様　行かないで！　レイカの側に居て……　』

パッシ！パッシ！

両頬に痛みを感じ目を覚ますとフォンフー様とインフー様の心配そうな顔が見えた。

「あれ……　どうしたんです二人とも？」

ガツン！

フォンフー様のゲンコツが容赦なく飛ぶ

「痛い！！」

「このバカ娘、人にあまり心配かけるな！」

「ホへ？？　私どうしたんですか？」

インフー様が私を抱き起こし抱きしめる。

「祝賀会でレイカが倒れてから1日経っているのです……　私もフォンフー様も気が気ではありませんでした」

インフー様の言葉を聞いて驚かされてしまう……丸1日も寝ているなんて信じられない!?
一体何があったの??

「私どうしたんでしょう?」

「俺が知るか！　父王の誕生祝賀会で第三皇子が現れて直ぐ気を失ったんだ。　一体どういう事だ?」

第三皇子と聞いて全てを思い出した。

「声が聞こえたの」

「声だと?」

「第三皇子が狩った神獣達の声……　皆、訳も分からず苦しんで死んでいった声　」

「何だと!?」

「あの子達の声に引きずられて真っ暗な世界に落ちそうになったのをハクと母様が助けてくれた」

「そうか……」

「そう言えばハクはどこ?」

「ハクはレイカが離れの屋敷に運び込まれて直ぐレイカの側を離れず一緒に眠っていましたよ」

インフー様に言われ目線を下に落とすと枕元に丸まった白い毛の丸まった姿

私と違い今だ眠っていた。

「ありがとうハク、　また私を守ってくれたんだね」

眠るハクの頭をそっと撫でてあげる。

「それよりフォンフー様何故レイカは神核に宿る神獣の残留思念に同調してしまったんでしょう」

「レイカが只の人間では無いからだろう」

「レイカが？　私には人間の気しか感じませんが」

「この際言っておく。レイカは龍族として目覚めつつある……レイカ、あの龍石を出せ」

私はフォンフー様に言われるままに首に下げられた龍石の首飾りを取り出しインフー様に見せると、黒く真珠化している部分は以前より面積が増えており3分の1に迫っていた。

初めは訝しげに眺めたが龍石の変化に気が付き驚く

「これはどういう事ですか！？」

「レイカが生まれた時に手に握っていた龍石が徐々に光を取り戻し龍核が活性化し始めているらし……何れレイカは龍族として目覚める」

「そんな話聞いた事がありません！！」

インフー様は声を荒げる。

「レイカが龍族ですって、信じれはず無いでしょ！」

「思い出せ、レイカに神力が効かない事を、人間にあるべきへそが何故無い」

「そんな話聞きたくありません！」

インフー様はそう言い捨て部屋を出て行ってしまうがフォンフー様は止めようともしない
あまり声を荒げない静かなインフー様の怒りように驚いてしまう…私が龍族になるのが嫌なの？

「私…インフー様に嫌われてしまったの……」

ゴッツ！

「痛い！　フォンフー様叩きすぎ」

「その反対だ、お前は鈍すぎる。十歳のガキだからこんなもんなのか？」

訳知りな口調にムッとするがインフー様に嫌われた訳では無さそう

なので安心する。

「インフーにもお前との婚約が仮初のものだとハッキリさせておかないと、本気で婚姻を結びそうだからな」

「私とインフー様が結婚!!」

「いい加減気が付け、インフーはお前を恋愛対象として見ている」

「でっでもー　私はまだ十歳です」

「今はまだ子供だがあと五年すれば人間なら婚期を迎える。言わばインフーは大人になったお前に恋してるのかもな……」

「／／／　インフー様が私を好き!!??」

初めて男の人から好意に戸惑いと恥ずかしさで顔に血が昇り、アタフタしてしまう。

頭が逆上せどうすればいいのか分からないでいると

「お前もインフーが好きなのか?」

「急にそんな事を言われても分かりません」

「これだけは言っとくが他種神族の婚姻は許されていない。だからインフーに恋をするな」

「そうなんですか?」

「天帝がきつく戒めている。それを破る者は天帝の死の裁定を承る。。だからインフーはお前が龍族と知って慌てていたんだ」

それを聞きインフー様が本気で私を好きなんだとしる。

「インフー様……」

インフー様は好きだけど、この好きが恋は分からない……

「お前が悩んでも仕方がない。どちらにしろお前達は結ばれない。もしインフーとの恋をとるなら人間でいるしかないぞ」

「えっ」

私が龍族になるのを諦める…そんな事出来ない。

母様を助けるのが私の一番

「そんなの無理、私は龍族になる」

決意を新たに言い切る私を見てフォンフー様は嬉しそうに笑う

「それでこそレイカだ。　恋だ愛など薄ら寒いだけ、何の意味もない」

恋愛に嫌悪の情をはきだす。

そうだろうか……フォンフー様の言う事も極端のような気がするけどフォンフー様は恋をした事があるんだろうか…見た目は私ぐらい

だけど実質四十年以上生きているのだから初恋もまだなんてあり得ないから、きっと何か苦い思い出でもあるのかもと勘ぐってしまう

それよりこれからインフー様と如何接すればいいんだろう

フォンフー様に聞いても普段通りに接しろだった。

変に意識してしまっている今は難しく明日の朝に顔を合わせるのも恥ずかしい

やっぱりこういう事は田舎に帰ってカヤさんに相談しようと思うのだった。

フォンフー様の言葉を聞き絶望が襲う

レイカが龍族

仮初ではあるがレイカと婚約者となり喜びで我が春を味わっていた…虎王様や皇子様達も婚約を信じこのまま本当に婚姻を結べると思っていた矢先のこの事実

あの美しい少女が自分の妻に出来るなら自分の命の半部を分かちあっても良かった

レイカは今だ幼く恋を知らないだろう

美しい皇子達を目にしても心を動かさない事からも分かっていた。

だから私を兄のように慕ってくれている心につけ込みこのまま婚姻に持って行こうと考えていた卑怯な私だったがそれで良いと思っていたのに

レイカが龍族になる?!?

直ぐには信じられないがレイカが龍族として目覚めたら私が虎族である限り決して結ばれない

五年間見守り続けた少女

諦めきれない……

離れを飛び出し何時の間にか池のほとりのに建てられた東屋に来ており、美しい金色に輝く月が庭園を仄かに照らし出し池の水面にも満月映っており月が二つあるようだ

まるでレイカの瞳のようだ

私は月に恋した愚かな男だ

僅か十歳あまりの少女に本気で恋をしている滑稽さに今さらに気付かされる。

否…私だけでなく皇子達や昨夜レイカに踊りを申し込んだ男達も一時でも目と心を奪われたに違いない

このままレイカが人間のままなら問題はないのだ

あの龍石！

アレをレイカから奪い、壊してしまえばいいのではないかと思いつく

「駄目だ、そんな事をすればレイカは私を憎んでしまう」

嫌われたくない、泣かせたくない

レイカが龍族になる事を望むなら私は見守るしかないのだ

適うならレイカが私を望んでくれるならどんなにいいだろう…まだ時間はあるのだからレイカの心を私に向けさせればいいのだが美しい皇子達にも見向きもしない少女の心を掴むなど出来るだろうか

レイカが私を選んでくれるよう月に願わずはいられない

「レイカ……」

どれだけ月を眺めていたのだろう…何時の間にか頬に涙が伝ってい

た。

十歳の少女を想って泣くなど自分でも情けない

「綺麗な涙だ」

「！！」

突然、真横から声を掛けられ驚く。

そして右隣りには何時の間にか男が立っていた…こんなに間近に来られたのを声をかけられるまで気付かないなんて。しかも涙まで見られ恥ずかしい

急いで涙を拭おうとすると男がその手を阻み、手首を掴まれたと思った瞬間頬を濡れた感触

ペロッ

今この男は私に何をしたんだ？？？？

有り得ない程近くにある男の涼やかな美しい目は緑色

「　う～ん　お前の涙は甘いんだ　」

「はっ放せ！！」

漸くこの男に涙を舐められた事に気が付き慌てて離れようとするが、あっと言う間に引き寄せられ腰に手を回され捕まってしまう。

「無礼者、私は虎族…今なら見逃すから放しなさい」

月明かりに現れた男は目の覚めるような美丈夫で何処となく第三皇子様に似ているが、瞳は緑で髪も茶色で服装も庶民が着る様な簡素な物で明らかに人間

人間が虎族に無礼を働けばその場で討ち首にされても誰も咎めない

そもそも人間と虎族では力が違うのだ

「放せ！　聞いてるのか！」

しかし男を睨みつけ逃れようとするがその体はビクともせず反対の頬まで舐められる。

ベロン！

「ひぃーーーーーー　変態！！！」

「やっぱり甘い？　なんか知らんがお前の事気に入った。どうだ俺と寝ようぜ」

有り得ない誘いと男は腰の手が一方を尻に持って行き撫でまわすので、鳥肌が立つ

「やっ止めろ！！　私は虎族だし、そもそも私に男の趣味などありません」

「それは奇遇だなー　俺も虎族で男の趣味は無かった」

男の言葉で驚く

「貴方が虎族!?」

「見た目はこうだが正真正銘の虎族だ。なんなら力を見せようか」

男はニヤリと笑うと共に池の水が瞬時に噴水のように噴き上ったかと思うと雨のように辺りに降り注ぎしかも魚まで降ってくる始末

ザッザザーーーザザザーーーーーー

私達は東屋に居たので濡れずに済んだ庭は酷い有様

池の水は無くなり地面には魚が飛び跳ねている。

「貴方はなんて事をするんです！　王宮の庭を荒らすなんてどんなお咎めを受けるか分かっているのですか」

「俺の心配をしてくれるのか？　優しんだな～」

しかし男は気にする風でもなく腐った事を言うので呆れてしまう

「私は貴方の心配などしてませんから！　それより早く放しなさい！」

耳元で大声で怒鳴ると流石に手を放さずにはいられなかったようで、腕が離れた隙をみて距離を取る。

「く～～　鼓膜が破れるじゃないか…　酷いな～」

何が酷いんだと文句を言いたかったがあまりこの男と関わりを持ちたく無いので急いでその場を逃げるよう離れ、屋敷に戻ろうとすると背後から声を掛けて来る。

「俺はトルチェンフーだーーー　お前の名はーー？」

答える義理もないので、そんな男の問いを無視して足の速度を速める。

男は以外にも追いかけ来ないのでホッとする。

多分あの男には力も神力も適わない

無理やり迫られれば回避するのは難しかった

追いかけて来なかったのは、やはりからかわれただけなのだろうと思い、不快な男の事など忘れるに限る。

その場で男の記憶を頭から消し去る事にするのだった。

屋敷に戻るとフォンフー様が居間で起きて待っていてくれた。

「フォンフー様、先程は取り乱しすみませんでした」

「レイカの事は諦めろ」

これを言う為に待っていたのだと納得する。

私の心配などするはずが無いのだ。

「無理です。　レイカが人間である内に私の方を向いて貰います」

「レイカはお前を選ばんぞ」

「やってみないとそんな事分かりませんから」

「そうか……思ったより諦めが悪かったんだなインフー」

意外な顔をするフォンフー様

「何故フォンフー様が口出しをするのですか、人の事はほっといて置いて下さい」

まさかフォンフー様もレイカに好意を抱いてたのか？　その割には扱いがぞんざいだ

「まー　確かにそうだな。　だがレイカが龍族になるのは邪魔するな」

その時初めてフォンフー様がレイカを利用しようとしているのではないかと疑念が湧く

「まさかレイカに何かさせようとしているんですか」

「勘違いするな、お互いの目的は違っても力が欲しいのは同じなだけだ。それにレイカは異質すぎるインフーでは荷が勝ち過ぎている」

「私では釣り合わないと」

「そうじゃない…お前が食われるんだ」

「食われる??」

フォンフー様は意味ありげに哂う

食われるとはどういう事だろう…それにフォンフー様は力を得てどうするつもりだというのだ、王座など望むはずが無い。目的は何だ?

問うても素直に答えてはくれないであろう主を訝しげにみると

「一応忠告だけはしたからな……それじゃあ俺は寝るから後は好きにしろ」

そう言って寝室に下がられる姿を見送るしかない

お会いした時から自分の奥深い心の内を見せない主

一体レイカを使い何をしようとしてるんだろう

愛しい少女を危険な目に会わすのはフォンフー様でも許す事は出来ない

絶対に

これからは二人を監視しようと心に決意するのだった。

危険な皇子様達　その5

朝の支度を一人で済ませフォンフー様を起しに行くと部屋の前でインフー様と出会ってしまう

「お早うございます。レイカ」

「おっお早うございます。インフー様　／／／」

何とか挨拶するけれど目を合わせられない、前まで普通に挨拶出来たのに今朝は恥ずかしい

「どうしたんですか？　顔が赤いですよ……！！　熱があるんじゃ」

勘違いしたインフー様が慌てて私の額に手をやろうとするので思わず避けてしまう。

「レイカ？！」

「大丈夫です！　私は朝食の用意を見てきますからフォンフー様をお願いします」

私はインフー様を振り返る事無く廊下を急いで歩き角を曲がると立ち止まり息を整える。

如何しよう普通に出来ない！！！

今までどうしていたのさえ忘れてしまったようだ

どうしよう……きっとインフー様は変に思ったに違いない

べつに直接インフー様に好きと言われた訳でもないのに、でもどうしよ……インフー様に好きだって言われたら

キャァーーーー　／／／

男の人に好きなんて言われた事は一度もないのでドキドキしてしまう

私どうしちゃたんだろう？

朝食の間も微妙な雰囲気が漂い気まずい中、フォンフー様が口を開く

「インフー　明日田舎に帰るから出立の用意をしろ」

「帰られるんですか」

「ああー　用は済んだからか王宮にもう用は無い」

「分かりました。それでは早速そのように致します」

そしてインフー様が立ち上ろうとした時に慌ただしい足音が玄関から聞こえそのまま食堂の扉が開かれる。

バン！

現れたのは五人の男達で私達は突然の侵入者に驚くき、中央の人物が誰であるか知った時私は怖くて震える。

フォンフー様とインフー様も驚いて立ち上がるが、若干フォンフー様の顔も青ざめているようだ

「お早う、フォンフー　朝食中だがお邪魔するよ」

フォンフー様は直ぐさま猫を被る。

「兄上、お早うございます。先日はお見送りもせず申し訳ありませんでした」

私は第三皇子様から目が離せない、皇子様の体には相変わらず黒い嫌な物が纏わり付いている様な圧迫があり気持ち悪いく、椅子から立ち上がるけど立っているのが辛い

「いいのですよ。私もフォンフーを怒らせるような事を言ってしまいました」

「ところでこのような朝早くに何の御用でしょう……」

「暫らく王宮を空けている内にフォンフーが戻っていたんなんて知らずに勿体ない事をしたと後悔したよ。だから早く可愛い弟の顔を見に来た」

「お忙しい兄上自ら来ずともお呼び下されば良かったのに、どうぞ

客間の方へ移動致しましょう。インフーお茶の用意を」

「はい、フォンフー様」

フォンフー様に促され第三皇子様達はリビングに移動して行き姿が見えなくなると力が抜けるように椅子に座り込む。

「気分が悪いのですか」

フォンフー様が遠慮がちに聞いてくる。きっとさっき変な態度を取ってしまったせいだろう

「ゴメンなさい……少し休んでもいいですか、お忙しいのに」

「いいですよ。侍女もいますしレイカは先日倒れたばかりですからフォンフー様も許して下さいます」

少し垂れ目がちな目を更に下げて優しく微笑む優しいインフー様の言葉にホッとする…

「有難うございます」

第三皇子様とあまり一緒の部屋に居るのは嫌だけどフォンフー様も気になる。

なにしろ私を使って寝首を掻こうとしている相手

だけどあの皇子の神力を奪うのは生理的に嫌かもしれない……だって気色悪い

今のところフォンフー様に何かしろとは言われていないので部屋で

大人しくしていようとハクの待つ部屋に行くのだった。

部屋に戻ると私の寝台の上でまだ寝ており、私をあの黒い闇から守る為に何かしらの力を使ったのかもしれない

ハクを抱き上げ膝に乗せる。

白いフワフワの毛を優しく撫でると心が解れて行き第三皇子様に害された気分も落ち着く

だけどハクは既に一日半以上も飲まず食わずで体が弱らないか心配

「こういう時に神力を取り出せたらいいのに……少し試してみようかな」

そう言えば神力を食べるばかりで取り出す事を妖獣の森以来試していないのに気が付く

神力を感じる事を出来るようになったんだから出来る様な気がする。

瞼を閉じて自分の中にある瞑道を感じ神力の光を探し出すように想像すると瞼の裏に光の渦が見えて来る…それはまるで神力が生きているかのように渦巻きながら球体を模って光り輝いていた。

これが私が集めた神力?!

そこから道を開き掌をハクの体に当てて神力を少し流し込んで見ると掌に温かさを感じるとハクの体がピクリと動くのを感じた。

「ハク！？」

「キッキー」

目を開けるとハクが体を起しており、直ぐさま私の肩に乗り頬を舐める。

ペロペロ

「良かった、ハクがこのまま起きないかと思って心配したんだよ」

『レイカ　力ヲクレタ　元気ナッタ』

「話しても大丈夫？」

『力　イッパイ　話セル』

「ハクは第三皇子様に纏わり付いている嫌な黒いものは何か分かる」

『ハク　知ッテイル　アレハ　嵎山ノ悪イ神様』

「嵎山って天帝様が住んでいる山だよね」

『ソノ山　悪イ神様　危険』

「一体どういう事？　皇子様に悪い神様が憑いちゃったの」

『　少シ違ウ　難シイ　ヨク分カラナイ　』

「皇子様はこのままだとどうなるの？」

『　ヨクナイ事ガ起コル　』

もう少し詳しく聞こうとすると扉の外から声が聞こえて来る。

「レイカ様、フォンフー様が直ぐに居間に御出で頂くようお呼びです」

どうやらフォンフー様はインフー様のように思いやる心が少ないようだ……分かっていたけど

「はい、今行きます」

あの皇子様と会うのは気が進まないけど仕方が無いだろう

『　ハクモ行ク　』

「悪い神様に何かされない？」

『　大丈夫　』

ハクを肩に乗せて客間へと向かうと扉の前には屈強な護衛兵が二人達がフォンフー様の屋敷なのに我が物顔で立っており、側に来た私をジロジロと見て来て嫌な感じがする

私はニッコリと微笑みながら声を掛ける。

「フォンフー様に呼ばれて参りました。通しくださいませんか」

「ああ　通るがいい」

もう一人の若い護衛兵が扉を開けてくれるのでお礼を言う

「有難うございます」

「アッ　いや～　／／／　」

後ろ髪に隠したハクは見咎められるかと思ったけど難なく部屋に入れホッとする。

中に入るとフォンフー様と第三皇子様が向かい合って椅子に座りお供の人は後ろに立って控えており、インフー様もフォンフー様の後ろに立っており私が入ってくると一斉に視線が集まる

ヒィ～～　皇子様見ないでと言いたくなるけど我慢

「レイカ、此方に来て兄上に挨拶しなさい」

フォンフー様の言う通りに第三皇子様の近くに行くと圧迫感と不快感が増す。他の皆は何も感じないんだろうか

『　レイカ　モット　近ヅイテ　』

（　ハク？？　）

ハクは何かする心算？？？

間近で見る第三皇子様は今まで会った皇子様達の中でも群を抜いて美形だ。濃紺の美しい髪を一糸乱れず後ろで結び精悍な顔には意志の強そうな切れ長な目に収まる黒に近い紺色の瞳が私を見た時背筋がゾクリとする

う〜〜　嫌だけど我慢

皇子様の側で膝を着き胸に手を当て礼を取り皇子様を見ないように深く俯く。

「先程は挨拶もせず申し訳ありません。フォンフー様の侍女をしているレイカと申します」

「そなたが噂の少女…確かに珍しい黒い髪、以前フォンフーの屋敷で見かけた時は幻かと思ってたが本物であったか。瞳は金だそうだが面を上げなさい」

うっ……　やっぱり視線を合わさないといけないよう

顔を上げると麗しい皇子様の顔が目の前にあり、普通の少女なら見惚れてうっとりするだろうけど私には気分が悪くなって来る。

「成程、これは見事な金色…まさに天帝様の色。　他の皇子達が魅了されるはずだ」

皇子様が私の顎を取り更に覗きこもうとした時

『　レイカ　力ヲ　アノ黒イ気ヲ　ハクニ　頂戴　』

（　エッ!?　そんなの出来ないよ!!　）

『　大丈夫　』

あの気持ち悪い気を取り入れるのは気が進まないけど顎に触れる第三皇子様の手に纏わりつく気を吸い取るとまるでそれを待ち受けていたかのように一気に傾れ込んで来るが肩に乗るハクが全て吸い取って行ってくれるのが分かる……だけど一時とはいえ体を通過する時のおぞましさに顔が青ざめるのが自分でも分かる。

ひぇーーー　嫌ーーー

「顔色が悪いね、かなり緊張させてしまったかな?」

皇子様が手を離してくれるとフォンフー様がインフー様に言う

「インフー　レイカを部屋に連れて行きなさい」

「はい」

インフー様が急いで私の側に寄って来て突然抱き上げて横抱きにする。

「キャァ!!　／／／」

まさか抱きあげられるとは思わなかったので驚き、真っ青な顔が瞬時に真っ赤になるのが自分でも分かる。しかも沢山の人の目の前で恥ずかしく感じる。以前は感じなかったのに何故だろう?

「皇子様の目の前で申し訳ありません。レイカは気分が悪い様なの

で失礼させて頂きます」

「いや、私が無理をさせたようだ。休ませてあげなさい」

皇子様の了解を得ると足早に客間を辞して廊下に出ると護衛の人が目を見開いているのが見え恥ずかしい

「インフー様　もう大丈夫ですから降ろして下さい」

「大丈夫ですか？　さっきは倒れてしまいそうなほど真っ青でしたけど」

私をそっと降ろしてくれる。

「有難うございます」

お礼は言うけどヤッパリ恥ずかしくって目が合わせられ無い

「どうしたんですか……今朝から私の顔を見てくれませんね…　私は嫌われたのでしょうか」

寂しそうに呟くので慌てて否定する。

「ちっ違います！！　チョッと恥ずかしいだけなんです」

「恥ずかしい？？」

まさかフォンフー様からインフー様が私を好きだと聞いて意識してしまっているなんてとても言えない

「うっ～～～　はい……」

「それは…　私が仮初とは言えレイカの婚約者になっているのがですか……」

？？？？？？？？

恥ずかしいと言う言葉を何故か曲解してしまっている？　何故？？？？

「っちっちっ違います！！！　私よりインフー様の方が私みたいな子供が相手で嫌じゃないんですか……」

「私は嬉しかったですよ」

「えっ！　／／／／」

「レイカのような綺麗な子と本当に婚姻を結べたらと毎日思っていましたから」

「あっ」

手を引き寄せられインフー様の掌に包まれ真剣な目で見詰められる。

「今さらなんですが、レイカが許してくれるなら……婚約者でいさせて下さい」

「でもインフー様……　私は母様を助けたいの、だから絶対龍族にならないといけない　それにインフー様の事は好きだけど婚約とか婚姻なんてよく分からない……」

正直な自分の気持ちを言う

「それでいいですから、レイカが龍族として目覚めるまで私の側に居て下さい」

そんなんでいいのだろうかと思いながらも、インフー様の言葉で思わず頷いてしまう

「はい　インフー様　」

「レイカ　」

「ウキッキー」

「「　ハク！　」」

突然ハクが私の頭に飛び乗るので二人ともビックリしてしまい、さっきまでの雰囲気が壊れはっとしてしまう

「　／／／　私は皇子様がまだいらっしゃるので戻りますね」

慌ただしく戻って行く後ろ姿を見送りながら今だ動悸が止まらなかった。

『　レイカ　顔赤イ　』

（　そんな事言わないで、恥ずかしいでしょ！！　）

『　？　』

（それよりハクの体大丈夫なの??　あんな気持ち悪いも体に入れちゃって……）

『ウン　悪イ神様　ノ　気ハ　ハク　ノ　力　ニナルノ』

（えっ！　どうして???）

『同ジ　仲間』

（ハクは悪い神様だったのーーー　！！！！）

『良イ神様　悪イ神様　二　ナッタ　悲シイ』

ハクの話はいまいち要領を得ないので私には分からないのでフォンフー様なら分かるかもしれない

後で相談しよう

インフー様には私の力は秘密にしているので話せないし、もしこの力を知ったらどう思うんだろう

怖い子だと思われたら悲しい……

改めて自分の力が異質なのだと気付き、立ち竦むのだった。

まさか会いに来るとは思わなかった。

こいつが接触して来る前に帰るつもりだったのに失敗した。

目の前で優雅にお茶を飲む姿を忌々しく、睨みつけたいが奴の後ろには側近が控えており猫を被るしかない。

それよりレイカは大丈夫か

こいつがレイカを見たいと言うので出させたが、レイカがこいつを見て怯え真っ青になっていた。他の皇子や王の前ですら怖気付かないふてぶてしい女が……どうしてだ?

こいつに何を感じたと言うんだろう

後で問いただささなければ

「 あのレイカと言う少女はどこの者なんだい? 」

どうやらこいつもレイカに興味を持ったようだ。このままレイカに魅いられれば俺にっとっては願ってもない事

「レイカは物心つかない内に誘拐されたのを私が助けたのですが、生憎人攫い達を全員殺してしまったので詳細が分からないのです」

「親は捜さなかったのかい？」

「あの容姿ですから直ぐ親が名乗り出て来ると思ったんですが誰も。レイカの母親も黒髪らしいので殺されたかあるいは売られた後だったのかもしれません」

「あの娘の母親なら絶世の美女で噂になるだろうに」

「何処かの虎族が秘密裏に囲っているのかもしれません」

「成程、それは興味深い」

「御調べになりますか？」

そうだ、そのままレイカでもレイカの母親でもどちらか選んで俺の前から消えろ

「確かに黒い髪は魅力的だが、私にはお前の方が魅惑的だ」

「！！」

ふざけた事を言うので思わず全身に鳥肌が立つ

死ね――――――――　変態！

「兄上お戯れを……　それより今日いらっしゃた目的は何でしょう？　いい加減お話し下さい」

側近がいる前で変な事はしかけて来ないだろうし、サッサと用事を

済まして帰って欲しかった。

「そうだね、私も色々予定があるのでもっとゆっくりしたいのだがあまり時間が無い」

「私の事などお気になさらずどうぞ政務にお励みください」

「相変わらずつれない弟だ……　そなた達席を外し誰も入れないようにしなさい」

「「「　はっ　」」」

側近達は命じられると直ぐさま部屋がら出て行き二人っきりになってしまう

人払いをして内密の話とは考えずらい

このまま窓から逃げ出そうと立ち上がろうとすると奴の神力で体が戒められて、椅子に縛り付けられたように動かない

「くっ……　放せ！　」

「私は今とても気分が良い。だが…あまり怒らせると酷い事するかもしれない」

奴は俺の側にやってくると体に覆いかぶさって顔が至近距離で迫ってくるが、抵抗も出来ず睨みつけるしかない

「王位に就けなかったのは残念だったが、私はより大きな力を得た。天帝が戻られれば直ぐに王位など就けるがそれまであの愚かな第一

皇子は消す心算だ…そして私に逆らう全ての虎族は粛清しこの王宮全てを掌握するよフォンフーの為に」

「何が俺の為だ……己の欲望だけだろ！！」

「私の愛が分かってくれなくて辛いよ」

「父王が第一皇子を殺され黙っているはずがない！」

「我が父君は既に形だけの王、酒と女に溺れ政務を殆ど放棄された方。そして今や私の力を恐れる憐れな年寄りだよ」

こいつの言う通りなんだろう、このまま第一皇子を始末ればこの男が白虎国の実質の王と言っても過言でも無いのだ

「俺をどうするつもりだ」

「このまま王都に留まり私の側に居て欲しい」

全力で拒否したいが、抵抗すればするほどこいつは喜び俺を縛ろうとするのは経験上分かっていた……レイカの力はまだ完全では無く時間が必要だ

そう時間稼ぎが必要なのだ

「王都に今のまま居て、兄上の信望者達に虐め殺されろと言うのですか」

「大丈夫、私が守ろう」

「私は面倒な事に巻き込まれたくはありません。　兄上が白虎国の全てを掌握した時必ず王宮に上がりますからそれまで自由にさせて下さい」

諦めたような口調で願うように言う

すると驚いたように目を瞬かせてから俺の目を伺うように覗き込む

「少しは素直になったのか？　まー　確かにこれから忙しくフォンフーに構う暇が無いかもしれない。　良かろう、寂しいがあの田舎で私の迎えを待っているがいい」

誰が待つか！　第一皇子に殺されろと思ったが無表情で通す。

「有難うございます兄上」

「素直なフォンフーも可愛い」

怪しい目つきになったと思うと奴の口が俺の口に食らいついてくる。

「うっぐぅぅ……」

そして奴の舌が俺の唇を割って差し込まれるが、抵抗するだけ無駄なので受け入れるしかない、俺の口内を犯し舌を絡ませ吸って来ると流石に感じてしまい

クチュリ…　チュッパ…　チュウ――クチュ

「はぁ…んん　やぁぁ……んん……」

執拗に吸われ、そして奴の唾液が流し込まれ拒否したくとも体が言う事をきかない

そして散々口を合わされて最後に舌を軽く噛まれ痛みが走る。

「　ッ！！　」

そして口の中に血の味が少し広がるが、流れる血を美味そうに吸いつくと漸く口を離す。

チュップ……

「あぁーーー　フォンフーの全てが私には甘い毒だ」

何が毒だ！　それならサッサと毒に中って死にやがれ……心で毒づくが顔はあいつに与えられた快楽でだらしがなく弛緩しているだろう

そして、ぐったりと椅子に座り込むしかない俺に甘く呟く

「このまま閉じ込めてお前の全てを味わいたい……だが今はフォンフーを安心して迎え入れる為にも全てを掌握するのに全力を尽くそう」

そう言い俺の額に唇を落とし立ち上がり俺から離れて行くのを酸欠でボーとした頭で眺める。

「フォンフー　良い子で待ってるんだよ　」

最後にそう言い残し扉の外に去って行った。

扉が閉まった途端、漸く自由になった体で急いで口を拭う

ゴシ　ゴシ　ゴシ

きっと唇が真っ赤に腫れてしまうだろうが構わなかった

「くっそーーー　何が良い子だ！　俺が何時までも無力な子供だと思うな……今にその喉元に噛み殺してやる！」

憎しみを新たにするが、今は反撃する為にも力を溜める事にするのだった。

もう王も第一皇子も当てにならないのだ

自分を守るにはレイカしかいないと改めて思うのだった。

帰路

「起きろ！　このバカ娘」

フォンフー様に怒鳴られ目を覚ますと辺りは真っ暗で真夜中のよう

「夢？」

夢を見たんだと思いもう一度寝ようとすると頭を叩かれる。

パッシ！

「痛い～」

もう一度目を開けると太陽石の灯りが点けられ不機嫌な顔のフォンフー様が現れもう一度眠りに就きたくなる。

「俺が起してるのにもう一度寝るとは何事だ」

相変わらずの俺様発言だけど他の皇子様を知ったら偉くフォンフー様がまともに思えるから不思議だ

「女の子が寝ている部屋に忍び込むなんて破廉恥ですよ」

「誰が女の子だ…誰が　ガキで十分だ」

「むぅ～～　そのガキの部屋に何しに来たんですか」

なんか第三皇子様が帰られてから特に機嫌が悪い、皇子様に何か嫌な事を言われたのかしら?八つ当たりされる私の方が被害者よねと心で呟く

「今日あいつに会って真っ青だったが何を感じたか話せ」

こんな真夜中に起こされて話の内容がそれって重要?と思いつつハクの話もあるので話しだす。

「気持ち悪かったんです」

「あいつを気持ち悪いなんて言う女は初めてだ…あいつに聞かせたらどんな顔をするか想像するだけで愉快　くっくっくっくっくっく」

機嫌良さそうに哂う

「容姿は皇子様の中で一番素敵だと思いますけど、あの皇子様に纏わりつくような黒い気が気持ち悪くって怖かったんです。」

「なんだそれ?　俺は何時も通りにしか見えなかったが」

やっぱり私しか感じなかったらしい

「ハクが言うにはその黒い気は崋山の悪い神様の所為だそうですよ、ねっハク」

「キッキー」

横で寝ていたハクも起され何時の間にか私の膝に居る。

「何で猿のハクがそんな事を知っているんだ」

フォンフー様は不信そうに私とハクを交互に見てくる……無理もない、私にもよく分からないんだから

「ハク　フォンフー様に説明して」

分からないのでハクに話して貰おうと駄目もとで聞いてみると

『　イイヨ　デモ　フォンフー　ノ　力　ヲ　ワケテ　』

「えっ？？？？　フォンフー様の力がいるの？」

フォンフー様にも聞こえたらしく驚いている。

「今の心話はハクがしたのか！！」

「凄い！　ハクはフォンフー様とも話せるの」

『　ハク　凄イ？　』

「うん！　ハク　偉い！」

パシ！

「痛い！　どうして叩くんですか」

「話が進まんだろう！」

『フォンフー　意地悪　教エナイ』

「俺を呼び捨て…飼い主に似てなんて生意気な奴！　様を付けろ様を」

「フォンフー様だって話を止めてますよ」

本当に気が短いんだから…困った御主人様で侍女の私は何時もぞんざいな扱い、少しは言葉で反撃は許してほしい

「くっーーーー　糞共め……　俺が神力をハクに分ければいいんだな」

『頂戴』

「なんて奴らだ、神力を欲しがる猿など聞いた事もない」

ぼとぼとと文句を言いながらもハクに手をかざし神力を与えてくれる。口も悪く手も早いけどする事はしてくれ、結構良いところもあるのだ

「これでいいか？」

『足リナイケド　我慢スル』

「何だそれは、ムカつく、少しは感謝しろ……それより悪い神とはどういう事だ」

『 今 代ワル 』

「「 代わる??? 」」

ハクは目を閉じたかと思うと仄かに体が光始め、口を開きまるで人間が話すように話し始める。

しかも美しい女性の声だった。

《 私の嶺山の仙神で天帝様に仕える者 こ度はこの者の体を借り説明致します。 あの皇子は許されない事をしてしまいました。多くの神獣を殺しその神核を奪い我が物にしたのも許せませんが、力を増した事を良い事に嶺山の天帝の宮に忍び込み宝物殿を荒しある物を奪いました。》

「ええっーーー ハクがちゃんと喋ってる!!??」

どうして? どうして? 神仙て誰??

「煩い、ハクでなく嶺山の神仙が話してるんだ黙ってろ! 奴は何を奪ったんだ」

フォンフー様はちゃんと理解しているよう

《 … 皇子は宝物殿に封じられた神玉を奪ったのです。 嘗て嶺山に住まう神だった者が邪神に堕ちたのを天帝様が封じた玉なのですが…あろうことか自分の体に取り込んでしまったようです。愚かな事に… 》

「奴はこのままだとどうなるんだ」

≪　今はあの皇子の自我が勝っておりますが何れ邪神に魂を食われこの白虎国に災いもたらすでしょう……ああ……こんな事が天帝様に知られればどんなお仕置きをされるか～～～　≫

「貴方なら奴を簡単に消す事が出来るのではないのか」

≪　崋山の神仙は地上の出来ごとに干渉するのを禁止されております。そこで提案ですが「断る！！」……まだ何も言っておりませんが　≫

「何故俺がお前達の尻拭いをしなければならん」

≪　いいのですか、このままでは白虎国が滅びるのですよ　≫

「フン！　愛国心もないし、あいつが消えるなら清々するわ」

流石フォンフー様　崋山の神様に逆らうなんて凄い

≪　全く、虎族はどうなっているのです！　あの皇子にしろ貴方にしろ神族にあるまじき態度、天帝様のお怒りを買いますよ！！　≫

「煩い、黙れ」

そう言いハクの頭をピンと指で弾くと　ハクの体が倒れ気絶する。

「キャア！　ハク大丈夫。　フォンフー様のバカ！　」

「気を失っただけだ」

私の膝の上で倒れてしまいピクリともせず仄かに光っていた体も普通に戻ってしまっていた。先の神仙様はどうなったんだろう???

「それより良いんですか!?　第三皇子様をほっといて……しかも崋山の神様を無視するなんて天罰が下りますよ～～」

「バ～カ　天罰が俺らに下る前にあいつらが天帝に裁かれる。きっと近い内にまた接触して来るはずだ。　覚えておけ恩を売るなら高く売りつけるものだ」

ニヤリと意地悪そうに笑う

「ほえ……　フォンフー様が悪党に見える」

「フン、それよりこのハクはどこで拾ったんだ?　多分ハクは崋山の神獣だ」

「そうなんですか、赤ちゃんの頃死にそうになっているのを家の側で助けたんだけど……ハクも神様だったの?　」

「正確には神族の末席で、神格から言えば俺らより下だ」

「神様の世界にも色々あるんですね」

フォンフー様は結構物知りなんだと感心してしまう。

「全くとんでもない二匹だ……　」

「二匹……　これから如何するんですか?」

「一旦は田舎に帰ってから考える。　このまま王宮に残ってもごたごたに巻き込まれるのがおち、　あいつを何とかするにも力がいるだろう」

「そうですね、私も王宮はコリゴリです」

「取敢えず今夜は此処までだ。サッサと寝ろ」

そうしてフォンフー様は自室に戻って行く。

起きろと言ったり寝ろと言ったり全く勝手な御主人様……立場が反対ならこき使いたい

フォンフー様を家令にしたら面白そう

翌朝、朝食を取ると荷物も持たず午前中の内に王宮から逃げるように離れ王都を出た。

行きと同様に天馬を借りてインフー様と同乗しているけど後ろから抱きかかえられている様な体制が恥ずかしく私の懐には今だ寝ているハクを入れているけど心臓の音でハクが起きるんじゃないかと思う程ドキドキしている。

これならフォンフー様の馬に乗りたかったけど、フォンフー様は風を斬って走るのが好きだから人間私では体力が持たないし、私に合わせる優しさがあるとも思えない

それに比べてインフー様は本当に優しい、ちゃんと風圧や振動から私を守ってくれるし、他の人にも丁寧で声を荒げたり怒鳴る事もフォンフー様以外には滅多にない。

王都で虎族の人に何人もあったけど、私が人間の所為か何処か高飛車で感じの悪い人ばかりだったのに、インフー様は虎族でも珍しいのかもしれない。

サンおじちゃまと同じ銀の髪、もしかして銀色の髪の人は優しい人が多いんだろうか？

「レイカもう少しで街に着きますからそこで宿をとりましょ」

「はい　／／／」

きっと今の私の顔は赤いに違いないけどベールでスッポリ頭から被っているのでインフー様にはばれていないはず

街に着いたが、まだ日が高い内で、来る時に泊った街ほど大きくは無いがそれなりに市や商店が立ち並んでおり賑やかだ。そう言えば王都では結局見物も出来ずに終わり、皇子様達の付き合いに巻き込まれて忙しい毎日だった。

少し市場を見たいなと思っているとインフー様が嬉しい提案をしてくれる。

「レイカ、宿に入る前に少し皆へのお土産を見てきましょうか？」

「いいんですか！！」

「ええ。　時間も早いですしフォンフー様に聞いてみましょう」

馬をフォンフー様の横に並べる事情を話すとフォンフー様が宿を取り、インフー様と私で買い物をする事になった。ハクと馬もフォンフー様に預かってくれ、偶には気のきいた事をしてくれる。

市場は沢山の店が並んでおり王都に近い街なので品揃えも多く色々な物が売られていて目移りする。

田舎では市など無く行商人が売りに来るらしいけど、お屋敷では近くの大きな街から定期的に食料や衣料品を買い付けてたので買い物などした事がなかった。

「きゃあ　あの耳飾り綺麗、カヤさんに似合いそう」

「それじゃ、これを下さい」

「有難うございます」

店員さんに包んで貰い商品を受け取るとかなりの荷物がインフー様

の手に増えて行った。
初めてする買い物が楽しくって気に入った物を言うと直ぐに買ってくれるのであっという間に荷物が増え、自分でも調子に乗りすぎたような気がする。

「レイカは自分の物は買わないんですか」

「私は良いです。これはお土産だし王都では色々して貰いましたから」

「そうですか……そう言えばカヤの婚礼が近かったですね。祝いの品に綺麗な布でも買いますか」

「はい」

うーん　インフー様の心遣いの細やかさには感心してしまう。　普通使用人にそこまでしないと思う。

キィーー　カランカラン

店の扉を開けると音がした。

「いらしゃいませ」

店員さんも丁寧で高級店？

布を買う店は今までとは違い立派な店構えで壁には綺麗な色とりどりの布が飾られ小物も取り揃えてある。

「婚礼用の布を見せて下さい」

「はい此方でお待ち下さい。　今冷たいお茶を用意します」

案内された椅子に座るとインフー様がベールを外してもいいと言うので外し寛ぐと女性の店員さんがお茶を運んで来てくれる。

「どうぞ冷たいお茶をお飲み下さい」

「有難う」

インフー様にお茶を渡す時、頬を染めるのを見て何故かムカついてしまう？　インフー様もカッコいいので街を歩けば女性の視線が向いているのは分かっていたけどなんだか嫌だった。

私どうしたんだろう？

それから店主らしきおじさんが数点の水色の絹の布を持って来る。白虎国では女性は水色で男性は藍色の衣装を着て結婚式を挙げる。カヤさんはヤヤさんが着た衣装を貸して貰うと言っていたからきっと喜ぶだろう。

「レイカはどれがいいと思います」

そう問われたので私は水色の布に銀糸で花の刺繍をしてあるのを選ぶ。

「私はこれが好きです」

「おおー流石にお目が高い。これは一番人気のある品で花嫁様にきっとお似合いです」

店主が私にその生地を当てとんでもない事を言う。

「「　えっ！？　」」

「ちっ違います。これは知人の祝いに贈る品です」

インフー様が慌てて否定してくれるが、私は花嫁と言われた顔が真っ赤になってしまう

「それは申し訳ありません。美男美女であまりにお似合いだったの勘違いしてしまいました」

お似合い！！　私みたいな子供が本当だろうか？？　でもちょっぴり嬉しいかも……

「それでは此方の品で宜しいでしょうか？」

「はいそれをお願いします」

「他にも小物や宝飾品も取り揃えてありますのでご覧になりますでしょうか」

「見せて下さい」

そうして目の前に並べられた美しい宝飾品や小物などが並べられる。

そしてインフー様はおもむろに耳飾りを取りそれを次々に私に当てる。

「インフー様？」

「婚約者に一つぐらい何か贈らせて下さい」

少し照れたように微笑むので、思わず胸がときめいてしまう

「ええ……でも！　／／／／」

「あっ、これが良さそうだ」

王様の誕生祝賀会の時にも高価な衣装一式を貰っているのにこれ以上は貰えないのに、インフー様が宝飾品の中から一つの耳飾りを見付けだす。

手に取ったのは花を模った金の中央に真珠が一粒ついた可愛い品だった。

「真珠…」

「レイカから預かっている真珠の髪飾りのような立派な品ではないですが似合いそうだ」

「確かにお嬢様にお似合いかと。宜しかったら試しください」

店主がそう勧めると、インフー様が私の耳に素早く着けてそれを満足げに眺める。

「とっても似合います…このまま着けて帰りましょ」

「駄目です！こんな高価な物貰えません」

「レイカは私の婚約者なんですから当り前ですよ」

そこで婚約の話を出して来るので思わず固まる

「そうですよお嬢様、男性に恥をかかせるものではありません」

何時になく強引なインフー様と店主まで商売根性で攻めて来るので、有り難く買って貰う事になってしまった。

良いんだろうか…

「いや～　しかしこのような美しいお嬢様と婚約出来るなど男として羨ましい限りです」

「そうですね。私も幸運だと思っています」

それから二人で話で盛り上がり私は仕方なく商品を見ていると見た事のある物を見付け驚く

それは複雑な模様が組まれた髪紐

思わず手に取りじっくり見ると間違いない

「母様の髪紐……」

見間違うはずもない、母様が毎日丹精込めて組んで作った髪紐。サンおじちゃまも母様しか作れないと誉めていた。貧民街の学問所の運営資金の為一本一本丁寧に組んでいた姿を思い出す。

まるで久しぶり母様に会ったように感じ、髪紐を胸に抱きしめ涙が

目から零れ落ちて頬を伝う

「レイカどうしたのですか!?」

インフー様が涙に気付き驚いている。

「母様が組んだ髪紐、これは母様のなのインフー様……　うっう……」

「何ですって!?　店主これは何処からの品なのです?」

「はっはい、　それは青龍国の商人から仕入れた珍しい品で人気があるのですが、最近は手に入らずそれが最後の品になります」

最近は手に入らないと言う事は母様が作っていない?

学問所の為に一生懸命作っていたのを止めるなんて考えられない

まさか、あれ以来母様は体を悪くしたの??

店主の言葉を聞き悪い事ばかりが思いつく

「きっと母様に何かあったんだわ!　帰らないと、直ぐ青龍国に帰らないと駄目」

私は髪紐を握りしめ何も考えず店を飛び出してしまう。

「店主、商品は宿に届けてくれ!、　レイカ待ちなさい。　一人で街は危険だ」

後ろからインフー様の声が聞こえたけど頭の中は母様の事で一杯で兎に角帰る事しか頭に無かった。

人を掻きわけがむしゃらに走って行くうちにハッとする。

考えてみれば青龍国は遥か遠い、歩いてなど行けない場所なのだ、辺りを見渡せば人通りの少ない裏通りに来てしまっていた。

「ここどこだろう？」

なんだか昔テジャを追いかけて貧民街を彷徨った事を思い出す。

路地にはガラの悪そうな男達が私を見ており、危ない状況……早く大通りに戻らないとあの時の二の舞に会うのは分かりきっている。

「早くインフー様の所に戻らないと」

しかし時既に遅く、大急ぎで踵を返し戻ろうとすると三人のガラの悪い男達が取り囲む。

「こいつはすげー　こんな綺麗なの見た事無いぜ！」

「ちーっと　小さいがこれだけ育ってりゃ十分だ」

「誰かに攫われない内にとっとと連れ去ろうぜ！」

ニヤニヤと賤しい笑いを浮かべながら迫ってくる。

「私の側に寄らないで！　私は第八皇子フォンフー様の侍女よ。手を出せばただでは済まないわ！」

「うひゃぁっひゃっひゃっ　何をほら吹いてんだ」

「そうそう～こんな街に皇子様がいる訳ないだろ～」

「おい！無駄口叩かずサッサとやろうぜ！」

「キャアーーー！！」

男達はいとも簡単に私を抱き上げ連れ去ろうとする

「嫌ーーーー　誰か助けて！！　インフー様ーー　助けてーーー！」

喉を張り裂けんばかり叫ぶけど誰も助けに現れず、そのまま口を塞がれる。

「早くずらかるぞ！」

一人が口を手で覆い抱き上げ逃げようとした時、一人の女性が立ちはだかった。

それは茶色の髪に緑の瞳の美しい女性で何処か覚えのある顔だった。

「ま～　大の男が少女を三人で襲うとは　男として恥を知りなさい！」

男達も女が現れ驚いたようだ。

「なんだこの女、邪魔するな！」

「おい！　すげえ良い女だ。こいつもやっちまおう」

「上玉が二人も手に入るなんて今日はついてるぜ」

二人の男が一斉に女性に襲いかかり捕まると思った瞬時

ズッザ――ン

「「　グゥワァアァーー　」」

ドン！

二人の体が吹き飛び地面に叩きつけられると口から泡を吹いて気絶している。

「お前なにしたんだ……　」

私を取り押さえる男が信じられないように言う

「その穢れた手を少女から放しなさい！！」

えっ！！！　この声は何処かで聞いたような気がする??

「うるせーー　俺に何かしたらこの娘の首をへし折るぞー！！」

ガッツ！

何かが当る音と共に男の体が崩れ落ちて倒れてしまい男の顔を見ると額に石がめり込んでいた。

「ヒィーーー」

慌てて男から飛び退く

「レイカー　レイカー　」

そこへ離れたとこからインフー様の声が聞こえてくるので叫び返す。

「インフー様　私は此処です！　インフー様　」

それから助けてくれた女の人にお礼を言おうとしたら見当たらない？

さっきまでいた筈の場所から忽然と消えているので辺りを見回すけど、男達が三人倒れているだけだった。

「あれれ？？？」

キョトンとしているとインフー様が風のように目の前に現れる

「レイカ大丈夫ですか！！　怪我は無いですか」

真っ青な顔のインフー様は私の体を点検するように見やり、かなり

心配させてしまったようだ

「はい、男達に襲われたんですが女の人に助けられたんです」

「えっ　何ですって……」

インフー様は私の言葉で漸く側に男三人が倒れているのに気付き更に顔を青ざめさせる。

「その助けてくれた女性は」

「それがお礼を言おうとしたらいなくなていたんです?」

「どうやら謙虚な方なんでしょう。　それより二度と一人で行動しないで下さい、もし助られなかったら大変な目に遭うところです!」

珍しく声を荒げきつく言われる。

「ゴメンなさい……」

ションボリしているとインフー様が突然体を抱き上げて抱きしめてくる。

「少し言いすぎました…レイカを見失った時は心臓が止まりそうでしたよ」

私もインフー様の首に手お回して抱きつき甘える

「捜しに来てくれて有難う…インフー様…怖かった」

「レイカ　／／／　」

それからそのままインフーに抱き上げれたまま宿屋まで戻ったけど、通り過ぎる人々の視線を受け恥ずかしいので降ろして欲しいとお願いしたけど、勝手に飛び出した罰だと言って降ろしてくれず、恥ずかしさに耐えるしかなかった。

そんな二人を見守る影は先程レイカを助けた女性

「ああ～　折角レイカ様をお探し出来たと言うのに連れて帰れないなんて、なんて口惜しいんでしょ！」

女性はファンニュロンの侍女の一人だった。

五年前命じられた通りに白虎国に潜入しレイカを捜し続けていたのだった。漸く王都で黒髪で金の目の美少女の噂を聞き付け確認し一路ファンニュロンの下に戻り支持を仰ぐと予想がいの言葉をうける。

「そうですか、やはり白虎国にいらっしゃったのですね」

「「「　それではレイカ様をお迎えしましょう　」」」

「それはなりません」

「「「　どうしてですか？？？　」」」

「確かに今の陛下ならレイカ様を受け入れるでしょうがまだ時期尚早、貴女の言う通りレイカ様に力を感じたのなら龍族として目覚め始めているのかもしれません。恐らくレイカ様は龍族になる為の試練を受けているのかもしれません」

「「「　そんな～　」」」

「陛下もレイカ様が自らの力で現れるのを待っているご様子、　貴女はレイカ様の動向を見守りなさい」

「はいファン様」

「「　ずる～い～～～　」」

他の侍女を出し抜き美しく成長したレイカ様を堪能できるのは嬉しいが、あの虎族の若者は目ざわり

「それにしてもあの虎族の若者はレイカ様に馴れ馴れし過ぎ！！しかも危険な目に合わせても助ける事も出来ないとは情けない。とてもレイカ様を任せられませんわ！」

しかしファン様にレイカさに自分の存在を悟られないよう厳命されているので、表立って助けられないのが歯がゆい

「屋敷に使用人として忍び込もうにもあの虎族の若君は侮れないし……　」

仕方ないので寂しいが陰ながら見守る事に努める侍女だった。

帰路（後書き）

王様の心境の変化は第一部「龍王の伴侶」の昔歳と懺悔を読めば分かります。

皇子達の趨勢

レイカとインフーが買物に行くので一人で宿に入る。

国の皇子とあろう者が一人も供を連れず泊ろうなど誰も思わないだろう。反対に後から来る二人の従者と思われてしまうかもしれなかった。

一層の事旅の間俺がインフーの従者になったら面白いかもしれない

「しかしレイカの奴えらくインフーを意識してるな…俺はいらぬ事を言ってしまったか」

どうやらレイカにも発情期（違います！↓思春期）が来たらしい

相手がインフーなのが解せないが…皇子の殆どと顔を合わせても反対に毛嫌いし普通の女は皇子に憧れるものではないのか？

「どうするんだあの二人？」

レイカが龍族になるのはわかりきっており、決して結ばれないだろう

「それより、人の事よりは先ず自分の事だ」

懐から眠るハクを取り出し寝台に寝かせると神力を注ぎ込んでやる。

これでハクは目を覚ますはずだ。
それから暫らくするとハクが目を覚ます。
「ウッキ～　」
白いフワフワの毛の中の赤い丸い目が辺りを見回す。
『レイカ　ドコ？』
「レイカはインフーと買い物だ。　それよりハク、昨夜の神仙を呼び出すんだ」
『フォンフー　意地悪　嫌イ』
「お前の意志などどうでもいい、神仙の方も俺に話があるはずだ…」
『……　聞イテミル』
ハクは目を閉じる。　どうやって崋山にいる神仙と意志疎通を行っているのが不思議だ
そもそも神仙だと言う確固たる証拠もないが利用できる物は利用するに越した事はない
暫らくすると目の前のハクが昨夜のように仄かに光り始めて来て、神仙が降りて来たようだ
ハクが目を開くと人間のようの俺を睨んでくる

《　己…昨夜はよくも妾をコケにしおったの!!　崋山に住む神仙たる妾と地上に住む虎族の小童如きが適うと思っておるか　》

矢張りと言おうかかなりご立腹の様子

「　地上に干渉できないお前が俺を一体如何するつもりだ?」

更に挑発して怒りを増長してやる事にする。

《　キーーーッ　何と傲慢な小僧　お前如き今直ぐ滅してくれよう!!　》

一気に部屋が神圧が高まり部屋が軋みだしハクの毛は逆立ち目が煌々と光り始めるので少々ヤバい雰囲気だ

「いいのか天帝様は?俺を殺せば地上に干渉する事になるぞ」

ピッタ

天帝の名を出した途端部屋の空気が普通に戻る。どうやらかなり…天帝を恐れているので本物の神仙と考えていいだろう

《　妾の足下を見るとは抜け目のない子僧……　そなた何を望んでおる　》

「俺の目的も第三皇子の命だから神仙様と協力しあえるが　利用されるのは好きじゃないんだ。　俺にあいつを凌ぐ力を寄こせ」

《　簡単に言うのう……　だが妾がそなたに力を与えても干渉になってしまう　》

「なら　どうやって奴を倒す心算だ」

≪　既にあの者は白虎国内では比類ない力を手に入れてはいるが、神玉の力は十分に引き出せていないのが幸い。だが何れ神玉の力が暴走し始めれば皇子は邪神に取り変わり天帝を憎む彼の者はこの世界を破壊しようとするでしょう。　天帝様が不在の今…彼の者を抑える事が出来る神族はおらん　≫

「おい、　そんな化け物、俺の手には余るぞ！」

≪　妾もそなたが太刀打ち出来るとは端から思っておりません。しかしレイカの力ならばあの者から神玉を取り返せるはず　≫

「神仙様はレイカの正体を知っているのか」

≪　レイカは異界の血を引く稀有な存在であり、この世界の不確定要素。天帝様もその存在を看過出来ず神獣のハクを送り込んで見張っていた　≫

「異界の血？　だからあんなに規格外なのか……　そしてハクが嶺山からの密偵だからタイミング良く接触してきたはずだ」

≪　そう言う訳です。　先日はレイカの力を使い皇子から染み出す黒い気を取り入れ浄化に成功しました　≫

「その黒い気とはなんだ？」

≪　神玉から染みでる邪悪な気、この気を取り込み続けば周囲も徐々に心を蝕まれ邪神の下僕と化しするでしょう。黒い気はこれから

も皇子の体から染み出し王宮中に広まり覆い尽くし虎族を意のままに動かし、崋山に攻め入るかもしれません ≫

それならあいつの周囲の人間は全て下僕も同然、あまり変わらないと思ってしまうが……どうやら崋山は邪神が虎族を想い通りに動かし崋山に攻め入る事を恐れているのかもしれない、天帝を憎む神とは誰だ？

「レイカにどうやって神玉を取り出させるんだ？　神力は取り出せても神玉をどうやって取り出す」

≪　その為にもレイカには龍族として目覚めさせ瞑道の術を操つる事が出来れば話は簡単なのです ≫

「瞑道…　今の虎王でさえ扱えぬ術をレイカが出来るのか？」

≪　レイカの力は未知数、それにそなたにも覚えがあろう……以前レイカがそなたの腹から神核を引きずり出そうとしたのを ≫

「そんな事を良く知っているな……」

≪　ハクは常にレイカを見守っておりましたから ≫

見張っていたの間違いだろ

神仙などと言っても碌なものではない、そもそもあいつに遅れをとって宝物殿に侵入された上に神玉をむざむざ奪われたのだから間抜けとしか言いようがない

「どうやって力を目覚めさせる心算ですか」

≪　正直に申せば手立てが分からぬ。此方でも文献を調べておるが……前例がないので手間取っておるので取敢えずそなた達は今まで通りに神力を集めよ　≫

「そんな悠長な事を言ってると、既に王宮の半分は掌握しているあいつは、直ぐに王宮を乗っ取り虎族を率いて崋山に攻め込んでも知らんぞ」

≪　そっそれは、困るの……　出来ればレイカが王宮に留まり常にあ奴の放つ黒い気を浄化して欲しかたのだが既に王宮を離れた今は戻るのは危険。何とかしないと……　≫

ハッキリって使えない！

これならいなくても同じではないかと思い始める。

「奴に対抗できる虎族は既にいない。一層の事天帝様に助力を乞うた方がいいのではないか？」

≪　その天帝様が不在で困っているのです……　≫

「どうせ天帝様にばれて罰を受けるなら、地上に干渉しても同じ事。ならば邪神が目覚めない内にそちらの武神でも降ろして討ち取った方が被害が少ないと思うぞ」

≪　それは一理あるのですが……　仕方ありません上の者ともう一度話し合いをしますので後日改めて連絡します　≫

そう言い残しハクはぱたりと倒れて寝てしまうのだった。

「話し合うなど時間の無駄だと思わんのか？……崋山の神も大した事がない」

どこの世界も保身に走る奴ばかりで先延ばしにすれば被害が増えるのは分かり切った話なのだ。結局誰が責任を負うかの話し合いだろうに、くだらない

だが崋山の神が降りてくるならば俺は何もせずとも自由を手に入れられる。

少し気が緩み眠くなったのでハクの隣で昼寝をするのだた。

結局それ以降崋山の神からは連絡もない状態のまま田舎に戻り、王都とは違い安寧な日々を過ごすのだった。

一方王都では第一皇子が不慮の死を遂げ第三皇子がほぼ白虎国の全権を握り王を後宮に軟禁し実質王として権力を振るう……だが周囲は不思議がる。何故そこまで権力に拘るのかと？

誰もが次期虎王と考え何れは滞りなく王位が譲られたのは明らか

その時を待てば良かったのだ

第三皇子イェンファフーが兄皇子を殺しその手を血で染めてまで急ぐ理由が理解できなかった人々は首を傾げるばかり。

しかし英明で美しい皇子が権力に就く事を誰もが歓迎したが、徐々にイェンファフーはその本性を現し始める。

先ずは兄弟の皇子達の粛清

自分に逆らう第五、第六皇子は宮廷内の派閥によりイェンファフーに反旗を挙げるが圧倒的な力の差で自らの手でその首を討ち落とし、その顔には狂喜を浮かべ恍惚としていたのを見た臣下はあの温和な皇子とは思えず、我が目を疑った。

第四、七皇子はその足下に跪き忠誠を誓い臣下に下り延命を図るが、第二皇子だけが所在が分からず王都から姿を消し、元より公式の場はおろか王宮ですらその姿を見せない皇子で誰も重要視せずそのまま忘れられた。

そしてイェンファフーに異を唱える虎族を問答無用で討ち捨て粛清して行き誰も逆らう者がいなくなり、王宮内には恐怖が蔓延して行きイェンファフーの顔色を常に伺う者が多かったが、側近達は毒に犯されたようにイェンファフーの言葉に甘く酔いしれるように従った。

だが王都から離れた州知事は王を軟禁する行為を理由にイェンファフーを討ちと己が玉座に就こうと内乱を起こす者達も現れるが、イェンファフーは自ら先陣を斬り圧倒的強さを見せつけ返り討ちにするがその時もほぼ無抵抗な虎族や兵士達を無残に斬り捨て血を浴びる姿を見、イェンファフーに逆らうものはもういなかった。

そして各州知事達もイェンファフーを虎王同様に臣下の礼をとり、命に従い実質玉座に座ったも同然の地位に立つ。

それはフォンフーが王都を去って二年の月日が流れた後だった。

王都からの使者

虎王が後宮に引き籠られ二年近くの年月が過ぎ去ろうとしていた。公式的には王の体調が優れず公務を成せないとされてる。幾つかの内乱も起こり国内は混乱したが第三皇子の力で直ぐさま平静を取りもどし実質第三皇子イェンファフーが国の政務を全て執り行い、国民達はそのまま虎王に就くものだと思っていた。

そしてとうとうイェンファフーが王位を譲位され戴冠式が行われると公式に発表され王都は沸き立っていたが、王宮内はそれに反し静寂が包んでおり働く人々の顔も何処か重苦しい

何故なら王宮の人々はこの戴冠式が偽王をたてる物であり、天帝の意に沿わない物だ。嘗て隣国の青龍国でも偽王が玉座に座り残虐非道な行いをしているのを知っていた。当時白虎国でも龍王が偽王だったと知らず、新龍王ルェイロンが玉座についた時、前王エイシャンロンは偽王だと公式に発表しその名を抹消したのでそれを知た。

偽王が玉座に座るなど嘗ての青龍国の轍(てつ)を踏むのではないかと心ある家臣は第三皇子に時期を待つよう進言したがその場で斬首されその後誰も戴冠式を取り止めるよう進言する者はいなくなってしまう

第三皇子イェンファフーは変わった。

以前の穏やかな眼差しも冷酷なものに変わり別人のようだった、人々は変わったのか仮面を脱ぎ棄てだけなのか誰も判断出来ないが、圧倒的な力を持つイェンファフーに畏怖するしかない。

せめてもの救いは政務は通常通りに行われ国民に悪政を強いる事は無かった。

既に王宮で皇子に逆らえる者などおらず、王宮内で一言異を漏らせば何処かで聞きつけるのかイェンファフー直属の近衛師団が駆けつけ牢に入れられそのまま戻ってくる者はいなく、ただイェンファフーの命に従い恐怖に耐えるしかなく徐々に王宮内の人々もイェンファフーの毒に犯されて行くかのように変わって行ったのだった。

そしてイェンファフー命を受けて、フォンフーが住む屋敷に迎えに十人の近衛師団員が王都の使者として向かったのだった。

レイカは十二歳になり身長も急激に伸び日々女らしい体つきになり、まだ咲ききらない蕾でありながら益々美しい少女になり見馴れた屋敷の者たちですらその美しさに目を伏せてしまう程だった。

そしてフォンフーもまたレイカと競うように体を成長させ僅か身長をうわまり体つきも筋肉が付いて男らしく成長させ、何処か少女めいた華奢な体から脱却していたのだった。

そんなフォンフーの着替えを手伝いながらレイカは悔しくなる。

「どうして急に体が大きくなるんです！　先月まで私が勝っていたのに」

「お前みたいなガキより背が低いなど耐えれないからな。根性で伸ばした」

折角フォンフー様を見降ろせて気分が良かったのに根性で背を伸ばすなんて信じられない！

悔しがっているとインフー様が種明かしをしてくれる。

「レイカ、虎族の成長は人それぞれで徐々に成長する者と成長を止め一気に成長したりと一定では無いのです。フォンフー様は丁度急激に成長期が来ただけですよ」

「それじゃあこれからもっと大きくなるんですか?!」

「恐らく人間で言うと一気に十七，八歳近くまで成長するんじゃないでしょうか?」

「そんなに大きくなっちゃうんですか～」

思わずガッカリとしてしまう。

「そんなに俺より大きく成りたかったのか」

「だってフォンフー様を見降ろせるなんて気分がいいじゃないです

か」

「相変わらず生意気だ」

そう言うとフォンフー様が私のおでこをピンと撥ねる。

「痛い～」

「フォンフー様、レイカは私の婚約者なので無暗に叩かないで下さい」

インフー様は私を引き寄せその体に閉じ込める。

最近のインフー様は特にスキンシップが激しいので戸惑ってしまう……嫌では無いのだけど少し恥ずかしい

「少し小突いただけだろう。あんまり甘やかすとつけあがるだけだぞ」

そして突然窓ガラスが突風を受けたようにガタガタと震え庭に巨大な影が幾つも舞い降りの見える。

「一体何事だ！！」

「レイカは自分の部屋に居て下さい」

二人は慌てて廊下に出て外に飛び出して行った。　私は好奇心に負け窓から外を見降ろすと十羽の仙鳥が庭に羽を休めており虎族らしい兵士が降り立とうとしていた。

「王都からの使者かしら」

いよいよ第三皇子がフォンフー様を迎えに来たのだろう。

とうとうここでの生活が終わりを告げようとしている……第三皇子がフォンフー様を何時までも放っておくはずもなく、溺愛する弟を手元に戻す為に差し向けて来たのだろう。

「フォンフー様も大変なお方に好かれちゃってるのね。　でもフォンフー様のどこが良いんだろう??」

性格は良いとは言い難いし、他の皇子様に比べ群を抜いて美しい訳でもないのに

しかも御兄弟で男同士!!

フォンフー様は殺意を抱く程嫌っているのに歪んでいるとしか言いようが無い

愛ってなんなんだろう?

こんな私にも一応仮初だけどインフー様と言う素敵な婚約者がいる…

インフー様の事も好きだけどこの感情が愛なんだろうか……カヤさんとヤヤさんに聞いてみるとレイカには早すぎるわよって言われた。

カヤさん達曰くその人を愛しく感じ体を許し全て差し出してもいいと思った瞬間だって、確かに子供の私にはまだ無理かも　／／／

二人は夫婦間のそう言う事をあけすけもなく教えてくれるので私も

それなりの知識が今ではあるのだけど男の人とそう言う事をするのは怖い

インフー様も私とそう言う事をしたいんだろうか……

如何しようなどと考えているとお屋敷から二人が出て来たのが見える。

二人が兵士達の前に出て行くと兵士達の中で一番偉そうな人がフォンフー様に進み出て話し掛けているのを見て、これから起こる事を考えると気が重くなるのだった。

フォンフー様の話によると王宮は今大変らしい

「あいつはどうやら崋山の邪神を体に取り込んでいるらしい、崋山の神達は音信が途絶えてしまって当てにならん！　こうなったらお前の神力を上げる為にもインフーを巻き込むぞ」

「インフー様にも神力を貰うんですか……」

「嫌なのか？」

嫌というよりか私の力を知られるのが怖かった。神力を吸い取るなんて異常だ

もしインフー様に嫌われると思うと怖かったけど事態は深刻な様でフォンフー様は問答無用で話してしまう……この時は本気でフォンフー様の神力を全部食い尽してやろうかと思ったけどインフー様は少し驚いた顔をしただけで優しく受け入れてくれ、それから毎日欠かさず神力を分けてくれるようになった

でも、インフー様はこんな私をどう思っているんだろう。

ある時神力を貰った後聞いてみた。

「インフー様は私が怖くないんですか」

「私がレイカを恐れるなんてあり得ないですよ。こんな綺麗な少女を」

チュッ！

そう言って初めて唇に口付をされた

「／／／／！！」

「嫌でしたか？」

私は顔を真っ赤にさせ顔を振り否定するとインフー様は私を引き寄せ抱きしめる。

「それより私はレイカが龍族になってしまうのが恐ろしい……自分勝手だが本当は人間のままいて欲しいんだ」

「インフー様　だけど私は……」

切なげに微笑むインフー様

「いいんだよ……私はレイカが望むなら何でもしてあげたい。例え私の手の届かない存在になる手助けでも」

「インフー様」

それから神力を貰う度に口付を交わしている。だけどそれは唇を合わせるだけの優しい物だった。

インフー様の優しさに何も応えられないのが悲しい

私はこんなに優しいインフー様より母様を迷う事無く選んでしまう自分が少し嫌になる。

そしている内に、こんな田舎にも第三皇子様の戴冠式の噂が届く。

フォンフー様はこの戴冠式が第三皇子様を討つ良い機会だと考えているらしい、何故なら各国の王が参列するからだ。

戴冠式の最中に第三皇子の崋山での悪行をばらし王達の助力を乞い打ち倒すようだけどそんなに巧く行くのかしら?

インフー様も否定的だ

「しかしフォンフー様、各国の王は他国の内政に干渉は許されてませんが」

意味ありげにうそぶく

「自分に危害が及べばそんな事を言っていられるかな」

「まさか、イェンファフー様は王達に何か仕掛けるつもりなのですか!?」

「わからないが、あいつが態々戴冠式を行うなどあり得ん。　そもそも天帝がいない今王位など就けるはずもないが敢て王を幽閉して偽王として玉座に就く必要性が分からん。何れ天帝が戻れば簡単に王位に就けるのになぜ急ぐ？」

「まさか天帝様の不在を狙って！」

「多分あいつは何時戻るか分からない天帝を恐れ、事を急いでいるんだろう」

「何を狙っているのでしょうか？」

「俺が知るか、後は王宮に入って探る」

「そんな危険な場所にレイカを連れて行くのですか」

「仕方あるまい。レイカが一番対抗出来る戦力だ、このまま奴が力を増せば白虎国の戦力を引き連れ嵬山に攻め込むかもしれん」

「まさか……天帝様への反逆に同意する虎族がいるでしょうか」

「それを知る為にも王宮に行くしかない……それより嵬山の方はどうなっているレイカ」」

「ハクも嵬山とは連絡が取れないみたいだけどあまり気にしてないみたい」

「ふ～ん　そうか……　」

ハクを気にしているようだったけどそれ以上何も言わなかった。

それより私は他国の王様達が白虎国にやってくると聞き内心ドキドキしている。何故なら青龍国の龍王様もこの国に来る事になり、もしかすると王宮で会う可能性があり……もし龍王様が私の父様なら此処で見付ければ殺されるかも

その前に龍王様の神力を奪い尽してしまえば良いのだろうけど第三皇子様の件もあり如何すればいいのか混乱している。

フォンフー様に話した方がいいのかどうか迷っている内に迎えの使者が来てしまい、今に至っているのだけど、王宮で待ち受ける巨大な敵が二人もいるかもしれないなんてとても話せない。

取敢えず王宮に行くしかないと腹を括るしかなかった。

突然空か舞い降りて来た虎族達は矢張りあいつからの迎えだった。

しかも使者として来たらしい虎族達はどう見ても俺が抵抗した時の為の軍からの護送官だ、俺が素直に従うとは考えなかったのだろう。

「お初にお目にかかります。私は近衛師団長を務めますザッカフー、陛下の命によりフォンフー様をお迎えに上がりました」

「陛下とは父王の事か」

一応確認の為聞いてみるとギロリと睨みつけてくる。

「いいえ、現虎王はイェンファフー様であらせます。　今直ぐ王都へ御同行お願いします」

あまりの性急さに驚く

「今直ぐだと！　此方にも用意がある」

「それではご用意の為一時待ちましょう」

後ろの兵士ともども圧力を掛けるように視線を俺に集中させる。

「ちっ！　随行者は許されているのか」

「フォンフー様だけと命を受けておりますが、穏便に出来るならなるべく貴方様の意に沿うようにとは申し遣っております」

「ならば他二名を随行させる。もし拒否するならそこに居る二，三人は犠牲になる事を覚悟しろ」

数では不利だがこの中で神力は俺が一番、お互い無傷では済まないだろう

「……　分かりました。二人の供を許しましょう　」

許すだと…一応王弟であるはず俺に許可を下すとはムカつく！一体俺はどういう扱いなんだろうか。

「お前達は此処で待機し屋敷に入るな。　インフー支度だ！」

「はいフォンフー様」

兵士達は無言でうなずきそのまま屋敷の周囲を取り囲む様に配置され逃亡を阻止する構えで、まさか犯罪者扱いではないかと疑ってしまう。

苛つく奴らだ

屋敷に入りレイカに直ぐ出立する事を教え用意をさせなければならない。女の支度は長いからな

「インフー、レイカに最低限だけの荷物を用意させろ。俺の支度は何もないから暫らく一人にしてくれ」

「はい分かりました」

インフーを下がらせ自分の部屋に戻り、窓からあいつらを眺めるた後に寝台に横になるが、これからの事を考えても気が重くなるばかりだ。

嶌山の神共は一向に動かないで静観する心算か？

自分等の失態を俺達に始末させるにしては対抗する為の神器の剣の一本でも寄せと、ハクを通して言おうと思ったが連絡がつかないら

しく、幾ら脅しても出来ないの一点張りだ。
最近では俺の側には寄ろうともしない
こうなれば四神国を巻き込んででもあいつをこの世界から滅してやる。
事は俺一人の犠牲で済まないのは確かだ
しかし何故こんなに事態が大事になる！！！
まるで誰かが引っ掻き廻し楽しんでいるように感じ不快感が増すのだった。

インフー様に言われた通りに自分の部屋でハクといるとインフー様が少し青い顔をさせながらやってくる。

「れいか、王都に行く準備をして下さい。衣類はいいですから大事な物だけお願いします」

「まさかこれから直ぐ王都に向かうのですか？」

「はい、後一時しか待てないそうなので急いで用意をして欲しいのです」

あまりの慌ただしさに驚いているとインフー様が私を抱きしめてくれる。

「フォンフー様の今の立場は曖昧で王宮でレイカがどんな目に遭うか心配でなりません。今からでもレイカは此処に残って欲しい」

懇願するようにいうインフー様、私の身を気遣ってくれるのは分かるけど、そんな事フォンフー様が許さないだろうし、私の心も決まっている。

「私は行きます。フォンフー様は意地悪で捻くれているけど御恩がありますから」

「でもレイカはまだ十二歳でフォンフー様に義理だてする必要はない」

「でもインフー様はフォンフー様に付いて行かれるんでしょ」

「そうですが」

「待っているなんて嫌。私は二人とも大好きだから一緒に行きます。いざとなれば私の力を使えば役に立つはず」

「……二人とも…ですか……分かりましたレイカを絶対守ります。私はこれからチェンさん達にこれからの指示をしに行きますから、用意を」

少し寂しそうにそう言い出て行くのを見ているしかなかった。

『　レイカ　王都　行クノ？　』

「そうよハク、王都はどうなっているのかな……第七皇子様はご無事なようだけど」

『　ハク　レイカ　守ルカラ　安心シテ　』

「神仙様は何か言ってきた」

『　無イ　デモ見テイル　』

「そうなの？　見ているなら助けてくれればいいのに。　それより王都に持って行く物を用意しなくっちゃ」

もしかすと二度とこの屋敷には戻れないかもしれないので、引き出しから大事な物を取り出す。

一つは真珠の母様の大事な髪飾り、カヤさんが結婚したので一人部屋になったのを切っ掛けにインフー様が部屋に鍵を付けてくれ返してくれたのだ。そして母様の組んだ髪紐、一度も使っていないけど時折出しては眺めている。それとインフー様に貰った真珠の耳飾り、こんな田舎では付ける機会が無かったので王都に向かうならと鏡の前で付けてみることにする。

『　レイカ　綺麗　トッテモ綺麗　』

ハクがしきりに誉めてくれると少し照れてしまう

そう言えば母様が付けていた真珠の耳飾りこれより大きな粒で繊細な細工が施されていててとても似合っていた。きっと父様が上げたんだろうけど恥ずかしそうにしながらとてもうれしそうだった。母様はあんなところに閉じ込めている父様を愛してたんだと今なら分かる……二人が見つめ合い口付をしている姿は愛し合っていると子供の私にでさえ分かるほどだった。

それなのに母様を閉じ込めている父様が理解できない

しかも子供の私を母様の目の前で殺そうとまでした。

「第三皇子様みたいに頭が可笑しいのかな?」

それしか無いような気がする。

大人の恋愛は難しくって大変そうだ。

「私はインフー様とどうなるんだろう?」

服の中から首飾りを取り出し見てみると殆ど真珠化している龍石をみる。二人が毎日注いでくれたのでもう少しで龍核になるはずだけど何が起こるのかは誰も分からない

龍族になればインフー様とは婚姻できなくなる。

もし人間のままならばインフー様となら婚姻してもきっと幸せになるだろう。

人間のままでも力を使えるなら此のままでいいような気がする。

母様とインフー様

欲張りな私は二人とも手放す事が出来ないのだった。

王都への出立

屋敷の人々と別れの挨拶を交わす。

「レイカ、十分気お付けなさい、あんた綺麗なんだから油断していると虎に食べられちゃうんだから」

「そうそう、そうならない内にインフー様に抱かれちゃいなさい！」

「／／／　変な事言わないで！！」

ヤヤさんとカヤさんが玄関ホールの隅でとんでもない助言をする二人の所為で顔が真っ赤になる。

それからチェンさん夫妻や料理長さん達と言葉を交わしているとフォンフー様が声を掛けてくる。

「レイカ行くぞ」

フォンフー様の命令で外に出ての見送りは禁じられたのでその場で別れを惜しむ

チェンさんが最後に抱きしめられて、お別れを済ます。

「レイカ、体に気お付けて」

「チェンさんも」

そうやってインフー様に手を引かれ振り返りながが扉が閉まるまで手をふった。

「永久の別れでもあるまい。サッサと行くぞ」

「フォンフー様はもう少し別れを惜しんだらどうですか、私より付き合いが長いのに」

「フン！　俺は此処に戻る心算だからな、一々別れなど無駄だ」

全く捻くれて素直じゃないんだから

三人で玄関の前にいると一番偉そうなおじさんと兵士達が集まる。

「ご用意はお済ですかフォンフー様」

「ああ…　それではトットと俺を連行しろ」

「連行などと不穏な響き、私共はフォンフー様をお迎えに上がっただけです」

「分かったから、出発するぞ。俺らは如何すればいい？」

「フォンフー様は私の仙鳥に御同乗をお願いし他のお二人も部下の仙鳥にお乗りください」

「否…　俺とレイカが一緒の仙鳥に乗るから、お前はインフーを乗せてくれ」

「しかし…」

「逃げる心算は無い。　王の命令で穏便に事を運びたいのだろ」

「……分かりました。　逃亡を計られた場合は遠慮なく追撃しますのでご了承ください」

「ああ」

どうやらフォンフー様と一緒に仙鳥に乗る事になったみたい。どうせならインフー様が良かったのに

そして間近で見る仙鳥は大きくこれに乗れるなんて少し楽しみ。空を飛ぶなんてどんな気分なんだろうとワクワクする。最初にフォンフー様が仙鳥に飛び乗ってしまい手を差し出す。

「掴まれ」

「高すぎて無理です」

インフー様なら優しく抱き上げてくれるのにフォンフー様にそんな優しさは無い

すると兵の一人がすかさず私に手を差し出し補助をしてくれ漸く乗れる。

「有難うございます」

お礼を言い兵士の顔を見れば顔をデレ付かせ締まりの無い顔になっていたが、直ぐに顔を引き締め目礼をして直ぐさま自分の仙鳥に跳び乗っていた。

「お前はあまり愛想をまくな、インフーが嫉妬して大変だぞ」

「フォンフー様が私より先に乗るからいけないんです。どうせならインフー様が良かったのに！」

「この方がお前にとって安全だからだ。だからインフーも文句は言わなかった」

「どうしてです？」

「鈍いお前には分からんだろうが俺の権力は無いに等しいがインフーよりはあいつらと渡り合える。しかも兵達がお前を見る物欲しそうな顔…そんな奴とお前が同乗すればどうなる事やら。飛行中お前だけ何処かに連れ去られては厄介だ」

「其処は心配だの間違いではないのですか」

「その無駄口を閉じろ出発するぞ」

その言葉と同時に一羽の仙鳥が舞いあがると次々と舞い上がり閃風が巻きあがり私も風圧で飛ばされそうになるが、背後のフォンフー様に抱え込まれるように守られながら私達の仙鳥も羽ばたきながら飛び上がる。

すると下からロウの声

「ウォォォーーーーン　ウオーーーーーーォォーーー」

屋敷の裏から飛び出すようにロウが駆けて追いかけるように発して来るのが見える。

「フォンフー様、ロウが追いかけてくるわ」

するとフォンフー様は振り返ってロウに命じる・

「ロウ！　俺が戻ってくるまで屋敷を守れ！」

「ウオォォォォォォォォン――――」

ロウはフォンフー様の声が聞こえか無いかのように距離が引き離されても必死に追いかけて来ていたがとうとう見えなくなってしまった。

「ロウにちゃんとお別れし無かったんですか！？」

「言ったろう。俺は必ず戻ってくると」

フォンフー様は自分に言い聞かせるように前を見据えて言う。こんな素っ気ないのが主人なんてロウも可哀想。だけどフォンフー様が心を一番許しているのはロウだと思う

本当は寂しいくせに、本当にツンデレなのだ。

「それよりハクは誰にも気付かれないようにしてろ」

ハクは流石に胸元に隠せなくなったので蓋つきの籠に入れて手に持っているのだけれど、賢い子だから大人しく籠に納まっている。

「わかってます」

初めて空を飛んでいるが恐怖感は無くとても爽快で快適。　フォンフー様が神力で守ってくれているので風圧も感じず眼下に次々と通り過ぎる景気を楽しむ。

「王都にはどれくらいで到着するんですか」

「そうだな夜には着くと思うが一旦何処かの街で一泊してから明日には王都に入るだろう」

「そんなに早く着くんですか！！」

「仙鳥はこの世界で最速だ」

仙鳥欲しいかも、この鳥に乗れば青龍国もあっという間に着くに違いない

「インフー様は大丈夫かしら」

「男だから何かされる心配は無いはずだ。一応あれも虎族だからな」

隊列は私達を中心にするように取り囲んでおり、多分列の後方にインフー様が乗っているんだと思うけど姿が見えないので不安だった。

仙鳥での飛行は昼食もとらずそのまま飛び続け時たま籠を開けてハクにも見せてあげたり風景を楽しんでいるうちに日が少し傾いて来たと思う頃、広大な湖と美しい森に囲まれた離宮のような宮殿の前に降り立った。

「ここは何処ですか？」

「王都の隣にの州に建てられた虎王の離宮のはずだ。どうやら今夜は此処に泊るのだろう」

フォンフー様が一人で降りる前に慌てて降ろして貰うのを頼む

「それより今度はチャンと私を降ろして下さいね」

「面倒な女だ」

文句を言いながらも私を軽々と抱き上げ横抱きにしたまま羽が生えているように仙鳥からヒラリと飛び降り着地するや否や両手を離してしまうのでそのまま地面に尻もちをついてしまい、落された事に気付く

ドスン！！

「キャアッ！！！」

「ほら、ちゃんと降ろしてやったぞ」

「フォンフー様の意地悪！！」

背は大きくなったけど悪戯小僧のような行為は止められないようだ。
しかも大勢の兵士の前で一体何を考えているのか恥ずかしい

ハクの籠は何とか無事だったけど私のお尻はきっと赤くなったに違いない

しかもフォンフー様はそのまま私を残し離宮に向かっていき、呆れながら立ち上がろうとすると誰かが手を差し出してくれたので手を握り立たせて貰いインフー様だとばかり思ったら知らない兵士だった。

「有難うございます」

直ぐ手を離そうとするが兵士は然りと握り離そうとしない

「私が宮殿まで御案内いたします」

「いいえ、私はインフー様がいますから」

助けを求めるためインフー様を捜すとぐったりとして一人の兵士の肩を借りていた。

「インフー様！」

「レイカ！！」

インフー様が気付いてくれ兵士を振り払おうとしていた。

私も兵士の手を振り払おうとするが離してくれずより一層自分に引きよせようとするのでムカついたので一気に兵士から神気を吸い取ってやる。

すると兵士は立眩みをしたように跪いた隙に手を振り切り、インフー様の元に駆けつける。

「インフー様大丈夫ですか」

「すみません……助けられなくて」

顔色が真っ青で気分が悪そうだ、こんな顔のインフー様は初めてで同乗していた兵士に何かされたのだろうか？

インフー様の肩を支える兵士を睨むと私の顔を面白そうに見詰める

「ヒュ～～～　これは凄い美人だ、間近で見ると益々綺麗だがもう少し育った方俺の好みかな」

何とも軽薄そうな男だが虎族なのでそれなりに美形で赤毛に菫色の目の逞しい青年

「インフー様を離して、私が運びます」

「お譲ちゃんがかい？」

確かに私では無理だが取って置きの手があるのだ。神力を引き出しフォンフー様に抱きつきながら神力を流し込んであげるとインフー

様の体がピクリとする。

二人にも私が自由に神力を取り出せる事は内緒にしていたので不思議そうな顔をする。

「歩けますか」

「あっ…　大丈夫なようです？　早くフォンフー様の下に行きましょう」

「インフー様を離して！」

「いいぜ」

兵士を睨みつけるとニタニタ笑いながらもインフー様の体から離れる。

インフー様は私の肩を引き寄せるように兵士達が見守る中宮殿の中へ急いだ

「私は情けないですね……助けなければいけないのに反対に助けられてしまうなんて」

落ち込んだように沈み込んでしまう

「インフー様はどうしてあんなに気分が悪そうだったんですか？あの兵士に何かされたの」

そう言った途端に顔を真っ赤にさせたと思うと真っ青になったりとうろたえる。

「いいえ！　何もありませんでした！！！　／／／」

そう言いながらも挙動不審

そこへ薄情なフォンフー様が戻ってくる。

「お前等遅いぞ、サッサと飯を食って休むぞ」

「フォンフー様が先に行ってしまったせいで大変だったんですよ」

「のろまのお前達が悪い、もっと気を引き締めないと兵士どもに食われるぞ」

本当に勝手で気まぐれな御主人様で困る…もう少し優しく労ってくれてもいいのに、そもそもフォンフー様が私を落とすから悪い

その所為で兵士が近寄る隙が出来たのに酷い言い草に本気で腹が立つ

フォンフー様の後姿を睨みながら、インフー様に寄り添い着いて行くとそこは広間のような大きな部屋だった。

壁には大きな美女の絵が飾られ、白い大理石の女神像などが多く飾られ虎王様の趣味だろうか

部屋には長いテーブルが置かれ、椅子も十数脚置かれている。

「席に着け、食事が振る舞われる」

三人で並んで座ると侍女らしき人が現れ料理が並べられて行き一言

も話さずそのまま下がって行ってしまう。

お昼を食べていないのでお腹が空いていたので私とフォンフー様は直ぐに料理を楽しむがインフー様は食欲が無いのかたそがれて元気が無い様子…一体あの兵士と何があったのか気になるけどそっとしておく事にする……なんだか聞いてはいけない気がした。

「フォンフー様　明日王都に入るのですか」

「ああ…　少し待て。　今結界を張る」

そう言ってフォンフー様が指をパチリと鳴らすが、何も変わらない様子

「今ので結界が張れたんですか？」

「結界と言っても会話が漏れないだけのものだが、俺以上の力がない限り聞く事は出来ない」

「凄い、だけど何か悪巧みでもするんですか」

「お前な…俺をどういう風に見てるんだ。　まあいい…それより先のように大勢の虎族の前で神力を大量に奪うのは止せ、幾らなんでも気付かれるぞ！　奪うなら何処か密室に誘い込んでからにしろ、後の始末は俺とインフーでする」

その言い方では私達が絡まれているのを見ていた事になる。

「見てたなら助けて下さい！　私もインフー様も大変だったのに」

「あれぐらい自分で対処しろ、王宮で俺がお前達と常に行動は難しくなる」

「何故です？」

「多分俺は、向こうに到着すれば奴に拘束されるだろう……成るべくお前達に手出しさせないようにするが何処まで守られるか分からん」

「フォンフー様はどうなるんですか」

「奴の慰み者になって寝室にでも監禁されるかもなしれんな」

冗談のように軽い調子で言っているが、半分は真実なのかもしれないのが伺えインフー様が信じられない顔をする。

「まさか……実の御兄弟でそのような」

「否……お前にも話していなかったが俺は父王とは血が繋がっていない、母と愛人との間に出来た不義の子だ」

衝撃的な事実を平然と言う当人は気にしていないような様子

「まさか…そんなバカな、確か後宮に入られてから五年後にフォンフー様が生まれたはず。後宮に男が入り込むなど不可能、有り得ない」

「普通は無理だが、母は後宮に入内する時に以前から恋仲だった下男に女装をさせ侍女として連れて来て関係を続たそうだ。それで出来たのが俺らしい…あの大人しい母が良くそんな大胆な事をしたと

一番それが驚いたがな…ふっ」

皮肉そうに笑う

「信じられない」

「俺も奴からその事実を聞いた時は信じれず母を問いただすと泣きながら白状した。父王も承知しており、俺の父親は闇に葬られたが俺と母は許されその地位を何故か保障されたが、愛人は父王が内密に処理し、他の皇子が知る由がないと母が言っていた」

「では何故第三皇子様が知っていたのでしょう」

「分からんが、奴が俺にこうも執着する理由はそこにあるのではないかと……俺は父親似らしいからな」

「血の正統性の無い皇子　だからフォンフー様は王宮を出て田舎に引き籠られたのですか」

「別段、父王の実子でなくとも公式に皇子として認知されていたのでその辺に全く引け目を感じなかったが、奴の執拗が次第に増長して行ったので父王に頼み俺を追い出す形で王宮から逃して貰っただけだ」

あっけらかんとしたフォンフー様に反し落ち込んだ声を出すインフー様

「第三皇子様が……申し訳ありません、お側にいながら私は全く気付きませんでした」

「詫びずともよい。奴は狡猾で聖人君子のように装って周囲を信じ込ませていたからな」
少し寂しそうな顔をするインフー様だが気を取り直すようにこれから如何するか尋ねる。

「ところでどうやって第三皇子様を倒すのです」

「近日中に他国の王達が訪れる。お前達は何としてでも王達に奴が崋山に牙を剥くため何かを目論んでいると知らせ助力をお求めろ。俺は奴を引きつける」

「動いて下さるでしょうか」

「王達も無能では無い、この譲位が可笑しいとは思っているはずだ。いざとなれば戴冠式で俺が奴の本性を引きずりだし王達を巻き込んでやるさ。インフーはそれまでレイカをその身を呈して守れ……最後の切り札となる力は多分レイカだ」

「はい、フォンフー様　命に代えてもレイカを守ります」

私はフォンフー様の驚愕の生い立ちと覚悟に驚くと同時に不安が過ぎる。

王達の中には青龍国の龍王も含まれていてもしかすると私の父親かもしれず、会えば私は殺されるかもしれない

如何しようと思いながら……フォンフー様達に覚悟を決めて話そうとしようとした時だった。

「あっあの……」

「なんか面白い話だな～　俺も混ぜて」

突然第三者の声で全員が驚く

「「「　！！！　」」」

そこには赤毛の軽薄そうに笑う兵士がインフー様の肩に顔を乗せって椅子ごとインフー様を抱きしめていた。

「ヒィーーーー　何をするんです！！　離しなさい！」

「つれないな～　飛行中あんなに仲良くしたのに」

「変な事言わないで下さい！！」

「ちょっと貴方！　インフー様にくっつかないで」

椅子から立ち上がり兵士の腕を引っ張り離そうとするけどビクともしない

「レイカ、そのまま神力を一気に奪え」

フォンフー様に命じられ力を吸おうとした瞬間腕を振りはわれ、兵士は後方に跳び去り逃げられる。

「キャァーー」

「おお怖～　精力を吸い取るんなら違う方法でお願いしたいね～」

「使えない！」

フォンフー様は突き飛ばされる私を見捨てそのまま兵士を斬り裂こうと兵士に突き進む

「短気は損気。　人の話を良く聞く事を勧めるぜ。我が弟よ」

ピッタ！

フォンフー様は動きを止め、私はインフー様によって抱き起こされ庇うように抱きしめられる。

「弟？　誰だお前は……」

「そうか…　この容姿じゃ分かりずらいか」

兵士はそう言うと同時に姿が歪みぼやけたが直ぐにハッキリとした姿が現れたと思ったら別人が立っている。

背丈は変わらないが、髪は茶色に変わり瞳は翡翠色と人間のような色彩ながら顔立ちは第三皇子イェンファフーに似ていた。

「お前！！」

「貴方は！」

二人は驚いたように目を見開き男を見詰める。

「この顔を見れば理解してくれるかな」

「第二皇子トルチェンフー　本当に存在していたのか……本物だとして兵士に化けて何をしている？」

フォンフー様が幽霊でも見るようしながら問いかける。

「イェンが溺愛する弟を迎えに行く事を知ったから興味本位にこの姿の近衛兵と入れ替わって会いに来たただけだよ」

何故か元のの兵士の姿に戻り油断したフォンフー様の体を取り押さえる。

「チッ！」

「「　フォンフー様！！　」」

それと同時に近衛兵を数人引き連れた隊長が広間に入って来たのだった。

「一体何をしておる！！」

兵士に化けた第二皇子はフォンフー様を羽交い絞めにしながら答える。

「はい隊長、フォンフー様が反抗的な態度を取られたので窘めておりました」

「余計な事をするな、フォンフー様には成るべく傷一つ付けるなとの御命令だ。　食事が済んだならお部屋に通して護衛しろ」

兵士達にそう命じると問答無用で取り囲まれ部屋に連行されるのだったが、敵か味方か分からない第二皇子様の登場で益々事態がややこしくなってしまたのだった。

王都への出立（後書き）

漸く書きたかった後半部分に突入して来たのに、まさかのデータ消失！！　やる気度半減しましたがなんとか書き直しました。

これまで評価やお気に入り登録して下さった方有難うございます。

頑張って完結目指しますのでこれからも宜しくお願いします。

皇子？と皇女？

まさか第二皇子が実在していたとは

第二皇子トルチェンフー　第十六番目の側室で虎族の姫でその美しさは後宮一と謳われた美姫で虎王の寵愛を一番長く受け、第二、三、四皇子の生母だが既に鬼籍の人となった今でも後宮にその部屋を残す程虎王の愛を一身に受けた存在だった。その愛妃の第一子である第二皇子トルチェンフーは産まれ落ちた瞬間母にその存在を否定された悲劇の皇子らしく、王宮でも生存すら分からないとされている幽霊のような存在なのだ。

初めて会ったがあの色彩の所為かと納得するが、あの男からはそんな暗い影は全く感じなかった

しかも俺を遥かに凌ぐ神力を感じた

味方にすれば心強いが敵となれば厄介だが、今のところ判断が出来ない。

通された部屋は三人個々に与えられたが拒否して一番大きな客室に三人で寝る事にする。

近衛兵士は最初拒否したが無理やり客室に入り立て篭もったと言った方がいいのだが、なにしろ兵士達のレイカを見る目は御馳走を目の前にして涎を垂らした虎だ。

夜に何人も部屋に忍び込むのは目に見えている。

どうせレイカを餌に投げ込むなら大物を釣るほうが賢いだろう

しかし俺には理解出来んが、レイカは大人になる一歩手前の青い果実ながら男共は味わいたいらしい

その青い実はかなり危険な毒を孕んでいる事を知らない憐れな男達

レイカを食おうとして反対に食われるのはあいつ等なのだが、第二皇子はその毒に感づいているようなので何としても此方の味方に引き込まねばならないだろう

運のいい事に第二皇子はレイカでは無くインフーに興味を持っている……兄弟そろって趣味が理解できないのだが、だから本当の兄弟だとも納得してしまう

「インフー、お前は第二皇子を知っているのか」

第二皇子の話になると途端にうろたえ始める。

「！！…　いっ以前王宮で…いっ一度会っただけです…　わたしにも…　何がなんだか……」

「仙鳥での飛行中同乗してたんだろ、何があった？」

「／／／　！！　な、何もありません！！」

明らかに嘘だが大体の予想は出来る…レイカの前で男に体を悪戯されたとは流石に言えないだろう

「インフーこれは命令だ、第二皇子に体を使ってでも取り入れ」

「むっ無理です！　私は男ですよ」

「何が無理だ。奴に体を差し出す俺はどうなる！」

「そのような事を言われても…」

「なんならレイカを差し出すか？」

ずるいがこう言えばインフーが了承するのが分かっていた。此のままではインフーがあまりにも役ただずで、大体俺ばかりが犠牲にならなければならないんだ。

ムカつく！

レイカはレイカで展開に着いて行けず目を白黒させていた。

「俺としてはインフーが良いんだが？」

「「「　！！！　」」」

又しても忽然と現れるが二度目となるとそれ程でもなく、どうやってか扉も開く気配も無く本来の姿で現れた第二皇子が何時の間にか背後に立っていた。

「兄上もこう言っている。安心して身を任せろ」

「話の分かる弟で嬉しいよ」

奴と似たような顔でニッコリ微笑まれるといい気分では無いが我慢する。

一体何を考えているか得体の知れなさも第三皇子に似ているが奴とは違い、何故か俺と似ている様な気がした。

インフーは今にも卒倒しそうな顔をし、レイカはインフーを庇うように抱きつき警戒している様が笑え、止めとばかりにその一言を第二皇子に提案する。

「何でしたら二人一緒は如何ですか？」

「なかなか魅力的なお誘いだ」

それを聞いてインフーが諦めたように絶望的な顔で呟く

「分かり…「駄目！絶対そんなの駄目！」…レイカ　」

矢張りと言おうかレイカが口出しして来る。

「そんな事したら第二皇子様の神力を全部吸い取ってやる」

噛みつかんばかりに睨みつける。この女は直情的過ぎ少し教育が必要だが……考えて見れは生を受けまだ十二年の本当に子供なのだ。我々神族と違い体も心も幼いのをつい忘れがちになってしまう。

だが今はその我儘を許す事は出来ない

「ならばインフーが駄目で俺は良いのか？」

「そっそれは…」

「いいかレイカこれは闘いで奴は巨大な力を手に入れ俺達に勝ち目は少ない。他国の王達も俺らに手を貸すとは限らない、その状況下では一人でも多くに協力者が必要なのをその空っぽの頭で少しは理解しろ！　感情だけで動いても結果は得られないし何の犠牲も無しに勝利もえられん」

「フォンフー様の意地悪！！」

「レイカ　フォンフー様の言う通りだよ。　ここは第二皇子様のお力に縋ろう」

レイカは目に涙をいっぱい為短絡的に泣きだしそれを慰めるようにインフーが抱きしめる。

「う～～ん　チョッと妬けるが子供相手に嫉妬するのも大人げないか」

二人を羨ましそうに眺めながら物欲しそう

本気でインフーが欲しいらしいが何処まで本気なのだろう？？

「ところで真面目なところ、兄上の立場はどうなっているのですか」

「俺か？　イェンは俺を嫌っているからな～　敵対する心算もなかったが此のまま隠れていても消されそうなのも事実」

「それはまた…俺にしたら嫌われて羨ましい限り」

「確かにフォンのように愛され過ぎるのも困ったものだな」

お互い苦い笑いが浮かぶ

「では兄上は我々と行動を共にしてくれると考えていいのでしょうか」

「此のままだとインフーがそのお譲ちゃんの盾になりそうだから、俺はインフーの盾になろう」

一体何時から俺達の会話を聞いてたんだ、だが有難い申し出なので素直に受け取る。

「有難うございます」

「ところでイェンはどうなったんだ？　昔から狡猾で腹黒い弟だが冷静な男だったはず……何故あそこまで性急に玉座を欲しがるのか分からん。人が変わったとしか思えん」

「兄上は最近第三皇子に会われた事は」

「最後に会ったはディレフーが暗殺されて直ぐかな…　百年ぶりにイェンが珍しく会いに来てくれたかと思えば殺されそうになってやっとの思いで逃げ出したんだが、相変わらず俺に似て良い男だったが、神力が異常に増して驚かされたな～昔は俺の方が上だったのに何時の間にか追い抜かれ兄として寂しいかったよ」

「それ以降は」

「流石の俺も王宮にはいられないので王都で気楽に隠れ暮らしていたんだが最近イェンが俺を捜し回るものだからソロソロ他州にでも行こうかと思った矢先にお前の事を聞いてイェンの事を何か知らないかと思って近づいたんだが、まさかインフーがフォンの従者とは思いもよらなかった」

どうやらインフー目当てでは無かったらしい

「では兄上は宮中と第三皇子の詳しい今の様子を知らない」

「ああ～　悪いな。　一年前金策で王宮に入り込んだら嫌な気が満ちていて気分が悪くなったからそれ以降行ってない。街でも王宮の情報は全く流れて来ないと言うのもおかしな話だ」

嫌な気とは邪神の影響だろうか、以前レイカが奴から感じた黒い気が王宮中に満ちているなら中々動きずらいのかも知れない

それから第二皇子に崋山の事情とレイカの事を話したのだった。

「このお譲ちゃんが龍族ね」

第二皇子が繁々と私を見るので睨みつけてやるとニヤリと笑うのでアッカンベーをしてやると大笑いする。

「あはっはっはっは～　俺が微笑んでも顔一つ赤らめない女がいるとは思わなかった」

「こいつは美形不感症なんだ。なにしろ他の皇子よりインフーが良いという変わり者だ」

私にしたら皇子なんて顔ばかり良くって性格が悪いか変わり者だ。しかも目の前の第二皇子はインフー様を変な目で見ていて油断が出来ない！

私は確りインフー様にしがみ付き第二皇子が近づかないように威嚇している。

「しかし恐ろしく綺麗な少女だ、近衛兵達もレイカの噂で持ち切りで誰が落すか競い合ってる最中、　さっきの神力を抜かれた奴も美しさに当てられたと思っているくらいだからな」

楽しそうに面白げに話し私より背後のインフー様に集中しており、インフー様は俯き一言も話さず浮かない顔をしていた。

「ソロソロ戻らないと怪しまれるなー　ところで明日は王宮だが、俺はあすこまで入る心算は無かったんだが王宮に入っても大丈夫なのか？」

『　大丈夫　ハクト　レイカ　デ　浄化スル　』

ハクが籠から飛び出し話し始める。

「ハク、出来るの？」

『　狭イ範囲ナラ　結界ヲ張ッテ保テル　』

「これが崋山の猿か、成程白くて可愛いな。　それならば王宮に入ったら直ぐさまお前達と合流しよう」

そう言うとおもむろに立ち上がり壁に手をつけ瞑道を開けると、フォンフー様もインフー様も驚いた顔をしていた。

この皇子様が突然現れるのは瞑道を使ったのだと納得したけどこの国に来てこの術を使える人を初めて見た。

そして瞑道に潜ろうとしたのに何故か踵を返して引き返したかと思うと素早くインフー様の腕を取りる。

グイ！

「えっ？！」

「チョッと借りるぞ！」

そう言ってあっという間に瞑道と共に消えてしまうのを茫然と見ているしかなかった。

ハッ！！

「キャァーーーー　インフー様！　フォンフー様、インフー様が攫

われちゃった！！」

私が騒いでいるのに対しフォンフー様は涼しい顔

「別段減るものでもないだろうに、少しぐらい貸してやれ」

「インフー様は物じゃありません！」

「ならお前の物でも無いだろう。婚約者と言っても仮初でまさか本気でインフーを愛しているとでも言うのか」

「それは……」

「インフーも男、自分の身ぐらいは守れるだろうさ。第二皇子も無理やり事に及ぶほど飢えてはいまい」

そう言って相手にしてくれない

「それよりハク、崋山からは全く連絡がないのか」

『　無イ　デモ何カ企ンデイルカモ　』

「俺達を見限ったと言う事か？　最初からあまり当てにしてなかったがな。　それより王宮は奴の黒い気で満たされているなら、奴に直接接触する俺はどんな影響がある……俺も邪神に支配されるのか」

『　長クイレバ　ソウナル　』

「なんとかならないのか？」

『……　アル　レイカ　ノ　力　ヲ使ウ　』

「レイカの力と言っても神力を食らうだけの力だ。他に何かあるのか」

『　レイカ　ノ　血ヲ　飲メバイイ　』

「おい、それは隷従するという意味か！　そんなの真っ平御免だ」

「私の血??　隷従てなんなの??」

「隷従とは普通は神族と獣や神獣に自分の血を与えて下僕として使役する事だ」

「えっ　フォンフー様を下僕に出来るの！」

バシッ！

嬉しそうに言うと頭を叩かれ、相変わらず容赦がない

「誰がお前の下僕になるか！　そもそも神族や人間を隷従してはならない決まりだ」

『　デモ　ソレシカ　手ハナイ　レイカ　ノ　血ハ　特別　他ノ力ヲ受ケツケナイ　直接飲ムノデナク　媒体ニ染ミコマセテ飲ミコミ必要ナクナレバ　吐キ出セバイイ　』

「成程、　飼い主に似ず賢いな。　一時といえレイカに隷従するのは気に食わないが背に腹は代えられん」

そう言うと飾り棚に飾ってある壺に嵌っている大きな宝石をいとも簡単に外して手に乗せると指先に神力を集め宝石に何か細工をする

「何をしてるんですか？」

「宝石の中をくり抜いてこの中にお前の血を入れて封じるんだ」

「フォンフー様って意外と器用なんですね」

感心しているとあっという間に出来上がり、それを私に差し出す。

「これに血を垂らせ」

仕方なく指を差し出すけど自分で切る勇気は無いのでフォンフー様にお願いする。

「成るべく痛くないようにして下さい」

「チッ　面倒な女だな」

そう言いながらも素早くフォンフー様の爪を刃の代わりにして人差し指に切りこむと血が数滴流れるのを宝石の器で受け止めると宝石は真っ赤な色に変わった。

「これに神力を込めて血に相手を従わせるように念を込めてみろ…そう言えばお前は神力を引き出せるのか？」

「やってみます」

宝石を受け取り神力を引き出し、フォンフー様を従わせるようあり

ったけの念を込めると、宝石は仄かに光り出したかと思うと血がキラキラと宝石のように光り出す。

「お前、何時から神力を引き出せるように…黙っていたな」

いとも簡単に力を引き出すのを見て私を軽く睨むフォンフー様

「聞かないから言わなかっただけです。それより穴を塞がないと漏れちゃいますけど」

宝石を指で穴を擦るようにすると不思議な事に穴が消えて赤い血の宝石が出来上がる。これを飲み込めばフォンフー様が私の言う事を聞くようになるかと思うとワクワクする。

「早く飲んでみてください！」

「いいか、隷従するのは奴を討つまでだ分かったな」

そう言い躊躇いも無く私の血の宝石を飲み込んでしまう

ゴクッン

「どんな感じですか」

「別に何ともないが」

別段変わらない様子なので拍子抜けだけど試しに命令してみる。

「それじゃあ　フォンフー様　これから私の事をレイカ様と呼びな

さい」

バシ！

「誰がお前を様づけで呼ぶか、このバカレイカ様！」

「「　！！　」」

「凄い！！　私を様づけ！」

「くっそーーー　今直ぐ吐き出し明日からだ」

悔しそうに呟き、のどが上下したかろ思うと掌に血の宝石を吐き出し忌々しげに見詰めながらも宝石をテーブルに置く

「お前、神力が引き出せるなら既に龍族して覚醒し始めているんじゃないのか」

確かに神力を引き出せるけど使い方が良く分からない。人にあげる事は出来るんだけど？

『　マダ　龍石ハ満タサレテイナイ　』

「大体、何故お前はレイカの力に詳しい」

『　レイカ　ノ　血ヲ飲ンダ　血ノ知識ガ　ハク　ニ　教エル。レイカ　ノ　血ハ　特別　。　崋山　ノ　呪縛ヲ　解イテクレタ　』

そう言えばハクが家に来た時私の血を吸ったのを思い出す。

「それじゃあ、私はハクを隷従しちゃったったの！？」

『違ウ　妹』

「呪縛？　だが崋山の命令でレイカを監視してたのでは無いのか？」

『ハク　力　弱イ　勝手ニ　目　ヲ　使ウ　ゴメン　レイカ』

ハクがションボリするので頭を撫でてあげる。

「気にしないでハク　私が強くなって崋山の神様なんか撥ね退けてあげる！」

『レイカ　好キ』

「私も！　これからもずっと一緒」

ハクが飛び付いて来るのでお互い抱きしめ合う。これまでハクは何度も私を助け励ましてくれ、ハクがいなければ妖獣の森でフォンフー様にだって会えないまま夜には妖獣の餌食になっていたかもしれない。

ファン様もハクを吉祥の獣といっていたし、ハクは私の大事な妹なのだから

ひとしきりハクと親交を深め終えるとインフー様が気になり始める。

「インフー様がまだですね……何してるんだろ……」

「なにだろ」

なにってなに？

第二皇子様がインフー様に変な事をしているかと思うと気が気ではないけど疑問もある。

「男同士で何するんですか？」

男女の事はヤヤさんやカヤさんに教えて貰ったけど、男同士で何するのかが想像できない……考えてみれば母様も男だし？？？

今まで疑問にも感じなかったけど男の母様は私を産んだなんて変？？？

父様が神族の所為？

「男同士でも出来るんだ……　くっそ……　何が悲しくて男に抱かれねばならんのだ……」

フォンフー様は顔色を些か青褪めさせて第三皇子様の事を考えているのかもしれない。好きでも無い人と肌を合わせるなんて女でも嫌だ。だけどフォンフー様は嫌な相手にその体を差し出し討とうとしている姿勢は凄い

犠牲のない勝利など無いと断言したフォンフー様

私も母様を助けるのに何かを犠牲にしなければならないのだろうか

……

「フォンフー様……男同士でも赤ちゃんが出来るの？」

ばっこん！

「痛い！！」

何時もよりきつめに頭を叩かれる。

「男同士で出来るわけないだろ！　このバカ娘」

「神族でもそうなの？？　でも私の母様は男なんですど？？」

「嘘を言え。　ならば産みの親ではなく育ての親だろう」

「母様が産んだって言ったもの、第一黒い髪に黒い瞳の人間なんて滅多にいないわ」

「……ならば一つだけ可能性がある」

「なんですか」

「王が天帝から授かる契約の指環だ、契約の指環は王と伴侶に選ばれた者が婚姻を結ぶのに使われる神具で、伴侶を守るだけではなく子供を授かり易い体に造り変えるそうだ。まさか母親は金の龍の指環をしているのではないか」

「母様は父様から貰った龍の指環を肌身離さず着けているわ……それじゃやっぱり私は……」

何れ明らかになる事だったけどフォンフー様が忌々しげにその事実を言い切る。

「龍王の娘だ」

龍王の娘、自分の存在が信じられない

「そうなの……」

「お前、この土壇場になって更にややっこしい新事実を俺に突き付けるな……はぁ……俺は暫らく寝るから話し掛けるな」

茫然自失の私を無視し、部屋にある寝台に身を横たえてしまい目を閉じ拒絶するように背を向ける。

『レイカ　大丈夫？』

「うん……ショックが大きすぎてボーっとしてるだけ」

フォンフー様が寝台を使っているので私は長椅子に身を横たえるとハクも私の横で身を寄せる。

そして薄暗くなってきた部屋に静寂だけが広がる。

龍王の娘

あの男は矢張り龍王様だった。

此のままでは母様を助けだす前に龍王に殺されるかもしれない

思わずこの場から逃げ出したくなるけれどフォンフー様達も見捨てられない。

逃げちゃ駄目

取敢えず王宮に入り龍王様に見つからないよう変装をしようかと考えながら、今だ帰らないインフー様を待つのだった。

不器用な恋

第二皇子様に引きずり込まれたのは真っ暗な闇の世界だった。

まさかあの夜の男が第二皇子トルチェンフー様だったなんて誰が思うだろうか、確かに第三皇子様に面ざしが似ているとは思った。

瞑道を開ける程の神力を持った高位の虎族など初めて見て驚かされる。

しかも他人に化ける術を使って兵士になり済ましていたなどと驚くばかりだった。

初めて仙鳥に乗って空高く舞い上がった時、恥ずかしい話気が動転してしまい悲鳴を上げてしまう

どうやら私は高いところが苦手らしいのに初めて気が付く

「ギャァーーーー　降ろして下さい！！」

思わず兵士にしがみ付き叫んでしまい、こんな情けない姿をレイカに見られずに済んで良かった。

「おいおい、しがみ付いてくれるのは嬉しいがそんなに暴れられると落ちてしまうぞ」

落ちると聞いた途端体が硬直して動かなくなる。

「ヒィーーー　お願いですから、もう少し低く飛べませんか」

「そんな事したら隊列を乱した俺が罰せられる。諦めろ」

「そっそんな……」

王都まで此のまま飛行する自信が無い、体が自分でもガタガタ震えているのが分かる。

「そんなに怖いのか？」

兵士はバカにする風でも無く心配げに聞いてくる。私が仙鳥に同乗するのを殆どの兵士が不快な表情をする中でただ一人快く同乗を申しでてくれたので悪い人間には思えなかった。

「男として情けないですが高い場所は初めてで……」

すると背後から私を抱きしめてくる。

「　！！　なっ何をするのです　」

「こうしていれば少しは安心かと思ってな。　それにしても細いな…」

「うっ……」

人が気にしている事を、だが男など抱きしめて嫌では無いのだろうか？

確かに兵士に抱きしめられていると少し恐怖が治まるが、下を見るとクラリと眩暈がするので目を瞑っているしか無く、逞しい腕に支えられ何とか我慢できたのだった。

そして恐怖と闘う長い時間に漸く終わりが見えて来た頃

「今夜泊る離宮が見えて来たぞ。あともう少しで降りられるからな～」

「本当ですか！」

兵士の言葉に振り返り兵士を見上げると何故か唇に何かが触れ兵士の顔が間近にある？

「うっ？？！」

一瞬何が起こっているのか分からなかったが兵士の舌が口に割り込んで来た時に漸く何をされているのか気が付く！！

男同士で口付！？

そう言う輩が存在するのは知っていたがまさか自分が狙われるなどあり得ない

何とか男の舌を押し返そうとするが巧みにかわされたばかりか反対に攻められ、舌を絡まされたり吸われたしている内に段々感じ来て

しまう。

考えてみればレイカを想うようになってからこう言う事はご無沙汰になっていた。

「　止め…　あっう……　んんっん…　ふぁぁ…ん　」

お互いの飲み込めず唾液が口の端から溢れ垂れて行くのが分かる

体の芯がしびれてきて体が熱を持ったように熱くなり、自分の反応が信じられない

危ないと思った瞬間漸く唇が解放される。

口を手で押え甘い息が漏れるのを抑えて興奮を治めようとすると、より一層きつく抱きしめて来るので体が強張る。

「降りるから確り掴まれ」

兵士はまるで何も無かったような平然とした声で耳元で囁くので目を思わず下を見てしまったのがいけない

「ヒィーー」

怒りより恐怖の方が勝り思わず兵士の腕にしがみ付いてしまい、目を開けていられない

「もう目を開けても大丈夫だ」

「……」

兵士の言う通り目を開けると地上に降りており、兵士は直ぐさま仙鳥から飛び降りて手を差し出して来る。

「掴まれ」

その手を拒否したかったが腰が抜けたような状態で一人では降りられそうにないので、仕方なく手を借りて降りるが一人では立っていられず、肩を借り密着した状態が続く中レイカの悲鳴を聞く。

見れば兵士に腕を取られ小さな体でもがいている。

フォンフー様は何をしてるのだ！

直ぐさま助けようと駆け寄ろうとするが此方の兵士も離してくれない。

「離して下さい。あの娘は私の婚約者なのです」

「婚約者！」

しかし、そうしている内に兵士は立眩みを起したように膝をついたかと思うとレイカが駆けより反対に私を助けてくれ、男として自分の情けなさに落ち込んでしまうのだった。

そしてフォンフー様が兵士の正体が第二皇子ルチェンフー様と知ると私に籠絡するよう命じた時は一瞬絶望感が襲ったが主であるフォンフー様が血が繋がっていないとは言え第三皇子様にその身を犠牲にしようとしているのに自分の甘さが嫌になる。

今は国の一大事

フォンフー様は皇子として立派にこの国を守ろうとしているのに

第三皇子様を討たねば白虎国は華山に攻め入り滅んでしまうかもしれないのだ

愛などと言っている場合では無い

しかしこの方は何を考え私を欲してるのだろうか？

虎族としては格別美しい訳でも才に秀でている訳でも無い

初めて会った晩も泣いている姿を見られている。

こんな女々しいから男につけいられるのだろうか……多分からかわれているのだろう

そう思うと益々落ち込みレイカにこんな自分を見せたくないのだった。

まさかこんな場所で再会するとは思いもよらなかった。

初めて会ったのは王宮の庭園で月を眺めながら静かに涙を流している姿だった。

銀色の髪を月光で輝いており零れる涙は水晶のように美しいと思った瞬間

欲しいと思ってしまた。

一目見て男とは分かっていたので気の迷いだ思いながらも惹かれるようにその男に近づき思わずその涙を舐めてしまう。

舐めると酷く甘く感じ欲情してしまう自分が信じられなかった。

そのまま押し倒したくなるが相手は細身ながら男

躊躇ってしまい逃げて行くのをそのまま見逃してしまった。

今まで性愛の対象は女だけで男に欲情するなど無く気の迷いで直ぐに忘れてしまうだろうと軽く考えていたのだが何故か忘れられ無かった。

捜そうとした時には既に遅くイェンが政変を起こしたためにより困難になり諦めていたのだがまさか第八皇子の従者だったとは

イェンが無理やり王位に就いてまで欲しがっている弟を見たくなり気紛れでこの近衛兵士団に加わったのだが

田舎の屋敷を訪れ第八皇子フォンフーは弟ながら初めて見るのだが、確かに美しい少年ではあるがイェンが執着する程でも無いと不思議がっていると、直ぐ後ろに控える青年を見て驚く。

そこには2年近く捜し続けていた青年

これは運命だと瞬間に思ってしまう。

早速近づき自分の仙鳥に誘い込み口説こうとすれば高所恐怖症らしくそんな雰囲気にはなれなかったが確り体を触りまくっていたのに恐怖が勝っているのかちっとも気付かないが十分堪能できた。最後に我慢できず唇を奪えばかなり感度良好の反応。

男の喘ぎ声など御免だと思ったがインフーの声は何故か可愛く聞こえより一層啼かせたくなるから不思議だ……

しかしあのレイカと言う美少女が婚約者と聞き焦る。

近衛兵達がレイカを見た途端オスの本能むき出しで我先に抜け駆けし近づき虎視眈々としている程、男達を惑わす美貌は俺でさえも一瞬見惚れてしまい、俺を睨みつける気の強さも好みなのだが、それでもインフーが良かった。

これは自分でも重症だと自覚する。

ハッキリ言ってインフーは俺の好みのタイプと真逆、そもそも男

俺が何時も選ぶ女は明るい美人で気が強いのが好きで胸が大きければ尚更良いのに、インフーは美しいが性質は真面目で物静かな人間だと推察でき、俺とはそりの合わないタイプだ

少し親交を深めようと瞑道の中に引きずり込んだが、インフーの顔は暗く沈みこんでいる。

普通なら暗い男など視界にすら入れないが妙に色っぽく感じてしまう。

「俺といるのが嫌か？」

インフーを引き寄せ腰に手を回し逃げられないようにすると、体を緊張させながら俺の顔を見上げる。

「私は第二皇子様に身を任せれば良いのでしょうか……」

行き成り本題か…やはり生真面目のようだ

今日初めて会った弟であるフォンフーは中々一筋縄ではいかない癖のある男だから、従者であるインフーはかなり苦労してそれなりにこなれていても良さそうなのに、真面目さは崩れないようだ。

「俺としては嬉しいがインフーが俺に惚れてからでいいぜ」

「私はレイカを愛しています……第二皇子様に心を寄せるなどお許し下さい」

ズキリと心臓が痛む。

つまり心はやれないが体だけ差し出すと言うのだろう……ここは嘘でも俺に気のあるそぶりを見せて良いように俺を使えばいいのに、本当に真面目で不器用だ

「だがレイカは龍族だ、決して報われんぞ」

「分かっています。レイカも私を兄のように慕っているだけで恋をしている訳じゃない…だけど皇子様達より私が良いと言ってくれるだけで報われたような気がします。　本当は龍族になるなと懇願したいがそれではレイカは幸せになれない……今でさえ大きな力の片鱗を見せているのに龍族として覚醒すればかなりの高位の龍族になるのは分かり切っています。私のような虎族ではレイカを繋ぎとめられない……せめてレイカが龍族になって離れるまでは婚約者として命をかけて守りたいのです」

インフーは感きわまった様に美しい瞳からハラハラと涙を零す。

この涙だ

純粋な愛の涙…

これが俺の為に流させたかった。あのレイカの為に流すのかと思うと嫉妬が湧く

「ならば俺を頼れ、お前の願いなら何でも聞いてやろう」

「第二皇子様……」

「トルチェンフーと呼べ、お前が欲しい」

「でも私は……」

抱くつもりはまだ無かったが、この涙を見たら堪らなくなってしまう

「俺を利用すればいい……　だが俺がレイカを忘れさせ何時か全てを貰う」

インフーはより一層悲しそうな顔をするが今はそれで良かった。

無理やり口付をして全てを奪うようにこの闇で覆われた世界でインフーの体を貪るが、馴れないインフーには苦痛でしか無かったかもしれないが止められなかった。

自分にこんな激情があったとは

母に疎まれ寂しい幼少時代を送ったがそれでも良かった……王宮を抜け出しこの容姿を生かし街で気ままに暮らす方が楽しく王位も力にも何の執着も持てずにいた。

今ならイェンが邪神の力を得てまで王位を欲しがる気持ちが分かるような気がする。

神族も男同士の婚姻は許されないが、例外的に王だけが許された特権

伴侶の指環があれば男同士でも命を分かち合え死ぬ時まで一緒に居られるのだから

体を重ねより一層執着が強まるのを感じる。

多分インフーの命は俺の半部しかないだろう、インフーと命が繋げられるなら玉座を狙っても良いかもしれない。フォンフーも玉座を望むなら禍根なく消せばいいだけ

だがレイカは消せばインフーが心を閉ざすので青龍国にでも追い出せば話は済む

疲れ果てて気を失うインフーを抱きしめながら囁く

「お前は俺のもの、面倒な男に掴まってしまったと諦めろ。　愛しているインフー」

今の一時だけは自分のものだ

インフーの全てを得る為にも先ずはイェンを討って父王を助けてからしかし敵はかなり手強そうだ

昔のイェンではなく邪神……二年前に現れた時は歯が立たず瞑道を開けて逃げれたがそれ以上に強くなっているとしたら王が何人かかっても難しいかもしれない。

嫌われるだろうが危うくなったらインフーだけ助けて逃げればいいだろう

それまでは出来る限り協力するしかないだろう

それも全てインフーを手に入れる為の手段

そうでなければこんな面倒事には首を突っ込むなど俺では有り得ない。

恋の力とは人を変えるのだと初めてしたのだった。

仄かな想い

昨夜は結局インフー様が戻って来るのを遅くまで待っていたのに戻っては来ず、フォンフー様が寝ろと言うので腹が立って来る。

「フォンフー様が変な事を言うからインフー様が戻って来ないんだわ」

「知るか！　男の事情だろ」

「どんな事情です！」

「ヤル事をやってるだけだ。それ位察しろ」

ヤル事てなに!?

インフー様は私のなのに!!

そんなの酷い！

「インフー様は私の婚約者なんですよ」

「お前なーーアレは他の皇子を牽制するための方便だろ。今の情勢ではそんな物無効だ。第一に龍族でしかも龍王の娘が虎族の男と添

える訳がない」

「むぅ……　でも私はインフー様が好きです」

「そんなの錯覚だ。　お前のはただの兄に対する独占欲で恋じゃない」

「恋なんかした事のないフォンフー様に何が分かるんですか！」

「した事はないが王宮で恋に狂った人間なら大勢見て来たぞ、だから断言出来るお前のは恋じゃない」

私の心を思いっきり否定されムカつくので思いっきり枕をフォンフー様にぶつけてやる。

ボッス！

矢張りと言うか避けられてしまい、涙を溜めた目でフォンフー様を睨みつける。

「子供のお前には分からんだろうが神族であろうが思い通りに事が運ぶ事なぞ無い。全てを手に入れたいなら天帝を越える力を持て。そうすればお前の母親もインフーも手に入る。だがそんな力の無いお前は何かを犠牲にするしか無い事を理解しろ。インフーはそれが分かっているから第二皇子に従う……所詮弱肉強食の世界。強いものが王になる」

弱い私ではインフー様を諦めるしかないの…でも大事な人には変わらない

この好きが恋か分からない時点で恋じゃ無いの？

大好きなお兄さん…

「私はインフー様に如何すればいいの」

「あれはお前に何も望んでいないだろ…インフーはそう言う男だ。だからこれまでのように兄として慕えばいいんじゃないか」

「兄……」

「それよりガキはサッサと寝ろ。俺は寝るからな」

そう言って寝てしまうけど子供のように寝てばかりのフォンフー様の方が、余程子供のように思える。

兄…　私の好きはそう言う好きなんだろうか

分かんない

寝台は一つしか無いけれど五人がゆうに寝られる広さなので一緒に寝るしかないので仕方ない、フォンフー様の側に横たわり布団を被り考え込みながら何時の間にか寝てしまった。

翌朝目を覚ますとインフー様が私が眠る傍らに座り見詰めていた。

「お早うレイカ」

何時ものように柔らかく微笑んでいた。

「インフー様！」

飛び付くようにインフー様の首に手を回し抱きつくと抱きしめ返して来るけど、何を言っていいか分からなかった。

「昨夜は心配をかけましたね、もう私はレイカの婚約者の資格すら無いのかもしれません」

悲しそうな表情で呟く

「そんな事無い。私はインフー様が好き」

「その言葉だけで嬉しいですけど、ソロソロ婚約者ごっこは終わりにしましょう」

「何故！？　私はそんなの嫌」

「ならば私がこんな事をしても許してくれますか」

突然インフー様は私に覆いかぶさるように寝台に押し倒し何時もと違う激しい口付をして来る。以前フォンフー様がしたように舌を入れられきつく吸われたり絡まされたり責め立てられ恐怖が湧く

目は怖いくらいぎらついている。

違う…こんなのインフー様じゃ無い！！

怖くて悲しくて目から涙が溢れるが、インフー様は止めてはくれずその内手が私の小さな胸のふくらみに差し込まれる。

ビック！！

我慢できず両手でインフー様を押し退けるのに突っ張るがビクともしない

「うっうう……う……嫌…　止めて…　こんなの嫌…」

泣いてしまった私から静かに離れると何時もの優しいインフー様の顔になり、私を抱き起こし優しく労るように背中を擦ってくれる。

「怖い思いをさせましたけど、今のがレイカの正直な気持ちではないでしょうか。レイカが私に求めるのは男では無く優しい兄なのです」

「そんなの分かんない…でもこんな事するのは嫌…」

「大丈夫もうこんな事をしません。だけどレイカが龍族になるまでは婚約者として守らせて下さいね」

「インフー様……」

「愛してますレイカ、例え龍族に変わったとしても」

愛してる…思えば初めて直接言われたのに気が付き、その言葉の重さを知った様な気がして苦しくなる…

私は人間でいられない

父である龍王と対峙し母様を助けなければいけない。

インフー様の優しい愛に応える事なんて最初から出来なかったのだ。

「インフー様のバカ、私なんかインフー様に何も返せないよ」

「レイカに好かれてるだけで十分です。だから今ので嫌わないで下さい」

こんな優しいインフー様を嫌いになんてなれるはずが無い……私の方が我儘で嫌な子だ

「私も嫌いにならないで」

「全く何時までいちゃついている心算だ……思いっきり俺の存在を無視してるな」

不機嫌そうに私達を見ている。そう言えば横でフォンフー様が寝ていた事をすっかり忘れていたので慌てる。

「今の見てたんですか！　／／／　フォンフー様のスケベ！」

ベシッ！

「痛い！」

毎度の事のように叩かれる私の頭がいい加減心配

「スケベはインフーだろ、俺の横で襲うから悪い、あんなに騒いで起きない方が可笑しい」

「／／／　申し訳ありません。つい感情が高ぶってしまい……」

「フン、レイカなど諦めて正解だ。　こいつは龍王の娘…その所為で龍王の力は当てにならないどころか敵になるかもしれん」

その言葉を聞きインフー様が私を驚愕の目で見る。

「龍王様の娘…青龍国の皇女様！！」

「そうだ、俺はとんだガキを拾ってしまったわけだ」

何故か人を詐欺師のような目で見るフォンフー様

「金の指環のの事を聞くまで、私だって龍王様が父親だなんて知らなかったんです！」

本当は薄々そうかもと思っていたのは内緒にしてこう

インフー様が驚きすぎ茫然としている中扉から兵士の声がかかる。

「朝のお食事の御用意が出来ましたのでお出で下さい」

それからは朝食を済ませると直ぐに出立の用意をして、慌ただしく

天馬に乗って王都に向かうのだった。

今回は馬が人数分用意されていたので迷うことなくインフー様に同乗させて貰うと兵士に化けて第二皇子様が凄い形相で睨んで来た。

この目には覚えがある。フェンおじちゃまがサンおじちゃまに好意を抱く男に向ける視線、侍女さんがアレは嫉妬だと教えてくれた。そう言えば小さい頃サンおじちゃまのお屋敷でお泊りした時に一緒に寝たら幼女に私を本気で睨みつけ怖くて泣いてしまったのでサンおじちゃまに怒られてショボリするフェンおじちゃまを思い出してしまいクスリっと笑ってしまった。

ギロ！

ひぇーーーー　怖い

私が笑ったのを勘違いしたようで殺気のこもった目で再度睨み返される。

これはフェンおじちゃま以上かもしれない。

私でも第二皇子様が本気でインフー様が好きなんだと分かってしま

う、私の好きが本当に稚拙な思いだと気が付く

適わない

だけどインフー様はまだ私の婚約者

子供っぽい独占欲かもしれないけど、そう簡単に大事なインフー様を渡せない。

なにしろあの第三、四皇子様のお兄様だから性格が良いはず無い！

「どうかしましたかレイカ？」

「何でもありません」

インフー様が私を見ていてくれる限り邪魔をしてやる。

だってやっぱり私の想いは仄かなものだが恋だったと思うから…

背後の殺気を感じながらインフー様は何も感じて無いようで、そんな所もサンおじちゃまに似ている。

何故か自分に向けられる好意に鈍感な程に気が付かない

侍女さんによると自分に自信が無いので好意を向けられても気のせいだと無意識に流してしまうらしく、フェンおじちゃま位に鬱陶しい程に愛情を示すのが丁度いいらしい

なんだかインフー様もそれっぽいので、きっと第二皇子様も苦労するだろうけど同情はしない

私の仄かな恋心も否定されてしまったんだから

天馬が颯爽と走って行くと昼には王都が見えて来る。

これから第二皇子様を討つ闘いが始まるのかと思うと恐くなる。しかも父である龍王とも対峙しなければならないのだ

生きてられるだろうか心配だけど此処まで来たら突き進むだけ

母様もインフー様も一応フォンフー様も絶対私が守る。

王都の様子は相変わらずの様子で変わらなかったが王宮の城壁の正門を潜った途端嫌な気分に襲われる

「なんだか気持悪い」

「何がです？」

「多分、以前第三皇子様から感じた黒い気と同じです」

「私は何も感じませんが」

不思議そうに辺りを見回すが何も感じないらしい

どうやら私だけ感じているらしく、他の兵士達も平然としていた。

フォンフー様とインフー様と私の乗る馬をぐるりと取り囲みながら王宮内を進んで行くけど、以前と違い人の気配が無くひっそりとしていて静まり返っている。

兵士の先導で連れて来られたのは以前の離れの場所だったが違う建物が建っていた。

「なんだこれは？」

「陛下がフォンフー様を迎えるにあたって新しく建て直しましたが、お気に召しましたでしょうか」

隊長の話を聞いて呆れたように大きく立派な小宮殿に様変わりしていた。

「別段住む場所などどうでもいい。それより早く休ませろ」

フォンフー様の反応に不満げな様子だが取敢えず礼儀正しく扉を開けるとズラリと侍女達が頭を下げ並んで出迎えている。

以前とは比べ物にならない歓待ぶりに驚くがフォンフー様は嫌な顔を見せ直ぐさま文句を言い始める。

「こんなに侍女はいらん。三人だけ残し他は下がらせろ」

「陛下より十分なおもてなしをするよう受けた待っておりますのでご容赦を」

隊長も睨むように引かないぞとばかりにすごむ。

「チッ…　分かった。　ところで兄上には何時お会いできるのだ」

「はい今夜此方の宮にお出でになりフォンフー様と静かに再会を祝いたいそうです」

「そうか、戴冠式は明後日だそうだが他の王達は既にこの王宮にいらしゃっているのか」

「はい玄武国の亀王（きゅうおう）と正妃様は既にお出でですが、明日には鳳凰国の朱雀王と青龍国の王は都合が付かず代理に丞相様がいらっしゃるとお詫びの親書が参りました」

「なに、龍王様はいらっしゃらないのか」

「はいそのように承っています」

龍王が来ない！！

死の言葉を聞いて安心するけどまた新たな不安が押し寄せる。まさか母様に何かあったの…

それから、豪奢な客間に通されお茶を用意させたあと全ての人間を下がらせ結界を張り、漸く一息つく

先ず先に籠に閉じ込めたままのハクを出して上げると、飛び出すようにハクが出て来て私の膝に乗る。

『　邪神ノ気ガ満チテイル　』

「そうなのか？」

フォンフー様が私に聞いてくる。

「はい、嫌な感じがビシビシ感じます…　二人が何も感じない方が不思議なんですけど」

「何故レイカには感じられて俺らには感じない？」

「力の差だろ」

突然話に割ってくる声は、第二皇子様でしかもインフー様を背後から抱きしめている。

まさに神出鬼没

「ヒィーー　離して下さい…」

「インフー様から離れて！」

急いでインフー様の腕を取り引くけど反対に襟首を持たれ引き離される。

「キャー　何するの！　野蛮人！」

「全く、綺麗な顔に似合わずじゃじゃ馬のようだ」

「乱暴はお止め下さい。第二皇子様」

「トルチェンフー」

「トルチェンフー様　レイカをお許し下さい」

「仕方ないから離してやる。お譲ちゃん」

襟を直ぐに離されると尻もちをついてしまう。

「きゃっん！」

「レイカ、大丈夫ですか」

インフー様が心配げに起こしてくれるのでこの隙に抱きついて守る。

「フォン、この譲ちゃん何とかならないか」

「兄を心配しているだけです。多めに見て下さい…それより兄上はレイカの言う悪い気がわかりますか」

「確かにこの譲ちゃんの言う通り、気色悪いものが体に纏わりつく感じだ。その猿の言う通りこの気配を消せるなら早くしてくれ」

第二皇子様が私と同じ気を感じるのは気に食わないけど確かに早く消したい。

「ハク、出来る」

『　ハク　スル　レイカ　ガ　集メテ　』

「私が？　どうやって？？」

『　ハク　導ク　レイカ　ハ　目ヲ瞑ッテ　』

ハクの言う通りに目を瞑るとハクが肩に乗るとずしりと重さを感じる。

『　黒イ気ヲ　感ジッテ　ソシテ　呼ビ込ンデ　』

以前第三皇子様から吸い取った時のおぞましい感触を思い出し躊躇ってしまうがやるしかない…目を瞑りながら気配を探ると部屋を取り巻く黒い霧の流れを見付けそれを吸い取る為に手を前に突き出し掌にそれを神力を吸いとるようにすると掌から体に流れて来るとおぞましさに鳥肌が立つ

だけどそれは肩に乗るハクにそれが流れて行く

「ハク大丈夫なの」

『　レイカ　ノ血ガ　浄化シタ　』

自分の血ながら凄いと思ってしまう。

私の血って特殊すぎて自分でも自分の存在が分からない…龍王の娘以外に何かあるんだろうか？

そしてあっという間に部屋の中だけは結界に守られているので浄化

出来たけど一歩外に出れば嫌な気が取り巻いている。

「どうせならお屋敷全体に結界を張って浄化しますか？」

私がそう聞くと

「夜には奴が来るから不審に思われては厄介だ。取敢えず此処の部屋だけにしておこう」

それから皆でこれからの事を色々話すのだった。

偽王と皇子

結局その夜は第三皇子イェンファフーは予定を変えてしまい、急きょフォンフーは国賓である玄武国亀王夫妻の夜会に呼ばれる事になったのだ。その為皆で作戦会議

「亀王には奴の隙を見てこの手紙を託すが邪神の手に落ちてないかどう判断する？」

フォンフー様はイライラとしながら聞いてくる。

「亀王と言えば四神国の王の中でも随一の神力の持ち主だ。心配いらんだろが、もし亀王が邪神に堕ちてしまっているならどちらにしろお終いだな～　一層の事此のまま何処かに逃げるか？インフー」

第二皇子は緊張感の無いおどけたように言いながらインフー様に寄りかかる。

「そんな事出来ません……」

「ちょっと　インフー様に近寄らないで」

私が二人の間に割って入り引き離そうとするが大人でしかも男の力に適うはずもない。

「お嬢ちゃんはそっちの猿を抱っこしてな」

「猿じゃ無くハクよーーー」

そして何故か二人のいがみ合いが始まるとフォンフー様が切れる。

「二人とも今は男をとりあってる場合か！　少しは真剣に考えてくれ、俺ばかりが割にあわんのは気のせいか」

いらつくフォンフー様に反しトルチェンフー様は一向に気にする風もない

「弟よ、そんなに焦っては事を仕損じる。　此処はじっくり敵の懐に入り状況を探る事が先決だ」

「それなら一層の事兄上が私に為り済まして夜会の宴に出られては如何です？」

「否、俺は後方支援が向いているのでな弟であるお前に花を持たそう」

流石に年上に軽く流されてしまうフォンフー様は悔しそう

「くっそーー　何故俺ばかりが貧乏くじを引けばならん！！」

「王位を望むならそれ位我慢するのだな」

「俺は王位なんぞ望んでない！！　そもそも神力は兄上の方が上ではないか、次期虎王は兄上なのでわ」

「俺もなる気なんぞ無い……まーなりたい奴がなるだろう」

何ともやる気のないやり取りにインフー様とあきれるしかない

何時の間にか話がずれてしまったそんな時扉から家令が王宮から仕えが来た事を告げて来たのだった。

「フォンフー様　本殿よりお迎えが参りました」

「今行く」

いよいよ第三皇子との対面に緊張するかのように体を強張らせるフォンフー様に私は血の宝石を差し出す。

「頑張ってくださいね」

フォンフー様は更に嫌な顔をしながらそれを受け取って一気に飲み込むのを皆で見守っているとハクが突然フォンフー様の肩に乗る。

『　ハク　フォンフー　付イテ行ク　』

「どうして？　危ないよ」

ハクは以前に比べ大きくなっている。と言っても普通の猿に比べれば小さいのだが服に隠れるのは無理だ

『　レイカ　力ヲ頂戴　』

「いいけど何をするの」

言われるままに手をかざし注ぎ込んでみる。

するとハクの体は見る見る小さくなり親指程になってしまうい、そのままフォンフー様の髪の中に入ってしまうと同じ白なので保護色で分からない

「凄い　ハクが小さくなっちゃうなんて」

「まるでノミだな」

「むぅ～～　失礼な事言わないでください　とっても可愛いわ　」

「見つかって潰されても知らんぞ」

『　大丈夫　』

「では行って来る」

そしてフォンフー様はハクを連れ一人第三皇子の元に赴くのだった。

気丈に振る舞ってはいてその後ろ姿は何処か頼り無げだ、思えば何時も飄々としてあまり他人を頼ろうとしない上に自分の弱味を見せようとしない

私やインフー様にですらその心の全て曝け出そうとしないのは寂しいけどフォンフー様らしい

第三皇子様に酷い事をされないか心配

「フォンフー様は帰って来るかな…」

「あの方は強い、第三皇子に何をされても決して屈しないでしょう。それに同情されるのが最もお嫌いですから、お帰りになったら普段通りに接しましょ」

「はいインフー様」

「俺は弱いからどんどん甘やかして慰めてくれ！」

そう言ってインフー様に抱きつきすり寄る第二皇子、この男の所為で暗い空気が一気に壊れるのは態とかしら？

そして困っているインフー様を助けるべく第二皇子に立ち向かうのだけれど本気で全神力を吸い尽してやろうかと思うのだった。

迎えの近衛兵に連れられやって来たの本宮殿の大広間で既に始まっているのか楽団の音楽が流れているが人々の会話は聞こえてこない、

そして広間に入ると広々とした空間には小さな宴の席が設けられておりそこには一人あいつが座っているのを確認すると胃がキリりと痛む

奴は俺を確認すると嬉しそうに立ち上がりその腕を広げ抱きしめようとするのをジッとして立ちすくし耐え忍ぶ

「ああーー　フォンフー会いたかったよ、良く顔を見せてくれ。二年見ない間に背が伸びたんだね」

おもむろに奴が俺の顎を持ち上げ上を向かすと相変わらず秀麗な顔が目に入る。

その紺色の瞳には何時も通りの狂気は見えるが邪神の影は感じられず以前と変わらない

どういう事だ？

だが、奴が王を後宮に閉じ込め王位を偽って簒奪　しようとしているのは事実でとても正気とは思えない

奴を振りほどきたかったが女官が数人と楽士達が控える前では猫を被るしかない。

「お久しぶりです兄上　この度は王位の継承おめでとうございます」

「有難う、お前からの祝いの言葉が一番嬉しいよ」

うっとりと俺を見詰めるが本当に自分が天帝に選ばれた王のように偽王だという後ろ暗さを全く感じられず、益々異和感が増す

偽っているだけか？？

「本来ならお前とゆっくり夜を過ごしたかったが国賓である玄武国王夫妻を蔑ろにも出来ない。それにフォンフーは何れ我が伴侶だ紹介しておきたかったのだ」

伴侶！　冗談じゃない伴侶になるくらいなら命を賭けてでも国外に逃げてやる。

「兄上は本気で私を伴侶にする心算ですか」

「別段問題はなかろう、血の繋がりも無く男であろうが関係ない。この王宮で私に逆らう者など誰もいはしない」

この男は何を言っているんだ、天帝の選定がなくして王の証である金の御璽と伴侶の指環は無いのは自分自身が一番理解しているはず。

確かに変わってしまった…自分が見えていない、以前なら冷静に判断し自分を偽りながら自分に魅せられた者達を操り先を見通す目を持っていたのに、今此処に何時第三皇子は自分を本当の王だと信じる愚かな男にしか見ず愕然とする。

「私の様な者を王妃に据えるなど兄上が侮られます。どうか正妃は有力な虎族の姫をお選びください」

「言っただろ私には逆らう者など誰もいない。漸く私の手に戻って来たのだ二度と離すなどあり得ない、私の愛しい人」

そうやってうっとりと俺を見詰める瞳

違う、矢張りこの瞳は俺では無い人間に向けられている

誰だ？

俺の本当の父親……母に真実を問い詰めた時言っていた。貴方は父親にそっくりだと言って俺を見詰めた時の母の目と同じだ。

なんという迷惑な両親だ

何の罪も無い俺がつけを払う嵌めになるとは割に合わない

親が選べるならば今の親を絶対に選ばん！

「兄上がそこまで私を望まれるのなら反抗はしませんが、この事を母にも報告したいのです。　どうか母に一度会わせて下さい」

すると第三皇子の顔の様子が一変し、冷酷な顔で俺に残酷な事実を突き付ける。

「あの女の話は二度とするな…っと言っても既にこの世には居ない者の事など忘れるのだ」

「！！」

今までにない衝撃を受け目が驚愕で大きく開く。

母がこの世に居ないだと！！

つまり殺したと言うのか俺の母親を

こいつがこんを冗談は言わない、本当の事なのだ！

死んだ母が

あまり親子の情など感じなかったが母の死を知り一瞬頭が真っ白になり何時の間にか涙が一筋頬を伝う

その涙を見て第三皇子は更に激高して俺の首を絞める

「お前まであんな女の為に涙を流すのか！！」

「うっ……　ぐぅ……」

首を絞められながら奴を見れば凄まじい憎悪の顔、矢張り両親と奴の間には何かしらの憎愛があった事を確信する。

「兄…上…　どうか…　お怒りを…　お鎮めく…」

こんな所で死ぬのは御免だ

何とか切れ切れに許しを乞うと又しても突然のように表情を変える。

「フォンフー　……　大丈夫かい。少し興奮してしまったようだ、許しておくれ」

全ての女を虜にするような甘い微笑みを浮かべながら抱きしめて来るが、生憎俺は男でしかも母を殺した男にときめくはずがないが、此処は黙ってされるがままになるしかない

心は嫌悪と怒りで一杯だがそれ以上にこいつに対する恐怖もある。

「しかし本当に成長したものだ、以前は小さくて抱いてしまうと壊

してしまいそうだったが、これならもう抱いても十分耐えれる」

そう言いながら俺の体を確かめるように奴の手が這いずり廻るが嫌悪感で鳥肌がたち突き飛ばしたいのを我慢する。

そこへ助け船のように玄武国王の来場を告げる。

「陛下、玄武国王夫妻がお目見えになりました」

「そうか、お通ししろ」

奴から解放されホッと息を付く

そこへ案内されて来た玄武国王夫妻が入って来ると一気にその場が華やぎ、煌びやかな光り輝き始めたような気さえする。

その最もたる所以は亀王（きゅうおう）にある。その容姿は煌びやかの一言で先ず目に留まるのは見事な流れるよな美しい金に輝く髪だろうか、しかもその長さはかなりの物でまるで金の帯のようだ。しかもその美貌は神族の中でも一・二を争うのではないかと思うもの、まさに美の境地と言っていいがその衣装もまた奇抜で金の生地に赤と白の牡丹の花が描かれけばけばしく亀王でなければ衣装ばかりに目が行ってしまっていただろうが趣味がとても良いとは言えなかった。

一方王妃の方にも驚かせる。やはり一番目に付くのはその漆黒の髪!!　レイカと同じ色の髪、しかも黒い瞳だ!まさかレイカの母親かと思うが直ぐに打ち消す。レイカの父親は龍王で母親は人間の男、だが亀王の伴侶は女性……しかもかなり地味な顔立ちで別の意味で我が目を疑った。

何とも対照的な夫婦としか言いようがなく呆気にとられる。

「虎王、今宵もこのような宴に招いて貰い感謝します」

「いいえ、遠路はるばる御出で頂いた国賓。今夜は我々だけなので寛いで楽しんでください」

お互い無難な挨拶を交わしてから俺の紹介をする。

「これは我が愛する弟で昨晩の歓迎の宴の時は王都を離れていたので今夜ご紹介します」

「フォンフーと申します。亀王様のお会いでき光栄です」

弟と紹介されホッとする。

「ほー　この方がご自慢の弟君ですか、しかし本当の虎族は子沢山で羨ましい。我々亀族は子が出来にくく、余も早くミユキとの間に子供が欲しいがこればかりは天に任すしかない」

「亀王夫妻は仲睦まじいご様子、その内お美しい御子様が誕生するでしょう」

無難な会話を交わしながら会食が始まり、音楽や踊りが目の前で繰り広げ二人の王は会話をする中亀王妃が此方をチラチラと視線を送って来る。

なんだ此の女???

此のままではあらぬ誤解を産みそうなので話しかけてみる。

「失礼ながら亀王妃様、私になにかお話が」

途端に目を輝かせ勢いよく話し始める。

「御免なさいねー　ジロジロ見ちゃったりして。　実は聞きたい事があるの～貴方の侍女で黒髪でレイカって言う少女がいるって本当？」

小さな目をキラキラさせ此方を見て来る。

「はぁ……　確かに居りますが、それば何か」

「キャーー！　本当！　それじゃあお母さんの名前は？」

食いつくように聞いて来るの引いてしまう……王妃にしてはあまりに落ち着きが無く品性に欠ける。

「申し訳ありませんが、名前は聞いておりません」

それを聞き一気に落胆するが

「そっか、残念ね……　でも絶対その子のお母さんは私の世界の人間だと思うのよ。レイカって名前は私の世界の名前だし黒い髪も絶対母親は日本人よ。まさか私以外に異世界トリップした日本人がいたなんて嬉しい！　是非会いたいんだけどお願いしていいかしら」

「はぁ……」

なんだこの女！　異世界トリップ？？　日本人？？？

「フォンフー　私も驚いたのだがミユキ様は異世界からいらっしゃったそうだ。ミユキ様の黒髪を見てレイカの事を話しら、いたく興味を持たれたのだよ」

レイカの母親と同じ世界の人間！！

以前、神仙がレイカには異界の血が流れていると話を聞いていたが今夜は驚く事ばかりで頭が混乱しそうだ

そうしている内にレイカを明日のお茶会に王妃に会わせる約束をさせられ、それ以降は何事も無く宴は無事終わり亀王夫妻は迎賓用の宮へ戻って行ったのだった。

取り残された俺は何時の間にか周りの女官や護衛兵達の姿も見えず此の広い空間に奴と二人きりになってしまっていた。一体これからどうなるんだろうかと徐々に恐怖が湧いてくる。

「フォンフー」

ゾックりと背筋が冷える。

奴の手が俺の腰を引き寄せて閉じ込められると自然と体が震えてしまうのを止められない

「震えているのかい……　まだ何もしないから安心おし。　明日には二ヵ国の国賓を迎え終えたら明後日に戴冠式で私も忙しく相手をしてやれない。だが戴冠式が終われば全てが手に入る…お前もこの世界も」

「世界……　！！　」

俺の口が奴の口に塞がれ何時ものように貪るように口付られ、不快感と快感を味わいながら奴が飽きるのを耐える。どうやら今夜は奴に抱かれずとも済みそうなので安堵するが、先程の世界を手に入れるという言葉……白虎国では無く世界

矢張り戴冠式で何かをしかけるつもりなのだろう。

口付から意識を逸らす為に色々考えていると奴の口が漸く離れる。

「気がそぞろだね……口付だけでは満足しないようだ……そう言えば精通はもう迎えたのかな」

そう言うと奴は俺の背後に廻り体を拘束する。

「以前はまだだったが、これだけ体が成長して未だと言う事はあるまい」

奴は首筋に顔を埋めそのまま舐めまわし吸いつきながら手を下半身に持って来る。

「何をする！！　止めろ！！」

「ふっふっふっふー　最後まではしないから大人しくしてれば優しくしよう…」

「嫌だ！　……くぅ……　あっ……　……うっ……」

はっきり言ってこれまで何度か夢精はあったが積極的にこう言う事をしたいとは思わず、自分でも淡白で男は勿論女にも欲望すら感じた事が無い。

こういう行為は慣れておらず、しかも他人の手

刺激されればあっという間に自分自身の欲望が暴れ始めどうしようもなくなるが、こいつの手で逝かされるのが許せない

一層の事こういう事に慣れているか、せめて女を抱いておけばよかったと後悔する。

間違っても男は御免だ

声を漏らさないよう必死に堪えるが百戦錬磨の奴の手管に敢え無く欲望を吐き出してしまう

「……うっ！　くっそ……」

悔しくて目の端に涙が滲むがそれ以上無様な姿を晒す訳にはいかず無表情を通す。

「ふっ…　ちゃんと大人に近づいて来たようだ。　快感を堪えるフォンフーの顔は本当に可愛いくてたまらない……」

最後にこめかみに口付され体の戒めを解かれるとその場に崩れ落ち座り込むが、自分自身が吐き出したもので服が汚れて濡れている為に寄り一層惨めさが襲う

「今夜は此処までにしておこう……戴冠式の後はこれ位で許しはしない。お前の全てを貰うよ」

そう言い捨て奴はその場を出て行き一人その場に残され、怒りに震えるしかない

「あいつ絶対に殺す！！」

昔からこの手の性的な事をされてはいたが、今よりずっと体も小さく精通も無い為に触られるぐらいだったので、逝かされる事がこうまで惨めとは……最後まで犯されたらとても正気でいられそうには無い。せめてもの救いは戴冠式までは手をだされない

「絶対に息の根を止めてやる……」

改めて俺は男だと自覚する。

男など犯す事は何とか許容範囲だが犯されるのだけは絶対御免だ

犯られない為にもあいつの戴冠式をぶち壊しその正体を晒してこの世から葬ってやる事を心に誓うのだった。

『フォンフー　大丈夫??』

ギック！！

突然ハクの思念が頭に響き、こいつの存在を思い出すと鼻の上にチョコンと乗っていた。

見られた……奴との行為を全て見られた事は間違いない

「／／／　お前、今の事をレイカに言うなよーー　少しでも漏らしたらロウに食わせるからな！」

『　ロウ　優シイ　ハク　食ベナイ　』

「俺の命令なら食うぞ」

『　ハク　言ワナイ　ロウ　可哀想…　』

何が可哀想だ！　俺の方が余程可哀想だ

こいつは猿だ！　見られたのは猿だから恥ずかしくない！！

考えるな……深く考える海の底に沈みたくなりそうだった。

そもそもこいつが付いてくるのが悪い！　……何しに付いて来たんだ？

一人が少し心寂しくて付いて来るのを許した訳では決して無い

何らかの意図があると思い付いて来させたのだ

「……お前は何しに来たんだ」

『　ドウナッテイルカ　見極メタカッタ　』

「ふーん　それで奴はどうなっている。俺には以前より性質が悪くなっただけに見えたが」

『　今ハ　皇子ノ悪イ心　ノ　影ノ底ニ　隠レテイル　』

「隠れて気配を消して王達に悟らせないようにしているのか……」

そこで人の気配を感じ話を止めると女官が声を掛けて来る。

「湯浴みと着替えの御用意が出来ましたが、如何致しましょう」

確かに此のままの服でレイカ達の所には戻れない

「案内しろ」

これ以上奴が俺に何かを仕掛けないだろうと考え、一刻も早く体を綺麗にしたかったので女官に付いて行くのだった。

偽王と皇子（後書き）

玄武国の二人を無理やり？登場、させてみましたがその分話が多くなってしまい墓穴を掘ってる感じ……サッサと進めたいけど絡ませたいので書いてしまいました。
目標では８月中に終わらせる予定

その夜フォンフー様は案外早く戻られて来た。

「お帰りなさいませフォンフー様」

インフー様が出迎えると何時にも無く殊勝な顔をして労る言葉を言う。

「インフーか…　お前には何時も苦労ばかりかけてすまない……」

流石に私もインフー様も驚き思わず口が滑る。

「どうしたんですフォンフー様!!　何か変な物でも食べたんですか!」

ドッカ!

「痛い!　蹴るなんて酷い」

「煩い、俺の言葉を素直に受け取れ!　」

数年の付き合いだけれど素直と言う言葉がこれ程似合わない人間はいないと思うのだけれど、それに反しインフー様は心配そうにフォ

ンフー様に尋ねる。

「フォンフー様に気を遣って頂き有難うございます。それより本当に何があったのですか」

フォンフー様はかなり疲れた様子で視線も私達に合わそうとはしない。

「色々有りすぎたが順に話そう。結論を言えばやはり奴は戴冠式で何かをしようとしている」

フォンフー様は一人掛けの椅子にドカリと座るとハクが何時の間に元の大きさに戻り私の胸に飛び込んできたので抱きとめると何故かうろたえるフォンフー様

やっぱり変???

「第三皇子様は矢張り邪神に操られているのでしょうか?このような無謀な事をするお方には見えませんでしたが」

「俺には奴の意志で動いているよう見えたが、どうなんだハク」

『　皇子ハ気付イテイナイ　自分ノ中ノ　邪神ニ　』

「つまり第三皇子様は邪神に乗っ取られていないの」

私は良く分からないのでハクに聞く

『　マダ違ウ　皇子ノ自我ガ勝ッテイルケド　ワザト　邪神ハ狡猾　」

「ところで兄上はどお思われますか」

長椅子に横たわり無反応な第二皇子様を訝しげに見ながら尋ねる。

「俺が知るか……、兎に角戴冠式を待つしかないだろ……」

ぐったりとダルそうな第三皇子を不思議そうに見るフォンフー様は私を横目に見ながら聞いてくる。

「お前　何をしたんだ」

「だってー　インフー様にベタベタするからチョッと神力を奪っただけよ」

だって嫌がっているインフー様に抱きついたり触りまくるなんて許せない！

優しいインフー様ににつけ込んでスケベ親父丸だし

絶対私に見せつけて挑発しているとしか思えないんだもん

「今直ぐ戻せ！　此処は敵地だぞ、自分から戦力を落してどうする！」

ヒステリックに叫ぶフォンフー様に言われ仕方なく神力を返す事にするけど、隷従の血の宝石を取り込んでいるのにどうしてこう俺様なんだろ

第二皇子様の胸に手を当て神力を注ぎ込むが今一加減が分らないの

で適当に入れて見ると見る見る第二皇子様の顔色が良くなって行き、突然立ち上がったかと思うと私の襟首を持って猫のように吊るす。

「全くなんて恐ろしいお嬢ちゃんだ、一歩間違えば俺は殺されていたぞ」

私を顔に持って行き睨みつけて来るが負けじと睨む。

「離して！　このスケベ親父、　フォンフー様　私を助けて」

「スケベ親父…」

私がそう命じるとフォンフー様が素早く動き神力の風の刃を第二皇子に放つ、だが第二皇子は易々とその力を消し去るが私への注意を逸らした隙を狙いフォンフー様が私を旋風のようにその腕から奪還し横抱きにした。

普段なら私を助けるなんてあり得ないので隷従の力の所為だろう！

チョッと癖になるかも

「フォン、どういう心算だ」

「知りません！　今俺はこいつに隷属してるから仕方ないんです！」

「チッ　なんて性質の悪い。　インフーこんな化け物止めておけ」

第二皇子様が残酷に私を評する。

化け物！！

胸が一瞬ギュウッと絞られるような気がした。

そしてあまりの言葉にフォンフー様にしがみ付いてしまう

「レイカにそのような酷い言葉を投げつけないで下さい！貴方様でも許しません」

珍しく声を荒げて第二皇子様を睨んで食ってかかるので第二皇子様は不貞腐れたようにそっぽを向いてしまう。

や～い　インフー様に嫌われてしまえ

「兄上、これでもレイカはまだ十二年しか生きていない本当の子供なんですから」

しかもフォンフー様まで私を庇ってくれるので本当に何か悪い物を食べたのかとジロジロみると衣装が着て行った物と違う

「あれ？　フォンフー様服が違う」

何気なく言った途端に抱えている両手を万歳するように上に揚げてしまったせいで下に落ちてしまう私

ドッスン！

「キャッ　痛い！」

お尻を打ってしまう

これをされるのは二度目の様な気がする…もう二度とフォンフー様に横抱きされないようにしなければ

「なんで落すんですか!?　服が違うって言っただけなのにーー」

恨めしく睨むと何故か顔を赤らめて激しく動揺し始める。

「煩い！　そんな事気にするな…それより明日お前は亀王夫妻のお茶に招待された」

「何故私が？」

「王妃がお前に会いたいそうだ」

「私に？」

「王妃はどうやらお前の母親と同じ世界から来たらしいぞ。俺も驚いたが確かに王妃の髪と瞳は黒かった」

私の母様と同じ世界??

どういう事だろう??

「母様と同じ世界ってどういう意味だすか」

「言ってなかったか？　神仙がお前の事を異界の血が混じっていると言っていた。つまりこの世界ではない別にある異世界からお前の母親は流れ着いたようだぞ」

「えっえーーーー　そんなの初耳です!!」

そんな大事な話聞いた事がないので驚くばかり、どうして私は自分自身の事をこんなに知らないの…あまりの秘密の多さに何も教えてくれなかった母様を恨んでしまいそう

「兎に角そう言う事だ。お前のお陰で怪しまれる事無く亀王に接触できる」」

フォンフー様は私の混乱をよそに嬉しそう

「なにが兎に角よ！　そんな大事な事教えてください」

「すまなかった。忘れていただけだ許せ」

私の血の所為か直ぐに謝ってくれるけど素直なフォンフー様は異和感有りすぎ

「私も知りませんでした…　本当にレイカは凄い少女なんですね」

私に手を差し伸べて立たせてくれるその顔は何時も通り優しげだ

「インフー様も私が化け物だと思う」

「いいえ　レイカはレイカでしょ」

「有難う　インフー様」

甘えるように抱きつくと優しく受け止めてくれる。そして横目で第二皇子様を見れば忌々しそうに私を見ているが気にしない

もしインフー様が龍族か人間ならば私は間違いなくこの人を選ぶのに

でも　なんとなく感じてしまう、種族の違う神族は似て非なる存在

決して交わらない

きっとインフー様も感じてるのかもしれない…

しかも、こんな異質な私をありのままに受け入れてくれる優しい人

やっぱり大好きだ

これからインフー様以上の男性が見つけられるだろうかと思いながらも今はインフー様の優しさに甘えるのだった。

インフーにべた付くレイカにそれを物欲しそうに見ている兄

笑える

だが呑気に三角関係を楽しんでいる訳にもいかず聞かなければならない事がある。

「兄上にお聞きしたい事があるんですが宜しいですか」

「なんだ…」

不機嫌な様子を隠さず憮然と答える。

「私の母親であるカンチェンフーが後宮に連れて来た侍女で秘密裏に消された噂を知りませんか」

奴と俺の両親の間になにがあったか知りたかったのだ

「さあな…　お前の母親が入内した頃は殆ど王都暮らしで金を取りに帰るぐらいだった」

どうやら幽霊皇子と言うだけあって王宮には居なかったのかと納得する。

「今から五十二年ぐら前、俺が産まれる前位に第三皇子に変わった動きや噂はなかったですか」

駄目もとで聞いてみると矢張り知らないらしく首を振るが以外にもインフーが口を開く

「そう言えば…　その頃に私の姉が王宮で女官を務めていたのですが第三皇子様がカンチェンフー様に懸想　していると母親と噂話に花を咲かせていたのを思い出しました」

「もっと詳しく話せ」

「詳しくは覚えてませんが　何でもカンチェンフー様の侍女を度々

呼び出しては付文を渡していたとか…　道ならぬ恋だと…　!!
もしやその侍女と言うのが!?」

インフーも察したようだ

「多分俺の父親だろう」

「何の話だ?」

事情を知らない兄に掻い摘んで俺の出生に秘密を話すが別段驚いた様子はない、後宮ではこの手のドロドロとした関係は珍しくもないのだろう、俺と血の繋がりが無くとも興味も無い様子だ

「本当にイェンが侍女に化けた間男に懸想していたのか?　カンチェンフー様じゃなく」

「証拠と言ってはなんですが、第三皇子は俺の母親を既に亡きものにしている」

「「「　!!　」」」

「それに俺は父親にそっくりだと言う話、だからこそ奴が俺に執着する理由になるのでわ…」

「あのイェンが人間にね……　正に以外過ぎる。　何故ならイェンは隠していたが人間など触るのも汚らわしいという思考の虎族だったはず、一体何があったのか興味深い」

兄は面白そうに言うと

「フォンフー様は母君を亡くされたのですよ…　そのような興味本

位な言い方は止して下さい」

情けない声を出す兄

「インフー…　」

マジ　笑えるが兄の機嫌を損ねる訳にもいかない

「俺は気にしてない…　流石に最初に聞かされた時はショックだったが元より縁の薄い親子関係だった。　それに母の仇は討たせて貰う」

「フォンフー様…」

インフーが翳りのある顔で物言いたげだ、会った時から物腰の優しい男で虎族の男に珍しい手合いだった。こいつだからこそ側にいる事を許し幾ばくかの情を覚えれたのかもしれない

そもそも此処まで俺に付いてくる義理も無いのだ

俺に苦労ばかりさせられても付いて来るのだからお人好しとしか言いようがない

「俺は大丈夫だ。　それよりお前は此処で降りてもいいんだぞ」

「確かに私では何のお役に立てないかもしれませんが最後までフォンフー様に付いて行きます」

静かに自分の確固たる意志を伝える。

「バカな奴　力を得るためお前の体を差し出すような主だぞ」

「私がお仕えすると決めたお方です」

何とも真摯な答え。他の者が言えば空々しく聞こえるがインフーは本心から言っているのだろう

適わない

肉親には恵まれなかったが従者には恵まれたようだ。

「そうか…　有難うインフー　これからも頼む」

インフーには少し素直になれるから不思議だ

「やっぱりフォンフー様が可笑しい！　早く寝た方がいいかもしれません」

その場をぶち壊すようなレイカの言葉

「お前という奴は…　もう寝る！」

この女に繊細さを求めるのは無理なようだ

インフーもレイカなど厄介な女など諦めて正解だが、次に来たのが第二皇子という面倒な男、しかも俺が焚きつけた面があるので少々罪悪感を感じてしまう

何時もなら感じないのだが母の死で少し感傷的になっているのかもしれない

こういう時は寝るに限る。

明日からはもっと大変な運命を決する日々が始まるだろから

嫉妬

この俺が嫉妬するなど産まれて初めてだ

否…イェンが産まれてから俺は常に嫉妬していた。

母に期待される素晴らしい息子として溺愛されていたイェンに

茶色い髪に緑の目を持つ俺は生まれた時から母に見向きもされず無視され続けていたが幼心にそれが普通だと思っていたが、イェンが生まれその赤子を愛おしそうに抱きしめる姿を盗み見た時その赤子イェンに激しい憎しみが生まれた

何度イェンを殺そうと思ったか……だが弟を殺すなど出来ようはずがない

そして俺は母の愛を得る事を早々に諦め自らの心から母を斬り捨てる事で自分の心を偽った。

そして俺は寂しさから逃れるため王宮を抜け出し街で自分の容姿を使い人間の振りをして遊び回り人間と交わり寂しさを紛らわした。

しかしそんな俺をイェンは憎み出し嫌がらせをされるようになる。

最初は何故だか理解出来なかったが、どうやら俺の神力が高い所為だと判明

「お前など死んでしまえ、そんな人間の様な色で私の兄などと許さない！　お前など虎族なものか。　俺より神力が高いはずがない」

まだ成人前のイェンは俺に攻撃を仕掛けながら本気で俺を殺そうとしていたが簡単にかわす俺を憎々しげに睨んで来る。

すっかり俺の存在など忘れ去られたと思っていたがそうでは無かったらしく、変な話だが俺は少し嬉しかった。イェンは俺の力に嫉妬していた……本来は俺の方が妬み嫉妬する立場なのに。しかも俺を殺そうとする弟が可愛いと感じてしまったのは内緒だ

それ以来イェンに狙われるのが俺の密かな楽しみになってしまった危ない俺

そして色んな人間から妬まれ嫉妬されても嫉妬をする事など無縁の俺だったが

こんな少女にみっともなく嫉妬をしてしまう自身が少しく情けない

しかも弟にまで（本当は違ったようだが公的に弟だろう）

インフーが優しい眼差しを向ける全ての者に嫉妬してしてしまいレイカについ暴言や乱暴な扱いをしてしまう俺

その所為で益々インフーに嫌われてしまっている

だがあのレイカも悪いはずだ。見せつけるようにインフーに甘える少女！！　絶対俺を挑発し牽制する態度に腹が立つ。しかもなんだあの力は化け物以外の何だと言うんだろうか

しかし奪われた神力を返された時は驚かされる。あまりに高濃度な力が満たされ以前より神力が増したようにすら感じた。

しかも異界の血を引くという　いわくだらけの少女

サッサと龍族になって青龍国に帰ればいいのだ。

今回のイェンの問題が片付けば青龍国の丞相に押し付けてしまおう

その為にも可愛い弟のイェンには死んで貰うしかないのだが致し方ない

自分の力に溺れ邪神などにつけ込まれるから悪いのだ

レイカがいなくなればインフーも俺を見てくれるはず。

体の相性もバッチリだから落とす自信は十分ある。

あの優しい眼差しが全て俺の物するのが楽しみだ

その為にもここは大人になって醜い嫉妬は隠さねば

後数日の我慢だと自分自身に言い聞かせるのだった。

亀王国夫妻のお茶会

「きゃー　貴女がレイカちゃん！！　凄い美少女」

突然抱きつかれたのは母様と同じ黒い髪に黒い瞳のお姉さんだった。

翌日の午前中の御茶の時間に招待され私とフォンフー様とお付きの者としてインフー様と侍女に化けた第二皇子様を連れ通された部屋に入った途端に抱きつかれたので驚かされる。

「よく顔を見せて。美形は見馴れたけどここまでの美少女となると感動物よ！　正に国宝級」

顔を上に向かせられ繁々と見られて呆気にとられるが亀王妃様の黒い瞳を見て母様を思い出してしまう。しかも顔の造りが母様に似通っていたのでより一層懐かしさが込み上げてしまい涙が零れてしまう。

「っどうしたの！！　私が不躾すぎたかしら??」

亀王妃様はギョッとして慌てふためくので急いで否定する。

「違います…　王妃様が母様に似ていたので驚いてしまい申し訳ありません」

「エッ！　レイカちゃんのお母さんに似てるなんてとんでもない！」

否定しながらも少し嬉しそうに言う王妃様

「顔と言うより黒い瞳と髪や顔の造りの様な物が似てます」

すると途端に落ち込んだように声の調子が下がる。

「そうよね……同じ日本人だから　私がこんな美少女の母親に似てる訳ないよ…」

かなり喜怒哀楽がはっきりしており正直な人柄が伺える。

「すみません。お気に触りましたか」

「大丈夫、この世界は美形が多すぎるから平凡な私には辛い現実が多々あって慣れてるの」

なんだかよく分からないけど失礼があってはいけないので取敢えず謝る。

「申し訳ありません」

「レイカちゃんが謝る必要ないわよ…それよりお客様を何時までも立たせているのは失礼ね。　さあ座ってゆっくり話しましょう」

王妃様に手を取られお茶席が設えられたテーブルに促されるとそこには亀王様らしき壮絶な美貌の金髪碧眼の男性が椅子に座っている。

「これが私の旦那様で亀王チョン…　よ」

チョン？？？？　微妙に誤魔化し私に王様を紹介する王妃様

「レイカと申します亀王様、今日はお茶会にお招きに預かり有難うございます」

「うむ。　今日はミユキの話相手になってくれればよいので畏まらなくてもよいぞ」

素っ気なく言うが思わずその長い髪に目が行ってしまう……何でこんなに長いの？

「そうそう、私は堅苦しいのは嫌いだから普通に話して。　レイカちゃんは此処に座ってフォンフー君はそこね」

王妃様自ら椅子を引いてくれるので驚いてしまい、あまりに型破りな王妃様にただ驚くばかりだけどニコニコと楽しそうなのでお礼を言って座る。

「王妃様有難うございます」

「王妃様ってがらじゃあ無いから非公式の時はミユキって呼んで」

「ミユキ様……」

「それでＯＫよ。フォンフー君もそう呼んでね」

「はぁ……」

王妃様の気さくさにフォンフー様も呆気に取られていた。

それからお菓子とお茶が運ばれて来て会話を楽しむが主に母様の話で、まさか龍王の娘と言う訳にもいかないので人買いに攫われた設定で説明した。

「レイカちゃんのお母さんの名前はアオイさんて言うのね…日本人の名前だしレイカもそうよ」

そう言われれば自分の名前の響きが可笑しいのに気付く

小さい頃からそう呼ばれ回りの人も別に何も言わなかった。

「確かにレイカとは変な名前だが本人の容姿かこれだから気にならなかった」

フォンフー様も今さらながらに言うけど容姿がこれとはどういう事！

「私にしたらここの世界の人達の名前が変で覚えにくいわよ。でもアオイさんにお会いしたかったけど離れ離れで行方が分からないんじゃ無理ね。　ねっチョンマゲ、レイカちゃんのお母さんを捜しましょ」

チョンマゲ？？？亀王様の名前にしては変

しかも母様を捜し出そうとしてくれるミユキ様だけど嘘を言っているので申し訳なくなってしまう

「無理だミユキ、王がそう理由も無く他国で自由に行動できない」

「そうなの、アオイさん会いたかったのに……きっとアオイさんも

レイカちゃんがいなくて寂しがってるはず」

「他国だ仕方あるまい…」

「でもここでレイカちゃんに会えるなんて運命を感じる！　戴冠式が終わったら内密でお母さんを一緒に探し出しましょ」

そう言いながらうっとりと私を見詰める手を握られる。そしてミユキ様の背後で亀王様が睨んでくる。

壮絶に綺麗だからその怖さは倍増で鬼気迫り恐い！！

何か悪い事でもしたの私？？？

もしかして嘘がばれている！！

うろたえ始める私の代わりにフォンフー様が助け船を出してくれる。

「ミユキ様　レイカの母親は私共でも捜しておりますでご心配無く。もし見つかればご連絡いたしますのでお気遣いは無用です」

「そうね…　他国の事に色々首を突っ込んじゃ不味いわよね。　でもアオイさんが見つかったら絶対に教えてね」

「はい分かっております。ミユキ様に真っ先にお知らせいたします」

フォンフー様は何時もの猫を被った状態で返事をするが何故かミユキ様は立ち上がりフォンフー様の背後に回るとおもむろにフォンフー様の両頬を引っ張り伸ばす。

ビヨ〜ン

「！！　なっ…　にゅ…お　しゅ……」

思いもしない暴挙に唖然とする私達

「若いだけあって弾力があるわ。一体君は何を隠してるのかなお姉さんを騙そうなんて百年早いわよ…　レイカちゃんは嘘をつけないようだけど君はかなり強かね。　全くこの国の人間は胡散臭い腹黒ばかりで気分が悪いわ。特にあの虎王は戴けないのよ成人君主のように振る舞っているけど腹では私達の事を絶対にバカにしてるのを感じる」

にこやかな顔をしながらも口調は怒っている。

「チョンマゲもこの王宮を取り巻く空気は異常だって言ってるし、そもそも天帝は私の世界にいるのにあの男が王になれるなんて可笑しな話。しかも君はあの虎王の弟なんでしょう一体何を企んでるのかしら？　しかもこんなに可愛いレイカちゃんに嘘を尽かすなんてお仕置きよ」

さすがのフォンフー様も王妃様の手を振り払う訳にもいかず成すがまま……面白い顔で笑いたいのを我慢

こんなフォンフー様の顔は二度と見れないだろうから心に焼き付けておこう

でも何時までもほおっておく訳にもいかないので助けないと後が怖い

「ミユキ様お止め下さい。　確かにフォンフー様は捻くれて意地悪だけど悪いお方じゃありません」

「あら　そうなの」

ミユキ様はあっさりと手を放して亀王様の横の席に戻り、フォンフー様は両頬を擦りながらも無表情だが心の中ではミユキ様を罵倒しているに違いない

「確かに母様の所在が分からないのは嘘なんですけど色々複雑な理由があるんです」

「話せない？　訳有りなら私は力が無いけどチョンマゲは一応王様だし頼りになるわよ。それとも一層の事私の国にいらっしゃい！この国は胡散臭いしフォンフー君も腹黒そうだし…私のとこなら可愛い女の子が一杯いるから楽しいわよ！」

目をキラキラさせ私を誘って来るミユキ様

地味な印象と違いとても明るく良く喋るお方のようで母様とは全く違う

そして以外にも亀王様が酷く止めに入る。

「駄目だ！　代わりに余が女になるからこれ以上後宮の女を増やさないでくれ～」

後宮？？

それって私が亀王様の側室になるって事？？

「え～　チョンマゲが…　レイカちゃんの方がいい　」

何故か亀王様が泣きつくようにミユキ様に縋りつく

「酷い　ミユキ　絶対余の方が美しいではないか」

「まっ！　その発言はレイカちゃんに失礼でしょ。女性を差し置いて美しいなんてレイカちゃんに謝りなさい」

あろうことかミユキ様が亀王様を叱りだすと項垂れるように私に謝る亀王様

「すまない…」

「いいえ、畏れ多いのでお止め下さい……」

亀王様に謝れてしまい私は居たたまれずどうしていいか分からない助けを求めるべくフォンフー様を見るが放心状態でインフー様達も同様でただ一人側で侍女さんがクスクス笑う

「ミユキ様　そのようにして皆さまがお困りです。陛下は一国の主ですので無暗に頭を下げては国の威信にかかわります」

「そっか。ゴメンねチョンマゲ、でもあんまり自分を綺麗だって言うのは痛いから止めて」

「分かったミユキ」

甘えるように亀王様はミユキ様に縋りつき、ミユキ様は亀王様の頭を撫でている。

何とも変わった夫婦で完全に亀王様はミユキ様の尻に轢かれている姿は情けなく、亀王様に頼っていいのか不安になて来るのだった。

何なんだこの王妃は!!

俺を腹黒扱いするとはなんて女だ

しかも破天荒にも程があるが亀王も情けない

王妃に頭を撫でられてデレデレする姿はとても王の姿と程遠い

こんな王に助力を乞うなど無駄な様な気がするのは気のせいだろうか

だが王妃の言葉によれば亀王は異変を察知し天帝の不在も知っている様なので話は早い、人格はどうであれ力はずば抜けているはず

「亀王様、ミユキ様　改めてお話しても宜しいでしょうか」

話しをするには疲れそうな相手だが選べる立場では無い

「許そう。　そなたの知っている事を話すがよいが偽りは余には通じないと心得よ」

亀王は王妃に対してと明らかに口調と態度を変えて来る。

どっちが本当の亀王なのだ

「事はこの四神国及び嶐山も巻き込む大事、虚偽など一切無い事をこの命に誓いましょう」

亀王は自分の席に戻るがそのまま王妃を自分の膝に座らせ抱き込む。王妃の方も慣れているようで恥ずかしいそぶりも見せずその膝に納まっていた。

どうにも理解しがたい二人だ。

「それで虎王…否　偽王は何を企んでいる」

「恐らく三神国の王を支配し嶐山を攻める心算のようです」

その言葉を聞いた途端　鼻で笑う

「余を支配だとあのような若造がどれ程の力があると言うのだ」

奴を若造呼ばわり

亀王の神力は天帝に次ぐものだと聞いた事があるが本当だろうか？
確かに奴の神力と亀王との差は明らかに感じる。

「確かに我が兄の力は亀王様に遠く及ばないのは分かっておりますが　今兄には邪神が憑いております」

「邪神だと？」

「二年前、兄は天帝の不在をいい事に崑山の宝物殿を荒しそこで手に入れた神玉を体に取り込み巨大な神力を得たようです」

「神玉…　愚かなアレは天帝に狂わされた神々の神核だ。確かにアレを取り込んだのなら力を増すだろうがそれだけで崑山を攻めるなど笑止千万」

「ですが亀王様　一度崑山の神仙が接触したおり　その神仙は酷く邪神を恐れておりました。　その邪神が力を取り戻せば天帝しか抑えられないと」

「神仙が　あの者達が動くとは…　確かに只者ではないのだろが…よかろう余だけでは判断できぬので青龍国、鳳凰国とも話し合おう」

「宜しくお願いします」

ホッと一息つく

これで少しは肩の荷が下りた気分で心が軽くなったような気がした。

「ね…　チョンマゲ　これってヤッパリ天帝が原因？」

「元を質せばそうであろう…神玉など悪趣味な物を集める為に崋山に住む気に入った神を邪神に墜してその神核を取り出すと光を失わず闇に染まった神玉になるそうだ。天帝は神核の闇に染まり具合を楽しむという話…　以前、天帝に近い者に気お付けるよう忠告された」

「なに……それ…　天帝の方が邪神じゃないの。偽王を倒すより天帝をぶち殺した方がこの世界の為なんじゃないかと思うのは私だけ？」

「余もそうは思うが　如何せん天帝はこの世界を一瞬で破壊出来る程の力を有する。迂闊には手を出せぬ」

「つまりこの世界は狂神の機嫌一つで滅ばされてしまうのね……ある意味、私の世界の原子爆弾のスイッチを握っている狂人てっとこね。最悪」

原子爆弾？？

なにやら天帝の話をしているが聞いている方がゾッとしてしまう

「天帝の名前が出て来るだけで気分が悪いわ……話題を変えてお茶を楽しみましょう」

王妃がそういいと侍女によって新しいお茶に取りかえられ主に王妃が喋り倒す場になり、明日の戴冠式に備え色々話しておきたかったが亀王は無用と取ったのだろう。

確かに俺が動くよりは王達の方が確実に奴を討てるだろう

だがもしもの場合はレイカの力が必要かも知れない

全てが終わるまで気は抜けない

全ては明後日の戴冠式だと気を引き締めるのだった。

亀王国夫妻のお茶会（後書き）

亀王夫婦に興味がある人は玄武国物語「私と王様」を読んでみて下さい。

この二人を出すために確実に二話分は増えてしまい完結が遠のく…

八月中に終わるだろうか??

前夜祭

玄武国王夫妻の楽しいお茶会を終えてお昼を取ると夜会の為の支度をさせられる。衣装は私達の世話を取り仕切る女官が用意した物だった。

三国の国賓達を迎えての盛大な宴、何故か一介の侍女の私まで呼ばれてしまった。

どうやら玄武国王妃様のご希望らしい

もし青龍国の龍王が来ていたらとんでもない事態になってしまっただろう

青龍国は丞相様がいらっしゃるらしい

どんなお方かは知らない…龍族の事は誰も教えてはくれなかったから。思えば龍族の中で育ったような物なのに故意に教えてくれなかったのかも

私の父親が龍王だと気取られないように。

そう考えるとファン様はかなり高位の龍族で龍王様に近い存在だったんだと今さらながらに思う。なにしろファン様にしろ侍女さん達の見事な金の髪は只者ではない事を意味していた。

そう言えば亀王様も綺麗な金髪で青い瞳でファン様に似ているかもしれない

浮世離れしているとこまで似ているかも

ミユキ様も面白くて素敵な方で不思議な魅力がある女性、きっと亀王様もそんな所に惹かれたのだろう

「レイカ様　髪をどの様に致しましょうか」

今　私に付けられた侍女に支度を手伝って貰っている。

「お任せします」

「何かお手持ちの宝飾品は御座いますか」

そう言えば以前インフー様に買って頂いた珊瑚の飾りは何処に行ってしまったんだろう？

二年前は慌てて王都を離れたからそのままに置いて来てしまい、今回来て見れば屋敷が建て替えられてしまったので行方が分からなくなってしまっているのを漸く気が付く

初めてインフー様に買って貰った贈り物だったのに、後で謝らなければ

今回用意された衣装は水色で赤の珊瑚は合わないので真珠の耳飾りは持って来たのでそれを引き出しから取り出し、ついでに母様の髪留めも出す。これは母様の物で少し気が引けたけど一度だけ着けたい衝動に負けてしまう。

母様御免なさい一度だけだから！

「この髪止めと耳飾りでも大丈夫ですか」

「これは素晴らしい品ですね…特に髪飾りの真珠は滅多に無い大きさの粒を此処までふんだんに使った物など見た事が御座いません」

侍女はうっとりと髪飾りを見詰めてから、張りきったように私の髪を結い始める。

何時もは自分で両脇の髪を上でまとめてお団子にして髪留めで止め後はそのまま垂らしていたけど、侍女は複雑に髪を白いリボンと一緒に編み込んでいき見事に結い上げ後ろ髪は矢張り長く垂らされた。真珠の髪飾りは頭の中央にリボンと共に飾られる。

そして胸元には黒真珠のように輝く神核の首飾りをそのままに着けたる

そして薄っすらと化粧を施され鏡の前で変わって行く自分の顔は少し大人に近づいて来たように思えた。しかも今回用意された衣装は胸が開いており少し恥ずかしい

「こんな事を言ったら何ですが虎族のどの姫よりお美しいですわ、もしかしたら後宮に召されるかもしれませんよ」

後宮！　そんな所入りたくも無い

「私如きが、そんな滅相も無いです」

そもそも第三皇子様はフォンフー様しか目に入っておらず私なんか眼中にない

「それに虎王様には既に何人もお美しい寵妃様がいらしゃるのではありませんか」

「確かに三人の虎族の姫様を召してました…　いえ、それよりこれで終わりましたのでフォンフー様のお支度の様子を見て参ります」

そう言って誤魔化すように侍女は慌てるように去って行ったので気になってしまう

一体寵妃様達はどうなったの??

気になるが考えても仕方ないので鏡の前でもう一度、真珠の髪留めと耳飾りを眺める。母様の真珠の方が確かに粒が大きい

「流石に龍王様の贈り物だから最高級品なんだわきっと。でも母様はどうして寝台の下に隠してたのかしら」

耳飾りの方は嬉しそうに着けていたのに……

私が生まれていた事を隠していた母様達

実の娘である私を殺そうとした龍王

生まれた頃から私はとんでもない境遇に生まれついていたのを知りもしなかった。

「でも悪いのは絶対に龍王様よ！　全く王様になる人って碌な人が

いないんじゃないかしら…　ねーハク？」

ハクに同意を求めようと話しかけたが返事が無い

部屋の何処かに身を潜めていたはず

「ハク？　もう侍女さんは居ないよ。　出ておいで　」

出て来るよう呼びかけても来ないなんて初めてで心配になる。

「ハク！？」

きっと外に遊びに行ったのかも知れないと思い暫らく様子を見る事にした。

そこへインフー様が迎えに来てくれる。

「レイカ　支度が終わったと聞いたのですが入ってもいいですか」

「どうぞ」

扉か入って来たインフー様は目を見開いて私を見る。

「綺麗だ…、　今までの中で一番綺麗ですよ」

「有難うインフー様」

以前なら抱き寄せて優しく触れてくれるのに眩しそうに私を見るだけだった。

「私の送った耳飾りをしてくれたんですね」

「はい、でも以前に頂いた珊瑚の装飾品を此処に置いたままにしていたので御免なさい」

「そうでしたね、大丈夫何処かに保存してくれているでしょうから後で捜しておきます。それではフォンフー様が待ってますから行きましょう」

「はい」

インフー様は踵を返し着いて来るよう促してくれるが、以前なら手を取ってくれたのに

少しづつ距離を置かれて寂しくて切ない

嫌われた訳では無いのだろうけどインフー様の後姿をただ切なく見詰めるしか無かった。

フォンフー様の部屋に入ると白い衣装に包まれた皇子様が立っている。

見てくれ完璧な皇子様だけど中身は皇子様とは程遠い

そして入って来た私を見ると

「そうしていれば正に皇女のようだな。喋ればその美しさが半減するから夜会では口を閉じていろ」

誉めるなら気持ちよく誉めて欲しいが素直さをフォンフー様に求めるのは無理

「むっ　フォンフー様も化けの皮が剥がれないよう気お付けて下さいね」

「俺は完璧だ」

「大丈夫ですよ。お二人とも他の方々に引けなど取りません」

インフー様が私達の遣り取りをニコニコと眺めていたがもう一人居ないのに気が付いた。

「そう言えばあの人はどうしたんですか？」

「ああ…　その辺を散策でもしてるのではないか」

フォンフー様が素っ気なく答える。周りには二人の侍女が控えており滅多な事も言えないし建物の外には衛兵が警備で常に見張っている状態

第二皇子様は侍女の前では赤い髪に青い目をした虎族の若者に変身していた。

ハクを何処かに行ってしまったし案外第二皇子様と一緒なのかもしれない

「そう言えば各国の方はもういらっしゃったのでしょうか」

「多分もう来てるだろう。王は瞑道を使える者が殆どだから直接王宮に道を通して来るから来たとしても静かな物でこの離れた場所では分からん」

「いいなー　フォンフー様は使えないのですか？」

「今は無理だが成人の儀を迎え虎に転神すれば神力は一気に伸びれば使えるかもしれん。父王は瞑道が使えなかったらしいからな珍しい部類だろうが他の王は使えるはずだ」

小さい頃からファン様の力で日常的に瞑道を使っていたけど結構凄い力なんだと初めて知った…そう言えば第二皇子様も使っていたと言う事は凄い神力の持ち主と言う事

「今の虎王様は使えるんですか」

「……見た事は無いが多分使えるんじゃないのか」

確かに邪神を取り込んだ今の第三皇子様なら容易く使いこなすだろう

それから迎えが来るまで静かにお茶を飲みながら寛いでいる内に宮殿から近衛兵が向かえに来てしまう。これから始まる宴は盛大な物、なにしろ各国の王が一堂に会するなど王の戴冠式しかないので数百年に一度の大祭典と言ってもいい

そんな場に私なんかが行ってもいいのかと場違いを感じてしまう

それに今夜の夜会にはフォンフー様と私しか招待されていないので

インフー様はこの宮に残るのだけれど第二皇子様が一緒だと思うと気が気ではない

「なんだか行きたくない」

「俺だって代われるものならインフーに行って欲しいぐらいだ」

「それぱかりは代われません。諦めて行ってらっしゃいませ」

「くっそ！　こんな皇子など言う立場を捨ててしまいたい」

「さあレイカもこんな華やかな宴は滅多にありませんから楽しんで来て下さい」

インフー様が一緒がいいと言いたかったけどその言葉を飲み込む…優しそうに微笑みながらもその目には諦めのような影を感じた。

「はい、インフー様　それよりハクの姿が見えないので帰って来たらお願いします」

「ええ、分かりました。安心していってらしゃい」

そう見送られ四人の近衛兵に取り囲まれながインフー様の元を後にした。

私達は広い庭を抜け長い通路を歩き続けるが常に近衛兵がまるで逃

亡するのを警戒するように気が張っているのを感じる。そしてこっれから盛大な夜会が行われると言うのに王宮は静かで夕暮れも相まって不気味さが漂っていた。しかも王宮に近ずくに連れ黒い気の様なものがより強まり不快感を通りぬけて苦痛にすら感じ始めるがフォンフー様は感じていない様だった。

「フォンフー様　とても静かですね」

「そうだな、確かに妙だ」

その内大広間に続く扉の前に着くと守衛兵が扉を開けると同時に大勢の人が集まっているのが伺えるが何故か皆沈黙しており呼吸音すら感じない程静まり返りかえており私達の歩く音が響いているだけしかも正面台座に設けられた王と国賓を迎える為の席に座る人物の放つ気にゾクリとする。そこには真っ黒な人の影の様な物が座っている。

何アレ？？？？　恐い！！！！

中央に敷かれた豪華な絨毯が主賓席まで道のように敷かれておりその上を歩きながらも立ち止まってこの場から立ち去りたかったが近衛兵に追い立てられるように後ろから歩かれれば前を進まざるを得なかった。

そして第三皇子の前にフォン様と共に立たせられる。

「陛下、王弟殿下フォンフー様をお連れ致しました」

静寂の空間に近衛兵の声が響き渡る。

フォンフー様が跪き私も見習う

「フォンフー　今宵は存分に楽しむがいい。　間もなく各国の王達も来場されるだろ暫し待つがいい」

「はい陛下」

簡単に声を掛けられそのまま兄弟である第四皇子、第七皇子が並ぶ席に案内され、私もその席に並んで座らされる。久々に見る皇子様達は変わりない様子だったが私達には目もくれずただジッと座り美しいだけに人形のようだ

そして立ちながら待つ虎族の臣下達もまるで人形に微動だにせず立っており大広間には黒い気で満ちており　まるで黒い霧の中にいる様な錯覚してしまう

一層の事、この場で倒れてインフー様の所に戻りたくなってしまう。

そして王達の来場を告げる声が場内に響き渡る

「玄武国王夫妻様、鳳凰国王様、青龍国丞相様が御出でになりまーす」

すると途端に急に黒い気が引き始めまるで黒い霧が第三皇子に吸い取られるように消えてしまい目の前が明るくなり一気に太陽が昇ったかのようだった。

何が起こったのかとドギマギしながら第三皇子を盗み見れば以前秀麗な姿に戻っていたが、身に纏う雰囲気がどこか凍てついた冷気の

ようで見る者を鋭く切りつけるようだ

そして水を打ったような静かさが嘘のように人々のざわめきや息遣いが戻り、止まっていた時間が動き出したかのよう

一体何が起こっているのか理解できない、フォンフー様も狐につままれたような表情

そして宮廷楽師達の演奏が始まると同時に扉が開かれ王達が共のを連れて華麗に入場して人々からどよめきが起こる。

その場は正に美の祭典

先ずは玄武国王夫妻が並んで入って来たのだが長い金の髪も然ることながらその金のド派手な衣装に身を包んだ亀王は正に光り輝いているようだが一方王妃のミユキ様は黒い髪の付け毛をしているようで亀王同様長い髪を引きずり、桃色に金の花をあしらった可愛らしい衣装で何故か顔を扇で隠していた。

そして後ろから箱を抱えた四人の従者が次々と第三皇子様の前に跪き、次々と蓋が開けられると美しい宝石や金、布などが入っている。

「新虎王よ　これらはこ度の戴冠への祝いの品　どうか納めて欲しい」

「このような素晴らしい祝いの品を有難うございます。今夜はささやかな宴ながらお楽しみください」

次に現れたのが鳳凰国王、深紅の燃える様な髪に瞳も紅玉のように赤く彫の深い美丈夫でその鍛え上げられた体にピッタリとした黒い

上着にズボンを穿いており所々銀糸に縁飾りがされており黒いマントをに身を包み颯爽と入って来る様は王とゆうより軍を率いる将軍のようだ。そして玄武国同様挨拶と祝いの品を贈る。

最期が青龍国の丞相、私の国の人だと思わずじっくり眺めてしまう。その人も矢張りと言おうか凄く綺麗な人で、水色の髪はまるで流れる清流のように美しく青い目は深い泉のように神秘的で繊細な美しさでまるで氷の彫像のようだが不思議と冷たさは感じず清廉な空気を纏っている。

綺麗な人

美しさで言えば亀王様が一番美しいと思うが何故だか酷く目を惹き視線が逸らせない

そしてもう一人何故か見た事がある人物が目の前を通る。

その人物は違う意味で目立っている。その理由はその場でただ一人茶色の髪に緑の目を持つ人間だったからだ。

アレ？　なんだかこの人知っている様な気がする。

人間の男はこの場で臆することなく堂々としており精悍な目の若者

青龍国の人間の知り合いなんて貧民街の学問所しか無くその中でよく知っている顔と青年の顔を比べハッとしてしまう

テジャ？？？？

あのいじめっ子のテジャの顔が人間の青年の顔と重なる。

そう言えば官吏試験に一番で合格して丞相府に入るのだと豪語していたのを思い出し、どうやらテジャは自分の夢を叶えたようだ

凄いテジャ！！

直ぐさま声をかけたい衝動にかられるが今は無理なので後で声を掛けようとワクワクしてしまう。もしかするとサンおじちゃまの近況が聞けるかも知れないと思うと居ても立ってもいられない

そんな時鋭い視線を感じその方向を見ると青龍国の丞相様が私を射抜くように見ており一瞬視線が合うと直ぐさま視線を外し用意された自分の席に着く。テジャ達従者はその後ろに立ち控えていた。

なんか一瞬睨まれたのは気のせい

私の黒髪に驚いたのだろうか？

でもミユキ様も黒髪だし……私の美しさに見とれたと言う好意的な目でも無かった。

もしかして嫌われたのかも知れないと軽いショックを受ける。

そう思うと何故だか気分が落ち込んでいる内に第三皇子が立ち上がり挨拶をする。

「今宵は私の為に各国から王と丞相を迎え心から謝意を顕わしこの宴開きました。どうかごゆるりとお楽しみ下されば幸いです」

そして控えていた給仕の侍女たちによって一斉にお酒の入った盃が

全員に配り始める。。

「どうか皆さま盃を取って掲げて下さい。これは玄武国王妃様の国の風習で祝いの席で杯を挙げ乾杯と言う合図と共に唱和し酒を飲み干して祝福するそうです。それに倣い乾杯をしたいと思います」

すると会場の全ての人々が盃を捧げると虎王が涼やかな声を張り上げる。

「四神国の繁栄を祝し　乾杯　」

そして大広間に轟くように乾杯の唱和が続く

「「「

異国での再会

盛大な宴が繰り広げられる中私はテジャを捜そうとするが次々と話しかけられたり踊りに誘われるなど取り囲まれ身動きが出来ない。フォンフー様は王に呼ばれ王達の席に侍らされており動けない。

仕方なく踊りの相手をしながら広間を見渡しているとテジャがテラスに出るのを見つけるが、踊っている最中。

「申し訳ありませんが疲れたのでお放し下さい」

「曲が終わるまでは放しませんよ」

相手は虎族、人間の私は強くは出れないのであの手を使う使う

ゆっくりと相手の神力を奪う

「どうしたんだ……　体が……」

虎族の男は踊りを止め立ち止まる。

「まー大変　あちらに行って休みましょう」

テラスの方に男を誘導して壁にある椅子に座らせてからもう一度神

力を動けなくなるまで奪うと虎族の男は椅子に座ったまま動かなくなるのを見てから辺りを見渡すと私に注意している者がいないのを確認してテジャの後を追う為にテラスに出る。

コッソリとテラスを抜け出すとそこには人影も無く衛兵も見当たらなかった。

「テジャは確かにこっちに来たのに？」

バルコニーの手すりから身を乗り出して下を見ると数人の衛兵が立っており急いで身を戻し、もう一度広いテラスを見渡すと木の上に人影を見つける。

その木の側に駆け寄り声を掛けてみる。

「こんばんわ　貴方は青龍国の人でしょう」

すると人影は私の方を見降ろす。

「そうだが……貴女は何方ですか」

男の声は低く子供のテジャの声とは全く違う。

「私はレイカと申します。貴方のお名前は」

「！！」

男は私の声を聞くと木から飛び降り私の目の前に立つと明かりの方に私の顔を向けさせる。

「本当にレイカだ……！？」

男は唖然として私を見つめるとそう呟いた。

「テジャ！　やっぱりテジャだったのね！！」

私は嬉しさのあまりテジャの首に飛び付くとすっかり大人になってしまって首に抱きついた所為でぶら下がってしまっている。

「大きくなったのねテジャ」

「お前は相変わらず警戒心が無いな」

「へっ？」

感動の再会なのに不機嫌そうな顔をしてテジャは私の腰に手を掛けて下に降ろす。

「青龍国の人間のはずのお前が何故この国に居るんだ？　…奴隷として売られたか？」

奴隷！？

相変わらずシビアな見方をする。

「違うわ、今は第八皇子様の侍女をしているの。それよりテジャ凄い出世をしたのね！丞相様の御供なんて」

「まあな…当然の結果だ」

ニヤリと笑う顔は悪役のようでとても丞相府に務める若き官吏官には見えない

「それより俺をこんな所まで追って来るとは…俺を誘ってるのか」

「誘う？？？」

テジャは私の腰を抱き寄せると顎に手を掛けて来るとテジャの顔がそのまま迫って来る。
口付をされると思い慌ててテジャの体を押しのけようとするがビックともしない

「止めてテジャ！」

思いっきり睨みつけるとテジャは案外あっさりと放してくれる。

「無暗に男に近ずくからだ。ガキの頃から言ったろ…お前は警戒心が無さ過ぎる。しかもその容姿、神族すら魅了させるんじゃないのか、学問所に現れなくなったと思えば案の定人攫いにあって売られたんだろうが、人の忠告を聞かないからだ。　母親は如何した…一緒に売られたのか？」

まるで父親が駄目な子供に説教をするかのよう…テジャの中では私は売られたと決めつけられている？

「売られたんじゃないわ」

「では何故白虎国に居る？」

本当に父親に問い詰められている様な気分で誤魔化しても直ぐ見破られそうなので正直に言う。

「……父様に捨てられた」

「何……」

「テジャの言う事を無視して父様がやって来る夜にコッソリ家に戻ったの…そしたら見つかってしまって…殺されそうになって…気が付いたら妖獣の森に捨てられていて…それから第八皇子様に助けられて侍女にして貰ったの」

途切れ途切れに説明をし終えるとテジャは私の耳を摘む。

ムギュ～

「むぐぅ……」

「俺は言ったはずだ詮索するなと、この耳は飾りものか！」

「ひぃ～ん　ゴメンなさい……」

私の様な綺麗な女の子にぞんざいな扱いをするのはフォンフー様とテジャぐらいだ

「ま…　してしまった物はしょうが無い。　このまま白虎国で暮ら

すのか」

「何れ帰る心算だけど今はまだ帰れない。　それよりサン先生の事が聞きたかったの！どうしてるか知らない！」

「サン先生か、最後に会ったのは官吏の試験に合格した時に挨拶に行った時だがお元気そうだったぞ。だがお前が学問所から消えた時は一月ぐらい学問所を休まれて復帰したての頃はかなり元気が無かった。俺も気になってお前の消息を尋ねたら急に泣き出してアレには困った」

サンおじちゃま……やっぱり酷く心配させてしまったんだ

御免なさい、私が父様に会おうと思わなければこんな事にならなかったのに

すると母様やファン様、サンおじちゃまの顔が次々思い出されて目から涙が零れとうとう泣いてしまう

「ううっーー　うえぇ…ん　うっうう～～　母様に会いたい……」

呆れながらもテジャは私を軽く抱きしめて子供をあやすように背中を撫でてくれる。

昔は意地悪だったのに

「テジャ…　ヒック　優しくなったね…　ヒック　」

「全くお前は…　俺も何時までもガキじゃない。それに綺麗な女に泣きつかれれば男として慰めるだろ」

ギック！

思わず身を固くする。

「安心しろ、お前の様な面倒な女を襲う心算は無い」

「むぅ～　何よそれ」

「お前自分が普通だと思っているのか？　その容姿に金の瞳　しかも他国に捨てられて運良く皇子に拾われた上にこの高位の虎族しか出席できない夜会で俺と会うなどどれだけ幸運なのだ。お前に付き合っていると確実に俺の運が吸い取られる気がするぞ」

「私ほど不幸な少女はいないと思うんだけど…」

「そんな綺麗な衣装を着て何処が不幸だ」

相変わらずテジャに適わないの悔しい

それから少しお互いの当り障りのない近況を話して過ごす。

「ソロソロ戻った方が良いんじゃないのか」

「うん…　そうだけど戻りたくないかも…　男の人が一杯寄って来るんだもん」

「贅沢な女だ。皇子の側に居ればいいだろ」

「皇子様は虎王様が放さないから近寄れない…そうだ！　テジャが

一緒に居て」

「まっぴら御免だ。お前といては虎族の男共に睨まれて恨まれそうだ。人間の俺はさっき以上に居ずらくなるだろ」

やっぱりと言おうか神族ばかりの宴ではテジャは肩身が狭いのだろう

「テジャも苦労してるんだね……」

「当然だ」

そこへテジャを呼びに青龍国の御供の人が来る。

「テジャ、ユンロン様が戻るようにとのご指示だ」

「分かりました。今戻ります。どうやら息抜きはお終いのようだ……」

テジャはそう返事をして広間に戻ろうとするが振り返る。

「レイカも中に戻れ、こんな所に居たら襲おてくれと言っているのと同じで中の方が安全だ」

そう言われ頷いてテジャの後に続いて広間に戻るのだった。

広間に入ると話す者、ダンスを楽しんだり酒を飲む人々で賑わっており、王達の席に目をやるとフォンフー様が見当たらず会場を見まわしていると背後から肩に手を掛けられる。
「きゃっ！」
「何がきゃっだ、一体どこに行っていたんだ」
「フォンフー様　良かった…」
「ミユキ様がお呼びだ、ついて来い」
「まさかあの席に行けと！！」
「国賓の希望は最大限叶えるしかなかろう」
問答無用でフォンフー様に連れられて王達の貴賓席に連れていかれてしまう
その席は正に美が溢れており眩いばかり
その中である意味ミユキ様が一番目立っていた。
私が近ずくと一斉に皆の視線が私を見やり思わずフォンフー様の背後に隠れるが
「レイカちゃん！　良く来たわ、待っていたのよ～」
ミユキ様が立ち上がり私をフォンフー様の背後から引きずり出して抱きついて来る。

ミユキ様止めて下さいと叫びたかったがグっと我慢する。

「キャ～　レイカちゃん素敵！　此処に座って一緒に話しましょう」

王達と同席なんてとんでもない！！

「ほー　これが亀王妃が話していた少女か確かに美しい。どうだ我が後宮に入らぬか、黒い髪の側室はまだおらぬのでな」

後宮！！　しかも理由が黒髪なんて本気とは思えない

そんなとんでもない事を言ったのは鳳凰国の朱雀王で値踏みするように私をみる

「朱雀王！　目を付けたのは私が先です。レイカちゃんは我が国の後宮に入って貰うんですから」

「ええっ！！」

そう言って私を更にきつく抱きしめるとミユキ様からはお酒の匂いがプンプン臭っており、かなり酔っているのが伺える。

「ミユキ…　少々飲みすぎたのでは？　先に戻って休むがよい。レイカ済まぬがミユキを部屋まで送ってくれぬか」

有り難い提案に直ぐに飛びつく

「はい亀王様、喜んで」

「レイカだけでは心許ないので私も付いて参ります」

フォンフー様もそれに便乗するようだ

「頼もう」

「フォンフー　ミユキ様をお贈りしたら直ぐに戻って来なさい」

しかし虎王がそう易々フォンフー様を手放すが筈がない

「分かりました陛下」

フォンフー様は嫌そうな顔一つせず唯々諾々と言う。

そして私とフォンフー様でミユキ様を支えるようにその場を立ち去ろうと青龍国の丞相様の横を通ろうとした時つい好奇心で視線をそちらに向ける。

「！！」

見なければ良かったと後悔する。

何故なら青龍国の丞相様は私を冷たい眼差しで見ており恐かった。

もしかして私が龍王の娘だと気付いたの？？！！

相手は龍王に近い人間で私の存在を聞いていたのかも

ドキドキしながら通り過ぎそのまま広間を抜け出し近衛兵を二名を付き従えて亀王の泊る宮殿へ急ぐのだったが、先程の丞相様の眼差

しが忘れられない

あの目を思い出すだけで心が切りつけられるような痛みを感じるのだった。

ミユキ様の部屋に着くと流石に近衛兵は立ち去って行き、扉を侍女が開け迎え入れてくれる。

「お疲れ様ですミユキ様　フォンフー様もレイカ様もどうぞお入りください」

「ただいまウー　疲れたよ～　お茶入れて」

ミユキ様は侍女に抱きつくが侍女の方は慣れているようでミユキ様を支えながら椅子に座らす。

「お二人もどうぞ御座りください。今お茶を淹れて参りますので」

侍女に促され二人一緒に席に着くとミユキ様が私を見る。

「どうしたのレイカちゃん？　浮かない顔をしてるけどさっきの朱雀王の事なら心配ないのよ。私があんな男追い払ってあげるから」

「いえ…　その事では無く……」

「何か気になるの？　何でもお姉さんに相談していいのよ」

「はい…実は青龍国の丞相様が私を睨んでいたのが気になってしまって」

「お前の気のせいでは無いか、丞相様は穏やかな方のようにお見受けしたが」

「チッチッチ　分かっていないわねフォンフー君。　ああいう一見して優しげで聖女のように振る舞っているけど腹の底は冷酷で無駄な物はすべて切り捨てる完全主義者よ絶対。丞相の仮面は君の被っている猫とは年季が違う。でも理由も無くレイカちゃんを睨むタイプにも見えないし、人間嫌いなら側近に人間を連れて来ないだろうし、女嫌い？？　以前会った事は？」

「ありません…　しかも二度も睨まれ初めは勘違いかと思ったんですけど」

「レイカちゃんのように国宝級の美少女を睨む男なんて信じらんないわね。　向こうから接触して来ない限り静観したら？　自分から近づかない方が無難よ見かけたら逃げるに限るわ、何かの勘違いで逆恨みって事もあるから」

「はい」

「ああ～でも今夜は眼福だったわ～　でも美形は見馴れていた心算だけど王様クラスとなる本当に凄まじいわね。青龍国の王様も見てみたかったけど残念…話では四神国一の賢王なんでしょ、でもそう言うのって本性を暴きたくならない？」

「「　……　」」

私とフォンフー様は首を横に振るしか無かった。

父様の本性……

世間一般に言われている龍王様と私が知っている龍王様は全然違う

子供の私を躊躇いも無く切り殺そうとした残酷な人

伴侶である母様を結界に閉じ込めている自分勝手な神なのだ。

でも何で母様は父様を好きなんだろう？

そんな事を考えているとフォンフー様がミユキ様に尋ねる。

「それよりミユキ様、各国との話はどうなっているのでしょう」

「それはもう済んでるから大丈夫。鳳凰国王と青龍国丞相の使節団達が此方に来る前に瞑道で待ち伏せをしてチョンマゲが事情を話したから。やはり各国も今回の戴冠式は胡散臭いと感じてたみたいよ」

ミユキ様の言葉を聞いて珍しく心底ホッとしたように表情を緩める。

「それならば安心です」

「ところでフォンフー君！」

「何でしょう……」

ミユキ様は標的をフォンフー様に狙いを定めるように見詰め

「ズバリお兄さんとはどういう関係！？」

「！！」

「他の兄弟は席に呼びもしない癖にフォンフー君は側から放そうとせず甘～い眼差しで見詰めちゃって溺愛ぶりをヒシヒシ感じちゃった。もしかして禁断の愛!?　生ＢＬ!!　しかも絶対鬼畜攻めの強気受け　滅多にない好カードだわ!　なんて美味しいの～　」

なんとなく意味は分かるけど知らない言葉が多々ある。異世界の言葉なんだろうか?

「なっなんだこの女は……」

フォンフー様も地が出てしまいミユキ様を睨むが一向に気にしないミユキ様は尚も言い続ける。

「お願いフォンフー君。もう犯っちゃってるのかどうか教えて…それが気になってお姉さん今晩寝れ……」

ドッス!

ガックン

突然ミユキ様が衝撃を受け顔をテーブルに突っ伏してしまい背後には侍女が立っていた。

「申し訳ありません。ミユキ様はお酒が過ぎますとお口のたがが外れるようで…ご無礼をお許しください」

侍女は優雅に頭を下げるのをただ驚愕の目で見るしかない。

侍女が王妃を気絶させるなんてあり得ない

普通であれば親族共々死罪を言い渡されても可笑しくない

「ミユキ様は大丈夫ですか」

「何時もの事なのでお気にせず。それよりお茶を持って参りましたのでごゆっくりして行ってください」

侍女はミユキ様を軽々と抱き上げて別室へと移動して行き、代わりに他の侍女がお茶を出してくれたのを有り難く戴いてからその場を辞した。

何だかとんでもない国

それからフォンフー様に送って貰いインフー様の待つ屋敷に戻るがフォンフー様は宮殿へと戻って行くのかと思えばそのまま居るらしい。

「いいんですか？　戻らなくて」

「誰が戻るか、明日には全てが決するのに今さら奴の機嫌を取る必要などなかろう」

確かにその通りで明日、第三皇子様はどうなってしまうんだろう

他国の王達相手では適うはずがなく滅んでしまうだろうが言い知れぬ不安が心から拭えないのだった。

迷走する少女

フォンフー様の宮に戻るとインフー様が迎え入れてくれるが第二皇子様がその背後に張り付いているように立っているのが気に食わないがハクが見当たらない。

「ハクは戻りませんでしたか」

「それが捜してみたのですが何処へ行ったのか見当たらず、トルチェンフー様も見かけなかったそうです」

「そうですか……」

ハクがこんなに側を離れて居るなんて初めての事で不安が益々募る。

「崋山の神仙共が動き出したのかもしれん」

「ハクが神仙の言いなりになってるの」

「分からんがその可能性は高い」

ハクが何か危ない目に遭っていないか心配で捜しに出ようとするがフォンフー様に止められる。

「こんな夜更けに危険だ。それに神仙が動き出したのならば益々奴が追い込まれている事になる。ハクは放っておけ」

「でも……」

「フォンフー様の言う通りです。夜は危険なので明日の朝にでも私と捜しましょう」

「はいインフー様」

もしかすると朝には戻って来るかも知れないと自分に言い聞かせてその場は納得した。

「それより明日はいよいよ奴の運命が決まる日、各国の王も動き神仙も動いているようだがまだ油断は出来ない。何より不気味なのは宮中の虎族どもだ、まるで奴の操り人形のように動いている気がする。第四皇子が俺の顔を見ても睨みも嫌みも言わないなどあり得ん…　一体どんな手を使ってくるのか」

「俺も闇夜に紛れ王宮中を見て回って来たが兵舎が倍近く増やされ中には兵士がぎっしり詰まっていたぞ。本気で戦を考えているようだな。それと後宮に居る父王に会ってきた。ご無事だったが様子が尋常では無かったな」

「どのようなご様子ですか」

「まるで神核を抜かれ人形のように動かなく寝ていた。だ俺が呼び掛けても目を虚ろに開けてるだけ…　後宮は特に黒い気が満ちて側室や侍女達も精気が無かった。そして実際俺も後宮に留まっていると徐々気分が悪くなりまるで神力を吸い取られてるよな気がしたの

で早々に後にした」

「奴はレイカと同じだと言う事ですか！？」

「少し違う気もするが王達も父王のようにならなければ良いが」

軽そうな第二皇子も珍しく慎重そうに言う。四神国の王の中でも神力が弱い虎王とはいえ王を腑抜けにしてしまう力には空恐ろしい物を感じたようだ。

そして話し合った結果インフー様も第二皇子様も私の血を入れた宝石を体に取り込む事にした。私の血にどれ程の効果が期待できるのかは自分自身疑問

大丈夫なのかな？

明日に備えて各自の部屋で寝る事にした。屋敷全体は既に黒い気を取り去りインフー様が軽い結界を張っているのだった。

寝台に横になるが中々寝つけずハクの事や明日の事を思うと寝つけずにいた。しかも時折思い出すのは青龍国の丞相様の私を睨む顔を思い出し溜息が出る。

何故こんなに気になるのか自分でも分からなかった。

「ハクが居ないと寝れない…」

不安な時でもハクの温もりを感じて何時の間にか寝る事が出来たのに寝台を抜け出し普段着に着替えて窓から抜け出しハクを捜す事にする。インフー様は朝まで待つように言われたけどハクが酷い目に遭っている様な気がしていても立ってもいられなかったのだ。

窓の鍵を開け外を伺うと衛兵はおらず抜け出せそう。

王宮の中なのだから滅多な目には遭わないだろうという甘い考えがあった。テジャが知れば確実に説教されただろうがこの時の私にはハクの事しか頭に無かった。

王宮の方に向かいハクがいないか庭園を歩きまわるが居るのは時々警護に回る衛兵ばかりで本宮殿に近づく程に衛兵の数が増えて行くので仕方なく諦める事にする。もし相手が虎族ならば神力を奪い逃げれるが人間相手ではその手は効かない。

だけど諦めきれず引き返しながらもハクを呼びながら捜す内に迷子になってしまった事に気が付く

何故なら辿り着いたのが見た事のない建物でしかも数人の衛兵に守られて厳重に警護されており亀王様の滞在されている建物と同じくらいな厳重さ

もしかすると鳳凰国か青龍国が滞在しているのかもしれな。見つかれば唯では済まないので急いでその場を離れ早くフォンフー様の宮

を捜そうと急ぎ足で離れるのだが、益々此処がどこか分からない。

「どうしよ…　なんでこんなに広いのよー　このままじゃ朝になっちゃう」

いい加減疲れて来たので休憩する場所は無いかと彷徨っていると大きな池の側に出た。そして月の灯りに照らし出された東屋を見付けホッとする。

「あそこなら一晩明かせそう。日が昇れば方向が分かるから戻れるはず」

フォンフー様達が気が付かない内に戻らないと怒られてしまう

東屋には椅子もテーブルも用意されており早速椅子に座りホッとするが心細い

「ハク…　何処に行っちゃたのよ…」

今まで色んな目に遭って来たけどハクが何時も側に居て助けていてくれたので一人がこんなに心細いなんて思いもよらなかった。

ハクを捜すのに夢中だったけど辺りは暗く月明かりだけの庭をよく歩き回っていた物だと今さらながらに感心する。しかも風の音一つしない静寂が辺りを包んでおり恐くなって来るのは致し方ない

「ふえ～ん　私ってどうしてこうなんだろう」

小さい頃から猪突猛進と言おうか考えるより先に体が動いてしまう所為で厄介な目に遭っている。泣きたくなるが我慢をし椅子に凭れ

ながら少しでも寝ようと目を瞑ったのだが、誰かが私の髪を手に取るのを感じたような気がして目を開ける。

すると目の前に人影が立っていた。

「エッ!?」

まさか幽霊!?

影は私の髪を掴んだまま私をジーッと見詰めており恐ろしさのあまり身動きが出来ずガタガタと震えてしまう。

助けて…

「貴女は誰です?」

幽霊が話しかけて来るが恐ろしくて声が出ない。

「誰だと聞いてるのです!!」

「ヒィッ!」

苛立つように声を張り上げるのにビクッり体が動くのをそのまま逃れるため椅子を飛び降り東屋を飛び出して逃げ出すが男は直ぐに前に回り込み前に立ちはだかると月明かりの下男の姿が顕わになる。

「あっ!!」

「逃がしませんよ」

冷たい声が耳に響く

月の光に照らしだされた幽霊だと思った男は水色の美しい髪を煌めかされ青い冷え冷えとした氷の目が私を見降ろしていた。

青龍国の丞相様

何故この人が目の前に居るの??!!

「乱暴な事はしません。只教えて欲しい事があるだけ…あの真珠の髪飾りを何処で手に入れたのですか」

「……真珠　？」

真珠の髪飾りの事を何故知りたがっているのか訳が分からなかった。

「あの真珠の髪飾りを返しなさい！　アレは私が大事なお方に贈った物だ。何処で手に入れたのです！」

まるで私がその人から盗んだかのように問い詰めるように聞く

「あれは母様の物です。盗ってません！」

私も思わず丞相様を睨んで反論する。

幾ら青龍国の丞相様でも証拠も無く私を盗人扱いするなんて許せない。

「母親!?　まさかあのお方の…　確かに同じ黒髪…　否、有り得

ない……」

丞相様は信じられないように呟きながらも私の手を取りネジあげる

「いっ痛い……」

「返してください。アレは私があの方に贈った大事な物……　あの方以外身に付けるなど認めない！」

あの方と言った時の丞相様の顔は切なげで愛する人の事だと分かるが一転して私を見る目はまるで私の存在を許さない様な冷たい目

父様と同じだこの人は

あの夜に戸の隙間から見た初めて見た父親の顔は母様を愛おしげに見る優しい眼差し

だけど私を見た時の父様の目は私の存在を否定した冷酷な眼差し

丞相様は同じ黒髪と言ったから、母様の事を言っている可能性は大きい

あの真珠の髪飾りは父様では無く丞相様からの贈り物だったのだ……だから母様は寝台の下に隠していたんだと納得する。

そしてこの人も母様を愛しているんだと理解した。

母様は愛され私は疎まれている……そう思うと深い悲しみが襲う

「酷い……　私は……　いけなかったの……　うっうっうーー」

目からは涙がハラハラとこぼれ落ちる。
私は生まれなかった方が良かったの母様
私は邪魔者？

「泣いたからと言って許しません。早く返せば酷い目に遭わずに済むのですよ」

丞相様は泣く私にもお構いなしに真珠の髪飾りに固執するが、今手元にあるはずも無く無理だと顔を被り振る。

「なんと強情な娘…」

どうやら丞相様は違う風に受け取ったようで更に私の手を捩じり上げ激痛が襲う

「痛い！！」

一層の事、丞相様から神力を奪いこの場から逃れようかと思うが何故だか躊躇ってしまう
何故？

その時助けが入る。

ひゅーーーーうーーんん

「キャァーー！！」

「くっ…」

だがそこへ一陣の風が起こり私と丞相様を引き離しそのまま誰かが私の体を受け止めてくれる。

「レイカ大丈夫ですか」

インフー様の声を聞き抱きとめた相手が誰か分かりホッと安心して抱きつく

「インフー様…怖かった…」

そのまま優しいインフー様の胸に泣き縋る。

「何が怖かっただ、このバカ女！」

どうやら風で私を助けてくれたのはフォンフー様のようだけどかなりご立腹のようだが私は悲しくて泣くしかない

フォンフー様も私よりもう一人の丞相様に向き直る。

「これは誰かと思えば青龍国の丞相様。私の侍女が何か粗相でも？」

「いえ…私の方が冷静さを失ってその侍女に無礼な事をしてしまった様です…」

さっきとは打って変わり声を抑えて話す。

「レイカが何か？」

「その侍女が宴でしていた真珠の髪飾り、アレは嘗て私が然るお方に贈った大事な品。　アレを返して頂きたかっただけなのですが拒否されてしまい取り乱した次第　申し訳ありません」

「あの髪飾りが！？　勘違いでは」

「あのような品が二つとありましょうか」

「確かに、しかしレイカが五歳の頃より母親の物として大事に持っていた物です」

「五歳」

「はい、レイカは今から七年前に人買いに攫われたの私が助け侍女として引き取った者。決して偽りを言うとは思えません」

「七年前…　七年前と言えば陛下が……　一体何が起こっているのだ……」

丞相様もうろたえ黙り込む。

「何やら曰くがあるようですがお互い混乱している様子。　夜分遅く明日の戴冠式も控えておりますので後日改めて話し合いましょう。宜しいでしょうか？」

「……最後に一つ聞いていいでしょうか」

「はい」

「その侍女の母親の名前は」

「……確か　アオイ…　だったな？」

フォンフー様が私に確認を取るように聞いて来るので頷くと丞相様が息を飲むのがインフー様の胸に顔をうずめていても分かった。

矢張り丞相様が真珠の首飾りを贈った相手は母様なのだと知ると胸が軋む

「それでは失礼させて頂きます」

フォンフー様は慇懃無礼に言葉を掛け踵を返し私を抱き上げるインフー様とその場から離れて行くが顔を上げ丞相様を見る気にはなれずインフー様の胸に顔を押し付けたままだった。そして少し離れた木々の間から第二皇子様が待ちかまえていた。

「全く人騒がせなお譲ちゃんだ…それに何時までインフーにくっついている心算だ」

私の襟元をひっぱりインフー様から引き離そうとするので必死にインフー様にしがみ付く

「お止め下さいトルチェンフー様。レイカは泣いてるのですよ」

「チッ」

忌々しそうに舌打ちをする、私に優しくしてくれるのはインフー様だけ

トルチェンフー様は瞑道を開けると次々に潜るのだった。

そして部屋に着くなりフォンフー様の説教が始まる。

「お前はどうしてそう無謀なんだ！　しかも明日の大事の前に厄介事を引き起こすなんて信じられない。インフーが結界を破ったのに気付いたからいい物をあのままだったら丞相に何をされていたか分からんぞ！　どうやらお前の母親と因縁がありそうだが青龍国はどうなっている??　龍王は自国の丞相でお前の母親を取り合っていたのか?」

フォンフー様の言葉に驚く

父様と丞相様が母様を取り合ってたから母様をあの結界の閉じ込めていたのだろうか???

「そんなの知らない！」

ずっとインフー様に抱きついたままの私はまた泣きはじめる。

父様なんか大っ嫌い

丞相様も嫌い

母様が妬ましく思う自分が嫌い

泣く私を優しく頭を撫ぜて慰めてくれるインフー様にただ甘えた。

そしてハクが戻らないまま夜が明けるのだった。

レイカが部屋から抜け出し外に出ていたのに気付いたが直ぐに追いかけれなかった。

何故なら私はトルチェンフー様に抱かれている最中で事情を話し体を解放して貰うのに手間取ったのだ。

「クソ！　あの譲ちゃんは俺の邪魔ばかりをしてくれる！」

急いで身支度をしているとトルチェンフー様が文句を言いながらも自分も服を着て捜すのを手伝ってくれるのだろう

「申し訳ありません。きっとハクを捜しに行ったのでしょう私が夜でも一緒に捜せば良かったのです」

「インフーはお譲ちゃんに甘過ぎる」

そう言うトルチェンフー様は私には甘い

私はトルチェンフー様を利用している…この人に抱かれる事でレイカの対する気持ちを抑え忘れる為にこの体を痛めつけているのだ

一種の自傷行為だ

男に抱かれる私などにレイカを愛する資格など無いのだと
多分そんな私の想いにトルチェンフー様は気付いているのに優しく抱いて気遣ってくれるのが申し訳ない
でもこの方が私に対する想いなど一時の物のはず、私など直ぐに飽きて興味を失くすだろうと思う……何しろトルチェンフー様は次期虎王と言ってもいい程の神力の持ち主
私の様なつまらぬ一介の大して美しくも無い虎族の男など
「インフー　フォンを起してサッサと行くぞ」
「有難うございますトルチェンフー様」
ありったけの感謝を込め言うと目を見張るトルチェンフー様
「チッ　後からきっちり返して貰うからな」
照れくさそうにそう言いフォンフー様の寝所に向かい、寝ぎたないフォンフー様を無理やり起こしてレイカを捜しに向かったので結構時間がかかり捜すのに手間取ってしまった。
そしてかなりの時間が経過した時だった。
「向こうから青龍国の丞相の神気を感じる…もしかするとレイカは其処かもしれん」

フォンフー様が突然呟き脱兎の如く駆けだして行き急いで後を追う
何故レイカと青龍国の丞相様がと訝しむが、実際に二人が一緒にいたので驚く
しかも只ならぬ雰囲気でレイカが泣いていた。
フォンフー様が風を起こしレイカを私に渡すと抱きとめる。
「レイカ大丈夫ですか」
急いで声を掛けると誰か分かりホッと安心して抱きついてきて泣き綴る愛しい少女
「インフー様…怖かった…」
諦めようとする心が挫けそうだ
か細い体を私に擦りつけ甘えてくるレイカを突き放すなど出来なかった
そしてレイカの母親の真珠の髪飾りが丞相様より贈られたものだと知り驚かされるが泣き続けるレイカに異和感を感じる。
何時も気丈な少女が丞相様に酷い仕打ちをされたからと言ってこうまで泣くだろうか
言い知れぬ不安が心を過ぎるが今は啼き続ける愛しい少女を慰めるのだった。

迷走する少女（後書き）

８月も後半に入ってしまったけどお話が進まない？？？
あの二人を出した所為だろうか……８月中に完結は無理なようなので、もう予定は書かないでおこうと思うのでした。ゴメンなさい～

皇子と皇女の決意

目が醒めると一人ぼっちで寝ており、広くて立派な部屋だけどとても寂しいくなる。

寂しいよ……

母様はどうしてるんだろう

私がいなくなっても父様に愛されて幸せに暮らしているのかな…

父様、それに丞相様に憎まれている私は帰れない

青龍国に戻らない方が母様は幸せ?

もし私が戻っても母様を困らせるだけなら?

嫌な考えしか思い浮かばない。

どうすればいいの

「ハクのバカ……　ハクだけがずっと側に居てくれたじゃない」

ハクが居ないから悪い

本当に何処に行ってしまったんだろう

「そうだわ……　くよくよしてるよりハクを捜そう！」

しかい昨夜のように無暗に飛び出しても皆に迷惑を掛けてしまうだけ

「一人で捜すとまたフォンフー様に怒られちゃうし…どうしよ…」

「何もするな…バカ女」

突然フォンフー様の不機嫌な声

ビック！

「！！」

心臓が止まるかと思う程驚いてしまう

声のする方を見れば長椅子に腰かけ眠そうな目をしたフォンフー様が座っていた。

「なっ何でフォンフー様が？　まさか此処で寝てらっしゃたんですか！」

目が半開きでかなり寝むそう

「ふわぁーー　仕方ないだろ…　お前をほっておくと何をしでかすか分からんからな」

昨夜はインフー様に抱き抱えられたまま移動して何時の間にか寝てしまったのだろう

「それならインフー様が良かった」

そう言った途端風が巻き上がり私を包み込む

びゅーーうううーーーーーーーーーん

「キャァー！」

風は直ぐに治まるけど髪はグチャグチャで服も着崩れてしまった

「何するんですか！！」

「お前は本当にバカだからだ。　少しは目が覚めたんじゃないか」

「どういう事ですか」

「インフーに甘えるな。以前も言ったろ！お前のやっている事は残酷でしか無い事を理解しろ…それとも人間としてインフーと添う心算があるなら別だ」

そしてフォンフー様は何時の間にか右手に私の神核の首飾りを手にしていた。

「何をするの！？」

「今此処で決めろ、既にこの神核はほぼ真珠化しているが完全じゃ

ない。だがこれが完全に神力で満たされた時お前は龍族として目覚めるだろう…　だが此処でこれを粉々に破壊したら人間のままでいられるぞ、　どうする？」

「そんな…」

「覚悟を決めろレイカ」

真剣な目で私を見詰め、本気だと分かってしまうが急にどうしたのだろう？

「どうして今なの」

「今しか選択肢はないからだ。　自分の意志で決めて自分の心に決着をつけるんだ」

「……」

矢張りフォンフー様は甘くない

私の弱い心を許してくれず選べと言いつつ既にそれしか道は無い

自分の心にけじめをつける為にもハッキリと言う

「龍核を返して下さい」

これで後を振り向く事は出来ない。

私の覚悟を聞き、フォンフー様は大事な龍核を投げつけ返してくれるのを慌てて受け取る。

「お前は龍族を選択した。　インフーに頼ってもいいが二度と甘えるな…」

「その違いが分かりませんけど…」

「取敢えず必要以上にひっつくな」

最近インフー様が私に触れなくなったのはそう言う事だったのかと知る。

私の我儘な行動がインフー様を苦しめてしまっていたんだ…

「はい、でもハクはどうしたらいいんですか」

「ハクも必ず戴冠式に現れるだろう、それよりお前はいざとなったら奴の神力を奪い取る為に俺と同じ席を用意しておいたから有り難く思え」

「それって…青龍国の丞相様の側なんじゃ…」

「心配いらん、三席程隣だ」

「近くじゃないでっすか……」

昨晩の冷たい眼差しが再び注がれるかと思うと辛かった。

「青龍国の丞相ともあろう者が公式の場でお前をどうこうしない。しかもお前が皇女だと分かった筈だからもっと違う対応に出て来るだろう」

「どういう風に？」

「皇女として迎え入れるか…それとも闇に葬るかだ」

脅すように言うので、あの日の父様を思い出す。

「父様のように私を殺すの…」

真っ青になる私を見て珍しく慰めるように言葉を掛ける。

「可能性を言ったまで、大丈夫だそうなったら全力で俺達がお前を守ろう」

「フォンフー様…」

初めて聞く優しい言葉に嬉しくて目の端に涙が浮かんだが

「その前に奴を片付けて貰おうか…期待してるぞ」

ポンと肩を叩かれニコやかに笑うのを見て感動は跡かたも無く消え去ってしまう

フォンフー様がこういうお方だと言うのは分かっていたけどもう少し私に優しくしてくれても良いんじゃないの！？

「私はフォンフー様にとってなんなんですか」

幾ら何でもこの扱いはないと思う

「大事な駒だ」

「酷い！！」

「嘘だから睨むな、お前は俺にとって戦友？みたいなものか」

「戦友…友達じゃないんですか？」

なんて物騒な例え

「俺とお前は似ている。親に恵まれず近親者に命を脅かされながら自分の居場所を求めて闘っている言わば同士か？」

何で疑問形なの、今一私を言いくるめようとしている気がするのは気のせいでしょうか

そして驚いたか事にフォンフー様がそのまま抱きしめて来る。

「エッ？！　／／／」

今まで叩かれたり蹴られたりしたけど抱きしめられたのは初めてで顔が赤らんでしまう

そして私を抱きしめたまま話し始めるフォンフー様

「俺は母親の愛情も知らず乳母が義務的に俺を育てる中、奴に会初めて会ったのは八歳のガキの頃だった…分かるか愛情に飢えたガキが兄と名乗る男に優しくされたら世界の全てが奴になり支配されるんだ。　俺は奴の本性に気が付かず奴が与える優しさを得る為に必死に努力ししがみ付いたんだ…そして奴も俺を特別に可愛がり始め

ると周囲の目も変わる。今まで後宮の陰でひっそり生きていた第八皇子など誰も気に掛けた無かったのに突然皆の目が俺に向けられそこから地獄だ。特に奴に心酔している第四皇子は俺の存在を許さずありとあらゆる嫌がらせを受け何度も死にそうな目に遭ったか…奴に知られないように傷だらけの自分を神力で癒す毎日だ。健気だろ？」

私は無言で頷き第三皇子様との過去を淡々と話しそれに耳を傾けるのだった。

レイカを抱きしめ俺は自分の過去を話し始める。

今まで誰にも話さなかった奴との過去

インフーにすら話していない俺の恥部でレイカに話すのが最初で最後だろう

これが俺のけじめだ

次期虎王と目される眉目秀麗な第三皇子に溺愛され俺は有頂天で周囲に者に妬まれ酷い事をされても只ひたすら耐える毎日だが兄に愛され辛いとは思わなかったガキの俺

だが奴は全て知っていた…俺が迫害されているのを陰ながら眺め見

ており、そして犬のように奴にすり寄る俺を楽しんでいたのだ

何も知らない俺が全てを知ったのは奴が俺を寝台に組み敷いた時、まだ十四歳ながら成長の早かった俺は人間で言えば八歳の体だった。兄とし慕っていた男が突然豹変したように冷酷にこう言った

『お前を愛する者は私だけでいい、他の者は皆お前を憎むよし向けたのは私だよ』

最初は奴の言葉信じれなかった。

『兄様！！　嘘でしょ！？』

『お前に手を出そうとする不埒者は始末して置いた。　全く油断も隙も無い侍女に見張らしておいて良かった…他の者の手垢がつく前に私が味見してあげよう』

不埒者と聞き昨日俺を襲った教育係の男の事を言っているのだろう

何を思ったか男は俺を机に組み敷き事に及ぼうとしたが侍女に取り押さえられ事無きを得たのだが誰にも知られず処理されたはず

つまり侍女は奴の手の者だったのだと知る。

奴は本当に全てを…王宮の者達に酷い扱いを受けていたのも知っていたのだ！

愕然とする俺を奴は容赦なく触ってくる。

味見とは良く言った物だ。確かに最後まではされなかったが嫌がる

俺を散々嬲り尽くされた

『ああ…私の可愛いフォンフー　もう二度と逃がさない。　成人の儀の暁には我が伴侶にしてあげよう。それまで純潔を散らすのは待てあげるよ』

傲慢にとんでもない事を言う奴

『どうして…　僕達は兄弟…』

白虎国では虎族のみ同性の婚姻が許されていたが親兄弟間では禁忌だ

『私は兄弟なんて一度も思ったことはない。実際にフォンフーとは血など繋がっていないお前は不義の子、父王の血など一滴も流れていないんだから気にする必要はない』

『……嘘だ！』

『不義の子だと誹られようと私だけはお前を見捨てない、私しかお前を愛する者など現れないだろう』

次々と知る真実に気が狂いそうだった。

絶望に打ちひしがれ、その時俺の心はは殺されたのだ

ズタズタにされながら体を引きずり後宮の母に詰め寄り全てが真実だと知り全てに裏切られた俺は誰も信じられなくなった

身の周りを世話する侍女も教育係も全て奴の息が掛かった人間

しかも奴は王宮の人々には品行方正な皇子を演じ俺には残酷な面しかみせなくなる。

『フォンフーにだけは本当の私を知って欲しい』

そう甘い言葉を吐きながらされている行為は残虐で他の奴達が生温く感じてしまう

奴は愛していると言いながら心身共に嬲る意味が分からずこのまま壊れてしまっていいのかと自問する

不条理だ

神族は強い者が上に立つ弱肉強食の世界

奴に食われるより強くなる事を選んだのだ。

今までの自分を捨て去り奴に反抗し逃げ回ったがそれさえも奴にとったら楽しい遊びでしかないのだ。

侍女の手引きで部屋にやって来る奴から逃げる為に夜の後宮を彷徨っていた時に父王と後宮でバッタリと出会ってしまう

『久しいのフォンフー息災であったか？　何やら困った事になっておるようじゃな』

今思えば護衛も付けない父王とタイミング良く会うなど可笑しな話

恐らく第三皇子の裏の顔と俺に対する所業を知っていていたのだろう

『陛下、私を皇子から廃嫡して下さいませ』

廃嫡になり王宮から出れば奴から逃げれると思った。

『そなたは第八皇子として産まれたのだからそれで良いじゃろ。そなたの母の立場もあるしの、第三皇子はワシからも釘をさしておくから我慢せよ。　代わりと言ってはなんだが欲しい物はないか』

皇子の身分とは枷でしか無いのか……欲しいのは自由だったが

せめて自分の部屋では寛ぎたい

俺を妬みながら奴に俺を見張り差し出す奴らの前で一時も休まる事など出来ない

『それならば奴の息の掛かっていない侍女と教育係をお願いします』

『よかろう…しかしあまりヤンチャをするでないぞ、あまり素行が悪いと王宮から出さねばならなくなるからの』

そう言って俺の頭をポンポンと撫で立ち去っていたのだった。

最期の言葉を聞き初めて感謝した。

父王とは公式の場でしか顔を合わさず優しい言葉も掛けて貰った事も無い。基本皇子達に無関心で後宮の側室達にばかりに構う女好きのどうしようも無い王だと思っていたが少しは話の分かるらしい

そしてやって来たのがインフーだった。

目尻が下がり気味の優しげな顔立ちをして見るから頼りなさそうな青年に心配になる

これでは奴に引き込まれてしまうのは目に見えていた。

だが今はそんな事はどうでもいい、これから問題を次々起こして王宮を去る予定だから

そして俺は以前から悪かった評判を更に貶める中、インフーは真面目に俺の勉強を教えようとしたり悪い事をする俺を諫めようと本気で怒るまともな奴で少しだけ信じれるが心を許すまでには至らない

何しろ奴と言う前例が俺を臆病にさせており、奴がインフーを懐柔して何時敵になるか分かったものではないのだ。

相変わらず奴は隙を見計らったように現れ俺を嬲り者にしたが上手く逃げれる回数も増えた。奴との攻防が何時の間にか神力の技を向上させていたのだから皮肉な事

そして奴がインフーに手を出さないのには訳があった。以外な事にインフーは正妃様の縁筋の虎族で奴でも迂闊に手を出せず、何度か接触は在ったようだがインフーの純粋さが奴の毒気を撥ね飛ばした様だ。虎族でありながら色欲の薄いインフーは稀な存在

確かに王の目は正しかった。

それとも正妃が後で何かしていたのかもしれない……何しろ第三皇子は我が子第一皇子の脅威でしかないのだから

「それから度々問題を起こす俺は田舎に追いやられインフーともそこで縁が切れると思ったが、何の得も無いのにバカなインフーは付いて来てくれた。それで漸く俺はインフーを頼り無い兄の様な存在として受け入れられた。田舎での暮らしで束の間の幸せを手に入れたがそれも何時まで続くか不安な時、現れたのがレイカお前だ」

「私が」

「そうだ、俺はお前の力を見た時これで奴を倒せると思ったからこそ神力を注ぎ続けた。お前も俺も力が必要でお互い利用し合うような関係と言ってもいいが、俺に力を貸してくれ……俺は奴が憎い！母も殺され奴は俺から全てを奪おうとしている」

「いいよフォンフー様、第三皇子様を野放しにしたら崋山と戦が始まったらきっと大勢の人が死ぬは…私の大好きな人達も」

「そうだ俺も大事な奴を失いたく無い、だからインフーをこれ以上巻き込まない心算だ」

インフーには悪いが力の弱くもしかすると命を失うかも知れない

「私もそうしたい」

レイカも神妙な顔で同意する。

「戴冠式が始まる前に兄上にインフーを眠らせ田舎に連れて行って貰うよう話した。もし王達が奴に落ちた時は俺が命を掛けて奴を止める……お前は奴の神力と神玉を奪え」

亀王は凄まじい力を持っているが油断は出来ない

「出来るかな」

「出来るかじゃない、やるんだ」

「はい……」

素直に頷くレイカ

十二歳の少女に重い責任を負わせているのは分かっているがこの少女しか居ないのだ

インフーの事は言えず自分の無力さを感じるしかなかったのだった。

フォンフー様の覚悟を聞き私も腹を括った。

「お前と俺は一蓮托生、この件が片付けば今度はお前の母親を助けよう…例え天帝や龍王を敵に回してもな」

フォンフー様の真摯な言葉を聞き胸が熱くなる。

「フォンフー様ありがとう」

ペッチン！

ところが突然腕を放して私の額を軽く打つ

「痛い！　何するんですか」

「礼を言うのは早い、闘いはこれからだ。めい一杯着飾れ、衣装は兄上に頼んでおいた」

「第二皇子様が！？」

それに何で着飾るの？？

何故か嫌な予感がするのは何故だろう

「行くぞレイカ」

フォンフー様に促されその衣装に着替えるべく別室に行くのだった。

皇子と皇女の決意（後書き）

八月で終わらすのを諦めた途端に間が空いってしまいました。少しスロー更新になるかもしれませんが、九月に入れば子供の学校が始まり時間が空くのでマイペースで更新予定

虎王の戴冠式　その1

フォンフー様と朝食をそこそこに詰め込んで侍女に引き渡され衣装を着せられる。

用意された衣装は真っ白の白虎国の王族だけが許された衣装

髪には純白の白い薔薇の花が飾られ、胸元には二重にした真珠の首飾りと龍核の首飾りを合わせ耳にはインフー様に貰った真珠の耳飾りをした。

侍女達も白い衣装に戸惑っている様子だがフォンフー様の指示に従い手際よく着せられ唇には真っ赤な紅が引かれる。

そして侍女達が溜息をつく

「まぁ…　本当にお美しいですわ」

「正に皇女様と言って過言ではありません」

「ありがとう御座います」

鏡に映る自分は確かに綺麗だと思うけどまだまだ子供

主に胸の辺りが寂しいしい

昨夜の衣装より更に胸が空いていて恥ずかし過ぎる…同年代の娘と比べても小さい

やっぱり、母様に似たのだろうか

カヤさんにはそれだけ綺麗なんだから一つくらい欠点がないとと慰め？られた。

絶対これは第二皇子様の嫌がらせだ！

支度が終わり侍女が出て行くと入れ替わるように白の正装をしたフォンフー様が現れた。

「迎えに来たぞ」

「フォンフー様この衣装はどういう事です！」

直ぐさま抗議するがフォンフー様は気にしない

「似合うじゃないか、流石に皇女として生まれた事はある」

「私は何故白を着せられたのか聞いたのです」

「仕方ないだろ、俺の横に並ぶからには白を着るしかない。一応俺の婚約者風を装って奴を挑発するにはもってこいだろ」

「はぁ？？？」

「下の者の女を奪うなどよくある話、そもそもインフーが婚約者な方が不自然だった」

「私が子供だから？」

確かに年齢的外見からするとフォンフー様の方が合っている。

「違う、お前が美しすぎる為に官位の無い容姿的にもインフーでは役不足だと思われていたんだ。お前は知らないだろうが二年前に王都から戻ってからお前宛の恋文がどっさり届いて中にはインフーを中傷する物もあった」

十歳の私に恋文！？

しかもインフー様を中傷するなんて少女趣味の変態のくせに許せない

「知りませんでした！　そんな手紙は私の手で破ってあげたのに…でも何故私宛の手紙の存在を私が知らないの？」

「インフーが勝手に処分していたのさ」

「インフー様が！」

あまりに意外な答えに面食らう

「お前が知らないだけでインフーはかなり嫉妬深い……それよりもう時間だ行くぞ」

「あの～インフー様に最後に会いたいんですけど」

朝食の時も先に食べたらしく顔を合わせないままで、このまま行く前に一目会っておきたかった。

「無理だ兄上も存外嫉妬深いようだ。インフーを既に眠らせ田舎の屋敷に向かった…文句なら戻って来た兄上に言え」

「そんな…」

本当に意地悪、お別れぐらい言いたかったのに…　私がしょんぼりしていると一応慰めるようにフォンフー様が言う。

「事が終われば幾らでも会える。　行くぞ」

「ちょっと待ってください」

私は鏡台に並んでいる宝石箱の中から大事な母様の真珠の髪飾りを取り出し衣装の裏に隠すよう留める。これできっと母様が守ってくれる様な気がした。丞相様に返した方が良いのかも知れないけど母様に何の断りも得ずに返すのは違う様な気がしたので止めておく

「返すのか？」

「いいえ、なんとなく持っていたくて」

もしこの事が終わり龍族として目覚めたなら青龍国に戻ろうと思った。

サンおじちゃまに会えば母様の居場所は分かるはずだし、ファン様

もきっと力になってくれ母様に会わして貰えるだろう

父様との決着はそれから

フォンフー様が手を差し出すその手を取る。

その前に第三皇子様と決着をつけるべくフォンフー様と共に戴冠式が行われる式場に向かうのだった。

戴冠式が行われるのは天帝を祀る霊廟の前で行われ、神祇長が式を行う。

虎族の婚礼は王しか執り行えないが他の祭礼式典は全て神祇府の神祇長が担い取り仕切り戴冠式は一世一代の大祭典で参列するのは重臣の虎族と各国の王のみ、式が終われば各州から集まった虎族や王都の人間が王宮の大広場に押し寄せ新しい王を祝う為に参列しており、戴冠式を終えた新王の宣言がなされ八日間の祝賀祭が行われるのだ。

既に王都は各州から集まった虎族や人間達によって賑わっており陽気な国民性も手伝い数日前からお祭り気分で華やいでいた。だがそれに反し王宮内は静謐な雰囲気で静まり返っていたが、流石に当日は大広場に詰めかける人々によって熱気でむせ返っている状態で警備の兵も大勢投入され王宮を取り巻いていた。

霊廟に行くまで各自禊のよう神祇官達に身を清める水を掛けられ順に式場に入って行くのだが前の三人先に青龍国の丞相様がおりドギマギしてしまうが私を一瞥する事もなく顔色があまり善くないように思えた。式は無言で行われる為に皆一言も話さず式場には続々と人々が集まる。

流石に天帝様の霊廟だけあって荘厳な造りでしかも清浄な空気で満たされていた。

不思議な事に王宮を取り巻く黒い気は綺麗に消え去っている。

各国の王様達も平然とした顔をしており黒い気の存在を認知しているのか分からない

第二皇子様は感じていたのだから王達も知っていても可笑しくないけど夜会同様王達の周辺には黒い気は無かったのかもしれない

だけどこの普通の状態が私には不気味に映る。

参列者は霊壇を前に左右に分かれており中央に王が通る道が設けられていたが私の席は各国の王達が並ぶ最前列！

しかも、あろう事か第四皇子、第七皇子は二列目の後方になっていて驚くが、二人の皇子は無表情に此方を気にする風も無い

ヒィェ……私達最前列！！　有り得ない！

私などあまりに場違いで慄いてしまう。

今さらこの場から立ち去る訳にもいかず、フォンフー様の側に居るしかなかった。

式が始まると霊壇の前に水色の祭祀服に身に包んだ神祇長が現れ、その手には黄金に輝く王冠があり厳かに霊壇に捧げ置いた。

すると神祇官達の楽師による演奏が静かに始まる。

「この度は我らが新虎王の戴冠式の為遠路はるばる御出で頂きました、玄武国王夫妻様、鳳凰国王様および青龍国丞相様に感謝を王に代わりお礼申し上げます。ただ今より新虎王の戴冠式を執り行いたいと思いますので臣下の皆さまは跪きお待ちを」

それを合図に最前列以外の者達が一斉に跪き、音楽がより壮大に奏でられた。

私も跪こうとしたがフォンフー様に止められる。

「新虎王様のご入場」

そして後方から新虎王となる第三皇子イェンファフーが白い装束に頭には床に引き摺る程長く青い地の縁に見事な金の刺繍で飾られた布を被り、堂々と単身で入場する姿は王の威厳に満ちていた。

しかし此処に参列する全ての者が偽王と分かっているのだから正に茶番でしか無い

各国の王達も静かに見守る中、式は滞りなく進み神祇長が神語で祝詞を捧げながら王に王冠を授け被せる。

「ここに新虎王が正式に誕生しました。　どうか皆さまにお言葉を」

頭上に燦然と輝く王冠を載せたイェンファフーが前に振り返ると視線を一瞬フォンフー様にやるが横に居る私を見て凄まじく睨みつけられるが直ぐさま顔を正面に向けて厳粛な顔で話し始めた。

絶対に勘違いして嫉妬で睨まれたのだ

フォンフー様のバカ！！

心でフォンフー様に毒づきながら無事に式が終わりそう

「今日此処に私イェンファフーが白虎国の王位に就いた事宣言します……」

このままでいいのだろうかと疑問に思っていると

『　待って！！　』

突然新虎王の言葉を遮るように霊壇から声がする。

『　その者は偽王、天帝様に反逆を企てる不届き者なり　』

そして霊壇から姿を現したのは一匹の白い霊獣

体長は成人女性程ある猿の姿で全身白銀の毛で覆われ赤い目をした美しい霊獣でしかも鎧を身に着け右手には剣を握って並みならぬ神気を放って周囲を威嚇する

ハク！！

何故そんな姿に変化してしまったのかは分からないが私にはそれがハクだと一目で分かった。

崋山の神仙に仕業に違いなかった。

「獣のくせに大層な口を聞く。私が王で無いなら天帝が何故出て来ない」

新虎王は面白げに聞き返すがその言葉を無視するかのように各国の王に向かう

『　吾は天帝様に仕える者　天帝に代わり他の王達に命ずる。その偽王を討ちなさい！！』

以前聞いた事のある神仙の居丈高な声が王達に命令するが動こうとする者はおらず、代わりに虎王が答える。

「そもそも崋山の神々が四神国に干渉するのは禁じられているはずでは？」

『　五月蝿い！　吾の言葉は天帝様のもの　』

ハクは凄まじい形相になり虎王にむかい剣を振りおろそうとするが虎王が手でなぎ払うかのようしただけなのにハクの体はこの葉ように吹き飛ばされて天帝を祀る霊壇にぶち当たる。

ドゥーーガーーーン！

「キャアーー　ハク！！」

私は思わずハクに駆け寄ろうと前に飛び出そうとするがフォンフー様に止められる。

「まだ動くな」

冷静な声に怒りが湧く

「だってハクが」

ハクは霊壇に打ちつけられるが全く衝撃を受けなかったように立ち上がる。

『　王達が動かぬならレイカよ吾に力を貸すがよい　』

ハクが私に呼び掛け虎王が私に視線が向けられフォンフー様が私を庇うように抱き込む。

「気でも狂ったか、人間の少女に助力を乞うなど崋山の神などたかが知れたな」

嘲るような虎王の言葉にハクは怒りを顕わにし一気に神力を高め剣に力を込めると白金に輝きはじめた剣を突きつけるように虎王に突進して行く。

『　己！！　吾を愚弄するとは！！　』

「お前如きが私を倒せると」

虎王は微動だにもせず態と両手を開き無防備に体を晒す

『　死ぬがよい！！　』

ガッキ――――――――――――ン

ハクは心臓目がけ剣を突き立てた瞬間眩いばかりの閃光が会場を包んだかと思うと直ぐに消えて現れた虎王とハクの姿に驚く

「嫌ーーーー　ハクーーー！！」

ハクの胸には己が剣が突き刺さっており虎王は無傷のまま返り血すら付いておらず不敵に笑いながらその剣を抜く

王達に助けを求めようとするが無表情に何故か何も言わず見守るだけで訳が分からない

王達は駄目！

ハクを助け様とするがフォンフー様が私を放さない

「フォンフー様離して！　ハクが死んじゃう」

「静かにしろ！」

泣きながら訴えるが聞いてくれず反対に虎王の注意を引いてしまう。

「先程から五月蝿い娘……しかもフォンフーに纏わりつくなど図々しい」

虎王は剣を手に此方に向かって来るが本性を徐々に現すように雰囲気が禍々しく変化させながら迫って来るのだが噴き出すように黒い気を纏い私には虎王が黒い影のように見えるのだった。

まさかこんな展開に成るとは考えもしなかった。

王達が動かない

何故だ!?

尋常じゃない雰囲気で此方に向かって来るがどう動けばいいのか判断できないでいる。

王達がこの異常事態に一言も発しず静観している訳は?

奴の手に落ちたのか

味方なのか敵なのか?

レイカが飛び出すのを抑えるため抱きしめていると奴が怒りを顕わにして来る。

「フォンフー、何時までその娘を抱いている心算だ……離して此方

に来なさい！」

目を血ばらせ尋常でない顔つき

殺す心算だ

もし言う通りにレイカを放せば剣で斬りつけられるのが分かりきっている。神力ならレイカに効かないが物理的な攻撃はその身に受けてしまう

剣を一太刀でも受ければ即死

止めなければ

「陛下お止め下さい。神聖な式を血で穢す心算ですか……」

駄目もとで言ってみる

「別段血で穢れ様がどうでもいい、戴冠式など王達を呼び寄せる為の口実でしか無い」

「！！」

どうやらこの場を取り繕う心算も無いらしいく、本来の目的まで言うが王達は動かず俺はレイカを放せず動けなかったが只一人問い質す者がいた。

「どういう事ですそれは！？」

横に居る青龍国の丞相が声を発した。

「青龍国の丞相か……私の気を送り込んだはずだがどういう事だ？
我が意に従わないとは忌々しい」

「気を送ったとは昨夜私の元にやって来た黒い霧の事でしょうか？
アレならばこの玉の所為で四散してしまいました」

そう言って懐から金色に輝く玉を取り出すと燦然と輝き始めると奴は後ずさる。

「その光は！　天帝の力…何故そんな物を持っている」

「我が国のファンニュロン様より授かった玉です。予め貴方の存在を知ってらしゃったようですよ」

「ファンニュロン！！　天帝の娘か！」

奴が忌々しげに叫ぶ

「貴方は一体誰です？　ファンニュロン様の存在を知るのは青龍国でも極わずかなのに、その正体まで知ってらしゃるとは……」

天帝の娘だと

そんな存在がいたのかと驚くがレイカも同様らしい

「ファン様の事？」

「知ってるのか」

「多分、小さい頃からお世話になっている龍族の人」
全く皇女なだけはあり知り合いもとんでもない

「たかがその玉一つで何をしようと言うのだ。お前達以外は既に我が下僕……死ぬか我が僕に成るか選ぶがよい」

「私は青龍国の丞相、誰が貴方のような者に」

冷たい視線を奴に向けキッパリと拒絶する。

「フッ　龍王を逃したのは惜しかった。　だがお前は惜しく無いな……」

奴は剣を丞相に向けニヤリと笑う

「我が剣のさびと成るがよい」

しかし丞相も黙っているはずも無く直ぐに攻撃すべく神力を放ち氷のぶ厚い壁で奴を覆うと辺りも凍りつく程の冷気を放った。

「フォンフー様！　皇女様をお連れしてお逃げ下さい！！　この玉を使い青龍国へ」

そう言いながら黒い玉を俺に投げてよこすが何をするものか分からずいるとレイカが呟く
「それは瞑道を開ける玉」

「知っているのか」

レイカが頷くと使い方の分からない俺はレイカに渡す。

しかし逃げる心算は無いが丞相は俺達を逃がそうと必死のようだ

「私の力では後しばらくしか持ちません早く！」

「愚か者め、周りは敵だらけなのを忘れたか。　皆の者、丞相と娘は殺せ！　フォンフーは傷つけるな！！」

そして一斉に周りの者達が襲って来るのだった。

虎王の戴冠式　その2

ハクが血まみれで横たわっているのに助けられず成す術もない

しかも虎王が迫る中で丞相様が盾に成り私達に黒玉で逃げるよう渡してくれた。

私達に呼び掛けた声は昨夜の様な冷たい声ではなく切羽詰まっており我が身を呈して守ろうとしてくれ、昨夜とはまるで違う態度

何故？

私が龍王の娘だから、それとも母様の娘だから

しかしそんな事に悩んでいられるのは一時で参列していた虎族が私達目がけ襲って来る。

「レイカ　奴等の神力を出来る限り奪え」

フォンフー様は襲って来る虎族達を神力でなぎ倒し私は倒れた人達から神力を奪って行くが切りが無い、しかも神力は黒い気も混じっており気持ち悪くこんな物を体に取り込んで大丈夫なのか心配だけど構っていられない

「何をしているのです！　逃げなければ殺されるだけ」

丞相様が追い立てるように叫ぶ。

「俺達が此処で逃げては奴を討つ機会を失うだけ」

「皇女様は人間ですよ！　殺すお心算ですか」

「煩い！　今は戦闘中だ」

流石に高位の虎族達が一斉に襲って来てはフォンフー様に余裕も無く神力が何時まで続くか分からない

「レイカ！　俺に力を寄こせ」

フォンフー様の言葉にハッとする

私は奪うだけではない事を思い出し直ぐさまフォンフー様の背に手を当て力を注ぎ込むと先程とは打って変わり凄まじい攻撃で次々倒して行く

一方の丞相様は虎王の周りに氷のぶ厚い壁で閉じ込めているが果たして効いているのか疑問だけど確実に神力はギリギリだと分かる。

「丞相様、私の力を受け取って」

嫌われているかも知れないけどこのままでは力尽きるのが分かっているので見過ごせない、丞相様の背に手を当て私の神力を流し込むと驚いたように振り返り私を見る。

「貴女は一体！！」

しかし目の前で氷の壁が一瞬で砕け散る。

パリッーーーーーーーーン

「「　！！　」」

砕け散った氷の破片が刃のように私達に襲いかかって来るのを丞相様が手をかざすと瞬時に消え失せると平然と立つ虎王の姿は真っ黒な闇のよう

「只の人間の小娘かと思えば…面白い事をする」

「私の力が効いてないのか……」

愕然とする丞相様

「お前如きが私を抑えられるとでも思ったか」

丞相様は適わないと悟ったのか私の手を引き逃げようとしたが

「皇女様、　先程の玉を投げて瞑道を開くのです」

「逃げない、　フォンフー様と一緒に戦うと約束したの」

フォンフー様は今も襲いかかる虎族と戦っているが数が多すぎる。

当てにしていた亀王とミユキ様も朱雀王も静観しているだけで微動だにしない

虎王は黒い気を王達の体に送り込み意志を奪っているのに違いない
私の手を引く丞相様にお願いする。

「私を王達の所へ連れて行って下さい。もしかすると正気に戻せるかも知れないの」

「皇女様が！？」

襲い掛かって来る虎族達を瞬時に凍らせながら不審そうに聞いて来る。

「お願い！　早く」

虎王を抑えるにはやっぱり王達の力が必要だと思った。

「失礼します」

丞相様がふわりと私の体を持ち上げ横抱きにすると襲って来る虎族をなぎ払いながら王達に近ずくが虎王が命令する。

「王達よ二人を殺せ！」

虎王が命令した途端、微動だにしなかった王達が動き出し、先ず朱雀王が真っ赤な劫火を放ち瞬時に炎に包まれてしまうが丞相様が氷の壁で防いでくれるがこれでは近ずけない。
ところが背後から亀王様が何時の間にか回り込んで襲って来る。
手には高圧に固められた神力の光る玉

それを至近距離で私達に投げ付け逃げようがない

「防げない」

氷の壁を二人の周りに張り巡らした丞相様が呟く

光の玉は壁を溶かし今にも此方に到達しようとしている。

その光に私は手を伸ばそうとすると丞相様が止める。

「何をなさるのです！」

「大丈夫、私には効かないはず」

壁を突き抜けた光輝くまるで太陽の様な玉を掌に取るとスーっと吸い込まれるように私の体に消えて行くが、今までにない大量の神力に目が眩みそう…

凄い！　流石…亀王様

しかし、もっと驚いているのは他の者達

亀王が放出した神力をその身に受ければユンロン程の高位の龍族でも瞬時に消滅してしまう程の力を孕んでいたので、虎王や王達も目を見張った。

丞相様も信じられないような顔で私を見詰めるが今はそれどころでは無く、一瞬動きを止めた王達二人が又しても同時に襲って来るので息付くほ間もないのだ。

フォンフー様も一人で大勢の相手をしていて此方を顧みる暇も無い

王達の攻撃は容赦なく私に放たれた神力は全て吸収するがかなり膨大だけど全て私の体に納まり自分でも空恐ろしい

「剣を使い串刺しにせよ！！」

焦れた虎王がハクから奪った神剣を朱雀王に投げて渡すと受け取った王は私達に剣を振り落として来るが凄まじい剣さばき

氷の剣で丞相様が受けるが二、三刀受けただけで折れていまい、その隙を突かれて右腕を斬られしまう。

ザック！！

「うっ……」

「キャッーー！！」

朱雀王は一気に詰め寄り今度は私に斬りかかろうとしするのが目に飛び込み、もう駄目だと目を閉じるが

ガッキィーーーー

瞬時に氷の壁が私に張られ危機一髪のところで食い止められるが何時までも持ちそうに無く、このままでは何も出来ずに足で纏いなのが悔しい

「皇女様、ここは一旦引きましょう」

「でも……」

このままでは丞相様も殺されてしまうのは嫌

正に状況は最悪な時だった。

「お譲ちゃん、お困りのようだな～～」

上空から聞き覚えのある惚けた声がしたと思うと朱雀王目がけて剣が降って来るが即座に跳びず去り避ける。

そして何処からか飛び降りて来た第二皇子様が直ぐさま剣を引き抜き朱雀王と互角に斬り合い、目にも止まらない早さで剣が交わされた。

「凄い」

強いとは思っていたけど王と渡り合える程とは思っていなかったので素直に感嘆してしまう

「あの方は何方ですか?!」

「この国の第二皇子様ですが、今の隙に亀王様の動きを止められないでしょうか」

「仰せとあらば」

そう言うと直ぐさま神力を放ち亀王様の下半身を氷で封じ様とするが止められない。

「矢張り亀王様は並みの神力は効かない…ならば違う方向で攻めてみましょうか」

丞相様が私を抱え向かったのはミユキ様が立っている場所

「亀王妃様を戻せますか」

「やってみます」

ミユキ様は人間だか黒い気だけを吸い取ればいいんだろうけど出来るかどうかはやってみないと分からない

無表情に立ちつくすミユキ様の黒い気を取り出そうと手を取ると自然に黒い気が流れ込んで来た、それは気が自らの意志を持って私に流れ込んで来た気がした。

？？？？

そしてミユキ様の目に光が灯る。

「……あれ？　レイカちゃん何時の間に……」

ミユキ様が今目を覚ましたかのような言葉を発したが次の瞬間私に抱きつく

「キャァーー　素敵!!　純白の花嫁みたい!!!!」

一気に緊張が弛むような言葉だが今はそれどころではない

「ミユキ様……助けて下さい」

「エッ??」

「亀王様を止めて」

丞相様が何とか神力で食い止めようとしているが速度を遅くするしか効果が無く氷の壁は次々と壊されて行く

「チョンマゲ何してるの??」

不思議そうに呟く

「私達を殺そうとしてるんです」

「はぁ〜〜??」

訳が分からない表情のミユキ様を丞相様が向かって来る亀王様の前に問答無用で突き付け盾にする。

途端にピタリと動きを止める亀王様

「ちょっと何でレイカちゃんを殺そうとしてんの?!　まさかレイカちゃんの美しさに嫉妬したのね！」

そう言い亀王様の両頬を挟むよう両手で打つ

バッチン！！

「チョンマゲのバカ」

何とも見当違いだが亀王様の動きが止まりミユキ様を見詰める。

「……　ミユキ　　ミ…ユ　　キ……　」

「どうしたのチョンマゲ??　変だよ」

「さー　皇女様　今です」

私は急いで亀王様に触れて神力を奪うがあまりにも膨大で途中から黒い気だけに意識を向けると簡単に体に取り込め消えて行くが不快感は途轍もない、ミユキ様のと違い大量の気が流れ込む

ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイニクイ　ニクイ
ニクイ

ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイニクイ　ニクイ
ニクイ

ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイニクイ　ニクイ
ニクイ

ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイニクイ　ニクイ
ニクイ

ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイニクイ　ニクイ
ニクイ

ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイニクイ　ニクイ
ニクイ

私の心が憎しみで一杯に成る

何これ！？

憎い

誰が？

……父様が憎い

父様が憎い

そして……父様に愛される母様が憎い

丞相様に愛される母様が憎い

母様の所為で私は丞相様に愛されない！！

憎い　憎い　憎い　憎い

皆に愛される母様が憎い

私は母様を憎んでたの？

嫌ーーー

『レイカ……　レイカ　大好きだよ』

母様？

母様の声が聞こえ、誰かに抱き締められる。

温かい……

そして母様と過ごした優しく幸せな時間を思い出す……

「母様　私も大好きだよ」

「大丈夫ですか…　皇女様」

聞こえて来たのは母様の声では無く丞相様の声

「へっ？？？？」

気がつくと私は丞相様に抱きしめられ私も抱きついているのに気が付く！！！！

「すっ済みませんーー　／／／」

「突然倒れられたので驚きました…」

ホッとしたように胸を撫で下ろして私の体から離れて行くともろに丞相様が優しそうに微笑んでいた。

カーーーーー　／／／

顔が真っ赤になるのが自分でも分かり恥ずかしい

どうしよう!!!

「まー―　なんて萌えな展開!!　レイカちゃん可愛い!!」

今度は横からミユキ様が訳の分からない事を言い抱きついて来る??

「ミユキ～～　余にも抱きついて～～」

亀王様がミユキ様に甘えるように覆いかぶさって来るので訳が分からない状態に陥って混乱するばかり

一体どうなっているの?????????

するとミユキ様と私を引きなすように間に割って入るように丞相様が言う。

「亀王様、今はそれどころではありません。　どうか虎王を討たね

ば四神国にも災いが降りかかります」

「そうよチョンマゲ、やられぱなしは悔しいから虎王をやっつけてきて」

「見ておるがよいミユキ、直ぐさまあ奴を消し去ろうぞ！」

ミユキ様に鼓舞され虎王に向い合う

どうやら亀王様も正気を取り戻したようで一安心だが状況は今だフォンフー様と第二皇子様は戦っている最中で家臣の虎族達の半数は倒れているがフォンフー様はかなり消耗している様子。第二皇子様も朱雀王に押され気味だ

虎王は亀王様に任せ朱雀王を元に戻さないといけない

「次は朱雀王様を戻しますから手伝って下さい」

「しかし今の様子ではかなり体に負担があるのでは」

心配そうに聞いて来る

「私は虎王の黒い気なんかに負けません。　母様が守ってくれるから」

「分かりました朱雀王様を止めてみましょう」

そう言うと第二皇子様に加勢するように丞相様が朱雀王に闘いを仕掛ける一方で亀王様は虎王と睨み合い動かないのをミユキ様と見守る。

「虎王…いや邪神よ。そなたの悪巧みの命運は突きたよう…無駄な抵抗は止め崋山で眠るがよい」

「何を言っているのです。私はこの国の王イェンファフー以外の何者でもありませんが」

虎王はこの状況でも余裕の表情を浮かべる。

「素直に亀王様の言う通りにしなイェン。兄として弟が死に行くのは黙って見ているのは忍びないからな～　この際亀王様の温情に縋れ」

何時の間にか第二皇子様が亀王様の横に立って説得と言うより挑発をする。

「これはトルチェンお久しぶりです。相変わらず招待もしないのにやって来るとは図々しい男、だがこれで捜して始末する手間が省けました。　王共々我が糧になって貰いましょう」

不気味に微笑む虎王

「昔から腹黒い弟だったが……　何を企んでいる」

そんな中、朱雀王を抱え丞相様が私の側に来ると朱雀王を床に横たえさす。

「さあ皇女様、朱雀王をお連れしました」

「ありがとうございます」

私は急いで朱雀王から黒い気を吸い取るが亀王同様に憎しみが流れ込むが、その憎しみに呑まれないように母様を思うかべる

母様との優しい日々を

すると憎しみは温かい心に変わって行くのを感じるが一体この憎しみは誰に向いた物なのだろう

きっと邪神の憎しみなんだろうけど

私の中に入って来る憎しみに問いかける

貴方は一体何が憎いの？

ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ　ニクイ

何が？

テンテイ　ガ　ニクイ　テンテイ　ガ　ニクイ　テンテイ　ガ　ニクイ

矢張りそれは天帝様に向けられた純粋な憎しみだけ……ただそれだけだった。

天帝様は何をしたんだろう

私の中に消えて行く憎しみだけでも消したくて母様が私を温かく包

んでくれていたように憎しみに光で包むようにイメージすると一瞬
光が膨れ上がり弾け消えて行った瞬間

白い髪に赤い瞳の可憐な少女が微笑む姿が脳裏に浮かんで消えた

今のは誰??

「皇女様?」

目を開けると丞相様が心配げに私を見ていたので恥ずかしい

「／／／　うっ…大丈夫です……終わりました」

朱雀王は今だ気を失っている。

そして息付く間もなく突然誰かに腕を引っ張られたかと思うと目の
前が真っ暗闇に包まれた。

グイッ!!

「キャッ!!」

真っ暗な闇だと思ったの闇に染まる虎王様が目の前に居るからだと
気付く

「目障りな小娘だがその力は素晴らしい」

ドスッ

そしてお腹に衝撃を感じると共に意識を失うのだった。

虎王の戴冠式　その２（後書き）

亀王とミユキが主役の玄武国物語「私と王様」をアルファポリス第４回ファンタジー小説大賞に参加してます。宜しかったら投票を宜しくお願いします！！

虎王の戴冠式　その3

あの糞女何捕まっているんだ！！

しかもレイカの周りには兄上に亀王と青龍国の丞相がついていながらムザムザとレイカを奪われるとは使えない！

あいつ等はレイカの重要性を分かっているのか！

その他大勢の臣下共を相手を一人でやっている俺の身にもなれと毒づきたいがその暇が無い

だがある意味レイカが奴の側に行ったのはチャンスだ

俺は力尽きた振りをして態と捕まる。

実際に既に神力は余りなく体力的にも限界だった。

取り押さえた男が俺の腕を捻り奴の前に連行しようとするが嫌な奴が立ち塞がる。

今まで壁際で静観し続けた第四皇子だった。

「私が陛下の所に連れて行こう」

手柄を横取りされた男は無表情に俺を渡す。

「無様だねフォンフー　陛下は何故こんな出来そこないを気に掛けるのやら」

「フン！　気に食わないならこの場で俺を殺せ」

「私は陛下の下僕　命令は絶対で逆らえない」

「クッ……」

そう言いながらも俺の手をねじあげる力を強める。

昔から奴に心酔していたが自分を下僕と言い切るなどプライドの高いこいつが言うはずが無い。矢張り支配されてしまっているのか

第四皇子に引っ立てられ奴の前に突き出さると奴の手には気を失うレイカ

これでは神玉どころか神力さえ奪えない

王達もレイカを人質に取られ動けない様子だ

「陛下、フォンフーを連れてまいりました」

「フォンフー　私を焦らすなど悪い子だ……さあお出で」

奴がねっとりとした視線を向けて気色悪く躊躇っていると第四皇子

が背中を押し奴の方に体が傾き奴の足下に跪く。
奴の顔を見ずに頭を下げて多分無理だが懇願する
「お願いですから、私はもう兄上に逆らいません、どうかレイカをお放し下さい」
「この娘を使って私を討つつもりだったのだろフォンフーよ。一体この人間にあらざる力を持つ娘は何者だ?」
奴は俺を見降ろしながら試すように聞く
「私はレイカを拾っただけでその正体や出生までは分かりません」
「おや…青龍国の丞相が皇女と言っていたのは気のせいだろうか?」
矢張りバレテいるか……　レイカの力も出生も
手の内を全て読まれている以上どうする?
今のままではレイカは正気に戻った王達の枷にしかならない
切るしかないのかと迷っていると
「フッフッフ……　心配せずとも殺しはしない、この娘の力は利用できるから我が下僕にしよう」
王達同様に黒い気を送り込むらしいがレイカには奴の力が効かない。
それを知ればレイカは殺されてしまうだろう

このまま見捨てるかと打算が動くが余りにもレイカに対し情を持ちすぎた

道具として接していればと後悔するが遅いだろう

俺も甘いようだ

こいつに裏切られた時からもう誰も心に入れないと決めた筈なのにインフーとレイカにより俺は癒されたのだろうか

俺はこいつの様になりたく無い

絶対に愛する者を傷付けたり、裏切ったりはしない

俺はレイカを守る！

だが今の疲れ果てた俺では無理だが最期の手段をつかうしかないが覚悟は直ぐに出来た。

「レイカはお前の下僕になどにならない！　そして俺も！！」

俺は自分の中にある神虎に転神する為に虎核を解放する。

普通は百歳の成人の儀を迎えた時に転神をするのだが別段百歳にならないと転神出来ないからではなく、心身共に成長せずに転神した場合二度と人の形を取れなくなるからだ。

その場合は国には住めなくなり崋山の神獣として生きるしかない

それもいいかもしれないロウと二匹自由気ままに生きれるのだから。

「止めろフォンフー！！」

奴が止める声がするがもう誰にも止められない

一瞬辺りが光に包まれ体が燃えるように熱くなると同時に体が変化して行き一頭の白虎に転神するや否や虎王に跳びかかり奴を押し倒すと奴からレイカを引き離すのに成功し、すかさずレイカを風で王達の元に飛ばすと同時に痛烈な衝撃が全身を覆う

グゥワァァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

黒い鎖のような物が体を打つと同時に意志を持つように体に巻き付き動きを縛られその場に倒れてしまう。

ドサリ

「なんと愚かな……人の姿を捨ててまであの娘を救うのか……

許さん！！！！

」

怒りで目を赤く血ばらせ俺を見降ろす。

≪　お前のものになるくらいなら獣として生きた方がましだ！　≫

「なんだと！！　そんなに私に殺されたいのか…ならば望み通り消し去ってやるわ！　そのような姿のお前など用は無い！」

≪　笑わせる！　虎族の本性はこの姿で人の姿の方が仮初、己とて同じ獣では無いか！！　≫

「黙れ！！　所詮お前は擬い物だった」

黒い鎖の絞めつけが強まりそのまま体が分断されそうな痛みが襲う

≪　ぎゃあああああああああああーーーーーーーー　≫

気を失いそうになり死を覚悟した時だった

「それ以上の暴虐は余が許さん！！」

突然、亀王が割って入り虎王に自分の長い金の髪を巻き付け動きを封じその隙に兄上が自分の体の倍以上ある俺を軽々と持ち上げ移動して床に横たえさせてくれる。

「全く無茶をする。　今戒めを解こう」

そう言いて黒い鎖を外そうとするが外れず絞めつけも続いて呼吸すら困難になって来る

「くっそ、外れん！」

「フォンフー様」

そこへ意識の戻ったレイカが抱き付いて来るが、その顔は涙が溢れている。

≪　お前の所為でこの様だ…　俺はもう駄目だ責任を持って奴を倒せ　≫

「嫌です！　絶対鎖を外し神力を注ぎますから一緒に戦って下さい。一人だけ楽をしようなんて許しません　グッスン…」

≪　チッ　我儘な女だ　≫

泣きながら俺に戦えとはレイカらしい

しかもレイカが黒い鎖に触ると一瞬で消えてしまう。どうやらレイカが吸収したのだろうか…龍族として目覚めれば無敵なのではと空恐ろしくなる。

そしてしがみ付くレイカから温かい力が流れ込んでくると力がみなぎり闘志がみなぎる。

転神した俺は人の姿の時より遥かに神力が増し強力な牙と爪と力を得ているので十分な戦力になるだろう。

俺は立ち上がり周囲を見回す。

何時の間にか目覚めた朱雀王と青龍国の丞相が残っていた臣下や皇子達をいとも簡単に倒して行くのが見え、そして虎王と亀王が凄まじい神力をぶつけ合い戦っているが徐々に亀王が押して行っている。

だが奴の表情には焦りは見えず微笑んですらいた。

「イェンの奴絶対何か企んでいるぞ」

≪　兄上もそう思いますか　≫

そして亀王の神力が奴の神力を打ち負かし奴の体を貫き勝敗をきったように思えた。

崩れるように倒れた奴の体は大きく半分を抉られているのに苦痛どころか今だに笑みすら浮かべている。

「クックックックック　これで終わりでは無い…　お前達は私と言う堰を壊しただけ…　私から溢れだした邪気は四神国全てを覆い全てを支配するのだ。　もうこの器に何の未練も無い……　私の欲しい物は既にこの世には無かったのだから……ダルチェン…私は…　何をしていたのだろう…　せめてあの方の一部となりこの世を呪おう……　ダルチェン…死んでも手に入らぬなら全てを呪おう!!!　何もかも滅んでしまえ!!　アッハッハッハッハッハッハ……」

ダルチェン　それは母親から聞き出した父親の名前

そして奴は言うだけ言うと体から黒いドロッとしたものが噴き出し溢れだした。

「なんだアレは!!」

《　分からない、邪神なのか？　》

黒い物は膨張して増殖し始めまるで意志を持ったように動き始め亀王を取り込もうと襲いかかるが寸での所で飛びず去り上空に逃げると床に倒れる虎族達を次々と飲み込んで行き際限なく増大していくようだ

「何とも気色悪い……イェンの奴もこうなると憐れだな」

「フォンフー様気持ち悪い」

一旦此処から引くしか無いようだ

《　レイカ　俺の背に乗れ　》

「良いんですか」

「キャァ！　フォンフー君私も乗せて！」

何故か王妃まで乗って来ようとするが亀王がすかさず飛んで来て攫って行く

「チョンマゲ、私はフォンフー君に乗りたいの。降ろして」

抱えられながらジタバタと暴れる空気を読めない王妃

「他の男に乗るなんて許さん！」

「ああ～～　生もふもふが～～～」

残念そうに言う王妃……緊張感と言うものが無いのか

「ところであの黒いスライムを消せないの？　このままじゃ王宮を飲み込んじゃいそうだし世界征服する様なセリフを言ってたわよ」

「確かにこのままでは不味かろう。　ためしに消してみよう」

そう言った途端、掌から一瞬で高圧の神力の光を繰り出し連続で邪神の打ちこむと光の当たった部分は消えるが直ぐに増殖してしまい元に戻ってしまう。

「切りがないから一遍に吹き飛ばせないの？」

「やってみよう、目を潰れミユキ」

「うん」

右手を上に上げていると光の玉が大きく光り出してあっという間に二十尺程に膨れ上がりまるで太陽のように輝く

「これ位か？」

しかし黒い物体は突如せり上がり上空に居る亀王目がけ飛びかかる。

「無駄な足掻きを、消えうせるがよい！」

亀王は光の玉を投げつける。

ドウォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーン！！！！

轟音と共に光と風圧が渦巻く

≪　なんて凄まじい力　レイカ確り捕まれ　≫

人間のレイカを守るべく結界を張り防ぐ振動が凄まじい

「キャアーーーッ」

光と爆風が納まり目を開くとそこには黒い物体は消えうせていた。

≪　殺ったのか！？　≫

「フォンフー様！　あそこを見てハクが倒れている」

レイカは俺から飛び降りると一目散に奴が消えた場所近くに倒れるハク目掛けて駆けて行く。

≪　止まれレイカ！　≫

俺の制止を無視し相変わらず猪突猛進な女を止めるべく動こうとした瞬間だった。

床から又してもあの黒い不気味な物体が噴き出し近ずくレイカ目掛け襲いかかるのだった。

≪　レイカ――――――――！！　≫

亀王様が凄まじい神力を放ちあの黒い不気味なぶよぶよは跡かたも無く消え去ってしまう。

凄い！！

なんて凄いお方なんだろうと感嘆していると白い影が横たわっているのを見つける。

ハク！！

「フォンフー様！　あそこを見てハクが倒れている」

《止まれレイカ！》

ハクがあの黒い物に飲み込まれず無事だったが他の倒れていた虎族は跡かたも無く消え去っているのでゾッとすが早くハクに神力を与え助けたかったのでフォンフー様の背から飛び降りて真直ぐに駆けよるとそこに大きな黒い玉が落ちてえいた。

神玉！！

ドックンと心臓が波打つ

本能的に危険を感じ立ち止るが既に遅い

黒い神玉が一気に膨張し始め側にいる私を襲い体を覆い尽くす。

「きゃあああーーーーーーーーーー！！」

目の前が真っ暗になり皮膚に不快感で鳥肌が立つ

気持ち悪い！！！！！！！！！！

私に触らないで――――――――――――――！！！

強い拒絶感を神力に乗せ放出すると黒い塊が飛びず去るように体から離れる。

「皇女様！」

《　レイカ！　》

丞相様が私の体を抱き抱えフォンフー様が前に立ちはだかり盾の様になってくれる。

そして黒い塊は不気味に動き徐々に人を模り始めついには背の高い男性形の姿をになるがその姿は異様だった。何故なら全身が闇の様に黒く彫の深い美しい顔と鍛え抜かれた筋肉を覆い黒い軍神の彫像の様だ

そこに居た全ての者が目を見張りそして恐怖を覚える……

適わない

王達は瞬時に悟る

目の前にいる邪神の圧倒的な力にその場で消えるしか無い事を

何なのあの男の人は気持ち悪い

私の中の全てがあの男の人を拒絶し反発している様に感じ受け入れる事が出来ないのだ

アレは駄目

存在してはいけない

漠然とそう思ってしまう

そして邪神がついに口を開きだす

《《　よくぞ我に力を与えてくれた亀王よ感謝しよう　　お陰で本来の姿を取り戻せた

≫≫

まるで地を這うかのような不気味な低い声が辺りに響くが誰も反応する事無く固まったように微動だにしない

あの神力を力として吸収したの私と同じ？

《《　だがまだ足りぬ。　嵬山をこの世界を我が手にするにはもっと力がいるのだ――　お前達には我の糧となる事を喜ぶがよい　≫≫

そして邪神から現れたのは先程の黒いブヨブヨが触手となりその場に居る全ての者に襲いかかり王達の体に巻き付き、目の前のフォンフー様の体にも数本の触手が絡まるが何故か私と丞相様は避けて襲いかからずにいる。

襲われ無いからと言ってこのまま見ている訳にもいかず先ずはフォ

ンフー様に絡まる触手に手を触れて消し去る。

「フォンフー様大丈夫ですか」

《　レイカ　もう無理だ逃げろ　》

「皇女様だけでも瞑道を使いお逃げ下さい」

しかし邪神が私を見逃すはずが無い、私が無力な人間の少女では無いのを邪神が気付いているはず。

《《　稀なる少女よ　そなたは決して逃がしわしない　我が下僕になるか死かどちらを選ぶ　》》

「誰があんたみたいな不気味な神様の下僕になんかならないわ！！」

《《　成程　ならば死ぬがよい　》》

彫像のように微動だにしなかった邪神は私の方に歩きだしその手には何時の間にか大きな一振りの真っ黒な剣が握られていた。

《《　惜しいが愚かな自分を恨むがよい　》》

「させない！！」

ガッキーン

そう言い私に向かい剣を振り下ろして来るが丞相様が間に入り氷の剣で受け止めてくれるがあっという間に砕けそのまま胸に剣を受けてしまう。

ズッザーーーーーーーーッ

「グゥ……」

目の前で丞相様の胸から血を流しながらも私を隠すように立ち続けるがその顔は苦痛で歪んでいる。

「丞相様！！」

「フォンフー様……　皇女様を連れお逃げ下さい……」

《《　愚かな　我に適うとでも　だがその気概は気に入った。先ずはそなたから我が糧としよう　》》

そう言うと邪神の真っ黒な手が丞相様の傷口に手をやると共に体にズブズブと入りこむと痛みで絶叫を上げる。

「ぐうァァァァァァーーーーーーー　逃げて……」

「嫌ぁーーーーー！！　丞相様ーー！！」

この人が死んでしまう

許さない！

この人を傷付ける者など許さない

私の大好きな人達を奪うなんて

私が許さない！！！

私は怒りで真っ赤になり目の前に居る邪神を消し去り事しか見えなくなるのだった。

虎王の戴冠式　その４

怒りが全身を包むと胸の龍核が熱くなりまるで燃えるように胸を焼くが気にしている暇は無い

今だ丞相様の胸に突き刺さっている邪神の真っ黒な手を掴み取りその力を吸い取る。

するとまるで邪神の手がスッパリと切り取られる様に消失し自分の体に取り込む。

まるで呼吸をするより簡単な作業だった。

《《　グゥオォォー――――　オノレ小娘が　》》

邪神は黒い剣を私に振りかざすが剣が到達する前に掻き消えてしまった。

《《　何故だ！？　》》

「貴方が私の糧になるのよ」

触れずに私は邪神の邪気を吸い取る為に手をかざすとまるで私に惹き寄せられるように大量の邪気の憎しみを怒りに換え私の神核を満たして行くのを感じるが止められない。

いけない、こんな事をしたらいけないと言う警告が頭に鳴り響く
しかも胸の神核は半分私の胸にめり込んだように埋まり徐々に大きくなり既に林檎程になっており、しかもそれは闇のように黒く光っていた。
まるで邪神の神玉のように
《《　一体お前は何者!!!　》》
邪神は怯えるように後ずさり私から離れようとするが既に体は所々欠けており人の姿を保つのも難しいそうだ。
「そんなの私だって知らない！　だけど私の大事な人を奪う貴方なんか消えるがいい!!」
《《　むざむざやられる訳にはいかぬ!!　》》
邪神は元のドロドロの状態に戻り亀王様達を襲う
「逃げて！　神力で邪神を攻撃しては駄目」
亀王様は私の言葉通りにミユキ様を抱え瞬時に遠くまで逃げてくれるが丞相様が背後で倒れている。
「フォンフー様、丞相様と遠くに離れていて下さい。　邪神は私が倒しますす」
《　レイカ大丈夫なのか!?　お前の龍核が真っ黒に染まっている

≫

「分かんない！　でも私がやるしかないから……　だから離れていてほしいの」

≪　やれるか　≫

「うん…　やる！」

≪　レイカ、絶対に生き残れ　≫

「お嬢ちゃん、インフーを悲しませるなよ」

インフー様…最後に顔を見れなかったのが心に残る

今の状況で自分がどうなるか分からず返事を返せなかった。

フォンフー様は第二皇子様の手を借り丞相様を連れ離れて行き私と邪神だけで既に人の形を捨てた黒い塊

≪≪　こうなればお前の全てを奪ってるーーーーーーーーー　≫≫

一斉に黒い塊が私を襲って取り込もうと体を覆って来る

「バカね。それでは先と同じでしょ」

私は動かないまま黒い塊に飲み込まれ瞑道の闇に包まれたかのようそして私から神力を奪おうとする。

さっきまで酷く不快でおぞましかったはずの黒い気は今は何も感じない

龍核が黒く染まった所為だろうか

《《　お前を取り込めば我は天帝を越える力を得れる　》》

なら私が邪神を取り込めば天帝を越える？

母様を出してあげられる！？

吸収されるがままにしていたのを一気に反転し邪神の邪気を吸収して行く

《《　やっ止めろーーーーーーーーーー　》》

邪神の全てを飲み込もうしていくと色々な思念が入り込み消えて行く

助ケテ　消エタク無イ　生キタイ　消エタク無イ　生キタイ

消エタク無イ　消エタク無イ　消エタク無イ　消エタク無イ

取り込まれて行った人達の声が渦巻く

胸の龍核益々大きさを増し痛みが体中に走るが構わず最後まで吸収して行くと最後に大きな思念が私に呼び掛ける

愛シテイタ　愛シテイタ　愛シテイタ　愛シテイタ　愛シテイタ

愛シテ欲シカッタ　愛シテ欲シカッタ　愛シテ欲シカッタ

ダルチェン　側ニ居て……クレ　ソレダケガ私ノ望ミ

悲しい虎王、第三皇子の思いが私の龍核に取り込まれ消えて行った。

何があったのかは分からないけど第三皇子の深い愛する心があた

だけど第三皇子は間違ってしまいその愛を失い狂ってしまったのか
もしれない

愚かで可哀想な人だったのだ

そして私は邪神の黒い塊の全てを取り込み体を襲う激痛の為に座り
込み体を抱き締める。

痛い　痛いよ　母様　痛いよ

憎しみが龍核に満たされ私の体を苛む

このままでは私が邪神になっていまうと感じる。

そして目の前には黒い神玉が転がっており、私に語りかけて来る。

≪　愚かな……　龍王の娘よ　お前も我と同じ永劫の憎しみに囚わ
れるがいい……　≫

憎しみ？

私は何が憎いの？

憎かったのは私から愛する人達を奪う存在

「痛い！！　うぅぅ……」

龍核は既に私の頭ほどに大きくなり体が龍核に食べられて行くような錯覚に陥る。

≪　龍王の娘、遅くは無い　その龍核の力を我に与えよ……そうしないとお前自身が龍核に取り込まれ消えるであろう　≫

邪神が私にそう囁く

「私は愚かじゃない」

ありったけの力を振り絞り神玉を掴む

≪　何をする！　離せ！　≫

「　貴方の憎しみは私が全て引き受けてあげる」

≪　止せ！　我は我で無くなる！　止すのだ！　……ウァァァーーーーー　……　≫

煩く喚くのを無視して神玉から憎しみだけを吸い取ると真っ黒な闇色から美しい銀色の神核に変わった。

「これで貴方の憎しみは終わり。　静かに眠って……」

銀色の神核は徐々に石化し始めると私の脳裏に次々と映像が流れ込んで来た

それは過去に起きた邪神の記憶

美しい銀の髪に銀の瞳を持つ美しい男神、彼には美しい愛する妻が居た

妻は白い髪に赤い瞳の愛らしい人間の少女

だがその少女は天帝と通じ男神を裏切ったのだ

しかも少女は天帝に直ぐに飽きられ打ち捨てられるが気が狂い嶉山を彷徨い歩くようになった。

男神は嘗ての愛する少女を受け入れる事は出来ず天帝同様打ち捨てた

だがそれは上辺だけ

男神は常に遠くから少女を見守り続け、臣下の神獣達に世話をさせていたがある時気付いてしまったのだ……少女が身籠っている事に

数百年連れ添ってきたが一度も身籠らなかった少女が天帝の子をその体内に宿した事に嫉妬し気が狂わんばかりだったが少女の為に天帝に頼み込む

男神は天帝の欠けた部分を大きく補う慈愛の神で巨大な神力を有していたので天帝を恐れる事無く接する事が出来た唯一の存在

「天帝よあの娘を側に置き無事子供を産ましてやって欲しい」

「何故僕があんなつまらない娘を側に置かなくっちゃいけないの？
本当にお前はくだらない神、あんな淫売サッサと殺しなよ。僕が誘ったら直ぐに股を開くような女だ僕の子だとは限らないよ」

男神は怒りにうち震えるが諦めず少女の為に天帝を説得しようとするが

「そんなにあの女を愛しているならお前が受け入れればいいだろう」

そう言い捨て天帝は消えてしまった。

確かに今だ少女を愛していたが天帝を選んだ少女を許せずにいた
だが気の狂った少女は憐れでしかも子を宿しているのだ

我が子ではないが身重の少女を見捨てられない以上は受け入れ側に置く事を決心する。

そして天帝の元に行った時以来初めて少女の前に姿を出すと

「ヒィ……」

だが少女は男神を見るや顔を青褪めさせ狂ったように走り出すが、
直ぐに捕まへその華奢な体だが既に腹は大きくなっており痛々しいく労るように優しく抱き上げる。

「逃げるな、体に障る……」

少女は虚ろな目で視点が合わないがその瞳からは流れるように涙が出ていた。

「私の所で子を産み育てるがよい」

「いや……　嫌い！　いや！　いや！　いやーーーーーーー！」

少女は突然暴れ出し気が狂いながらも自分を拒否する様に男神は初めて憎しみが心に湧く

「そんなに私が嫌いか！」

瞬間カッとなり地面に少女を突き飛ばしてしまうと同時に少女はお腹を抱え苦しみ出し、その場で破水し1組の双子を産んでそのまま息絶えてしまうのだった

取り上げた二人の赤子を見て愕然とする。

一人は白い髪に銀の瞳の女の子、もう一人は銀の髪に赤い瞳の男の子

紛れも無く男神の子供

訳も分からず少女を問い質したかったが既に息絶えている。

少女の亡きがらと二人の赤子を抱きながら混乱する

少女は私を裏切ったのではないのか？

それならば何故私を拒否する？

そこへ天帝が姿を現し嘲笑う

「あっはっはっはっはっはーーー　バカだねお前は。何が慈愛の神だ。　愛する者を殺すなど、しかも命の契約を切ってしまって無ければ女を失わずに済んだのに」

男神は不貞を知り直ぐに少女との婚姻の命の契約を破棄していた。

「一体どういう事なのだ」

「その女はお前を裏切ってなどいなかったんだよ。私の所に来たのは子供を欲しがっているお前の為に相談して来たから手伝っただけ」

「だがあの時、二人は寝所で」

私との情事の後に妻がコッソリと抜けだし瞑道を開けて何処かに行くのに気付いた男神は直ぐさま後を追い見付けたのが全裸で天帝と妻がまぐわう姿。その場で二人を罵倒し怒り任せ婚姻を廃棄したのだ。

「バカだね～～　あの時僕は外法を用いてお前の子種を女の卵子に定着させていただけで実際性交をした訳じゃない。だけど嫌がって耐えている時の女の顔には結構きちゃったけど～～　僕の半神の伴侶に手を出す程飢えていないよ～～～」

「何故黙っていた！」

「だって面白いじゃない。お前に捨てられ絶望した女はそのまま気が狂い、慈愛の神であるお前は嫉妬で真実など見ようともせず未練たらたらで女を眺める…正に喜劇、お前達は僕を十分楽しませてく

れたよ～」

「己ーーー！！　天帝許さん！」

天帝に刃を向けようとするが体が動かない

「なんだこれは！？」

そして怒りと憎しみが一気に高まり自分を黒く染めて行き、憎悪が体を蝕み徐々に崩れ崩壊して行く

「愚かだね～　慈愛こそがお前の力。それを無くせば神族としての意義を失い滅ぶしかない」

天帝は男神が崩れて行く中、自らの手で男神の体から憎しみで染まった闇色の神核を取り出すと男神の体は神核に吸い込まれる様に消えて行った。

「何て綺麗な神玉だろう～　お前は本当に目障りだったけど最後は本当に楽しませてくれたよ。　結局慈愛の神であるお前も人間とさほど変わりない――　最後まで愛する女を信じれなかったお前が悪いのだ」

男神の意識はそこで途絶え邪神として崋山に封印された。

そして第三皇子によって目覚めた邪神は崋山に精神を切り離し肉体を残したままの天帝の状態を知り好機と捉え、打ち滅ぼす力を得るために力を集め四神国を手中に治めて崋山の神々と天帝を全てを滅ぼそうとしたのだ。

天帝への憎しみそれだけが支配した。
純粋な憎しみは人々の闇の心を蝕み支配し糧として膨れ上がり邪気を撒き散らし増殖して行ったのだ
レイカは見せられた幻影により邪神の憎しみと悲しみを知った。

神玉が石化しながら零れて来る思念

≪　まだ……　天帝　を　滅ぼす……　消えない……　≫

結局邪神は憎しみを捨て切れず消えようとしていた
憐れでならないがレイカにはどうする事も出来ず、それどころか自分の龍核の憎しみと怒りを抑えるのに必死だった。

どうしよう　このままじゃ私が私じゃ無くなる。
そうなれば近くに居る大好きな人を飲み込んでしまう
憎しみは力を欲しているのだ

母様　助けて！！！
苦しみ悶えていると誰かが私に語りかけて来る。

≪　レイカ…　レイカ…　≫

それは生き絶えたと思ったハクの思念

「ハク！　ハクなの！？　生きてたの！」

少し離れた場所に倒れるハクが呼び掛けてきたのだ

≪　側に　レイカ…　≫

何時も私が困った時に助けてくれた私の家族

ハクが死にいくなら側に居てあげたかったが全身を襲う痛みに動けない

その時誰かが私に触れる。

「私がお連れしましょ」

それは重傷を負ったはずの丞相様

「駄目！　私に触れないで…　離れて！」

龍核が勝手に丞相様を取り込もうとするかもしれない

そんな私の言葉を無視するように丞相様は抱き上げハクの元に連れて行ってくれるが重傷を負ったはず、だが丞相様の胸の傷は跡かたも無く消えて衣服だけが破れ血のおびただしい跡があるだけ……誰かが神力で癒したのだろう

「皇女様だけを犠牲にする訳にはいけません。いざとなれば亀王様

が私達を封印してくれますから私もご一緒させて下さいませんか」

初めて優しげに見詰められ心が嬉しさで満たされ少し痛みが和らいだ気がした。

だけど巻き込む訳にはいかない……縋っていいはずが無い

「何故そんな事までするの　私が皇女だから、それとも母様の娘だから」

青龍国の丞相として立場からか、それとも愛した人の娘への憐れみ

「さあ……　どれも当てはまるような気がしますが皇女様をほおっておくなど出来ない…貴女を一人にさせたくないと思ったのです」

何故か嬉しい

私の存在を認められたよう気がした。

丞相様は横たわるハクに神力を注ぎ込むとミルミル元の愛らしい猿の姿に戻りパチリと目を覚ますと私に抱き付く

≪　レイカ　ゴメンナサイ　レイカ　ハク　助ケル　≫

必死に私に謝りながら助けると言うハク

「無理だよ　こんな大きくなった憎しみは打ち消せないよ」

≪　ハク　出来ル　待ッテ　≫

ハクはそう言うと石化し始めた神玉を拾いそして戻って来る。

「何を…　するの…　」

ハクは自分の指を噛みちぎると神玉に血を垂らし、私の龍核に触れる。

≪　ハク　伝エル　オ母サン　ノ　想イ　≫

すると一人の少女が脳裏に浮かんできた

それは邪神の妻だった少女

少女は赤い瞳に涙を浮かべ泣いており悲しみに打ちひしがれている。

（　御免なさい…　愛する貴方の為に貴方の子供がどうしても欲しかった。　でも結果として天帝様に肌を許し裏切ってしまた愚かな私を許して。せめて貴方の側で子供を産み育てたかったの……　穢れた私は二度と貴方には会えないし触れれ無い　私は人間だから直ぐに朽ちてしまうけど子供達が生きるのを許して欲しい。私の事を忘れて幸せになって下さい……　私の旦那様　）

想いを伝え終わると少女の姿は蒼白な顔で消えて行く

≪　ハクラン　ハクラン　ハクラン　ハクラン　お前なのか　≫

（　旦那様　子供達をお願い　愛して上げて　子供達に罪は無いの　お願い　）

≪　何処だハクラン　お前が見えない　ハクラン　≫

神玉は殆ど石化しながら意識を保っており、そこへハクが語りかける。

≪　オ父サン　オ母サン　ハ　死ニ間際ニ　コノ　想イヲ　私達ノ血ニ残シタ　憎マナイデ　憎シミヲ消シテ　≫

≪　お前はあの時の双子なのか　≫

≪　違ウ　天帝様　神獣ニ変エテ　サル　ニ　育テサセタ　ハク子孫　≫

≪　我が子を獣に変えて猿に育させただと！！　≫

≪　双子　死ニカケテイタ　天帝様　神核ワケテクレタ　デモ　人ニナレナカッタ　デモ　ハク達　幸セ　仲間　家族　一杯　幸セ　≫

（　子供を沢山産んでもっと幸せになりましょ。　旦那様　）

妻の言葉が蘇る。

ハクランは孤児だったのを拾い育て、愛したから妻にした少女

家族を人一倍求めた少女、だから私も子が欲しかったが数百年出来ず妻は自分を責めて追い込まれ天帝を頼ったのだろうか

≪　私が追い込んだのか…　≫

≪　ハク達　幸セ　オ母サン　幸セ　オ父サン　不幸セ　駄目　≫

神玉にある魂はハクを見る。

白い毛に覆われた赤い目をしたメス猿

ハクランの血を受け継ぐ者達

≪　オ父サン　帰ロウ　ハク達の家族ガ　待ツ　神獣ノ森へ　皆
　オ父サンの子供達！　≫

（　旦那様　お帰りなさいませ　）

優しい妻のはにかんだ笑顔が何時も私を迎えてくれた事を思い出す

何故私は忘れてしまったんだ妻の私を愛する眼差しを

帰るべき場所を

憎しみが全てを消し去り愛を見えなくしていたのだ。

帰りたい

ハクランが残してくれた子供達の元へ

≪　私は帰れるのだろうか　≫

≪　大丈夫　皆　待ッテイル　ソノ前ニ　オ父サン　レイカ　助ケ
テ　レイカ　ハク　ノ　家族　≫

そして龍王の娘を見ると私が育てた憎しみが龍核を黒く染め憎しみ

を封じようと耐えていた。

小さな体は痛みで打ち震えながらも

愛を捨てた私は何んと弱い神だったのだ

《　私を龍王の娘の神核に当てよ　》

《　ウン　レイカ　助ケル　》

ハクは私の龍核に神玉を当てると凄まじい勢いで憎しみの邪気が神玉に移動し始める。

大丈夫なの！？

邪神に戻ってしまわないかと不安になるが体の痛みが徐々に軽くなって行く

《　娘よ心配いらぬ。　私は憎しみを捨てた今　憎しみは慈愛に変わる　》

すると神玉が眩いばかりに輝き始めそれは王宮中に広がり包み込んだ。

温かい光はまるで母様の温もりのようだった。

そして光が治まり辺りが見えて来ると黒い塊に吸収された虎族の人達も倒れていたのだった。

漸く闘いが終わったんだとホッとする。

そして目の前には大きな銀色の美し毛並みの猿が現れハクがその手に抱かれているのだった。

虎王の戴冠式　その４（後書き）

ソロソロ第二章が終わり新章が始まる予定です。　此処で終わると思った人ゴメンなさい……申しわけありませんが、まだ続きますので見捨てず宜しくお願いします。

戴冠式の終りと新たな旅立ち

銀色の大きな猿は人より一回りも大きくその目は優しく理知的な銀の瞳が光っていた。

「もしかして邪神さん??」

≪　そうだが邪神であったが今は違う。龍王の娘と我が娘ハクのお陰で本来の自分を取り戻した……だがこの国にから奪った命を戻す為に多くの力を使い果たし今はこのように神獣となり短い生を子供達と生きよう思う　≫

そしてハクが私に飛びかかって抱き付いて来る。

≪　レイカ　アリガトウ　オ父サン　幸セソウ　オ母サン　喜ンデル！！　≫

「良かったねハク！　でもハクも嶺山に戻っちゃうの?」

≪　大丈夫！　オ父サン　送ッテ行クダケ　レイカノ処ニ　直グ戻ル　≫

「いいの……折角会えたのに、ハクもお父さんや家族と暮らしたいでしょ……」

《イイノ～　子供　イッパイ　イッパ～イ　　レイカ　ズ～ット　一緒ニ居ル　レイカ　モ　家族》

「うっう…　有難うハク。　大好きだよハク」

そのままハクを抱き締めて泣いてしまうとハクは私の涙を舐めてくれ、くすぐったい

《龍王の娘よそなたには感謝してもしきれぬ。　礼と言っては何だがそなたの不完全な姿を本来の姿に戻し真の龍族として目覚めさせよう》

「私は龍族になれるの」

《そうだ、その姿そのものが仮初で本来のそなたでは無い……経緯は分からぬが稀なる力を宿しているのは確か。　龍核を私に貸してくれぬか》

胸元を見ると胸に食い込んでいた龍核は何時の間に小さな玉の首飾りに戻っていた。

ハクのお父さんに言われるまま首飾りを外すとハクに渡し、ハクは大事そうにそれをお父さんに渡す。

ハクのお父さんはそれを手に握り込み自分の神力を注いでいるようで握り込む指の隙間から金色の光が零れ落ちていく、しかも銀色の猿の体は徐々に小さくなっているように感じるのは錯覚かな

そして私達の周りには王達や虎の姿のままのフォンフー様が集まり

静かに見守っていた。

《　さあ　これを飲み込むがよい　》

差し出されたのは金色に輝く龍核で大きさも桃ほどもあり飲み込めそうもないし、とても自分の物とは思えない物だった

「エッ!?　これが私のなの??　」

《　そうだ、あのままでも龍族として目覚めただろうが血の枷が掛けられていた為に本来の真の姿では目覚めなかっただろう。これを体に取り入れば龍族として目覚め歴代の龍王随一の力を得る。　受け取るがよい　》

血の枷??

良く分からないけどこれを飲み込めれば龍族として目覚め、龍王様…父様を越える力を得て母様を自由にしてあげられるのだ

そして母様と共に生涯を生きていけ、全ての望みが叶うのだ

だけど自分がそんな大きな力を得るのかと思うと自然と手が震える

《　恐れるな龍王の娘　そなたは強い娘　今は手に余る力だが、何れそなたなら正しいくこの世界を導…　》

ジュルッ　ジュー――――――――ルルルッルビュッシュウーーー

「…!!」

その時だった突然足下が真っ黒な黒い邪気の塊が湧きあがり一瞬で私を取り込み下に引き摺りこんで行き悲鳴も上げれず成す術も無く闇に覆われてしまい何が起こったのか分からない

邪神に騙されたの！！？？

邪気は憎しみで満ちており神核が手元に無い私は何も出来ずただ足掻くばかり

今の私は本当にただの人間の少女でしか無い

このままでは死んでしまう

『クックックックックック…　苦しむがいい　お前の所為で全てを失った』

その声は第3皇子イェンファフーのもの

「何故…　貴方が…」

『あの邪神…　神は愚かにも私まで復活させたのだ。何が慈愛の神だ天帝が鬱陶しがるのが分かる気がするよ。生き返ったとして私は全てを失い既にあの世界で生きる意味も無いのに……　お前はこのまま私と瞑道に落ちそのままこの体が朽ちるまで共に彷徨い続けるのだ！』

「そんなの御免よ！　私は母様の所に戻るの、貴方なんか一人で滅べばいいんだわ」

何とかこの邪気から抜け出そうとするけど幾らもがいても出れず体力を使うばかり

周りには王達や神力の高い人達ばかりだから、きっと直ぐに第3皇子を倒し私を助けてくれるはず

此処は大人しく待った方が体力を失わないと思い静かにすると

私の考えを読んだように言う

『　助けを待っても無駄、既に狭間の世界に入り深く潜って奴等にも私達の場所も分からないだろう……　私にもここがどこかすら分からないのだからな。　アッハッハッハッハッハッハッ――――！　共に狂うがイイ　』

「そっそんな……」

折角全てが上手く行きそうだったのに

母様　御免なさい

母様　大好きだった

母様　助けてあげれないで御免なさい

そして死を覚悟した時…何故か丞相様を思い出してしまう

そう言えば名前を知らない

せめて名前くらいお聞きしたかった

漸く丞相様に恋をしていた事に気付く鈍感な私

出会った時から冷たい目で睨まれていて嫌われていたのに何でだろう……

でも私を助け共に戦ってくれた

私の事を見捨てられないって言ってくれたのが嬉しいいかた

最期に名前を呼びたかったなと思うと胸が苦しい

インフー様の時とは違う切ないこの思いが恋なんだろうか

助けて……丞相様

胸に手を当て思わず願ってしまう

その時胸元に持っていた玉の存在を思い出す。

それは闘いのさなかに渡された瞑道を開く黒い玉

これを使えば瞑道を開けられる！

急いで玉を取り出すが、ぶつける壁がない

どうしよう……

『娘よ何を考えている？』

いけない！

このままでは玉を取り上げられてしまうと思うと咄嗟に体が動き玉を両手で挟んで割る。

パッン！

パッりーーーン

すると掌に光の玉できドンドン膨らんで行くと私はその中に吸い込まれてしまう

『　娘！何をした！！　』

「キャアーーーーーーーーーーーーーー」

そして光に吸い込まれたかと思うと一気に落ちていく

『　娘　逃がさんぞーーー　』

遠くから第三皇子の声がしたかと思ったが直ぐに落下する風を切る音に掻き消されてしまい最後に見たのは青い海

そう……それは初めて見る海

人間の私が海に落ちて助かるだろうかと考える間も無く海の中にズッドンと落ちてしまい体に凄まじい衝撃が走る

『皇女様……』

レイカと呼んで欲しかったな……

私が母様のようだったら愛されたのだろうか……

消えゆく意識の中、思い浮かぶのは母様では無く丞相様の顔だった

……

レイカは海に沈みこんで行くが気を失ったのが幸いしたのか分からないが直ぐに浮上してそのまま波にもまれながら何処とへともなく流れていくのだったがその身に受けた変化は誰も気付かないのだった。

『レイカ！』

「皇女様！！」

金色に輝く神核を受け取ろうとした瞬間にレイカの足下から黒い塊が湧きだし一気にその体を包んだかと思うと瞬時に床に吸い込まれる様に悲鳴も残さず消えてしまったのだ。

俺は咄嗟に目の前の邪神が我々を騙しレイカを消したと思い、その体に噛みつこうと跳びかるが亀王に止められる。

「待つのだ！　そのお方ではない。　虎王が瞑道を開けて龍王の娘を攫ったのだ。　瞑道を開けられる者は直ぐに後を追うのだ」

亀王の言葉に直ぐ反応し、亀王、朱雀王、兄上が瞑道を開け狭間の世界に消えていったが、俺は何も出来ず嘗ての邪神を睨む

『　何故奴まで生き返らせた！　あんな奴生きる価値など無い極悪

人だ　』

そうこの神が他の虎族を生き返らしたように奴まで生き返らすなど
何を考えてるんだ

その所為でレイカが攫われ失ってしまうかもしれないのだ

もう誰も失いたく無かったのに

《　済まない皇子よ。　私にあの憐れな魂も見捨てられなかったのだ……　》

奴の何処が憐れだ！

人間の男に血迷い、全てを手に入れようと四神国を取り込もうとした極悪人を許すなど慈愛の神だがらか？

天帝がうざがる気が少し分かったきがする

慈愛も深過ぎるのは迷惑だと感じるのは俺だけなのか？

《　レイカ　大丈夫？　》

《　今の龍王の娘は本当にただの人間　せめてこの龍核を受け取っていれば瞬時であの者を消しされたのだが…　今は王達任せよう　》

ああーーーいらつく！！

元をただせば妻の不貞を疑ったのが事の始まり、天帝の姦計に嵌ったこの間抜けな神の所為

そして奴がその力を手に入れなければこんな大きな事件に成らなかっただろう

しかもむざむざと目の前で奴にレイカを奪われるなんて俺も此処にいた全ての者が間抜けすぎる。

イライラしていると座り込む丞相に気が付く

頭を項垂れさせ茫然としているようだ

一番近くに居て何も出来なかったのだから仕方あるまい

所在なく虎の巨体でウロウロしていると亀王妃が近づいて来る。

「フォンフー君、チョンマゲ達がレイカちゃんを助けてくれるから落ち着きなさい」

宥めるように俺の体を撫でるが

「ああ～　たまんないこの毛触り！　フォンフー君、玄武国で一緒に暮らしましょ」

どうやら俺に触りたかっただけのようで、嫌がっているのにお構いなしに触りまくる。

『　あんたこの非常時に何を言ってる！　』

「あんた！」

ついうっかりぞんざいな口を利いてしまう。仮にも王妃だった

「あんた呼ばわりなんてこの世界に落ちて初めて！　もう一回言ってみて～」

と訳の分からな反応で固まる。

こんな変な女は初めてだ。　亀王の趣味は悪すぎる！

もう反応するのがバカらしく大人しく体を触らせていると

「ねっ　あの美人さん暗いんだけど」

「自分国の皇女を救え無くって落ち込んでるんだろ」

「そう言えばお猿さんはレイカちゃんが龍王の娘とか、美人さんは皇女様って言ってたのは本当なんだ…　と言う事はアオイさんは龍王の奥さんだったの??　龍王は独身て聞いてたけど…どういう事なのよ、フォンフー君の知ってる事教えなさい」

今さら隠す必要も無く、ジーッと待つより気を紛らわす為に話しだす。

『　レイカの母親の事情はよく知らんが、どうやら龍王によって母親は結界に閉じ込められ隠された存在だったらしい、そして妊娠し龍王には秘密にしてレイカを出産して育てたらしいがレイカが五歳の時に存在がばれて妖獣の森に捨てられたらしい。それを拾ったのが俺でそのまま屋敷に侍女としておいてやったんだ　俺も本人も龍王の娘だと知ったのは最近だがな　』

俺の話に矢張り怒りを顕わにする

「龍王ってそんな非道な人だったの！　あんな綺麗なレイカちゃんを捨てるなんて！どうせなら玄武国に捨てて欲しかったわ」

……全くこの王妃は理解しがたい

『　龍王がどうしてそんな事をしたのか知りたかったら、そこの丞相に聞いてくれ　』

「そうね」

王妃はそのまま座り込む丞相の前に行き一緒に座り込むとそ顔を覗きこむ。

「ユンロンさん、どうして伴侶であるアオイさんは結界閉じ込められていたの？そして娘であるレイカちゃんを捨てたりしたのかしら龍王は？　教えてくれないとレイカちゃんは亀王国で引き取るから……本気よ私」

面白い

一国の王妃が他国の丞相を脅す図など滅多のお目に掛けられないだろう

しかし丞相は素直に懺悔するかのように話しだす

「いいえ、陛下は皇女を妖獣の森に捨てたのではないのです……陛下は皇女様を殺そうとしたらしいのです」

「何ですって！！　貴方は一体何をしてたのよ」

「知らなかったのです……アオイ様が皇女様をお産みになった事も…陛下がそのような惨い事をアオイ様の目の前で行った事を……幸いな事に皇女様は不思議な力を使い結界の外に逃げ行方不明、ですがアオイ様はショックのあまり心を閉ざしそれ以来深い眠りに就き今だ目覚めていないそうです。　私もその事実を知らされたのは昨晩の事で今だ信じられませんが皇女様の髪はアオイ様と同じ、しかも私が贈った真珠の髪留めを持っておられたので信じるしかありませんでした」

「アオイさんがそんな目に遭っていたなんて……一体龍王は何を考えているの！？　アオイさんは愛されてなかったの」

「いいえ　初めは確かに愛してはおられませんでしたが長い時を経てアオイ様に徐々に心を傾けられ今は深く愛しておられます」

何故か苦しげに言う

「なら何故、アオイさんとの子を殺そうとするの！！」

「陛下は自分の血を憎んでお出でだった。その為皇女様の存在が許せなかったのでしょう」

「くだらない！　血がなんだって言うのよ！　一番大事なのは心よ……そんな冷血根暗男にアオイさんもレイカちゃんも任せられない！　私が貰う」

そう丞相に宣言する破天荒な王妃

龍王の王妃と皇女を囲おうなどあり得ない話だが聞いていて気分がスカッとするのも事実だった。

血に拘るなど何に成るだろう……あの後宮を出れず日々嘆く事しかしない母親と顔すら知らない父親

そんな親の血など関係無く俺は生きて自分の道を進むだけだ

親の都合や恨みで殺されるなどまっぴら御免

「そうですね……誰もが王妃様のように単純に考えれれば悩まなくて済むのでしょうが…はぁ…」

どうやら丞相の方も黙っているタイプでは無いらしい

「まぁ～～　何も出来ず手をこまねいている無能な人間よりはマシですわよ。　オホッホホ　」

二人の善戦をもう暫らく観戦したかったが王達が帰って来る。

瞑道が開いたかと思うと中から三人の影が現れるがその手にレイカの姿は無い

「チョンマゲ！　レイカちゃんはどうしたの」

「すまぬミユキ　見付けられなかった……　」

「どういう事、死んだわけじゃないんでしょう?」

「恐らく生きているとは思うのだが……　邪気と化した虎王は見付

けて滅ぼしたのだが奴もどうやら取り逃したようだ」

『 本当ですか兄上 』

亀王の言葉が信じれず兄に問い質す

「フォンフー 事実だ。 俺の血を使いイェンを捜し出したのだが既にお譲ちゃんはいなかった。 クソ… インフーがこれを知れば悲しむ… 何て言えばいいんだ 」

『 あのバカ女、 大人しく助けを待っていられないのか 』

狭間の世界は無限に広がる闇の世界、迷えば一生そこから出る事は出来ず彷徨い人間のレイカでは長く生きられないだろう

「ねえレイカちゃんの残して行った物で探し出せないのチョンマゲ」

すると王妃の言葉で一斉に皆がレイカの神核に目をやる。

≪ 神核が輝く限り龍王の娘は生きているが龍核と娘の繋がりは髪の一本のか細い物… だが居場所を知るには十分だろう ≫

そう言うと神核を握り込み何やら神語を呟いたかと思うと掌を開くとそこには以前と同じ黒真珠の首飾りに戻っていた

≪ この神核はあまりに強い、もしまた虎王のような者が手にすれば再びこの世界が揺れるやもしれぬので封印をした。 真の主の元に戻れば封印が解けよう ≫

それまでの力を秘めているなどレイカの力の奥深さに今さらながら

に驚く

「では余が捜して来よう」

亀王が名乗りを上げ首飾りを受け取ろうとするが神は首を振る

≪　先程もそなた達がこの世界を一斉に離れた所為で世界が歪みを起こし始めたのだが私が押えた…本来なら天帝がいれば安定しているのだが不在の今は王達まで離れれば崩壊を期するだろう…　私の力にも限りがあるのでもっと神力の弱い者が行くしかない　≫

「ならば私に行かせてください」

名乗り出たのは青龍国の丞相だったが又しても顔を振る

≪　そなたでもまだ神力が高い　≫

『　ならば俺が行く　』

この中で一番神力が低いのは俺だ、このままレイカを見捨てる事など出来ようはずがない
だが俺でも首を振られてしまう

『　どんな奴なら良いんだこの糞爺ーーー　』

つい　いらつき暴言を吐いてしまうが皆も同じ様子で誰も何も言わない

≪　……　神力を封じれば良いのだが　その覚悟が出来るか　≫

それならそうと最初から言えばいいものを
年寄りはまどろっこしくていけない
「では私が。　レイカ様は我が国の皇女様　丞相である私が捜し出すのが筋です」
何故か俺を牽制するように睨まれる。
ま……俺はどちらでもいい
≪　ならばそなたが行くがよい　私の前に　≫
「はい」
≪　今からそなたの神力の殆どを封じるが身体能力はそのままにする　≫
そう言い丞相の額に指で何かを描くと額に文字が浮かび上がり消えていった。
≪　誰かこの者に瞑道を開けてやるがよい　≫
≪　オ父サン　ハク　モ　行ク　レイカ　助ケタイ　≫
≪　よかろう　これを持って龍王の娘を捜すがよい　≫
≪　ウン！　≫
ハクはレイカの首飾りを受け取るとそのまま丞相の肩に乗る

すると思いがけず丞相はハクに柔らかな微笑みを浮かべる

「皇女様を共に捜しましょう」

《　ウン　捜ス　》

そして丞相とハクのレイカを捜す長い旅の始まりだった。

そして一人と一匹が瞑道を抜けて白虎国から旅発つのを俺は静かに見守り何時かレイカを連れで戻って来るのを神獣の森でロウと共に待つ事にする。

王達もそれぞれの国に仙鳥に乗り帰国して平時に戻っていく

俺はインフーに別れを告げると共にレイカの事を教えると泣き崩れ暫し荘園に滞在しインフーが落ち着くのを待ってロウと共に神獣の森に旅だった。

青龍国には使節団に事情を説明する為に第二皇子の兄上が同行し龍王に謁見しレイカと丞相の事を報告すると

「では余は静かに二人を待つ事にしよう……」

目を閉じそのまま口を噤んだだけだったらしい…

帰国した兄はインフーと俺の荘園で一緒に暮らし始めたらしいが、
その後は知らず何れレイカと共に訪れよう

父王は直ぐに正気に戻り、第三皇子を突然死として国民に発表し王
として復権をはたすが、国民は不信感を持つが何時しか忘れていっ
たようだ

俺はロウと待ち続ける

あの女はしぶといから必ず戻って来る

「フォンフー様　ただいま！」

きっと何事も無く笑いながら帰って来るだろう。

その日が来るのを今日もロウと昼寝をしなが穏やかな日差しの中で
待つのだった。

戴冠式の終りと新たな旅立ち（後書き）

次から新章が始まります。　此処でやっとキーワードの記憶喪失異世界トリップ　↓逆トリップ？が漸く生かされる……長かったですがやっとレイカの恋愛が書けそう。新章は此処まで来ればお分かりのように現代日本ですので期待をせずお楽しみください。

老人の追想

一人の老人が見事な百合の花束を持って崖の上に立っていた。

年の頃は六十を超えている様だが背も高く確り背筋を伸ばし、彫の深く眼光の鋭い瞳には悔恨の色が混じり寂寥感が漂っている。

「後数年でお前の元に行けそうだ……」

そう言いながら花束を崖の上から海に投げ落とした。

それから老人は踵を返して松林を抜けると駐車場に出ると黒塗りの車が一台だけ止まっており運転手らしき男が老人に気が付くと急いで側に駈け寄る。

「旦那様、日差しが強いのでお戻りになさって下さい」

「いや、　少し海岸を歩く」

今日の日差しは7月下旬で猛暑を通り越し酷暑で早朝だと言うのに既に３０度近くに気温が上がっており立っているだけでも汗が噴き出して来る。

運転手は主人にそれ以上言えず同行する為に老人の後ろをついて行く

老人は確りとした足取りで緩やかな坂を下って行くと広い砂浜に出

るのだった。

此処はキャンプ場と海水浴場の両方があり近くにあるリゾートホテルが管理する施設

だがこの夏の盛りだと言うのに利用者は一人もおらず閑散としており人っ子一人おらず老人と男だけが砂浜を歩いている。老人はホテル業を始め不動産業、レストランを多角経営す大沢グループの会長を務めている為、その権限を使い七月二六日は貸し切りにして誰も入れないようにさせていた。

それは一人の少年を死なせてしまった事への悔恨と贖罪の為の行為で自己満足でしかなかった。

老人は砂浜を一歩一歩踏みしめながら過去を思い出す。

アレは高校二年生の夏のサマーキャンプでの出来事

あの頃老人は大沢大貴は両親に反発して素行の悪い連中と付き合っていたが頭の出来は悪くなかった為に県でも一番の進学校を無理やり受験させられたが、テスト用紙を白紙で提出して入学などする心算など無く筆記用具すら持って来なかった。

受験会場にも行きたくなかったが両親に無理やり会場に押し込まれたのだ

学ランも着崩して怠惰な様子で椅子に座りながら周りを見ればきっちり制服を着た優等生面した生徒ばかりで如何に自分が浮いているのにウンザリして目を瞑っていると横から少年が声を掛けて来る。

「筆箱忘れたの？　これ使って」

そこに置かれたのはシャープペンと半分に切られた消しゴム

つっ返そうと思い相手を見ると柔らかい頬笑みを湛えている少年に一瞬目が離せなく茫然としてしまう。少年はそのまま単語帳に集中し始め俯いてしまうがその横顔をつい見てしまう。

サラサラの長めの髪に長い睫毛、白い肌は女のように綺麗で顔立ちが整っているが地味な印象だが穢れを知らないピュアなイメージ

此処は進学校でかなりの受験倍率で一人でも蹴り落としたいと思っている奴らばかりの中でこの少年はとんだお人好しのようだ

自分でも良く分からないが気になってしょうがなく横目で見続けていた。

それから直ぐに監督官が来て試験が開始されると何故か答案用紙を全部埋めてしまい、合格してしまった。　あの少年にはシャープペンを返すじまいですれ違いでそれっきりだったが、入学式で会えるかと思うと胸がざわめくのを思い出す。

入学式で直ぐにその少年を見つけられ嬉しかったが声はかけられないじまいで終わり、しかもいざ入学をすれば肌が合わず学校は出席日数ギリギリで登校し校内でも既に落ちこぼれた奴を集めて街に繰り出し悪い遊びを教えて取り込んだ。真面目な奴ほど堕ちるのは早く親達は驚いただろう、進学校に進んだ息子が不良になってしまうのだからさぞかし慌てて取り乱しただろう。

校内でたばこを吸おうが屋上で授業をサボろうが教師は何も言わない

何しろ大沢はこの地方の有力者の家で親が私立のこの学校に多額の寄付をしていたからだ。

何でこんなくだらない学校に来てるのか自分でも不思議だが時折見かける少年に会いに来るためだと認めたく無かったが、二年の新学期に同じクラスにあの少年が居た。

水城藍　受験の日筆記用具を貸してくれたお人好し

奴の周りには常に人がおり優しい微笑みが周りに温かい空気を醸し出し取り巻いている。

俺とは全く違う人間

それから頻繁に学校に登校する俺は認めるしかなかった。

男でありながら水城藍に惹かれていると

だが、それを表に出す事は出来ず、ただ見ているだけだったが教室で思わず視線が合った時に藍に視線を逸らされた。

それが切っ掛けで嫌われていると感じ怒りがどす黒く湧き上って止められなかった。

今思えば素行の悪い私が真面目な藍には恐ろしい存在だったし周りも似たような反応だったのに、私を無視する藍が許せなかった。

若く独善的な当時の私はそのまま藍を虐めの標的にし始めると藍の周りから友達が消え教室でも一人で孤立して行ったのを喜んで見て

いた。

そして仲間に軽く藍を痛めつけさせ俺の物に成るよう脅したが堅くなに拒否するのに業を煮やしある計画を企てた。サマーキャンプの場所を大沢家の経営するキャンプ場を提供しそこにある父親の経営する高級リゾートホテルに藍を連れ込み暴行し俺の物にして写真を撮り関係を強要しようと考えた。俺の物にしたら大事にしてやる心算だったので別段酷い事だとは思わなかったのは若さゆえの残酷さだと今更ながらに後悔する。

だが計画は失敗した。

キャンプファイヤで皆が騒いでいる隙に藍を林に連れ込んだはいいが、思わぬ反撃に遭い取り逃してしまい松林を追いかけるが見失ってしまい仲間の一人が海に何かが落ちる音を聞いた聞き崖に急ぐが異変はなく恐ろしくなた俺達はホテルに戻り、不安を消すように酒を飲んで騒いだ

アオイはキャンプ場に戻ったと思い込んでいた。

翌日の点呼の時間に戻るとキャンプ場は藍が行方不明になったと騒ぎになっており真っ先に私達が疑われたが昨日は今朝までホテルに居たと口裏を合わせホテルの方でもそう証言させたので藍は崖から落ちて行方不明の事故か自殺として考えられたが遺体は上がらずそのまま自殺として忘れられてしまった。

俺達の所為で藍はおそらく崖から落ちて死んだ

直接的ではないが原因は俺達だ

罪悪感からか元は真面目な奴らだった仲間は一人一人と学校を辞めたり転校して行く中で俺一人は残り藍が戻って来るのではないかと待ち続けたがとうとう卒業式になっても帰って来なかった。

卒業式が終わり学校を去ろうとした時に女が声を掛けて来た。

「大沢君」

それは一年時藍と付き合っていた女でそれなりに可愛い部類にはいるが俺はこの女が気に食わなかったが最期だと思いを用件を聞く

「何か用か」

「あの日…　藍君に何をしたのか教えて。彼は本当に死んじゃったの？」

女は勇気を振り絞り震えながら聞いて来る。

「今さらその話か。　藍を殺していないし行方も知らない。俺が知りたいくらいだ」

藍の話はこの学校ではタブー

今まで誰も俺にその話を聞いて来るものはいなかったからこの女は俺同様に藍を忘れなかったのかと思うとむかつく

「藍君は自殺なんかする人じゃ無かった！　貴方が殺したのよ。あんな優しい藍君を虐める人で無しのくせに！　一緒の大学に行こうって約束してたのに……うっう…」

「藍を虐めてたのは確かだが、お前も助けもせず離れていった一人だろ…俺と変わらない」

そう冷たく言い捨てると女は泣き崩れその場にしゃがみ込んだが、そのままに立ち去る。

藍は死んでいない

そう思い込もうと何度もあの海に出かけ捜しまわった。

私はあれ以来ずっと藍を捜し続けている……大学に進学し親の会社を継いだのも藍を捜す為の手段で、金を使い捜してみたり貪欲に人脈を広げ情報を集めたが、なんの収穫も得られず反対に事業は拡大して行き私の代で大沢グループを築くが何の意味もない

結婚もしたが所謂政略結婚で愛もない仮面夫婦ながら子供は二人設け子供にはそれなりの愛情を注いだ心算だ

私のような寂しい子供にはしたくなかった。

両親も家同士を結ぶ結婚で割り切った夫婦で醒めているが自分達の役割を果たす似た者同士。厳格な父親に貞淑な妻で仕来たりの厳しいく大沢家の跡取りとしか見られない環境で育った私は中学で反抗しぐれてしまった為、子供達は自由に育てやりたい事はさせて本人の行きたい道にサポートするつもりだったが長男はホテル業を次男は不動産業の社長を継いでくれ各々家庭を築いて今では孫までいる。

私は順調な人生を送る事に罪悪感ばかりが募って行くのだった。

藍を調べて知った事だが藍の家庭も複雑で本当の父親は藍の赤ん坊の頃に亡くなり中小企業ながら会社社長の一人娘だった母親は親の勧める男と再婚し夫婦で会社経営をしていたらしく藍は家政婦任せで寂しい家庭の愛を知らず育ったようだ。

そんな境遇など感じさせず何時も微笑みを携える優しい少年でそんな陰など微塵もなく、恵まれた温かい家庭で育ったのだとばかり思い込んでいた。

私はそんな少年の命を自分勝手な欲望の犠牲にしてしまったのを後悔し続けている。

自分はのうのうと生きているのが辛く何度も死のうと思ったが遺体が出ない内は生き続けようと思い直し今日まで来てしまったのだ。

無様な自分を自嘲しながら海岸を歩き続けると砂浜に何か倒れているのに気が付く

恐らく白い服を着た人間

「まさか　藍……」

有り得ないと思いながら倒れる人間の側に運転手と駆け寄ると、それは長い髪の少女が波打ち際に倒れている。

急いで抱き起こすと息はあり気を失っているがその顔を見て愕然とする。

「藍……　似ている」

少女の顔は藍に酷似している。既に四〇年以上過ぎたがその面ざしは今でも克明に覚えて居たので間違いない

「藍の子供……　否、孫？」

近親者としか思えないほど似ており丁度一六歳の孫娘と同じくらいに思えた。

「何をしている。この娘を急いで病院に運べ」

「はい！　旦那様」

運転手に少女を抱き上げさせ急いで自動車に運んで病院に急がせる。

自動車の後部座席で膝枕をさせ上着を掛けて繁々と少女を見る。

見れば見るほど藍に思えてならない

しかも藍が消えてしまった海で同じ日に

とても偶然とは思えなかった。

もしかすると藍の居場所の手がかりになるかも知れない

お互い老いてしまったが一目会い詫びたかった。

私は漸くこの枷から解放されるのではないかと希望を見出しながらその美しい顔を眺めるのだった。

老人の追想（後書き）

なんてご都合主義な展開だと私も自覚していますが私の趣味なのでご了承ください。

＊飲酒と喫煙は二十歳を過ぎてからで、決して未成年の喫煙及び飲酒を認めておりませんのでご了承ください。

葵と藍

――二年後――

一人の少女が老人と高級車の後部座席に乗っている。

少女は長い美しい黒髪を二つの三つ編みにして垂らしており茶色に白のラインの入ったセーラー服を身に包んだ清楚な雰囲気。長い睫毛に縁取られた黒い瞳は大きく小さな愛らしい唇と優しげな顔立ちではあるが黒い瞳には強い意志が感じられる。一方老人は白髪頭を綺麗に後ろに流しダークスーツに彫の深い顔立ちだが少女を見る目は優しげだ

「葵、今日から学校だが大丈夫か」

「おじい様は心配しすぎ。編入試験だって高得点だったんだから」

微笑みながら少女は呆れながら老人に言うと老人は一瞬目を見張る。

藍……

そこに嘗て愛した少年の顔を見出し息が詰まるのだった。

あの日海岸で助けた不思議な少女には記憶がなかったばかりか、不

思議な言語を操り最初は言葉が通じず、少女もかなり混乱をしてパニックを起こし泣き叫び大変だったが日に日に落ち着きを取り戻して一月もしない内に日本語を日常会話程度ならマスターしてしまい流暢に日本語を話し英語すら話せる程、しかも小学生程度の知識もなかったが今では高校に入学が可能なほどに学力を身に付けた。しかもそれを僅か二年で習得したのだから驚くべき知能の高さだと少女に付けた家庭教師も驚愕するばかり

その間も少女は一向に記憶を取り戻せず身元も分からない為に身元引受人として大沢が引き取り家で孫のように可愛がり暮らし始めたのだ。

それは藍に対する贖罪であるのは間違いない

名前も大沢葵を名乗らせており何不自由がないように生活を送らせ、それを息子達が冷ややかな目で見ているのを知っているが無視をした。

藍は全てを受け入れ優しく包みこむような少年だったが、少女は容姿は優しげで藍には似てはいるが内面は全く違う。記憶をなくしながら気丈にこの世界を受け入れ自分の道を切り開こうとする意志の強さは少女でありながら感嘆せずにはいられない。

自ら高校に通い勉強をしたいと言い出した時もまだ早すぎると反対したが奨学金や定時制で働きながらでも自分の力で通うと言いだすので此方が折れてしまった。

高校を通わすのに反対した理由には人種的には日本人だが一つだけ特殊な身体的特徴があるからだ。

それはあるべきはずの臍がない、人間や哺乳類にあるべき臍がない人間など存在するはずがなく駆けこんだ病院の医者には厳重な口止めをしておいたが世間に知られれば好奇な目で見られるのは必至、少女を守りたいと言う思いが過剰に働き過ぎているのかもしれない

この少女が孫のように愛おしかった。

車が校門の前に停車すると門には私立聖桜花高等学校と書かれており県内でもトップの進学校でそこに入るならと許可したのだが編入試験にほぼ満点で入ったのだから2年前まで日本語すら話せなかったなど信じられない。

「旦那様着きました」

「ああ　本当に着いて行かなくてもいいのか？」

「大丈夫。尚吾さんも居るから」

「そうか」

まるで子供が独り立ちして行くような寂しさが募る。

コン　コン

そこへガラス窓を叩く音

「尚吾さんが迎えに来てくれたから行くね」

窓を叩いた少年がドアを開けて少女を促す。

「葵　おはよう！　あっ、おじい様お早う御座います」

少年は高身長で深い彫の整った顔立ちの好青年だった。

「尚吾、　葵をくれぐれも頼むぞ」

「はい。　悪い虫が付かないよう確り見張っておきます」

そう言う少年が一番気がかりなのだが、葵が受け入れるならそれはそれで良かった。

大沢尚吾17歳は次男夫婦の長男で葵を任し正式に大沢の一族に入れば自分の死後も安心出来る。

「二人とも私はそんなにもてませんよ。それより尚吾さんのファンに虐められないか心配」

「葵ならやられぱなしは無いだろ。反対に虐める方が心配だよ」

「むぅ　酷い！　職員室には一人で行くわ。　おじい様行って来ます」

「葵待てよ！　それではおじい様」

そう言って尚吾を振り切り一人で駆けていく葵を急いで追いかけていく尚吾を見送りながら自分の役目はソロソロ終わりなのかと思い始める。

少女はこの見知らぬ世界を一人で必死に羽ばたき飛び立ととしている今、引き留めるのは年寄り我儘

後は少女を見守っていくしかないのだと登校の生徒達の中に消えていく姿を見詰めるのだった。

藍　お前は一体どこで何をしているのだろう

もしあの娘がお前の血縁者なら、何処かで幸せに暮らしているのだろうか

そう願わずには居られなかった。

「葵！　待てって言っただろ」

「話しかけないで。　周りが私に注目するじゃない」

私は成るべく平穏な学校生活を送りたいのでこの酷く目立つ容姿の男と親しげにしたくなかったし、この男の居る学校にも通いたくなかった。

実際今も登校中の生徒達が私達を不躾に眺め、女生徒には敵意のある視線も含まれているのに気付いている。　私の容姿はそこまで人

目を惹く程綺麗では無いののを自覚しているので明らかにこの男、大沢尚吾の所為だ

１８０を超える身長に今時の若者らしいスタイリッシュな髪型に彫の深い顔立ちはハーフのような容姿は何処か甘く女の子の憧れの王子様フェイス。もてない訳がなくかなり遊んでいるとお姉さんの紫さん情報で知っている。

「俺が居なくても葵ならその内に校内で有名になるんじゃないか」

「どうして？」

私のような地味な女が注目されるなんてあるだろうか

「校内順位が張りだされれば一発だろう」

「ご心配なく、その辺は抑える心算だから」

「うー　嫌みな女だな」

「私は目立ちたくないんだから尚吾さんも私には構わないで」

おじい様の手前この男に頼るような事を言ったけど実際は近寄りたくない

嫌いではないけどいやに私にかまって来るので鬱陶しいのが本音

恐らく私の境遇を面白がって興味本位なのだろう

何しろ私には2年以前の記憶がなく記憶喪失と言う脳の疾患を患っ

ている。

目を覚ました時自分の名前や親のすら思い出せない恐怖は今でも時折思い出したようにパニックの発作が続いており、しかも私は日本語はおろか地球上に存在するかどうか分からない言語を話していた。

一体自分は誰なんだろうと絶望で最初は暴れ泣き暮らしたけど助けてくれたおじい様の愛情と援助のお陰で立ち直り何不自由なく暮らせるのを感謝している。

年頃の近い孫である兄弟を紹介されたのは一年程前で、姉の紫さんは派手な美人ながら確り者で優しくしてくれ本当の姉のような存在だけど弟の尚吾さんは最初は無関心で冷たかった様に思っていたのだけれど何時の頃から犬のように擦り寄って来る

「葵は二年に編入するんだろ。どうせなら三年の俺のクラスに編入すればズーッと一緒なのに」

少し拗ねたように言うが大きい男だから可愛いとは言い難い

「心にも無い事を言わなくてもいいですよ。　職員室が見えてきましたので大沢先輩有難うございました。　後は一人で大丈夫ですから」

そう言って軽く会釈して足早に職員室に入って入室し尚吾さんを振り切るのだった。

可愛くない女だと思うけど私は目立ちたくない！

普通の少女が味わう高校生活が送りたいだけ

一応大学まで進学して就職をしてからおじい様にして貰った事を返して行きたいと思っている。もし私を助けてくれたのがおじい様で無かったなら施設に預けられ境遇はもっと違った物になっており今ほど恵まれなかったのは容易に想像できる。

最悪な状況であったけど幸いでもあったと前向きに生きる事を決めた私

私は過去を捨てた訳ではないけど思い出せない物は仕方ないと諦め、大沢葵として生きる事を選んだのだった。

担任の教師は三〇代の数学の横田先生で眼鏡を掛けた神経質そうながら綺麗な顔立ちで女生徒にもてそうで横を歩く私より少し背が高いだけで小柄なのが難点かもしれない

「大沢は帰国子女だそうだがアメリカのシアトルの高校に通っていたそうだな」

記憶の無い事や日常の不自然さを誤魔化す為にそう言う事にしておいた。

「はい。　両親の仕事の都合でずっと向こうで生活をしていたので日本の学校は初めてで少し不安ですが宜しくお願いします」

「礼儀正しいんだな大沢は、きっと両親の躾が良かったんだろ」

「いえそな」

「ご両親はアメリカに留まっているそうだが、今は大沢尚吾の祖父の家から通っているでいいんだな」

「遠い親戚に当たるので大沢のおじい様が快く引き受けて下さったんです」

「そうか。慣れない環境だろうが頑張ってくれ」

廊下を歩きなが身上調査のように聞かれボロを出さないかひやひやしたがどうにか誤魔化せたようだ。

それから2年Aのプレートが掛かった教室に入り、教壇の前に立つと３０人近くの生徒達の目が一斉に此方を見ており初めての経験で少し慄いてしまう

社会生活に慣れる為に何度も紫さんと買い物に連れて行って貰ったりして人混みには慣れていたけど教室と言う空間は一種異様に感じてしまう

こんな狭い部屋で同じ年頃の少年少女が整然と机と椅子に納まり同じ服に黒い髪

とても異和感を感じてしまう

何故だろう???

「自己紹介をしてくれ」

「大沢葵と言います」

名前だけ言うと暫らく沈黙が続くと横田先生が困ったように言う。

「それだけか？」

「はい」

記憶の無い私に自己紹介はかなり難問であまり嘘も付きたくなかったので名前だけにしておく

「それじゃあ委員長の三沢に後で学校を案内してもらえ。　席も三沢の席の横だ」

そう言って一人の生徒を指さすと眼鏡を掛けた小柄な少年で大人しそうな印象

席に着く時に一応声を掛けておく

「宜しく三沢君」

「あ…　宜しく」

小さな声で返事をしてくれるが恥ずかしそうに俯いておりかなりシャイな男の子のようだ。　反対の横には女子がいるので後で声を掛けてみようと考える内に女性教師が入って来て古典の授業が始まると教室は教師の声と黒板に当たるチョークの音と生徒が立てる筆記

の微かな音しかしない。

考えていた高校生活とは少し違い戸惑う

テレビのドラマで見る授業風景は先生と生徒がふざけ合い楽しそうだったのに

期待とは違ったけどまだ始まったばかりだと授業を静かに聞いていると

「編入生の大沢さんだったかしら、ノートを取らないなんて余裕かしら」

嫌みな感じで私に声を掛けて来る女性教師は私を睨んで来る。

??

「そう言う心算はありません」

「編入試験でもかなり成績だったようだけど前へ出て此方の問題を訳を書いて下さい」

私は言われるままに黒板に訳を書いて行くと益々教師の顔は険しくなってきて、何か間違っているのかと思い書き終わる。

「先生終わりました」

「……正解です。　席に座っていいですがノートは確り取りなさい」

「すいませんでした」

素直に謝り席に着くと授業が再開されたので仕方なくノートに黒板を写して行くがあまり意味が見出せないけどノートを取るのが普通のようだ

普通が分からない私は周囲を良く観察して真似をした方がいいのかも

古典の時間は始終不機嫌な女性教師のせいかピリピリとしたまま終わってしまい休み時間に早速三沢君に聞いてみる。

「三沢君　先生は何を怒っていたの」

「えっ…　ノートをとらないから」

「違うわよ」

私の前の少女が振り返って話に割り込んで来る。

「私は中埜乃ノ華よ」

大きな瞳で緩く髪を内巻きに巻いた可愛い少女だ

「中埜さんは理由を知ってるの」

「乃ノ華でいいわ葵。あの古典教師は大沢君に気があるから仲良く登校してきた葵が気に食わないんだけ。　でも女子生徒の半分は同じだと思った方がいいわよ」

どうやら予想以上にモテルようだけど先生まで虜にするとは尚吾さんは何をしたのやら

やっぱり面倒な男だ

「乃ノ華もその一人」

「私は葵と仲良くなって大沢君に近づきたい派」

「そう。じゃあ仲良くしましょ」

ニッコリそう笑うと

「葵て変わってる…そこはひくところよ」

「そうなの？　でも目的が分かっているんだから安心だわ」

恐らくこの子はそんなに悪い子では無い気がするし尚吾のファンと言うのも嘘のような気がする。

突然廊下が騒がしくなったと思うと尚吾がドアからヒョッコリト顔を出して私を呼ぶ

「葵！」

絶対に態とだ

私が目立ちたくないと言ったのが逆効果だったと後悔するが遅い

仕方なく立ち上がり乃ノ華に一緒に来ると目くばせすると首を振るので一人でドアに向かいそのまま尚吾さんの腕をとりひっぱて行くと教室で女子達の黄色いどよめきが起こり頭痛がしてきた。

非常階段の人気の無い場所を捜し出して、この無神経な男を睨みつける。

「私を虐めて楽しんでいるなら今後一切尚吾さんを無視するから」

「チョッと心配で見に来た俺にそれは無いだろ」

「古典の美人教師に私は睨まれ、教室に戻ったらクラスメイトの女子に無視される私をどうしてくれるの」

「うっ　これからは気お付けるから許して。　それにお昼を一緒にとろうと誘いに来たんだ」

「無理！　学校では私に今後声を掛けないで」

そう冷たく突き放すが全く意に介していなさそうな男

「ちぇっ　折角学校で頻繁に会えると思ったのに…　なら土日に遊ばないか」

「おじい様と出かける予定。　私を誘わなくても尚吾さんなら相手に困らないでしょ」

「じじいがライバルかよ…　俺の方が断然いい男だし若い！」

以前は気持ちが良いくらい私に無関心だた男がこれではまるで私に気があるようだと勘違いしてしまいそう

「最近の尚吾さん可笑しいわよ??」

「葵が鈍すぎるんだ！　俺は葵が好きだって何度も言っている」

確かに最近会う度に好きだと言われたけどあまりにも軽い言葉遣いでからかっているのだとばかり思っていた私

「本気だったの……てっきり冗談かと…」

「じじいだって俺が葵を狙っているのを知っているけど何も言わないのは何故か知ってるか」

「おじい様が！」

おじい様が尚吾さんの気持ちを知っているなんて更に驚く

「どうやら葵の結婚相手に本家の従兄か俺を考えているらしいから気が気じゃないんだ。それに此処に通えば通ったで葵に近づこうとする男が現れないかと心配なんだ」

日本の法律で十六歳から結婚出来るのは知ってるけど晩婚が進む日本で今から結婚なんて考えられない。本家の従兄と言えば二十六歳になる将人さんと大学生の有紀さんだけど二回しか会っていないけど私に対しいい印象を持っていなかったような気がするんだけど

「私より綺麗な娘なんて大勢いるのにそんなにもてるはずないでしょ」

「葵は分かってない！　確かに容姿は地味目だけどその凛とした態度や立ち振舞いが綺麗で人目を惹くし段々葵の魅力に気付くと男どもが絶対寄って来る！」

地味……

華やかな紫さんを毎日見ているから仕方がないよね

「／／／　有難う　最初は引っかかるけど」

「ゴメンでも俺にとって葵は世界一綺麗だ！　だから付き合ってくれ」

必死に私を見つめる

本気だろうかとマジマジと尚吾さんを見詰め返すと何を勘違いしたのか抱きしめて来る。

「きゃっ」

「絶対大事にするから俺を選んでくれ」

初めて男の人に抱きしめられドギマギするが尚吾さんを好きかと言われると分からない

分からない＝愛していない

そんな図式が思い浮かびこのまま大人しく抱きしめられていると身の危険を感じ思いっきり足をかかとで踏みつける。

ガッツン！

「ぐっ！！」

私から離れると恨めしそうに私を見る

「私は尚吾さんをそう言う対象とは見ていない様なのでゴメンなさい」

ぺこりと頭を下げる。

「俺の事嫌いか」

「嫌いじゃないわ」

「それじゃあ可能性はあるんだろ！　これからガンガン攻めていくから宜しく」

「はぁ？！」

私は反論しようとするが脱兎の如く非常階段を嬉しそうに駆け降りて行く尚吾さんを呼び止めるのは不可能だった。

「こうなったら尚吾さんに近づかなよう避けなくちゃ」

そう思いながら非常階段のノブを回し扉を開くとそこから傾れ出るように女子達

「「　……　」」

気まずい沈黙が続く

女の子の集団はやわらと立ち上がると私を睨みつけながらその場を

急いで立ち去るのを見送るが、尚吾さんが私に告白した事が学校中に知れ渡るのは時間の問題だと悟ってしまった私

「もしかして尚吾さんに謀られた?!」

これで私は嫌でも目立ち普通の高校生活とは程遠い生活を送りそうで暗たんとした気分に陥る。

「こうなったら普通でいるのは辞めよう。　攻めこそが最大の防御よ」

記憶喪失の私には平穏を望めないのかもしれないが最大の敵が尚吾さんだと認識してしまった私

「覚悟して下さいね尚吾さん」

身勝手な男に私の鉄槌を下すべく思案するのだった。

初登校

それから私はクラスの女子の殆どから無視に遭うという初歩的な虐めが始まるけど気にしないで淡々と授業を受けて昼食は尚吾さんが来るのが予想でき急いで校舎裏のひっそりとした場所に逃げ込む。

「ドラマや小説だとヤンキーと言う人種の溜まり場らしいけど居ないのね」

日陰の校舎裏は狭くてヘンス沿いに木が植えられているだけで煙草の吸殻は無いしゴミ一つ落ちておらず拍子抜け

どうやら現実とドラマは少し違うようだけどこれなら誰に気兼ねする事もなく静かにお弁当を食べられそうだと雑然と置かれている石の一つに座り家政婦の佳代さんが作ってくれた美味しそうなお弁当を食べ始めようとするが

「本来なら友達と机を寄せて楽しく食べる予定だったのに」

あの一方的に想いを押し付ける男の所為で独りぼっちだ

私を好きだと言うならもう少し私の立場を考えてくれるはず！

尚吾さんの事を考えるとムカついて、なんだか食欲が無くなりお弁当の蓋を閉めるが残して帰ると佳代さんが心配するだろうか

思い直してもう一度開けようとすると何時の間にか現れた遠目で私を伺う金髪頭の男子と視線が合う

「あっ　ヤンキー　」

途端に嫌な顔をして私を睨んで来るが別段怖くは無い

でも初対面でヤンキーは失礼よね

「ゴメンなさい。初めて本物を見たから思わず言っちゃいました」

立ち上がって頭を下げると変な物でも見るように私を見詰めるヤンキー青年

呆れたように溜息をつき踵を返して校舎裏から立ち退くとするので呼び止める。

「私は大沢葵って言うんだけど少しお弁当に付き合って欲しいの。駄目かな」

一人だと食欲がわかないけど二人なら食べれそう

ヤンキーは振り返って更に私を訝しそうに私を見ると二ヤリと口を歪めて私に近づいて来る。

良く見ればかなりの身長に眼つきはは鋭いが結構な美形で尚吾さんとは全く逆のタイプ

そんな綺麗な顔が何時の間にか私の目の間に迫って来て今にも唇に触れそうになっているので驚いて思わずしゃがみ込みそのままヤンキーの鳩尾に頭突きを食らわしてやると尻もちを着いて倒れてしまう

「この糞女何しやがる」

糞女……なんだか懐かしい響き???

地面に座り込み私を威嚇するように睨みつけるのを私は仁王立ちになて見降ろす。

「私に変な事をしようとするからでしょ」

ヤンキーは突然腕を伸ばして長い三つ編みを掴むと自分の方にひっぱるのでバランスを崩しヤンキーに倒れ込んでしまう。

「キャッ!!」

すると私がヤンキーを押し倒している体制になってしまい慌てて跳び起きようとするが三つ編みをグイっと更にひっぱられと同時に唇に何かが触れたと思うと美形のドアップ

もしかしてキスされてる!!!!!

しかも舌が割って入ろうとするのを阻止しつつ私の膝をヤンキーの股間に強く押し付けて体重を乗せる

グッリり

「×＊@！！！」

声に成らない悲鳴を上げ三つ編みから手を離し股間を押えて痛みにジッと耐えるように動かなくなった。矢張り女の私には理解できない痛みだけどか弱い少女の身ではこうするしかなかった。

「ヤンキーじゃ無くて痴漢だったのね。犯罪は割に遭わないから欲求不満なら風俗に行った方がいいよ」

そう忠告してあげる。

「バカヤロー　法令で風俗は１８歳未満が入店できるか！」

「へー　そうなんだ知らなかったわ」

一般常識に自信が無く主に雑誌や小説とテレビから得た知識が多いから今度法律関係の本も読んだ方がいいのかもと思い当り図書室に行こうと思い立つ。

「図書室は何処にあるの」

「何故そこで図書室だ？」

「少し法律を勉強しようと思って」

「……３号棟の２階」

信じられない物でも見るように私を見ながらも親切に教えてくれる。

「有難う。お礼に私のお弁当あげるから、放課後に２のＡの教室に

返しに来て」

何故か茫然としているヤンキーにお弁当を押し付けて私は図書室に向かうのだった。

早速図書室で司書の先生からのアドバイスで日本国憲法と民法を初心者向けに解説した本を数冊借りてから教室に戻ると女子には無視され男子はチラチラと好奇心で私を見て来た。

席に座ると三沢君は参考書と格闘しており私にも気付かない無いようで横からこっそり覗いてみると指数不等式の問題

「底3は1より大だから　2x＋2　＜　4　だよ」

「あっそうか……エッ！！」

驚いたように私を見た途端に真っ赤になり俯いてしまい、つい可愛いと思ってしまう。

朝から尚吾さんやヤンキーを相手にしてるから癒される。

そうか、これが癒し系かと納得

「ねー　昼休みに大沢先輩が教室に来た」

「うん　でも大沢さんが居ないと直ぐに立ち去ったみたい」

目も合わせず小さい声ながらチャンと答えてくれる。

それに意外な事に乃ノ華が話しかけて来てくれる。

「葵はお昼休みどこに行ってたの」

「図書室よ。　それより私と話しても大丈夫」

「平気よ　私は葵から大沢先輩の情報を引き出すスパイだから」

「成程、それじゃあ情報料として放課後付き合って」

「ＯＫ　何をするの」

「校舎と部活を見て回りたいの。三沢君も一緒にお願い」

「えっ　僕も？」

「先生に頼まれてたでしょ」

こうして放課後三人で校舎を案内して貰う約束をするのだった。

そして放課後になり三人で教室を出ようとすると廊下に金髪のヤンキーが立っており、下校中の生徒は一様に彼を避けるように足早に通り過ぎていく。

ヤンキー君は私を見つけると手に持っていたお弁当を私に投げつけるので慌ててキャッチ

「葵　美味かったぜ」

「食べてくれて有難う」

そのまま素っ気なく踵を返して帰って行くと周囲は呆気にとられた様に私を見てからヒソヒソと話ながら通り過ぎていった。

どうやら新たな話題を提供してしまたようだけど普通を諦めた私にはどうでも良かった。

「ね……　一年の矢崎と知り合い」

「一年！　年下に呼び捨てにされた」

「……その様子じゃ知らないらしいけど彼にはあまり近づかない方がいいよ」

「ヤンキーだから」

「ただのヤンキーじゃ無くって矢崎組ていう暴力団の跡取り息子なの。下手に関わると危ないわよ」

暴力団！つまりヤクザ！

本当に存在するんだと学校生活と言うのもかなり刺激的なんだと知る。

「でも親がヤクザでも矢崎君はただのヤンキ―高校生なんじゃない」

「葵は変わってるのね　普通の反応はこれよ」

そう言って三沢君を見ると廊下に座り込み真っ青だったし乃ノ華の顔も少し引き攣っている。

此処は私立の進学校だから矢沢君はかなり異質なのだろう

どうやら腰の抜けている三沢君に手を差し出す。

「さあ　立って、早く案内して欲しんだけど」

ここでグズグズして尚吾さんに遭いたくない

おずおずと私の手を恥ずかしそうに握り顔は真っ赤になる三沢君を引っ張りあげる

「乃ノ華　これも普通の反応？」

「委員長の場合女の子に免疫の無いチェリー君だから、今時手ぐらいで赤面するのは珍しいわ」

チェリー君？　どういう意味か聞きたいけど止めておく

なんだか聞いてはいけない様な気がするし、乃ノ華の言葉により一層顔を赤らめているのであまり良い意味で無いのが分かる。

それから放課後の校舎を三沢君に案内して貰いながら乃ノ華はもっぱら私と尚吾さんの事を色々聞いて来る。

「大沢先輩とは従兄じゃないの」

「遠縁に当たるけど殆ど他人で知り合ったのも最近よ」

「大沢先輩が告ったて話は本当」

「本当だけど断ったわ」

「え〜〜　勿体ない。あんな高物件滅多にいないのに」

「私は自己中男は嫌いなの。　どちらかと言うと三沢君の方がタイプ」

「「　えっえーー　」」

「だって可愛いし、だから乃ノ華も好き」

「それって愛玩動物扱いなんじゃ無い」

冷たい眼差しで私を見る乃ノ華に僕ってペット？と呟く三沢君

「そんな心算は無いけど二人とも友達として宜しくね」

最低でも二人の友達を確保したい私はニッコリ微笑んで内心は必死

「まあいいよ～　葵って面白いから」

「僕で良ければ」

「有難う！」

私より背の低い二人を嬉しさのあまり一遍に抱き付くと三沢君は顔を真っ赤にさせて今にも倒れそうになるので確り抱きとめてあげる。

そして憧れのメアドを交換する為に携帯の電源を入れて見れば尚吾さんからのメールが一〇通と不在着信の行列

それを覗きこむ乃ノ華

「すごっく執着されてるね」

「メールアドレス欲しい？」

「遠慮しとく。なんだか大沢先輩ってイメージと違うみたい」

どうやらファンが一人減ったよう

一応三沢君にも聞くと大きく顔を横に振って拒否

私も着信拒否を設定して一歩ずつ尚吾さんへの反旗を示してあげるのだった。

大沢老人は夕方になると玄関でウロウロとしている

「旦那様、その様に心配しなくても葵さんは確りしたお嬢様ですから座ってお待ち下さい」

「そうだな……　　矢張り車を出して……」

「そんな事をしたら嫌われますよ」

そう言われ老人は諦めた様にリビングに戻って行く姿を呆れながら見送る。

今朝も葵がバスで登校すると言うのに初日だから心配だと車を出すほど葵に対して過保護で昔から仕える使用人たちは変われば変わるものだと驚いていた。

今は一線を退き息子達に経営を任せているが、昔は仕事一筋でここまで大沢グループを大きくしてきた男、側近達には常に厳しく目を光らせて一瞬も気が抜けず恐れられていた。

子供の教育に熱心ではあったが過保護では無くどちらかと言うと厳しかった。

孫に対してもそれなりに可愛がっていたが葵に対する程の愛情は示

さないのでまるで老いらくの恋ではと疑うほど

しかし長年勤めている佳代は死んだ奥様が良く愚痴っていた話を覚えている。

『信じれるあの人は昔の初恋の藍て娘を今でも捜してるのよ。本当に男ってバカね……そんなあの人を愛してしまった私も大馬鹿だわ』

恐らく葵さんは旦那様の初恋の娘に似ておいでなのだろう

その面影を重ねているのは確かなようだがあくまで肉親への愛情に留まっている。

「それにしても少し遅いかしら」

旦那様の事を過保護と思いながらも五〇代の佳代も葵を孫のように可愛がっている一人であり、少し外を見て来ようと玄関の扉を開けようとすると丁度葵が帰って来る。

「ただいまー　佳代さん！」

元気に明るい葵が玄関に入って来るだけで屋敷中が華やぐように明るく感じる。

「葵さん　お帰りなさい。　旦那様が心配そうにお待ちですよ」

「分かったわ。直ぐ御挨拶して学校の話を聞いて貰おうっと」

そう言って慌ただしくリビングに入って行く。

きっと旦那様は今頃新聞を読む振りをして何気なく演じているのが思い浮かびクスッと微笑んでしまう。

「このまま葵さんがズーッと旦那様の側に居て欲しいものだわ」

奥様を五年前にガンで亡くし一人寂しくこの屋敷に住んでいるが笑う事ない侘しい生活が一人の少女が来て以来一転してしまった。

記憶喪失の身元不明の不思議な少女を住まわせると聞いた時は不安だったが葵さんを知るにつれ可愛くて仕方が無くなっている自分

旦那様も同じなのだろう

この温かな幸せが続く事を切に願うのだった。

真っ暗な闇の中を歩いている私

『　皇女様……　』

皇女？

誰の事だろう

私の事？

遠くで呼ぶ声が遠のいて行くと突然男が現れる

『　余の血を受け継いだ事を呪うがよい　』

男は壮絶な美貌に殺気をみなぎられさせて剣を振り下ろし私を殺そうとすると絶望と悲しみで絶叫がほとばしる。

「嫌ーーーーーーーーーー　止めてーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

悲鳴とともに男は姿を消すが闇の中で一人取り残され恐怖で走れど走れど永遠の闇が続く

「助けて母様！　母様どこ　」

はぁ　はぁ　はぁ　はぁ　はぁ

走るのに疲れ立ち止まると目の前に人が立っており、そこに浮かび上がった顔は母様の顔

「母様！　会いたかった」

嬉しさのあまり飛びつこうとするがガラスのような壁が立ちはだかっていて触れられずガラスをガンガン割ろうと叩き破ろうとして気が付く

「鏡……　」

母親だと思ったのは鏡に映った自分だったのだ

そして耳元で誰かが囁く

『　例え同じ姿に成ろうと貴女は……様には成れない。　愛されなどしない　』

愛されない

私は愛して貰えない

「いやーーーーーーーーーーーーーーーー」

絶望でその場に座り込みただ涙を流して絶望するしかなかった

「葵　葵　目を覚ましなさい！　葵」

誰かが体を揺すって目が覚める。

「おじい様……」

心配そうに望み込むおじい様が悪夢にうなされる私を起こしてくれたよう

記憶を失ってから頻繁に良く見る悪夢

自分の存在を否定される恐ろしい夢

最近は少なくなったが、今夜は久しぶりに見てしまい気分は最悪だ

体を起こしてベットに座るおじい様に抱き付き甘える。

おじい様が優しく髪を撫でてくれるお陰で漸く自分の存在が許されているようで落ち着く

私が悪夢でうなされた時は何時もこうやってくれ、まるで父親のように感じる。

悪夢に出て来る父親

アレが本当の父親なら最低だ

あんな父親なんか要らない……

「暫らく私が側に居るから眠りなさい」

「ゴメンなさい　真夜中に起こしてしまって……」

「年寄りになると夜中には何度も目を覚ますものだから気にするな。
さあ布団に入って眠りなさい」

おじい様に言われるままに布団に入ると手を握って貰っている内に
何時しか眠ってしまう私だった。

学校に通い出し既に8日間が過ぎる頃にはクラスに大分馴染んで来
た。

クラスの女子とは乃ノ華を通して協定を結んでいるのでそれなりに
巧く学校生活を送っている。

協定内容は尚吾さんと携帯カメラでツーショットで写真を撮らせる事

もう一つは尚吾さんに学校内で近づかないのを約束した。　ある意味この条件は私の希望にも沿うもので願ったり叶ったり

クラスメイトの女の子達も別段尚吾さんの彼女になりたい訳では無くてアイドルに憧れるような感情に近いのだ。そこに私のような普通の女が彼女のように横に居るのが気に食わないだけ

問題は尚吾さん

アレから悉く無視しクラスの女子の協力を取り付けたお陰で顔すら合わせずに1週間経つとお姉さんの紫さんを通して泣き付いてきた。

「葵ちゃん　家の馬鹿もかなり反省したようだから会ってあげて」

それから着信拒否を解除して電話を掛けるとほぼワンコールで出て来たので驚く

「葵！　葵か！　もう無理に迫らないから会ってくれ！」

開口一番がそれだった。

「これから言う条件を聞いてくれるならもう無視はしないわ」

「分かった！　何でも言う事を聞く！」

どうやら人に無視されると言う事がどんなに辛いか身を持って分かって貰えたようだ。

「一つは私のクラスの女子全員と写メを撮る事」

「そんな事なら幾らでも撮るよ」

少し嬉しそうなのは気のせい

「それと学校では私に半径１０ｍの接近禁止及び会話も認めません」

「えっえーー　それは却下」

「却下するなら今後一切の接触禁止をおじい様に言い渡して貰います」

「卑怯だぞ！」

「好きだと言う女の子を虐めに遭う様な窮地に追いやる尚吾さに言われたくありません」

「うっ　そんな心算は無かったんだ」

「女の子達が聞いていると知っていて告白したでしょ」

「それは、葵が俺の物だって」

ブチッ

誰が尚吾さんのもの！！

そもそも告白が受け入れられると思っている所が嫌！

どれだけ俺様

トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル
トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル
トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル
トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル　トゥルルル
ポッチ
「何」
「わかったよ……　学校では近づかないし話しかけないで良いんだろ……」
「うん　分かってくれて有難う」
「ちぇっ　何でこんな可愛げのない女が好きなんだろ」
それは私が知りたいぐらい、このまま縁を切っても痛くも痒くも無いのだけど
「それじゃあ明日の朝私のクラスに来てね」
携帯を切ろうとしたが
「待って！　俺ばっかり割が合わなから一つだけ俺の願いを聞いてくれ」
必死な声に少し考える。
「うーん……　1つなら」

「よーーしっ！　次の土曜は俺とデートな」

「いいよ」

「やったーー！」

そんなに私とのデートが嬉しいのか疑問だけど嫌な気はしない

求められる事が嬉しい

悪夢の中の私は生まれる事すら否定されている所為だろうか

尚吾さんが本気で私を求めてくれるなら付き合ってもいいのかもしれない

今の時代は男女が付き合うのは割かし気軽のようだし

結婚なんて重い事を考えずともいい

「まあ尚吾さんの態度次第ね」

翌日の朝、私のクラスに尚吾さんが現れると女子達のテンションは

最高潮に上り我先にと写メを撮っている。

「葵見て、大沢先輩とのツーショットよ」

嬉しそうに携帯の画面を私に見せる乃ノ華

「ファン辞めたんじゃないの？」

「だって―　あれだけの美形と写メなんて撮れないし、絶対大沢先輩は有名人になるから記念よ」

女の子らしい強かな意見

尚吾さんは嫌な顔見せず次々と写真に納まり、他のクラスの女子が羨ましそうに見ているが、そこまで面倒を見られないし、学校生活を円滑にするには最低限クラスの女子を味方に付けれればそれでいい

強かなのは私かもしれないがこうなったのも尚吾さんが原因

きっちり責任はとって貰う。

撮影会はホームルーム直前まで続き担任と入れ替わるように教室を出て行くが

「約束忘れるなよ葵！」

そう言い残し消えていった。

その所為で一斉にクラスの視線が私に集まるがニッコリと笑って誤魔化す。

こういう場合はメールで言って欲しい。

今一気配りに欠ける男だが悪気がないのだろうのは分かっている。

性質が悪いだけと諦める。

放課後の図書館で三沢君と乃ノ華と一緒に勉強会をしているが専ら私が三沢君に数学を教えてあげており、乃ノ華はついで

「ねえねえ　約束って何？」

どうやらこれが聞きたかったらしい

「次の土曜日にデートをする事になったの」

「何それ…羨ましーー」

「代わってあげようか」

「違うの、私も葵とデートしたい」

「私と？」

「まだ休日に一緒に遊んでない」

「そっか、なら日曜日三人で遊ぼう」

「えっえ…　委員長も～」

「僕は…勉強があるから……」

「駄目よ三人で遊びましょ」

「ぶうー　仕方ないけど勉強は無しよ」

それからは勉強そっちのけで日曜の予定を話していると司書の先生に追い出されてしまうがそのまま約束をして校門の前で別れた。

バス停に向かうと路地の隅に金髪が横切った気がしたので引き返し小さな路地を覗き込むとヤンキーの矢崎君が座り込んでおり気分が悪いようだ

「矢崎君どうしたの」

屈みこんで顔を覗いてみると顔は殴られた様な痣と口に端が切れて血が滲んでいた。

ギロリと殺気だった目を私に向ける。

「葵か……　」

「私の方が年上なんだから葵さんでしょ」

「……」

「それより誰にやられたの？　学校の保健室に連れて行こうか」

「家から迎えを呼んだから構うな」

それなら放って置いても大丈夫だろうと帰る事にする。

「そう　それじゃあお大事に」

ガシ！

ところがスカートの端を捕まれる。

「また痴漢するるなら怪我人でも容赦しないわよ」

「肩をかせ……」

そう言いながら自分の上着を脱いで地面に敷いてそこに座れと言わんばかり

怪我人を放置するのも可哀想なので横に座ると図々しくも私の肩に頭を載せる。

「帰れと言ったくせに天邪鬼なのね。　それで誰にやられたの」

「この間絞めた他校の奴らだ」

「因果応報ね」

「最初に手を出したのはあっちだぞ」

「それでやり返されるなんて弱いの」

「相手は五人だ」

「でも漫画や小説じゃあ簡単に返り討ちじゃない」

「現実はそう甘い訳ないだろ……　疲れたからもうしゃべるな……」

そう言ってからは幾ら質問してもウンともスンとも話さないので諦めると寝息が聞こえて来る。なんだか野良犬に懐かれたような気分

金色の髪が頬に触れてこそばゆい

思えば初対面でキスをされたというのに、私は随分警戒心が無いのだろうか

「もしかしてアレは私のファーストキッス！？」

記憶の無い私にはアレが初めてなのかどうか確信は無いけどキスをされても別段何にも感じなかったという事は結構馴れてるのかしら？

もしかするとバージンでもない？？

恋人が居たんだろうか……

『　例え同じ姿に成ろうと貴女は……様には成れない。　愛されなどしない　』

夢のあの言葉はどういう意味だろ

私は愛されない存在だったの……

絞めつけられるような痛みが胸をつく

泣きたい気分になるけど矢崎君が居るので我慢していると車の停車する音とドアが閉まる音がした。

どうやらお迎えが来たのだろうと顔を上げると大きな男がこちらを驚いたように見ている。

「矢崎君のお迎え？」

「はいそうですが、貴女は…」

何故か私を警戒するように見降ろす男は鍛えた逞しい体にダークスーツをきっちり着た厳つく迫力があり正にヤクザ

「同じ高校なだけです。　矢崎君お迎えよ」

そう声を掛けると直ぐに目を覚ます。

「あっ……　寝てたのか…　」

「坊ちゃん　お迎えに参りましたので車にお乗りください」

坊ちゃん！！！

「ぷっーー　」

笑いそうになり思わず口を手で押える。

「溝口ーー　その呼び方を辞めろと言っただろ!!　　つっ…」

矢崎君は顔を真っ赤にさせ立ち上がろうとするが直ぐに足が痛いのか座り込む。

「坊ちゃん!」

男の人は急いで駆け寄り手を貸そうとするがその手を払い除ける。

バッシ!

「名前を呼べ!」

「申し訳ありません竜也様」

こんな厳ついおじさんを叱りつけるなんて凄いけどあまり見目よい事とは言えない。

「矢崎君　折角迎えに来てくれた人に態度が悪すぎるわよ。　おじさんに謝りなさい」

「「　……　」」

二人はまるで奇妙なものでも見る様な顔をして私を見詰める。

「チッ　　変な女　立たせろ溝口　」

年上を呼び捨てにする君の方が変だと私は言いたい。

おじさんは竜也君を持ち上げるように立たせると私に目礼してそのまま立ち去ろうとするので慌てて立ち上がり下に敷いている上着を返そうと立ち上がる。

「上着を忘れてる！」

竜也君はそれを受け取る。

「サンキュ……　じゃあな葵　」

「もう喧嘩しないでね　竜也君」

そう言ってニッコリ笑いかけると何故か顔を赤らめる。

案外恥ずかしがり屋なのかも

ツンデレ？

二人が黒塗りのベンツに乗り込んで帰って行くのを見送りバス停に急ぐ

すっかり遅くなりきっとおじい様が心配しているだろう。

道すがらヤッパリヤクザの車は黒塗りのベンツにガラスにスモークなんだと一人納得するのだった。

初デート

土曜日の朝は快晴に恵まれて絶好のデート日和で俺は遠足前のガキのように朝早く目が覚めてしまったのでシャワーを浴びて髪をセットして服も事前にコーディネイトしておいた服を着るだけだ。葵は爺さんの趣味で清楚なお嬢様風だから俺もそれに合わせる。

将を射んと欲すれば先ず馬を射よで葵の場合は爺さんに気に入られていないと交際は難しいだろうから好青年を装った服をチョイスした。

リビングに行くと紫が朝食をとっており面白そうに俺を見る。

「気合入りまくりね　空回りしなけりゃ良いけど」

「うるせ……」

「あらー　葵ちゃんに取りついであげた優しいお姉様にそれは無いんじゃない」

「土産のケーキを買ってくればいいんだろ」

「有名店じゃないと駄目よ」

そこへ俺の朝食を運んできたお袋が参戦して来る。

「私も食べたいからお願いね」

「なら小遣いをくれ」

「それじゃあお土産にならないわ。　それより葵ちゃんに変な事をしないのよ」

「大丈夫よママ。尚吾は今だに手も握ってないみたいよ」

「まあ尚吾がそんなに奥手だとは知らなかったわ」

「うるせー」

これ以上女どもの話のタネになりたく無く朝食を掻き込んで食べて急いで家を出て電車に乗り込みながら葵を想う

最初に会ったのは爺さんの家で伯父の家族との年に数度設けられる会食の時

そこで紹介されたのが葵だった。

白いワンピースに長い黒髪を三つ編みにした何とも野暮ったく地味な女で興味もなく無視していたが姉の紫がいたく気に入ったようでチョクチョク買い物の荷物持ちに付き合っている内に葵にドンドン惹きつけられていった。

最初は記憶の無い陰鬱な女かと思えば良く笑うし紫のお眼鏡に適うだけあって頭がすこぶるいい。　姉の紫は小さい頃から神童と呼ばれ容姿も目鼻立ちのハッキリした美少女で周りには取り巻きが常に居るが姉の側に居るには並大抵でない努力がいる。先ずバカは嫌いで偏差値は最低８０はないと切られ、容姿よりは清潔感でデブは自己管理が出来ていないと側にも寄れず、性格は自分に合わないと感じると視界にすら入れない女王様

そんな姉のお気入りの葵を観察して行くうちに葵の綺麗さに気付いていた。

ぱっと見たら地味だがよく見ればシミ一つない綺麗な肌に意志の強そうな黒い瞳が常に煌めいており理知的で小さな唇も愛らしいく見れば見るほど美しさに深みを感じて来る。

そして動作が綺麗だ。ただそこに立っているだけで凛とし美しさがあり食べる所作まで綺麗。今まで付き合ってきた女が全て下品に見えて来て最後に付き合った女も箸すらまともに持てず零したり食べた後の皿を見てゲンナリしてしまう。

きっと生まれは悪くなくそれなりの家の生まれのはず。皇族だと言われても納得してしまう品の良さがある。

性格もハッキリしているが優しい思いやりのある女の子で葵を知れば知るほど好きになってしまったが、当の葵は俺に無関心だ。

最初っからそうだったが俺の関心を惹こうとか女の目で俺を全く見ない。

それまでは俺に会った女は必死に取り入ろうと色々しかけて来たり、

自分から声を掛ければ一発で落ち女に不自由などしなかったから戸惑った。仕方ないので自分から葵にそれとなくモーションを掛けても全く気付かない鈍さ

俺の学校に通い出すと知って慌てた俺はハッキリと葵に告白して自分の彼女だと他の男どもを牽制したかったが裏目に出てしまう。

1週間も無視されて気分はどん底で暗く落ち込んでいると姉の紫が珍しく葵との仲を取り持ってくれたが姉にも思惑があった。

「葵ちゃんが妹になるなんて素敵じゃない」

自己中な姉は葵を側に置きたいだけだったようだ。

兎に角今日のデートで俺の評価を上げて貰い彼氏に昇格したいところだが敵は中々手強い

普通の女なら俺のルックスと甘い言葉で簡単に落とせたが葵には効かない

そんな葵にも惚れているのは確かだが少し切ない

それに葵は美形不感症な気がする。俺の従兄達もタイプの違う美形ぞろいだが頬一つ染めやしない

頬を染められたら染めたで困った展開だが

一体どんなのが好みなのか紫に今度探って貰おう

葵を妹にしたいらしいから協力は惜しまないようだ

「いらっしゃい尚吾さん」

優しげな笑みを浮かべて家に迎え入れてくれる葵を見て胸がときめく

今日は珍しく髪を結っておらず、緩いウエーブの掛かった長い髪をそのままにしており水色のキャミワンピースに白いレースのボレロを羽織ってとても可憐だが、何時もより露出も多く期待してしまう

「どうしたの？　おじい様がお茶を飲んで行きなさいって言うから入って」

「分かった」

やはり爺さんに挨拶しなければいけないようだ。本当は駅で待ち合わせしたかったが俺とのデートを知った爺さんが携帯に迎えにこいと直接掛けて来られてはそうせざるを得なかった。

そして爺さんが睨みを利かす中、葵が淹れてくれた紅茶を楽しみながらも爺さんが何処へ行くのかと色々聞いて来て鬱陶しい……恐ろしい事に一緒に着いて来そうだったが流石にそこまで無粋な事はしなかった。

「それじゃーおじい様行って来ます」

「尚吾　7時までには葵を送って来るんだ」

ジロリと睨まれ釘を刺される。

「分かってます」

「大丈夫よおじい様。行きましょ尚吾さん」

そう言って俺の腕に自ら手を絡ませて来るのでドギマギする。

なんだか何時もと違う態度にもしかして葵も俺の想いに応えてくれようとしているのかと期待も膨らむ。

「水族館に行くなんて初めてだから楽しみ！」

子供のようはしゃぐ葵はとても可愛い

記憶の無い葵はこの世界にあるもの全てが初めてに感じるらしくテレビや車を見た時も酷く驚いたらしいが、記憶喪失でも大抵は自分に関する記憶が欠落するだけで日常生活に必要な事まで忘れているのは珍しい症状らしい

それかテレビや自動車などの文明から程遠い世界で暮らしていたのなら説明はつく

葵は一体どこで暮らしていたのだろう

もし記憶を取り戻し何処かに帰って行くのではないかと時折恐くなる。

だから然りと葵を今の内に掴んで置きたかった

電車に乗っていると偶に葵を見る男共の視線が鬱陶しい

葵の背は女子にしては長身で八等身、スタイルがいい上に姿勢もいいから人目を惹く。しかも今日は細く真直ぐな手足をおしみなく曝け出しているのでスケベな男の目を引くのだ

「寒くない？　ジャケット貸そうか」

「大丈夫」

くそーー　運転免許があれば自動車で行けたのに冬生まれの俺にはまだ取れないが一八歳なったら速攻で取ってデートに誘いたいがその前に受験があるのが痛い

他の男どもの視線を避けるべく葵の前に立つが何時もより一層綺麗な葵に見惚れてしまう

早く自分のものにしてその華奢な体を抱きたいが爺さんの目が黒い内は中々手を出せないのが現状

せめて今日中にキスまでは進みたいと野望に燃えていた俺だった。

人混みの中を背の高い男が人を縫うように歩いていた。

１８０?以上の身長に細身のパンツにティシャツと言うありふれた服装とキャップを目深にかぶりながらサングラスと言ういで立ちながら酷く人目を引いていた。

スタイルがスパーモデルのように引きしまった細身の体にサングラスをしていてもその美しさを隠し切れていない為だ

焼けつくような日差しの中でも汗もかかず清涼な空気が彼を取り巻いており女性たちは目をやりながらも声を掛けるのを躊躇わせる何かがあった。

『　ユンロン　暑イ　』

「そうですね、少し休憩しましょ」

『　アイス　食ベタイ　』

「いいですよ」

その男はレイカを捜すユンロンの姿だった。

膝まであったストレートの水色の髪はバッサリと切られ肩までのワンレンに切られて茶色に染め人間の中に溶け込んでいた。

レイカを追って瞑道を潜り龍核が指示したのがこの異界の地である地球であった。

最初に降り立った地はアメリカで人口の多さと人種の多様さに驚いた。しかも自分の姿が異様で目立ちすぎるために直ぐさま廃屋に隠れて暗闇紛れて衣服を盗み髪を切り、人混みに紛れ人間を観察する事から始まった。先ずは言語を覚えるべく会話を盗み聞き書物やテレビを見ながら五日掛けて英語を覚えた。

神力が無い為不自由だが身体能力は人間の遥か上を行く為に身の危険はなかったし、ホームレスの為の宿泊場を最初利用していたがこの容姿が災いしてトラブルばかりに巻き込まれたので人を避けながらこの世界を学んだ。

地球は驚くほど機械と科学の文明が発達しており四神国とは比べようもないが、恐ろしい速度で文明が進化している半面終焉へも凄まじい速度で向かっている危機的状況でありながら、それに人間は全く気が付いていない

何れこの世界は崩壊するだろう

こんな世界に皇女様を何時までも置いておけず、一刻も早く捜し出して連れて帰りたいと思いながら二年が過ぎ去っていた。

その間に幾つもの国を渡ったおかげで数カ国の言葉を操れる程になってしまったが何の意味もない

皇女を捜す手掛かりの龍核は沈黙したように何も反応せず、レイカと言う名前が日本で使用される名前だと知りもしやと思いこの国に渡って来たのだ。　最初は皇女様の容姿なら世間で騒がれ直ぐに見つかると思っていたがそう簡単では無かった。

あれ程の美貌を見れば誰かが監禁して囲われている可能性もあるがあまり考えたくない事態

どんな境遇にあるかは分からないが龍核が石化していない限り生きているのは確かだった。

例え何年何十年かかろうと諦める心算は無いが皇女が人間である限り期間は限られている。

しかも人間の数が多すぎたった一人で一人の人間を捜すのはあまりにも時間が掛かり過ぎるので最近では違う方法をとろうかと考えていた。

路上で売られているソフトクリームとアイスコーヒーを買い一目の無い公園の茂みにあるベンチに座り肩に担ぐリュックを降ろして口を開けると白い子猿が飛び出て来ると早速ソフトクリームに飛び付いて舐め始める。

ペロペロペロリン

『　ユンロン　冷タイ　美味シイ　』

すかっり此方の食べ物に馴染んだハクは甘い物を特に好んで良く食べる。

ハクをリュックに詰めるのは可哀想だが猿を連れ歩くのは酷く目立つので仕方ない

『　レイカ　コノ島ニ　イル　？　』

「どうでしょう　龍核は今だ反応を示さない」

自分の首に下げられた黒真珠のネックレスを取り出すが全く変わらない。

この世界に入るまでは自ら光り輝いていたのが地上に降りた途端光を失ってしまったのだ

それでも皇女の容姿を思えば簡単に捜せると思ったが

皇女の瞳は金色だがこの世界で皇女のような真の金色の瞳を持つ者はおらずそれに近いアンバーの瞳の人間しかいないが、カラーコンタクトがあれば容易に目の色を変えられ髪も自分と同様カラーリングすればどんな色にも変えらるこの世界では皇女の美貌だけが手掛かり

この世界に降り立ち容姿だけで捜し彷徨い続けたが限界だろう、この際自分の容姿を生かしてメディアを使う事を考えていた。　この世界の情報網は素晴らしいくテレビやネットの繋がりを使えばもっと早く見付けられるはず

それとも此方から呼び掛ければ皇女が応えてくれるかもしれない

あまり目立つ行動をしたくなかったが仕方が無いだろう

ここは日本の首都東京で世界でも大きい都市

自分をモデルとして売り込めばいいのだ

今までも各都市で何人ものエージェントに声を掛けられ名刺も貰ったがその時は興味もなく捨てて来た。

ユンロンは携帯を取り出しiモードを使いモデル事務所を検索して行き数件ピックアップして場所を確認していく

『何シテルノ？』

「モデルをしようと思います」

『レイカ　見ツカル？』

「このまま無暗に歩き回るよりは効率的ですよ」

確かに皇女の情報が集め易い半面この姿を世間に晒す事により煩わしい邪まな想いや執着を生みトラブルに巻き込まれ自分自身にどんな危険が起きるだろう

神力さえあれば人を操り思うがままに出来るが

神や精霊すら存在しないこの世界ではユンロンは普通の人間より強い程度

権力のある誰かに目を付けられればどんな目に会うか分かったものでは無いのだ

やるからには世界的に有名になりメディアに出まくる事が最大の保身になるだろう。

コーヒーを飲み終わるとゴミ箱に捨て早速モデル事務所に行く為に地下鉄に乗り込む為に駅に向かう事にする。

「ハク　暑いでしょうがリュックに入って下さい」

『　ウン　』

二年の月日の中でハクからはアオイ様の話や皇女の話を聞き随分慰められてきて今では居なくてはならない存在

皇女も随分ハクには慰められたよう

この愛らしい神獣の為にも早く皇女を捜し出したいと思うのだった。

それから地下鉄に入り電車に乗り込もうとホームで電車を待っていた時に向こうのホームに電車が止まり何気なく窓から見える乗客を眺める。

その時一人の人間に釘づけになってしまった。

「アオイ様!?」

そんな訳があるはずが無いのだが体が勝手に動き階段を常人ではない速さで走り反対のホームに掛け込みアオイ様の電車に飛び乗ろうとした瞬間扉が閉まってしまうがもう一度その姿を確認したく電車と並走して走ると青年と楽しそうに話すアオイ様に似た少女の姿を確認すると同時に立ち止まる。

「アオイ様のはずが無いのだ……」

ホームに残っていた人々は何事だど此方を訝しそうに見ているがどうでも良かった

自分の行動の間抜けさに自嘲する。

アオイ様がこの世界に居るはずがないのに追いかけるなど

それより今は皇女様を捜し出すのが先決

それから気を取り直してもう一度反対のホームに向かい歩き始めるがその時龍核が僅かに光っているのに気がつかないユンロンだった。

デートの結末

水族館は知識で知っていたけど実際に見ると感動してしまう。

「何この可愛い魚！　カクレクマノミ　イソギンチャクが住処なんだ面白い」

色取り取りの熱帯魚が大きな水槽の泳いでいる姿は幻想的で見ていても飽きない

アザラシ館では水中ホールへ楕円型をしたアクリル製水中トンネルを通ると私の周りに６頭のアザラシが寄って来てアクリルガラス越しから反対に此方を観察されている様な錯覚がした。あまりにアザラシが可愛くって１時間近くそこに留まっていると尚吾さんが拗ね出す

「アザラシばかり構って俺が居るの分かってる……」

「だって水族館って魚を鑑賞して楽しむ所でしょ？」

アザラシが拗ねても可愛いけど尚吾さんがすると残念な王子様になってしまう

「うっ　そうだけど……　」

「そうね少し疲れたから冷たい物が飲みたいわ」

そう言い尚吾さんの腕に手を回した途端に機嫌を直してしまい結構扱いが簡単だど初めて知る。

時間を見ればお昼少し前だったので水族館の水上レストランで早めの昼食をとるけどけど此処でも支払いで揉める

「俺が払うから葵は財布をしまえよ」

「駄目よお互い学生なんだから割り勘」

「入館料も割り勘だったろ。此処は俺に払わせろ」

確かにデートは男の側が負担する様だけどお互い脛をかじっている立場

でもあんまりごねるのも雰囲気が悪くなりそうだ

「ここは自分で払うから、その代わり売店にあった可愛いアザラシのヌイグルミ買ってくれる？」

尚吾さんの顔を覗きこむようにお願いすると

「　／／／　分かった　」

早速、お土産ショップに行くと可愛い色んな種類が揃っており中くらいの白いアザラシのヌイグルミを手に取ろうとすると尚吾さんが一段上に置いてある大きい方を取るとサッサと会計を済ましそのま

ま私に渡してくれる。

「初デートの記念」

「ありがとう……」

白いフワフワのヌイグルミを抱き締めると何か懐かしい感じがよびおこされ、頭の中に真っ白な愛らし子猿のイメージが浮かびあがる。

「ハク？」

ハク？？？

「葵　大丈夫か！」

「へっ！？」

「おっ俺の所為か！？」

頬が濡れる感触で漸く自分が涙を流している事に気が付く

「あれ…　どうして涙が…」

急いでハンカチを取り出して涙を拭くが止まらず、目の前では尚吾さんがオロオロしていると

「お兄ちゃんがお姉ちゃんを泣かしてるーーー」

「いけません」

小さな女の子がそう叫ぶと母親が急いでその子を抱き上げ離れていく
何しろ周りには家族連れが大勢おり何時の間にか注目の的
二人で慌てふためいてその場を離れて外に出ると何時の間にか涙が止まっていた。
「ゴメン…突然泣いたりして」
「訳を聞いても良いか？」
「このヌイグルミを抱いて白い子猿を思い出したの……多分　記憶を失う前の記憶だと思う」
尚吾さんは驚いた顔をし
「他にも何か思い出したのか」
顔を横に振る。
思い出したのは白い毛のフワフワの子猿で目が赤かった。きっと私の大事な子だったような気がする
名前はハク
だけどそれ以外は何も思い出せない
どうして思い出せないの

頭の中が真っ白になる。

ヌイグルミを抱き締めて言い知れぬ恐怖が襲い体が小刻みに震える。

私は誰なの

知りたいけど知るのも恐い

たった一人でこの知らない世界に放り出された孤独と恐怖がぶり返してくると

その恐怖が止まらなくなる。

怖い　怖い　怖い　母様　怖い　助けて

「嫌　一人は嫌　母様　母様は　どこ　私は　私は誰……　」

夢の男が私を殺そうとする姿がフラッシュバックするように思い出さる体が引き攣る

『　余の血を受け継いだ事を呪うがよい　』

『　例え同じ姿に成ろうと貴女は……様には成れない。　愛されなどしない　』

耳にささやかれる嫌な言葉

「葵　確りしろ！　葵」

「助けて……　たす…け……　」

そのまま意識を失う私

誰か教えて

本当の私を……

突然、葵が意識を失う

驚いて体を支えて抱き上げると急いで救護室に運び寝かせて貰う

仕方なく爺さんに電話すると直ぐさまタクシーを使い帰って来るようどやされてしまった。帰るとさらにどやされそう

葵は暫らくすると意識を取り戻して安心する

「気分はどうだ」

買っておいたペットのお茶を渡すと美味しそうに飲む姿は何時もの葵に戻ったように思える。

「ゴメンね心配させて…　記憶が無い所為かストレスがかかると時たまこうなっちゃうの」

無理するかのように微笑む葵

「俺　知らなかった」

葵は何時も楽しそうに笑っているイメージしかなく記憶の無いのを気にしている風には全く見えなかったが実際は違っていたのだ

能天気な俺は学校でも結構葵を振り回してしまった事を今さら反省してしまう

葵は強い女の子じゃない…

「すまない俺の所為だ」

パイプ椅子に座り項垂れる俺の頭に軽い衝撃

ポッカ！

「尚吾さんは悪くないよ。　それよりアザラシのヌイグルミは？」

「アレは向こうの部屋の隅に置いてある」

「頂戴」

「でも　アレの所為で」

あれの所為で記憶の断片を思い出してしまった厄介なヌイグルミ
出来れば2度と見せたくは無い

「もう大丈夫　折角買ってくれたんだもの。　それに気に入っているの」

そう言われて仕方なく救護室の隅に隠したヌイグルミを恐る恐る葵に渡すと嬉しそうにヌイグルミを抱き締める。

「やっぱり可愛い！」

そう言って抱き締める葵の方が余程可愛いくて抱きしめたいが自重するしかない

「それよりイルカショーは何時から、まだ間に合うかな」

思い出したように聞いて来る。

「それが…葵が倒れたから爺さんに電話しちまって、直ぐ帰れとさ…」

「えっえーーー　イルカショーが一番見たかったのに！」

「すまん　でも葵が心配だから帰ろう」

出来れば見せてやりたいがさっきの真っ青になって倒れた葵を見たら直ぐに連れて帰りたい。

「もうー　皆心配症なんだから。　いいわ帰るけどまた連れて来て

くれる」

可愛くおねだりして来る葵に俺はドギマギ

これは期待していいのだろうか

「勿論だ！　今度はここより大きい所に連れてってやる」

「本当！　楽しみ」

暫らくは爺さんの許可が下りないだろうから当分デートはお預けとなると夏休みになるだろう

受験生の自分が恨めしい…出来る姉の所為でそれなりの大学を期待されているので夏休みは夏期講習の合宿に入れられるがお盆は休みだから時間がある。

「なっ…　葵　こんな時にアレだけどもう一回俺と付き合う事を考えてくれないか…」

余裕のない俺はつい口走ってしまう

葵にはもっと大人な自分をアピールしたいのにどうも焦ってしまうようは目の前に人参をぶら下げられた馬なのだ

「う〜ん……　取敢えず時折デートする程度ならいいけど、尚吾さんの受験が終わってから真剣に考えてみる」

「それって恋人って事！？」

「ボーイフレンドよ」

今時ボーイフレンド？

ボーイフレンドつまり彼氏なのか？？　それってどの辺まで許されるんだろうか

自分の経験で言えばガールフレンドならセックスはＯＫだったが確かに恋人と言うより彼女

セックスフレンドじゃないのは確か

フレンドだから男友達？

「それって友達レベルか！？」

「もうチョッと上かな…　恋人未満友達以上　駄目？」

そんな心配そうな目で見られると何も言えない

以前よりは立場が向上はしているのであっまり困らせるのはガキ臭い

「取敢えずそれで我慢するけど学校は接近禁止のまま？」

葵は申し訳なさそうにコクリと頷く

俺の所為で葵が女子に虐められるのは避けたいし俺が我慢すればいいのだが寂しい

この時ばかりはモテル自分が嫌になる。
だが葵を手に入れる為なら耐えよう
「それじゃあボーイフレンドとして宜しくお願いします」
大袈裟に頭を下げてお願いするとクスクス笑い手を差し出して来る
「私も宜しく」
ほっそりとした指を握り握手を交わし健全さ１００％の付き合いの始まりだったが結構幸せだと思ってしまう俺はどれだけ葵に惚れているか再び認識してしまう。
その後はタクシーを使い爺さんの屋敷に戻ると玄関から爺さんとお手伝いの佳代さんが飛び出して来て俺を睨む
「尚吾　お前が付いていながら何をしておる！」
親父達ですら今だに頭が上がらない爺さんの迫力のある一喝にビビってしまうが葵が俺を庇ってくれる。
「おじい様　尚吾さんは悪くないわ。　発作を起こした私をチャンと介抱してくれたのよ」
介抱…俺的にはもっと別な介抱がしたかった

「旦那様　お小言は後にして取敢えず葵さんを中に」

佳代さんがそう言いつつ俺から葵を引き離すように家に連れて行ってしまい、爺さんは苦虫を潰した様な顔で俺を見ているが勇気を振り絞り声を出す。

「おじい様　タクシー料金の支払いお願いします」

親の脛をかじる俺には数万のタクシー代など払えるほど持ち合わせは無かった。

「良かろう。　お前も中に入って夕食を食べていけ」

「有難うございます」

もう暫らく葵と居られるのは嬉しいが、これから爺さんの尋問が始まるかと思うと憂鬱だ

本当に面倒な女の子を好きになってしまったが後悔はしていない

葵はそれだけの価値がある女の子だ

今までの薄っぺらな恋愛では終わらせない

爺さんにも俺を認めて貰うにもそれなりの大学に入学しないといけないだろう

今夜からより一層受験勉強に勤しむ事のを誓うのだった。

誰

水族館で倒れてしまった私は結局日曜日の乃ノ華達のデートをキャンセルし心配するおじい様の為に月曜日も学校を休んでしまった。

おじい様は過保護過ぎて困る。

とても私を大事にしてくれるけど時々私を遠い目で見る時があるのに気が付いていた。

恐らくアオイと言う人と重ねている。

以前長男の孝明おじ様が私を醒めた目で見ながら仰った事がある。

「お前は所詮アオイと言うオヤジの初恋の君の身代わりだ。分を弁えておけ」

私は無言でその言葉を受け止めた。

自分自身の名前さえ分からない私におじい様が付けてくれた名前

最初は嬉しかったけど段々そう呼ばれるのが苦しい

私でないアオイを見るおじい様に辛くなる。

だけど尚吾さんはチャンと葵としての私を見てくれるのが嬉しい

学校でも友達は大沢葵と認識してくれる。

おじい様には悪いけど学校に通わないと自分が誰なのか不安になってしまう

今の私は大沢葵になろうと精一杯なのだ

『　例え同じ姿に成ろうと貴女は……様には成れない。　愛されなどしない　』

どういう意味なのだろう

あの囁きが何時も心の底から消えない

だけど私は大沢葵として生きるしかないのだった。

学校生活にも慣れてクラスとも馴染み3週間近く経過した頃に期末試験を受けて今日その順位が張りだされた。

「葵凄い！　一番で満点なんて初めて見るよ私」

「僕も　感動しました」

二人に誉められ少し照れくさい。　本当は手を抜いて平均９０点ぐらいに抑えようと思ったけど尚吾さんの所為で浮いてしまった私はトコトン目立つ事にした。

「三沢君も１３位なんて凄いじゃない。乃ノ華も２０位で目標達成したから今日はお祝に三人で帰りに何処か寄らない」

「はい。１３位なんて一気に5番もアップしたのも大沢さんが勉強を教えてくれたお陰だから是非お礼がしたいです」

「私も！　葵に奢っちゃう！」

「それじゃあ二人に奢って貰おうっと」

和気あいあいと掲示板を離れクラスに戻るとクラスメイトの私を見る目が違っている。

嫉妬、妬み　驚愕　そんな雰囲気が取り巻いていた。

この進学校は三年からは受験学科別になるが1、2年は成績順でクラスが分かれておりAクラスは上位の者たちで占められているのでライバル意識が強い

乃ノ華の話では1年生の頃からトップ10の順位は多少変動するけど殆ど変わらなく一種均衡がとれており、割かし和気あいあいとしているらしいけど私が編入した事でかなり戦々恐々

何しろ私は入学試験より難しいとされる編入試験を高得点で合格した上にAクラスに入って来たので今回の期末は皆気合が入っていたよう

確かに休み時間も参考書を開き静まりかえっておりこれが一般高校生の休み時間なのかと引いていたけどどうやら私の所為だったらしい

しかも私は専ら乃ノ華と三沢君の勉強をみていて余裕の態度でぶっちぎりの1番を取ってしまい、さぞかし嫌みな女に見えるだろう

しかし席に着くと数人の女子が寄って来る。

「大沢さんて凄いのね。　今度勉強教えて」

「私も、中埜さん達ばかりずるいわ」

などと勝手な事を言って来るが

「いいよ。　分かる事なら何時でも聞いて」

そう言うと機嫌よさそうに自分達の席に戻って行く。

「葵はお人好し過ぎーー　あんなの無視しちゃえばいいのよ」

反対に機嫌を損ねてしまう乃ノ華

「私って八方美人タイプだから。　でも乃ノ華と三沢君最優先よ！」

ニッコリ微笑む

「／／／　葵って何気に誑し」

「／／／　同感です」

失礼な二人

それから話し合い放課後は最近評判のケーキのあるカフェに行く事にしたのだった。

放課後、三人で連れだって電車に乗って目的のカフェに向かう電車の中は下校中の高校生がひしめいていており騒がしいが同じ話題で持ち切りなようで同じ名前が良く出て来る。

「ねえあのポスター見た」

「見た見た！　ユン　やばすぎ！」

「絶対人間じゃないよ」

「一部噂ではＣＧじゃないかって話し」

「ＣＧでも動くユン様が見たい」

どうやらユンと言うモデルの話題らしい

「乃ノ華　ユンて誰？」

「葵知らないの、一週間ほど前に張り出された化粧品会社のポスターのモデルよ」

「女の人なんだ」

「違う、めちゃ綺麗いな男性！　何でも若手人気女優が決まっていたのにスポンサーが違約金を払ってまでその新人モデルを起用したってくらいの美形」

化粧品のモデルなら女性の方が良い気がするけど敢て男性を起用するなんて話題作りで奇をてらったのかもしれない

「そんなに綺麗なんだ。三沢君は知ってた？」

「はい、母と妹が騒いでいたので、でもあんな綺麗だと人間じゃないみたいで怖いかな」

「滅多にテレビを見ない委員長ですら知っているのに葵は家で何してるの？」

「最近は法律関係を読み漁ってたからテレビは見てなかったかも」

「「……」」

それから乃ノ華によってユンがどれだけ綺麗か教えて貰い、ポスターは直ぐに盗まれてしまい滅多に拝めないらしくユンの載った雑誌は全て完売するほどの勢いらしいくユンの話題が尽きぬまま電車を降り改札を抜ける。

「葵」

名前を呼ばれ振り返ると尚吾さんが立っていた。

見れば制服で同じ電車に乗っていたのだろう

「尚吾さん　珍しい所で会うね」

「塾がこの近くなんだ。それより友達と何処行くんだ」

「勉強お見てあげたお礼でケーキを奢って貰うの」

「へーー　俺も混ぜて」

「塾は大丈夫なの」

「コーヒー飲む時間はあるから。　君達も良いだろ」

半ば脅すように見られれば二人は仕方ないように頷く

「もー　相変わらず強引」

「こうでもしないと葵と会えないじゃないか。学校では無視だし」

仕方なく四人で目的のカフェに行く事になり、運良く席も空いており直ぐに座れた。

取敢えず三人はケーキセットで尚吾さんだけはコーヒー

注文を取りに来た店員さんはかなり尚吾さんを意識しているようで若干頬を染めて注文を端末に入れていた。

乃ノ華は私の横に座り腕に抱き付いており、それを目を竦めて見る尚吾さんとその横で緊張でガチガチの三沢君

「尚吾さんはコーヒーを飲んだらサッサと帰って下さいね」

「それは無いだろ。　久しぶりに会うのに」

「今度の土曜日に会えるでしょ」

「会社の創立パーティーなんて面倒だけど今回は俺が葵をエスコート出来るから楽しみだ」

「おじい様が許してくれるかしら」

「大丈夫　既に爺さんの許しは得た」

「どうやって！？」

「期末で１位だ」

確かに３年の掲示板を見ると１位に名前があり流石に紫さんの弟だと納得してたんだけど

「今まで違ったの」

「大沢先輩は大体１０位前後よ」

乃ノ華が耳元で教えてくれる。

「今まで本気を出さなかっただけだ」

憮然とする尚吾さんの前にコーヒーが出される。

カチャ

「コーヒーお待たせしました」

そして別の店員さんが次々と私達のケーキセットを一つずつ運んで来てくれるが皆さんお目当ては尚吾さんのようだ。

「流石大沢先輩、　もてますね！」

可愛く笑う乃ノ華をジロリと見やると益々私にひっついて挑発するような態度を取る。

何故？？？

それから何とも言えない雰囲気の中で食べるケーキは美味しいけど出来るなら楽しく食べたい。そんな空気を読んでか一気にコーヒーを飲み干す尚吾さん

「それじゃあ後はごゆっくり。葵　土曜は俺が迎えに行くからな」

「待ってるわ」

そう言いながら手を振って出て行くのに手を振り応える。

それを変な顔で見る二人

「どうしたの？」

「もしかして大沢先輩と付き合う事にしたの！？」

「それに近いかな？」

「ええーー　駄目よ葵！　大沢先輩なんて女性関係が乱れているって有名よ。絶対浮気されて泣きを見るだけなんだから」

「そっそうです！　僕も聞いた事があります」

三沢君まで今までに無く声を荒げて反対して来る。

一体巷でどんな風に噂されているんだろうと逆に興味があるけど聞くのは止めておこう

「浮気されたら速攻別れるから。　それに恋人未満友達以上の軽いお付き合い」

「それなら良いけど　でも絶対体を許しちゃ駄目よ。　一回寝たら捨てられるって話だから」

真剣な顔で忠告してくれる乃ノ華の言葉を聞き三沢君は顔を真っ赤にさせている。

なんだか速攻別れたくなってしまったが、取敢えず今の尚吾さんを見守る事にする。

それから美味しいケーキを平らげ帰路に着くが三沢君は塾へ行くので別の路線で私と乃ノ華で同じホームに行く通路で巨大なポスターを張る作業員

「あっ！　ユンのポスター　」

乃ノ華がそう言うと立ち止まるので私も立ち止まりその作業を見ていると徐々に人が集まりだし人がきが出来てくる。

壁一面に張り出されたポスターには美しい男性の横顔にルージュが塗られようとする写真
正に神々しい美しさと言っていい

栗色の艶やかな髪にアイスブルーの美しい瞳、透ける様な白い肌

その冷たい瞳はまるで氷の女王

私はその顔から目が逸らせず見続ける。

この人を知っている

誰だろう

変な話だけど知っているのに分からないなんて

思い出せない……

「第1弾は女性に口紅を引こうとしてる写真だったのよ……葵　どうしたの真っ青よ」

私の異変に気が付いた乃ノ華は人混みを掻きわけてホームのベンチまで手を貸すように支えながら連れて行ってくれる。

「大丈夫　葵……」

私をベンチに座らせて横に座り私の手を握ってくれる。

「うん……」

「貧血」

「もう大丈夫よ。　それよりユンの本名知ってる」

「モデル名のユンとしか公開されてないの。プロフィールは一切非公開でこれまでの経歴も不明で1週間前のポスターの仕事が実質デ

ビューだからあんまり情報が無いのよ」

「そうなんだ……」

あれ程の美貌が今まで世間に知られていない方が奇跡なような気がする。

ポスターの美しい横顔を思い出すと胸が締め付けられるように痛む

知っているこの痛みを

貴方は誰

もしかすと本当の私を知っているの

会いたい気持ちと同時に会いたくないという相反する思いがわき上がり戸惑う

私の過去が幸せだったとは限らない

むしろあの夢が真実なら私は愛されない存在

知らない方が幸せなのかもしれない

臆病な私は今の幸せな生活を壊したくなかった。

それにこの人が私を知っているとは限らないし会うなど難しいだろう

止めよう

私は大沢葵として生きると決めたのだ

そしてユンと言うモデルを心から閉め出すのだった。

私は弱い

もう二度と一人ぼっちにはなりたくなかったのだった。

創立記念パーティー

学校でもモデルのユンの話題が女子の間で持ちきりになって来る。その噂を聞く度に心がざわめくが成るべく聞かないように徹した。

そして土曜の夕方はおじい様の会社の創立記念パーティーの為にドレスを着る事になってしまう。本当は制服で十分だけど紫さんがおじい様に頼まれて何時の間にか買い揃えていたようで、お昼からドレスを持ってやって来た紫さん

「久しぶり葵ちゃん！　今日も可愛いのね」

そう言って私に抱き付いて来る紫さんは相変わらずスキンシップが激しい

「紫さんも相変わらずお綺麗ですよ」

紫さんは艶やかな黒い髪を背中を覆うほど長くストレートに伸ばしており、アーモンド型の大きな黒い瞳は美しく鼻筋も通っておりその下には薄く形良い唇が収まっていおり正統派美人

大沢家は美形が多い

「有難う」

「それよりパーティーの支度で忙しいんじゃないんですか」

「ウフッフッフッ　今日は葵ちゃんのドレスを持って来たから一緒にドレスアップしましょ」

「ヘッ　私は制服の心算だったんですけど」

「駄目よ。　女の子に産まれたからには着飾らないと勿体ないわ」

「そんな～」

お洒落は嫌いじゃないけどあまり目立ちたくない私

何しろおじい様の長男家族には良く思われていないのでこの創立記念パーティーも遠慮したかったのにおじい様に強制的に参加させられるのだ。

ドレスなんか着て出席したら絶対睨まれる。

大沢家にお世話になっている私としてはあまり荒波を立てたくないのだ

私の所為でおじい様とおじ様の間にわだかまりが出来るのは避けたく制服を着てホールの隅っこで料理を楽しむ心算だったのに

リビングに佳代さんが大きな箱や紙袋を次々に運んで来るとそれらを楽しいそうに開いて私に見せてくれる。

「葵ちゃんは派手なの嫌がるかと思って成るべく地味なのを選んだ

わ」

ブランドのロゴの入った箱を開けるとくすんだ薄紫色で恐らく私の葵をもじったのだろう
それを取り出して見せてくれるとプリーツスカートのアメリカンスリーブで少々丈が短いような気がする……胸は隠れてるけど手足が思いっきり露出

「紫さんこれのどこが地味なんですか」

「あら、とっても地味よ」

そう言って自分のドレスを見してくれる。

紫さんのドレスを見て確かに私のは地味だった

白地に大胆なピンクの薔薇のプリントのシルクでフレンチ袖ながら胸元と背中が大きく開いており体にピッタリフィットする様なラインで裾は膝下ぐらいでフレアーになっており、いかがわしさは無くフェミニンな上品なドレス

これを着た紫さんはさぞ美しいだろう

これなら紫さんの陰に居れば目立たないと諦める。

それから佳代さんに手伝って貰いながら支度を始めるのだが下着までそれように買って来ており正に上から下まで全てだった。

「紫さん一体これって全部で幾らかかったんでしょうか……」

「さあ～？　おじい様が貸してくれたカードで払ったから。　気にしなくても大丈夫よ」
お嬢様だからそう言う事に無頓着な紫さん
だから何時も買い物に付き合う時は値札を見ずに購入しまくるせいかお目付け役に荷物持ち兼で尚吾さんが付き添っていたはず
「尚吾さんは付き添わなかったですか」
「葵ちゃんのドレスなんか選ぶ時は尚吾と喧嘩になりそうで母と行ったのよ。おじい様のカードだから思いっきり買えたから楽しかった」
満足そうに言う紫さん
小母様…まさか一緒になって買いまくったんですか…
部屋は既に購入した物の包装紙や袋が散乱しており、その凄さが物語っている。
ドレスに着替えてから紫さんが私の髪にコテを当ててクルクル手際よく巻いていってくれ毛先にかけて確りとしたウェーブになりエレガントな仕上がり
「メイクもしてあげる」
「リップだけなので自分で」
「駄目よ！　ドレスアップしたんだからメイクもしないとアンバランスよ」

そう押し切られて仕方なくメイクして貰うと手際よく馴れた手つきでメイクして行き最後に口紅を取り出しドキリとする。

「それ…」

「葵ちゃんも知ってる。ユンのルージュで中々手に入らないの」

そう言いながらピンク系のルージュを塗りながら話してくれる。

「ユンは本当に綺麗だけど私はあまり好きじゃないわ。　なんだか血の通った人間じゃないみたいだし女より綺麗な男なんて許せない」

確かに自分より綺麗な男の人の横は遠慮したいかも

あの壮絶な美貌を思い出してしまうが直ぐに打ち消す。

あの人の事は考えては駄目と自分に言い聞かせた。

「さあ鏡の前に立って見て」

紫さんに言われハッとし

立ち上がり恐る恐る姿見の前に立つと別人のような自分が居た

「！！」

「葵ちゃんって絶対化粧映えすると思ってたの。これなら尚吾も2度惚れね」

「本当に綺麗ですよ葵さん」

佳代さんまで誉めてくれ悪い気がせず、ついつい鏡の自分は誰だと確認してしまいたくなるくらい綺麗に変身しており、馬子にも衣装と言う諺を思い出す。

それでも綺麗になり紫さんには敵わないんだけど、とても嬉しかった。

「有難うございます紫さん」

「いいのよ。将来妹になるんだから」

「エッ！？」

何やら不穏な事を言う紫さん

まだ高校生の私に結婚なんて考えれないし尚吾さんとはそこまでのお付き合いに発展していない

慌てて否定しようとするが紫さんはサッサと自分の髪をやり始めているので佳代さんを手伝い片付けに取りかかるのだった。

二人共すっかり支度が終わりおじい様が待つリビングに行くとおじい様は目を見張るように私達を見る。

「おじい様お待たせ。葵ちゃん綺麗でしょ」

「ああ　だが少し足や手を出しすぎじゃないか」

「おじい様の古い頭で若い子のファッションは全部そうでしょ。それにおじい様が選んだら野暮ったくって会場で女の子達に笑われるのは葵ちゃんよ」

「そっそうか」

流石におじい様も紫さんにはたじたじ

「おじい様有難うございます。こんな素敵なドレスを買って貰って」

改めてお礼を言う。血の繋がら身寄りのない私にこんな事までして貰い感謝しきれない

「葵が喜んでくれるならそれでいい」

優しく微笑むおじい様

「私も有難うございます。これからは葵ちゃんの衣装関係は私に任せて下さいね」

艶やかに微笑む紫さんを見やり少し苦い顔をする。

「お前は少し派手過ぎんか」

「あら、これ位は大人しいものです。　大沢家の人間としては社交界にデビューして行くんですから自分を見せるのも大事ですわ」

「はぁ…　程々にしてくれ」

「でも家は不動産系だから、どちらかと言うと私はホテル業に興味

があるんですけどそっちは孝明おじ様が牛耳ってらっしゃるから残念」

「別段次が誰が社長か決まっておらん。欲しければ自分の実力を見せるのだな」

「おじい様のそう言うと処は好きよ」

そう言っておじい様の腕に手を絡ませる。

おじい様の孫の中で一番優秀なのは紫さんでおじい様も期待しているようだけど紫が男だったらと零しているらしい

今の時代女性の社長も活躍しているから紫さんなら大丈夫だろう

「ソロソロ出る時間だが尚吾はまだか」

「携帯に電話してみますわ」

紫さんがバックから携帯を取り出し掛けようとボタンを押すとノックがされ佳代さんが声を掛けて来た。

「尚吾さんがいらしゃいましたが直ぐにお出かけになりますか」

「ああ　玄関に待たしておけ」

それから3人で玄関ホールに行くとスーツ姿の尚吾さん

スーツを着こなしとても十七歳には見えず大人っぽいのでドキリとしてしまう

尚吾さんは私を見るなり駆け寄り

「葵　本当に葵？」

「むぅ　失礼よ尚吾さん」

「ちっ違う！　あんまり綺麗で驚いたんだ」

「尚吾、それは微妙に失礼よ」

「うっ　普段も綺麗だけど今日はもっと綺麗だ」

「／／／　ありがとう　」

「我が弟ながらなんてボキャブラリが貧困なの」

呆れる紫さんだけど私には十分嬉しい言葉だ。

「あっ　これプレゼント」

そう言って先程から手に持っていた白い薔薇のコサージュを私の首元に付けてくれるとその姿をニヤニヤと見る紫さんと憮然と見詰めるおじい様

そして付け終わり頬を赤らめて私を見るので私まで恥ずかしくなって来る。

「すっごく似合う　／／／　」

「ありがとう　／／／／」

「それじゃあ会場に急ぎましょ。私はおじい様にエスコートして貰うから尚吾はチャンと葵ちゃんをエスコートするのよ」

「ああ　分かってる」

嬉しそうに返事する。

そして私は尚吾さんにエスコートされながら車に乗り込みパーティー会場のホテルに向かうのだった。

パーティー会場のホテルは大沢グループ経営で最近湾岸沿いに立てられた高級ホテルで人気は上々らしく孝明おじ様の経営手腕の評価が上がっているらしい。

会場には大沢グループの社員が招待され、他にも取引先の社長なども招待されてるなど盛大に執り行われる為に、二階フロア―全てが貸し切られ既に開場入りしたお客達が正装で集まり熱気に溢れている。

割かし年齢層も若く女性はこの時ぞとばかりに着飾っている。

何しろ未婚のイケメン御曹司が三人もおりあわよくば見染められないかと狙っており、男性も大学生の美しい令嬢に虎視眈々と狙いを定めていた。

一方私はおじい様達と一緒に一旦用意された控室に通されるとそこには既に長男の孝明おじ様家族と次男の憲明おじ様と小母様が談笑していたが私達が入って来ると立ち上がりおじい様を迎え入れる。

「父さんお待ちしてました。それでは皆で会場入りをしましょう」

機嫌よさそうなおじ様に対して不機嫌に答えるおじい様

「茶の1杯ぐらい飲ませろ」

「時間が押してるんです。だから支度は此方のホテルスタッフに任せれば良かったんです」

そう言って紫さんと私を見る。

「仕方ありませんわおじ様。おじい様は大事な葵ちゃんを滅多な人には任せられないんですもの」

紫さんが気にすることなく反対に言い返す。

「フン　まあいいでしょう。それではコーヒーを淹れさせますからお待ちを」

そう言って内線を掛けコーヒーを注文してくれる。

孝明おじ様家族はほぼ私を無視するような感じだが確かに他人であ

る私が此処に居るのは場違いだ。

私はただひたすら尚吾さんの横で大人しく座るとおじい様と紫さんを中心に話題が進んで行き少し疎外感を感じるが尚吾さんが手を握ってくれていたので心強かった。

それからほどなくして孝明おじ様が案内するように会場の扉に立つとホテルのスタッフがすかさず扉を開けると大勢の人の熱気が傾れ込んくる。そしてホールから聞こえる司会者の声

「皆さま大沢グループ会長大沢大貴様が御来場になりました。拍手でお出迎え下さい」

すると会場からは割れんばかりの拍手が巻き上がりその中をおじい様を先頭に一段高いステージに進んで行くが私がステージに上がる訳にはいかず立ち止まろうとすると尚吾さんに手を引っ張られてしまい思わず上がってしまう。

上がってしまったからには尚吾さんに隠れるように立っているしかない。

前を見れば大勢の着飾った人達が此方を見ており何故か前にもこんな事があった様なデジャブーを感じる。

記憶を失う前に何処かのパーティーに出席した事があるんだろうか？

ぼんやりと会場を見ている内に式典がドンドン進んで行き社長の挨拶や貴賓客からの祝辞などが終わるとおじい様が最後に乾杯の挨拶をする為にマイクの前に立つとウエイターやウエイトレスが次々と客達にグラスを配って行くと私にもグラスが渡される。

「それでは皆様　大沢会長の乾杯の音頭をとって戴きますの宜しくお願いします」

おじい様は司会者に促されるとグラスを少しあげ

「これからの大沢グループの益々の発展を祝し乾杯！」

皆が一斉にグラスを高らかに掲げに轟くように乾杯の唱和が響いた。

「「「「「「　乾杯！！　」」」」」」

そして一斉にグラスの酒を次々と飲み干して行っくのを茫然と見詰める私には不思議なビジョンが次々と現れる。

それは紺の髪に深い青い瞳に少し浅黒い肌のアラブの王子のような白い衣装に身を包んだ神々しいばかりの美丈夫が金の杯を掲げ乾杯をする姿

だがその男は突然体が融けていくように真っ黒な禍々しいドロドロとした姿になっていき私に呪詛の言葉を投げかける。

『　龍王の娘　我と共に狂い滅びるがいいーーーーーーーー　』

そして目の前が真っ暗になってしまう

龍王の娘？

私が？

「葵　大丈夫か」

何時の間にか尚吾さんが私を確り抱きしめて支えている。

「私どうかした？」

「グラスを落として倒れそうになったんだ」

見れば足下に割れたグラスを急いで処理するスタッフ

「ゴメンなさい　緊張して眩暈を起こしたみたい」

「兎に角椅子に座ろう」

尚吾さんに支えられ壁際にある椅子に座らされるが私が倒れそうになったのは乾杯のさなかだったらしくあまり気付かれずに済んだようだ。

ステージからはおじい様達が降りて来て心配そうな顔だが直ぐに大勢の人達に囲まれてしまい会長としての応対をしなければならないのだろう

側には尚吾さんも居るので安心だし

「何か飲むものを貰って来ようか」

「ううん　側にいて」

「分かった。　／／／　」

会場は幾つかの輪が出来上がっており、おじい様、孝明おじ様、典孝おじ様の三つに大きく別れているが華やかな女性陣に取り囲まれる将人さんと有紀さん、紫さんはおじい様の側に居るので若い男陣は遠くから伺っている。

私の周りにも尚吾さんを伺う若い女性

どう見ても二〇代前半のおねいさん達だが尚吾さんは背広を着ているのでかなり大人ポックてしかも王子様ルックでもてないはずが無い

私が独り占めしているのも悪い様な気がして来るが先程の映像が衝撃的過ぎて一人でいたくなかった。

龍王の娘

あの男は私をそう呼び、人であらざるような美貌が崩れていき黒いドロドロとした物に変わっていく姿はゾッとした。

記憶を失くす前の私はとんでもない場所に居たとしか思えない

まるでファンタジーと呼ばれる様な異世界

そう地球ではない世界

まさか……

突拍子もない考えに失笑してしまう

クスッ

「どうした葵、何が可笑しいんだ？」

「思い出し笑い。それより気分も回復したらお腹すいちゃった。何か食べましょ」

立食パーティーなので料理がずらりと並んでおり美味しそう

安心したように笑う尚吾さん

「よし！　二人で全種類制覇しようぜ」

尚吾さんが手を差し出しその手を取り立ち上がる。

過去なんかこれ以上思い出したくない

今はこの一時を楽しみたいと思うのだった。

ユンロンとハク

湾岸沿いの高級ホテルのスイートルームのソファーで寛ぎ座りながら社長とマネジャーと打ち合わせをしているのはモデルとして活動し始めたユンロン。白いドレスシャツを羽おり黒い細身のパンツのシンプルなスタイルながらまるで貴族のような優雅さだ

「明日は午後1時よりメンズ雑誌の撮影と取材だけになっています」

黒ぶち眼鏡をした長身な真面目そうな三〇代のマネジャーが緊張しながら予定を伝えている。

「分かりました」

そして五〇代半ばのガッチリとした体格ながらどこか人の良さそうな社長がオドオドしながら聞いて来る。

「あの～　各テレビ局から出演依頼が来ているのですが……出来れば出演を…」

「太田社長　私はテレビメディアには一切出演しない契約ですよ」

ユンロンのアイスブルーの目で睨まれ背筋に冷たい物が落ちるのを感じる二人

あまりに人間離れした美しさに恐怖を感じてしまう

「もっ申し訳ありませ。　それでは明日の１１時にお迎えに上がります」

「失礼致しました」

二人はペコペコ頭を下げ慌てふためき逃げるように部屋を出て行く姿を苦笑しながら見送る。

「そんな脅した心算は無かったのですが…」

ユンロンが選んだモデル事務所は大手では無く中堅どころのモデル事務所

選んだ基準は経営者である社長を面接した結果だ。

社長を面接するなど立場が逆なのだがユンロンだから仕方がないだろう

初めは大手の事務所からアポなしで受け付けに行き素顔を出して社長に会いたいと言えば直ぐ社長室に案内され契約書が出されて来るほどだったが、社長が自分を見る目と態度を見て直感的に決めていくと大手は全滅、特に女性社長はあからさまに色目を使って来て、男でも愛人にならないかと持ちかける者までいて神力があれば瞬時に氷漬けにしやりたかった程だ。

そして選んだのが太田モデル事務所

ユンロンを見て

「家のような事務所よりもっと大手の事務所を紹介しましょうか」

などと自ら金のなる木を手離そうとするお人好し。どうやら小さい事務所より大きい方が私の為になると判断したようだが、自分には御しきれないという思いもあったのかもしれない。

「いいえ。私は貴方にマネージメントしてい頂きたいのです。では早速契約の話を致しましょう」

「ですが…」

何故か渋る社長に経理の女性が急いで契約書を机に持って来る。

中堅となると小さい事務所でワンフロア―で社長室も仕切りで仕切っただけで会話は筒抜け

「社長、この方に入って戴ければ来月の支払いは安泰です！　ここで契約しないなら私もこの事務所に見切りをつけますよ」

「裕美ちゃん～」

女性事務員の援護も受け後はスムーズに契約が交わされた。

しかし一つ問題も起きる。

女性がテキパキと契約書を処理して行き最後に

「明日までに履歴書を書いて来て下さい」

「履歴書？」

「モデルは初めてでしょうから、現住所と電話番号や学歴だけでもいいですし身分証のコピーも必要です」

「分かりました。明日持ってきましょう」

「明日はプロモーション用の写真を撮る打ち合わせをしますので2時までに来て下さい」

「はい」

そう言ったものの国籍など無いユンロン

これまでは密航や無断越境をして国を渡り歩いていたのだ。

今持っているのも携帯もある方から頂いたもの

「あまりあのお方とは接触したくないが致し方ない」

たった一つ登録されている携帯電話の番号を押す。

思えばあの方が私の目の前に現れたのは偶然なのか必然なのか……

上海の街中を歩いている時後ろから名前を呼ばれ驚く

「ユンロン。珍しい所で会うわね」

「貴女は」

振り向くと見覚えのある顔

それは亀王妃である深雪様が少し年を重ねたような顔の女性

どういう事かと警戒して相手の出方を見る。

「分かる訳ないっか。この世界では橘深雪の姿だけど、貴方の世界では天帝と呼ばれる存在」

そう言われ亀王妃が天帝によって四神国に落された話を思い出す。

つまり此処がアオイ様や亀王妃がいた世界なのだと初めて知る。

「本当に天帝様なのですか！」

まさか異世界で自分の世界の最高神である天帝に遭うなど誰が考えよう

「こんな大通りでなんだからお茶でも飲みましょ」

そうニッコリと笑う天帝の姿は普通の女性

だが私の名を知る者などこの世界に存在するはずが無い上に四神国の言語を話しているのに気が付く。

しかし天帝と言えば白虎国の邪神事件の大元で皇女がこの世界に落ちてしまった元凶

何を考え声を掛けてきたのか油断ならない

取敢えず天帝に誘われるまま近くのカフェに入りコーヒーを頼む。

「大分この世界に馴染んでいるのね。　しかもあの髪を切って染めるなんて勿体ない」

「一年ほど前からになります」

「そんなに前から、私も大方の神力を封じているから気付かなかった。　神獣を連れて無かったら気付かないままよ。ところで何しに来たのかしら」

アオイ様を眠らせている張本人なのだから皇女の存在を知っているはず。

「皇女を捜しています」

「あの娘がこの世界にいるの!?　何で?」

驚いて惚けているようではないが鵜呑みにするのは危険

何しろ神を陥れるのが趣味のようなお方だ。

しかし皇女の経緯と白虎国の事を説明すると別段驚く事も無くまるで普通の世間話を聞くように相槌を打つだけ

「成程、それであの娘がこの世界にいて、そして貴方とその神獣が捜している訳ね」

椅子に置いたリュックの口からハクが顔を覗かせる。

『　天帝様？　』

「そうよ」

『　天帝様　オ父サン　戻ッタ　嬉シイ　』

「あの愚かな男が復活したのは気に食わないけど、もう私の脅威にはならないようね」

『　ハク達ヲ生カシテクレテ　アリガトウ　』

「お前は良い子ね」

そう言ってハクを撫でる天帝の姿は意外な物だった。

「天帝様は皇女様の居場所に心当たりは無いのでしょうか」

「この子の気配を感じれる程しか力が無いのに６９億人の中から一人の人間を捜せる訳ないでしょ」

「そうですか」

そこへ携帯の音

ピリリリリッリ

「失礼」

バックから携帯を取り出し誰かと話し始めどうやら仕事の話のようだ

見ればブランドのスーツで決め髪も綺麗にアップされ亀王妃と違いきびきびと会話をしており、呼び止められなければ気が付かなかっただろ

この香港で何をしているのだ？

そもそもこの世界に何の目的があるのだと疑問が尽き無い

携帯が終わるとおもむろに立ち上がり伝票を取り上げる。

「ゴメンなさい。　もっとゆっくり話をしたかったんだけど取引先との時間が迫っているの。　そうだこの携帯をあげるから困った事があったら登録してある自宅に電話して頂戴」

そう言って渡され、取り付く暇もなくサッサと店を出ていくと道路脇に止められていた高級車の後部座席に消えていったのだった。

それ以来一度も連絡を取っていないが有り難く使用させて貰いかなり役にたった。

ワンコールで出てくれた天帝に駄目もとで偽造の身分証と経歴を頼んでみると簡単に了承を貰い、その上香港だと思っていたら日本国民だった。そのお陰で夜に会うと一揃いの書類を渡される。

「貴方はこれからユン・緑川二十六歳本籍は東京。アメリカの帰国子女で両親が死んで母の母国である日本に今年帰化した設定よ」

どうやって作ったのか私の顔写真が載った日本の運転免許所と住民票まで用意されている。

この数時間でこれだけをの物を用意するなど一体何をしているのだ

「天帝様は日本でどの様な立場のお方なのですか」

聞いてみると

「ある企業の社長をやってるの」

「自ら起業されたのですか」

「違うわ乗っ取ったの」

乗っ取った？　人の会社を奪ったという事だろうか？？

楽しそうにそう言うと立ち上がり

「あの娘が見つかればいいわね。　でも四神国に帰るのがあの娘の幸せとは限らないんじゃない……それにアオイもあのまま眠っていた方が幸せかもよ」

意味ありげに笑う天帝のその目には暗いものが宿っておりゾクリとする。

「……皇女の居場所を知ってるんですか！」

「以前も言ったでしょ。他力本願は良くないわ……私が協力するのは此処まで、後は自力で捜しなさい！」

「！！」

そう言って立ち去っていくが思わず放たれた殺気に体が動かなく無言で見送るしかなかった。

以前？

香港ではそんな会話は無かったはず

疑問だらけの天帝の行動と言動など考えても惑わされるだけと思いそのまま無視し身分証は有り難く使わせて貰い事務所の方も疑う事無く信じた。

念のため詳しいプロフィールは伏せて貰いモデル名のユンだけを公表した。

それから直ぐ大手化粧品会社の口紅の広告モデルに大抜擢され次々と仕事が舞い込んで来て確実に名前が売れていったお陰で今では外

を歩く事すら出来なくなってしまった。

仕事以外はメディアには出たくなかった為、住まいもホテルを転々としており今は湾岸に最近立てられたホテルの最上階の窓から薄暗い海を眺める。

天帝は恐らく皇女の居場所を知っておりこの日本いる可能性が高いもしポスターを見れば私の正体に気が付き名乗り出て来るか何らかの接触があるはずだと期待しており、レイカという少女から連絡があったら直ぐに教えて欲しいと事務所には伝えてあるが今だに接触は無い

「皇女様……どうか私に気が付いて下さい」

暗く染まっていく海を見ながら祈らずには居られなかった。

『　ユンロン　オ腹スイタ　』

隠れていたハクがクローゼットから出て来て肩に乗る。

「そうですね。何を取りますか」

『　フルーツセット　』

最近ハクは色々なフルーツがカッティングされ美しく盛られたフルーツに嵌っている。

内線で自分の分も食事を注文すると

「申し訳ありませんが只今大変混雑しておりますので少々お時間を頂きたいのですが」

「そうですか……　なら結構です」

ハクはお腹をすかしているのでコンビニでも行って調達した方が速そうだ

「大変申し訳ありません」

受話器を置く

『　オ腹スイタ　』

「急いでコンビニで適当に買って来るので我慢して下さい。　ハクは留守番ですよ」

『　オ部屋モウ嫌　ハク行ク　』

モデルを始めてからはハクをホテルの部屋で留守番をさせられているので辟易しているのだろう…

夜なので外は暗く少し遊ばせてあげようと考え着替え始める。

黒いTシャツにジーンズにフード付きのチョッキを羽織りキャップとサングラスを掛けて愛用のリュックの口を開く

「少しだけ散歩しましょ」

『　ユンロン　大好キ！　』

そう言ってリュックに飛び込む。

ハクの存在は周りには秘密にしていた。

猿と一緒にホテルに泊まるのは色々面倒な事になるので仕方なく、その分ハクには不自由をさせてしまっているので可哀想だった

カードキーと財布をポケットに押し込み部屋を出て直通エレベーターに乗り込む。

エレベーターの中で随分この世界に馴染んでしまったものだと感慨深い。

当初は全てが違いすぎて驚異で戸惑っていた頃が懐かしい

本当に便利な世界だが四神国にこの文明の利器を持ちこもうとは思わない

この文明を維持する為にこの世界は疲弊し悲鳴を上げている。

あの美しい世界を壊したくは無い

エレベーターを降りてフロントを通らずに非常口から抜け出してホテルの庭を一応つけられていないか周囲を伺う

マスコミと言う集団は手に負えない

まるで蛭のように張り付き追って来るのだから面倒この上なく、自分の世界なら直ぐさま消し去ってしまいたい存在だ。

「どうやら居ないようですね。ハク暫らくこの辺りで遊んでいて下さい。食料を買って来ますから」

『 ウン フルーツ一杯 』

「分かりました。 急いで買ってきますから人に見つからないようにして下さいね」

『 ウン！ 』

そしてハクを残し急いでコンビニに向かうのだった。

幾つかの照明にライトアップされた庭園の木々を昇りながら遊んでいるハク

『 甘イ 匂イ 』

クンクン鼻をさせると美味しそうなお菓子の匂いがした。

お腹の空いているハクは匂いにつられ木々を伝って行くとホテルの二階のテラスに辿り着きテラスには数組のアベックがいい雰囲気で話を楽しんでいたが、闇に隠れ匂いの方に行くと大きなガラス窓があり其処に大勢の人が集まっているのとテーブルに並でいる美味しそうな料理やフルーツ、デザートのケーキが並んでいた。

『美味シソウ！　ハク　食ベタイ』

何しろお昼を食べていなかったので空腹で堪らず、ついつい窓に張り付き見ているとテラスを出入りする人間を見てコッソリと足下に隠れながら中に入ってしまう。

ユンロンに人に見られないよう言われていたのをスッカリ忘れてしまい、ただ美味しいご飯が食べる事で頭が一杯になてしまっていた。

幸いな事にハクは誰に気付かれる事無く料理の並ぶテーブルに辿り着きそのテーブルの下に急いで隠れる。

テーブルには白いクロスが掛かっていたので下に居れば誰にも見つからない安全地帯だが自分が漸く危険な行為をしてしまった事に気付く

『ドウシヨウ　ユンロン　怒ル　？』

ハクはお腹を空かせたままテーブルの下で途方に暮れるのだった。

葵とハク

ハクは困っていた。

上からは美味しそうなケーキや甘いフルーツの匂い、だけどそれを食べるにはテーブルに昇らないといけないがそれでは人間に見つかってしまう

食べたい……

でも人間に見つかる……

食べたい……

でも人間に見つかると怒られちゃう

ユンロンは普段優しいけど怒るととても怖いのだ

どうしよう……

クン　クン　クン

でも美味しそうな匂い

テーブルの下で悩むハクは甘い誘惑にとうとう負けてしまい人の足が少ない場所を見つけてクロスをよじ登りコッソリと甘いケーキを皿から掠め取り急いでテーブルに潜り込みケーキにパクつく。

美味しい！！

ケーキには色とりどりフルーツが盛られて甘く夢中で食べるとあっという間に無くなるがまだ物足りなくもう一度テーブルに昇りケーキに大きなイチゴが乗ったケーキを取ろうとした時視線を感じ上を見る

そこに少女が目を見開きハクを見ていた。

「「　！！　」」

尚吾さんと二人で料理がずらりと並ぶテーブルで楽しく食べているとおじ様がやって来る。

「葵ちゃん　すまないが尚吾を少し借りるよ」

「なんだよ、俺は葵といる」

「大沢の人間として今から顔を繋いでおくのは大事だ。　何時まで

も子供気分では葵ちゃんに愛想を尽かされるぞ」

「尚吾さん私は大丈夫」

「チェッ　少しだけだぜ」

尚吾さんは如何にも嫌そうにおじ様に付いて行くのを見送る。

何れおじ様の跡を継ぐであろう尚吾さん、学生でも色々立場が大変そうだ。

私みたいな記憶の無い身元不明な娘なんて尚吾さんのお嫁さんになれるんだろうか

おじ様も小母様も私には好意的だけど結婚相手としてはどうだろう……

そこでハッとする。

……結婚!?

自分でも何を考えてるんだろうと驚いてしまう。

まだ十六歳なのに……バカな私

自分でも呆れてしまう

気を取り直し美味しそうなケーキを食べようと大きなイチゴの載ったケーキを取ろうとすると向う側に小さな白い毛玉が動いているのに気付く

？？

なんだろうとジーッと見詰めていると小さな頭がヒョッコリケーキの間から顔を出してケーキを取ろうとしているらしい

白い猿！！

突然胸がドキリと脈打つ

そして視線を感じたらしい白い猿が顔を上に向けると赤い真ん丸な目と視線が合う

「「　！！　」」

ハク！　何故此処に居るの！？

瞬時にその白い猿がハクだと確信してしまう。

ハク？？？

ハクと言う名前は思い出すけどその子が自分にとってどういう存在なのか思い出せない。

私のペットだったのだろうか

白い猿は私に見つかり慌てて隠れてしまう

もしかし幻?

急いで反対側に廻り込むが見当たらず料理を取る人達が居るばかり

だけど白いテーブルクロスか白い尻尾がはみ出しているのを見逃さない

直ぐさましゃがみ込んでクロスを捲ると小さな可愛い白い猿が固まるように座っていた。

私の記憶の手掛かり

そう思うとどうすればいいのか分からない

お互い暫らく固まる様に見詰め合う

「お客様　如何致しましたか?」

ビック!!!!!

ホテルのスタッフが心配そうに声を掛けられ慌ててクロスを降ろしてハクを隠す。

「すいません。アクセサリーを落してしまって捜してたんです」

「それはお困りですね。　御一緒にお探ししましょう」

ホテルスタッフのネームをつけた黒服の爽やか青年が屈もうとするので慌てる。

「もう見つかりましから大丈夫です。ありがとうございます」

急いで立ち上がりお礼を言う

「そうですか…それではパーティーをお楽しみください」

残念そうにしながら離れて行ってくれるので安心するの束の間嫌な男が声を掛けてきた。

「尚吾の次はあの男の気を引いてたのかい」

それは孝明おじ様の長男の将人さん。尚吾さんほど背は高く無く１７５？くらいだがガッチリとした体型で大学時代ラクビーの選手をしていたらしく見た目は爽やかなスポーツマンタイプだけど性格は自信家な上に嫌味で好きにはなれない

しかも周りに見せつけるように背後には綺麗なお姉さんを引き連れていて不快感は倍増

「そんな心算はありません。ただ困っているのを見かねて声を掛けて下さっただけです」

「どうだろう、人の同情を引くのが巧いからな葵は」

むっかとするけど我慢

十歳近くの下の女の子を虐める二十代の男ってどうなんだろう

後お姉さん達に金はあるけどこんな男止めた方が無難ですよと忠告したいがお姉さん達にも分かっていて近づいているのかもしれない

私はこれ以上関わりたくないので注意を他に向ける。

「ところで将人さんは良いんですか？」

「何がだ」

「紫さんはおじい様の側で財政界の皆さんに紹介して貰ってますよ」

おじい様の輪にはとても偉そうなおじさん達が取り囲んでおりそこで紫さんが華やかに輝いて堂々としてとても十九歳には見えない

見れば尚吾さんもおじさんに連れられ挨拶回りをしているし

だから将人さんが呑気に女性を引き連れている方が信じられない

「フン　全く可愛げのない娘だ」

忌々しそうに私を睨みつけながらも女性陣をその場に置き去りにしおじい様の方に急いで行く姿が笑えたけど、ある意味お姉様達の邪魔をした私は睨まれる

だけどそれだけで他に散って行く。

創業者家族と現れた私に従業員では手出ししにくいのだろう

それより漸く一人になりハクと話をしなくてはいけない。

話し……

猿と話し？？

何を言ってるんだろう私？

それより恐らく迷い込んでしまったハクを何とかしないといけない

此処はパーティー会場で見つかれば大騒ぎになるのは分かりきっている。

試し呼び掛けてみる。

「ハク　出ておいで」

するとテーブルクロスの下から小さな顔を出して小さな顔を出して不思議そうに私を見る。

「キッキ？」

「こっちにお出で助けてあげる」

すると子猿は這い出して来て差し出した手に乗って来て急いでヌイグルミを抱くようにする。

「ジッとしてるのよの」

まるで私の言っている事を理解しているように大人しく抱かれ、かなり人に慣れている。

そのまま庭園風のテラスに向かうが誰も不審な目を私には向けず外に出ようとすると誰かに腕を掴まれる。

ガッシ！

ツビック！！

「葵ちゃん何処行くんだい？」

それは思いがけない相手

「有紀さん…少し風に当たろうと思って」

「そうなの、それじゃあ僕も付き合うよ」

有紀さんは髪を明るく染めて少し軽薄な王子様タイプで紫さん曰く尚吾さんより女の子大好き人間で性病が移るから近付いちゃ駄目よと警告されていたけど私には無関心で安心していた。

「でも有紀さんにはお相手がいるんじゃ」

しかし有紀さんの周りには女性がおらず期待を裏切られてしまう

今日は厄日なんだろうか、今まで私なんて眼中にも入れなかったのにどうしちゃったの
、しかも葵ちゃんなんて初めて名前を呼ばれてしまい鳥肌

「葵ちゃんって地味で今一だったけど半年見ない内に綺麗になったんだ。前からスタイルは良いとは思ってたんだけど」

私の質問には答えず、そう言って私を上から下まで眺めるので気持ち悪い

「あの…腕を放して下さい」

「二人で夕涼みでもしよう」

全く人の話を聞かない上に強引にテラスに連れ出そうとする強引さ

確かに尚吾さん以上で身の危険を感じてしまう

助けを求めるべく周囲を見渡すけど誰も見ぬ振りで、無理やりテラスに引っ張られてしまい観葉植物の陰に押し込められ壁に押し付けられる。

「最上階に部屋をとってあるんだけど二人で行かない」

そう言って私にカードキーを見せねっとりとした目を向けて来る。

きもい！

性病が移るから近ずかないでと叫びたいけど心の中に納める。

孝明おじ様、貴方は息子さん達にどういう教育をしてるんですか！！！

「有紀さん知ってますか、１８歳以下への淫行又はわいせつ行為は都道府県によって違いますが最低でも条例で１年以下の懲役又は５０万円以下の罰金ですよ」

思いっきり睨みつけて教えてあげる。

「合意なら大丈夫だよ」

全く気にすることなくいけしゃあしゃあと言う

誰が合意したの？？？？

「この場合私が訴えます。おじい様も黙ってませんよ」

「はぁ……　堅いな。　若いんだからもっと楽しまなきゃ」

そう言って体を押し付け顔を近づけキスをしようとするのと抱っこしていたハクが有紀さんの顔を遮る様に顔を突き出す。

「ウッキー？」

「んっ！！？？」

有紀さんは一瞬動きを止めるがまるで波が引くように一気に後ずさる。

ズッザッザッザザザーーー

「なっなんだ！！　その猿わ！　ヌイグルミじゃないのか！？」

「私の可愛いペットです。これ以上近寄るとけしかけますよ」

こんなに可愛いのにどうやら猿が苦手らしく近づこうとせず更に後ずさる始末

「フン！　お前程度がいい気になるな」

そう捨て台詞を残してサッサと会場に戻って行ってしまう姿にアッカンベーをしてやる。

私だって御免こうむりたい

「有難うハク！　助かったわ」

ハクの白いフワフワの頭を撫でてあげると気持ち良さそうに目を細める

「ウキッキ」

まるでどういたしましてと言っているようで会話しているような気分になるり試しに聞いてみる。

「ハクは何処から来たの？　私の事知ってる」

周囲から見れば猿に話しかける危ない女の子に見えるだろうけどテラスはアベックしかおらず二人の世界で誰も私を気にしない。

「キッキーウッキ　ウキィー　キッキっキキー　」

ハクは何かを訴えるようにしきりに鳴くけどさっぱり分からない

当り前か……

「ゴメンね　言ってる事分かんないわ」

そう言うと如何にも残念そうにするハク

「キィ……」

やっぱり普通の猿とは違う気がする。

このままずっとこの子といたい

懐かしさと嬉しさが溢れる。

「私ね…自分の事を憶えていないんだ。　だけどあなたがハクだって分るの不思議でしょ？　ハクは何処から来たの？　もしかして私を捜しに来てくれたの？」

無駄だと分かっていても次から次へと質問してしまうがハクは困った顔をするばかり

「話せないのにゴメンね…　それよりハクがいいなら此れから私の側にいて」

綺麗な赤い目を見つめ真摯にお願いしてみる。

この子がいれば孤独が癒されるよう気がした

おじい様にも尚吾さんにも埋められない何かが

「葵！　葵！」

そこに尚吾さんがテラスで私を捜す声

「尚吾さん？」

「葵！」

仄かな照明しかないので直ぐには私の場所が分からなかった様だが
直ぐに此方の方に急いで駆け付け私に抱きつかんばかりの勢いで肩
をガッチリと掴んで来るのでハクが驚き側の木に飛び移ってしまう

「ハク！！」

私は急いで尚吾さんを振り切りハクが飛び付いた木をみるがその姿
が無い

「ハク！　出て来て　ハクお願い　私の側にいて」

必死に呼びかけるが一向に姿を現さない

「どうしたんだ葵!?　ハクってどういう事だ?」

私の様子に訝しむ

「さっきハクが、白い猿が居たでしょ!?　私の大事な子なの一緒
に捜して尚吾さん」

「さっきの白い影が……　」

驚く尚吾さんはそのまま私を抱き締める。

「いや　離して！　ハクが遠くに行っちゃう！　お願い　」

「止めろ葵　そんな猿ほっておくんだ！　」

「何故そんな事を言うの」

「俺は葵のままでいて欲しい。葵はいいのか過去を思い出しても」

「私の過去」

「この前じいさんが教えてくれた。葵は夜に悪夢を見て苦しんでるって…　それって辛い過去の所為だろ……　そんな辛い記憶なんか忘ろ」

辛い記憶

私を殺そうとする父親の嫌悪の顔がフラッシュバックする。

剣が私に振り降ろそうとされた瞬間に誰かが私に覆いかぶさって来る新しいビジョン

それは私によく似た人

母様?

しかし父はそのまま剣を振り下ろし母が切られてしまう

あまりにも辛い記憶に血の気が引く

母様が死んだ

私を庇って

私の所為で母様が殺されてしまったのだと悟る

「「嫌――――――ぁー！！！！！」」

現実の自分か過去の自分の叫ぶ声が聞こえたと思うとそのまま暗闇に落ちて行くのだった。

こんな辛い記憶なんか……

……

要らない

尚吾の不安

コンビニで食糧を購入してホテルの庭園に急ぐがハクが何処に行ったのか見当たらない

恐らく久しぶりの外ではしゃいでいるのだろう

賢い子なので迷子になる心配もないと思うのだが

仕方なくライトアップされた庭を散策していると人のざわめきが聞こえてくる方を見れば白い大理石のテラスに会話を楽しむ人々が見え広間でパーティーでも催されているようだ

「まさか……あそこに紛れ込んでないでしょうね」

少し嫌な予感がして近ずく

１m程高いテラスを伺うが男女が各々いい雰囲気で話しあって騒ぎが起こっている気配は無く安心していると白い影が上の方から降って来る。

『　ユンロン　ユンロン！　』

ハクが慌てた様子で跳び付き肩に乗り耳元で喚きだす。

「そんなに慌てて、余程お腹が空いたんですか」

『レイカ　ジャナイ　レイカ　ガ　イタ！！』

「皇女じゃない皇女？？　何を言ってるのですか」

『顔ガ　違ウ　デモ　匂イ　ト　声ガ　レイカ』

「顔が違うなら別人でしょ」

『ハク　間違ワナイ！！　デモ変……顔ガ　アオイ　何故？？？』

「アオイ様の顔とはどういう事です？」

『レイカ　アオイ　ニ　ナッテイタ』

「どういう事です…詳しく話して下さい」

ハクはユンロンにパーティーでの出来事をたどたどしく話す。

「それではその少女はアオイ様そっくりでしかもアオイと呼ばれて

たんですか」

『　ウン　』

「しかもハクの名前を知っていた』

『　ウン　』

「でもハクの事を良く覚えていなさそうだったと」

『　ソウ…　』

ハクはこの世界の言葉をあまり理解していない。何しろ言語が雑多で次々と国を渡って行ったので無理もないのだ

ハクは皇女だと確信しているらしいが人間の皇女が神力も無くどうやって姿を変えらるのかと疑わしいが取敢えず胸元にある龍核を取り出してみるが矢張り何の反応もない

「近くにいるなら龍核が反応していますよ」

ハクに龍核を見せる。

『　デモ　絶対　レイカ　』

珍しく頑固に言い張るハク

しかしアオイ様に似ており名前までアオイ

もしかするとアオイ様の血を引く遠縁の娘なのかもしれない。

『ユンロン！　オ願イ　レイカ　ニ　一度　会ッテ！』

必死に頼み込むハク

思えばこれが初めての手掛かりらしきもの

長年皇女の側に居たハクの言葉は無視できない

決してアオイ様に似ている少女に興味がある訳ではない

……

「分かりました一度会ってみましょう」

『ユンロン　有難ウ！！』

そうと決まればこの恰好ではパーティーに潜り込むのは難しいので

一度部屋に戻り着替える事にするのだった。

葵がまた倒れてしまった。

俺が追いつめてしまったせいなのか

思い出すななんて言った所為で
だけど嫌だった……葵が記憶を取り戻し何処かに行ってしまいそうで
倒れた葵を抱え直ぐ親父に言って部屋をとって寝かして貰い付き添っていると心配した爺さんと紫が駆け付ける。

「葵は大丈夫か、一体何をしておるんだ尚吾！　一度ならず二度までも」

「おじい様、声を押えて下さい。葵ちゃんが寝てるんですから。それより尚吾、葵ちゃんが倒れた時の状況を教えて」

紫に言われ事情を説明する。

葵が有紀にテラスに連れ出されるのを見かけ急いで追いかけると直ぐさま有紀一人が広間に戻って来たが安心できずテラスに出て葵を捜した。直ぐに葵が見つかり駆け付けると葵の腕に居た白い物が驚いたように木に飛び付くのが見え、葵はそれが自分の猿のハクだから捜してと言いだ出したのを止めた。

「俺はこれ以上記憶を取り戻して欲しく無くって辛い記憶なんか思い出すなって言ったんだ……そしたら真っ青になって悲鳴を上げて倒れた。　俺の所為だ……」

「……本当に白い猿はいたのか」

爺さんが鋭い目つきで聞いて来る。

「白い小さな影しか見てませんが猫じゃなかったです」

「でもこのホテルの敷地に猿が居るなんて変ね。宿泊客の誰かが持ち込んだのかしら……おじい様調べましょうか」

紫の提案に爺さんは苦い顔で考えるが

「……否　葵をこれ以上辛い思いをさせたくない。　暫らく葵に付いていてくれ、わしは会場に戻らねばならん」

「はい分かりました。おじい様」

そう言って送り出す。

「邪魔よ」

紫は俺を押し退けて葵の枕もとの側に座り顔をしげしげと眺める。

「なんて可愛い寝顔　その上賢いし私が男なら絶対お嫁さんにしちゃうのに。　この際葵ちゃんが男でもいいわ」

うっとりと見詰める目は本気が伺える。

「バカ言うな。葵は俺が嫁さんにするんだ」

「脛っ齧りのガキが生意気よ。　葵ちゃんが私の妹になるから協力するけど本来は尚吾なんか近づけたくもないんだから」

「俺の何処が悪いんだ」

成績だって今回一番とったし顔だってイケてるし将来も約束された

俺の何処が駄目なんだ

「おバカだし、女にだらしが無い。　有紀より少しましなだけよ」

「今は葵一筋だし、あんな無節操と一緒にするなよ」

「でも将人さんに引き続き有紀まで興味を持っちゃったから拙いわね」

「将人さんが？　紫の勘違いだろ」

将人さんは何時も連れ歩くのは派手な美人、しかも葵とは十歳近く年が離れてる。

「あの男はおじい様とおじ様の血を確実に引いてるの。　女性の好みが一緒なのよね……優しげなたおやかな雰囲気の女性が好きなのよ。伯母様って葵ちゃんとイメージが被るでしょ」

確かに伯母さんは清楚な細身の体で静かな女性で艶やかな美人ではないが上品な綺麗な人で葵も外見はそうだが中身は結構ハッキリした性格で容赦がないが優しい女の子だ。

「でも将人さん葵に嫌味ばっかり言ってるぞ」

「プップップ～　あいつは好きな子を虐めちゃうお子様なの。　昔からそれで好きな子に嫌われて寄って来るのは派手な女ばっかりという可哀想な男なの。　さっきだって私に尚吾と葵ちゃんが付き合ってるのとかしつこく聞くんだから笑っちゃう～」

必死に笑いを堪える紫をみて少し将人さんに同情するが俺のライバ

ルではなさそうだ

それよりもっと厄介な問題がある。

「葵は記憶を取り戻したらどうなるんだろう」

「人それぞれ見たいよ。過去を思い出して新しい記憶を忘れてしまったり、両方とも覚えている人もいるみたい」

目を覚まして記憶を取り戻していたら…　そう考えると恐い

「葵に忘れられたら俺どうしよう」

「バカね～　もう一度最初から始めればいいのよ。　でもおじい様も尚吾と同じで葵ちゃんにこのままでいて欲しい見たい」

「本当の孫以上に可愛いみたいだしな」

「だけど白い猿の飼い主が葵ちゃんの過去を知っている可能性があるんだけどどうしよう?」

小悪魔のように唇を上げて俺を伺う

「調べるのか」

思わず紫を睨む

「そんな怖い顔しないの～それは葵ちゃんが決める事よ。それより尚吾はパーティーに戻ってお父さんに付いてなさい。うかうかしてると従兄に葵ちゃんを奪われちゃうかも」

爺さんのお気に入りの葵

あの二人も葵を狙って何かしらの行動をして来るかも知れないし、爺さんはそれなりの男じゃないと結婚なんて許してくれなさそうだ

「ぐっ　葵が目を覚ましたら連絡くれよ」

「分かったわ」

仕方なく紫に葵を預けてパーティー会場に向かう事にするのだった。

エレベーターの前に行くと丁度一人の客が乗り込もうとしていた。

「すいません！」

先客は待ってくれ、急いで乗り込む。

「有難うございます」

「いいえ」

礼をいいながら同乗者を見るとギョッとしてしまう。

背は俺より高いぐらいだがスタイルが抜群によく足の長さが半端無い
顔はサングラスで隠されているが間違いなく美形
細身のスーツをきめ普通ならホストぽくなりがちだがこの人はエレガントに着こなし別格
同じ人間というより精巧につくられた生きたマネキンのようだ

「何階ですか？」

涼やかな声が耳に入りハッとする。

「あっ！　二階をお願いします…　／／／／」

初めて男に見惚れてしまっていた。

それから直ぐに二階に着き何故か男も一緒に降りてそのままパーティー会場まで同行者のように着いて来る。

その時は招待客だったのかと漠然と思っただけだった。

運良くパーティー会場に行く青年と一緒になり会場の入り口も顔パ

スで疑われる事無く潜入出来た。後はアオイと言う少女を捜すだけだがアオイ様の顔を捜すなどいとも容易いと考えていたのだが思ったより人が多い

しかも引っ切り無しに声を掛けられ、女性に取り囲まれてしまう。

「あのお名前を教えて下さい」

「メール交換お願いします」

この世界の女性は積極的で物おじしない

流石に亀王妃様の故郷と言ったところだろうか

「申し訳ありませんが人を探してますので」

そう言って振りきるが後を着いて来るので益々目立ち会場がざわつき始めてしまう

そこにホテルのスタッフに目を付けられてしまい呼び止められてしまう

「お客様、申し訳ありませんが招待状をお見せ願えませんでしょうか」

此処は観念するしかないだろう

サングラスを外し勝手に入って来た事を謝り退参し、フロントでチェックして行くしかないだろう

「すいません。　知り合いがこの会場に入って行ったのを見かけ悪いと思ったのですが無断でお邪魔してしまいました」

その途端更に会場がざわめく

「きゃーー　ユンよ！」

「何でユンが居るの！？」

「本物！」

「サイン！」

「写メ！　誰か写メ撮って！」

女性達が凄い勢いで押し掛けてくるので流石のユンロンもギョッとする。

なにしろ青龍国ではこのようにあからさまに女性が寄って来るなどあり得ず、しかも集団に取り囲まれるなど初めての経験

なっつなんですか…　この女性達は！！

ホテルスタッフの男達が騒ぎを押えようとするが激流にのまれる木の葉のよう頼り無い

だが

「何をしておる！　創立記念の祝典をなんだと考えておる。　アイドルのコンサート会場ではない！　騒いだものは直ぐに退場させろ

！！」

騒然とする会場に老人の一喝が響き渡ると途端に水をうったように静まり返ってしまう

そしてホテルスタッフ達が数人でユンロンを取り囲む女性達を次々会場から出て行くように指示して行くと先程とは打って変わり女性達は顔を青褪めさせ離れて行くのだった。

まさかこんな騒ぎになってしまうとは思わなかった。

これは謝罪だけで済むだろうかと考えているとスタッフの男が近寄り

「お客様、会長がお会いしたいそうです。　御足労願えませんでしょうか」

騒ぎの張本人ながら丁寧な対応だった。

男の後ろに付いて行くと眼光の鋭い老人が立っており此方を睨んでいた。

恐らくこの老人がこのパーティーの主催者なのだろう

自ら老人の前に出て謝罪をする。

「私はユン・緑川と申します。勝手に会場に入り騒ぎを起こし申し訳ありませんでした」

「確かに迷惑だ。早々に引き揚げてもらおう」

「有難うございます」

思いのはか謝罪だけで済み一礼して立ち去ろうとすると

「会長、この方は今話題のモデルのユンさんですよ！　是非このパーティーに参加して貰いましょ」

老人の側にいる男が引きとめて来る。

「モデル？」

「このパーティーに参加してもらえばホテルのＰＲにもなりますから」

「……よかろう。わしは葵が心配だから後をお前に任せよう」

アオイ！

ハクが言っていた少女だろうか

「分かりました。後は憲明と二人でも大丈夫ですから御安心を」

「うむ」

老人はチラリと私を見るがそのまま会場を後にして行った。

「ユンさん、私はこのホテルの経営者の大沢孝明と言います。こんな有名人に会えるとは光栄ですよ」

「いいえ、私の方こそご迷惑を掛け申し訳ありません」

握手を求められ返すと若干頬を赤らめる男

「しかしポスターの貴方も美しいが実物はそれ以上ですな…女性社員が我を忘れ騒ぐのが分かります」

「男の私美しいなど言葉の浪費、この会場にも美しい女性は沢山おります」

そう言って彼の隣にいる着物を着た美しい婦人の手を取りそこ手に口付をおとす。

「マダムのようなお美しい女性にお会い出来光栄です」

「まぁ…　／／／」

それを見てギョッとする大沢氏

「ゴッフォン　それは私の妻の蓉子です…」

「それは羨ましい、こんな美しい人を妻に娶るなど」

「いや　そんな～」

それから色々な人間を紹介されるがハクの言った少女が居ない

大沢氏から子息を紹介されエレベーターで遇った青年も紹介された。

彼も大沢グループの創業者家族の一人だったようでそのお陰で顔パスだったようだ。

「先程はどうも…大沢尚吾です」

「此方こそ。少々貴方を利用してしまい申し訳ありません」

「僕もモデルのユンが付いて来るなんて思いませんでした。　でも何故此処に入りたかったんですか？」

見ればまだ若く恐らくアオイという少女と年齢が近くもしかすると知っているかもしれないし老人が言っていたアオイの名もある。

「ある少女が此方に入るのを見かけたので少し強引な事をしてしまいました」

「へー　ユンさんの知り合いですか」

「ええ　アオイと言う少女なのですが」

「アオイ！？」

「はい。　二年前に行方不明になった知り合いの少女に酷く似た娘を見かけたので確認したかったのです」

青年は少し顔を青褪めさせるが平静さを装うとしていた。

「……知らないな…　アオイなんて良くある名前だし」

「そうですね。これだけ会場を見ても見つかりませんでしたし私の勘違いだったようです」

青年は視線をそらしながら

「用事を思い出したんで」

そう言って離れて行く青年は確実に怪しい

アオイと言う名前で容姿は言わなかっが会長である老人がアオイを名を出したのに親族であるあの青年はアオイを知らないと言う。

何故だ？

名前だけなら同じ少女を知っていると言っても良さそうなのに

慌てて人混みに消えて行く青年を追って行きたかったが次から次へと声を掛けられてこの場を抜け出したいが、先程の事を考えると暫らく付き合うしかないと諦める。

しかし少女の手掛かりは得た今じっくり調べようと思うユンロンだった。

記憶

えーん……　えーん……

暗闇のなかで小さな少女がしゃがみ込んで泣いていた

私はその子に近づき一緒にしゃがみこんで頭を撫でてあげる。

「どうしたの、迷子になっちゃたのかな?」

少女は顔を上げて私を見る。

驚いた事に少女の瞳は金色に煌めいておりその上天使のように美しい子供

「母様が死んじゃった……ひっく　私の所為なの……えーんえんん……」

美しい涙が金色の瞳から溢れる度に私の目から涙がこぼれ、可哀想な少女を抱き締める。

「私も同じだよ。私の所為……」

少女が抱きしめ返して耳元で囁く

「生きてるよ」

「エッ！？」

思いがえない言葉に少女を見る。

何時の間にか少女は十歳位に成長してその美しさまでも増しているが何処かであった事があるデジャブ―を感じるが思い出せない

「母様は死んでいない！　私が父様から母様を救い出すの！　絶対！！」

「何を言ってるの……？」

この子は誰？

「貴女はこのままで良いの？　自分を偽って逃げていたら母様はどうなるの」

偽る？？

どういう意味なの

「でも　思い出せないの……　私は誰なの？」

「貴女は私よ」

少女はまた自分と同じくらいに姿を変えており、一際美しくとても人には見えない

こんな美しい少女が私？

有り得ない……そう…これは夢なんだ

「貴女は私じゃない！　これは夢」

そう言うと少女の姿は消えてしまうが少女の声がまたする。

「いいえ貴女が夢で私が真実の姿。　夢は何時か覚めるしかないの……忘れないで……」

私が夢

夢は何時か覚める

私は不安で押しつぶされそうになり真っ暗な闇の中で胎児のように丸々のだった。

誰か助けてと叫ぶ事すら怖い

ハク

ハク助けて！

お願い！　ハク！　側にいて！！

心の中で悲痛に叫び続けた。

『　レイカ　呼ンデイル！！　』

ユンロンがレイカを捜しに行ったのでハクは大人しく部屋で静かに外を眺めながら待っていたが、近くでレイカが自分を呼ぶ声をハッキリと聞いた。

ハクは急いで器用にドアを開けレイカが呼ぶ声がする方に行くと一番角の部屋に辿り着きドアを開けようとするが開かず、仕方なくドアを叩き続ける。

トン　トン　トン　トン　トン　トン　トン　トン　トン

『　レイカ　レイカ　開ケテ　ハク　ガ　来タノ　』

暫らく叩き続けているとカチャリとドアが開いて隙間が出来たので急いで中に入り込む。

「キャアッ！！　なっ何が入って来たの？？？」

ドアの後ろには人が居たけど構わず急いでレイカのいる場所を目指すとベッドに横たわるレイカが居た。

『　レイカ！　レイカ！　ハク　来タ！　』

やっぱり顔はアオイだけどレイカだった。
ベットに飛び乗りレイカの顔を舐める。
『　起キテ　レイカ　』
だけど目を覚まさない

「あらあら～　可愛いお客様ね。　葵ちゃんに会いに来たのかしら」
誰かがハクを抱き上げてマジマジと見て来る。
綺麗な人だけど何を言っているのか分からない？
レイカのお友達？

「珍しい猿ね…　私が知る限りでは初めて見る種類だわ。　それにこの広いホテルの中から捜しだすなんて凄いのね」
優しく頭を撫でてくれ気持ち良い

『　レイカ　起コシテ　イイ？　』

「キャー　可愛い～　君は一体どこから来たの？」

『　放シテ　レイカ　起コス　』

ジタバタ暴れると綺麗な人はハクをそっとレイカの側に降ろしてくれる。

「君が話せたらいいのに～　葵ちゃんの事色々教えて貰えるんだけど」

アオイだけ聞き取れるけど他は分からない

悪い人では無いみたい

再びレイカを起こそうとう呼び掛ける

『　レイカ　レイカ　帰ロウ　アオイ　ガ　待ッテル　ハク　ト　帰ロウ　』

ハクは必死に呼びかけ続けるのだった。

『……カ　レイ…　レイカ……　』

懐かし声がする。

レイカ

それは誰の名前?

『レイカ　帰ロウ　アオイ　ガ　待ッテル　ハク　ト　帰ロウ』

アオイ？

ハク……ハクなの

『ハク　ト　帰ロウ』

帰りたい　母様のところに

『迎エニ来タヨ』

ハク

闇が消え温かい光に包まれる

『温かい　母様……』

そして母様の事を思い出す。

それは今の自分より少し年を重ねた姿の美しい真直ぐに伸ばされた黒髪の細身の体の優しげな青年

アオイは母様の名前だった。

なんて偶然

そして私はレイカ

次々と流れ込んで来る記憶

そして大事な人達が脳裏に浮かんでは消えて行った。
その記憶はにある世界は地球では無い別の世界
そして自分が虎王によって狭間の世界に引きずり込まれた所為で地球に落ちてしまったのを思いだいした。
あの時は死んで戻れないと絶望したのだ
まさか助かるとは思わなかった。

『　レイカ　レイカ　起キテ　』

大事なハクの声

――――――　ハク　今　目覚めるよ　――――――

目を開けると可愛いハクが私の顔に張り付いていた。

『ハク　ハク　ハク　！』

ハクを引き剥がして抱きしめる。

『レイカ　迎エニ来タヨ』

『どうやってこの世界に来れたの？』

『亀王様　ガ　瞑道　ヲ　開ケタテクレタノ。　ユンロン　モ一緒』

『ユンロン？？』

『青龍国　ノ　丞相様？』

『丞相様が来てるの！？』

そしてあの化粧品のポスターのモデルのユンを思い出す

『まさかユンが丞相様……』

『ウン』

何てこと　あの美しい髪をあんなに短く切ってしまいまるで罪人しかも髪を染めていた

そこまでして私を追いかけてくれた事が嬉しい反面、申し訳ない

『丞相様は近くにいらっしゃるの』

『　ココ　ニ　イル　　早ク　帰ロウ　』

青龍国に帰れる

そう思うと嬉しいが今の自分の姿が問題

『　駄目よ！　こんな姿じゃ戻れない……　』

どういう訳か今の私は母様の顔になっているのを思い出す

何故こんな事に

こんな姿であの人に会うなんて出来ない

丞相様は母様を愛していたのに……

『　レイカ　ドウシタノ　？　』

『　丞相様に会いたくないの……　』

『　？？？　』

不思議そうに私を見るハク

「葵ちゃん、一体どこの言葉を話してるのかしら？」

「！！」

横から聞こえる紫さんの声に驚いて振り向くと楽しいそうに私達を見詰める紫さんの綺麗な顔

そう言えば私は尚吾さんとテラスに居たはずで、ハクの事で興奮した私は又倒れてしまったのだ……そして

「記憶を取り戻したのね。　どういう事か説明してくれるかしら葵ちゃん」

記憶を取り戻してしまった私

ハクと話している姿を見られた今とても言い訳は出来ない

でも話したとして信じて貰えるだろうか……

自信が無いが取敢えず話しだすのだった。

大まかに自分がこの世界の人間では無く別の世界から来た事とハク

とモデルのユンが向こうの世界から私を迎えに来てくれたのだと説明した。

「葵ちゃんはその世界に帰っちゃうのかしら」

寂しげに言う紫さん

「はい。　でもユンロン様に会いたく無い……」

帰らなければならないけど

「どうして？　あんな素敵な人が迎えに来てくれたのに」

「だって…　この顔は母様の顔なんですもん…　うっ…うっう…」

こんな浅ましい姿を見られたく無い

きっとあの時私が母様になって愛されたいと願ったから？

「顔！？　本当は違うの？？」

涙ぐみながらコクリと頷く

「なんだか複雑そうね……」

「紫さんはこんな途方もない話を信じてくれるんですか」

「ええ　なにしろ葵ちゃんにはお臍が無いんだから」

「知ってたんですか」

「最初は何処かのマッドサイエンティストが作り上げた人造人間かしらと想像したんだけど違ったわね」

「人造人間……」

「取敢えず葵ちゃんが記憶が戻った事を皆に隠しましょう」

「何でですか？」

「おじい様とか色々あるし　まだ見つかりたく無いんでしょ」

「はい…」

「それならこのまま屋敷に戻るわよ。ユンはこのホテルに泊っている様だから見つかるかも」

「ハクをどうしよう」

「この際誘拐しましょう」

「紫さん　そんな事したらユンロン様が心配します」

「いいの　いいの～　さあ善は急げ」

紫さんに追い立てられるようにそのままタクシーに乗り込み帰路につくのだった。

葵ちゃんは不思議な女の子

本当に興味が尽きない

不安そうな葵ちゃんと子猿のハクちゃんを無理やりタクシーに押し込んで私は楽しくて堪らない

「お客さん、ペットは困ります」

すかさず1万円札を差し出すと嬉しそうにタクシーを発車させる運転手。確りメーターも動いているけど後からおじい様に請求すれば良いだけ

「紫さん、やっぱりハクだけでも戻した方がいいと思うんですけど」

「それは難しいはね。　ハクちゃんは葵ちゃんにしがみ付いて離れないし、この子って嘘がつけるの？」

基本動物は嘘をつけない。それに似たような行動はとるけど捕食や生存の為の騙しと言った方が近いんじゃないかしら

ハクちゃんがユンに真実を話せばすぐに異世界に戻ろうとするだろうシュンと項垂れる葵ちゃん

そんな姿も可愛い

将来は尚吾と結婚させて妹になって貰い大沢グループを二人で牛耳ろうと計画してたのに残念

恐らく葵ちゃんの頭脳は私以上の知能指数だ

こんな人材は2度と巡り会えないのに仕方ない、私は本人の意志を尊重したいから

だって人に束縛されるなんてゾッとするもの

それより今はこの状況が楽しい

異世界から来た人間をこの目で確認出来るなんて凄く興奮しちゃう

尚吾には可哀想だけど失恋決定ね

姉の私も諦めるんだから弟も当然

それよりこれからユンがどう出て来るかしら

実際に会った事は無いから予想がつかない

それより今夜は葵ちゃんから向うの世界の事を色々教えて貰おうと！

一体どんな不思議が待ってるんだろう。

こんなにワクワクするのは初めてだった。

秘められた想い

漸くパーティーから解放されて部屋に戻れる。

アオイと言う少女の事は大沢社長から情報が引き出せたのだが

二年前に大沢会長が海岸で助けた記憶喪失の少女だそうで葵と名をつけ身元引き受け人として引き取って生活しており

パーティーに参加していたが途中気分が悪くなり会場を出たらしい

二年前

皇女様に符合するが容姿が違う

だがアオイ様とそっくりな顔と名前――出来過ぎている。

記憶喪失といい

ハクは皇女様だと言い張っていたのを疑っていたが本当に皇女様なのかもしれない

なにしろ皇女様は不思議な力をお持ちになっている。

人間ながら何らかの力がおありになるのかもしれない。

「アオイ様　必ず皇女様をお連れします……お待ち下さい」

もう少しでアオイ様を目覚めさせられるかと思うと気が浮(うわ)つく

皇女様をお連れし一目お会いしたい

アオイ様は陛下の伴侶なれど未練を今だ引き摺る自分

どんな美しい女や男を見てもアオイ様を忘れられない

あの方の何がこんなに私を魅了するのだろう

皇女様同様に不思議なアオイ様

「アオイ様…」

アオイ様を想うと体が熱くなり

久しぶりに一肌寂しく誰かを抱きたくなるがハクが待っているのでそうもいかなかった。

部屋に前に行きカードキーを差し入れて真っ暗な室内に入る。

「ハク　戻りましたよ」

直ぐに飛び出して来ると思ったが部屋は静寂に満ちていた。

「寝てしまったんですかハク」

闇に中で寝室やクローゼットを調べるが居ない

ユンロンは漸くハクが部屋から居なくなっているのに気が付く

「まさか皇女を捜しに」

否…私が捜しに行っているのに無謀な事をする子ではない

「どういう事だ……ハクは皇女を見付けたのか？」

一体どこへ行ってしまったのだろう

エレベーターはカードキーが無い限り降りれない

すると同じフロア―となるが

その時、エレベーターを同乗した青年大沢尚吾を思い出した。

彼は何故パーティーの最中にこの最上階に居た？

ハクが皇女だと言う少女の葵が皇女だと仮定出来れば繋がる。

「ハク　皇女を見付けたんですね」

仮定は確信に変わる。

「待ってて下さい皇女様　近い内にお迎えに上がります……」

ユンロンは暗闇の中で悠然と微笑むのだった。

――大沢邸――

私達が屋敷に戻り暫らくするとおじい様も後を追って帰宅して来たので慌てて葵ちゃんをベッドで寝た振りをして貰う

微かなノックと共に入って来たおじい様は着替えもしないまま様子を見に来たようだ。

「葵はどうだ？」

「はい、さっきまで情緒不安定でしたけどホットミルクを飲んで寝かしつけた所です」

「そうか…」

「おじい様、今夜は葵ちゃんに付き添ってもいいですか」

「そうしてくれ」

そう言い静かに部屋を出て行ったがその後ろ姿は苦悩に満ちているように感じた。

それから小一時間ばかりして現れたのが尚吾

ノックもせずに女の子の部屋に飛び込んでくる。
入る前からドタドタとした足音で分かっていたので葵ちゃんを急いでベッドに潜り込ませていた。

「紫！　何で葵と帰った事を知らせないんだ」

「お姉様でしょう、尚吾。　葵ちゃんが目を覚ましたらどうするの……さっきまで怯えてたのよ」

「！…　ゴメン　」

途端に意気消沈するおバカな弟

「もう少し相手を気遣う繊細さは無いのかしら～　こんな自己中だと葵ちゃんも愛想尽かすわね」

「うっ……」

「それより葵ちゃんは私が付いてるから、尚吾は帰りなさい」

異世界の話を色々聞いてた途中なので邪魔をされ少し不機嫌な私

「少し話があるんだけど」

珍しく私に綴る様にみる尚吾

久しぶりにそんな目で見られ少し不気味

小さい頃なら可愛かったけど立派な体格の弟にそんな目をされてもキモいとしか言いようがない。

お姉様にそんな表情は効かないが葵ちゃんに失恋決定かと思うと少し憐れ

「いいわ、廊下で話しましょ」

尚吾を廊下に連れ出して話を聞く

「モデルのユンが来たんだ」

「!?　どういう事」

ユンの名前が出され驚く

「パーティー会場に紛れ込んで二年前に行方不明のアオイを捜してるって…　これってやっぱり葵だよな…　葵はどっか行っちまうのか!」

尚吾は葵ちゃんが居なくなる事ばかりに気を取られているよう

「なんて答えたの」

「知らないって」

やっぱりこの子はバカだ

会場にはおじ様達も居るのにユンが葵ちゃんの事を聞けば一発で嘘だと分かり不信がられ一層注意を引いてしまう、しかもハクちゃん

が居なくなった今葵ちゃんに辺りをつけたかもしれない

こんなに早くばれるのは想定外

だけど顔が違うし記憶喪失だと押し切れば誤魔化すのは容易

葵ちゃんがユンに会いたくない乙女心は良く理解できる。

自分の母親を好きだった男が好きになっちゃうなんて不毛かも、葵ちゃんの顔はその母親そっくりなんだからその心境は複雑だろう

本当の自分では無く母親を重ねて視られるのは凄く残酷よね

取敢えず葵ちゃんが本来の姿に戻る事が大事だけど本人もどうすればいいのか分からないらしい

葵ちゃんの心が落ち着くまで

それまでユンを会わせないように邪魔しなくっちゃ

「確かにユンは葵ちゃんの関係者かも。　周囲に気をつけた方がよさそうね」

「やっぱりそうなのか…」

悲壮な顔をする尚吾

明らかにユンに適わないと顔に出ている。

「確りしなさい尚吾。　葵ちゃんの記憶が戻ってないからユンが知

り合いか分からないでしょ、それより今は葵ちゃんにあまり刺激したくないから怪しい人物を近づけないよう気をつけるのよ」

「そうだ。葵を守らないと！」

私の一言で奮起し始める。

単純すぎて本当に私の弟かと疑ってしまう。

あまり当てにはならないけど居ないよりはましよね

それからサッサと弟を追い返して部屋に戻ると葵ちゃんがハクちゃんを抱き締め心配げ

ああ～　なんて可愛い！

一層の事尚吾とトレードしたい

「紫さん　尚吾さんどうしたんですか」

「それがパーティー会場にユンが現れて葵ちゃんを捜してたみたい」

「ユンロン様が…」

真っ青な顔になる葵ちゃん

「会う前からそんなに動揺しちゃ駄目」

「そんなの無理です。まだ会いたくない……」

フルフルと頭を振る。

「でも何時までも逃げる訳にわいかないのよ。　二年間も葵ちゃんを捜してくれた人なんだから」

「でもこんな姿では嫌」

とうとう泣きだしてしまう葵ちゃん

こんな弱々しい葵ちゃんは初めて…恋は人を臆病にするって言うけど強かな女ならその顔を使い好きな男に迫ればと思うだろう

「それじゃあ取敢えず外出せず、学校も車で送り迎えして貰うようおじい様に頼みましょう。ユンは今は日本で一番有名人の一人で一般の女子高生においそれと近づけれないと思うから少しは時間があるわ」

「はい…」

「う〜ん…　こればかりは葵ちゃんが強くなるしか無いんじゃない。私も応援するからどうすればいいか考えよ」

「有難うございます紫さん」

そう言って抱き付いて来る葵ちゃんの背中をさすり、こんな妹が欲しかったとつくづく思うのだった。

それから夜が明けるまで葵ちゃんの生まれた世界の話を聞く

此処とは違い神様が実在しており葵ちゃんのお父さんは龍王でお母さんは異世界の人間の男性！しかも葵ちゃんは卵から生まれるのでお臍が無いのだと納得

「もしかしてお母さんのアオイさんてこの世界の人なんじゃなあい」

「紫さんもそう思いますか　私もそうじゃないかと考えてたんです」

「アオイもレイカも日本人の名前よ。お母さんの名字が分かれば親族も捜せたんだけど残念」

「母様の」

どういう理由でアオイさんは異世界に渡ったんだろう？

狭い結界に閉じ込められているとか父親に殺されそうになる話を聞く限り幸せとは言えない

そんなアオイさんと娘の葵ちゃん

過酷な運命に流されている二人

何とか幸せになって欲しいと願わずには居られなかった。

拒絶

創立記念パーティーの夜から十日あまり経つがユンロンからの接触は無く普段どうり生活を送っていた葵だが、明るさが徐々に失われて行き周囲を心配させていった。

「御馳走さま……」

「葵、あまり食べてない様だが」

「食欲がないの　行って来ます…おじい様」

「ああ　気お付けて行っておいで」

心配げなおじい様に大丈夫だと言いたかったけどその言葉が喉から出ない

記憶喪失の身元も知れない私を大事にしてくれた人

記憶を取り戻した今、もう私は大沢葵では無くレイカなのだ

何れ青龍国に戻らなければならない

こんなに良くして貰ったおじい様を本当の祖父…父親のように思っていた。

何も恩を返せず黙って帰るのも躊躇われる。

だけと母様の現状をハクから聞いて今直ぐ帰りたい

まさか母様があれ以来ずっと眠りに就いているなんて思いもよらなかった。

私の帰りを眠りながら待っているのだ

だけど一番の問題はユンロン様

私の姿がこのままの限りは会いたくないけど、既に母様の姿でいる私に気付いているかと思うと居た堪れない

恋なんてしなければ良かった

恋に落ちるのに時間なんて関係なかった

名前も人柄も何も知らない男性を一目見て恋に落ちるなんて知らなかった

何故あの人を好きになってしまったのだろう

よりによって母様を愛する人なんて……こんな厄介な感情を消したいのに生まれてしまった思いを消せずに苦しい

毎晩掛かって来る紫さんの励ましの電話やハクがいなければ挫けそ

うだった。

車が学校の裏門に止まる。

「葵さん　着きましたよ」

「有難う　芝山さん」

長年大沢家の運転手をしている五十代の芝山さんがバックミラー越しに珍しく声を掛けて来る。

「顔色が悪いので引き返しましょうか」

「大丈夫。尚吾さんもいるから、気分が悪ければ電話します」

「はい。今日は旦那様も予定が無いので何時でもお呼び下さい」

「お願いします」

そう言って車を降りると尚吾さんが既に門に寄りかかり待っていた。

「お早う！　葵」

「尚吾さん　お早う」

芝山さんに顔色が悪いと指摘されたので無理やり笑顔を作る。

紫さんに言われたからと言って登下校にクラスまで付き添ってくれてくれて女子の目が痛いけどそれ以外の接触は尚吾さんが控えているので今のところ被害は無い。

「／／／　なあ　今度の日曜に出掛けないか」

「ううん　外に出たくないの」

もし街でユンロン様に遇う可能性があるかと思うと外に出れない

「そっか　じゃあケーキでも持って遊びに行くから」

「うん」

私を好きだと言ってくれる尚吾さんが私を見る瞳も辛い

私を取り囲む優しい全ての目が私を追い詰める

私は葵じゃない

この姿は偽りの自分

皆を騙しているような罪悪が付きまとう

クラスの前に来ると

「ホームルームが終わったら直ぐ来るから待ってろ」

「ありがとう」

そう言って別れ教室に入ると乃ノ華が私に気付き挨拶をする。

「おはよー　葵、宿題教えて！」

「おはよう　いいよ」

何時もの日常

あんなに楽しかった日々がレイカの記憶が戻ると共に苦痛に変わる

そして今は葵を演じる自分に益々苦しくなるのだった。

昼休み乃ノ華達に誘われたけど一人になりたくって図書室に行くと言って校舎裏に来てしまう。

ここに来るのは編入初日以来

あの時同様に石に座りお弁当を広げるけど食欲が無く食べれない

「食べないのか？」

久しぶりに聞く声だけど直ぐに誰だかわかる。

「竜也君食べる？」

「君…　うぜ…」

何時の間にか竜也君が私を見降ろしており、相変わらず金髪に染め

た髪は綺麗……ファン様を思い出す。

竜也君はドカリと座り私のお弁当をヒョイととり上げ代わりに牛乳パックとパンをくれる。

「少しは食べないと倒れるぞ」

「ありがとう」

確かに何かお腹に入れておかないと体に良くないのは分かっているので有り難く牛乳を飲む横でお弁当を美味しく頬張っている竜也君

「ね……　何処かに消えたいって思ったことある」

なんとなく聞いてみたくなった。

「ガキの頃は毎日だ」

「えっ」

「俺の家はヤクザだからガキの頃からシカとされて怖がられてダチなんていないし、そんな環境が嫌で何度も逃げだしたいと思ったぜ」

ヤクザと言う職業?は人に忌み嫌われるの知っていた。竜也君も私にはわからない辛い目に遭っているのだろう

「そっか…今もなの」

「今は別に、親は嫌いじゃないし組の奴らも俺には家族だから捨てられねね…」

「皆いい人達なんだね」

「バーカ　ヤクザが良い人の訳あるか」

「やっぱり犯罪行為とかしてるの」

「葵は直球だな。　今は一応真っ当な商売しかしてないぜ」

今は……真っ当じゃない商売ってどんなんだろう??

「いいな〜いい家族がいて…私なんか父様に殺されそうになったり、我儘な主に振り回されて酷い目に遭っても消えたいなんて思った事もないわ」

我儘な主とはフォンフー様の事

久しぶりにフォンフー様を思い出し未だ虎の姿のままなんだろうか

「……　それってマジな話し?」

「マジだよ。　だけど好きな人が遠いとこから迎えに来てくれたのにその人を会いたくないの」

「次は恋愛相談……訳わかんねいしマジ有りえねぇ……　チェッ…トットとその男と帰ればいいだろ」

何故か不貞腐れる??

「だから会いたくないの」

「何で」

「だってその人は母様が好きで私って母様にそっくりなのよ。だから会う前に消えてしまいたいの」

「はぁ～？　益々解んねぇ……　それならその顔を使って迫れば一発じゃねぇ？」

「そんなの絶対嫌！　私を見て欲しいし、私だけ愛して欲しいの」

思わず本音が零れてしまう

「全部欲しいなんて我儘じゃねの　そんな厄介な男諦めろ」

「それが出来たら悩まないわ……今直ぐ母様のところに帰りたい」

「それってアメリカか、それなら一人で飛行機に乗って帰ればいいだろう」

どうやら私が帰国子女だと言う噂を聞いたのだろう

「駄目よ　飛行機や船では行けないもっと遠い所だから…」

そう言うと呆れた顔をする

「　少し頭が可笑しいと思われるぞその発言」

「そうね」

「良く状況は分からないけど逃げていても仕方ねえだろう。　つまり男か母親どっちを取るかだろうが」

ユンロン様か母様か

以前は簡単に母様を選べたのに

私はどうしてしまったの……

「御馳走さん」

何時の間にか食べ終わった弁当箱を私の目の前に突き出して立ち上がる。

「もう行っちゃうの」

「脈の無い女に興味ないし」

「へっ？」

それはそう言う意味だろうか

「まあ…　逃げたくなったら言ってくれ。　逃がしてやるから」

本気が冗談か判然とせず見詰めて油断してしまい気が付くと唇に何かが触れ直ぐになれる。

チュッ

それがキスだと気付き睨む

「むぅ…興味ないんじゃないの！」

「葵は警戒心なさすぎなんだ。　別にいいだろこれ位」

「乙女の唇は好きな人しか許さないの！」

「もしかして俺が初めて？」

嬉しそうに聞く

「違う」

「チェッ　せめてファーストキスぐらい俺だって言って欲しかった」

少し拗ねた顔は子供ポクって笑ってしまう

「フッフ　残念でした」

そんな私の顔を見て安心したように口元を緩め、おもむろに踵を返し

「パンの一個ぐらい食べとけよ」

そう言い残して校舎裏から姿を消してしまう

竜也君なりに慰めようとしてくれたのだろうか

でもキスは許せない

フォンフー様にも警戒心が薄いとよく言われたのを思い出す。

きっと今の私を見たら相変わらずバカ女だと言われそう

白虎国での楽しい思い出が甦り少し心が軽くなった私は竜也君がくれたメロンパンに噛り付くのだった。

皇女様の手掛かりを掴みモデルの仕事をこなしながら大沢葵について調べる。

二年前海岸に漂着したのを大沢氏が発見し病院に運び込むが外傷は無く直ぐ意識を回復

しかし記憶を失くしており日本語が話せず身元不明で警察にも該当者が無くそのまま大沢氏が身元引受人になり引き取る。

現在は私立聖桜花高等学校二年に在籍しているとまで分かった。

何とか接触しようとするがモデルの仕事が忙しく今日漸くオフを貰い少女が通う高校にやって来たのだが

一目少女を確認したかった。

校門内に入る訳にもいかず学校の周りを歩き始め中を伺うが不審者

だと思われそうなので一周だけして下校時を狙う事にする。

「ハクは恐らく大沢邸に居るはずですから先ずそこを確認しに行くべきだったでしょうか…」

つい気が焦り失念していた。

取敢えずゆっくりと校舎を取り囲むフェンスを辿って行くと休み時間らしくチラホラと生徒の姿も見えているがここで皇女様に会えるとは考えていなかった。

校舎の裏の方に差し掛かると話声が聞え植え木の隙間から金の髪が見えた。

直ぐ側に行き気配を消し伺うと一人では無く二人

一人は金髪の少年にもう一人は後姿で顔は分からないが長い髪をお下げにした少女

会話の内容は聞こえないが少年が立ち上がったかと思うと少女に突然口付をする

どうやらとんだ出歯がめ行為だが少女の後姿に心惹かれる

もしや……

少女は怒っているようだが少年は少し言葉を交わし立ち去って行くと一人パンを齧り始めるが顔を見れず、焦れてサングラスを外しフェンスに体を押し付ける。

ガシャッ！

フェンスが軋む音にビックリとした少女が此方を振り向く

少女と視線が合うとお互い驚愕で目が見開き無言で見詰め合う

アオイ様！

その顔は正にアオイ様の顔だった。

体が勝手に動き2m近いフェンスを一瞬で飛び越えて少女の目の前に降りて間近でその顔を見て本人がいるかのように錯覚してしまう

「アオイ様……」

触れようとする手が震えるが

「触らないで！」

思わない拒絶の言葉に驚き動きを止めるとアオイ様の目には恐怖と拒絶が浮かんでいるのに気付き、自分の失態にも気付く

この少女がアオイ様では無く皇女様

しかも記憶を失っているので私が誰だかわからないのだ

突然見知らぬ男がフェンスを飛び越えてくれば恐ろしいと思うのは当然

「驚かせて申し訳ありません。　どうか私の話を……」

「嫌！　来ないで」

皇女様は今にも泣きそうな顔でそのまま私から逃げだし校舎に向かって走り出すが、動く事が出来ず立ち尽くす。

何故あんなに傷付いた顔をしているのか分からなかった。

もしや記憶が戻っている？

だが私を拒絶する意味が分からず後を追えない

しかし彼女が皇女である事は確か

胸元にある皇女の龍核が熱く反応するのを感じたのだ

龍核のネックレスを取り出すと仄かに光っておりそれを証明している。

「皇女様はどうされたのだ」

だがここで諦める事は出来ない

何とか記憶の有無を調べ青龍国に連れもどさなければならない

「事情を知っていそうなのはハクですね」

ここは狙いをハクに変えた方が早いだろう

そう考え直ぐさま高校のフェンスを再び飛び越え事前に調べてある大沢邸に急ぐのだった。

決意

私の心は悲鳴を上げていた。

ユンロン様が私を見る目が心臓を貫くような痛みが走り夢中で逃げて来てしまう

あの目は私ではなく母様を愛おしく見る目

夢の言葉が蘇る。

『 例え同じ姿に成ろうと貴女はアオイ様には成れない。 愛されなどしない 』

そんなの分かっているわ

こんな姿になったってユンロン様は私を見てくれない

走りながら近くの女子トイレに駆け込みその場に座り込む

校内で怪しまれず一人でいる事が出来るのがここしか思いつかなかった。

そして静かに泣く

悪いのは私

ユンロン様を好きになり勝手に一人でもがいて苦しんでいるのだから始末に負えない

向うの世界では皆が待っている

母様、サンおじちゃま、ファン様　侍女さん達　フォンフー様　インフー様　お屋敷の人達も

帰らないといけないのに

ユンロン様の手をとれない

授業開始のチャイムが鳴ると同時にトイレにいた数人の女子もいなくなり静まり返り、我慢していた嗚咽が漏れる。

この気持ちを捨てよう

ユンロン様は決して私を愛さない

あの目を見て確信してしまう

母様は龍王の伴侶なのに今だ母様を想い続けており、その愛の深さを思い知る。

その愛する人の娘で恋敵の娘の私に振りむくはずなどない

母様　父様　ユンロン様　一体この三人の間に何があったのだろう

ベッドの下に大事に隠されたユンロン様から手紙と髪飾り

母様にもユンロン様への幾ばくかの気持ちがあったのかもしれない

だけど母様は父様を愛しているし、父様も母様を愛しているのが子供ながらに感じた。

ユンロン様は何時から母様を愛してたのだろう

きっと長い時間苦しんでいたのに違いない

それでも今だに母様を忘れらずにいるのだ

母様には敵わない

母様を想うユンロン様に敵わない……

だけど私はそんなユンロン様を想い続けるなんて出来ない

苦しい…

このままでは大好きな母様を憎んでしまいそう

私は心を決め携帯を取り出し紫さんに電話すると直ぐに繋がるが、泣いたと分かる声だけど構わず話す。

「紫さん　学校に迎えに来て」

それだけを絞り出すように伝えると直ぐに察したように何も聞かず

返事をしてくれる。

「三〇分後に裏門で待っていて」

「ありがとう」

「いいのよ」

それだけの会話で通話は切れ、携帯の時刻表示を見詰めながらひたすら静かに泣き続けた。

きっかり二〇分後に涙を拭い手洗い場で顔を洗う

冷たい水が腫れた頬を冷やし気持ちが少し落ち着き何度も水を顔をかけ、ハンカチで顔を拭き鏡をみる。

そこには泣いた所為で瞼を腫らした母様の顔

思えばこんな悲しそうな顔は見た事がなく常に優しい頬笑みを浮かべていた

決して出れない結界の家に閉じ込められ人と接するのは私とサンおじちゃまだけ

それと十日に一度通う父様

幸せだったのだろうか

「母様は目覚めても幸せ？」

鏡の自分に問いかける

『　レイカがいるから幸せだよ　』

口癖のように私に言っていた言葉を思い出す

「私も母様がいれば幸せよ」

鏡の中の母様が微笑んでいるのを見て私は授業中で静まり返った廊下を裏門に向かい歩きだすのだった。

裏門の陰で紫さんを待っていると車のブレーキ音

キッキーーーーー！

門からコッソリと見ると真っ赤なポルシェが止まっており紫さんが手を振っている。

急いで車に駆け込みドアを閉めると直ぐに発進するので急いでシー

トベルトを装着すると私の頬をそっと触れる紫さんの手

「かなり泣いちゃった様ね。何があったの？」

「ユンロン様が学校に……」

「まだ会いたくない」

コクリと頷く

「じゃあ、おじい様の屋敷は駄目だし家は尚吾がいるから大沢のホテルがいいわ」

「ホテルですか！？」

「多分、ユンはおじい様の屋敷にも行くと思うの」

「でも、ハクはどうします」

ハクはおじい様達に内緒で私の部屋にいる。

「私が後で着替えと一緒に連れて行くから安心して。それよりずっとユンから逃げる心算」

「もう暫らく心の整理をしてから、私は向うの世界に帰ります」

「そっか……　葵ちゃんが決めたなら反対しない、だけどおじい様達が悲しむわね」

「ゴメンなさい」

「謝らないでいいのよ。私も寂しんだから皆も我慢すべきよ」

「紫さん……」

それから二時間あまり車を飛ばして到着した場所はあの海岸近くのホテル

ここのホテルは数年前に建て直して新しい外観だが戦後から続いている大沢家の持ち物

キャンプ場と海水浴場も併設され中々の人気でリーズナブルな価格設定のファミリー向けの施設だ

「この場所は」

「そう、葵ちゃんが発見された海岸にあるホテル。　ここなら都心から離れているしホテルにも葵ちゃんと泊るのは口止めしておくわ」

車をホテルの玄関に停めて降り、颯爽とホテルのロビーに向かう紫さんの後をついてフロントに行く。

「総支配人を呼んで下さるかしら」

「お名前をお伺いしても宜しいでしょうか」

女性のフロント係は訝しそうに私達をみる。

なにしろ一人は派手な女子大生に制服を着た女子高生が総支配人を呼び付けるのだから怪しむのも無理はない

「大沢紫と伝えて」

大沢と聞き慌てる。

「はい、至急お取り次ぎ致します」

フロント係の女性が内線で呼び出すと五分で走って来る

「これはお嬢様　今日は此方にお泊りになるのでしょうか」

「ええ、お部屋をお願い。それと誰が来ても私達が泊っているのは内緒にして欲しいの」

「はいかしこ参りました」

「それじゃあこの子もお願い。　もし葵ちゃんに何かあったらおじい様が黙っていないのを覚えていて」

「分かっております」

案内された部屋は恐らくこのホテルで一番高いのだろう、海の眺めも良く家具もシックな高級品で揃えられていた。

「色々有難う紫さん」

「可愛い葵ちゃんの為だもの。　それじゃあハクちゃんを迎えに行くけど私以外誰も入れちゃ駄目よ」

「はい」

それから紫さんは引き返しておじい様の屋敷に、私はホテルの一室で静かに待つしかなかった。

紫は高速を飛ばし大沢邸に急いで引き返す頃には既に夕方の5時だが未だ明るい

屋敷前の駐車場に急停車すると屋敷は騒然としており何事だ玄関に入ると家政婦の佳代さんが真っ青な顔で飛び出して来る。

「紫お嬢様!?」

「どうしたの佳代さんそんなに慌てて?」

「葵さんが……葵さんが学校から居なくなったんです!!」

「あっ!」

せめて直ぐにおじい様に連絡しておくべきだったとそこで漸く自分の失態に気が付く

「旦那様が警察に連絡するかどうか迷っておられ、どうしましょうお嬢様……」

「大丈夫よ。葵ちゃんの居場所は私が知ってるから」

「まぁ！」

「おじい様にも報告するから、美味しい紅茶をお願い」

「はい」

佳代さんはホッとした様にキッチンに消えて行くが、私はどうやらおじい様の雷を落とされるのを覚悟して居間のドアを開けるとソファーに座り携帯に向かい怒鳴っているおじい様が目に入る。

「兎に角、葵を捜せ！　学校の近くで不審者がいなかったか聞き込め」

どうやら少し大事になってしまっているので冷や汗が出る。

「おじい様……」

私が呼び掛けるとおじい様がチラリと見るこちらを睨む

「紫！　何故携帯を切っている！　それより葵の居場所を知らんか！？」

そう言えば運転中は携帯の電源を切る習慣で、その間何回も電話したのだろう

「葵ちゃんなら、大沢のホテルです」

「何ーーーーー！　バッカ者ーーーーーーーーーー！！　わしがどれだけ心配したか分かってるのか」

「おじい様血圧が上がりますから、落ち着いて」

「まったっくお前は……」

凄まじい怒鳴り声を聞きながら鼓膜が破れるかもと思いながらもおじい様が葵ちゃんに対する執着に呆れると同時に葵ちゃんが居なくなると知ったらどれだけ精神的にダメージを受けるかと心配になって来る。

なにしろおじい様には元気でおじ様に睨みを利かしていて貰わないと私は不動産部門だけでなく大沢グループの全てが欲しい

だけど葵ちゃんは家族の元に返すのが筋だろうから仕方ないのよおじい様

命の短い老人の為に一人の可愛い少女が犠牲になるなんてあり得ないこれは私が可愛い孫を務めるしかない様だ

おじい様を宥めながら葵ちゃんの記憶が戻った事とユンが迎えの者だと話すが異世界については止めておく——老人には理解しがたいだろうし私ですら今だ信じがたいのだから

「それで最近塞ぎこんでいたのか……」

おじい様が項垂れるように肩をおとす。

「私は葵ちゃんの着替えを用意します」

今はおじい様より早く葵ちゃんの元に行くのが先決

「わしも行こう…」

「いいですけど今夜は葵ちゃんには会わないで下さい」

「分かっとる…せめて側に居たいだけだ」

車はおじい様に出して貰う事にして急いで葵ちゃんの部屋に向かう

二階の葵ちゃんの部屋に入りハクちゃんを呼ぶ。

「ハクちゃん　出て来て」

直ぐに出て来るかと思えば返事もなければ気配もない

部屋を見渡せば窓が少し開いており外に出かけた様子

取敢えず適当な鞄に服や下着を詰めてから何気なく机に目を向けるとメモが置いてある。

「？」

綺麗に整頓され何も置かれていない机にそれが不自然に見え手に取る。

「ここに電話して下さい…ハクちゃんの置き手紙な訳ないわよね」

メモには携帯の電話番号

どうやらハクちゃんは誘拐されてしまったよう

「多分相手はユン。　結構大胆な事をするのね…　と言うより焦ってるのかしら」

取敢えずハクを攫った犯人の携帯番号を押すのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6060s/

青龍国物語　第二部　「龍王の娘」

2011年11月4日12時08分発行